THE CENTRAL REVIEW

中央公論

10-1922

十月號

.114 11 37

第三十七年 第十一號 第四百十四號

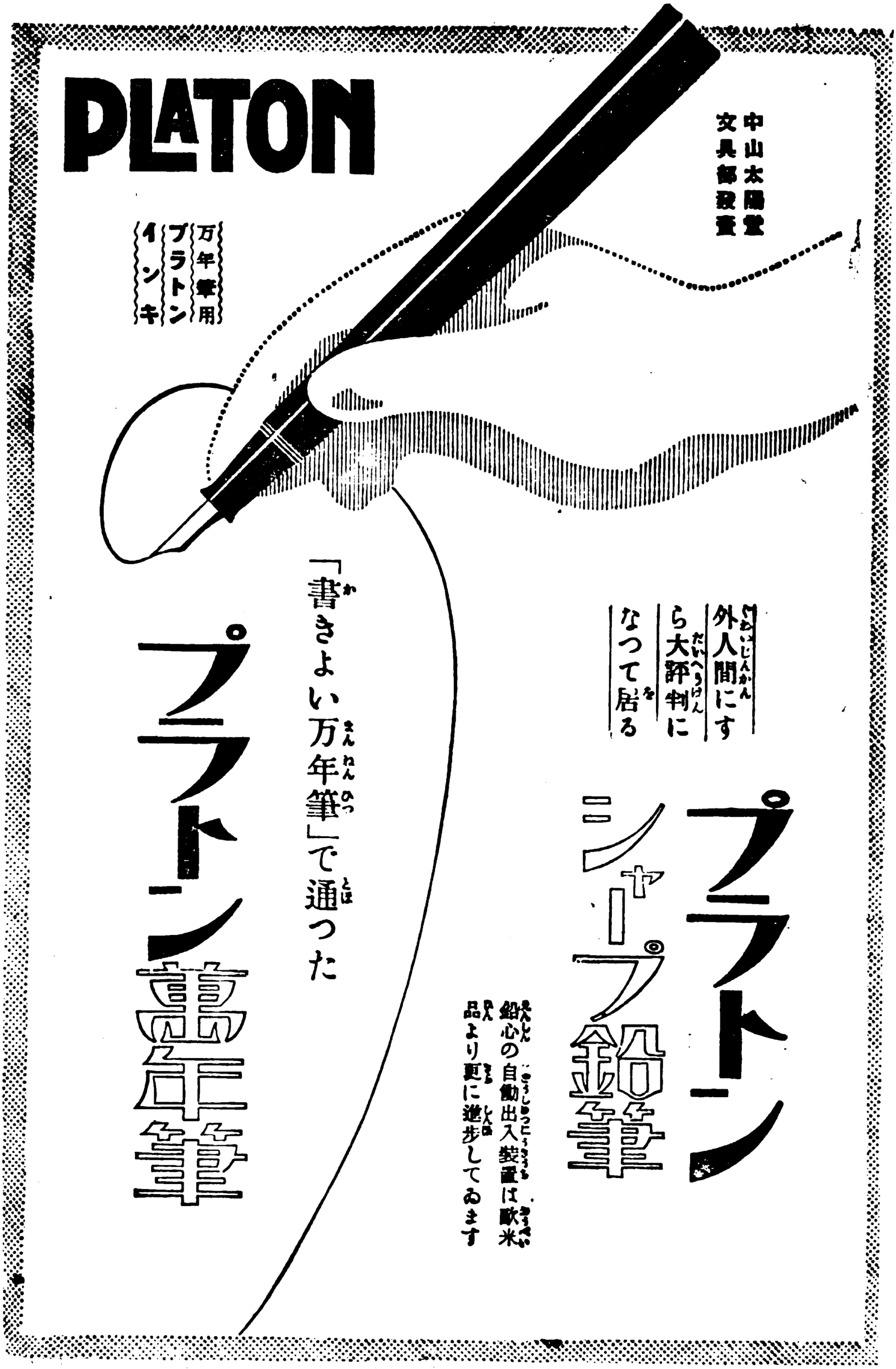

染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
■タッタ二十分で染る。
■自然の髪の色艶に染る。
■襟枕に汚染の惧なく。
■洗ふて剝ず永く保ち。
■用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり



獨逸と露西亞に對する世界列强
(勿論日本をも含めて)の態度の批判

▼說苑

生の充實と享樂に資すべき教養と趣味


PLATON
中山太陽堂
文具部發賣
外人間にすら大評判になつて居る
プラトン
シャープ鉛筆
鉛心の自動出入装置は歐米品より更に進歩してゐます
「書きよい万年筆」で通つた
プラトン
萬年筆
万年筆用
プラトン
インキ



二少女　　　安田靫彦筆



SANYESU

◇サンエスインキ◇

FOUNTAIN PEN

Maintain sthe Highest Reputation in the Orient.

◇サンエスペン◇

細沼株式會社

東京・大阪・福岡・名古屋・札幌　　NO.70

大正十一年

中央公論

十月一日發行

十月號

第卅七年第十一號

第四百十四號

勤勞デー批判に現れたる現代的傾向

去る頃有馬賴寧氏は同族友人等を語つて日比谷公園で勤勞デーなるものを擧行した。之に對してプロレタリアートの友と稱する一部の人は、之を目して華族の坊ちやんの遊戯に過ぎずと爲し、又は華族の特權に對する民衆的反感に恐怖を感じた所から、其の遊惰なる生活を虛飾して世間を瞞着せんとの企らみに出づるものと罵り、甚しきは斯かる不純の動機に基くの故を以て之を筋肉勞働の神聖を瀆すものと憤るものさへあつた。我々は有馬氏が何の動機に因て此の擧を企てたかを知らない。が、一見殊勝な這般の美擧が斯くも痛激な批評を蒙るとは、華族の嗣子たるも亦難い哉の感を今更深うせざるを得ないのである。

善を爲すに忠ならざる者が、不純の動機を懷して、テレ隱しに公益に努むるの虛飾を爲すは、世間に往々見る所である。不義の富に淫樂を恣にして恥ぢざる富豪の徒が節約デーを工夫したるが如きは其の適例である。此外政府の爲す所にも此種のこと決して尠しとしない。例へば民力涵養といふことがある。其事自身は誠に結構なことだ。一肌ぬいで大に力を添へてやらうとすると、豈圖らんや裏面の目的は、政府や資本家の壓迫に對し民衆をして猫の如く柔順ならしめんとするに在るといふ樣なことがある。飛んでもない仕事に力をかしたものだと云ふ悔恨は、やがて戒愼となり、一轉して反感となる。斯くして一般の民衆が、上流階級の所謂公益的事業に對して、動もすると唾眉的反感を有つに至るのは決して怪むに足らない。

併し乍ら、上流階級の人々のやる仕事だからとて一から十まで其動機の不純を疑ふのは、決して正しい態度ではない。屢々欺瞞され通した俗衆が不當の戒愼や不當の反感を抱くのは、情に於て固より諒とすべきではあるが、常にその間に菽麥を辨じ玉石を分ち、外形の同態なるの故を以て其の本體を混同することなく、事物の判斷に於て正鵠を誤らざらしむるは、實に吾人社會評論家の任務ではないか。斯くして我々は、一部の人々が有馬氏の擧を輕々に罵倒し去つたことを甚だ遺憾に思ふものである。何となれば有馬氏一派の擧は、不純な動機に出づると

も觀られるが又さうでないとも觀られ得るからである。

尤も有馬氏のあの擧は、姑く純良誠實な動機に出たものとしても、最良の方法であつたか又は最も徹底的な方法であつたかは、問題であらう。總ての人に——殊に平素之に慣れてゐない階級の人に——筋力勞働の意義を體驗させやうと云ふのなら、其の目的を十分達するにもつとい〻外の方法はあつたらう。併し其の徹底的な方法を採らなかつたといふので、一時の氣紛れと罵り當座の誤魔化しと嘲るのは、餘りに心なき暴評ではあるまいか。我々は自分の思ふ通りに他人が動かぬからとて、その他人を直に惡者呼ばりをしてはならないと考へて居る。

我々は、容易に常人の難んずる所を決行する人達を捉へて、輕々しく其の動機を疑ひたくはない。正しい動機に出づると推定する以上、其爲す所が徹底を缺くの嫌あつても、我々は其の向上の精神に對つては十二分の敬意を表したい。其の向上の精神から觀れば、今日の一步はやがて他日の百步を意味せぬと限らぬからである。而して之等の人々の間に今日一善が行はれたと云ふことは、實に夫れ丈け同胞の間に善の精神の擴つたことであつて、決して我々自身と無關係のことではないのである。徒らに之を罵倒し去ることは、善い事の徹底的實現を促すことよりも、寧ろ却つて善の精神の萎縮を結果することがなからうか。

昨今プロレタリアートの友と稱する者の間には階級意識の强調を無上の金科玉條とするがある。ブルヂョア階級の傳統的欺瞞から目覺めしむる爲に、階級意識の强調は眞に必要の事だ。從て爲に階級鬪爭の形勢を馴致するも亦熄むを得ないが、併し乍ら階級鬪爭に沒頭するの餘り、勝つ爲には手段を擇ばずとし、更に進んでこの鬪に勝つことを以て唯一の重要な仕事となし、其極遂に戰鬪能力に寄與しない一切のものを敵視しやうとするが如きに至つては、謬妄も甚しいと謂はねばならぬ。近時この謬つた見地より宗教も道德も現代に益なしとするが如き考の行はる〻は吾人の甚だ憂愁に堪へざる所である。而して此種の短見者流が、有馬氏の一擧の如きをば、動機の如何に拘らず、閑人の遊戲として罵倒し去るのは怪むに足らない。怪むに足らずと雖も、その斷じて正當の態度に非ることは亦言をまたざる所である。

中央公論



第卅七年第十一號
十月號
第四百十四號

政治の本質價値を考究して現代國家不安の將來を論定す

杉森孝次郎

一、政治の定義

もしも、わたくしが、政治の定義を求められたら、わたくしは、政治は、人間協力の全體的範圍にむかつて、組織、統整、及び保導を與へる努力だと答へよう。この定義が胚胎する二大原則がある。その一は、政治は、それの外延に從つて觀察される時には、社會以下でないといふことだ。なほひとつの原則は、政治は、それの内包に從つて觀察される時には、一派生的活動だといふことだ。

なぜ政治が、それの外延に從つて觀察される時に、社會以下でないといふ原則が成り立つかといふに、その理由は、社會は、協力の別名にほかならないからだ。いふところの人間協力の全體的範圍は、社會そのものにほかならないからだ。

なぜ政治が、それの内包に從つて觀察される時に、一派生的活動だといふ原則が成り立つかといふに、その理由は、政治は、組織、統整、及び保導を與へる努力であつて、それらを與へられる人間協力の全體的範圍そのものではないからだ。現代の進んだ社會についていふならば、科學、技術、工藝、富の生産、富の消費、藝術の創作、藝術の鑑賞、教育、被教育等の興味と活動とは、それぞれに、或る根源的、獨自的、創造的興味であり、活動である。それらの興味及び活動は、現代の進んだ社會に於ける生活實質だ。いひかへれば生活内容だ。さらにいひかへるならば生活材料だ。かれらは、孤立せる個々としては、その存在の目的を自己に全有したいが、組織せられたる全體としては、その存在の目的を全然内具する。政治は、實に、その組織を目的として、かれらの所有者たる人間が、かれらのために、かれらからいふならば派生的に創造する作用であり、實在であり、價値であるのだ。

二、政治と經濟

經濟は、政治同樣に、普遍的且つ派生的だと考へる學者がある。『社會科學の要素』(一九二一年出版)中に於けるマックイーヴァー氏はその一例だ。わたくしは、しかしながら、經濟は政治同樣に普遍的でもなく、派生的でもないと考へる。なぜかといふに、經濟は、それ自身としては、要するに、生産、消費、及び通例は分配の三方法によつて、富を目的とする生活にほかならない。ここでいふ富は物質善だ。物質的價値だ。物質とは感官の作用を手段として經驗せられ

うる實在をいふ。かくして、例へば、視ることも、聽くことも、嗅ぐことも、味はふことも、觸覺することもできない、しかしながらたしかに實在する思想、感情、意思そのものの如きは、物質でない存在だ。愛する人にとつての愛や、怒る人にとつての怒りや、ほこる人にとつてのほこりは、それぞれに、或る善であり、すなはち價値であるのだか、それらは、いはば精神的善であり、精神的價値である。科學を非實在とは、なに人も考へえない。しかし科學を物質的價値であるとはまたなに人も考へえない。科學は精神的價値の一內容にすぎない。政治は、すべての物質的價値及びすべての精神的價値を目的とし、對象とする。

政治は經濟によつて取つて代はられつゝあるとは、十九世紀初頭以來、すなはち産業革命以來、多くの人人の眼に映じた現象だ。大まかにいふならば、十九世紀の政治は資本家の手段であり、二十世紀の政治は勞働者の延長たらんとする事實と兆象がある。しかるに、資本家も勞働者も、最も直接に經濟に從事する人人だ。かれらは、要するに、富の生産の當事者だ。十九世紀が、立法に於いても、行政に於いても、資本家の支配下、勢力下に生き、二十世紀が、ただその資本家に代ふるに勞働者をもつてせんとするだけの差を示さんとしつつあるのは、大觀すれば、最近代に及んで、政治が、經濟殊にそれの第一要件たる生産の支配下、勢力下に置かれるやうになつてきたことを、一面に於いて、明白に意味する。

曾つて歐洲の中世に於いては、宗教的興味及び活動が、政治的興味及び活動を、自身の範圍內または延長下に取り入れんとした場合があつた。國家よりも教會が、君王よりも法王が政治的にさへも優勢であつた場合がそれだ。信仰またはそれの或る統一された集合名としての宗教は、いはゆる生活內容、生活實質、生活材料の立派に一種であり、一態であり、一部である。宗教的興味及び活動が、非常の勢ひを帶んで崛起し、伸達しきたる瞬間に、新興の生活內容として

のその衝動が、既成の生活形式としての政治を壓倒するは、力の科學から考へて極めて自然だ。力の科學から考へて、それが極めて自然であるといふことは、しかしながら、價値の論理から考へて、それが極めて當然であることをば、この場合に、意味しない。

産業革命以來の社會に於ける經濟の覇勢と、政治の受動的、消極的傾向との間の關係は、中世に於ける宗教の前進と、政治の退却との間の關係と、同一原則の二種の場合に於ける發動だ。新酒のために新嚢を編む智慧と勇氣が、新生活實質、新生活内容、新生活材料が、大いなる社會的衝動として勃發し、展開しくるごとに、政治にとつて常に必要だ。政治自身が、生活内容の進歩におくれずに、進歩しなくてはいかんのだ。新宗教的衝動發生以後の政治は、それ以前の政治の踏襲であつてはすまなかつた如くに、産業的衝動、目的、手段が新興して以來の政治は、それ以前の政治の惰性的、模倣的持續ではすまない筈なのだ。産業革命以來、今日に至るまでの政治が、大體に於いて、生産界の内亂乃至革命的運動に際會して、資本家に仕へ、隨つて勞働者からは、資本家とひとつながりに見られて憎怨され、侮蔑されたのは、政治の必然態では決してなかつたのだ。それは政治の健全態ではなかつたのだ。

三、政治と國家

現代諸國家の起原は近い。それは十九世紀にある。それが學藝復興期にあると見られる可能があるのは、いはば起原の起原に從つて觀察された場合に於いてだ。

現代的國家が發達の緒について以來の事實を見るに、政治と國家との間には、殆んど一實體とそれの全作用との間に於ける關係が見いだされる。實は殆んどといふ制限は無用だ。殆んどの代はりに純粹にといつた方が正しい。いはば太

陽とそれの與ふる光熱との間に見られる如き關係が、または、秋の野になく一松蟲と、かれのなき聲との間に見られる如き關係が、近代國家と、近代政治との間には見られるのだ。無論、光熱の生産や、なき聲の生産は、太陽や松蟲の全作用ではなく、一作用にすぎないから、國家の全作用たる政治の比喩として完全ではない。

しかし、近代的國家發生以來、國家は政治の實體であるが如くに、そして政治は國家の全作用であるが如くに、觀念的にも、すなはち學說と常識に於いても、また實行的にも、すなはち制度と習慣に於いても、大體確定されてゐたのは、要するに合理的であつた。なぜかといふに、近代的國家發生以來、今日に及ぶまでの概略的事實としては、人間協力の全體的範圍は、それの稱呼にふさふかたちに於いては、國家以下でもなかつたが、國家以上でもなかつた。社會と國家とは、大要するに、同延であつた。その二者の間には、實に、一枚の葉の裏と表との間に見られる如き範圍廣袤の同一が殆んど見られた。政治が、立法と行政とを主內容として、國家の專務でもあり、特權でもあるやうにあまねくみとめられてゐたのは、決して謬見でもなければ、迷信でもなかつたのだ。すなはち政治的活動の外延が、國家大に限られてゐたのは妥當であつたのだ。

政治的活動の內包が、また、主としては治安殊に警察と、司法殊に刑法とに限られてゐたのも、國民の生活內容が、專門、職業、地方、及び臨時的問題等の各種方途にむかつて、いまだ多く文化的に分裂進化するに至らなかつた時代としては、なすべきことを、なすべき通りになしたのであつた。國家の對外政務が、その時代に於いて、殆んど專ら國防、武備に集中したのは、國境のそとは、協力の範圍外であり、協力なき競爭、すなはち鬪爭の機會であつたのだから、これまた時代錯誤ではなかつたのだ。

四、國家の將來

過去に於いて、國家が政治の實體たる位置を占めたことは、當然であつたが、將來に於いても、國家は當然政治の實體たる位置を占めべきであるかどうかは一問題だ。人間協力が現存するところ、またそれの可能が現存するところ、そこには政治が必要だ。正しき意味に於いての政治ある協力は、正しき意味に於いての政治なき協力に比して、本質的に劣等だ。小價だ。低級存在だ。政治は、それ故に、人間協力の存在と價値とを假定する限り、それの用に於いて本質的であり、永久的である。國家は、しかるに、政治が、或る場合に、すなはち或る事情下に有用とし、必要とする一存在であり、一價値であるにすぎない。國家は、政治との比較に於いては、暫時的であり、現象的であり、或る意味に於いて偶然的である。その理由は將來に大いに存するが、その證據は過去にもあつた。どうしてかといふに、封建時代には、政治は、藩的社會を人間協力の全體的範圍と見て、それにむかつて、組織、統整、及び保導を不完全ながら與へる努力としてのかたちに於いて確實に存在したが、近代的意義に於ける國家は存在しなかつた。

國家が、政治の實體たる位置を、今後なほ保留する可能は、確實か、絕無か、問題的かといふ一問を提起することは、現代人にとつて、決して無用でない。

その一問に對するわたくし自身の答へは、問題的だといふにある。或ひは「もしも」と、「ならば」を或るかたちに於いて條件とする確實でもあれば、絕無でもあるといふにある。その「もしも」と「ならば」を、近い將來に限つて、說述してみよう。

國家が政治の實體たる位置を今後なほ正當に滿たすためには、國家は、二た通りの責務を承認して遂行する必要がある。その責務の一は、國家自身の外延的方面に於ける時代相當の進化であり、殘りの一は、國家自身の內包的方面に於

ける時代相當の進化である。

五、現代國家が要する外延的進化

現代國家は、その最も大なるものを見てさへも、外延に於いて、小さすぎる。そのわけは、人間協力の全體的範圍は、現代に於いては、もはや決して國家大ではなく、國際大、もしくは人類大だからだ。しかるに、政治は、人間協力の全體的範圍を直接にそれの目的對象とすべきだからだ。それ故に、もしも國家が政治の實體たる位置を安全に保留する意思を有するならば、すなはち、もしも一人が、國家をして、政治の實體たる位置を今後なほ安全に保留せしめんと欲するならば、かれは、國家を、それの外延に於いて、今日及び明日に於ける社會と等延なものにして持つ條件的意思を有すべきだ。

交通手段の發達は、人間社會に於ける空間の意義を一變した。交通手段の發達は、それのいちじるしいかたちに於いては、百年足らずのよはひを重ねた新現象だ。十九世紀の中葉か、交通手段發達の新紀元だ。交通手段の發達は、直接には、科學、技術、工藝の功績だ。博愛主義の宗教的衝動や、大協力主義の道德的興味が、現代國際的社會の原因では決してなかつたのだ。現代人の理想は、新興民族主義または國民主義の手によつて牽制され、束縛されつつある際に、現代人の實行は、早くも新々與交通手段の手によつて引率され、驅進されつつある。かくして、現代國際的社會は、現象としてはすでに驚くべく大きいが、原則としてはいまだ驚くべく小さい。いはば無原則の現象に近い。人間社會に於ける現象の原則は、因果律でなく、目的法であるべきだからだ。現代の國際的社會にもまして、それは實に貿易をも、國外投資や國際貸借としての國際財政をも、學問、藝術、教育、道德、宗教、思想等の各方面に於ける國際協力をも多

分に含有するのだが、全體として無方針な人間的現象は、もしも絶無でないならば甚だ稀有であるにきまつてゐる。歐洲戰爭も、その原因を、この大現實と小理想との間の無理な關係に有した。その後の國際紛爭も、要するに同一性質の原因に歸して說明せらるべき現象だ。

もしも現代國家が、それの外延を、進化させる聰明なる意思を有しないならば、現代國家は、それの存在を祝福されるよりも、呪咀される理由をしばしば餘計に持つ。現在の歐洲は、この立言を有力に裏書きする。十九世紀の歐洲を救つた最大理想力の一は、疑ひもなく國民主義であつた。しかしながら、國民主義は、小社會主義すなはち小協力主義であつたと、次ぎの時代からは判斷される封建主義からの進一步としてこそ高い價値を有したのであつたが、國民主義以上の大協力主義が現實に可能となつてきた十九世紀末殊に二十世紀初頭に及んでは、次第に廢用に附せらるべき暫時價、現象價、偶然價だ。人類進化の途上に於ける一橋梁だ。一驛だ。

支那人、印度人、埃及人、及び人類に於けるその他の或る部分の如きは、いまだ民族的自覺の價値を實現しない故に、十九世紀以前の歐洲人にも似て、國民主義の實現によつて先づ救はれる位置にあるが、すでに民族的自覺を中心要素とする國民主義の價値を、いはばその價値としての芳醇の盛られたる玉盃を、それの沈澱屑をまでも飲みほすべく傾けた歐洲殊にいはゆる西歐人にとつては、國民主義以上の大協力主義が、國民主義に取つて代はるべく發明される必要が今日十二分に熟してゐる。二十世紀の歐洲をあやまつ最大惡魔力の一は、もしも歐洲人が、殊に英、佛、獨、伊等をはじめとして、中歐、東南歐、北東歐の定住民が、現在の偏狹なる國民主義の迷信を持ち續けるならば、明白に國民主義だと考察される。

日本は、自身だけとしては、國民主義の眞實價をすでに十分に實現したに近いが、支那の隣邦としての關係に於いて

は、國民主義の健全なる發達を、むしろ發生を、支那にむかつて友助すべき位置にある。

國家の外延的進化は、最近殊に歐洲戰のもたらした反省及びいくらかは反動としてのかたちに於いて、多くのいはゆる文明國によつて、たとひ顯著なる憲法上の變化としてではないとしても、實行に於いて、着々として開始されてきた。國際聯盟はその一現象だ。なぜかといふに、國際聯盟に通判した國々は、いはゆる國家的主權の解釋及び適用の上に、一大新例をゆるしたからだ。すなはち、開戰の自由を、それらの諸國は、各一國に專有することをやめて、諸國の協定意思に移し托したからだ。國際聯盟に、時の順に於いて、繼起した華府會議を見ても、國家が外延に於いて舊套を破つた形跡は鮮明だ。なぜかといふに、すくなくとも或る三乃至五國は、おのおの、自國の國防の一大部分を形成する海軍力を決定する意思の自由を、從來の自國大の範圍から、新らしい三乃至五國大の範圍へ推し移したからだ。主權の解釋が、時代の必要に應じて一層濶達寬大に改化したと批評される餘地のある現象だ。國際聯盟にしても、華府會議にしても、一時の現象價としては、失敗の部分をも、粗末な要素をも、關係各國の立ち場から考察して、すくなからず帶んでゐるとわたくし自身も考へる。けれども、多少永い將來を見越しての兆象價としては、要するに、國家の外延的進化といふ一大意義を不完全ながら具備してゐる。國家の外延的進化は、主權の對外的意義に於ける進化的增大だ。

六、前節の目的を達する方法としての帝國主義の不完全

現在の各國は、政治の理想の見地からこれを考察するに、いづれも、外延に於いて過小だ。しからば、その過小を救ふ方法はあるか、ないか。あるとすれば、それはなにか。

この一問に對して、先づ浮かぶ答案のひとつは、帝國主義であるかも知れん。帝國主義は、果たして現代國家の採用

すべき外延的進化の方法としての資格を持つてゐるか、どうか。わたくし自身の結論は、帝國主義は、その資格を持つてゐないといふにある。そして、わたくしをして、その結論に到達せしめる理由は、この一文の劈頭に於いて、わたくしが、政治の定義として試みた發表のうちに完全に含まれてゐる。

帝國主義は、それの信奉者から考へれば、かれが信ずる國家を、それの外延に從つて擴大する意義をたしかに帶んでゐる。これを主權の擴張と見ることができる。一見、いかにも、人間協力の全體的範圍を目的對象とする政治の條件を滿たす方法であるやうに考へられるかも知れん。しかしながら、帝國主義は、その條件を甚だ不完全に滿たす本質的弱點を固有する。

帝國主義は、或る征服民族の當代もしくは子孫と、或る被征服民族の當代もしくは子孫とから、その帝國の人口を成り立たせる。もしもそれの現實態に於いてさうでない場合でも、それの意思態に於いてさうだ。政治の要件たる立法と行政が、殊にその權能が、帝國主義に於いては、その征服民族系と、被征服民族系とに對して、多少不平等に分配されるを通例とする。組織、統整、保導を與へる政治的努力が、征服民族系にむかつて厚く拂はれ、被征服民族系にむかつては薄く、時としては破壞的にさへ拂はれる。この通則は、論理をたどるよりも、先づ事實を見ることによつて一層便宜多く認識される。

もしも日本が、七十年前、ペリ來訪の當時に、或ひは、要するに幕末頃に、西洋の或る一先進强大國の屬領とされたならば、または數個の先進强大國の手にとつて、分割されたならば、日本は、現に日本が達成しえた程度以上に、もしくはすくなくともそれと同程度に、その先進一國または數國の文化を、理解し、學得して、本質的にわが個性の成長に資し、わが所有となすことができたであらうかと假想して考察するに、答へは正反對だ。日本はその場合には、英國に

併呑された近代の印度や埃及の如くに、また曾つて四境の雄邦によつて分割されたポーランドの如くに、微弱なる文明的、文化的發達をさへも困難にされたであらう。本質的文化主義と帝國主義とは兩立しない部分を有するのだ。すなはち、帝國主義の理想下及び現實下に於ては、被征服民族系の個性が、隨つてそれの結果としての文化が正直に保護されるよりも壓迫されまたは利用される傾向が多少必ずあるのだ。その傾向が、帝國主義に於ける政治的不完全の部分だ。政治的に自治を保有し、實現する方が、他の國民の優等文化力を本質的に信仰し、採用する方法としても、政治的にその他國民に隷從するよりはまさつてゐるのだ。

勿論、政治的に無自治であつて、他國の帝國主義的支配下に立つやうな民族または人人は、その原因を、第一に自助の不足に有する。ダーキン説をそのまゝ倫理說化して、自立しえずに、他の優强者の權力下に立つが如きものは、その運命を値ひするのだと全然解釋されえないではない。しかし、人類のすべての部分にむかつて、自助の意思と能力と功績とを創造すべく努力することを希望し、なるたけその努力に友援を與へることは、たしかに一正善事だ。この原則が政治的に實現されるかたちは帝國主義ではありえない。

帝國主義は、上述の弱點を有するが、すでに人間協力の全體的範圍が、各國以上になつてゐる時に、その範圍內の或る部分が、政治的自治力を缺く場合には、自治力ある部分が、その力に應じて、その自治力を自治力缺乏の部分へ伸達することは、自然の傾向でもあるが、自衞及び愛隣の當然務でもある。近所の火事や傳染病を、すてゝ置けないと同一の理由さへも、原則としてそこには混在する。

七、帝國主義に代はるべき方法としての新聯邦主義

わたくしは、國家の外延を進化させる現代的方法を、いはば新聯邦主義に求めて見いださんと欲する一人だ。いはゆる新聯邦主義は、國際的責任自治區とも稱せらるべき少數の政治的大容器に、現存する多數の國家を鎔かし込むことを、比喩的にいふならば、實行目錄の中心位置に置く。

世界の維新が、新聯邦主義の事業だ。半世紀有餘前に、日本は廢藩置縣した。すなはち廢藩立國した。封建的割據孤立の狀態を脫ぎすてて、國民的中央集權の新衣を裁した。新聯邦主義の原則が、當時の日本相當の樣式に於いて、國內的に實現されたのであつた。主としては隣藩に對する侵略または防衞を意味した刀槍弓矢も、隨つて廢用命を受けることになつたのは、いよいよ意味深い現象であつたと、現代人の立ち場からしては、殊に追懷される。

いふところの世界の維新は、いかなるかたちに於いて着手されべきであるか。實行は、或る形式に於いて、常に理想に先驅する。世界の維新は、今日に於いては、なほ要するに一理想であるのだが、それの實現がすこしも端緒をえてゐないわけでは決してない。

先づ舊世界といはれる歐洲について見るならば、最近に企てられて概ね失敗に終はつたジエノア會議は、極めて不完全ながらも、世界の維新の一前兆であつた。ジエノア會議は、直接には、歐洲諸強間の經濟的孤立及び鬪爭を水に流して、經濟的協力相助を新たに創造せんとする意圖を有した。しかし、歐洲が、經濟的に、國民主義的封建時代から超脫して、歐洲民主義的大社會時代へ躍進するためには、一般政治的に、隨つて軍事的にも、現在の機械的多から超脫して、未實現の有機的一へ躍進する必要がある。

現象としてのジエノア會議こそ、失敗に終はりもしたれ、それの背景としての必要は、早晩ジエノア會議を、意味に於いて繰り返へしてついに成功に導かねばやまぬであらう。勿論これは、歐洲民の聰明と氣力とを、或る程度以上に儼

在してゐると假定しての推斷だ。もしも歐洲民が、今世紀の殘餘を通じて、依然として、現にかれらが耽りつつあるが如き國民主義的內爭に耽り續けるならば、モンロー主義の積極的改釋を實現した曉のアメリカが、舊世界としての歐洲を文字通りに壓倒しくる可能も絕無ではない。今のところではとても問題にならないアジア人やその他の有色人種でさへも、歐洲の舞臺に活躍する機會を自然享樂するにいたる可能が絕無だとは、なに人か斷言しえよう。世界の維新を、すなはち新聯邦主義を、現今の歐洲民がなるべく早くかれら自身の住地の上に、その規模に於いて達成することは、歐洲民の自己保存の命令でもあるのだ。

轉じていはゆる新世界としてのアメリカを見るに、そこにも世界の維新の徵候は、殆んど、山雨きたらんと欲して風樓に滿つといはんほどの勢ひに於いて準備されてきた。最近に於けるモンロー說の主張の意味は、或る大いなる程度に於いて、合衆國の外延の擴張だ。中米、南米、いつかは北米全部をさへも、第一に經濟的に、第二には一般政治的に、合衆國の延長下に從屬せんと欲する意思が、近時のモンロー說の奧底にはかなり鮮やかに潛在してゐる。現在のモンロー說は、そのままの質とかたちとに從つてそれを揮發する時には、さきにわたくしが非難した帝國主義の一標本または一變態と判斷される可能が多少ある。しかし、現在のモンロー說の動機に、適當の反省と、批評と、理想化とを加へれば、帝國主義が新聯邦主義に改心する可能は、この場合に於いても認識される。

さらに轉じてアジアを見るに、想像力と生活意思に於いて、近代歐米人に比して遙かに下位に立つ近代アジア人は、新聯邦主義としての世界の維新の徵兆をだに示さない。勿論世界の維新は、必ずしも新聯邦主義を豫想しない。それは世界國家をも豫想しうる。しかし、わたくし自身は、實行目錄として、新聯邦主義を、世界國家よりも先要だと考へる一人だ。

アジアは、しかしながら、現狀に安住すべきでない。國民的に呼ぶならば、支那、日本の如きは、また民族的に呼ぶならば、支那、朝鮮、日本の如きは、かれら自身の一大國際的責任自治區を、新聯邦主義の原則と方法とに從つて、創造すべく努力すべきだとわたくしは考へる。

新聯邦主義の原則のうちには、その聯邦各員に共通に妥當な理想、隨つてすくなくともその程度に高い、大きな理想が、その各員によつて觀念的及び實行的に承認される必要が算へられる。ここで觀念的とは、學說に於いて及び常識に於いてを意味し、實行的にとは、制度に於いて及び習慣に於いてを意味する。必ずしもそれら聯邦諸員の各自の憲法に於いてとはいはないが、憲法の憲法とも稱すべき根本論理と、統導原則とに於いて、聯邦諸員の間には、完全なる相互理解と、共通信仰と、協力意識が必要不可缺であるのだ。

新聯邦主義の方法のうちには、出稼ぎとしての移民を根本的に廢止して、それの代はりに、誠意ある歸化を保護する必要が、勿論他の多くの必要とともに算へられる。

國際的責任自治區といふ文字によつて、すでに多少表示させ、または暗示させた如くに、例へば前述の方針に從つて形成されたと假定する新ヨーロッパ、新アメリカ、新アジアの相互間の關係は、協力を基調とする自治であり、或る場合には競爭でもある。しかし、その競爭は、大體に於いて、競戲的性質のものであることを要する。競戲に於いては、勝敗は目的でない。自他の本質價値を自覺し及び實現するすなはち表示するための方法として、機會として、競戲はそれの支配的存在權を有するのだ。それ故に、競戲に從事する兩派間の心理は、第一に友和的だ。すなはち協力的だ。隨つて責任的だ。それに從屬する位置に於いて、競爭的だ。喧嘩、鬪爭、戰爭に於いては、しかるに、競爭が極大限乃至全有の方向に決定され、協力は極小限乃至絕無の方向に必然的に決定される。自治及び或るかたちの競爭を各國際的責任自

治區の屬性のうちにみとめたが、一層支配的な屬性が、一層直接的な協力に存すべきであることは、最も注意を要する一點だ。

八　現代國家が要する內包的進化

現代國家は、その最も大なるものを見てさへも、外延に於いて、小さすぎるとわたくしは論じた。現代國家は、しかるに、國家らしい國家について見れば見るほど、それの內包に對する關係に於いては、大きすぎる。古代ギリシヤの都市的國家を自身經驗したアリストートルは、國家過大の事實及び可能を警告した。かれは、一國家は、それの人口に於いて、十人といふやうに小さくてもいけないが、十萬人といふやうに大きくてもいけないと說いた。政府の役人は、國民のすべての顏と性質を記憶しうるやうでなくてはいけない。全國公民總會が開かれえて、その會場に於ける一人の聲が出席各員に聽取されうるやうでなくてはいかん。一國家は、それの領土に於いては、一と目に見通ほされうるやうでなくてはいけないともかれはいふた。十八世紀の歐洲に生きた一政治研究者であつたルーソーも、いはば小國主義を主張した。

政治は、本質的には、すなはちそれのあるべき狀態に於ては、一派生的活動であるが故に、そして現代國家は、それが政治の實體たる位置を將來にわたつて保留する意思を有する限り、一派生的活動としての政治の要件を滿たすべきであるが故に、現代國家は、今日及び明日の國民または社會民の生活實質、生活材料、生活內容としての科學、藝術、敎育、經濟等に對して、確實にそれらの諸目的の手段として、それらの諸目的に奉仕する意思と功績とを實現することを必要とする。國家が多少大きすぎるといふことは、立法及び行政と、その二活動の目的たる一層根本的な生活事實との

間に多少疎遠と隔絶が横たはることだ。それは國民からいへば、多少無自治であり、立法及び行政の當事者からいへば、多少無責任であり、随つて國民の創造性が多少保護されないことだ。

國家が、それの人口に於いて、それの領土に於いて、またそれらによつて決定される諸種の關係に於いて、或る程度以下に小さければ、或ひは立法、行政の代理者を要せず、或ひはそれらを要するとしても、代理者と被代理者との間の關係が完全に保有され、創造される可能性がある。しかし國家が、上記の諸點に於いて或る程度以上に大きければ、立法、行政の代理者は無論必要であるが、その代理者と被代理者との間の關係が、小國家の場合に於ける如くに單純容易には全うせられない。

現代國家は、通則としては民族的國家だ。近代に於いて、民族的自覺を能くし、そして獨自の立法、行政を、すなはち政治を創造するほどの氣力と聰明を所有した民族は、概ね大人口だ。たとひ、國家形成の當初には小人口であつたものでさへも、次第に大人口になつた。いはゆる一等國に現に位づけされる諸國家の如きは、いづれもその人口の桁を千萬乃至億にしてゐる。その程度の大國家に於いて、政治に於ける代理者と被代理者との間の關係が、いかに不完全たらざるをえないかは、多く考察して見るまでもなく明瞭だ。なぜかといふに、人は他人の意思または目的を、それを知らずに、すなはち理解せずに、代理することはでない。しかるに、いはゆる現代の大國家に於いては、立法の代理者たる職責を公認されてゐる議員と、行政の代理者たる職責を公認されてゐる大臣その他の官吏が、かれらの目的たる被代理者を、たとひ特殊の政治問題だけについてなりとも、知り、または理解する機會は實に貧少だ。かくして、現代の諸大國家は、かれらの憲法その他の現象に於ける告白主張としては、またかれらの意思に於いてさへも、いはゆる立憲代議制すなはち責任自治制の採用者であるが、方法に於いて缺くるところあるが故に、結果に於いては、非立憲、非代議、

無責任、無自治、すなはち專制、それに對する屈從及び盲從の採用者であるかの如くに、或るいちじるしい程度に於いて、かれらは現はれる。代理は、意思だけでできることでない。代理ば、知識ある意思によつてはじめて可能にされる。現代國家の議員と役人とは、國民の政治的代理者としての資格に於いて、かれらの個人的品性が正直である場合には、意思に於いては完全であらうが、知識に於いては、主としては制度の不備と時代錯誤とに原因を有する事柄として、甚だしば〳〵不完全だ。これは現代國民が、責任自制治としての立憲代議制をかなり立派に採用してゐるつもりで、實は甚だ不立派に採用してゐること、或ひはむしろ殆んど採用してゐないことをみづから知らないといふ事實と內的には聯絡ある姉妹現象だ。

例へば開戰、講和等の國民的大問題についてさへも、現代國民の大多數者は、たとひ自己の意見を明確に持つてゐる場合に於いてだに、通例、立法、行政の當局者のなすところに盲從し、屈從する。現代國家は、組織せられたる大勢力であり、その國民は個々に分散せる微力だ。國家は運命にも、不可抗的自然力にも比すべき一大「巨人」であり、その國民は、絕望せる侏儒の雜群だ。近代のいはゆる立憲代議政體は、君主專制政體から議員と官吏との專制政體へ移つただけの進步だ。

人民の直接自治がルーソーの小國家主義の精神であつた。かれは國家の小を目的としたのではない。かれは國民の自發的意思にもとづく立法と行政を目的としたのだが、その目的を遂するためには、小國家が一必要條件だとかれは判斷したのだ。間接自治は、代理者を通ほしての自治を意味するが、その間接の內容次第では、間接自治は、たとひ目的に於いてではなくても、結果に於いては代理者の專制となる危險がある。

それ、人は、社會的遠心本能を固有すると同時に、個人的求心本能を固有する。一人がいかに多くの他人を知る力を有

するかといふ問ひに對しては、極めて多くのといふ答へが可能であると同時に、極めて限りあるといふ答へが避けがたい。人には社交本能があると同時に孤獨本能があるのだ。人は公的興味を有すると同時に私的興味を有する。公的興味に於いては、人は、飽かず廣くならうとする傾向を有するが、私的興味に於いては、人は、飽かず深くならうとする傾向を有する。兩傾向ともに、人及びかれの社會にとつて、大用ある事實だ。兩傾向ともに貴い。

人に固有の——勿論特有ではない——孤獨本能は、人をして、直接の友人をば甚だ限られた少數にしか持たしめない制限力としてもはたらく。アリストートルは、國家の支配的位置に立つ役人は、國民のすべての顔と性質を記憶しえなくてはいけないと説いたが、一人が他人の顔、性質、姓名等を記憶しうる數的限度はいちじるしく低い。しかも、他人についてのそれほどの知識もなしに、一人が他人を、たとひその他人の或る政治的興味だけに關してなりとも、代理することは、困難だ。その困難を、まにあはせ的に救ふ現代的方法が、議員及び官吏の善意の專制だ。しかし善意の專制は惡意の專制よりは上等だが、善意の責任制よりは下等だ。その善意の責任制は、現代に於いてなほ發明されてゐない。

最近のいちじるしい一例として、日本が一九一九年に、オムスク政府援助の名義下に出兵した、及びそれの連續としての歴史的事實をわたくしは擧示する。日本國民の政治的意思を、當時の日本政府は、どれほど全體的に、且つどれほど忠實に、對露問題及び對シベリヤ問題について、代理したと判斷されるか。結果に於いては國民全體に切實に關する問題が、動機に於いては、殊に方法に於いては、國民中のあまりに甚だしい少數者に專屬することは、現代國家の通則だと批評しても過度でないほどだ。

內政は治安殊に警察及び司法殊に刑法に代表され、外政は軍備に代表されてすんだ時代はすでに過去に屬する。現

代に於いては、なほさら將來に於いては、内政も外政も、平和的、文化的、創造的または生産的性質の事業をそれの主内容として持つ。政治は、最初に定義した通りに、人間協力の全體的範圍にむかつて組織、統整、及び保導を與へる努力であるべきだから、平和的、文化的、生産的興味及び活動が、人間協力の主内容となり、主要素となつてきた以上、組織、統整、及び保導の對象が、隨つて方法が、また隨つて原則までもが、相應に進化し、改化する餘地を持つてきたことは、おのづから意味される。

早い話が、産業的興味及び活動が、人間協力の全體的範圍の、すなはち社會の一大内容として、一大要素として成長しきたつたにかかはらず、現代國家は、組織、統整、及び保導の手を、その新興區域に延ばすための知識をも、正しき意味に於いての意思をも、持つてゐないではないか。現代産業は、現代國家の持てあましものとなつてゐるかたちだ。現代國家と、現代政治とが、いかに時代錯誤になつてゐるかは、この一事によつてさへも顯著に示される。

現代國家と教育、現代國家と科學、現代國家と藝術、またそれらのおの〱に多少づつ含まれてゐる事柄としての現代國家と思想といふやうな關係問題について考へて見ても、現代國家と、それの作用としての現代政治とが、いかに時代錯誤にすでに陷つてゐるかは、むしろ驚くべき程度に達してゐるといひたいほどだ。

政治は、正當には、それ自身に存在の目的を有する活動でないから、政治の實體としての國家も、正當には、それ自身に存在の目的を有する制度または組織ではない。この單純な眞理が、現代政治と現代國家とによつてあまりに不完全に理解されてゐる。いはゆる職業的政治家が、すなはち政治を職業とする現代の或る人人が、正當に非難される部分を有するとすれば、それは、かれらが、政治自身に政治の目的を、謬見と迷信とによつて、置いてゐるところにある。

現代生活は、主として平和的、文化的、生産的要素から成り立ち、加ふるに、治安的及び國防的要素から成り立つのだ

が、それらの諸要素のいづれもが、專門的、職業的分裂進化を、複雜に、豐富にすでに實現し、いよいよ實現しつつある。漠然たる政治問題は、次第に極小限に近づき、明確な、限定された、具體的な、特殊的な、隨つて多くは專門的知識または職業的理解を必要とする性質の政治問題が、次第に極大限に近づく。粗雜なる觀察眼には、漠然たる政治問題と見えても、問題自身の本質に於いては漠然でないものに、すべての政治問題がなつて行く傾向が、すでに傾向と呼ぶべくあまりに現實なほどに成熟した。この事實に開眼せず、この事理を體讀しない故に、現代の多くの政治職業家は、またはいはゆる政治家は、いかにも廢用の前夜の醜態やら、あわてかたやらを示しつつあるのだ。

この弊を救ふ方法を、わたくしは、組合主義の發達に期待する一人だ。

九、前節の目的を達する方法としての組合主義

各專門的興味、各職業的興味、各社會問題的興味または各國民問題的興味を內容として、それぞれに組合が形成される可能と利益とが考へられる。勿論それらとならんで、各地方的興味を內容としての組合の可能と利益も同樣に考へ信ぜられる。政治問題は、それの解決の勞力を、それらの組合に先づ移すべきだとわたくしは考へる。それら諸組合のうちで、各社會問題的興味または各國民問題的興味を內容とする部類の組合は、現存の政黨や政社と共通である可能を、或る程度に於いて、形式上及び外觀上帶びるかも知れん。しかしながら、現存の政黨が、概しては、あまりに甚だしい割合に於いて政黨を目的とする政黨であることを計算に入れて考へれば、上述の可能は、眞に形式上及び外觀上にとどまる現象であることを確認するかたちに於いて再認せざるをえない。

組合主義の發達は、政治的代理者を選擧しまたは推任する方法の上に、組合の感化勢力を多大に導き入れる機會を與

備する。議員にしても、大臣及びその他の官吏にしても、發達せる組合主義を背景として出現するやうになれば、現代に於けるよりは、事實に於いて、もつと有責任にあらたまつてくる可能は確實だ。

　現代普選運動の本質的一制限は、そしてその普選運動のうちには、比例代表運動の如きをも含めていふのだが、發達せる組合主義の背景を條件として豫想してゐないことにある。現代普選運動は、一人一票主義の數量的、外延的擴張を目的とする。その一票の性質的、內包的進化は現代普選運動の問ふところでない。一比喩を設けて說くならば、現代普選運動は、國民中の或る人人が一個づつ分配されて所有する參政權といふ果物を、國民中のもつと多くの人人に一個づつ分配して所有させようと志す努力だ。政治といへば漠然たる內治外交であり、內治外交は單純に强制と侵略とに、もしくは治安と國防とによつて代表されたやうな時代に於いては、果物といへば梨と柿に限つてゐると思はれた往時の或る地方に於ける如くに、漠然たる參政權を意味する一票の普及だけで事が足りたかも知れない。現代に於いては、單に果物といつただけでは、あまりに漠然すぎる如くに、單に參政權といつただけでは、精神として及び原則としてはいいが、その精神の發動としては、またその原則の行使としては、あまりに具體性を缺く。その具體性缺乏に原因する選擧及び被選擧の無責任が、現代選擧道德の低劣と腐敗を說明する。またそれが、現代政治職業者の無生命、無內容と、一般國民殊に進步的分子のかれらに對する信賴、尊敬の衰滅を說明する。

　組合主義を發達させることによつて、現代國家は、その過大の弊を最も積極的に自救することができる。現代國家の過大を最も消極的に救助する一方法は、それを小さくするにある。或る種類の帝國的國家は、それが二つにも、三つにも、それ以上の多數にも割られることに賢明が發揮される可能があらう。英國が埃及の獨立を或る程度に承認した最近の出來事は、その一小例だ。しかし現代の民族的國家にむかつて、それが二分され、三分されるやうなことを望んで

も、空望に終はる可能が十分であるばかりでなしに、それは不賢明な望みだ。なぜかといふに、言語、血液、風俗習慣、歷史、地理等のすべて或ひは有力部分に於いて共通である人人が、その共通價値をそれだけの、すなはち一大自然的社會として認識し、評價することは、その人人の、すなはちその民族の對已的及び對他的義務とも稱せらるべき一本質的必要事だ。協力が社會だ。大協力が大社會だ。協力は目的の共通を必要とすることは無論だが、出發點に於いて、すなはち準備に於いての共通をも必要とする。一民族は、その出發點または準備に於いての共通をすでに特權ともいふべき程度に於いて所有する。その特權に伴ふ特務または特責があるのだ。その特務または特責が正しきかたちの國民主義だ。民族的國家の形成だ。一理想的社會としての一國家を形成するための自然的準備たる意義を有する民族的同一に對して、人人は感謝敬虔の念あるを正當とする。

組合主義の發達の一効力は、目的としての國民と、手段としての國家との間の關係を完全に近づけるにある。個人對國家の關係が、個人對組合、組合對國家の關係に分裂進化することによつて、一層十分に、いはば有機的にされる。個人の特權たる、また特務たる創始力は、先づ組合に於いて發表され、それが組合の創始力となつてから、國家に於いて發表される新順序が設備されることになるのだ。國家は社會の、現實に於いては一要部として、理想としては全部として、常に進化する責務を有する。しかるに社會進步の主原因は、隨つて國家進步の主原因も、社會や國家に於ける創始力の絕對的單位としての個人にある。それが、或る個人には比較的に多く、或る個人には比較的にすくなく所有されて見いだされるが、要するに各人としての、また個々人としての個人にある。その個人と國家との間の關係が、現代に於ける如くに遠隔してゐては、國家の目的が、その遠隔さに正比例して不十分に達せられる。現代人は、個人のために個人を救はねばならない超時代的本質務を有すると同時に、個人のために國家を救はねばならない時代務をも有するのだ

が、その方法は、組合主義の組織的發達に於いて、最も好望だと考察される。

勿論國家以外の諸種の組合は、制裁力に於いて、國家よりも小さくてすむといふ事情と理由がある。國家は、政治の團體としての位置を正當に保存する限りに於いては、人間協力の、すなはち社會の全體的範圍にむかつて、組織、統整、及び保導を與へる努力を自身の全內容とする。また自身の存在理由とする。國家以外の諸種の組合は、國家に比すれば、一層自發的な組合と稱せらるべき性質を多少有すると同時に、人間協力の全體的範圍でなく、或る部分的範圍にむかつて組織、統整、及び保導を與へることを目的とする。制裁力が比較的に小さくてすむわけはこゝにある。この制裁力が小さくてすむといふ性質が、いはゆる自發的組合が、個人の創始力に親切に奉仕しうる一事情でもある。こゝで制裁力といつたのは、組合を目的物としての入籍、脫籍、創立、解散等をはじめとして、その他種々の行爲に對するその組合からの制裁の可能を意味したのだ。國法に違反すれば、時としては死刑さへも加へられる。國家以外の組合の規約に違反しても、制裁はその程度には達しない。もしも達するやうなことがあれば、現代に於いては、國家といふ組合がその組合のその制裁行爲を制裁する。

要するに國家以外の組合は、制裁力に於いては國家よりも小さくてすみ、社會的勢力に於いては個人よりも大きい。ここに國家以外の組合の用と價値の或る部分が存する。國家以外の組合が、制裁力に於いて、國家よりも小さくてすむといふ事情と理由の奥には、國家以外の組合は、國家に比して、一層直接に生活內容、生活材料、生活實質に立脚してゐるといふ事實がある。國家以外の組合の方が、國家よりも根源的であり、獨自的であり、創造的であり、すなはち第一原因的であり、無假定的であるといふ意味が、その事實とともに存するのだ。この問題の場合に於いては、制裁力の合理的小は、自發力すなはち創造質の可能的大を意味する。

國家といふ組合と、國家以外の組合との間の常在的關係はなにか。國家は多くの、もしくはすべての組合に共通の問題の發見、研究、解決を自己の主要職責とすべきだ。各組合に特有の問題をば各組合の自治、自營、自決にまかすべきだ。例へば、物價の如きは、生産者組合のみに、すくなくともそれの結果に於いて屬する事柄ではない。それは消費者組合にも、すくなくともそれの結果に於いて屬する。生産者組合と消費者組合との兩者に共通の一問題として物價は取り扱はるべきだ。それ故に、國家としては、生産費と購買力とを研究して、生産者のための最低價と消費者のための最高價とを知り、示し、公定する能力を常に有し、必要に應じてその能力に實現の機會を與ふべきだ。物價の例は眞に一例にすぎない。

基礎教育、公衆衛生、樞要なる交通手段、現在の事情下に於ける或る程度の國防、警察、廣くは治安等が、國家の事業として期待され、または承認されてゐることは、方向に於いて正しい。

生活に於ける根源的な、隨つて創造的な要素を內容としての國家以外の各種組合が發達するに從うて、國家の勞はますと同時にへる。人間協力の全體的範圍の各部內の自治の發達によつて、國家の勞は省かれ、人間協力の各部間の責任の發達によつて、國家の勞は加へられるのだ。國家は、その勞が、當然省かれべき方向に於いて極小限にまで省かれ、その勞が、當然加へられべき方向に於いて極大限にまで加へられることを理想とすべきだ。

コール氏は、國家自身が一組合であるのだから、統整權の如きは、國家によつてさへも帶ばれべきでないと主張する。國家と國家以外の組合との間に爭ひが生じた際に、相爭ふ二派のうちの一方は敵であると同時に裁判者であるといふ制度は不合理的だといふ考へにもとづいてだ。しかし、わたくしは、この點に關しては、最近に發表されたマ・クイーヴー氏の意見の如きに近い意見を多少久しい以前から抱懷して發表した一人だ。國家は、人間協力の全體的範圍にむか

つて、組織、統整、及び保導を與へる職權及び職務を、國民の現實の意思そのものゝ一派生的現象として、すなはち一延長として、隨つて一本質的部分または內容として、持つことが可能であると同時に、その可能に十分なる實現の機會を與へることは、國民自身の一當爲事であるとわたくしは判斷する。國家神權說や、意味に於いてそれに類する學說、常識、制度、習慣は、すなち觀念及び實行は、時代錯誤であると同時に本質的罪惡だ。いふところの統整權は、國民からの委托權としての意味に於いてのみ主張されたのだ。國民からの委托權であるから、そのかたちの統整は、實は國民に對する義務だ。國民が自身に對して作つた義務だから、それは、根柢に於いては、國民の自己表現としての創作だ。自律としての自由だ。それは、自己服從を目的とする自己立法だ。

組合主義の發達は、勞働組合によつて先驅されつゝある。勞働組合が發達すれば、他の組合は不用であるかと考へるに決してさうではない。また勞働組合が發達すれば、國家が不用に當然されるかと考へて見るに、その答へも否定的だ。

勞働の社會價と、勞働者の人格價とが十分に公認される日がくれば、今日の勞働運動は、完成された故の消滅に到達すべきだ。勞働の社會價とは、勞働は、その勞働者自身にとつて有用であり、必要であるばかりでなしに、すなはち有價であるばかりでなしに、かれの社會に於けるかれ以外のすべての人人にとつても、すくなくともその勞働の結果に於いて、有價であることを意味する。例へば竊盜の如きは、その竊盜者自身にとつての價値を有するにはきまつてゐるが、かれの社會に於けるかれ以外の人人にとつては消極的價値を有する。すなはち有害だ。かくして、竊盜は、社會價を有しない。

勞働者の人格價とは、例へば、健康、教育、興樂、すくなくとも近き將來にわたつての通則としては家庭、それから最

も根本的な一件として道徳的人格的自己尊敬の如き必要が示す種類の、人間通有の本質的必要を意味する。

現代産業不安の代表的主原因は、勞働の社會價と勞働者の人格價とが現代の國家と社會とによつてあまりに不十分にみとめられてゐるところにある。それと同時に現代産業不安の一副原因の一は、すなはち機會的原因の一は、産業革命以來、勞働者が最も多く接觸する便宜を有する他人としての相手は、同業者であるといふ事實にあると考へられる。産業革命以前に於いては、各勞働者が、最も頻繁に、毎回に於いて最も永く、接觸する機會のあつた他人としての相手は、雇主及びかれの家族であつた。現代に於ける結婚せる婦人の、その夫に對する關係にも似て、産業革命以前の勞働者は、謀反の對象としての敵とあまりに懇意になる境遇下に生きたのだ。しかるに、産業革命以來は、勞働者は、雇主としての重役や株主とは、稀に顔を合はせたり、言葉をかはしたりする機會を持たない。反對に、同業者とは、しかも數百、數千、數萬、乃至それ以上にさへも達する同業者とは、鑛山に於いて、工場に於いて、鐵道に於いて、またその他の勞作場に於いて、かれらは、飽くほどにも接觸する。

人には、他の生物にも多少あるが、團結本能と鬪爭本能とが深く、強く根を張つてゐる。上述の如き事情下に、勞働者が、その團結本能の發動の機會を同業者に求め見いだし、その鬪爭本能の發動の機會を重役及び株主を中心現象としての、或ひは代表的象徴としての資本家階級に求め見いだしたのは、力の科學のみから考へても、極めて可解だ。いはんや、資本家が、富の力を用ひて立法、行政の代理者を左右し、また輿論の形成者たる位置に隨分立つ新聞をも左右し、且つ自身高度の教育を享けるのみならず、學者を身邊に呼ぶことによつて、知識に於いても卓越してゐる際に、勞働者が發見しうる唯一の優越點としての武器は、同志の人數だ。力の科學と、價値の論理とが、勿論前者は後者の觸發力として、そして後者は前者の目的力としての關係を根柢に於いては概ね保ちつゝ、現代に於いて併發し、合動しきたつた

ことは、人間の本性と社會事情との或る關係下に、必然期待される一現象のやうに考察される。ここで價値の論理と呼んだのは、勞働の社會價と勞働者の人格價を內容とする思想だ。

あるべきかたちの國家は、その信者としての支配的形式に於いては、力の科學の信者であつてはならない。價値の論理の信者でなくてはならない。從來の國家は、力としての資本に隸從した。今後の國家は、力としての資本にも、力としての勞働にも隸從せずに、最初に定義した政治の要件を、純粹に、正直に滿たすことを唯一の興味とすべきだ。

正しきかたちの國家は、勞働組合そのものの目的のためにも必要だ。なぜかといふに、勞働組合は、要するに富を目的とする。しかるに人は、富以外の目的をも本質的に有する。

正しきかたちの國家は、教育組合を通ほして、及びその他の非組織的方法を通はして、幼少年者の個性をば、その個性自身の名と實に於いて保護し、助成し、すなはち目的として尊敬することを自己存在の一大理由とする。

最後に、國家の合理的可能は、民族的國家には限らない。アメリカにも、瑞西にも、すでにその徴候があるといふことと、將來の政治の實體は、國民の代はりに社會民を持つ性質のものであるべきだといふことを、當在國家の名義論でなく、實質論の或る要點として提說して置く。

歐洲外交の行つまり

——新國際會議の開かるゝまで——

上西半三郎

一

いま歐洲の外交舞臺を眺めると中々に事件が多い、後世の史家はいまの時をウヰンナ會議後の歐洲、伯林公會後の歐洲に比べるかも知れない程である。然しウヰンナ會議後は兎も角「神聖同盟」なる中軸でもつて歐洲を固め、また伯林會議後は國際關係の展開が非常に急速であつて、今日の樣に無中心また沈滯はして居らなかつた。巴里會議後三ケ年、その間殆んど連月いろんな國際會議が開かれ、戰爭の跡始末と恒久平和の樹立に骨は折られたが、三年前に比べて少しも進境が見えない。今の狀態は亂脈で、無秩序で、萬事行詰つて居る。私がいま云はんとする處はこの歐洲外交の行詰りそれである。

二

三年間に開かれた國際會議は凡そ三種類に分けられる。第一は恒久平和の樹立を目的とするもので、國際聯盟關係の諸會合である。第二は戰爭の跡始末としての新獨逸問題を處理するもので、最高會議その他賠償問題に關する各種の會合、そして第三は、同じく戰爭の跡始末にかゝるものだが、露西亞との關係を復活せんとするものである。第一については今云はずとするも、第二第三ともに殆んど眼星しい成果を得て居ない。だから現在の行詰りを云ふためには、第二第三の國際會議を說明せねばならず、ためにその典型とも云ふべき最近の倫敦會議とヘーグ會議の結果を述べる。倫敦會議は八月七日から十四日まで開かれ、ロイド・ジョージ、ボアンカレー、チユニス、シアンチエ

ル等英、佛、白、伊の當局のお歴々を集め、我林駐英大使もこれに加はつたのだが、賠償問題について全く成果を齎らさないで終つた、と云ふは獨逸が向後二ケ年半の間賠償金の支拂を延期して貰ひたいと要求したに對し、佛蘭西側はその延期保障の條件としてルール地方の炭坑、ライン左岸の森林を管理したいと固執し、英國側はそんな獨逸の生産資源を擔保とせず、獨逸の金融財政を管理するだけに止めんとし、兩者相下らなかつたため不調に終つたのである。この問題は引續き賠償委員會で處理せられ、人を伯林に送つて獨逸當局と會商せしめ、九月上旬巴里に會合を開いた。兎に角結果は得たが決して滿足な解決ではない。

三

賠償委員會での決定は、形式上支拂延期は出來ぬと云ふことになつて居るが、その實質から見ると本年十二月三十一日迄の金支拂は獨逸の大藏證券で拂つて宜しいと云ふのであるから、事實上本年中は支拂延期を許したことになる。そして來年一月一日以後の賠償支拂は改めて會議を開いて決すると云ふのである。これによつて知られる通り、賠償問題は巴里會議以後小しも解決されて居ない。ヴェルサイユ條約の賠償篇に規定するところは大綱であるが、その後昨年五月の倫敦協定で支拂額と支拂方法が協定された、だがその協定は昨年十二月を以て事實上實行不可能となり本年三月二十一日の協定で兎に角半永久的のことは云はず、たゞ本年中の支拂額と支拂方法とを定めたのである。それが又七月の交渉で破壊され、倫敦會議となり、賠償委員會となつて右の樣な一時的糊塗策に終つたのである。即ち形式上から見て來年一月以後に昨年の倫敦協定がどれだけの効力を持つかも疑問であり、賠償問題は本年中は糊塗されたが永久的に何等解決の緒に就いて居ないと云へる。それから今後の形勢に見ても賠償委員會はヴェルサイユ條約に據る正統な賠償の決定及び實行機關だが、實際においては最高會議否五大國が賠償問題を取扱ひ、賠償委員會はその傀儡たるの感がある。これでは賠償問題が果して何の日解決されるか見當がつかない。だから目下の處賠償問題は歐洲の重大問題であると共に、それは少しも解決の曙光を示して居ないといふことだけは云ひ得られる。

四

次は露西亞問題である。ロイド・ジョージ氏は巴里會議でこの問題をも解決せんとし、プリンキポ會議案を提出した。が當時

は各種の事情のために實行されなかつた。それが今尙懸案として殘る。英國の態度は終始一貫、このプリンキポ案を繼續し、それがために英露の通商條約締結となり、又ゼノア會議ともなつたのである。最近露國問題を取扱つたのは七月開會のヘーグ委員會である。同委員會の問題はゼノア會議のあとを受けて露國と列國との關係を復活せんとするにあつた。名は歐洲の經濟恢復にあるも、その唯一な手段として露國との關係を恢復せんとするにある。ところが露國との交渉において露國は戰爭中に沒收した外國人に屬する私有財産を返還することを承諾しない。戰前の債務を現在の政府の債務として認めない。それがためにヘーグ委員會は不調に終つた。その後勞農政府は國際會議の方法に依らず、列國と個々に交渉して露國と列國との國交恢復の問題を解決するだらうと云はれたが、その後その一發現とも見るべき日露會議が長春で開かれて居るの外、何等の進展も來して居ない。歐洲戰爭平和後三年半、露西亞は歐洲と相近かんとして然も果さない。英露通商條約は出來て居る、勞農政府とスカンヂナヴヰア諸國との通商條約は出來て居る、又ラツパロ條約で露獨の國交は恢復された。しかし露西亞は尙歐羅巴と云ふ水の中にある油として殘つて居る。それが融和して一の歐羅巴となまではこの問題はまだ〲歐洲國際政局の難問として幾多の政治家の頭を惱ますに違ひない。

五

その外歐洲の懸案として引懸れるものには近東問題がある、アンゴラ政府と希臘の軍隊は今尙小亞細亞に劍戟の下に相對峙して居る。セーヴル條約が甚しく不公平なものであつたがために、希臘土耳共の問題は片附かないと云ふが、たとへ公平な條約が出來上つたとしても兩國の歷史的、人種的、地理的、そして經濟的關係は兩國を仇敵として殘したであらう。且土耳共を助けることを利とする佛蘭西、希臘を援助するを便とする英國があつて、君府から小亞細亞、エージアン海にかけて英佛兩國の利益は餘りに衝突し過ぎて居る。その上佛蘭西と妙な關係にある伊太利、そして黑海沿岸に油田を持つ伊太利が、この渦中に入つて近東問題はます〲復雜となる。近く伊太利ヴェニスで近東會議を開くと云ふが果して解決されるか私は疑ふ。その外、タンジール問題が英、佛、伊三國の間に殘つて居る。ヴヰルナ問題が波蘭とリスアニアとの間に殘つて居る。アーランド島問題も瑞典とフヰンランドとの間に解決されない。アルバニア問題、ダンチツヒ問題、曰く何、曰く何と數へ來れば限りがない。今歐羅巴には大は獨逸と露西亞の問題より無數の小問題

まで、ちやうど巴里會議を發足點として解決の努力は試みられたがらも、三年半の間そのまゝで少しも解決されずに殘つて居る。

六

これ等歐洲外交行詰りの第一原因は、現今の歐洲政治家自身の缺陷にあると思ふ。ロイド・ジョージ氏はその外交策をたゞ〳〵國內政策から立てるとの批難を受けて居る。勿論氏の議會における外交演說は內政を目的としてなされたこともあらう。氏の外交策の中には總選擧を考慮して編み出されたものもあらう。聯立派が今日の樣な狀態では氏としては一日も一時も國內策を忽にすることが出來ない事情にある。しかし氏が巴里會議後今日までなし來つた處をよく驗べると、氏は一日も早く歐洲の恢復そして永久の平和樹立を希つて居ることが判る。これはロイド・ジョージ氏をよく見た點である。しかし私はロイド・ジョージ氏の立場に不利な點があると思ふ。即ちそれが成功せないのは氏の立場に缺陷があるからである。英國は佛蘭西伊太利その他と同列で歐洲戰爭に參加した。即ち戰爭の當事者として佛蘭西伊太利その他と平等な關係がある。それがために英國は戰後の跡始末にあたり第三者として自由に働きかけるに不便な地位にある。この國家的背景に立つロイド・ジョージ氏は、たとへ偉ら者であらうともその行動を甚しく制縛されるのだが、氏は成程偉者ではあるが積極的の偉者と云ふよりは消極的の偉者であり、風雲を捲き起す人にあらず、風雲に乘ずる人である。その外氏が妥協に巧なる、國際渦中に深入りし過ぎたる、餘りに智に走り過ぎたる一として、氏が歐洲恢復の先導者として適當なる資性を有するものとは云へない。海を隔てたるポアンカレー氏は、初から餘りに色彩が鮮明し過ぎる。歐洲の大難關たる露西亞問題獨逸問題を向ふに廻し、陣頭に立つて戰ひつゝある戰士だから氏は論外である。伊太利のファクタ、シヤンチエルは多少その力において疑問があり、さて小國はと見渡すと瑞典のブランチングの如き內にも外にも一大政治家ではあるが、その背景たる瑞典がブ氏の立つを許さない。近頃賣出しのベネスも亦チエコ・スロヴアキアの政治なるがために歐洲の中央に雄飛するに不便である。

七

同じ事實を他の方面から見て歐洲外交デツドロックの第二因とする。今歐洲には一種のバランス、オブ、パワーがとれて居ると思ふ。それは三國同盟に對し露佛協商、そしてミドリード

七世の活躍を以てした如きバランス、オブ、パワーを云ふのではない。巴里會議後の混沌たる形勢は次第に展開して歐洲における英プラス伊對佛プラス白の對立を順致した。勿論英伊兩國の間には何等成文の楔があるわけでもなく、又不文のアンタントが出來上つて居るわけでもない。露西亞、獨逸、近東、タンヂール各種の問題について自然英伊の兩國が利害相一致すると云ふまでゞある。佛、白兩國にしても例の佛白軍事同盟は大したものではない。獨逸に對する利害が一致するから提携するのである。この佛蘭西白耳義のリーグは波蘭を加へ土耳其を懐柔し、羅馬尼、ユーゴ・スラヴを近づけ一團となり、一方英國伊太利のリーグ又は希臘、チエコ・スロヴアキアを從へて兩々相下らず、露西亞と獨逸を相めぐつて相爭ふ。さればとて人の所謂「英佛アンタント」は尙アンタントとして殘り、この兩國體はそのアンタントによつて相結び附けられ切つても切れぬ關係にある。英國側は自然露西亞との關係を復活し、獨逸の賠償問題を片附けて歐洲恢復を計らんとするが、佛蘭西側は露西亞を歐洲から切放し、獨逸にはヴエルサイユ條約の規定を嚴重に實施して歐洲の恢復を計らうとする。こう云ふ風のところに一種のバランス、オブ、パワーが出來上つて、そのバランスは一方に多少の重量を加へても變らない、他方は少し計りの重しを載せても大して變動を見ない。

八

しかし歐洲外交行詰りの最大原因として私は財政經濟の問題を擧げる。何かの書物に現代外交の動因は經濟にありと云ふがこれは單に唯物史觀の言のみとして聞くべきでない。適切に現代の歐洲外交そのものを云ひ現はして居る。四年半の歐洲戰爭は全然不生產的のものであつたがために、又各國が敵と味方、交戰國と中立國と云ふ關係にあつたがために、全然從來の國際經濟組織を破壞し、それと共に各國に多額の內外債を殘した。各國民の勞働嫌惡の念、生產の破壞は差詰め外交と直接の關係がないから省くが、各國の外債は是非始末せられねばならぬ。歐洲だけを切離して云ふと、英國は佛、伊、白、その他に對して債權國である。だから佛蘭西は英國の債務だけを帳消しにしてくれゝば獨逸に對する賠償を輕減すべく考慮してもいゝとの意嚮を洩して居る。八月一日バルフオア氏の出した通牒は表面から見れば英國は大陸に對する債權が帳消し出來ぬと云ふことになるが、裏から解すれば米國が英國への貸附けを帳消ししてくれゝば英國は喜んで自家の債權を帳消しにすると云ふのだ。英國に限らず、佛蘭西も亦米國が對歐債權百二十億弗を帳

消しにせんことを望んで居る。しかし今日のところ米國がこれを肯じない。從つて英國の苦衷もあれば、佛蘭西の對獨逸態度も強硬となるのである。賠償問題と云ひ歐洲の恢復問題と云ひ、こう云ふ風の各國間の債權債務の問題が根柢をなして居るから、たゞ表面だけでは解されない。この國際財政の問題はたび〳〵解決されんとして解決されない。近く歐洲各國は各別に米國と債務問題を協議する。或はこれを中心にした國際間の會議が開かれるかも知れぬ。この問題が解決されざる限り、歐洲の外交はすら〳〵と展開する理由がない。

九

こんな外交の行詰りが果してどうなるか。三つの場合が豫想される。第一はこのまゝ何時までも行詰りを續けること、第二は非常の大變事突發し現狀を打破して新局面を開くこと、第三は徐々に形勢が變り行くことこれである。第一、第二は、先づあり得べからざることゝして私は第三の場合を研究したい。現今の歐洲政治家外交者の個人的力量によつて行詰りを打破することは到底不可能である。それは既に述べた通りである。又現に出來上つて居る一種のバランス、オブ、パワーを破壞することも出來まい。それで問題は國際財政の解決から漸次動き出して來ると思ふ。さてどう動き出すか、假想するに二つの方法がある。甲は佛蘭西が自國の財政と獨逸の賠償との關係を他の見地から見て思ひ切つて賠償額の輕減を申出でることである。乙は米國が或條件の下に對歐洲への債權を帳消しすることである。佛蘭西の態度は頑固だと云はれる、又頑固であつた、又あらねばならぬ立場にある。然し八月上旬の半官新聞の云ふ處などから考へると條件だに容れられると佛國は賠償を輕減するかも知れぬ。恐らく賠償の輕減をするだらうと推測してもいゝのである。又米國の態度は常に債權帳消しに反對であつた。これは米國としては當然のことである。米國の如何なる政治家も政策上帳消しの反對を云つて居るのではない。眞面目に反對するが當然だと信じて居るのである。これは外交批評家の定論である。しかしこの米國の態度も多少の變化をし初めて居る。

十

最近の米紙の論調が餘程變つて來て居る。もし或條件が容れらるれば、或は米國は卒先して第二の廣汎な華盛頓會議を開いて、廣く海陸軍備の制限、國際財政の調節、非侵略の取扱等のことを議すべく、國際會議を提唱するかも知れない。米國が一たびこの種の提議を試みるならば、歐洲諸國はどのリーグに屬

するに拘らず、又敵も味方も喜んでこれに應ずるだらう。そうすると懸案はスラ／＼と解決され、歐洲外交の行詰りは立どころに解かれて新しい局面の展開を見るであらう。往年のモロッコ問題のとき、バルカン戰の前一九一四年の歐洲戰の前の樣な緊張振りは今の歐洲にない。たゞ巴里會議そのものが甚だ不完全であつたがために澤山の懸案が殘り、又その後これ等を解決するに好都合な狀態でなく妙に外交界の停頓を來したのであつて、その停頓は自然であり又必然であつたのだ。この際これを打開するは遥に云ふ如くまづ米國の歐洲問題參加から始められねばならぬ。そして私はそのことを希望する。もし米國の出動もなくされればとて歐洲に大事變が突發しなければ、歐洲外交は當分この停頓を續けるの外はあるまい。物理學に所謂一たび運動を與へられた物體は一直線に同速度を以て運動する。歐洲は今停頓と云ふ運動を加へられて直つしぐらに進む物體に等しい。米國と云ふ他の運動が加へられなければ同じ方向の運動を續けて少しも變化を見ないだらうと思ふ。（九月八日）

附記、この稿終つた頃米國が歐洲問題に參加すると想像される外電がドシ／＼來る。本文讀者に見ゆる頃或は米國が新國際會議開催を提唱して居るかも知れない。

政治と實業との關係を論じて現下の諸問題に及ぶ

法學博士　堀江歸一

實業家の會合と議會政治

加藤內閣の藏相市來氏は過日來前後三日に亙つて、京阪兩地の重なる實業家を招待し、現下の經濟問題に對して、彼等の意見を徵したと云ふことである。被招待者は何れも我國に於ける特殊銀行、大會社、大銀行の首腦者であつて、第一流の實業家は總て網羅されたものと見るを得るであらう。從來政府が屢々或る事項を調査する爲めに、委員會を組織したことはあるが、

其委員會たる、官吏議員を委員とし、實業家を其内に交へるのに止まる。今回の如く實業家ばかりの會合を催ほしたこと、彼等をして自由に現下重要の經濟問題に對して、意見を吐露させたこと、政府としては別に何等の案を諮問する形式を取らず、又討議された問題に就て、何等の決議を求めず、頗る非公式の裡に會議を終始したことの諸點は誠に政府の計畫として異彩を放つものであつて、其世間の注意を惹くに至つたことも、亦偶然でないのである。

政府が右の如き計畫に出でた理由に就ては、世間に種々の想像が行はれて居るようである。之を正面から解釋する者は政府は此會合を通じて、實業界に於て、經濟問題に關して、如何なる輿論の行はれつゝあるかを知らうとしたものであると云ふ。或る特殊の問題例へば金輸出の解禁とか、日本銀行の金利引下とか云ふような當面の問題が選ばれて、今度の會合に於ける話題に上つた所から考へれば、政府が是等の問題に對して、何とか適當の解決を下すに先だち、實業家の意見を明にして、大體の方針を決定する參考に資する意圖を有することは、略ぼ之を疑ふを得ない。政府は果して今回の會合に依つて、實業界の輿論を確めるを得たかどうか、此事は姑く他日の問題とし、實業家會合に對して、私が第一に感じることは、國民輿論の府たる帝國議會の蔑視された事である。我國議會の現狀に對する批判は兎に角、我國が立憲政治を布き、帝國議會が組織され其議員たるものは社會各方面の利害を代表して、選出されたと見る可きであり、隨つて議會に行はれる言論こそ、即ち國民の輿論であると認めなければならぬ。立憲國に於ては、政府が議會の言論に聽從すれば、即ち輿論を尊重したことゝ爲り、議會と政府との間に、其爲す所に於て、些かの扞格なからしめることが政黨内閣制度の主張される所以と爲るのである。加藤内閣は超然内閣であつて、固より其成立の由來なり、閣僚の顏觸なりから判斷すれば、衆議院に於ては、政友會を、貴族院に於ては、研究會、交友俱樂部を與黨として居ることは爭ふ可からざる事實であるようなものゝ、必ずしも此内閣を以つて、政友會なり、研究會なりと同一體のものと見るを許されない。隨つて加藤内閣としては、一黨一派の政見に偏せず、廣く天下の公論に從つて、施政の方針を律する態度に出で、政友會や、研究會、交友俱樂部は無論の事憲政會、國民黨、辛三派等の代表者に就て、意見を徵するのが當然である。然るに斯く帝國議會を組織する各團體を差措いて、獨り實業家の意見を徵すると云ふのは、政府自ら議會を無視し、蔑如したるものであつて、如何に超然内閣とは云ひながら、立憲國にある可からざる所と考へられる。

帝國議會と經濟財政上の知識

唯此場合に政府に取つて、辯解の材料と爲るのは、經濟財政の見地から云つて、我國帝國議會の粗末極まる一事である。即ち衆議院の如き職業的政治家の群れを以つて充たされ、政權の爭奪を事とし、一旦自已の手中に收めた政權は何時までも之を濫用して、自己の黨與を利することを期して已まない。貴族院には從來行政上に經驗もあれば、知識を備へた人も居るが、何々會何々倶樂部の牛耳を握る人々が果して一廉の財政家又は經濟家を以つて、認められ可きであらうか、時に其人ありとするも、所謂盲目千人、目明一人位の有樣であつては、其人の意見が能く議會に於ける輿論を左右するを得るものとも思はれない。加藤内閣が貴衆兩院の代表者を閑却して、殊更に實業家ばかりの會合に經濟財政の重要問題を諮問したことは、最も率直に此種の問題に對して、議會の無識、無能、無責任であることを裏書した次第であつて、超然内閣であればこそ、斯の如く露骨に議會に對する不信任を表明するを得たとも考へられる、如何に議會を改造して、經濟財政の知識ある者、殊に其知識の淸新なる者、實業界の利害を正當に、代表し、立言行動に勇氣ある者を此處に網羅し得られるようにす可きかは、今後の一問題として、吾人の攻究に値する所である。

我國議會の頼むに足らざる實例

然しながら、議會に對して斯る不信任の念の國民の間に生じたのは、我國ばかりではなく、又近頃に爲つて、遽に始まつたことでもない。議會が政爭の決せられる場所であり、而して政黨が朝野に對立して、權勢を競い、其權勢の消長に依つて、政權の授受されることとは、立憲政治の下に於ける必至の趨勢であるが、斯の如く議會が政爭の巷に化し、議員が軍隊の下に在る兵卒と同樣に、其所屬政黨の爲めに、力戰奮闘する外に、他あるを知らない者であるとして、斯る議會たり、議員なりが果して誠實に、又冷靜に國民全體の利害に着眼し、國民生活の爲めに、其利とする所を發揚する一方に、其害と爲る所を除却することに、努力するものと期待し得られるであらうか。此期待か如何に今日の議會に依つて、裏切られて居るかは、我國現在の事實に徴して、之を知るを得るばかりでなく、普通選擧の行はれて居る諸外國の事例に就て考へても、議會が常に國民生活の發展に力を致して、遺漏なきものであるとは思はれない、否議會が政爭に熱中して、他を顧みるに至らない結果、折角政府が國民生活の爲めに工風して、着手しようとする所も、議會の妨

ぐる所と爲るが如き結果を生ずるであらうし、又時に政府は所屬政黨の勢力を伸張する爲めに、或る階級又は或る地方の人民の利益を擧げる施設のみに忙はしく、他方面の利益を蹂躙するの弊を生ぜざるを得ない。近年我國に於ける議會の實際は如何であるか。貴族院には研究會と交友倶樂部あり、衆議院には政友會あつて、前者は款を政府に通じ、後者は原高橋兩内閣に直屬し、如何に道理に外れた經濟財政上の施設であつても、政府の提案とあれば、之を成立させようとするのみならず、機會あれば積極政策に依つて、地方に於ける與黨の勢力伸張策を講じることを常習とした。即ち今日の政黨は公益を後にして、私益を前にするものであつて、其實質に於ては、一個の徒黨に比較して、擇ぶ所あることを見出すを得なかつたのである。然らば政友會ばかりが斯る惡質のものであるかと云へば、必ずしもさうでなく、政友會が政權に接近し、又之を掌握する機會が多かつたゞけ、其惡辨を著しく世間に暴露したまでの話であつて、他の政黨と雖も、現狀に於ては、大同小異のものと見るの外なき始末であらう。

私は決して言を構へて、殊更に帝國議會の態度に非難を加へようとするものではない。我國最近の事實に徴すると、物價問題の如きは、我國今日の國民生活に於て、最も利害關係の濃厚なるものであることに就て殆ど辯を要しない。物價騰貴の勢を從來の儘にし、經濟社會が如何に不景氣に爲つても、少しも物價に下落の徴候を現はさないような、狀況にして置いたならば、國民生活は疲弊困憊の極點に達し、他日の再起に如何ばかりの困難を覺へるか、殆ど測り知るを得ないのである。然らば從來議會に於て此點に就て、政府に鞭韃を加へて、物價政策の方針をして其正しきに就かしめる運動を試みたものがあるであらうか。往年貴族員の各派が聯合して、原内閣の存立中に、同内閣に向つて、物價調節の建議を致したことがある。而して原内閣は此建議の趣意に贊成であることを明言したに拘はらず、實際には何等の施設を試みなかつた。然らば建議の提案者である貴族院各派の如きは、次期の議會に臨んで、大に政府の怠慢を糺彈し、其責任を問はなければならぬ道理であり、又斯くしてこそ、議會の權威を發揮するに至らしめる次第であるのに、貴族院の如き、當初の勢の盛んであつたに對して、後には殆ど風馬牛相關せざるの態度を示し、世人をして一驚を喫せしめたのである。若し其れ衆議院に至つては、政友會所屬議員の多數を占めることの關係から、物價調節の如きは、全く之を眼中に置かず、寧ろ物價をして其騰貴する勢に任さしめ、斯くて一時の好景氣を續けると云ふ高橋是清氏一流の淺薄なる經濟政策を

問持する外に、他あるを知らなかつたのである。今日我國の經濟社會が三年越しの不景氣に苦しめられ、今に至つて尙ほ恢復の曙光すら、仰ぐを得ないことの如き、一に斯る間違を極めた經濟政策の行はれた結果であつて、政友會中經濟上の問題に就て、多少の知見を備へる人士が居つたならば、夙に前非を悔いて、態度を一變す可き筈であるのに、彼等の頑愚に加ふるに無智なる、何處までも、當初の方針に執着しつゝあるが如き、驚き入つた話であるとしなければならぬ。

加藤内閣の望を繋がるる所以

加藤内閣と原、高橋兩内閣とを比較して、優劣孰れにあるかと云へば、私は加藤内閣の方が諸般の問題に臨んで、之を解決するに誠意を以てしようとする趣きのあることを認めて、之に多少の望を屬したのである。卽ち加藤内閣は組織の當初から、物價調節を必要として、種々の施設を行はうとした。過日、第一次の施設として世間に發表した十九個條の項目は物價調節の效果を擧げる上に於て、盡さゞるものゝ多々あるとしても、尙第二次政策の下に、如何なる有效のものが行はれるか、世間の期待は此點に繫がつたのである。而して今日物價調節策として、最も効果の著しかる可きものは、何であるかと云へば 第一は金輸出の解禁であり、第二は經費の節約、事業の緊縮であり、第三は同業組合に對する制限であることは、具眼者の認めて以つて異論を挾まない所である。加藤内閣が果して是等三策の總てなり、又は其内の或るものなりを實行する覺悟を持つて居るかどうかは、一個の疑問であるが、頃者政友會は是等の三策に對して、政府に抗議を致しつゝあるやに見へる。然らば其抗議なるものには、確乎たる根據があるかと云ふに、決してさうではない。卽ち第一の金輸出解禁に對しては、禁輸が政友會の傳統的政策であるのに、今之に反對の政策が行はれたならば、政友會の面目の丸潰れに爲ることを恐れるのであり、第二の經濟節約、財政縮小に對しては、多年政友會の天下に標榜し來つた積極政策が一擲されて、消極政策が之に代つたならば、地方に黨勢を擴張するに就て、多大の妨害と爲るのを憂へるのであり、第三の同業組合に對する制裁に就ては、組合員中の議員選擧權者が斯る處置を憤つて、政友會に離反するようなことがあつては、將來の發展に大なる支障を來す可しとして、反對するのに外ならない。然らば是等の反對論に何の見る可きものがあるであらうか、要するに徒黨の利益を謀るに急であつて、國民の利益を犧牲に供して、憚らざるものと斷言するの外ないのである。

加藤内閣が今回實業家の會合を催ほして、重要なる經濟問題

の討議を託したのは、實業家の勢力を藉りて、政友會の横暴殊に加藤內閣に向つて、政友會の政策を踏襲させようとする壓迫に對抗する意に出たものであると云ふ說もある。兎に角經濟上の問題に就て、私心を挾み國民的利害を顧みないで、之を解決しようとする政黨があり、此政黨が斯る私心を逞うした結果として今日の如き存外多大なる勢力を擁するものである以上は、經濟問題の解決を議會に託して、其正しきを得ようとか、有力なる政黨政治家の意見を徵して、政府の方針を決定する參考に充てようとするが如きは、誤解の甚だしきものである。斯くて一國の立法部を二分して、一方を純然たる政治機關とし、他の一方を產業機關とし、後者には各種產業の利害關係を代表する人々のみを或る選擧法の下に議員に選出し、純乎たる經濟上の問題は此產業機關の審査に託し、以つて實際の利害に背馳せしめざることを期する說の起るのも、亦故ありとしなければならぬ。

實業家會議の價値

加藤內閣の實業家招待は上記の產業機關として立法部を設けることゝは、趣意に於て似た所もあるが、異なつた點が多い。即ち被招待者たる實業家の選定は一に政府の意思に據つたものであつて、何等確乎たる標準が示されない、其內には特殊銀行の主宰者であるとか、平生政府の御用を引受ける大會社の番頭であるとか、政府に對して、從屬的地位に在る人々が居つたり、政府の方では何等の原案なり、又は其說明なりを示さず、單に個々の問題を揭げて、實業家の意見を質したり、又意見は之を質すが、何等の決議を取らず、殊に意見に多少の纏りがあつても、政府に於て、之を實行する義務を負はない、道德的義務すら負はないことの諸點は實業家會議の空漠たる所以を示し、產業機關としての立法部と大に異なる所としなければならぬ。然も加藤內閣が帝國議會の存在し、其閉會中の今日に於ても、兩院各派の領袖の在京して居るに拘はらず、彼等に一顧をも拂はず、却つて經濟問題に關して意見を徵する爲めに、實業家ばかりの會合を開催したことは、明に議會に對する蔑視を現實にしたものである。即ち今日の議會なり、政黨なりを以つてしては、經濟上又は實業上の利害は完全に代表されて居らない、今日の議員輩には經濟問題に對する眞の理解のないことを態度の上で見せたものである。更に政府が此實業家會合を背後の勢力として、今の政黨者流殊に加藤內閣を支持すると目されてゐる政友會の好まさる政策でも實行する決心を得たならば、其處に多少の興味を生ずるであらうし、更に實業家の會合を洗

錬し、淘治し、規律を設け、準繩を定めて、財政並に經濟上の行政方針を決定する常設的機關に充てるように爲つたならば、自ら議會政治に對する一革新と爲るであらう。然し加藤内閣に斯る遠大なる考へがあるかは、甚だ疑はしい所であつて、吾人の遠く考を運らすことを無用とする次第である。

實業家の素質と英國の實例

今回の如き實業家の會合を以つて、一時的のものと見る。即ち政府が或る事項に就て、自己の態度を決定する爲めに、實業家の意見を徴する必要ありとして、招集したに過ぎないものとして、此種の偶時的會合に幾何の價値があるかと云ふことが一個の問題と爲る。此點に就て、論究する場合には、私は勢我國實業家の知識、人格、修養若しくは平生の業務等に考を及ぼさゞるを得ない。如何にも今日我國に於て實業家として第一流の地位を占める人々は徒手空拳能く之に升つた次第であるから、何處かに他に勝つた才能を持つて居るには相違なからう。然しながら我國の實業界には之を全體から見て、見逃す可からざる一つの悪風がある。其れは外でもない、三菱、三井、住友の如き國中屈指の大富豪であり、大事業家であるに拘はらず、獨往獨行、以つて商賣上に、事業經營上に利益を收めることを工風せず、動もすれば政府の庇保の下に、利益を得ようとして已まない。彼等の大を以つてして、尙ほ然りとしたならば、群小の資本家事業家の輩が政府の爲めに御用商人たることを願ふのも、亦怪むに足らないのであらう。即ち彼等は平時に於ては、政府の御用を引受けて、利益を獲得しようとし、事變に於て經濟社會の沈衰した場合には、同じく政府の保護に浴して、難關を經過しようとすることを願つて已まない。其結果は如何であるかと云へば、政權に對する實業の屈從、政府に對する民間實業家の隷屬であつて、特殊銀行や、保護會社の重役の政府に對して、屈從しなければならぬことは勿論、其他の實業家中、果して政府に向つて、其意に反する如き所見を述べ得る者が幾人あるであらうか、其乏しきは私の斷言するに苦しまざる所である。即ち彼等は政府をして飽くまでも財政の規模を擴張し、經費を濫費させて、其間に利益を貪らうとするかも知れない、政府の提案とあれば、唯々諾々之を奉ずることも怠らないであらう。事大思想なり、官權崇拜なりは、我國實業界の病弊であつて、殆ど治癒するを得ない位に其根柢の深きものと認められる。之に加ふるに、我國の實業家は概して無智であり、無識である。自己の平生擔任する事業に就ては、相當に通曉する所ありとしても、無學の悲しさには、何か少し方面の違つた問題に

臨めば、全く何等の意見を立てることが出來ない。是れ亦我國の實業家をして政府の所說や、所爲に盲從するの已むを得ざるに至らしめる最大の原因であると考へられる。

試に英吉利の新聞紙を繙いて、御覽なさい。何か經濟上に大なる問題が起り、之に對する政府の方針に依つて、當業者の利害の傷けられようとする場合に爲れば、彼等は必ず二三の代表者を選んで、當該大臣に會見を申出で、堂々反對の意見を述べさせる。而して政府も此種の抗論を尊重し、歡迎し、之に依つて輿論の存する所を知悉し、政府の政策にして改め得られるものは、之を改めるに吝なるものでないが、政府にも亦見る所あつて、民間の意見の容れられなかつた場合には、民間當業者は如何なる態度に出るであらうかと云へば、徒に泣寢入りに爲つたり、又他の方面に於て一方の損失を埋合はせるに足る利益を隱密の間に收めようとするが如きは、獨立を重んずる英國實業家の本色とする所ではない。彼等は政府に依つて、自己の抗論の採擇されないことを知つたならば、今度は新聞紙を通じて、輿論を動かさうとし、更に議會に運動して、政府の所志を妨げようとする。卽ち飽くまでも公明なる態度の下に、自家の主張を貫徹し、實業界の利益を擧げようとするのが、英國實業家の期する所であつて、斯の如きは畢竟彼等が平生政權に對して、獨立の地歩を占め、特に政府に求める所なきの致す結果である。政權に對する實業家の地位、斯の如きであつてこそ、政府が實業家の意見を徵して、施政上の參考とするを得るのである。時には政府の爲さんとする所に對して、實業家から苦言を寄せることがあるかも知れないが、此苦言こそ、政府に取つては、千金の價値あるのである。我國の如き由來政府に隷屬する特殊銀行の主宰者や、政權に阿附する實業家を集めた所で、果して同樣の効果が奏されるかどうか、私は其然らざることを信ずると共に、一日も早く、我國の實業社會をして政權から解放し、政府に對して獨立せしめることを急務であると考へざるを得ない。

內閣自身の見識は如何

加藤內閣は今回の實業家會合を通じて、如何なる知見を得たか、又此知見に基いて、實際の施政上に何か新機軸を開くであらうか、是等は今日に於て全然不定の問題であるが、本來加藤內閣が實業家に諮問した事項の如きは、必ずしも取立てゝ、攻究す可き程の問題ではなく、內閣に相當の見識さへあれば、之を解決すること、極めて易々たりと認められる。物價問題の對策として、金輸出解禁の可否が論じられたと云ふことである

が、斯の如きは極めて陳腐の問題である。本來今日の國際經濟に於て、物資の出入の自由であるが如く、金の出入も亦之を自由にす可きものであつて、其出入に或る制限を加へるが如き、變態の甚だしきものである。而して斯る變態が續けられたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。我國當面の問題である金輸出禁止に就て考へると、從來世界を通じて金の輸出の自由であつたことは、輸入爲替の相場をして其常調を保たせる所以と爲つたのである。即ち輸入爲替に依つて、輸入品の代金を決濟する場合に、爲替相場が不利に爲つて居れば、輸入業者は爲替手形に依らず、直接に金貨其ものを對手國に現送して、債務の決濟を求めるであらうし、斯く金貨の現送されることは、自然爲替相場をして平常の點に復するに至らしめる効果を生じる。然るに當今の我國に於ける如く、金の輸出が禁止されて居つたならば、輸入業者は爲替に依つて、送金することの不利なる所以を知り拔いて居つても、金貨現送と云ふ爲替取引に代る可き道の杜塞されて居る結果、依然爲替を買はなければならぬ。斯くて爲替銀行は輸入業者の此弱點に乘じて、輸入代金を決濟するに、極めて不利なる相場を立てることを難しとしない。即ち我國に於て四十七弗二分の一と云ふが如き米國宛爲替相場の從來行はれて居つた所以である。若しも金の輸出が自由であつたならば、輸入業者は斯る相場で爲替を買うよりも、直に金貨を現送する方が金貨百圓を現送することに依つて、四十九弗四分の三の支拂を果すを得るから、遙に有利と爲る次第であるのに、其輸出が禁じられて居ればこそ、斯る高い價を拂つて、爲替に依る決濟を講じなければならぬことゝ爲る。原内閣や、高橋内閣の如きは、經濟上の知識には盲目同樣であつた。隨つて金の輸出を禁止して、斯く輸入業者に負担を加へることを以つて、輸出奬勵、輸入抑制の効果あるものとし、極力之を支持するに勉めたのである。俗に白痴の一心と云ふことがあるが、政友會が金輸出禁止に固執するが如き、此諺に相當するものである。表面から見れば、輸入貿易の決濟を不利にすることは、輸入抑制に相違ないが、本來國際經濟に於ける我國の地位は如何なるものであるか。我國の製造工業の如き、近年長足の進歩を遂げたに相違ないが、同時に是等工業の需要する原料品は多く外國から輸入するものであり、其内米國に就て供給を仰ぐものゝ少なからざる以上は、今金の輸出禁止に依つて、是等原料品の輸入價格を不廉ならしめることは、我國製造工業を不利益なる地位に置き、其既製品の輸出を困難ならしめる所以たらざるを得ない。其れよりも原料品の輸入を便利にし、斯く之を便利にすることに依つて、既製品の輸出に對して加へられる障碍を除い

て、其輸出を盛大にし、我國の國際貸借に有利なる差額を現出せしめることに努力する方が全體から考へて、幾ら利益に爲るか、測り知るを得ざる次第である。然るに從來政府の爲す所は斯る自由を重んずる政策ではない、一旦收め得た正貨は金輸出禁止制度の下に、手着かずに貯へて置かう、對外債務決濟に必要已むを得ずと認めた分だけに對しては、極めて不利なる條件の下に、漸々在外正貨を拂渡す、隨つて其拂下相場を基準として、對米爲替相場をも輸入業者に不利なる點に置く、而して輸入を制限し得たと稱するのであるが、何ぞ知らん、斯く輸入の制限されたことに依つて、一方に輸出貿易に如何なる不便を加へつゝあるか、之を知らないと云ふに至つては、政府の經濟政策も餘りに短見であるとせざるを得ない。

然も從來我國の實業家が此問題に對して、何事をも述べなかつた。近頃に爲つて紡績聯合會あたりで、金輸出解禁を必要とする旨を唱へ出すまでは、實業界に何等の意見あるを見なかつたのは、要するに彼等の內に政府當局者と同じく重金主義の誤まつた信念に捉へられい金禁輸を以つて、我國に蓄積された金を維持する最良の手段であると考へる者のあつた一方に、政府の爲す所に迎合さへすれば間違はない、政府の政策に依つて蒙つた損失は何れ政府に泣き付いて、損害を償うて餘りある位の保護を與へて貰へば宜しい、其れには當事政府の言論所爲を尊重し、當局者の感情を傷けないようにしなければならぬと云ふ卑屈の考が出て來て、結局右の如く實業界全體をして有耶無耶の態度を取らしめるに至つたのである。何某が近頃政府に對して無遠慮の言を發するように爲つたとか、何某こそ實業界の所望を代表して憚らざる人であるとか云つた所で、其言論にして正しき理解に基いて居らない以上は、如何なる程度の信頼を拂つて、然る可きものであるか、之を知るを得ない。加藤內閣が依然たる呉下の阿蒙に過ぎない實業家を召集したとした所で、實業家其人の品格見識の一新されない限り、効果を擧げることは、甚だ困難であると認められる。

實業家の覺醒を要す

我國の實業家中には、政友會系の者も少なしとしない、而して政友會の積極政策を利用して、事業の擴張暴利の獲得に資した場合もあるので、旁々政友會に結んだ悪因緣の强い者もあるようであるが、原高橋兩內閣を通じて、經濟上に幾多の秕政が行はれ、其結末が往年の恐慌と爲り、今日の不景氣と爲り、不景氣の餘殃、今日に至つて尙ほ去るに至らない眼前の事實に接しては、心ある實業家は從來の誤まつた經濟政策を一掃し、新

なる政策を立直すことを希望して居るに相違ない。故に加藤内閣が本氣に從來の經濟的秕政を革新する覺悟を持つならば、實業界に存外有力なる贊成を博し、政友會の妨害位い、之を排除するに至る勢力たらしめるかも知れない。唯加藤内閣に此勇氣があるかどうか。政府の實業家會合に臨んだ態度を見ると、全然白紙であつて、何事にも意見を述べなければ、原案を示さない。唯實業家をして所見を述べさせて、之を採用するか、採用しないかの自由は政府に留保すると云ふ態度である。愼重と云へば、愼重であるかも知れないが、私を以つて見れば政府として甚だ腑甲斐ない話であつて、何故に政府は堂々自家の所信を披瀝して實業家をして之を批評せしめ、批評の取る可きものは之を採擇すると云ふ態度に出でなかつたのであらうか、私の不滿足に感じる所である。

假に政府と實業家との間に當今の經濟問題に對する理解が一致し、加藤内閣は政友會に多少の異論があつても、實業家の後援を心頼みにして、之を押切り、自家の所信を斷行する勇氣を發揮したならば、存外世間の稱讃を博するかも知れないが、此場合に實業家が何處まで眞面目に政府を援助するであらうか、又政府を援助しつゝある間に、實業家の希望を達成する道であると稱して、實業救濟に關する方策の實行などに就て、露骨なる要求を政府に致して、其實現を求めるやうなことはありはしないであらうか。實業家が政府の爲めに、或る事を爲し遂げた場合に、之に對する報酬を求めるのは、恰も東海道の雲助が酒代を強請るのと少しも異なる所はない。差し當り當面に解決を要する問題としては、海軍縮小に伴つて、民間造船業者の蒙る損失に對して、當業者自ら賠償を求めつゝあるではないか、更に外國物資の輸入に依つて、打撃を受けつゝある新興工業に對して、關税上の保護を加へて貰いたいと云ふ説が當業者の間に起つて居るではないか、實業家が政府に要請する所のもの亦敢て少なしとしない。斯る場合に政府自ら實業家に接近し、彼等の意見を聞くことを名として、其實彼等に援助を求めようとする。即ち政府自ら實業家に向つて、自己の手を差し伸べたのであつて、實業家たるもの、之を拒らない道理はない。斯くて政府と實業家と互に牽引し、共鳴し、褒合して、遂に實業家の爲めに、政權を濫用されるが如き結果を生ずるに至りはしないであらうか。實業の振興と云ひ、窮迫したる實業界の救濟と云ひ、其名は如何に美であるとしても、之を行うには、政府自ら確乎たる信念の下に、條理に適つた方策を施さなければならぬ。被救濟者の所説に動かされ、其立案に引摺られて、救濟を行うが如き、間違の根元と爲るものであつて、斯の如きは輿論を

尊重した所以であると考へられない。

政治と實業、政治家と實業家との間には、從來紛更した幾多の關係があつたが、今や加藤内閣は實業家會合に依つて、更に新しき分子を加へることゝ爲つた。是れが果して兩者の關係を清淨化し、進んで政黨政治の弊を緩和する用に供されるか、其れとも實業家を政界に跋扈せしむる機會を與へたことゝ爲るか、孰れにしても其結果に對しては吾人の嚴重なる監視を要する所であつて、政府亦會合の狀況なり、其結果なりを秘密裡に葬り去る可きものではない。



獨逸と露西亞に對する世界列強（勿論日本をも含めて）の態度の批判

獨露を何うする？

水野廣徳

暴力と譎詐の共進會

世界平和の聲は高い。吾人は熱心に眞摯に其の實現を希望する。併しながら現在世界の實情を見れば、其の言ふ處と、其の爲す處と、懸隔矛盾の餘りに甚だしきに驚くと同時に、吾人の希望を裏切ること頗る大なるを悲しまざるを得ない。今の人間は個人としても、國民としても、あまりに利己的に、あまりに我利的である。彼等の唱ふる平和、彼等の求むる平和は、人類愛と人類道とに基づく正義の平和に非ずして、自國の利益と、自國の便宜とより割出したる我利の平和である。凡そ一國内の平和が個人の相互犠牲と節制とに依つて保たれ得る如く、國際の平和も亦各國民の相互犠牲と節制とに待たねばならぬ。詐僞公許の國に於て、暴力御免の國に於て、社會の平和が保たれぬ如く、暴力が是認せられ、譎詐が慣用せらるゝ世界に於て、國際の平和が保たるゝ筈がない。世界の立て直しとも稱すべき歐洲大戰後に於てさへ、依然として強者は暴力に依つて我慾を滿たさんとし、弱者は譎詐に依つて私利を謀らんとして居る。平和の聲のみ徒に地に高くして、不平和の雲は頻りに大に動いて居る。歐洲に於て頻々として開かるゝ國際會議の如きは、唯是れ我利を目的とせる暴力と譎詐との共進會の如き觀がある。

世界の二大低氣壓

今日世界の平和を直接脅威する低氣壓の中心が二つある。即ち其の一は太平洋に、他の一は英吉利海峽に在る。太平洋の低氣壓は日米の衝突を意味し、英吉利海峽の低氣壓は英佛の衝突を意味して居る。一時世界の信號柱に「暴風雨の虞あり」との赤旗警信を揭げしめたる太平洋の低氣壓は、幸に華府會議に於

ける海軍縮小協定に依りて著しく緩和せられ、左しもに險惡を告げたる黑雲も次第に消散して、漸く晴天を見んとして居る。素より日米の反目は主として兩國民の感情的誤解に基づく海軍競爭に依つて激成せられたるもので、明かに現はれたる具體的爭因は無かつたのである。乃ち米國民は、日本が支那、西比利亞を侵略し尋で米國に、向はんとするを憂ひ、日本人は、東亞に於ける日本の正當なる發展を米國が妨げると怒つたのである。素より多數の國民中には、米國人の憂ひたる如き野心を抱く日本人のありたることを否認しないと同時に、日本人の怒る如き意志を有せる米國人のありたることも亦事實である。併しながら無知の群盲は別とし、聊か思慮ある兩國民は、日本側に在つては斯くの如き野心が一種の幻影に過ぎず、米國側に在つては斯くの如き行爲が大なる非道であることを知つて居る。殊に日米の衝突は、經濟上より見るも、軍事上より見るも、全く無意義なる共害共損に過ぎざるとは、少しく現代の知識を有する者の容易に了解し得る處である。左れば日米兩國共に本氣に戰爭する意思も決心もなく、唯感情上の行き掛りに依り互に肩を怒らし拳を握つて居たに過ぎない。とは云へ將來萬一日米の間に事ありとすれば、其原因は必ず支那と西比利亞問題に存することを疑はない。故に此の問題さへ兩國の間に正しき了解が成立すれば、日米衝突は絕對に無いと信ずる。

第二の低氣壓の中心地たる英吉利海峽は今正に暴風が吹き初めつゝある。今日尚ほ未だ狂瀾船を覆へし、怒濤岸を碎くの猛烈さは無いが、此の風は今後尚ほ烈しく吹き募り、尚ほ久しく吹き續くであらうと思はれる。數百年來犬猿相容れざりし英佛が歷史の傳統と因襲とを破りて互に手を握りたるは、共同の强敵獨逸に當らんが爲めであつた。獨逸既に倒れたる今日、兩國が呉越相惡むの舊情に復するは深く怪しむに足らない。華府會議に於ける海軍縮小討議の際の如きは、互に他を假想敵視せる有樣であつた。抑も英佛多年の反目は主として歐洲に於ける爭霸の爲めである。併しながら生死相許したる大戰纔に終り、聯合國の盟尙ほまた解けざる今日に於て、既に早くも互に啀み合ふ所以は、言ふ迄もなく前敵獨逸に對する兩國政策の相違せる爲めである。英佛兩國の對獨政策の相違は已に世界の詳知せる處で、今更事々しく述ぶる必要は無い。一言にして之を約すれば、英國は獨逸の豚を肥やして置いて其の肉を削がんと欲し、佛國は獨逸の狼を飢やして殺さんと欲するのである。共に兩國の國情より割り出したる利己的政策にあらざれば自存的政策で、泥棒にも三分の理がある如く、何れも相當の理由を有して居る。ヴェルサイユ條約が儼として存する以上、英國の寬裕政策

必ずしも人道の大義に出づるものでなく、佛國の强壓政策必ずしも我利の横暴と稱することは出來ない。故に英國にして若し眞に世界の平和と人道の大義の上に立ちて獨逸に對する寛裕政策を行はんと欲せば、先づ實行不可能なるヴェルサイユ條約を改訂すべきである。勝者の暴力を濫用し敗者に對して强制的に命令したるヴェルサイユ條約が非道暴虐にして、而かも實行不可能のものたることは世界既に定論がある。ヴェルサイユ條約の存する限り、英國の寛裕政策は縦令世界の同情と賞讃とを博するも、理屈に於て佛國の主張に敗れねばならぬ。佛國の頑迷なる强壓政策に對して世界は之を非難するも、條約に照らせば暴力の使用を是認せねばならぬ。米國がヴェルサイユ條約の批准を拒みたるは、其の理由と動機に對する評は別とし、斯かる非道なる條約の拘束より脱したる點に於て慥かに賢明なる策と云ふべきである。

瘠浪人の口論

英佛の關係はカンヌ、倫敦、ゼノア、ヘーグと會議を經る毎に、其の睽離は益顯著となり、其の反目は益露骨となつた。今後一會議を終る毎に尚ほ甚だしきを加ふるのであらう。とは云へ、英國も、佛國も、口でこそにらみ合をすれ、大戰の瘡痍尙ほ深き兩國は、恰かも上方人の喧嘩の如く、瘠浪人の口論の如く、「打ちますぜ〳〵」、「拔くぞ〳〵」で、愈となれば拳固を振り上ぐるの元氣も、刀を引き拔く勇氣も無いことは明らかである。誰かゞ愛の無くなつた腐れ縁の夫婦じやと言つたのは誠に適評で、喧嘩しながらも離れることの出來ない仲である。當人同志は夫でも宜からうが、近所迷惑、交通妨害である。英佛が啀み合へる間は世界が騷がしくて溜まらない。獨逸倒れ、露國潰えたる今日、歐洲は何と云つても英佛の天下である。兩國の完全なる協調が出來ざる限り、歐洲の復興は勿論世界の平和も望み難い。老巧にして曲線的なるロイド・ジョージと、精悍にして直線的なるポアンカレーとの外交マッチと思へば、興味大なる見物であるが、之が爲め世界が常に不安に襲はれ、軍縮反對の宣傳具に供せらるゝ如きは傍の迷惑此の上も無い。然る處兩國政策の相違は、何れも形式的なる國家體面の爲めでなく、深刻なる經濟に根據せる國民生活問題に屬するが爲め、兩國のみては到底根本的に融和合致する見込はない。左れば之が解決には獨逸に對して利害關係の薄き有力なる第三者の力を待たねばならぬのである。

豚か狼か佛國の爲に惜しむ

英國は獨逸海軍を撲滅し、獨逸の殖民地を奪取したる以上、最早や獨逸に對して何の恐るゝ處も無ければ、此の上多くを求むる必要も無い、寧ろ自國産業復興の爲めに顧客たる獨逸の回復を望んで居る。卽ち英國に取りては獨逸は豚である。時々股の肉を削げば宜いのである。之に反し佛國は聯合國の力に依りて獨逸を屈伏せしめ、ア、ロ二州を回復して四十年來の恨を霽らしたるも、しかも其の復讎を恐ること虎よりも甚だしい。國民の數に於ても、質に於ても、獨逸に一籌を輸する佛國としては無理からぬ點もある。卽ち佛國に取りては獨逸は狼である。左れば佛國としては獨逸を苦しめて永久起つ能はざるの窮境に追ひ詰めんことを欲して居る。之が爲めには佛國は獨逸に對して有ゆる壓迫を加ふるのみならず、尙ほ侮辱をさへ與へて獨逸の反抗を誘發し、之を口實として更に壓迫せんとするの形跡がある。恰かも惡戲小僧が犬の反噬を恐れつゝ逃げ〱棒を振ると等しく、佛國は獨逸の復讎を恐れながら尙ほ有ゆる手段を講じて獨逸を怒らしめつゝあるのである。獨逸に果して再起の力ありや無しやは、人々に依つて其の觀察を異にして居る。而して其の無しと云ふ者も三十年五十年の比較的近き將來に對してゞある。左れば佛國にして獨逸民族を根本的に滅亡せしめ得ざる限り、其の目的とせる獨逸の永世不起を期することは難かしい。猶太民族に對しては二千年の久しき間、歐洲諸民族總掛りを以て打滅を企てたるも遂に成功しなかつた。四千萬に滿たぬ佛國人が七千萬を越ゆる獨逸民族を全滅せしむる如きは到底爲し得べからざる處である。獨逸の回復は時期の問題である。五十年百年の後か、二百年三百年の後か、民族の歷史は永い。愛蘭民族は英國七百年の壓制を忍んで、今正に英國に向つて反噬しつゝある。一時の感情と、眼前の小利とに捕はれて、國家百年の長計と、世界人類の幸福とを念とせざるは、親愛なる佛國人の爲めに惜しまざるを得ない。

金が無ければ肉を削ぐ

今や世界は佛國の頑固に困まらされ、佛國の我執を憎んで居る。併しヴェルサイユ條約の章條を盾として馬車馬的に突進する佛國に對し、之を抑ゆるの理由と口實とを有しない。素より一度締結せられたる條約は、其の壓迫に依ると、自由意志に依るとを問はず、神聖なるべきものである。此の神聖が保たれず、所謂一片の反古として屑籠に投げ込まれては世界の平和も國際信義も保たれない。左れば佛國が獨逸に對し條約の履行を強要するのも必ずしも不當ではない。獨逸としても壓迫であらうと、本意で無からうと、兎も角も背に腹は代へられずとして、

一旦調印批准したる以上は確實に條約を履行すべき義務がある。而して獨逸は是まで大なる誠意と努力と忍從とを以て、極力條約の履行に力めて來た。流石に剛健不屈の獨逸人なればこそ、此の壓迫を忍び、此の困窮に耐へ來つたのであると思ふ。若し日本人ならば疾くの昔に破ぶれかぶれの頬被りで、此の屈辱を忍ばんより寧ろ死するに如かずとか慷慨して國を焦土と化して居たであらうとさへ思はれる。然るに獨逸は今や財政の窮乏と經濟の困難とに依り條約履行の力が無くなつた。素より條約の實行不可能は最初より判かつて居たのである。無い袖は振られず、奇術師と雖ども無より有は生じない。しかも佛國の請求は益急にして、若し金が拂へねば汝の肉を削がんと、べニスの商人の態度を執つて居る。佛國の目的は賠償金にあらずして獨逸の生命を奪はんと欲するにあることが次第に明瞭になつて來た。セークスピーヤの心は猶ほ今の人間の心である。世界の同情は獨逸に集り、佛國は軍國主義、侵略主義、帝國主義として世界の非難を蒙り、戰前に於ける獨逸のお株を奪はんとして居る。併し是れ佛國のみの罪でなく、ヴェルサイユ條約に調印したる國の共同責任である。

英佛の融和が出來なければ歐洲の回復も、歐洲の平和も望まれない。從ふて世界の安定は保たれない。英佛の融和を計る爲めには先づ其の對獨政策の一致を計らねばならぬ。然るに根本に於て相違せる英佛の政策は兩國のみにては幾回會議を繰り返へすも、畢竟水掛論で到底歸一融合する見込はない。是に於てか第三者の援助、調停若くは判決を要する。之が爲め英佛は頻りに米國を聯合國會議に引き入れ、以て其の援助を受けんと試みて居る。英佛は米國に對して何を求むるであらう？。國際貸借の關係に就きて言へば、佛國は獨逸の賠償金が取れねば英米からの借金を返へすことが出來ないと云ふ。英國は佛國其の他への貸金が取れねば米國よりの借金が拂へぬと云ふ。そこで獨逸の賠償金を輕減する爲め、戰爭に依つて生じたる國際貸借の棒引説が生れたのである。即ち米國をして獨逸に代つて賠償金を支拂へと言ふと同じ意味で、之が爲め最も損するものは米國である。米國は戰爭の爲めに數百億圓の金を儲けて居る。戰前歐洲からの借金百億圓を拂つた上、今では却つて英佛伊白等に對して二百億圓の金を貸して居ると云ふことである。併し是等の金は天から降つたものでもなく、海より湧いたものでもなく、悉く國土の物資と國民の汗との代償である。如何に「正義人道」の米國と雖ども、之だけの金を棒引することは、首を縦

に振り兼ねるであらう。振らぬのが寧ろ當然であろ。英國にしろ、佛國にしろ、自分で歐洲大戰と云ふ大芝居を打ちながら、共の跡始末に他人の懐を狙ふなどは間違つて居る。眞に歐洲の復興と、世界の平和とを希望するならば、ヴェルサイユ條約の改訂を條件として、米國と獨逸とを國際聯盟に加入せしめ、勝者敗者の差別を撤し、公明なる聯盟の力に依りて平和條約を新規に捲き直すべきである。之が爲めには佛國だらうが、何國だらうが、不條理なる要求を爲す國は聯盟より排除する位の大勇斷が必要である。若し此の決心が無くば歐洲の低氣壓は英吉利海峽を中心として、何時までも暗雲低迷、暴風の警戒を解くことは出來ぬであらう。癌は心を拔き取らねば幾らでも噴き出す。ヴェルサイユ條約は歐洲の癌である。膏藥位では利かない、大手術が必要である。

他の難問題

獨逸と共に世界の難問題は露國である。露國が自發的に歐洲戰の火蓋を切つたか、或は他國の煽動に乗ぜられて劍を拔いたかは疑問である。若し自發的に砲火を開いたとすれば、帝國主義者の先見不明である。又若し他國の煽動に依るとすれば、露國の無知は云ふ迄もなく、露國を見殺しにしたる煽動國は無情である。何れにしても露國の崩潰否な革命の直接原因は歐洲大戰である。非民主國に於て戰爭に大敗すれば革命は常に免れない。困乏の結果、露國を革命の窮境に追ひ遣つたことに對して聯合國は責任を免れぬであらう。殊に革命の動機は財物窮乏の露國をして、無理なる繼戰を爲さしめんが爲め、某聯合國の手細工に端を發したとさへ噂されて居る。凡そ國民の生きんとする叫びの前には、帝王も、法律も、銃劍も、立ち塞がることは出來ない。獨逸の革命も、露國の革命も、皆是れ國民の生きんとする叫びの結晶である。而して革命の度は常に壓迫の度に比例する。露國の革命が獨逸の革命よりも猛激なりしは、是れ兩國政治の反映である。ツアーの極端なる右の專制政治より、レニンの極端なる左の專制政治に走りたるは　ツアーの壓力に對する勞農の反動である。

聯合國の當外づれ

ロマノフ斃れ、ケレンスキイ逃れ、レニン現はれて勞農政府を組織し、ブレストリトウスクに於て獨逸と單獨講和と結び、遂に聯合國と絶縁した。聯合國は露國を以て裏切者と責め、レニンを以て獨探とさへ呼んだ。而して獨逸屈伏したる後、聯合國の矛は專ら露國膺懲に向けられた。併し前後五年の激戰に疲

れ果てたる聯合國は、直接露國に對して干戈を動かすの全力と勇氣なく、間接の手段としてレニン政府の承認を拒み、海上を封鎖して露國と一切の通商を禁斷した。大象の如く尨大なる露國と、豪膽鋼鐵の如きレニンとは、そんな事には頓着せず、共產主義の實施と宣傳とに向つて着々地步を進めた。是に於て聯合國は更にデニキン、ユーデニツシ、コルチヤックなどの反革命主義者を援助して勞農政府の撲滅を圖ると共に、有る事、無い事を誇張揑造して勞農政府の暴虐と殘忍とを世界に宣傳した。此の種の宣傳は種々のトンネルを通して我國にも盛に行はれた。然るに此等の反革命軍は勞農軍の爲めに、プツリ〳〵と虱殺しに殲滅せられ、同時に勞農露國の眞相漸次判明して中傷的宣傳も其の効なく、聯合國の目的は完全に裏切られた。爾來三年、勞農政府の基礎は益固くなつた。

何故承認せぬ？

勞農政府起つてより既に滿四年に垂んとするも、聯合國は今尙ほ露國の正式政府として之を承認することを躊躇して居る。之が理由の第一は、露國の勞農主義が聯合國の資本主義及び階級主義と氷炭相容れざるが爲めである。資本主義者に取りては勞農政府の共產主義は不倶戴天の仇敵である。階級主義者に取りては勞農政府の平等主義は蛇蝎よりも尙ほ憎いのである。故に資本主義の擁護者、階級主義の讚美者たる今の聯合國政府は主義、感情、思想の上に於て勞農露國の承認を好まないのである。理由の第二は、勞農政府の聲明したる、前政府の借入に屬する一切の外債帳消の爲めである。露國は戰前並に戰爭中に於て、佛國の約四十億圓を筆頭とし、其の他の諸國より多額の借金をして居た。日本も戰爭中の掛賣金の滯りが二三億圓ある筈である。此の借金の債權を全部承認せずと云ふのであるから主義上の議論は別とし、國際上カナリ虫の良い言分である。勞農露國を承認することは、一面に於て借金帳消しの聲明を承認することである。是れ貸金に未練を有する聯合國就中最も多額の貸金を有せる佛國が頑として勞農露國の承認に反對する所以である。

互に痛し痒し

斯くて聯合國も、勞農露國も、互に意地を張つて睨み合ふこと四年に及んだ。聯合國（就中英國）は歐洲の經濟を回復して自國の產業を進むる爲めには、豐富なる露國の原料と食料品とを歐洲の市場に出すと同時に、自國の生產品を露國に賣り込むの必要を痛切に認めて來た、併し之が爲めには從來の貸金を棒

に振つて勞農露國を承認せねばならぬ。露國も亦戰後荒廢せる國内の秩序を整頓し、窮迫せる國民の生活を匡救する爲め聯合國の物資と資本とを輸入するの必要を强烈に感じて來た。併し之が爲めには共產主義を棄てゝある程度迄資本主義を認めねばならぬ。聯合國も、露國も、共に痛し痒しで互に他の足許を覗つて居た。以心傳心相通じて開かれたのが、過般のゼノア並にヘーグ會議である。此の會議に於て、露國は前政府の借金を承認する代りに、聯合國が反革命軍を援助したる爲めに勞農露國の蒙むれる損害五十億圓の賠償を要求し、加之前政府の借金を支拂ふ爲めには先づ國内の整理を要す、之が經費として即時三十億圓の資本を借りたいと頗る高飛車に出た。聯合國は露國に誠意無きものとして折角の會議も何等得る處なく、聯合國と露國とは再びダンマリの腹藝に返つた。

勞農政府は自然の產物

借金は物質問題である。金さへ積めば問題は直に解決する。然るに主義に至つては思想と感情と利權とを加味したる精神的問題である。資本家と、特權階級と、其の擁護者と、其の迷信家とは、或は自己利權の侵害として、或は國家の潰滅として、極力勞農主義に反對し、之を排斥するが爲め、解決は一層困難である。日本が勞農露國を排斥憎惡する如きも、物質問題にあらずして專ら主義の上に在る。貪欲なる資本家や頑迷なる特權階級者が自己の弱點に省みて勞農露西亞を恐れ嫌ふのは理由がある。正しき資本家や特權階級者は何も恐れる必要はない。況して無產の平民までが之を蛇蝎視し、仇敵視するに至つては、其の理由の那邊に在るかを知らない。無產の平民たる吾人は勞農露西亞に對して何等の恐怖も危惧も感じない。元來勞農露西亞はレニンやトロツキーのみに依つて作られたのではない。極端なる資本主義階級主義政治の缺陷が生みたる自然の要求に基づく產物である。若し斯くの如き政府が永續し、斯くの如き國が榮えるならば、そこに必ず正しき道理が存するからである。正しき道理の存するものを一概に排斥するは誤りである。例へば君主國であるが故に共和國を排斥して之と交際を結ばぬと云ふは誤つて居る。若し又正しき道理が存在せぬならば、斯かる政府と斯かる國とは、自然に亡び、自然に衰ふべき筈のものである。毫も恐れるを要しない。

共和政治と勞農政治

凡そ思想の流れは水や電氣と等しく、落差の最も大なる處に向つて最も急激に流れ行くものでなる。米國の共和政治は當時

王權の最も旺盛なりし佛國に流れ込み、遂に悲慘なる大革命を惹き起した。佛國の共和政治は歐洲の帝王國に大恐慌を來し、露墺普の皇帝は從來の反目嫉視を打ち忘れ、神聖同盟を結んで共同の敵たる佛國共和政治の撲滅をさへ企てた。恰かも今日の資本家國家が聯合して、露國の勞農政府の打破に努めると同一轍である。しかも一度生れたる思想は武力や權力を以て容易に撲滅し得るものでない。三帝王の聯合權威を以てするも遂に佛國の共和政治を滅ぼすことは出來なかつた。單に出來なかつたのみならず、僅に一世紀を隔てたる今日、露國も、獨逸も、墺國も、佛國以上の民主主義國となつて仕舞つた。而して當時歐洲に於て最も危險視せられたる佛國が、今や勞農露國に對して最も强硬なる反對者なると、當時王權の最も薄弱なりし英國の皇室が、今日歐洲に於て最も安全なる君主なるとは、奇觀の好一對である。

階級主義の最も强烈なる日本と資本主義の最も旺盛なる米國とは、勞農主義の流れに對して落差の最も大なる國である。日本政府が戰々兢々として勞農主義の侵入を恐れ、過激法案などを持ち出すのも無理はない。併し法律に依つて主義の撲滅、思想の抑壓を圖らんとするは、蓋し本末を誤まれるものである。今の獨逸の如きは露國と境を接するも、落差少なき爲め勞農主義の流入は比較的緩慢であらうと思ふ。要するに政治的より見るも、經濟上より考ふるも、勞農露國の承認は最早や時期の問題である。思想に於て相容れざる君主國と共和國とが手を握り得るならば、主義に於て相容れざる資本國と勞農國との交際も出來ぬことはあるまい。要は相互の理解と尊敬とである。國土の面積に於て、人口の數に於て、世界の約十分の一を占むるスラブ民族を度外しては、歐洲の復興も出來るものでない。世界の平和も保てるものでない。

長春會議

歐洲に於ける對露交渉の行き詰まれる際、長春に於て日露の交渉が開始せられた。會議は談判の基本問題に關して既に屢停頓し、今後果して繼續せらるべきや否やさへ尙ほ不明である。新聞に現はるゝ日本側の通信を見れば、其の大部分は最初より露國の誠意に關して疑を抱いて居る樣である。斯くの如く初めより懷疑の成心を以て會議に臨み果して能く交渉の實績を擧げ得るや否やが既に先づ疑問である。日本代表は須らく虛心坦懷、光風霽月の心を以て交渉に臨むことが必要である。露國代表ヨツフェ氏は歐洲外交の大舞臺にも立ちたる俊敏練達の士である。尼港問題に對しては「外國の領土に恣まゝに兵を出した

る以上、責任は當然日本の負ふべきもの」と放言する程の大膽を有して居る。虚心に平氣に考察すればヨッフェ氏の言にも確かに眞味がある。西比利亞出兵は日本國内に於てさへ極めて非難の聲高かりしこと程、國際信義の上に於て論議の餘地ある問題である。併し交渉未定の今日具體問題に關して評論することは好まない。唯吾人は「一旦言ひ出したる以上は是が非でも日本の主張を貫徹せよ」と云ふが如き我利的愛國者に與みさない。宜しく公明なる正義に立脚して、讓るべきは未練なく讓り、主張すべきは堂々と主張し、世界に面して疚しからざる正大なる交渉を望むものである。或は相手の小股を掬ふて小利權の爭奪に沒頭し、或は緣日商人的懸引に內兜を見透かさるゝ如き小外交を好まない。保管軍需品をダシに使つて陰險なる職人的外交の小策を弄するが如きは最も避くべきである。チタ政府と云ひ、浦鹽政權と云ふも、過渡期に於ける一時の變形物に過ぎない。結局全西比利亞はモスコー勞農政府に統一せらるべきものである。然るにチタ政府とは交渉するも、モスコー政府とは交渉せず、などゝは餘りに見へ透きたる屁理屈に過ぎない。モスコー政府の全然關知せざる、チタ政府との條約が將來果して何時迄權威を有するであらう。惡くすれば日露紛議の種子を後日に蒔くばかりである。歐洲に於ては既にモスコー政府と堂々會議を開いて居る。伊太利の如きは既に露國との通商條約さへ締結したとの報がある。今日日本がモスコー政府と交渉を開始したとて何處へ遠慮する必要も無い。吾人は曖昧なるチタ政府よりも、寧ろモスコー政府を相手として交渉せんことを望むものである

今回の日露交渉に際し、露國は大臣級の人物を代表として派遣したるに拘はらず、日本政府が一局長を以て帝國代表と爲したるは、眞逆露國を輕蔑したる爲めでなく、新進有爲の適材を撰んだ爲めであらうと信ずる。今後の外交談判も亦之に倣ひ、徒に形式を重んじて老朽無能の骨董品的人物を國家の代表に任ずるの舊套を脫ぎ捨て、眞に識見ある人物を撰任せんことを希望して止まない。

結言

之を要するに、獨逸に對する不當の壓迫と、露國に對する不信任の排斥とは、自ら國土相接する兩國をして、政治、經濟、軍事の各方面に於ける攻守同盟を結ばしむるに至るであらう。兩國は旣に經濟同盟を結んで居る。獨逸も、露國も、今は資本の缺乏に窮して居る。併しながら今後の戰爭は、物資と、人力と、工業力と有れば、金は無くともヤルことが出來る。獨逸と

露國とが自暴自棄となり、獨逸の工業力と、露國の物資と、兩國の人力とを結合すれば、世界に對する大なる脅威である。彼等をして自暴自棄せざる前に、第三の大低氣壓が中歐より東亞に現はれざる前に、聯合國は獨露に對する態度を決定することが必要である。即ち獨逸に對してはベルサイユ條約の改訂である。露國に對しては勞農政府の承認である。日本政府と日本國民は率先之を唱道し、之を承認するの勇氣を有しないであらうか。窮時一飯の恩は盛時錦繡の贈物に優る、五大國の一とか、三大國の一とか己惚ながら、何時までも歐洲外交の尻馬に乘つて走るばかりが能ではあるまい。併し露國飢饉救濟事業に對してさへ、無理解なる壓迫干渉を爲す人に向つて斯くの如きを望むは、牡羊に仔を產めと云ふよりも尙ほ難い註文かも知れぬ。

（一一、九、一六。）

列強の對獨對露政策批判

（英佛の政策から日米の任務へ）

法學博士　米田　實

一

見渡す所、世界刻下の最大難問題は獨逸と露西亞とである、之が如何に處分せらるゝか、其解決策の適否如何、巧拙如何は、則ち歐羅巴と言はず、亞細亞と言はず、世界全體に於ける今後の平和と繁榮とを左右し、支配せずには置か無い重要問題である、然かも世間の「國家」（政府をも人民をも併せ見て）には不思議にも一寸前き丈け見えて一町前き、二町前きが見え無い近眼者流が多いのは、どうしたものであらう、予は此際少しく列強の對獨對露態度を批判して見度いと思ふ、

二

先づ歐羅巴から始める、今日歐洲の大國は世界大戰の二大戰勝國たる英吉利、佛蘭西である、此兩國の對獨、對露態度を比較すると、英吉利の方が寛仁な君子らしく、その政策も聰明で先見があり、無理なところが無いのに反し、佛蘭西の方は狹量な小人らしく、往々酷吏の面影があり、その政策も盲目で遠慮を缺き、無理なところが多いことを發見するのである。

斯く言へばとて予は決して英國人を君子視し、佛國人を小人視して居る譯では無い、英人をして今日の佛人の地位にあらしめたならば、恐らくは些細の相違があるとしても大體佛人の如き態度を執り、佛人をして今日の英人の地位にあらしめたならば恐らくは英人の如き態度を執り得たであらう、蓋し戰後、國家對立の姿が從前に變り無き事實と、英人も佛人も共に狹い功利主義者で、自己の利益を第一に考ふることを顧みると、予は彼等の間に左して甲乙を附するの困難なるを思はぬ譯には行か無い、

英國の對獨態度を見ると、獨逸刻下の經濟的難境に同情と理解とを有し、之を救ふ見地から償金支拂の延期及償金額の輕減を主張して居る、各民族、各國家は共存するもので相依賴し、相助けて立つものだ、獨逸も立てねば結局英國も立た無い、と言ふことを十分にのみ込んで居る如く見ゆる。昨年十二月倫敦に於ける英國首相ロイドヂョルヂ氏と佛國（當時の）首相ブリアン氏間の協議も、本年一月のカンヌ會議、最近の倫敦會議（ロイドヂョルヂ氏佛國首相ポアンカレー氏等列席）等に現はれた英國の主張は皆な之を示して居る、是れは予の大に尊敬し、共鳴せざるを得ぬところだが、然かも英國が此態度を執つたことも畢竟英國の利益と言ふことが最も重きを置かれて居ることを忘れてはならない、何ぞや、誰も知る如く、英國は世界大戰で國債總額六十六億圓より七百五十億圓に激增し、年々豫算に計上せらるゝ國債費三十四五億圓、之に軍人の恩給費を加ふると四十億圓を越ゆるゝと共に、國民の國費負擔は頗る過重となり、豫算は百億圓を越へて居る、ソコデ、一は此巨費を支辨し、一は他の戰時中の損害を塡補し、一は英國民らしき戰後の活躍を試むる意味で、彼等英人は大に海外貿易の大發展を志して居たのである、ところが英國の貿易は希望と豫想とに反して一向進まず、國内の事業は打擊を受け、昨年六月頃には二百十萬の失業者があり、本年に入つても百五六十萬の失業者があり此等は盛んに代表者をダウニング街首相官邸に送つて其救濟策を迫るし、議會でも度々、質問政府攻擊を見るに至つた、本年一月ロイドヂョルヂ氏覺書にも見ゆるやうに、英國は失業者救濟の爲め毎週二千萬圓、年約十億圓を投ぜねはならぬ有樣

となつた、何が故に斯くの如く英國貿易不振なるかと言ふと、第一に英國品の好市場の一たる人口六千萬の獨逸が經濟狀態亂脈となり、普通五十錢である可き馬克が四錢となり、一錢となり、今春は六七厘と低落したのである（最近は二厘位に下落す）、之には種々理由もあるが、賠償金支拂が大原因をなして居る、此馬克の大下落では、獨逸人が爲替相場關係から非常に高くなつた英國品を購買し得る能力を有する筈が無い、否な事獨り對獨輸出の問題のみでは無い、其他の諸國に於ても、爲替關係上、非常に廉價である獨逸品は到る所に蔓延し英國品を驅逐し、英國品を賣らんとすれば、生產費以下で賣る外は無くなつた、是に於て乎英國としては、對獨貿易の振興が獨逸の經濟生活安固を要求する上からも、又た他國に於ける對獨貿競爭の上からも、先づ今日の獨逸の經濟的不安を救ふことの頗る必要なのを感ぜざるを得なかつたのである。

之に加ふるに英獨關係は、世界大戰の結果たる獨逸の海軍全滅、世界政策放棄に依つて極めて良好となつた、英獨の競爭と嫉視とは、一九〇七年獨逸海軍法通過以後に始まつたが、今や昔年に復歸して歐大陸の所謂陸地的一國に過ぎなくなつた、左れば、海國たる英國としては最早や少しも獨逸の脅威を感せず、從つて今日殊更らに獨逸を苦しめ、其精力を枯渇せしめて將來の活躍を防ぐ如き必要も無くなつたのは言ふ迄も無い。

斯くの如き英國が同情を新獨逸に注ぎ、多少寬容政策を執るに至つたとしても、それは當然の成行と言ふ外は無いのである。

佛國は右のアルビオン島邦に比すると、大に事情を異にするのである、英國は面積十二萬方哩の處に四千五百萬の人口を有し、全國が殆んど工場化し、自ら製造品を賣つて、食料品其他を外部から輸入せねばならぬが、佛國は面積二十萬の處に三千九百萬の人口を有し、人數も少く國の工場化も少く、それ丈け海外貿易を要する程度も英國の如くで無い、殊に大戰爭の結果、佛國は特殊の事情に立つて居る、それは他でも無い、誰も知る如く佛國は戰爭中、人口四百七十萬を含む地帶、獨逸軍の爲めに荒廢に歸し、石炭坑三百二十は駄目となり、侵入地域の工場の六割若くはそれ以上損害を受け、四百五十萬英町の農地荒廢し三十萬の家屋破壞せられたので、佛國人は今や之が回復工事に全力を擧げて、多忙を極めて居り、貿易の振興は第二位に置かれて居る、失業者數の如き、僅か五萬に過ぎぬ、殆んと無しと評して善い位ゐである、左れば佛國の問題は差當りての處英國の如き貿易振興策で無くて、如何にせば最も早く國内荒廢地帶回復を進捗せしむるかに在り、之が爲めに一日も早く多額の獨逸償金を得て、此回復工事費を支辦し度いと熱望して居る、猶ほ佛

國は一九二〇年に二十八億圓、一九二一年に三十三億圓即ち合計六十一億圓を荒廢地回復費に支出したが、之も獨逸償金で塡補す可きものと信じて居る。是れ佛國が殊更らに償金を熱求しつゝある所以の一である、

次ぎに英國が海軍政策放棄の獨逸を顧慮する必要が無いのに反し、陸地相連る佛國は依然獨逸の將來を恐れて居り、其復讎戰を恐れて居る、就中目下佛國人口は毎年二十萬を減少して居り、學者の言に依ると此形勢では目下三千九百萬の人口が五十年後に二千五百萬に減小せねばならぬと言ふが、獨逸は人口六千萬を擁し且つ毎年八十萬の人口增加を見て居るから、之丈けでも佛國は獨逸を憂慮し、今日成る丈け獨逸を苦しめ、其精力を枯涸せしめ置かんと考へるのも、誰か人情で無いと言ふものがあらう、

斯く檢して見ると、英佛孰れも相當の事情がある、併しそれは情實である、單純に是非を批判すると、英國の態度が善く佛國の態度が善く無いと評するの外は無いと思ふ、

殊に吾人は佛人に尋ね度い、「佛人にして高處から見て、眞に歐洲の平和を欲するならば、寧ろ此際寛容に獨逸に對する方が得策ではあるまいか乎、現在の「獨逸精力枯涸策」こそ却つて獨逸の怨恨を買い、將來の衝突を誘致するではあるまい乎又た償金を要する事情は尤もだが、今の如き誅求策は却つて實際一層償金の支佛を困難にする丈けではあるまい乎、孰れにしても今日の佛蘭西には、大勢を達觀し、目前の小策から脫却して。佛獨間及び歐洲全體の平和策に着目する大政治家が必要ではあるまい乎」と。

三

次ぎに一轉、露西亞に對する英佛の態度はドウかと言ふと、それは恰かも獨逸に對した場合と同樣だと言つて善い、即ち英國から見ると、露西亞は世界の陸地の六分一を占め農作物鑛物、木材其他各種產物に富み人口一億六千萬を含む大國だが、之が列國交親の圈外に立ち、全然經濟的協力の圈外に立つて居ては、世界經濟の復舊が望まれず、從つて影響する所、英國貿易の發展も六箇敷い、成る程共產主義の政府は難有く無いが建立以來五年を經過し內部から未だ破壞しそうに見えぬのに、外國から干涉する譯にも行かぬ、ソコデ英國としては實際上の政策として對露妥協を希望して居る、即ち英國の對露貸金の如き約六十億圓に上つて居るが、實際何時取れるか見當附かぬ有樣だから、思ひ切つて之を減額し且つ支拂延期を許し、又た露國內の聯合國民財產權の如き、露國が共產制を執つた最近の徑路に顧み

て無理に財産其者の還附を主張せずに「その賠償」に甘んじ若くは還附の場合は共産國の面目を保たする形式即ち使用權の附與位ゐに滿足しやう、斯くの如くにして露國を歐洲列國協團に復歸せしめて、大に英國の對外貿易發展を促進することにしやうと考へたのである、又た英國として迷惑に感ずるのは、露西亞のプロパガンダである、何分英國には印度始め亞細亞の領土があり、中央亞細亞よりする露國の宣傳位ゐ厄介なものは無い、左れば斯くして露西亞の對英領宣傳を止めしめやうと考へたのである。

ところが、佛國は獨逸の場合と同じい立場に在る。即ち差當りて國内回復事業多忙の爲め英國程に對外貿易活動の餘裕も少いから、急に非常な讓歩をして迄も、露國との聯絡を講ずる必要も無い、孰れも時間が經過すれば、共産政府が沒落するに違ひ無い、佛蘭西として之を待つ方が善い、急ひで對露貸金を帳消にし或は減額するにも當らない、露國内の外人財産權も同じ道理である、次ぎに英國は印度等の關係から露國の宣傳を恐れて居るが、佛國の殖民地は地理上直接に露西亞に觸れて居らぬから、ソウ言ふ心配も無い、此點から急に讓歩して迄妥協する必要は無い、と言ふのが佛人の考へなのである、茲に於て乎、佛國は本年四月ゼノア會議の際にも露西亞に對する戰爭債權の減額若くは帳消しは許すとしてもそれは聯合國間の戰爭債權全部の減額若くは帳消しの一部としてゞなければならぬと主張した、即ち佛國の對米債務、對英債務が帳消しさるゝ場合に、佛國も對露債權を減額又は帳消しせんと主張した、此主張を實際の形勢に照して考ふると、英國は佛國其他に貸して米國から借りて居るから借金棒引に異存が無いが、貸して居る許りの米國は容易に贊成し無いのだから、此佛國案に依ると、露國借金問題の解決の期は何時に來るか分らないのである、次ぎに佛國がゼアノ會議で白耳義の固持した「在露外人財産還附」を原則とするてふ主張を支持したことは、亦た共産政治の露國に賠償とか、使用權とか言ふ名で「その體面を粧ふ餘地」を與へ無いものであつて、之れも英國の寛容妥協策とは大差あり對露交際開始を困難にしたと言はねばならぬのである、

此英佛兩國の對露態度を批判すると、矢張り對獨態度に關してのものと、同じ性質の言葉を以てせねばならない、要するに双方の事情はあるけれども、若し此等を脫却して、高處から評すると、世界平和の上からも經濟界回復の上からも、國民的寛容襟度の上からも、英國の政策が至當であり、佛國のそれが正當と云ひ得ないことを感ずるのである、

以上は英佛の政策を評した姿であるが、其他の諸國の政策、

態度を見ると、大體或は英に近く、或は佛に近い、即ち英佛は此點に於ける二大思潮を代表して居るとの感があり、予の上述の批評は此二大思潮を説いたものと言つて差支へないと信ずる、たとへば伊太利の態度は大體英吉利に近きものがあり、白耳義の態度は佛蘭西を學んで居る感ある點が深いではない乎、我日本は少くとも露國に關してゼノア會議等で佛蘭西流に傾き、殊に對露債權につきて其觀あつたことを拒むを得無いのである、今後の態度は別としても、

四

然るに此問題で英國系、佛國系の圏外に立つ如く見えて其實、非常に深い關係を持ち、その進退去就が大影響を及ぼす國がある、外でも無い、北米合衆國だ、依つて予は終りに少しく北米合衆國の義務に言及し、更らに我日本今後の態度に就ても注文を試みたいと思ふ、

米國は目下歐洲の對獨、對露問題には冷淡に構へて居る、ゼノア會議にも、海牙會議にも、其他の重要會議にも逃げを張つたのである、ところが今回歐洲の難問題の半分を解決する鍵は米國の手に藏せられて居る、それは何故乎、下の表を見れば分ると思ふ、

米國の對歐債權金額

債務國	金額	債務國	金額
英吉利	九十三億八千二百萬圓	佛蘭西	七十五億四千萬圓
伊太利	三十七億八千二百萬圓	白耳義	八億五千七百萬圓
チェック スロワキア	二億六百二十萬圓	波蘭	二億九千六百萬圓
露西亞	四億五千五百萬圓	塞爾比	一億一千五百萬圓

以上は一億圓以上のものを數へたのだが此外、諸國の對米債務は非常に多いのである。然るに今日の急務は、戰爭で多大の利益を收め、富强天下に冠たる米國が、大局を見て、戰爭債權の帳消し、棒引き若くは減額を承諾することにある、蓋し米國が先づ之を承諾すれば、英國も無論此案に同意するし、英米が同意すれば、米國に七十五億圓の債務を負ひ、英國に五十五億圓の債務を負ふて居る佛國は喜んで獨逸に對する賠償要求の輕減をも對露債權の減額をも、承諾することが出來て、今日の問題は一朝にして解決の緒に就くのである。而して米國財政家銀行家連の意見を聽くと恰かも英國が對露債權、對獨賠償要求の減額を敢てしもその對外貿易の發展を圖るを便とするやうに、大抵「米國の對歐債權問題が横る限り米國の對歐洲貿易は回復せないから、一時犧牲を拂ふて之を解決する方が、今後長き日子の貿易不振の損害に比して却つて有利だ」と考へて居る、然かも

米國の政事家連が此説に思ひ切つて同意し得無いのは、未だ米國々民の思潮が此犧牲を拂ふ心になつて居無いことを懸念して居る爲めである。殊に本年十一月の總選擧を前に控へて居るので、ウッカリした事を言つて人氣を失つては困ると躊躇しても居り、又た共和黨政府は兵士給與金問題船舶補助問題に熱心して居るので、此際對外債權の減額等は此等事項希望の實現を邪魔するならんと心配しても居るのである、併し予の所見に依ると、此際大切なのは、富國たる此米國が大に義心を發揮し（然かも之れは貿易關係から、結局自分の利益となるのであるから）、戰爭債務棒引に歩を進めて、獨逸及び露西亞に關聯する世界の難問題を解決するの一點に在ると思ふ、斯くすれば、米國は世界の賞贊と感謝とを博するばかりで無く、今後久しきに亘りて勘定すると、對歐經濟活動の順調より生ずる自身の利益に依つて一時的損失を償つて餘りがあるだらう、知らずハーデング大統領に此決心が出來るのは何時だらう乎、彼等米人は「米國の行動は餘り利己的で、然かもそれは目前の小利に迷ふのだ」と言ふの批評を免れやうとはせぬであらう乎。

若しそれ我日本の態度に就ては、予は茲に多く言ふを欲しない、對獨問題につきては日本は問題とされず、對露問題では目下長春會議が開れてヨッフエ、ヤンソン對松平、松島交渉が進んで居る最中だからである、併し大體、對露債權に就て、佛蘭西の後塵を拜した許りで無く、曾つて劍を以て思想と戰ふの愚なる考へからセミヨノフ等を助けたことがあるので、對露干渉の熱もウランゲル等援助の佛國と同樣と思はれて居るのは、疑惑を容れ無い、今や加藤内閣新たに成つた折柄、冀くは此惡雰圍氣を一掃し度いものだ、露骨に言ふと、對露債權などは矢釜しく言はず、西伯利政策でも帝國主義の匂ひあるものは全然放棄し、他國に先たちて通商關係を造り、我が經濟的活躍の地盤を早く富源無盡藏の露領亞細亞に確立するが善い、此點で獨逸の對露政策など、大に參考とすべきものがある、日本も是と信ずべき新策あらば、何時も他人の足跡ばかり履まず、自ら先んじて之を行ひ、他人をも之を學ばしむる位ゐの決心が欲しいと思ふ、

國家的利己心を超越せよ

林癸未夫

一

たとひ戦略的であるにもせよ、勞農露國の資本主義への退却は、明に今日の世界の經濟關係を以てしては、或一國だけが獨立して共産主義の如き特異の經濟制度を施行することが不可能であることを立證するものである。固より此事は勞農政府自身に取つてすこしも意外なことではなかつた。彼等も之を豫想してゐたればこそ、一時盛に列國の無産階級に對して赤化的宣傳に熱中したのであつた。彼等の企圖はいふまでもなく、各國のプロレタリヤを驅つて、資本主義撲滅の革命を擧げさせ、露國と同一の若しくは小くとも露國と同情を以て結び付き得る程度の新政府を組織せしめて勞農露國に對する列國の攻撃的政策を終熄せしめ、以てプロレタリヤ獨裁政治の基礎を固くしやうとするにあつたのである。併し彼等の此企圖は、一時侮るべからざる効果を示したけれども、終に彼等の希望したやうな効果を擧げることができずに了つた。(少くとも今日までの所では)其理由としては列國の現政治組織を支持する所のブルジョアの潜勢力が豫想されたよりも根强かつたゝめばかりでなく、各國のプロレタリヤ其者の多數も亦勞農露國に行はれてゐるやうな政治組織や經濟制度が、果して彼等を眞の幸福に導く所以であるかどうかに就て甚だ懐疑的であつたゝめである。かくの如き他國のプロレタリヤの不決斷な態度は勞農政府を焦燥せしめて、功を急に收める一手段として第三インターナショナルを創立し、各國の革命的プロレタリヤを糾合して、世界の勞働運動の政治的分野を截然二分しやうと企てしめるに至つた。成程これは彼等としては當然の戦略であつたかも知れない。併しながら彼等が第三インターナショナルに據つて、彼等と擲ふ所を一つにしない各國の勞働團體――それは概ね第二インターナショナルとして結束されつゝあつた――に對して放つた所の攻撃的態度が餘りに苛烈に過ぎて、冷嘲熱罵至らざる所がなかつたゝめ

に、彼等は其共鳴者を多くするよりも、却て其反感者を多くし、彼等に對して窃に同情を寄せてゐた者又は機を見て彼等の麾下に馳せ參じやうと考へてゐた者までも、彼等に背いて去るやうになつた。乃ち勞農露國は政府としては列國の資本主義的勢力によつて迫害せられ、革命團體としては列國の勞働階級から疎隔せられ、世界赤化の大計畫は、到底はか〴〵しく進捗する望みのないことが次第に判明して來たのである。

かくの如く對外關係が行詰まると同時に對內關係も次第に窮迫を告げて來た。それは主として國民の生活資料の缺乏から來る不平に原因してゐた。國民の四分の三を占める農民等は先づ其共產的農業政策に反抗し、自家の收穫を公共の倉庫に提供することを肯ぜなかつた。交通機關の夥しい破損、機械の故障及燃料の不足に原因する工場生產力の激減は、外國貿易の杜絕と相俟つて國民の生活をいやが上にも疲弊困憊に陷れた。而して之を救濟するの途は唯一つしかなかつた。それは即ち資本主義への退却を條件として列國と妥協することであつた。いひかへれば、內に對しては個人經濟を或程度まで復活し外に對してはボルセビズムの宣傳を放棄し、且外國資本の利益を尊重することを誓約することによつて、列國との通商を再開すること之であつた。

彼等は既に主義としては此退却を以て戰略上已むを得ざる方便と認めてゐる。併しながら退却は固より降伏ではない。從つて彼等は內に對しては出來るだけ資本主義的活動の範圍を局限し、外に對しては出來るだけ自國の政治的及經濟的犧牲を少くしやうと試みる。之は彼等としてはさもあるべき筈である。然るに他方に於ては、英佛獨を初めとし、世界の各國は何れも速に露國との通商再開を希望してゐる。最もボルセビズムを敵視してゐる米國すら此點に於てはやはり同一である。それは露國民を愛するがために然るのではなくして、自國の利益を欲する念慮に出づることは言ふまでもない。目前一億萬の大國民が約七八年の長きに亘つて物資の缺乏に苦み拔いてゐる。彼等の外國品を渴望してゐることは所謂大旱の雲霓以上である。從つて眞先に彼等に自國の生產品を賣付けることのできる國ほど莫大な利益を收めることができるのであつて、之によつて自國の產業は復興し、失業問題は解決せられ、經濟界は好況を呈し、生活難は緩和せられるであらう。此利益は各國とも善く之を承知してゐる。唯併しながら各國の憂ふる所は露國に賣つた品物の代價を如何にすれば間違ひなく回收することができるかといふこと之である。各國は此一點に於て未だ意を安ずるに足る程の妙案が浮ばないがために、又は浮んでも露國が、誠意を以て

之を實施するかどうかの見定めが付きかねるために、只困つて露國との通商を開きかねてゐるのである。折角締結された英露の通商條約が一向其効果を顯はさないのも亦このために外ならない。

要するに痛し痒しとは目下の列國と露國との關係に適切に當てはまる言葉である。一方は痛いから藥は欲しいが藥代の支拂を保證しない。一方は痒いから搔かせたくはあるが先方の手に附いた黴菌が恐ろしい。此方が先づ其手を消毒して來いと言へば、他方がそれでは藥代を負けてくれるかと言ふ。こんな押問答がゼノアで行はれ、ヘーグで行はれ、今又長春で繰返へされつゝある間に、一億の露國民は物資の窮乏と飢饉とによつて毎日何百人かづつ斃れて行き、列國の失業者と其家族は空腹をかゝへて呻吟しつゝあるのが、目下の現狀である。相互に先方を救濟すべき手段を有ちながら其實行を躊躇してゐるのは、畢竟彼等の國家的利己心が然らしめてゐるのである。

二

休戰當時赤化しさうに見えて其實黃化するに止まつた獨逸は、其後次第に色が褪せて、今や辛うじて淡黃色を維持することによつて僅に白色と區別することができる程度になつてゐる。彼等の國內に實施しつゝある、社會主義的立法も、元來不徹底――體良く言へば穩健――であるのに、それすら停滯して一向進捗しさうにも思はれない。首相は既に何代か社會民主黨以外の有力政黨から出で、エルツベルゲルもラテナウも中央黨出身であつたのに、彼等の暗殺によつて共和政治の危機を叫ばなければならぬほど、社會民主黨は既に政治界に於ける中心的勢力としての地位を失墜してゐるのである。從つて目下の獨逸に於ては、共和政治を維持することが關の山であつて、革命當時豫想されたやうな社會主義的施政などは理想としては、放棄されなくても、實行に於ては今や甚だ縁遠いものになつてゐると見て差支ない。よし又假令幾年かの後に社會民主黨と獨立社會民主黨の連衡が成立つて、國民黨や中央黨や民主黨を反對に廻はしても、克く其政權を維持し得るやうな時節が到來したとしても、彼等の取るべき政策は恐らく黃色の範圍を出でぬであらうといふことは、ベルンシュタインやカウツキーのかね〲主張してゐる言論によつても察することができる。彼等は學者であるだけに萬事が究理的であつて、論理を無視して、無鐵砲な藝當を演じ得る程の熱情を有つて居らぬ。彼等の革命的感情は露國の共產主義者に對するよりも、英國の勞働黨や佛國の右翼社會黨に對してヨリ多く共鳴する。しかも此共鳴は彼等に對

するレニン等の總括的な罵倒によつて一層切實にされた傾きがある。從つて英國や佛國の政治家は、自國の社會主義者に對して恐怖せねばならぬ程度以上に獨逸の社會主義者を恐怖せねばならぬ理由を有せないのである。

此故に列國のブルジョア政府は露國と接觸する場合には、ボルセビズムの黴菌が自國に傳染しはせぬかといふ危險を甚しく恐怖してゐるけれども、獨逸に對してはさういふ危險をすこしも感じてゐない。それと同時に、列國は露國に對しては自國の生産品の顧客であることを内心切りに希望してゐるけれども、獨逸に對しては寧ろ自國が餘りに多く獨逸品の顧客であることの危險を警戒せねばならぬ立場に在る。從つて列國の獨逸に對する目下の關係は露國に對するそれとは全く性質を異にするものであつて、其關係は形式的には賠償金問題、實質的には獨逸の復興問題に集中されてゐると見て可いのである。

獨逸から出來るだけ多くの償金を絞り取りたいといふ點に於ては聯合國の意向は一致してゐる。唯各國の意見の相違する所は、太く短く取るのと、細く長く取るのと、結局どちらが餘計取れるかといふ算盤勘定の上に在るのである。聯合國から見れば、獨逸の支拂能力を實質以上に評價することも實質以下に評價することも、共に自國に取つての損害を意味することは分つてゐる。唯佛國は英國よりも之を高く評價し、英國は佛國よりも之を低く評價するだけの相違である。併し反對に獨逸から之を見ると、自國の支拂能力を出來るだけ低く見積り値切れるだけ値切り、あわよくば踏み倒せるだけ踏み倒すことを以て自國の利益とするのである。さうするがためには自國の現狀を出來るだけ悲觀的に吹聽することが必要な一方便となつて來る。產業は萎靡振はず、生活難はます／＼加はつて、國民の疾苦測るべからず。之をしも尙誅求して息むことを知らざれば、結局過激思想家の煽動其効を奏して、獨逸は赤化するの已むを得ないに至るであらう。若しさうなれば露獨の二大共産主義國は連衡して英佛二大資本主義國と對抗の陣を張ることになる。さうなれば獨逸の科學と機械とは露國の土地と原料とに結合して、其處に拔くべからざる一大勢力を建設するであらう。之こそ英佛兩國に取つては最も恐るべき事態ではないか。と明らさまに放言はしないでも、獨逸政府は此手を以つて間接に英佛兩國を威嚇しやうと試み、又此威嚇は確に相當の効果を收めてゐると見られるのである。現にゼノア會議の最中に發表された露獨條約の締結の如きは、確に列國の肝膽を寒からしめたのである。

併し事實に於ては、前に述べたやうに、目下の獨逸が赤化することの可能性は極めて乏しい。假令共産黨が機を覗つて事を

擧げても、獨逸のプロレタリヤの大多數は彼等に加勢して起つには餘りに理智的であつて、結局露西亞式の革命は獨逸に於ては成功し難いものと私は信じてゐる。之には反對論があるかも知れないが、いづれにしても近い將來に獨逸に共產主義者のデイクテーターシツプが實現しやうとは何人にも想像されない所であらうと思ふ。從つて目下聯合國が獨逸に怖れる所は其プロレタリヤの勢力よりも寧ろ其ブルジヨアの勢力にあると見るのが至當である。言ひかへれば聯合國は獨逸の經濟的活動が、科學的文化が、國民的勢力が、聯合國の豫測するよりもヨリ速に恢復しはすまいかといふことを怖れてゐる、佛國の如きはヒステリー的と名けても可い程に此點に畏怖を感じてゐるやうに思はれる。此畏怖は全然根據のないものではない。現に獨逸を支配しつゝある中心勢力は、次第にプロレタリヤ分子からブルジヨア分子に、學究的社會主義者から、實行的資本主義者の方へ推移しつゝある傾向が認られる。帝政復活運動の如きも意外に潜勢力を有するやに察せられる。此意味に於て獨逸も亦資本主義への退却を行ひつゝあると言へる。少くとも社會主義への前進を停止したことだけは爭へない。これは政治的には英佛政府に取つて滿足な狀態に相違ないけれども、餘りに獨逸が資本主義的に活動し過ぎることは經濟的に英佛の脅威を感ずる所である。獨逸を餘り酷い目に逢はせ過ぎて赤化されても困るし、さりとて餘り寛大に取扱ひ過ぎて國民的復興が迅速に行はれることも恐ろしい。卽ち其中間に獨逸に取りて成るべく都合が惡くて、聯合國に取り成るべく都合の好いやうな地位に、獨逸を居据はらせて置かうとするのが英佛の方針と見るべきである。從つて佛の太短主義も、英の細長主義も、要するに國家的利己心の表現に外ならないと私は信ずるものである。

三

國家的利己心は個人的利己心又は集團的利己心と同じ樣に、全體としての人類の社會生活の向上改善を妨げる一つの原因である。玆に所謂集團とは、一勞働組合、一政黨、一階級、一民族、一人種其他あらゆる因由から生ずる所の人間の集團を意味するのであつて、國家も亦其中の一形態に外ならない。又玆に利己心といふのは、手段は消極的にもあれ、積極的にもあれ、自己の利益を獲得し或は慾望を滿足せしめるとが、必然的に他人の利益を侵害し、或は慾望を破壞するやうな結果を伴ふことが明白に意識されてゐるに拘らず、其意識によつて自己の行爲を抑制することのできぬ心理狀態を指すのである。自身が公正なる第三者として判斷する場合には、甲の慾望が餘に過大であつ

て、乙の當然の利益を犧牲にすることなしには、之を充たすことのできないやうな要求であることが明白なるに拘らず、自身が偶々甲の位置に在る時には、其の利己心は直に理性の上に働いて、何等の反省自制もなく、不公正な要求を相手方に强ゐるやうなことを平氣で行ふのが人間の常態である。かくの如き利己心は小は一家庭内に於ける個人として、大は國際關係に於ける一國家として、間斷なく人間の社會生活を支配する一大原動力を爲してゐることは疑はれないのである。併し之を過去の社會進化の歷史に徵するならば、此利己心も人間社會の比較的小なるものから比較的大なるものに向つて次第々々に制限されて行つた傾向を明に認めることができる。例へば人間の社會生活の最小單位たる家庭に於ては、其肉親の間に存する自然の愛情は、相互の物質上に於ける利己心を制限して、快く自己の所有を他の成員に對して解放するやうな習慣を眞先に養成した。次に利己心の制限は近隣の他人に及び、一部落、一都市、一藩に及び、やがて一國家の廣さにまで及んで行はれるやうになつた。勿論利己心は是等の範圍に於て、幾分かづゝ制限されただけであつて、決して放擲されたわけではないけれども、併し今日の社會生活の安寧を保持する必要から、種々なる形態に於て吾々が當然の義務として自己の利己心を制限することに同意しつゝあることは爭はれない事實である。例へば家庭に於て戶主が家族に對し扶養の義務を有するが如き、或は國家及公共團體に對し吾々が納稅の義務を有するが如き、或は兵役其他の公共義務に服するが如き、或は私法上に於ける他人の權利を尊重する義務の如き、或は工場法令を以て個人間の雇傭契約の自由を束縛するが如き、皆之吾々の承認したる、利己心の制限と認むべきものである。之は今日の國家に共通の現象であつて、殆ど例外を認めることのできないものである。尤も等しく國家といつても、比較的社會道德の進步した若干の國家に於ては、右の如き立法的手段を以てする利己心の制限以外に、國民相互の同胞觀念から出でた單なる習慣によつて、自然に利己心の制限が行はれてゐる例が澤山ある。我日本の如きは遺憾ながら此點に於て甚だ劣等の地位に在るけれども、歐米の第一流國に於ては、民衆が何れも忠恕の道を解して、多人數混雜の場合にも決して自己の便宜のために他人の利益を傷けないやうに心かける習慣の發達してゐることは、一度歐米の地を踏んだ者の、悉く感服せざるを得ない所である。併し此民衆道德の未だ幼稚な人類の間に於ても、とにかく彼等が一國家の成員である以上は、其國家の範圍内に於ては、不充分ながらも種々なる形態に於て、個人として又團體として、其利己心に制限を受けてゐることは疑ひ

ない事實であつて、之なくしては今日の國家なるものは忽ち土崩瓦い壞を免れことは言ふまでもない所である。

然るに現代に於ける人類の利己心は、國家といふ範疇の内部に於いてのみ制限されてゐるのであつて、一度此範疇を超えると忽ちにして赤裸々なる利己心を呈露して怪まぬ狀態に在るのは、何といふ悲むべき事態であらうか。一國家内に於ては、個人と個人との間若しくは團體と團體との間に嚴に禁じられてゐる樣な行爲、例へば强迫、詐欺、腕力的制裁の如きが、國家と國家との間には當然の事として許されてゐるといふことは、畢竟人類全體としての社會生活意識が未だ啓發されていないためであり、從つて人類全體としての社會生活組織が未だ極めて不完全なるに因るものである。例へば英國の如きは、一國民としては、個人的にも團體的にも比較的に利己心の制限の良く行き屆いた國であるけれども、國家的利己心の旺盛なる點に於ては決して他國に譲るものでないとは、英國外交史が能く之を證明してゐる。英國ですら尙且さうであるとすれば、他の諸國に於ては一層さうだと言へる。今日の各國の外交政策なるものが悉く國家的利己心に支配されてゐることは明白なる事實である。併しながら此國家的利己心なるものが、人類全體の幸福といふ觀察點から、如何に愚劣なるものであるかを理解するがためには、日本及支那の戰國時代、又は統一前の獨逸及伊太利を回想するに如くはない。是等の諸國民は本來同一民族でありながら、互に敵意を挾み、憎惡に燃えつゝ、鎬を削つて相戰つた時代を有つてゐるのである。彼等が若し今日の統一された一國民として過去を顧るならば、蝸牛角上に同胞相殺傷した往時の人心の偏狹さを訝からざるを得ないけれども、過去に於てはそれが彼等に當然の道德でもあり、又義務でもあつたのである。即ち彼等の利己心は己れの屬する一藩内に於ては相當の制限を受けたければならなかつたけれども、他藩に對しては無制限に其利己心を發揮して、殺傷、放火、掠奪、汚辱、縱に之を遂行することを毫も恥となしかつたのである。

過去の戰國時代又は内亂時代の狀態は即ち其儘今日の國際關係に於て示される所の狀態である。多少形式的に差異はあるにしても、各國が利己心に支配されて、他國の利益の犠牲を更に意としない點に於て、何等過去の戰國時代、内亂時代と選ぶ所はないのである。かくの如く列國が國家的利己心に支配されて敢て自責を感ぜず、自制を必要と認めない間は、人類全體の上に眞の平和は來ないのである。眞の幸福は來ないのである。

さうは言ふものゝ、私は決して人類の前途を悲觀するには及ばないと思ふ。吾々の利己心が過去數千年の間に、次第に小社會

單位から大社會單位の範圍に制限されて來て、今やそれが國家の廣さにまで及んでゐる以上は、やがてそれが何日かは國家の障壁をも超越して、世界全體の上に制限されるべき日の必ず到來すべきことを信じて好からうと思ふ。吾々人類は挙つて此理想に向つて猛進しなければならない。

世界救濟の鍵を握る米國の反省

文學博士 三宅雪嶺

昔ペリクレスの策が行はれたならば、ペロポンネサス戰役が起らず、延いて希臘がマケドニアに征服されず、勢、羅馬に征服されなんだらうと云はれるが、策が行はれなんだのか、策を行ひ得なかつたのか、行はれても、ペロポンネサス戰役を免れたなんだか、又は初めから此邊に考へ及ばなかつたか。孰れにしても、盛んなる希臘が衰るの已むを得ない次第になつた。十九世紀のビスマルクは、ペリクレス以來の大政治家と稱せられたりしたが、其の爲す所が、後より顧みて如何であるか。佛國より償金二十億圓の外、二州を取つたのは、軍閥に迫られたが爲めと云ふが、何處までも佛國を敵とするの方針を定めた。露國と仲違ひしたり、英國と仲違ひしたりするのを不得策とし、將來の爲に憂へたのは、斯くては事が六つかしくなると云ふのであつて、畢り鋒先を佛に萃めるの意に於てする。佛が豫定より早く償金を拂ひ、餘力あると知れたので、早く再度の打撃を與へねばならぬとした事があり、實に佛國を敵とするのが外交方針であつた。

若しビルマルクが一層目が利いて居つたならば、尚ほ其の方針を取つたか何うか。佛では償金を多くしても、二州を割くまいとした。二州を取るについて、獨逸側にも理由があり、前に佛國が之を奪つたからと云ふ所もあるけれど、償金を多くし、獨逸の財政を豊にし、産業を盛にし、平和的に世界に發展したらば如何であらうか。即ち前に墺國を打ち、次いで之と和するに努

めた如く、佛國を打ち、次いで之と和し、成るべく國境の防備を減じ、鐵道を通商本位にしたらば、何うであらうか。いよいよ休戰を決する時、巴里より最後の大砲を打たしめた。更に進んで開戰は帝政時代の政府の失策に出たのであつて、今後再び恁かる事を繰返すまいとて、出來るだけ和親に心掛けたならば、歐洲の形勢を變じ得たでないか。自尊心の强い佛國に打撃を與へ、再度の開戰の準備を專にしては、平和の保障の仕樣が無い。再度の打撃を與へ、事實上、佛國を亡し得たならば、一先づ事が片着くやうなものゝ、それもオイソレと行かず、それ相當の準備を要するとて、準備に取掛つては、佛國で根骨髓に徹すると云ふ事に成らずに居れぬ。佛の人口增加せず、獨の人口增加し、數十年間に隔りを生じ、佛は殘念ながら之と戰ふを憚つたが、機會だにあらば眼に物見せてくれようと考へて居り、獨逸は勿論之を承知の上の事は、何でもするがよい、我兵力を遮るべき何物があるかと云ふ調子である。獨逸參謀本部で秘密に計畫し、白耳義を通過し、迅速に佛國を叩きつけ、轉じて露國に向はうとした。事は秘密ながら、自づと氣振りの見える所があり、獨逸の首相が白耳義に行つた時、迎の者が、御忙しからうと云ふのは、開戰準備の意味であつて、首相も笑つて話を紛らした。當時の參謀總長が生存して居つたならば、獨逸軍が一事有效に戰つたらうが、是に先じて歿し、新總長で思はしく捗ばぬ所がある。强いて前の計畫通り、佛に侵入しつゝ、一部を割いて露軍と戰ひ、何れにも最初の計畫と齟齬する所があつた。若しカイゼルが眼の利いたならば、其の齟齬した所で、損しても講和に取掛るべきであつた。齟齬したとて敗けたのでなく、思ふやうに勝ち得なかつたのである。英國は既に參加して出兵したけれど、準備が整はず、カレー方面に控へて居る。伊國は未だ參加せず、米國は勿論の事である。幾許かの損失を忍んで講和する事にしたならば、事が纒つたらう。唯、國內では必勝を期し、中途で講和するなど思ひも寄らず、講和するならば必ず事變が起りさうであり、講和しやうとしても出來なかつたらうが、其處が能力の足らぬ處である。既に講和し得ぬとあつては、佛國の復讎を被るは避く可からざる勢である。

佛が四年半も支へ得るとは、獨逸側で想像する事も出來なんだ。今一息押付ければ何うにかなると思ひつゝ、延び／＼になり、自國の疲弊いよ／＼甚だしく、遂に何うでも始末に終へずカイゼルが都に歸る事が出來ず、和蘭に逃げねばならなくなつた。斯くなつては、佛國で思ふ存分に復讎せずに居れぬ。勝負の分らぬ間、深く考へないが、既に勝つたとなつては、敵の惡居を思ひ出し、片々から復讎したくなる。獨逸軍が白耳義を通

過し、佛國に雪崩れ込み、亂暴の仕たい放題したのに對し、何うして腹癒せしようかと考へ、如何なる事をしても差支へないやうな氣になる。曾て繁華な土地が、火事の燒跡より荒れて居り、逃げて來た老人・婦人・小兒等、散々の體たらくである。ヴエルサイユ會議で、ウイルソン氏が正義人道を繰返し、クレマンソー氏が戰禍を蒙つた國ならで分らぬ事あると云ふたのは、事實其儘に出でゝ居る。佛國では何と云ふ事なしに復讐を當然とし、何を爲ても差支へないやうに考へる。實際損失も大きく他と較べものにならず、加ふるに復讐心の燃え上つて居るので成らう事ならば、獨逸全國を馬蹄で蹂躙したいのである。列國の手前、左うも出來ず、控へ得るだけ控へるが、獨逸人が何程疲弊したとて、左ういふ事で遠慮する餘地が無く、態見ろ、取れるだけ取つてやると云ふ事になる。

所が獨逸は疲弊の極、全敗に終つたが、國内に兵を蒙らず、弱くて敗けたと云ふ心持にならぬ。兵に於いては獨逸が第一であり、戰勝國顏をする者とて、獨逸に倣つたのでないかと云ひ、平伏しようとせぬ。若し聯合國が戰時同樣に歩調を一にしたならば、獨逸側で云ふがまに〳〵從はねばならぬが、講和と共に利害關係で離れ、歩調の亂れるを免かれぬ。佛國にしては復讐戰の爲めに最後まで戰つたのであつて、獨逸を眼の敵にするは云ふまでもない。半世紀前償金も拂ひ土地もやつた。これより遙かに大なる戰役で、償金を取り、土地を取り、何の憚るべき事あるかとする。併し佛の云ふやうにしては、獨逸が疲弊より恢復しやうが無く、恢復せねば貿易の途が思ふやうに開かれず、剩へ、獨逸では餘儀ない場合に、露國と結托するが何うかと云ふ態度を示す。

英國では曾て獨逸が頻りに競爭し來り、之を防ぐに苦しみ、佛と露とが獨を挾撃するに乘じ、之に力を貸し、競爭の相手を叩き落さうとしが、いよ〳〵叩き落して見れば、之を追窮するに及ばぬ。大きな事を云ひ振らしたカイゼルも最早や位に居らず、當時の政府は仆れ、軍閥も力が無い。償金は拂つて呉れゝばよけれど、拂はなくても深い憎しみと云ふものが無い。好い頃に國交を暖め、平和的事業で利益を得るやうにしたいと考へる。佛國で何處までも獨逸から搾取らうとすれば、英で急に贊成せず、少くとも煮え切らぬ形になつて居る。英國は戰時中最も多く金を費し、爲めに疲弊したにしても、戰爭の禍を蒙らず、且つ太陽の沒しない、領土を有し、何でも彼でも獨逸から取立てねばならぬ事はない。佛國より餘力多く、佛を制するに足るけれど、講和會議の結果、波蘭、チエツコ・スロヴアキア、ユーゴスラビヤ等の小協商國と云ふものが出來上つて居る。大抵

獨墺のある部分を含んで居り、獨逸の勢力の増すと共に、危險を感ぜずに居れぬ。自ら國家の形を具へるには、獨逸に脅かされぬやうにせねばならず、それには、獨逸が國力を恢復し得ぬ程、疲弊して來れるに如くはない。何時までも疲弊するのを望む譯に行かぬならば、自分の地位の鞏固になるまで、國力の増さぬやうに望み、そこで佛國に贊成するに傾く。佛國だけでは兵力を以つて進むと云ふても、英國で餘り相手にならず、進むなら進んで見るが好いと云ふ調子に出で、輕々しく進む譯にも行かぬが、小協商國が獨墺の背面に居り、佛と呼應し、英國に、盾衝いては、英も考へずに居れぬ。巴爾幹半島も大切であり、土耳其から埃及、メソボタミヤに對して隨分面倒が多く、兵力に乏しいとて爭はぬ譯に往かぬ。現にメソボタミヤに出兵し、三十幾億圓を費しながら、何の得る所が無い。小協商國が多く佛國と倶にし、獨逸の勢を摧からうとするに對し、英國は處置に苦しんで居る。それと云ふて佛國の爲すが儘に委せば、獨逸が何の狀態になるか知れず、露國と結托して共に反抗の度胸を据えたならば、騷ぎは何時收るか知れぬ。

露國に至つては、戰時中に革命が起り、初め敵としたのは、後に敵でなく、初め味方としたのが、後に味方でない。革命前の政府が消滅し、其以後の政府を相手取つて談判しても、急に纏るべくも無い。敵でもなく、味方でもなく、普通の國際條規に當て篏らぬので始末が惡い。從來とても國際關係は恃み難いとあつても、金の貸借の如き、何處までも履行し得べきものとして居つたのに、革命前の事は知らぬ、普通の貸借關係を認めないとあつては、取付く島が無い。兵力を以つて強制せば、何うにか成るらしくて、いよ〳〵何うすれば好いかゞ分らぬ。莫斯科に兵を入れ、政府を押へ付ければ、何うでも云ふ通りになるかと云へば、左うでもない。それも聯合國が一致すれば、一時なりとも片着くとし、迚も聯合國が一致しさうもない。誰か何うして兵を動すか。レーニン氏に逼つて何を云ひつけ得るか。露國民がそれで承知する位ならば、革命も何も起らなかつたでないか。

それで露國は手を着けず、捨て置けば可いかと云ふに、今日こそ疲弊の極に陷つておれ、廣い領土內富源の開發すべき希望あるものが頗る多い、前に借りられるだけ借り、佛國の如き、同盟の故を以て、政府の保障で募債に應じたのに、悉く借金を踏み倒すとなつては、開いた口が塞がらぬ譯であり、何處までも債務を負はしたいけれど、左う許り云つて居つても果てしが無い。レーニンは初めの計畫の齟齬し、いくらか私有財産を認め、更に經濟を國際間に共通にするに傾かうと察せられるが、左う

察しても事實になるかは分らず、事實になるまで待つて居つては際限が無く、之に先じて何とか資本を入れ、富源を開發するやうにしては何うかと云ふやうになる。資本を卸して富源を開發するのはよく、其資本を露國で認めず、悉く共産としては何うなるか。國内人には共産にし、國外人には所有權を認めると云ふやうな事は、爲し得べきものか何うか。それまでには共産主義にも變化を起さう。共産では民衆が努力せず、折角水力電氣を普及しても、それで工業を起すまで働かぬので仕方がなく、矢張夫れ相當に私有を以て奬勵せねばなるまいと云ふが、なるまいと云ふたとて、成るか成らぬかゞ分らぬ。

然し其儘にして居つても仕方無く、何とか話しを付けねばならぬとは、双方で考へ及ぶ所に繋かる。國内に對しては政府の爲す所に委せ、國外に對しては、關係國と協議の上、成るべく其關係國の是認する所に依る事にするか、露國でも脊に腹は代へられぬ狀態であり、他の國々でも世界陸土の六分の一を占むる大露西亞を其儘にして置く氣に成らぬ。勞農政府で世界を赤化し得ると考へても、急に思ふやうに成らず、世界を一樣に看做す譯に往かぬと氣付き、内外を區別し、折衷案で落着くやうになりはせぬか。即ち他國で勞農政府を承認し、其代りに或る條約の下に締結する所、他國人の所有權を認めるやうになりはせぬか。互に別れて居ればこそ話が難くなれ、相會合し互に云へるだけ云つて見れば、何處かに落着くであらう。現在の主義を捨てねば政府を承認せぬと云ふのも、力の及ばぬ他國にも共産主義を是認させやうと云ふのも、自分丈けの議論であつて、他人は承知する事が出來ず、斯くて何時までも世界陸土六分一が、取殘しになると云ふのは、彼の國にも不利益であり、世界にも不利益である。若し勞農政府で他國の所有權を認めるならば、世界を赤化すると否とは、それからの問題である。他國に於て露と等しく共産を認めるか、何處までも之を認めないか、或は異なる主義を以つて立つに至るか、互に出來るだけの事を爲るがよい。それで人類の智能が增進し得るのである。

それにしても、歐洲列國は始終米國の力を藉らねばならなくなつて居る。既に二百億圓の債を負ひ、今後更に依賴しようとして居る。米國が何故に聯合國に參加し、獨墺と戰つたか。正義人道の爲めならば、獨逸が白耳義の中立を破つた時に於て爲すべきであり、自國の利益の爲ならば、賠償金の要求に與るべきであり、分つたやうで分らぬ事、猶ほ露國の分らぬやうで分るの反對である。キプリングが米國の二年七ケ月後れて參加し、歐洲の金貨を吸收した事を云ひ、米に物議を醸したが、將に英國人の言はうとする所を言ふたのであつて、急所に當つて

居らぬとせぬ。米國の參加が餘計な事かと云へば、左うでなく、實に其の參加で獨逸の屈伏を早めたに相違なく、英佛で頻りに之を參加せしむるに努めたのも、偶然でないが、米が既に參加したならば、聯合國の爲めに今一層力を盡くして可いでないか。戰役に關して聯合國に借し付けた金は、若し帳消しにし得ぬならば成るべく延期すべきでないか。歐洲に對して、債權は何處までも債權と云ひ張り、脚下の見え透いて居るのを責め立てるとは何事か。米國は眞に正義人道を重んずる模範的紳士あるの旁、理も非も無く、我利一方に立ち働く者の頗る多く、正義人道の微かに閃きつゝ、黑雲の蔽ひ、底ひ知れぬ渦卷きの動くを見る。歐洲では忌々しくても、米に膝を屈せずに居れず、中には如何なる犧牲を拂つても之に縋り付かうとするのがあり、日本は犧牲の一つとなつて居る。日本を惡樣に云ひ、之と關係を絕ちさへすれば、米國の多數に喜ばれるやうな所があつた。

米人は何時までも此調子で續くのでなく、分る時には分り、或時期に變ずるのであるけれど、現に我儘一杯に爲すを得、金と力とで何でも出來ると心得て居る。今日の所、歐洲疲弊し、米の力を藉らずに居れず、米は歐洲を生すと殺すと自由なるかに見ゆる。若し米國が南北米洲を大聯邦に形造つたならば、從來強國と稱した所のものが、殆ど悉く強國の實を失つて終ふ。東西兩太洋に海上權を制すれば、世界に羅馬の二の舞を演ずる事になる。併し米國から見れば、歐洲の疲弊は自業自得、何とも仕樣が無いとするであらう。佛國と獨逸と不倶戴天の仇であつて、互に害する以上、何時までも舊狀態に止り、大聯邦の出來上る日が無い。佛獨に人物があり、早く將來を見越し、歐洲聯邦を形造くるの意を以て、相協議し相和合したならば、自餘諸國も之に加り、三千幾百億圓を戰場の烟に化する代り、文化的事業に差向け、米國の遠く及ばぬ所に出でたらう。英國も佛獨の競爭を好い事にせず、之を親睦せしむるに努めたならば、無益な戰役の勃發せず、曾て輕蔑した米國の憐みを乞ふに及ばなんだらう。戰前には英が米に對して債權あり、戰後に米が英に對して債權あり、僅の間に顚倒した。事は僅の間ながら、由つて來る所久しく、而して佛獨の競爭が原因を成して居る。

併し佛獨の競爭で兵器が進步し、延いて工藝の進步した所少くない。未曾有の大戰役の起つたのも、一面に於て科學應用の競爭であつて、幾年か應用の進步を早めて居る。唯損害と較べて、得る所が甚だ少い。今の所、歐洲が米國の力を藉るの餘儀なきに至り、急に之から離れる事が出來ず、只英國が世界に散在する領土を如何に開發するかで、米國との今後の優劣が決定する。併し之に先んじて科學應用の進み、必ずしも富源を地中

に求めず、太陽の熱を活用し、空中の窒素を活用し、燃料食料等を得るならば、全く異なる光景を呈するに至る。

今は一方に露國、一方に米國、極端と極端と相對立し、其間に列國が存續しつゝあるが、彼の兩極の何れが力を得るであらうか。米が露に手を伸ばさうとし、露が米に手を伸ばさうとし、それで何處で落合ふか、兩極相遭ふ事、全く無いとせぬ。露が何時までも現狀で續くと云へぬ如く、米も何時までも現狀で續くと云へぬ。或は前に恐れた所の者が意外に恐るべきでなく、前に賴んだ所の者が意外に賴むべきでないを悟るべきであらう。

十年や二十年で進歩の分らぬ事が珍しくなく、時として退歩と云へる事がある。百年二百年さへ、さう云ふ事がある。今はそれほどでなけれど、頗る困難な時代と看做されねばならぬ。ビスマルクが今一層活眼であつたならばと、惜しまれると同じく、佛國及び其他で更に活眼の人の出づるを望む。人智に限りあり、さう行きさうもなく、但、新世界に國を開いた米國で、折角正義人道を唱へ、成るべく之に近づくやうにありたい。富んで博く人を愛するもあるけれど、富んでいよ／＼我利我利に陷り、人を人とも思はぬやうになるのがある。米國は長い間に精神的進歩を遂げるにせよ、今は物質的進歩に比べて、云ふに足らず。却て約三百萬人を以て獨立した當時の羨ましきを覺える。後一世紀半、精神的進歩ないのでなく、人口の急劇な、增加に比例し、全く云ふを値せず、或點に於て墮落の明白なるものがある。多數の進歩するは容易の事でなく、識者の少しでも之を向上せしむるに努めるのを望む外ない。露と同じく突飛な事をなし、其間に何がな世界人類に益する事があらう。禁酒も思ひ切つて居る。いつその事更に思切つて、マンモン者流の惡弊を防止し得ぬであらうか。キプリングの云ふ事を咎めるよりも、切めて其處らで少しく反省するの度量を養つて貰ひたい。流石に米人は分らぬものあるにせよ、何がな善い事を爲さうとし、只何が善いかゞ分らぬので、惡い事をすると變らなくなる。近來教育の進歩も著しいやうであり、今の速度を以て續かば、徒に世界第一を誇るの恥づべきを悟り、世界を善くするやうに努め始むる事、遠い將來の事であるまい。

露獨をして其理想を實現せしめよ

永井柳太郎

（一）

世界戰爭の結果として歐羅巴の總ゆる國家は經濟的無力の狀態に陷つた。各國政府は其當然の義務たる債務又は賠償金の支拂を拒絕し、又は支拂實行を忌避しつゝある。紙幣も手形も株券も債券も總てが間斷なく下落しつゝある。無數の銀行及び會社が失敗し又破產した。物價は暴騰し生活の基礎は根柢から破壞せられた。實に歐羅巴を擧げて、否寧ろ全世界を擧げて經濟的危機に遭遇して居る。そこで歐羅巴を此經濟的無力の狀態から救濟し、其恢復を圖る事は獨り歐羅巴丈けでなく、全世界の大問題であるが、此解決を困難ならしむる二の大障害物がある。夫れは云ふ迄もなく露西亞と獨逸とである。

露西亞と聯合國との間には思想上の大溝渠がある。此兩者の思想上の距離が短縮されなければ問題の解決は不可能である。聯合國と露西亞との歐洲復舊問題に關する思想の相違を最も明白ならしめたものはゼノア會議であつた。ゼノア會議は歐羅巴の經濟的復興を成就するために各國間に如何なる協力をなすべきかを研究するのが目的であつた。露西亞は歐羅巴各國が戰時中敵味方であつた關係を一擲し、歐洲全體が眞に一心一體となつて其經濟的基礎から新に築き上げる覺悟がなくてはならぬと云ふ意見であつた。此點に於ては獨逸も同感で、それが四月十六日獨逸の代表者ラテナウと露西亞の代表者チチェリンとの間に締結せられたラッパロ條約となつて現れた。ラッパロ條約は五箇條から成立して居るが、大體に於ては次の三箇條を根本思想として居る。一、露獨は戰爭に關する損害賠償權を相互に放棄する。二、露國の國有制度採用の結果獨逸國民の蒙つた損害に對しては、露西亞が同樣の損害に對する賠償を他國に與へざる限り賠償を請求しない。三、露獨の關係は最惠國の基礎の上に置く。併し此條約が其調印の翌日公表せられた時に、聯合國は一樣に之れを以て聯合國を侮辱したものゝ如く考ふると同時

に、此根本思想に反對した。

聯合國は先にカンヌ會議に於て決議した通り、露西亞をして帝政時代の政府の債務を承認せしむると同時に、又勞農政府が共産制度採用の結果として沒收した外國人の財産を返還せしめ又は賠償せしむと云ふ方針であるから、ゼノア會議に於ける露西亞と聯合國との間には最初から非常な溝渠の存する事が明かであつた。殊にチチエリンの聯合國に對する挑戰的態度が其溝渠を一層深めた。彼は聯合國より帝政時代の露國の外債を承認せよと要求したに對して「我等は歐羅巴全體の經濟的復興に關して實際的の方法を協議するがためにゼノアに集つたのである。若し聯合國が徒に戰爭中の舊債權をのみ主張するならば露國からも亦聯合國に對して要求すべきものがある」と云ふて、聯合國が先にコルチヤツクやデニキンやユーデニツチやウランゲルや其他の反勞農政府の叛亂に聲援したる事實を指摘し、其損賠償とベツサラビア地方の喪失とに對して五百億金ルウブルの對抗要求を提起し、斯くの如くにしてゼノア會議は事實に於て歐洲諸國の經濟的協力の爲に何等の貢獻をもなす事なく散會したのであつた。

只之れ丈けの障碍丈けでも歐羅巴の前途にとつては容易ならざる困難を意味するのであるが、獨逸の支拂不能は賠償金問題の前途を一層暗憺たらしめたのである。全體聯合國の獨逸に對する要求は獨逸の實力を過度に見積り其誤てる見積りの上に立脚して居るやうに思はれる。聯合國の獨逸に對して要求した最初の賠償總額は實に二千二百六十億金馬克の外、猶千九百二十一年五月一日以後四十二年間獨逸の輸出金額の一割二分に相當する金額を徴集するといふ事であつた。此決定が獨逸に傳つた時獨逸朝野は大に激昂し、時の外務大臣ジモンスは斷じて其決定に反對なる事を表明したので、其後更に交渉を繰り返し、五月五日聯合國から獨逸に交附した決定案に於ては賠償總額を千三百二十億金馬克に減じた。併し之れ丈けの賠償金を支拂ふ丈けでも實に容易ではないので、獨逸は年々約三十億金馬克を支拂はざるを得ない。然るに獨逸は之れをも支拂ふ事は不可能であつたので、遂に本年一月に入り各國の代表者はカンヌに集つて相談をした結果、獨逸は千九百二十二年中に元金七億二千萬金馬克と、現物十四億五千萬金馬克とを支拂ふと云ふ事に折合がついたのであるが、それすら今日は又々支拂不能の狀態に陷り、今年七月十五日に支拂ふべき五千萬金馬克も中千八百萬金馬克は聯合國からの借入金に依つて支辨し、八月十五日に支拂ふべき五千萬金馬克は全く絶望の狀態に陷つた。之れ等の事實に依つて見ても聯合國の要求が獨逸の實力に關する正確なる計算の

上に立つて居ないで常に動揺しつゝある事が分る。

獨逸自身としては宰相ヴヰルトが言明せる如く國力の許す限り忠實に義務を果しつゝありと思ふ。現に千九百二十二年度の豫算を見ても、歳入二千六百五十七億馬克の中聯合國に對する債務銷却のために支出する所は千八百八十億馬克となつて居て其七割を占めて居る。租税の如きも徴收し得る限りは徴收して居るので、所得税の如きは最低一割より最高六割の税率である。生活必需品に對してまでも重税が課せられ、ビール税は戰前に比して四倍し、葡萄酒税は一瓶毎に其價格の二割を徴收し、之等のアルコール製飲料より國庫に收むる金高は五十割の増加を示して居る。石炭に對してさへ從價四割の重税を課して居るので、凡そ石炭を燃料として生産する一切の生活必需品が影響を被つて居る。佛蘭西ではポアンカレー氏初め獨逸が實力を隱蔽せる如くに疑ふて居るが、それは眞に獨逸の實狀を觀察したものではない。勿論獨逸の産業は繁榮し、各所の煙突は盛に煙を吐いて居るのみならず、之れ等の生産業に從事せる會社の中には五割十割の配當をして居るものも少くはない。けれどもそれは直ちに獨逸の實力の盛大なる證據にはならぬ。何となれば今日は獨逸の馬克が暴落して、戰前には一馬克が我五十錢に相當したものが、今日は我一厘五毛にも當らぬと云ふ程であるから、獨逸の物價は他國に比ぶれば遙かに廉い。從つて外國から馬克の暴落に乘じて注文が殺致するために各所の工場は繁榮を極めて居るのであるが、斯くの如くして五割、十割の配當があつても、それは馬克紙幣に於ての計算であるから金馬克に換算すると實に僅少で、假令二割の配當があつたとしても金馬克に換算すれば一パーセントの四分の一の配當があつたに過ぎぬ事になる。斯くの如き狀態であるから獨逸の苦痛は想像に餘りありと云はなくてはならぬ。殊に戰前に比ぶれば其面積は一割三分を減じ、又其人口も一割を減じて居るのみならず、其失ひたる土地は何れも石炭とか、鐵とかポツターシユとか云ふが如き原料の産地である。

若し聯合國にして強ひて獨逸より搾取し得る限りを搾取せんとすれば、遂に宰相ヴヰルトが言明した通り帝政革命が起るか、それとも共産革命が勃發するか、孰れにしても折角築き上げた社會主義共和國の基礎は根底より崩壞する危險がある。現に昨年秋には中央黨左翼の領袖エルツベルゲルが暗殺され、今年六月五日には社會民主黨の首領シヤイデマン傷けられ、同じく二十四日には外相ラテナウが兇徒の手に斃れた。而して此種の事變は孰れも直接間接に右黨と聯絡があるので、之等の微候に依つて見ても最近右黨が活躍しつゝある事を推察するは容易

である。

（二）

前述の如き狀態の下に於て聯合國が强ひて其力に依つて損害賠償を要求せんとすれば、歐洲は再び兵亂の巷となるを免れざるべく、引いては各所に革命及び内亂の如きものが勃發する恐れがある。故に此際聯合國として最も賢明なる方法はラッパロに於て獨露兩國の代表者がとつたと同じ態度を相互の間に於ても又とる外はない。即ちロンドン會議に於て決議された如く、正義と、搾取を伴はぬ經濟的再建とを原則として歐羅巴全體の經濟組織を根本から立直すの外はない。併し歐洲諸國丈けが相互の間に於て假令非賠償主義に依つて相互の賠償權を放棄しても、歐羅巴諸國は又米國に對して莫大の債務を負ふて居るのであるから、啻に歐洲諸國のみならず、米國も亦非賠償主義の世界復舊條約に參加するに非れば問題の根本的解決は不可能である。全體世界戰爭に於て各國は孰れも莫大の負債を負ふたのであるが、此負債は決して自國一個のために擔ふたものでない。孰れも聯合國共同の目的のために負擔したものである。故に英佛、伊、羅、塞、葡、希等の債務は決して彼等のみの債務に非して、聯合國全體の債務として見るべきである。だから之等の國々をして露西亞及び獨逸との間に賠償權相互放棄の條約を締結せしめんとするならば、同じ同盟國として、共同責任に基きて歐羅巴以外の聯合國たる米國や日本も亦同一の態度に出づると云ふ決心がなくてはならぬ。

今年八月一日付で英國外務大臣バルフオア伯は公文書を佛蘭西、伊太利、ルーマニア、セルビヤ、ポルトガル、及びギリシヤに宛てて發送して、英國は戰時中貸した金を返して貰ひ度くはないが、米國から英國の米國に對する債務を銷却すべき要求を受けたから、遺憾乍ら貴國の英國に對する債務を償還して貰ひたいと申し出た。之れは歐羅巴の經濟的復舊より見れば頗る遺憾なる出來事であつて、米國が其債權を放棄せざる限り英國も亦其債權を放棄する能はず、英國が佛蘭西や、伊太利や其他の國々に對して債權を主張すれば、佛蘭西や伊太利や其他の諸國は獨逸や露西亞に對して債務の償還を迫らなくてはならぬ事になるのである。故に今日は米國の決心一つで歐羅巴を救濟し得ると云ふてよい。英國が佛蘭西、伊太利其他の歐洲諸國に對して有する債權は元金のみで三十四億磅即ち約我國の三百四十億圓である。然るに米國の英國に貸した金は現金が四十一億六千六百三十弗、千九百二十一年十一月十五日までの未拂利息が五億九百二十萬弗、合計四十六億七千五百五十五萬弗で、約我

九十億圓である。從つて英國に比ぶれば僅かに四分の一に過ぎぬのであるから、英國の犧牲に比ぶれは米國の犧牲は僅少と云はなくてはならぬ。斯くの如くにして之等の聯合諸國が總て其債權を放棄し、獨露兩國との間に非賠償、非侵略の新條約が締結され、國際關係が根本より一新しなければ歐洲は云ふまでもなく、全世界が眞の平和時代に入る事は不可能である。

（三）

私は露國も獨逸も將に舊文明を脫して新文明に入らんとして居る過渡時代であるから、此兩國をして行かんと欲する所に行くべき自由を與へると云ふ事が其隣邦たるもの丶高尚なる義務だと思ふ。獨逸の社會主義共和國が成功するか、露西亞のソビエツト共和國が其理想に到達するか、此兩共和國の將來は今後に於ける世界の改造方針を決する上にも重大なる影響を與ふるのであるから、此兩共和國が今僅かに芽生したばかりの時に、區々たる債務の交渉のために其發育を妨ぐる事は人類文明の一大恨事と云はなくてはならぬ。

日本人中には過激派の勢力を信ぜず、遲かれ早かれ、帝政派の復活すべき事を期待し、又其復活を扶けんと欲する者もある。併し之れは露西亞の國民性を知らざるものである。全體露西亞人は其性格に於て矛盾せる二方面を有つて居る。ピートル大帝は露西亞人の典型なりと云はれて居るが、ピートル大帝自身を見ても大なる矛盾があつた。即ち非常に沈着であると同時に過激であり、甚だ寬大であると共に又甚だ冷酷であつた。露西亞の特產物である虛無主義者の如きも一面物質的であると同時に他面神秘的であり、一方に於て信仰とか理想とか云ふものを嘲笑すると同時に、他方に於て虛無主義のために仆れたものを殉教者の如くに尊敬する。之れと同じやうに露西亞には極端なる專制思想が行はる丶と同時に、又何處となく世界的人道主義の傾向がある。露西亞人を以て單純なる專制思想家と思ふ者は勞農露西亞の前途に就いて悲觀するかも知れぬが、露西亞人の血液中に人道主義乃至自由主義の傾向を認むる者は、今日の民衆革命が決して偶然の出來事でない事を認むるに相違ない。現に專制政治の本尊の如くに思はれて居る露國皇帝中にさへアレキサンダー二世の如き自由主義的君主が現れた。彼は農奴を解放し、地方自治の機關を設け、言論の取締りを寬大にし、新に大學令を布いて所謂革命時代の基礎を作つたのである。民間に於ては彼のアレキサンダー・ヘルツエンが「露國思想家の歷史は殉教者及び犯罪人の浩瀚なる歷史なり」と云ふて居る如く、十八世紀に於てルソーやボルテールや其他の佛蘭西の革命思想家が其

歸依者を得てから今日に至るまで幾多の迫害と幾多の壓迫とに堪えて無數の人道主義者や革命思想家を出したのである。斯くの如くにして今日の革命政府は人民の間にも亦軍隊の間にも多年の基礎を有するのであるから、假令一時革命政府が顚覆するとしても結局は同一系統の思想に屬する人道主義乃至社會主義政府の出現となるに相違ない。

獨逸に至つては其思想の根柢は露西亞よりも更に深遠なるものがある。最近米國のヘンリー・トムソン大佐が雜誌カーレント・ヒストリーに發表した意見の中に獨逸が千九百十四年八月に宣戰布告に決したのは種々なる原因があるけれども其最も重大なるものゝ一つは社會民主黨の勃興抑へ難く、國民の思想が次第に赤化せんとするので、それを國外に轉ぜしむるためであつたと云ふて居る。此斷定が如何なる程度まで正確であるかと云ふ事は疑問であるが、併し獨逸の帝政に反對し社會主義共和國の思想が早くから著しく蔓延しつゝあつた事は爭はれない。現に千八百七十一年の總選擧に於て社會民主黨の投票は僅かに十萬であつたものが、戰爭前の總選擧、卽ち千九百十二年に於ては四百二十五萬以上に達して居る。今日右黨が次第に勢力を恢復し、容易に樂觀を許さぬやうに見ゆるけれども、彼のラテナウが暗殺せられた當時數萬の勞働者が共和擁護の大示威運動をなし、燃ゆるが如き敵愾心を示したに依りても帝政の復活は殆ど不可能に見ゆる。全體獨逸民族は一面に於て情熱的な國民である。非常に浪漫的な情操に動かされ易い國民と云へる。從つて情の奔放するまゝに盲目的行爲に出る事も少くない。自己を信ずる事深く、其感情の趣くまゝに勇往邁進すると云ふ傾向があつて、それが哲學に於てニイチエの權力意志の主張に於て見る如き獨逸魂ともなり、又カイゼルの性格に現れたるが如き侵略主義の傲慢な氣質をも生むのである。けれども他面に於てはカントやフイヒテやヘーゲル等に於て現れたる如く卓越したる理智をも有するのであつて、此卓越したる理性が常に獨逸人た驅つて不合理なる制度や組織や習慣に對する反逆的思想に走らしむるのである。近來獨逸の文明は總ゆる方面に革命的徵候が溢れて居たのだが、それが偶々此度の戰爭に際し、其革命　機運を抑壓する中心勢力であつたカイゼルの失墜を機會とし一爆發し來つたのであるから、今日の獨逸共和國の歷史は至に短いけれど、其淵源する所は實に深且遠と云はさるを得ない。今や露西亞人も亦獨逸人も過去數世紀に亘つて幾多の犧牲を拂ひ無量の血を流して把持し來つた所の社會革命の理想を初めて現實の世界に打ち樹てゝ、これから民族固有の文化を大成せんとして居る時に、其偉大なる試みを區々たる賠償問題の解決を急ぐ

がために馬蹄の下に蹂躙すると云ふやうな事があればそれは啻に獨露兩民族の不幸であるのみならず、世界文明の一大損失と云はざるを得ない。私は世界戰爭は窮極は十九世紀に於ける各國が盲目的に把持して居た帝國主義の當然の歸結であつて、其勃發に就いては其孰れの一國が責任を負ふべきものでないと思ふ。從つて此帝國主義の產物に外ならざる賠償金問題も又各國共に其債務者たる精神を以て解決すべきであつて、世界各國が眞に非賠償、非侵略の大精神を以て過去に於ける一切の權利義務に於ける關係を放擲し、戰爭中敵味方たりし關係を一新する事が眞の世界平和と人類再生とに至る道程であると思ふ。

感情に偏して理智に反する列國の對獨露態度

法學博士　堀江歸一

聯合諸國の獨露兩國に對する態度の失當であることは、從來機會ある毎に、之を論じたが、諸國の態度は今日に至るまで、依然として更まる所あるを知らない、而して益々兩國の國狀を險惡に導き、國民生活を危殆ならしめるのは、私の甚だしく遺憾とする所である。

對獨態度の不合理

獨逸に對する列國の政策は如何なる點に於て、誤まつて居るかと云へば、戰時に端を發した聯合諸國協同の態度を今日に至るまで少しも緩めず戰前から戰時にかけて、醸成された獨逸に對する惡感情に驅られ、聯合諸國協同の力を以つて、獨逸に壓迫を加へて居る一事である。而して聯合諸國は何を武器として、獨逸を壓迫するかと云へば、其一つは獨逸に對して、經濟的封鎖を加へることであり、他の一つは獨逸の賠償金に關する義務を厲行することである。聯合諸國が獨逸に對して、千三百二十億金貨馬克の賠償金を賦課した其上に、賠償金として發行された債劵に對する償還の終了するまで、年々二十億馬克の金貨を徵收することゝしたのは、約定成立の當初から、無理非道である

事實の頗る明瞭なるものがあつた。而して今日の實際は如何であるか。賠償金として債券は豫定の金額まで發行されたが、獨逸は毎年二十億金貨馬克の負擔を決濟するに就て、其支拂期の到達する毎に常に大なる困難に接して已まない。現に本年七月十五日の支拂期に於ける支拂は甚だ難澁であつて、將に國家破産を宣言せざる可からざるの窮境に陷つた。當時は幸、疏通の道を得て辛うじて支拂を了することゝなつたが、今日の狀態を以つてして、果して十月以後の支拂が出來るかと云へば、其れは甚だ困難であるやに見へる。

　獨逸をして賠償金の負擔に當り、之を支拂はしめるようにするには、何は差措いても、獨逸に有利なる國際貸借の差額の現はれることを必要とする。然るに聯合諸國は講和條約を以つて、或は獨逸の船舶を沒收したり、或は獨逸國民の諸外國に持つて居る財産を沒收したりして、獨逸國力の海外に發展し、又有力なる貸借の差額の生ずることを妨げた。然らば今日の獨逸に於て有利なる差額を收めようとするには、何としても其輸出易貿を盛にして、輸出超過を大ならしめるより外に、道はないのである。然るに此點に於ても聯合諸國は獨逸に對して大なる間違をして居る。即ち諸國は獨逸に對して、原料品の供給を制限し、斯くて製造工業の復舊する道を絶ち、尙ほ獨逸の物資には獨逸自ら輸出稅を賦課することを强要し、更に其物資の聯合國内に輸入される場合には、差別的輸入稅を賦課する。斯の如くして獨逸が有利なる貸借差額を得ることは、全然不可能であるのに、聯合諸國は獨逸に對する義務を勵行して、一毫の假借する所あるを知らない。獨逸が日に月に窮迫して、國民生活の基礎すら、危うするに至つたのも、亦當然であつて、聯合諸國の非人道的態度は此點に於て最も露骨に暴露したものと認められる。

馬克價値の下落

　從來獨逸が償金を支拂ふに必要なる金貨を得るに就ては、中央銀行の所有する金貨準備に之を求めたこともあるが、中央銀行の金貨準備を空虛にすることは、國として忍ぶ能はざる所であつて、之を避ける爲めに、内外　市場に金貨を求める手段に出でた。而して之を求めるや、中央銀行をして不換紙幣たる銀行券を增加させ、政府は之を借入れて、金貨買入れの資金に充つることの結果、償金支拂の義務の履行されるに隨つて、馬克銀行券は内外の市場に横溢し、金貨に對する馬克の價値に暴落を來さゞるを得ない。今日馬克が殆ど見る影もない位に價値に低落を來したのは、一に此關係に基くものであつて、其獨逸經

濟に災禍を及ぼすもの少なしとしないのである。

以上の事情は近頃に爲つて漸く聯合諸國に依つて、理解されるに至り、英國の如き獨逸に對する態度の緩和された趣きがある。然るに聯合諸國中、一の佛蘭西ありて、往年獨逸に戰敗の憂目を見せられた怨みを忘れることが出來ず、一方に獨逸の國力を根本的に倒壞しようとする餘り、獨逸賠償金を輕減しようとする議論に對しては、佛蘭西が率先反對する爲めに、此議の成立する妨碍と爲るのは、吾人の甚だしく遺憾とする所である、文明國に於て常に唱へられる道德なるもの、基督教國に於て昔から教へられる德義なるものは斯く幾年前の怨恨に拘泥して、一時敵と爲つた國民に向つて、出來るだけの壓制を加へ、其生存すら脅かすことを辭せざる次第であるか。私は其然らさることを信ずると共に、佛蘭西の狹量、佛蘭西人の臆病に對して、侮蔑の念を催ほすことを禁ずるを得ざる者である。

卽ち聯合諸國の獨逸に對する態度は第一に經濟上の原則に背反し、第二に道德の情操を蹂躪して、憚らざるものである。第一の結果としては獨逸償金支拂不能の事實が起るし、第二の結果としては歐洲の文明に汚點を印するの嫌を免かれない。今や歐洲諸國の間に獨逸賠償金の輕減を必要とする議論の成熟し來つたのも、深く異とするに足らない。據る所甚だ深いのである

獨逸が從來彼の如き天惠の少ない土地を擁して、彼の如き工業の發達を遂げたのは、獨逸人の有する特殊の才能殊に化學工業に於ける經營の才能の然らしめた結果であつて、斯かる獨逸人の才能は之を生かして、世界を擧げて、其惠に浴せしめること、戰前に於けると同樣にすることを以つて、可なりとするのである。聯合諸國の獨逸に對して爲して居る所は要するに獨逸を殺すと共に、聯合諸國自ら苦むものであつて、此位經濟の原則に違背したことは、他に其類を見ないであらう。

對露態度如何

露西亞に對して、各國の採用しつゝある場合に於ても亦同樣に不公正なる跡の著しいことを否定するを得ない。露西亞が其國內に天然資料を包含する故を以つて、世界の寶庫と稱されるのは、敢て今日に始まつた次第ではない。然るに今や此寶庫に於ては、物資甚だしく缺乏し、殊に食料品不足の大なる爲めに、所謂餓莩道途に横はるの慘狀を呈して居るのは、慘鼻の極である。或は之を以つて勞農政府が共產主義を以つて、國民に臨んだ爲め、總て生產に從事する者に大なる恐怖心を及ぼし、遂に物資缺乏の現狀を生ずるに至つたものと解釋する試みがあるかも知れない。然しながら是れは單に事柄に對する一面觀であつ

て、私を以つて見れば、露國の滲状今日の如く爲るに就ては、或は聯合諸國が徒らに反革命軍に助力して、勞農政府の統治の及ぶ所を妨害し、擾亂した一方に、露國と通商上の關係を遮斷し、露國民の爲めに、天然の富源をして用ゆる所なからしめたことを以つて、重なる原因としなければならぬ。

然らば斯る聯合諸國が露西亞に經濟的封鎖を加へて、孤立生活の已むを得ざるに至らしめるのは、何故であつて、又其理由に見る可きものがあるかと云ふことが問題に爲る。聯合諸國が露國に向つて、斯る態度を縱にするのは、畢竟勞農政治を嫌忌し、勞農政府其ものを自滅せしめようと云ふ目的に胚胎するものに外らない。然しながら斯の如く勞農政府は憎む可きものであるかどうか、憎むべしとするのは一個の見解であつて、又憎む可からずとするのも亦他の見解である。是れは恰も資本主義を可とするのと、又之を否とするとの間に、見解の相違あると少しも異なる所はない。然らば以上の如き理由に基いて、聯合諸國が露國の政治に對し、殊更に異を立て、經濟上の手段に依つて、之を窮追し迫害し、以つて政治の形式を諸國の好む所に移らしめようとするが如き、內政に對する干渉と認めなければならず、斯る手段を講ずる結果として、露國の民生を飢餓に泣かしめるに至つたは、非人道の所業とせざるを得ない。

今や露國自身の政策は實際の必要に促されて、潤色され來つた跡の著しきものがある。現にゼノア會議に際して、露國が聯合諸國の代表者に向つて與へた覺書の內には、列國が勞農政府に法律的承認を與へる條件の下に、帝政時代の外債並に外國私人に對する債務を承認することの一個條のあつた事實に徵しても、事の一班を了解するに苦まない。聯合諸國が何時までも勞農露國を敵視し、飽くまでも之を窮地に陷らしめようとするのは、各自の國に於て政治の支持され、運用される基礎と爲つて居る資本主義を金城鐵壁の如きものにしようとする見地から云つて、已むを得ざる所であり、又實際今日の政治を支配しつゝある者の資本主義者なり、又は其代辯者である場合には、必然の事實であるやに目されるが、世界の寶庫である露國を荒廢するに任せるのは啻に露西亞の民生を危うするばかりでなく、諸國の經濟恢復を妨げる所以であることを知つたならば、經濟の原則に背反する政策、經濟の常道を蹂躙する政治が如何に愚なるものであるかを明にするに足りるであらう。私は聯合諸國の獨逸に對し、又露西亞に對して、行ひつゝある政策を以つて、感情に偏して、理智に背いたものと認めるの外、他あるを知らない。斯る政策の行はれる間は歐洲經濟界の安定も亦前途遼遠であると考へられるのである。



整腸に消化に保健に

ビオフェルミン

は第一の良剤として選ばる

既に腸疾患に悩むもの、常に腸機能の衰弱せるものはビオフエルミンの服用に依つて速に健康に導かる。

粉末及錠剤あり、全國知名藥店に販賣す（説明書郵呈）

發賣元　大阪市東區道修町　武田長兵衛商店

製造元　神戸市二番町　株式會社　神戸衛生實驗所

四大家傑作頒布會

此の四大家傑作頒布會は、左記四先生の力作各一枚宛を春・夏・秋・冬の四季に組合せ一口となしお頒けするものなり。畫は山水・人物・花鳥等種々にて、何れも努力した傑作で御座います。

當中央美術協會の理想は、大家の力作を資産階級のみならず一般有趣味者が容易く需められる程度の廉い價で御頒けしたいと云ふのであります。随て筆者には甚だ少い御謝禮で努力の傑作を御揮毫して頂くのでありますから、何人でも御承諾下さるのではありません。

今回の四先生は營利的でない、前記の旨意を御諒解、特別の好意を以て揮毫して下さるのであります。随て何時でも此價で御頒け出來るものでは御座いません。御希望の方は至急御申込み願ひます。

規定

一、本會の筆者左の通り

中村不折先生　**富田溪仙先生**
小川芋錢先生　**小杉未醒先生**

二、**會費一口金百五拾圓也**（送費内地七拾五錢 植民地九拾錢）

三、作品は一尺二寸幅長さ四尺六寸の特製大瀧紙（越前岩野氏製）に入念に揮毫せし四先生の筆各一枚宛を、春・夏・秋・冬の四季に組合せたるものなり。畫は山水、人物、花鳥等いろ〳〵にて何れも努力の傑作なり。

四、申込み金等一切不要會費並に送費は、揮毫出來の節居宅代金引換小包郵便にて現品と引換のこと、東京市内は郵便に依らず、使を以て作品を御届けし其節會費を頂戴す。

五、申込期日十月三十一日限り。但し期限内と雖も申込豫定數に達したる場合は謝絶することあるべし。

六、揮毫出來期限は申込を受けてより、十日乃至八十日間とし、配布は申込み順による。發送若くは御届けする際は必ず一日前の書面にて案内す。但し申込一時に多數なる時は配布多少遅延することあるべし。

七、申込みは普通の端書又は手紙に「貴協會開催の四大家傑作頒布會に入會致し候、揮毫出來の節は居宅代金引換小包郵便にて送附相成度申込候也」と記し作所姓名を明細に記入（東京市麴町區元園町中央美術協會）宛御投函の事。

不明點あれば端書にて申込まれたし。別に印刷せし明細規定書を呈す

東京市麴町區元園町一ノ一九

中央美術協會

電話九段八四一番
振替東京二九七番

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

昨年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御注文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」の眞實に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂に確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見少も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一朝之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の俳諧期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完洗すべし、

日、英、米專賣特許出願中

カロット味(百日分)金貳圓
カロット具(永久使用 銀模様入)金五拾錢
同 象牙サック入 金壹圓五拾錢

一組

送料(内地十八錢 海外四十六錢)

書留送料(内地卅一錢 海外五十五錢)

東京市日比谷有樂町一丁目貳番地

榮川堂

電話丸の内一九一九 振替東京五二九一一

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候



航海者の慰安

波蘭國 ステファン・ルビエンスキー伯爵畫

日本近代詩の成立

日夏耿之介



(一)

「凡そセンシブルの人は語の嚴正な意義に於て保守的であらねばならぬ。」といふヴィクトリヤ朝英國の一政治家が言は、この種のあらゆる金句と等しく、味はうべき二つの內容を持つてゐる。

發言者が甲乙(此場合保守的)いづれに、如何に位相してゐたかといふ、視點から見るのがその一方法である。發言者の人格的關係を離れて一個の普遍的獨立性の立場にイ立させて思考するのがその第二である。これをホイッグ黨嫌ひの保護貿易論者、苛辣狡獪の名を江湖に獲たビーコンスフィルド伯ベンジヤミン、デイズレーリの「シヰル」第二部に書いた言葉であると註したならば、卒然として、警句の興味の半分は消失するかも知れないが、フランシス・グリーヤスンもいふ如く名言はその完全に發言した最後の人の所有するものである、右の保守的本性に關する暗示的簡勁の一句も、これを、更に微妙の世界に立入らしめて醱酵せしめたならば、讀者は、これをたやすく意義深き省察ある力言とも化せしめうるのである。

草創は破壞を聯想する如く、破壞も亦しば〳〵草創を豫感せしめる。破壞者は必ずしも草創者ではないけれども、多くの場合草創者は意識的、無意識的破壞者である。たゞ、一人が前代の傳統に親炙して、その「場合」を寛大に許容する心持ちにあるときは、多くは漸進主義の方法を採用して、破毀建設の革命手段に向ふことが容易に出來ない。そこで、事象に對する態度

に極大まかに保守急進の二様式があるべしたならば、どうしても、彼等はこの時保守派と大別する流派に入られねばならない。保守派が必ずしも頑迷な御都合主義、安逸主義ではないことは、急進派必ずしも犧牲主義、第一義本位主義の清教徒に限らぬと同じいのであるが、保守派といへば、多くは傳來の積弊を默許し、或は擁護する立場に居り、或は居らしめられるにより、しば／＼破毀芟除すべき惡習の大本山なるがごとくに受取られ易いことは一應止むをえないのであるが、歴史の大ざつぱな觀察をはなれて實情の細部に嚴正の判斷を下すときは、如何なる當然の立派な業績といはれる革命革新事業にも、容易に善惡の判斷をなしがたき微妙なディベイタブル、ランドに介在するいろ／＼のもののあることを悟ることが出來る。「語の嚴正な意義」といふ極限も　實は種々に解されるまぎらはしい言葉であるが、とにかく「保守的」なる者は、前代の史的細部に通曉し、現在の諸事情のやむにやまれぬ「場合」に敏感なる公明なるセンシブルの人々であることは、保守といふ意義を最高義に解することに於てゆるされる道理である。無知頑迷な現在主義者の保守的態度は、急進派の破毀に價する絶好の標的であるが、達觀せる者も、附和雷同せる者も一樣に急進派に混入されるがごとくに、センシブルな人々も無知鈍感の人々も一樣に保守派の網に投げこまれて革命の血祭りとなつた如き事例を仔細に調べてゆけば、自ずといふにいはれぬヒューマニティーの絶崖に於ける悲壯な感慨を強ひられずにはゐられないものだ。

概ね、急進者が多少の（或はかなり多大なるべき）犧牲は致方がないといふ程度から更に事情に迫られて、大の虫を生かして小の虫を殺すのだ止むをえぬといふかなり勝手な心持で、積弊の芟除と一緒に、完成されたる美しきもの善きものの破毀をも致方なく決行してしまふ必要にせまられる上から、勢ひ史的細部に無知な、たゞ刻下の急務を痛感する白い手の持主・青年黨であるに對し、保守者は、まつたく頑迷な或は無知な黎民と我利我利の現實派と、及び少數のセンシブルの人々と此等凡てが相當の心的年齡を積んだ經驗者であることは多くの場合の通例である。その中でも、良き急進者は果斷な大まかな素人であり、良き保守側は躑躅する敏感の黒人である。すべて、歴史といふものは、總勘定を果した上で勝敗の跡に標目を置いて評價され勝ちであるにより、人間としての價値判斷などでも、革命時代の主要者に對するそれは偏見にみちたものが多い。記傳するものが官憲に準屬するもの、功業の讃美者である場合はこれが特に甚しい。日本歴史にも古代より明治末期にいたるまで此種の沒批判的偏見が澤山あつて　それをわれわれは明治政府の盲目

的屈服者に近い教育者から眞理のごとく宗教のごとく至上命令として只管に教へこまれて來てゐるのである。

明治維新は、十九世紀的實證個人主義の徐々として絶間なき浸潤による舊制度の破壞、新開化の草創である。尊王攘夷も左幕開國も時にとつての標語であつたに過ぎぬ。或は機縁であつたにすぎぬ。標語は入替へも出來様が時代精神の逆轉は出來ない。新らしい文化の準備時代として、明治期は前代に比べると對照的に一きは夥しく爛然たる業績をあげえたやうに思はれて居る。政治的には武將の專政を王者の立憲議會主義に進めた點が注目されるが、これよりも更にわれ〳〵の關心すべき點は、社會的に階級人を表面だけでも開化人までに平等にしたといふ點、從つて、宗教的信教の自由を認め、教育の普遍化が實行され、內外文化所產が蔚然と勃興したなどの理由により、日本史に於ける明治史の、從つて、維新の功業を賞することは固より正當であるが、內的各分科文化所產の本質的評價の問題になると明治決して卓越した優勝者ではない。外設に急にして內飾におろそかであつたため眞の天才者が芽生にして枯死してしまつたからである。これはどの國どの時代にもある例だ。も一つは境遇の自然の要求から人才の赴く標的が政治軍事の方面のみに集中したからである。

が、維新以降輩出した諸人物中、歴史と世目とが一致して偉人といふ者も　精細に人物の表裏、思想の深淺　功業の位相等につき放たれた批判でこれを見直すと再査すべき個所は多いのである。閥族朋黨のために有利な一事をなした男が實價以上に持上げられて、その半面の淺薄と醜惡とが蔽はれてゐる事實はしば〳〵ある。極端な國粹主義の目標から見た「偉人」が今の世に尙その崇拜を持續けてゐることも少くはない。同様に、一運動一黨派の起伏の場合にも、この種の誤られたる結論が今なほ文化史上の通貨となつてゐることも事實である。西郷隆盛、幸德傳次郎、乃木希典、森有禮、等の毀譽に關する世判を見れば思ひ半ばにすぎよう。此等人物は、政治的社會的立場にある故、一世の傾向に動されて附和雷同する暗愚なる世評が、批判の中樞の外觀をなすから、無理もないと云へようが、思索人らよりなる內的世界にある人物流派のそれに迄上述の愚がしば〳〵用ゐられてゐるのは允しがたき怠慢である。沒批判である。

その明治の諸功業中、藝文の領土、特に、藝文の思想の領土の變遷及び特質はどうであつたらうか。明治時代は外廓建設の時代であるから內部裝飾には思ひ切つた手ぬかりが多い。五十年の文藝思想史は通譯者の活動日記である。紹介者の周旋記錄である。小手利き戰士の凱旋史である。比較的優れた文士に例

外は見出されるが、一般として考へて見ると、明治大正の文學は世界藝文史の一齣として誠に貧弱な收穫を有する許りでない。德川期に比しても優れた何者をどれ程有するであらう。福澤諭吉、中村敬宇、高山樗牛、尾崎紅葉、樋口一葉以下無數の明治「文豪」を有し、芳崖、雅邦、直治郎、默語の明治畫家を有する文藝界は一見過渡時代の淋しき賑かさの中に過ぎ去つた黃草離々たる卵塔場である。福澤、中村の如きは明かに明治に活躍したる人物であるが、芳崖雅邦又劇作者默阿彌の如きは、德川末期の教養の所産で生をたま〲明治初代に持ちつづけたにすぎない。ともすれば暗黒時代の如くに明治人が思惟したがつた德川時代の、たとへば、その初期、慶長八九年頃から承應一二年頃迄の五十年間を見ても守成時代の恒として變轉の目まぐろしさはない。展開の妙味は少いが時代の所產としては光悅、惺窩、藤樹道春、小堀遠州あり光琳、探幽の活動も此時代と見てよい。中期の盛大はいふ迄もない、その末期寛政十一、二年頃から嘉永一、二年頃迄の半世紀を見ても、宣長歌麿は前代の人としても馬琴、北齋、保巳一、景樹、篤胤、中齊、華山を有する十一、二代將軍の治世はすぐれた達人に決して乏しくはなかつた。時代の傾向は、ある藝術の衰退とある藝術の勃興とを際立たせるものである。更に時代の特質は、一般人の普遍的教化に急にして一人の優れた天才者の芽生へを毒害することとさへある。明治時代は、外觀と傾向とから見れば燦爛たる「聖代」であつたが、一一の總勘定をして見れば神樣に苦情を申込みたい程の損害を澤山うけてゐる新開町時代である。たゞ、こゝに世界藝文比較史論の上から見て注目するに足る運動傾向の降興がある。これは、日本文藝史あつて以來、明治史に入つて特に鮮かな姿相を示したムーブメントであり、特に、それは詩感詩想史に明らかに現はれた事件であつた。私はその準備時代の若干期を論じようと思ふ。

（二）

私は前回に結語の一を殘してをいた。革命時代の急進者保守者の對照的特質の著しい事例として、明治藝文史上特に新詩史の勃興の事實を舉證してをくべきであつた。こゝでは自然の順序としてその大略を顧みたい。然し乍ら、抒情的發聲の民族的總收をなすには、いふ迄もなく新詩のみでは不足である。漢詩短歌俳句の各詩形の歷史によつて思考しなければ不備であるを免れないのだが、此一文では暫らく、私の當面の攻究題目としての新詩のみを本位として看察するのである。

明治十五年七月外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎合著「新

體詩抄」が東京日本橋通三丁目丸家善七より出版された。和綴四十三丁の菊判本で初篇とあるが第二篇以下は出なかつた。譯詩、創作詩十九篇．原作者はトマス、キャンプル、テニスン、グレイ、ロングフエロウ、キングスリー、シヤルル、ドレアン及び沙翁等であり、創作詩は「拔刀隊の詩」、「勸學の歌」「鎌倉の大佛に詣でゝ感あり」「社會學の原理に題す」、「春夏秋冬の詩」等五篇であつた。

此詩集は、事實上に於て明治新詩の意識的草創第一步を踏み出した歴史的に有意義な紀念すべき公刊であつたが、內容の藝術價は全くいふに足らぬ、駄作の偶集にすぎなかつた。「鎌倉の大佛に詣でゝ感あり」の作者矢田部尙今はその詩の小序に次の如く云つてゐる。

「方今の學者は、詩を賦すれば漢語を用ひ、歌を作れば古語を援き、平常の言語は鄙となし俗となして之を採らず。是れ豈謬見と爲さざるを得んや、(中略)果して然らば、余以爲く、宜く平常の語を少しく折衷し以て稍新體の詩歌を作り充分に吾人の心に感ずる處を吐露すべき也。」

又其詩集の總序にも、「新日本の大潮流に棲息する國民が依つて以て情志を發舒せんには現時の國語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず」云々といふ巽軒の記した一節がある。

詩集「新體詩抄」一卷は、畢竟此意圖に基いて、內容の上の新開展を企てたものであるが、作品其者としては殆ど藝術價なき石器時代の遺物にすぎない。他の小說類と並べて明治開化の土俗品として玩弄する以上の何物もない。當時人口に膾炙したテニスンが「輕騎隊進擊の詩」を示す、外山氏の譯に係る。

テニソン氏輕騎隊進擊の詩　ゝ山仙士

其一

一里半なり一里半
並びて進む一里半
死地に乘入る六百騎
將は掛れの令下す
士卒たる身の身を以て
訣を糾すは分ならず
答をなすも分ならず
これ命これに從いて
死ぬその外は有さらん
死地に乘り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ

前も左りも又筒ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかつちの
響の如く凄ましや
彈丸雨飛の間にも
猛り立てぞ進むなる
死地にこそ入れ鰐の口
勇んで乘り入る六百騎
（下略）

トマス・グレイかエレジーは矢田部氏の譯に係る。

虞禮氏墳上感懐の詩

尙今居士

山々かすみいり合の
鐘はなりつゝ野の牛は
徐かに歩み歸り行く
耕す人もうちつかれ
漸く去りて余ひとり
たそがれ時に殘りけり
四方を望めば夕暮の
景色はいとど物寂し
唯この時に聞ゆるは
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴の鳴るひびき

猶其外に常春藤しげき
塔に宿れるふくろふの
近よる人をすかし見て
我巣に寇をなすものと
訴へん(と)や月に鳴く
いと哀れにも聲すなり

かしこには楡又こゝに
あらゝきの木ぞ生茂る
其下かげにうつたかく
苔むす土の覆ひたる
坑に埋れこの村の
古人長く打眠る

譯詩では流石にこのグレー詩が一番によい出來である。古撲な稚い表現ながら捨てられぬ感情が一味の單彩を以てにじみ出てゐることを否定することは出來ない。

作詩には拙い例として外山氏のをあげる。

社會學の原理に題す　　　ゝ山仙士

宇宙の事は彼是の
別を論ぜず諸共に
規律の無きは有ぬかし
天に懸ける日月や
微かに見ゆる星にても
動くは共に引力と
云へる力のある故ぞ
其引力の働は
又定まれる法ありて
猥りに引ける者ならず
且つ天體の歴廻れる
行道とても同じこと
地震の如く亂暴に
外面に生ふる草木や
地をはふ蟲や四足や
空翔りゆく鳥類も
其組織より動作まで
都て規律のあるものぞ

（下略）

この調子で社會學の原則まで說明してゆくのである。此ごとき詩は別に西洋詩の模倣でもなんでもない、たゞ珍らしいことを說明すればそれが既に新らしい詩として存在すると簡單に考へてゐたためである。今の詩人とて社會學を勞働運動と變へた位でこの種の滑稽をくり返して半百年後の史家に嘲笑の種を蒔いてゐるのである。

又、ハムレット劇の一段は

ハムレット

ながらふべきか但し又
ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ
運命いかに拙きも
これに堪へるがますらをか
又さは（あ）らで海よりも
深き遺恨に手向ふて

之をはらすがもののふか
とふも心に落かぬる
扨ても死なんか死ぬるのは
眠ると同じ眠る間は
心痛のみか肉體の
あらゆるうめき打捨つ
是ぞ望のはてならん
ア丶しぬねむるねむる時
若しも夢みるとあらば
はァこだわりが有様ぢや。

（下略）

この譯詩は外山氏の譯であるか矢田部氏の譯であるか不明であるが、巽軒は畏死之情述得精妙といふ評を與へてゐるが、ただ原意のいく分を形式には關係なく長々と說明しただけで批評する限りのものではない。（丶山仙士の譯詩は別に高僧ウルゼーがよい出來であつた。）

尙今が「勸學の詩」は唱歌としてうたはれたが、作としても唱歌以上のものではない。尙今も丶山も亦巽軒も科學者風の（それも極く平凡な）頭の所有者であるから、道理を述べたり、說明に走りすぎたりして自分が折角いく分でも稟つてゐる感情を打出して感情を通じて自分の人間性の全部を表白することを心付かなかつた。稟性の詩人なれば詩の原理などは知らなくとも自然にさういふ方面に轉開していつて與へられたる最大級の飛躍をなすが、さういふ賦性に乏しければ一部の詩論を讀んでも、さうあるべきだ位はよく識られて多少の進境はあるのであるが、その方面の自覺がおろそかに過ぎたので遂に此まで終つたのである。たゞ外山正一のみは流行に十年後更に進んで散文詩の新らしい試を示してある注目すべき試作を殘してゐるが（それも作そのものは拙劣であつたけれど）他の二人はついにこの境致から一歩を拔出ることも出來なかつた。

勸學の詩　　尙今居士

昔し唐土の朱文公
世に博學の大人ながら
わが學問をすすめんと
少年易老の詩を作り
一生涯は春の夜の
夢の如しと歎きけり
國の東西世の古今

人の高卑を問はずして
學の道に就くものは
いかに才能ありとても
同じ多少の感慨を
起さぬ人のあるべしや

（下略）

キングスリーの「漁夫」は外山正一の譯である。

チヤールス・キングスレー氏悲歌

外山仙士

無常を告ぐる入相の
鐘の音するたそがれに
三人の漁夫は帆を上て
入る日を指て西の海に
走らす船は進めども
妻子のために引かさるゝ
心の中は皆同じ
父の出船を眺めつゝ
沖に向ひてイめる
童子は外に餘念なし
まうけは薄く子澤山
雨降る日も風の夜も
洲に打掛くる波音の
最とすさまじき其時も
稼がにやならぬ男の身
袖のひぬのは女子の身

（下略）

たどたどしさは中學生の作文にも劣る、後、二十九年六月の「文學界」に露伴が一書を寄せて新體詩を論じ、「假令博士等張良の如しとするも博浪沙の一擊位の事にて此後黃石公の教にてもうけ刻苦鍛錬されし上にならでは天下の大勢は動くまじく心細き事に候」といつたのはその革新の事を認めて大成の力の足らざるを刺したものである。これ等の作を見て、國學者や漢詩人や歌人や俳人が嘲笑し又は問題としなかつたのも無理はない。しかし乍ら、たどたどしい中に微かにうかがはれる感情を率直に表はさうとする努力は心ある人にも認められた。そして、そのたどたどしさは、詩的才能に於て作者と同程度にある小學生中學生程度の舊來の詩文の素養の余りない、しかし乍ら何ものかを詩的かたちに於てつかみたいと希ふてゐた少年たちの間に愛誦されるべく、ぐん〳〵這入つて行つた。後年の國木田獨歩が「われも亦歐詩を讀みし一人也」と述懷してゐるのを見ても

西詩の模倣が必當の要求であり、それを實行した「新體詩抄」が青年の間にもてはやされたのも誠に當然の仕儀であらうと考へられる。その結果が、無心に、そのやゝ粗雜な自己の感情の映寫のかゞみの適當な道具として、前年に出た「小學唱歌集」と同じ心持ちで聲高くうたはれるやうになり、やがて、そのある作は何人かによつて作曲せられ愈よ一般的に普及して行つた。最初の藝術詩の翻案と普及の企とは、こゝに至つてやゝ方針を更へて、普通の唱歌のかたちとなつて全國に擴がつて行つた。自然な必然の歸結である。そこには、形と心との相依り相まつはる微妙な干係に於て成功してゐる作詩はない。譯詩とても、多くは原詩の言葉の普通の意味を識つてゐるばかりで、詩語としてのひゞきの本質、ニユアンスの持味など少しも全然解されて居らぬ。以上の理由で、この書が、まつたく詩をアツプリシエートする能力を缺く素人の、偶然なる、然し乍ら、相當に熱心な、試みになつたものと判斷して差支へはない。井上は明治卅年一月二月號「帝國文學」に新體詩論を書いてその特質を、第一、格法の自由なる事。第二、規模の廣大なる事。第三、言語の豊富なる事。第四、語格の近様なる事。第五、字句の勁健なる事。第六、旨意の明晰なる事。第七、進歩の傾向ある事。第八、新奇の着色ある事等としたが、旨意の明瞭は藝術の本意でもなく、字句の勁健は新體詩に限らない。規模の廣大、格法の自由亦藝術としての價値の基準にはならないが、言語の豊富と語格の近様とは爭はれない特徴であつた。井上は又、「新體詩を作爲するの自由は實にあらゆる冷嘲熱罵によりて買はれたり。」といつているが、詩才に拙き者がこれに當つたことにも一半の罪はあるけれども理由なき漫罵の多かつたのも事實である。理由なき漫罵はその後の「明星」星菫時代を通過して今日に至る迄文學の判らぬ文士や文學の判る俗人の間に行はれて居る。

自ら開拓の勇氣なくして先頭に立つものの一擧手一投足に責任のない皮肉を浴せて快とした不快な態度は、象徴詩時代特にそれが多かつた。自然主義に對する世間の態度亦これである。

此新體詩は、詩形としては必ずしも新體のものではなかつた。七五調は「古今」以後に散見し、阿佛尼十六夜記にも使はれてをり、五七調は山上憶良の貧窮問答歌を初めさかんに同時代に行はれ、徳川時代にも國學者の徒が擬古辭のみから此れを套襲した。新體詩は直ちに西詩の精神に範を取り、在來の七五を復活して、漢詩、俳句、和歌の何れにも非ざる、又、それらの表現しえざる特色を發輝せんとしたものではあるが、當代の文化所產凡てが然るが如く、これも機械的表面的歐風模倣の惡弊に陷

り、形式は則ち昔乍らの長歌今様の類を出でず、內容は、西洋詩の粗笨なる外貌模倣にすぎなかつた。一行を七五調とし數行を一聯として拙劣極まる脚詞をさへ試みてゐるが凡て形の上だけの事で、何等藝術上の約束を經たものはなかつた。たゞ、昔の或は當時少數の作者もあつた長歌今様などに比して雅語のみに執せず雅俗を問はずあらゆる國語を大膽に使用した點で新らしき試としての値がある。俄然、世間では「未だ見慣れぬ體裁の詩とて詩にも非らず歌にも非らずと難ぜぬは稀なりき。中にも國學者流の如きは雅俗和漢打雜ぜての用語、是れはと呆るゝ計りなりけり。斯る者をば詩抔とは言語に絕えたることとせり。去乍ら此時よりして我こそは眞の新體詩とも云ひ得べき者を作り出さめとの望念を起しし人々も出來しなり。新聞紙に雜誌に伎倆を試みんとする者を往々見受くるに至れり。」(外山外諸氏「新作詩歌集」明治二十八年九月發行本外山の序一節)

然し乍ら此詩集の缺點は雅俗和漢混交語の點でなくて詩そのものになつてゐない作が多い點である。國學者が言語の末に拘泥する以外批判の言を知らなかつたのを見ても當時の評詩家の無識は窺はれる。啻に評家のみではない、當代の抒情的發聲は他に何のはけ口があつたか。

國語に密接な本質的基礎を置いて立派な藝術的傳統を辿つて發達して來た和歌は、德川も中葉後に於て漸く陳套なる約束の末に縛られて頹廢に陷り、歌壇の本流をなすものは、眞淵のあとを慕ふものも、桂園派の末流も多くは純一詩感の活潑な表現よりも表面の小技巧の冴えに腐心したため、今にして顧みれば辛じて在野の布衣元義曙覽等が作によつて時代の急潮の全貌を代辯せられるにすぎなかつたが、維新後は、頹滅に臨める舊詩型として新人の無思慮な排斥を受けたのと大人と呼ぶ閑戲老人の徒らなる自大とにより益委靡して熊谷直好といひ、八田知紀門の高崎正風といひ稅所篤子小池道子といひ小出粲、千葉常胤、大口鯛二といふ宮廷詩人の一群も海上胤平、小杉榲邨、木村正辭、鈴木重嶺といふ人々も中島湘煙の如きすらも悉く舊態を墨守して新様を創造する力も官覺もなき人々であつたから同じ劣作にしても鑑賞に正直な青少が新體の詩風に走つたのは當然である。

俳壇は平俗の域に根を置いただけ時代の亂調に影響せられて無理想の現實主義に災せられ、物好きの消閑具として幇間詩人の玄關を賑はしたにすぎず、春秋庵幹雄といひ老鼠堂永機といひ蕉門十哲のあとを次ぐと誇稱して實は形式の浮薄なる模倣者にすぎず、花の本聽秋、雪中庵雀志、其角堂機一と稱する人々悉くポエタスターの雄なるものにも値しなかつたから 流俗に

阿附して野人消閑の具と自らをすすめて少しも恥ぢなかつたから、時代を批評するは愚かなこと、時代に引きづられて歩みを運ぶことも覺束ない、ただ、當時の墮落したる趣味の一反影たるにすぎなかつた故、これ亦青年の野望の對象となりうるものではなかつた。此等二者ともに、國是漸く定まつて文明の室内裝飾時代に入つた二十年代末ロマンテイツクリバイヷルに際して根柢より破毀され祖師古樣の純正技藝を革新詩人の手によつて復興せられるまでは傳來の空しき歷史によつて辛じて呼吸を繰返してゐたにすぎない。また、二十年代末のリヷイバルはあらゆる文學の復活であつたが、たゞ一人の鬼才を出したきりその後の發達を止めたものに漢詩がある。

支那よりの藝術的傳統の精を傳へて相當に立派な收穫さへもあつた漢詩壇は維新後同じく前代の流風を盲追するにすぎなかつた。國語をすてゝ漢語漢文によるといふのも、現代の詩人が英佛語で作詩すると等しいことで、中世以來德川迄の文壇が支那文學の多大な影響をたえず蒙つて來たのを見ては決して無意味と一圖にいふことは出來ない。廣瀨淡窓、賴山陽、梁川星巖を出した德川末期は維新に入つて、杜詩を崇ぶ岡本黃石や、宋詩にゆく大沼枕山や白詩を宗とする小野湖山や明末清初に生命を見出す森春濤一派を詩林の大勢として他に成島柳北、信夫恕軒、向山黃村、長三洲、三島中洲、竹添井々、鷲津毅堂、佐田白茅、岡松甕谷、服部撫松等無數の詩人を出したけれども、多くは、詩を以て實學實務以外の出世間的非力なる餘戲と見なし、政治上の憤滿をもらす道具にすぎずとなしてゐたから眞劍に詩技の本道に生命を投げこんで天稟の賦才を試みる純一詩人は稀少であつたからこれ亦青年の生一本な事業の對照とはなりえなかつたのも當然である。

然しながら少くとも「文學界」運動が詩界に驚異の復活を明らめた以後の新詩界は知らず「新體詩抄」後二十年代中期迄の新詩界には一人として漢詩壇の人々ほどのめぐまれた詩感ある眞正の詩人はなかつた。守成の人々は革命の事業に趣らずして傳來の詩形に自足して皆相當に優秀な詩才を發揮してゐた。右の各派以外、漢詩界にはその後春濤の子槐南を初めとして本多種竹、岩溪裳川、野口寧齊、大江敬香、桂湖村、大久保湘南、國分青厓、田邊碧堂、落合東郭、宮崎晴瀾等無類の詩家を輩出し、その凡てが、「新體詩抄」の作者らなど脚下にも及ばない詩的經驗と官覺と奔才とを持つ人々であつたが、漢詩體そのものが既に業に時代の復雜な感情を盛るに足らない舊詩型となつてゐたため次第に萎靡して後には僅かに前代殘留の人々又は新詩形に走る熱心と必要とを欠く一派によつて半ば眞面目に半ば遊戲的に

作られるにすぎなくなつた。假令んばわが詩感を吟味することに相應の熱心を見せてもあらゆるわが詩感を完全に近い程度に盛りうる型式としての漢詩を自ら完全に認め得ないからである。

漢詩壇はいふ迄もなく、短歌、俳句の沈滯した空氣に安逸の痴夢をむさぼつてゐた者でも、草創時代の新詩壇の作者等に比較すると遙かに優れた詩才の所有者であつたことは、さきに述べた。急進者と保守者との對照論の立派な擧證となるものである。

（三）

「新體詩抄」の價値及位相は既にのべたが、終りに、此詩集には注目すべき二三の先驅者があつて、此詩集の作者らは、その前衛の所業に示唆されて起つたことを述べなければならない。

短歌の一體に密接して長歌の存在したことは、萬葉以來の長い歴史を持つてゐるのであるが、萬葉集廿巻に短歌が四千百餘首に對し長歌は二百五十首あつて、その後の諸集はじめ歌人の間には長歌の作が段々少くなつて來てゐる。萬葉の長歌だけは十分にその値を認めねばならぬものが多い。長歌は五七五七五七を連續せしめて最後に七音一行を以てとどめてゐるのが本體である。この長歌がついに榮えなかつた理由は、五七の效果以外に單調を破る詩的波瀾がない上に、短歌の一體が國語の基本調に起つて最も妥當な長さに於て簡勁の表現を完する故、形に於て劣點ある長歌はつひに順當の發達を見ずして功を短歌にゆづつたのであるが、その事以外、國民性の抒情の本態が單純にして簡素の形式を根本的に好む約束にあつたことも見免してはならない。長歌以外には、「拾芥抄」によると五七五七七七體を短歌と稱して一體を別けてゐるが實はこれも長歌に加へてよいものであり、旋頭歌は五七五七七に五又は七音一行を加へたものをいふのである、之も形の歴史から見ればいはゆる短歌の變態と見てもよい。混本歌も五七五七だけで短歌に一句足らぬものであるから短歌に屬する異體と見てよい。連歌は金葉集に一體をなしてゐるが連作にすぎない短歌である。「八雲御抄」に、「昔は五十韵百韵とつゞくることはなし。たゞ上句にても下句にてもいひかけつればいまながらを付ける也。今のやうにくさることとは中頃よりのことなり。」とあるによつて明かであらう。今様歌は「吉水院樂書」に「今様の殊にはやることは後朱雀院の御時より也」とあり、その初めについては「郢曲相承次第」に、「敏達天皇御宇。土師連八島歌始之、着赤衣人。夜々付歌之。其聲甚絶妙也。」とある。要するに、今様とは現代詩の謂で神樂、催馬樂、風俗歌などの調子から、藤原氏のさかりの頃に

新境致を開拓して一般の嗜好に投ずるにいたつた俗謠の一種となつたものでこれ亦注目すべき詩體ではない。たゞ、今樣といへば、普通、慈鎭和尚の四季歌があり、七五調で八句を一首とする。これは新體詩が確定してから後でも唱歌の意味で愛誦された佳詩であるが、この形が一種の新形式を持つてゐたことは、よしそれが直に源流とならなかつたにしても注目すべき古體であるに違はない

明治に入つてからは「神奈川の僧辨玉の長歌の如きは、一機軸を出せる新體のもの多くして特に紀念すべき作者なりとす」。(日本大文學史卷五)といふ記事もある通り、長歌の作者としては本居豐穎、日下部足穗、渡邊重春等ないではなかつたが、他の詩體と共に萎靡してゐたことに變りはない。明治二年に福澤諭吉の著はした「世界國盡」は傳來の七五調を以て唱歌の便宜として、地理歷史を述べたもので「太平記」の東下り、謠曲、淨瑠璃などの七五調文體を眞似ただけのものにすぎない。同じ作者が明治六年に「暗誦十詞」を出したがこれも亦同じ企てのために作られた歌唱の形で、「明治文學史」の著者が、これらが「皆後の軍歌の素をなし」たものと見たのは當つてゐるが、それは直ちに「新詩歌の先驅」ではない。最後に、明治十四年十一月小學校唱歌科用として「小學唱歌集」初篇が出、つゞいて第二第三篇が出た。その緒言に、音樂取調掛長伊澤修二が、「今夫レ音樂ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ」一般必須の科たらしめるべく「客年特ニ音樂取調掛ヲ設ケ充ツルニ本邦ノ學士音樂家等ヲ以テシ且ツ遠ク米國有名ノ音樂教師ヲ聘シ百方討究論悉シ本邦固有ノ音律ニ基キ彼長ヲ取リ我短ヲ補ヒ我學校ニ適用スベキ者ヲ撰定セシ」めて東京師範や女子師範や兩校の附屬小學の生徒に試して見たのが本書であると云つてゐる。樂曲は西洋のそれをそのまま採用したものが多く、歌詞は西洋詩歌を意譯したものもあり唱歌として古歌を用ゐたものもあり新作もあるが、歌詞は多く陳套な國學者のマンネリズムで固まつてゐていふに足るものがなかつたが、原曲と合せて偶然にも一種新樣の風趣を生じたものも少くなかつた。例へば、初篇第十八「うつくしきわが子やいづこ」はBlue Bell of Scotland より、第二十の「螢の光」は人も知る通り、auld Ladge Syne の曲調を採り、第二十四「思ひいづれば」はScotch Melody (讃美歌第六十八)より、第三篇第五十六「才女」は Annie Lanrie を第七十八「菊」は T. Moore の The Last Rose of Summer を、第八十九の「花鳥」はゲーテのHeidenröslein によつたといはれる。「新體詩抄」は新詩の第一步、「小學唱歌集」は音樂の第一段をなすものとして各史的重要をなす

ものではあるが、盛られた感情の藝術的價値は、かへつて「小學唱歌集」の方が多かつた。まことに、この集の中に收められた平淡ではあるが嫺雅な、單調ではあるが優美な、美しいセンチメンタリズムを淡々とたゝへた曲唱が、當年以後の青年子女の青春の夢の醇母とどれほど多くになつたか計り知るべからざるものがあるので、文學史的重要の一點から視れば、いふまでもなく「新體詩抄」の方をあげなければならぬが、直接に且つ感情的に端的に實際に於て民族の感情に新味と纖細とを注入した點に於ては新らしい詩抄よりも古風な唱歌集の方が重視されなければならないからである。德川名教の名殘りが今尙强く、人間自然の感情の僞はらぬ自由な柔軟な發露といふことに機會を與へたのはあの詩集ではなくしてこの唱歌集であつたからである。

から見て來ると、直接に「新體詩抄」の先蹤になつたものは一もない樣に考へられるが、實は、以上の凡てが新形式の礎となつてゐるので、その外に、作者らは直接に曲りなりにも西洋詩を讀んで用語の多趣多樣、取材の廣範、表白の自由等を感じ直ちにこれを新體詩の上に應用したものである。井上の記述に從へば、發刊當時の實情はかうであつた。明治十五年三月井上が東京大學の助教授となつてその當時大學に設けられた編輯所で東洋哲學史の編纂をすることになり、每週二回東洋哲學史の講義をつゞけてゐた。その頃、理學博士矢田部良吉が植物學教授として任に在つたが、ある日、沙翁のハムレットの to be or not to be の獨白の個所だけ譯して編輯所へ持つて來て「見てくれ」といふので井上は讀んで見ると「言葉は練れてゐないけれども、併し案外意味がよく判つて移りがいゝやうで」あつたから譯詩に望を起し「稍々賞めた」のである。一體井上は其二三年前から漢詩を書いてゐたが、漢詩でも新らしい試みはして見たが國語で是非やつて見たく考へてゐた矢先き此譯詩を見たので、早速それに圈點をつけて評語を添え當時彼が前年に杉浦重剛と發刊した「東洋學藝雜誌」に掲げたのである。所が矢田部の親友、文學博士外山正一が丁度その時編輯所に同席してゐて、同じ文章を譯して翌日持つて來て見てくれといつたので見たが夫れ夫れ特長のあるものであつたので「まア卿か激ましだやうなことを云つた」處から後日二人が譯詩や創作詩を持つて來て見せてくれるやうになり、大抵評點つきであつたが、特に圈點澤山であつたのが拔刀隊の詩であつた。

拔刀隊

外山正一作

我は官軍我が敵は
天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たるものは
古今無双の英雄で
之に從ふつはものは
ともに慓悍決死の士
鬼神にはぢぬ勇あるも
天の許さぬ叛逆を
起せしものは昔より
榮えしためしのあらざるぞ
敵の亡ぶる夫までは
進めやすすめ諸共に
玉ちる劍ぬきつれて
死ぬる覺悟で進むべし

皇國の風とものゝふの
其身を護る靈の
維新このかたすたれたる
日本刀の今更に
又世にいづる身のほまれ
敵も身方も諸共に
刀の下に死すべきぞ
大和だましいあるものは
死ぬべき時は今なるぞ
人におくれて恥かくな
敵の亡ぶる夫までは
すすめや進めもろともに
玉ちる劍ぬき連て
死ぬる覺悟で進むべし

（下略）

此玉ちる劍云々の二句は各聯の繰返し文句となつてゐる。

この詩は軍歌の先驅となつたもので、それまでにはなかつた詩體であり、從つて純粹の詩としてよりは軍歌として見て史的一瞥の要はある作である。その內「東洋學藝雜誌」の讀者でこれを模倣して投書するものなども增えて來て、段々盛んになつたので、井上もロングフェローの作を譯して押韻を試みて見たがこれは當人もよいとは考へずに止めてしまつた。坪井正五郎も押韻を試みた一人である。それから二月程たつと隨分作がたまつたので出版しようといふ事になり丸善から刊行の段取となつて、扨書名を何んとしたらいゝかといふことで色々考へたが、結局、井上が、之を「新體詩抄」と名付けたらよからう。何故ならば單に詩と云へば、其頃では漢詩であつた。日本の和

歌は普通には詩とは云はない。詩と和歌と二通り外なかつたのであるが、其詩といふのは漢詩のことである。けれども今度發行しようと云ふのは詩に相違ないけれども、唯詩と云つたのでは漢詩と間違へられる虞れがあるからして、そこで新體詩と云へば間違へらるゝ虞れはない。それで「新體詩抄」と名を付けたらよからうと言つた所が外山、矢田部兩氏に於ても少しも異論はない、それはよからうといふので「新體詩抄」と云ふ名に決まつた。「新體詩抄といふ名稱は余がつけたのである。」と井上も談つてゐる。これは多分實情であらう。ロングフエローの譯詩の序にも井上は、「余竊に新體の詩を作らんと欲すと雖も、其容易の業ならざるを慮り、先づ和漢古今の詩歌文章を學び、それより漸次に新體の詩を作る路を爲さんとしけるに、一日尙今居士(矢田部氏)ハムレットの譯詩を示さる。」云々と書いてある。

所が、案外に澤山の賣行を見て明治十七年の末に至つて再版し、次第に作者も出て來るに至つた。中村敬宇の如きも自分も一つ作りたいと云つてゐた相である。大和田建樹はその當時同じ編輯所に勤めてゐて、十七年二月に井上が獨乙留學に出發して後獨乙へ手紙をよこして「新體詩抄」の續篇を出したいと云つて來たので井上は承諾したが、他の二人が、何か理由があつたと見へ承諾しなかつたので立消になつてしまつた。大和田は藝術の天分の皆無の人であつたが、詩文に熱心で種々の文學史や詩集や作法やを後に到つて出版してゐる。井上は、獨乙にじ年滯留したが其間に「新體詩抄二篇」と云ふものが出てゐると云つてゐるが、大和田が出したのか、外山矢田部二人が出したのか文章が明かでないが、多分それは竹内節編「新體詩歌」か佐藤雄治の「明治新體詩歌集」の間違ひではなからうか。

(四)

明治文化史の潮流は、西南戰役の結果として歐化主義の勝利か事實の上に示されてから、一きは鮮かに外國文明輸入の氣運に向つたが、早く明治三年に中村正直譯「西國立志編」、明治六年に渡邊溫譯「伊蘇普物語」が出たのを先驅として、翌年にはローマ字論初めて提唱され、十年の戰役平定して、板垣退助等が自由民權說の高唱となり、「大阪朝日」「時事」等の新聞紙、「六合雜誌」「政理叢談」「東洋學藝雜誌」等の雜誌の發刊はこれに力をそゝいで十五年十月中江兆民譯「民約譯解」現はれ、祖父等累代の不足不滿を英國流の功利主義に醒まされ、佛國風の自由主義に油をそゝがれ國會開設の約束となり獨乙流の帝國主義に自足するに至つて政論の横議となり人權の縱談となりやが

て官憲の壓抑となりそして志士と稱する人の下獄に終つた。

福澤諭吉は明治初代文化の代表人である。優れた思索なく深き學殖なき彼が萬人に卓れて時代を左右する實力のあつたのは何故か。明治二年の「西洋事情」、五年二月に出た「學問の勸め」其翌年の「文字の敎へ」等の著書によつて社會敎育者としての天分を極度まで發揮し得た處に福澤の使命があり本質があり弱點がある。一福澤の如きは世界史の重要者に任ずるに足らぬ立場に居り、その所說も概して哲學的思惟の基礎を缺く稚拙な通俗論にすぎないが、一世をひきいること斯の如く目ざましかつたのは何故か。政治の監掌者が君主に近接し政權法權金權を自由にして來た累代の迷信により、今迄出た明治史でも特に膚淺なるそれは政治史を主にして政治家を偉人に崇めねばならなかつたが、歷史の濃霧を切り拂つて仔細に觀察すれば、廟堂に政柄を執つた政治技手の云爲の如きは歲月の一細粒として永刧の水平線に埋沒し去るべきものであるが、この通俗哲學者福澤の文章のみは明治史の文化史的根據を論じるに當つて第一に數へねばならぬ業績であつた。が、其福澤も畢竟時代の所產として當代を談る上にこそ重要人とされうるが、英米に當時渦心となつた實證個人主義の一部をとつて當代の時務にあてはめて實行の權威を以て論證したまでの事で、思索の根據の個的でないことは中村の道義觀も、加藤弘之、海江田信義、津田眞道の獨乙風國家主義も、神風連の舊派學者も、中江兆民の佛蘭西流自由主義も悉く同一である。今にして見れば彼等の粗笨の思念膚淺の視野、蕪雜な行論は、非詩詩集「新體詩抄」の序文や本文といささかも變りはない。

此等の「偉人」によつてかきまはされた政界と思想界と敎育界と宗敎界と一般凡ての社會とを背景とする文學が如何のものかは問はないでも明かである。明治十二年の「花柳春話」は織田純一郎が Lord Lytton: Ernest Martravers の譯書で、これを先づ先蹤として、リツトン、デイズレーリ、マコウリ、デユーマ、スコツト、沙翁、ジユール・ヹルヌ、エルクマン・シヤトリアン等が移殖された。多くは第三流の政治小說で、左もなければロマンスの結構だけの抄譯か冒險探偵小說の類である。その多くは英語からの譯出が多かつたが、譯書の事業の基礎となつた學校は、東京大學や慶應義塾以外に、新島襄の同志社、中村敬宇の同人社、村上英俊のフランス語塾達理堂、尺振八の英學の塾共立學舍等があつた。その後に生れた「春鶯囀」、「繫思談」「春窓綺話」以下無數の譯書は文に於て粗雜であり譯に於て拙劣を極め一として藝術價あるものはなかつたが、その理由は、前述の如く一時の世評に投ぜんとする企てに非ざれば、政治上叢

關が主となつてゐたものであるからであるが、今代になつてそれらを見れば當代そのものの粗野と出鱈目と同時に稚醇ながらのエキゾテイシズムと開放の喜悅とを十分に汲みとることが出來る。が、少くとも明治十五年迄の文化所産の最大の收穫はよく賣れた福澤本でなく、政治小說でなく、實に明治十二年に完成せられた「新約全書」の一卷である。基督教の傳播は、古くにごらんとする、當代の思潮に淸新の氣流を導いた。學校としては、立教學校、東京一致神學會、東京一致英和學校、青山學院が相つゞいて明治十四年迄に出來た。人としては新島を初め大尉ジエーンズ、奧野昌綱、本多庸一、クラーク等があつた。舊書としては「天道溯源」もあげねばならぬ。明治文藝思想史の原動力の一半は誠にこの宗教の力であつた。

拙劣稚幼を極めた「新體詩抄」も、當時の小說論文に比較すれば、さして驚くにもあたらない。世はあげて悉く非詩人、非小說家、非思索家の世界であつたからである。心のデリカなセンシブルの人は、この蕪雜な橫着な速製好きの世の中に居たたまらない。去つて寧ろ實務に匿れ、山林に遁げるでなければ、昔乍らの和歌、漢詩、俳句、小說の舊型の中に安住の居を見付けるより外に道はない。文體を見ても、舊來の和漢文の形が何巾を利かす間に洋文の思想も入つて來て形の上の革新を強ひるにより勢ひ半熟の未完成な僞文章しか出來上らない。二十一年に鬼才二葉亭が「あひびき」の譯文に將來の範を垂れる迄は、雲間をのぞく明星のかげはなかつた。

文章よりも、もつと緻密な感情の結び合せであるべき詩に於て、右の周章狼狽があつたのも尤もである。「新體詩抄」は史的に見て、新詩の第一步を踏み出したものではあるが、生れた事情は他の通俗小說と同じい歐化思潮の偶然なる產物としての立場から出たものにすぎず、他に一として後世に殘すものはなかつた。此第一脚を踏み出した詩壇の行先はどこであつたか。

(五)

明治十五年以後の詩壇は、當代の蕪雜な空元氣の非藝術的時代に福澤の功利主義と中江の民權說と加藤等の國家主義とがくつわを並べて進展して行つた際故、「新體詩抄」の投げた渦紋もます／＼蕪雜な非藝術的の性質となつて目途とする的もなく只廣く一般化されて行つたのみにすぎなかつたのは止むをえない次第であつた。つゞいて出た多くのアンソロヂー中こゝでは「新體詩歌」に就て談らねばならぬ。

「新體詩歌」は「新體詩抄」を主としてその外に當時刊行物にあらはれた作品の收合である。第一集、第二集が十五年中に出

て、第三集、第四集は翌年刊行され、全五巻合本が後になつて刊行され、その外にも此れに類似のアンソロジーがいくつも世にあらはれたが、凡てそれらは「新體詩抄」を紹介する以上の使命も結果も持たなかつたもので、全國いたる處の山村水廓にまで讀れたことは、後年の詩集「抒情詩」の序に國木田獨歩が、「新體詩抄」出づ、嘲笑は四方より起りき。而も此覺束なき小冊子は草間をくぐりて流るる水の如く、何時の間にか山村の校舍にまで普及し、「われは官軍わが敵は」てふ沒趣味の軍歌すら到る處の小學校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。」と述べてゐるのを以ても知られる。その獨歩も述べてゐるグレーの「墓畔吟」は初めの一二聯こそ巧みではあるが終りに近づく程重荷にたえられずしていゝかげんの投遣り翻譯に終つたものではあるが、取材の新奇と形式の清新といふ二點だけから、詩を感じたい心持ちで一杯になつてゐる當年の少年の小胸に喰ひ入つて各人の胸の中で醱酵して原作以上の創作が成し就げられたのである。獨り、グレー譯詩のみでない、此藝術の石器時代の遺作の數々は多く此方法で價づけられ且保存されうるのである。例へば、井上勤譯アラビヤンナイトの如き其種の品の中での逸品とも賞美されるべき佳作で、普通高級藝術と誇稱してゐる、意圖に於て眞摯らしく、取扱ひに於て深刻らしく、作品に於て藝術品らしき香のする品でも精細に省察する時は、乏しい才能を出來るだけ粉飾して美しいらしく　力あるらしく　眞摯らしく、藝術品らしく、而して、現代品らしく特更に粧ふてはゐるものゝその本體は、洞察もなく感激もなく才能もないまやかしものである場合が多いやうなそれとは正反對の立場に在つて、一見何等藝術上價値を野望としてゐない樣に見えて實は復雜な理由により、かへつて面白い藝術價を所有するに到つたものである。「新體詩歌」中には、さきの詩集の作品を殆どすべて收錄し、それ以外に當時相當に唱はれた琵琶歌風の作、及び軍歌風の作、並びに古文中の七五調の吟誦にたえうる一節を書き拔いて收合してある。吟誦用を目的としたことは明かである。この詩集の編者は竹內節と呼ぶ人で、その第一集の序は小室屈山が書いてゐる。その中の次の言は注目すべき一節である。曰く、「蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其內國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル卽チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支フル筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知ラズ苟モ歌ト云ヘバ古言ヨリ外ハ用フルコトノ成ラヌ樣ニ云ヒナセリ此ノ如ンバ事實ニ於テ不都合ヲ生ズルコトモ少カラサルベシ假令ヘバもののふの弓矢ト云フ可キモ今時ハ

「スナイドル」ヲ携フ事ナレバもののふの「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢ト云ハネバナラヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシヲ解セザルノ謬也。」云々。之に出つて見ると、當時の流風として廣く俗語の方面迄用語を擴大したにとどまらず、異國語までも耳に親しきものは自國語としての存在を允すが如き自由の態度に出たことが明かである、その屈山は自由の歌の作者として著名である。

自由の歌

小室屈山

天には自由の鬼となり
地には自由の人たらん
自由よ自由やよ自由
汝と我れがその中は
天地自然の約束ぞ
千代も八千代も末かけて
此世のあらん限りまで
二人が中の約束を
いかにぞ仇の破るべき
さはさりながら世の中は
月に村雲花に風
ままにならぬは人の身ぞ
話せば長いことながら
古し羅馬の國と聞く
その人民を自由にし
共和の政治を建てんため
數多の人のうき苦勞
それをも知らで慾のため
我權勢を張らんとて
再び帝位に昇らんと
企てたりしセサルは
その親友の手にかゝり
議院の中に殺されたり

（下略）

此樣な拙劣と陳套との錯辭を事として而もかへつて、論じる點のみが比較的進んでゐたのは屈山のみでない此當時の人の常である。例へば坪内逍遙の「小說神髓」は今見て難點こそあるが史的見地より考へて立派な立論であるに係らず、その例說作品としての「書生氣質」は持論を裏切る樣な陳腐の文體であつたなど適例である。その外、屈山の

月と花とは昔より
誰が樂まぬ人やある
誰がよろこばぬ人やある

の「花月の歌」や、無名氏の

建武の昔し正成は
肌の守りを取出し（下略）

の「楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌」や、同じく

抑も熊谷直實は
征夷將軍源の
賴朝公の御內に
關東一の旗頭（下略）

の「熊谷直實曉に敦盛を追ふの歌」や、平野次郎國臣の

花の都も秋は猶
夕ふべ淋しき風情なり
名は流れたる淸水や
落來る瀧の乙羽山（下略）

の「月照僧の入水をいたみて讀める歌」などは、始めから諷唱のために作られたものであるらしいが、舊套の言語を使つて新味の少いだけ他の作程の滑稽な感じは少い。特に國臣の作は琵琶歌としてのみ注目さるべきもので「舞曲に擬して作る」久坂國武作の

世はかり菰と亂れつゝ
赤根さす日もいとくらく
蟬の小川にきりたちて
へだての雲となりにけり（下略）

や、屈山の「花月」やと同巧同趣で東下り式の散文律に滑走した美文調にすぎないので、政治家政論家の「風流」がこの邊にとどまつてゐたことの例證となるものである。

が、これらの唱歌の試作はもと「新體詩抄」の本來の目的とするところではないので、明治二十年四月に出た佐藤雄治編の「明治新體詩歌集」はじめ一般に十五年後に出たアンソロジーは刊行の目的上諷唱の性質のものを集めたので集めらた作品は著しく蕪雜となつてゐるのである。右の琵琶唄に類するもの以下になれば明治式の下等野卑な民謠である 民謠は、非常に新らしいものが次々に現はれ且徳川末期のものの復活を見たけれど、新作の特性は、荒々しく、見せかけ元氣で、粗笨で、無思慮でなくば、極端に淫奔で放埒で明治文明の俄造りの新開町氣分を露骨にあらはした輕薄きはまる歌詞で譜も亦昔ゆかしい簡樸は地を拂つて簡單で元氣のいゝ誰れでも口に出來る民衆用の詩歌であつた。たゞ注意に値するは下らなくも何んでも民衆が「詩」を

欲しくなつたといふこと、腹の底から正直な感情を大聲で歌つて見たくなつたといふことである。

（六）

一般がかゝる狀態でゐる間に、「新約聖書」の一卷で、唯物的に墮しすぎた當代に一味の清新な清淨の空氣を注いだクリスト教は、更に、「新體詩抄」の吹き奏した笛の音に立ち上つて先ず注目すべき藝術的第一聲をあげた。明治に於ける單行本の嚆矢といはるべき「十二の石塚」である。

詩集「十二の石塚」は半月湯淺吉郎の作にかゝり、植村正久の序を飾つて明治十八年十月十日自費出版の四六版六十頁價六錢の小册子である。詩材を舊約聖書イスラエル民族說話に採りベニヤミン族ゲラの獨子豪俠エホデが、エリコ古城にエグロン王を刺す一條を和文體五七調長歌風の詩形でうたつた敍事詩の種類である。別に詩才の卓越も形式の斬新もないが、當時にしては未だ珍らしかつた西方舊約の故事を採つたといふこと、「新體詩抄」の蕪雜な詩語に反して、柔かな古雅な言葉をふり合に難なく使用した點などは特色といはねばならぬ。「新體詩抄」の提出した懸案には何の關係もなく萬葉振りの五七古調を古風な詩體で行つたのであるから、新問題の解決には全く風馬牛の位地にあつたものである。

その一節を示すと、

二回　古塚

なつかしきカナンの國の
山のすゑ水の行衞を
はる／＼とうちながむれば
エリコより二人のつかひ
歸り來て敵の本城も
その路もしられにけりな
唐錦旗ひるがへし
雲なして槍と槍とは
朝日さす林のごとく
くろがねの楯と楯とは
岩垣のますら武男は
大將ヨシアのあとに
したがひて水際に下る

（下略）

用語はすべて在來の枕辭も王朝時代の雅語をも厭はず使つてあるだけ清新の感は些かもないが、「岩ばしるヨルダン川」といひ、「朝日さすエリコの城」といひ、「ヘルモンの峯の雪かも」と

いひ、「エルサレム古りぬる城の」といひ一種の新味ある古風の調和を見せてゐることは前きに述べたアラビヤンナイト譯文の效果と同一である。

のぼりたち角笛たかく
吹ならせばいくらともなく
たきいだす篝火の影
きら／＼と波にうかびて
敵人の行衞さやけし

など冗漫な叙事詩體の中にも效果ある描寫の所々にあるは作者が邪氣も野心もなく一圖に説話の率直な詩化を志したためと覺える。

この詩集は群馬縣上野國碓氷郡安中驛の出版で、序文も詩界の問題には干係もない記事であつたから多くの人には知られずに終つたらしい。作者は小冊子を出して直ちに渡米した。彼の作は此後も「國民の友」にしば／＼かゝげられてゐる。

基教徒の詩情は、その他宗門の冊子に多く散見して、しば／＼卓れた天分の所有者もあつたが、宗教的信仰の直寫に急で藝術の效果を顧みないため折角萌み出しかゝつた詩才もそのまゝになつてしまつたのが多かつた。

讃美歌の譜は、「小學唱歌集」などにも採用されてあつて、哀婉と敬虔とをふくんだ篤信の歌唱は、その歌詞こそ多く陳套を出なかつたけれども、信者たると非信者たるとを問はず、感傷の肉聲的表白のはけ口に苦しんでゐた青年子女に等しく愛誦されたことは夥しいものであつた。右の詩集作者半月も明治三十三年に初まつた各派合同讃美歌編纂の際の委員の一人であつたのだが、西洋人と接觸の機會も多くいはゆる基教文學に夙く親炙したため此宗門には文學の鑑賞眼創作心に長けた青年が多くて、一般文學の餘りに賤俗野卑な傾向に陷つた際しば／＼清新敬虔の氣を注いだことは爾來一切にとどまらなかつた。基教文學の感化は明治十九年ホワイト師譯本「天路歷程」の出版前後から、詩心ある信仰者の手によつて著しく、試みられた。讃美歌に、遠く明治七年の頃長崎のダッチ・リフォームド及びメソヂストの兩ミッションが協同して小歌集を公けにした事あつてより、明治十三年頃畿内の宣教師會議が讃美歌大集冊子編纂の成案を決してそのまゝになり、明治二十三年「新撰讃美歌」が出るまで、各派で盛んに編まれたので、それらの歌詞曲譜の壇に與へた内的培養の影響は見のがすことの出來ない深く廣く強いものがある。

(七)

新體詩勃興の氣運は、悉ゆる靑年の心に壓伏されてゐた詩情を眼醒まして、試作の出るものいよ〳〵多く、竹內節編「新體詩歌」は十九年四月に第一集より第五集を合冊して出版し、二十年四月には佐藤雄治「明治新體詩歌集」あらはれ、同じ年に山田美妙、尾崎紅葉、丸岡九華合著「新體詩選」が世に出でた。(「新體詩選」については詳評したいと思つて手をつくして探したが原本が遂に見付からず遺憾乍ら他日入手の幸機を待たねばならぬ)

此年には山田美妙の婦人雜誌「伊良都女」が發刊され、女性の作詩を募集して掲載した。新體詩一般募集の嚆矢であらう。二十一年五月には硯友社の機關雜誌「我樂多文庫」(後、「文の庫」と改題)發刊され、同じく新體詩欄を設けて新詩の一般化に資するところが少くはなかつたが、硯友社は尾崎紅葉はじめ、(美妙をのぞいては)一人として詩の味解ある人物が居なかつたからその影響も廣く深い個所迄には及ばなかつた。この年の「東洋學藝雜誌」に落合直文の「孝女白菊の歌」が掲げられた、原作は「巽軒詩鈔」に收められた井上巽軒の作るところ「阿蘇山下荒村晩」で起る平凡の漢詩であつたが、これが

阿蘇の山里秋ふけて
眺め淋しき夕まぐれ
何處の里の鐘ならん
諸行無常と告げわたる

で初まる一篇の叙事長篇になると優美な、且つ難かしくない雅語を中心とする典型的の新體詩體で、國文の素養ある譯者故「新體詩抄」の粗笨もなく、新らしい試みの企てもない故一般に受とられ易く、さてこそ全國靑年男女の溫和なセンテイメンタリズムの好對象となつて、それより長くうたはれることになつたのであるが、それには、作曲の殉情的搖曳がよく歌詞のあはれさを生かしてゐたことを特書しなければならぬ。此詩の普遍の一半は作曲に負ふてゐるのである。「輕騎隊」に初まり「自由の歌」を經て「白菊の歌」に及ぶ、新體詩と唱歌との同一化、すなはち、詩と音樂との一致は、要するに原始時代の音樂が石器時代の詩歌に一致したのであつた。ために、新體詩の普及一般化が容易に靑年の間に侵入して根强い根據を据えんとするけはひを見せたが、傳來の雅語の形を中心とする國語を生かして七五五七の單調な型にはめて諷唱の用に供し藝術的効果をもあげようとするのであるから、その結果は中々思はしくなかつた處へ新創の形式の粗野を忌んで、センシブルな、詩情ある、才人は不相變す漢詩、和歌、俳句の舊型に赴くので、大才ある詩家を得がたく、新體詩をます〳〵流俗の玩弄に任せる勇壯活潑の軍歌か、左もなければ單調「優美」な唱歌にとどまつて、藝術としての一の位相を文壇から確められることは尙出來相もな

かつた。

竹馬の友二葉亭と轡を並べては言文一致の新創に力をつくし、十八才既に薩摩の美少年を材にした一篇の詩を公刊した美妙齋山田武太郎は創造の才ある青年であつた。彼の語學の力は、當時にあつて原作各書をも容易に讀破し、英文をも自由に綴つたといふ。その成敗のあとのみでは正確でないが、兩人賦性の基本を訊ねて、美妙と紅葉とを比べると、美妙は時世に先んじて勝手な企てを立て、紅葉は時世を睨んで巧みに自己を調節した。人間としては知情意の平衡のとれてゐること紅葉に如くはないが、美妙は情の赴くまゝに言動行爲してそのため失脚の非運を招いた。紅葉は時世を一歩も先んぜず又遅れず絶えず時世に伴れて進展し準備し勤勉しただけ時代人物としての興味以外まことは何ものもないが、美妙は善惡とも明治末期にも出づべき新人があやまつて硯友社時代に生れてしまつた觀がある。美妙の言行も明治大正の時代ならばもつと善意に解されて生きてゆくのが樂であつたらう。美妙の一生は未完成の一生であつた。そして新創の一生でもあつた。その人物の型は紅葉よりも狹小であつたが、明治時代のロマンティシズムの第一鞭をつけた當代の新人であつた。まことの詩人の氣禀ある才人であつた。

この美妙は、紅葉とともに坪内逍遙の「小説神髓」に感じては一生を文學にさゝげんと決心し、「新體詩抄」の普及を見ては自らその最初の藝術的成効を得んと努力した。當時の「東洋學藝雜誌」が赤門派を代表せるに對し、專門學校は「中央學術雜誌」を出して之に對抗し、逍遙の「小説神髓」も最初は此れに連載されたのであるが、その「小説神髓」の蒔いた種は夙くも明治二十年七月發行二葉亭作小説「浮雲」の第一編となつて現はれ、次いで、言文一致玉成の名文章「あひびき」は二十一年七月の「國民の友」に掲げられた。その「國民の友」は文壇の登龍門であつたが前年二十年二月の創刊に係り、同じ月に「哲學雜誌」も出れば、翌月には蘇峯の「新日本の青年」出て讀書界を衝動し、十月には音樂學校設立され、越えて二十一年には美術學校が設けられ、雜誌「女學雜誌」と「少年園」とが創刊されてゐる。

時代は次第に開化の新樣式を整へて來たが一般は尙舊趣味の繰返しに滿悅皷腹してゐた。その一般讀書人を對象とする文壇は硯友社の舊態文學の新粧姿に自足して、水の如く浸潤し來る外來文明の刺戟を白眼に見ようとしてゐた。基督教といふ精力に鞭打たれ、科學的文明に眩惑させられて、その舊趣味の世界も次第〱に新樣に移つて來た。少數の新人は夙くも清新の思想

感情を叫ばんとしてゐるが、尙低迷する舊世界の暗霧に心迷ふて大聲叱呼し新道を打開する勇氣はない。由來、保守的であり然し乍ら爆破的である感情は、逡巡しながら外氣の變樣を夙くも感じて焦燥してゐる。北村透谷と山田美妙とはこの時代の生んだ雛子であつた。美妙は「伊良都女」に種々の試作を發表してゐるが、詩形の發達の上に注目すべき試みであつた。八六調の作などは、後年岩野泡鳴が模倣したものであるが、技巧に於ては泡鳴よりも美妙の方がすぐれてゐた。美妙の作は、二十一年秋の作病後の吟で五五調を試み、「夏の貧家」の七五調と「つぼすみれ」の七五調とを「國民の友」にかゝげ、その他の作をも集めて二十四年に詩集を公刊した。

(八)

明治二十二年八月「國友の民」夏期附錄は、SSS(新聲社)同人の譯詩叢「於母影」をかゝげた。譯者は森鷗外、市村讚次郎、井上通泰、小金井君子、落合直文等であつたが、量に於ても、質に於ても森鷗外が一番多く且優れてゐた。

由來、國民性や時代精神の頹廢に陷つた際、あるひは、草創の際、それに新空氣を注入するには他國文學の譯出に待たねばならぬ事は、中世の英國、近世の露國、近代の獨乙を初め一樣の例であるが、明治詩も亦「新體詩抄」に譯詩を主とし、此「於母影」に譯詩を主とし、美妙もマツケーやカルメン・シルバ(ピエル・ロテイ譯)の移殖を企て、これより明治時代を通じて詩に文に飜譯の全盛時代を現出するに至つたのも無理はない。さて此書詩の內容は、原作を英國の沙翁、バイロン、獨乙のレナウ、ゲーテ、シェツフェル、ハイネ ゲロツク、ケルネル、ホフマン、フェルランド、エルマン、ハウフ等に仰ぎ、外に高青邱、平家物語からの意譯もある。

ミニヨンの歌

其一

「レモン」の木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわわにみのり
青く晴れし空よりしづかに風吹き
「ミルテ」の木はしづかに「ラウレル」の木は高く
くもにそびえて立てる、國をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其二

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は
そらたかくそばだちひろき間もせまき間も

皆ひかりかがやきて人がたしたる石は
ゑみつつおのれを見てあないとほしき子よと
なぐさむるなつかしき家をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其三

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて
いななきつゝさまよひひろきほらの中には
もゝ年經たる龍の所えがほにすまい
岩より岩をつたいしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

感情、形式まつたく舊態を蟬脫して古風なる雅語の間自らなる異邦情緒のにほやかなひろごりを見る。名手の作といはねばならぬ。

青邱子

青邱が身は、いやゝせに痩せにたれども其昔
五雲閣下にすまいけな、清き姿ぞしのばるゝ。
いつか此世におりぬらん。しが名つげぬも哀なり。
草枕たびねせず、鋤とりてたがへさず。
さびにさびたり劍太刀、亂れまさりぬ文の卷。
五斗米ほしと腰を折らめや、城降さむと舌掉はめや。

(下略)

今まで粗野輕燥な漢詩好きに玩れて居た青邱が、こゝでは愛ましげなロマンテイツクスピリツトの青年の姿となつて異邦的の歌口をしめしてゐる。

マンフレツド一節

ともし火に油をばいまひとたびそへてむ
されど我いぬるまでたもたむとも思はず
我ねむるとはいへまことのねむりならず
深き思のためには絶えずくるしめられて
むねは時計の如くひまなくうちさわぎ
わがふさぎし眼はうちにむかいてあけり

(下略)

かういふ譯詩になると、明朗な寫象を清新のかたちで現するところかへつて三十年代のそれよりもはるかに新鮮にして精到にして藝術的である。

譯詩の工合も色々かへて試みてある。意譯。字譯。韵律をうつせるもの。及び、韵律平仄意義字句凡てを移殖せんとしたもの。マンフレツドの漢詩譯の如きは、第四のものであるが、原作とは全く遠いものになつてゐるのは漢詩に變へた以上當然であ

るが色々の點でこの連篇詩叢「於母影」の史的價値は爭はれない。西詩を最も早く原詩の香をいく分でも保存して移しゑたのは實に「於母影」であつた。

新聲社は、最初、文學雜誌の發刊を企てゝ結ばれた結社であるが、たま〳〵國民の友から寄稿を依賴されたのを機會として、一夜を徹して萬葉集を同人が集つて讀んだことがあつてその際に出來上つたのがこの詩叢である。鷗外は改訂「水沫集」序に「何の方針もなく取りて、何の次第もなく集めたるものなれど、社中の人々がしのばずの池に臨める樓上に夜を徹して、此一卷を編み成しゝ時を憶ひ起せば、毎篇毎闋毎句毎字、一として深き感慨の媒ならぬはなし。就中 Capri（カプリ）島上の喇叭の響を傳へし落合直文氏のみは、早くも亡きひとの數に入りぬ。」と書いてゐる。

この詩叢を今迄の詩集に比べると卒然として時代が一變した感がある。新らしい悲哀をもたらし、新らしい憧憬を導き入れ、新らしき歡喜を吹き込んで、荒燥粗雜な日本青年の小汚ない足を近代詩壇の燦然たる一室に追ひ入れたのはこの詩叢の効績である。同人らは「國民の友」よりの報酬を資金としてその年十月、雜誌「しがらみ草紙」を發刊した。後年、ロマンティシズムの勃興に原流なした基石の一である。

この年には、大和田建樹の詩二十三篇、短歌二十四首を集めた「いさり火」が出た。

海のあなた

いさり火遠く見えそめて
　沖よりよする暮の色
なかば夢路とすぎさりし
　たびの月日もいま幾日
　　あゝ戀し海のあなた

親子うちつれ岩かげを
　おくれて歸る海士小舟（あまをぶね）
あすの日和（ひより）の外にまた
　ものおもひなき生涯や
　　あゝ戀し雲のあなた

こゝろ千里の旅びとを
　いつまで吹くか春の風
寐られぬ夜の友とては
　まくらをたゝく波の聲
　　あゝ戀し家なるひと

當時の國文學者の創作の代表ともいふべきもので、何の熱情も感激も省察も苦惱もなくたゞに陳套な雅語を平凡に驅使して表面上優美な趣きをこしらへ上げるまでにすぎない詩であるが、後、いはゆる大學派といはれ古典派と不正當に呼ばれた一派の思想感情用語は多くこの詩風の連續である。こゝに注意を要するは、概ねかくの如き形式を備へたものの中に確然と二個の反對する性質の作が存することだ。同じ雅語を用ゐ、優美の趣きを備へ、文格の正風を崩さぬ雅語詩でも、これと「於母かげ」中の詩とには著しい相違がある。これは髓の髓まで陳腐でつきてゐるが、あれには、古風な措辭の間、かへつて完全に鮮麗な新樣を備へてゐるのは、詩人の詩感の本質が自ら然らしむるところではあるが、一見その間の微妙な徑庭を見のがして玉石同架せしめる眼なき評家の暴批にあつたことと後々一再にとどまらなかつた。詩に心なき世俗の間に入れば尚更のことである。

大和田はその他、ヶ學史、作法、類集まで出して新體詩に對する異常の熱心を示したが詩家の賦性に貧しい人であつたから顧るに足るものは少しもなかつた。畢竟、唱歌の作者にすぎない。

後年文學界によつた北村透谷は二十二歳の青年であつたが、この年四月長篇詩「楚囚の詩」を作つて月の九日に印刷が成つたが三省して慚愧にたえず書肆に走つて中止を賴み悉く印刷を破毀せしめた。その時の自序に曰く、「近頃文學社會に新體詩とか變體詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのけんと奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです。是れが余をして文學世界に歩み近よらしめた者です。」云々。詩は調も亂れ、心もととのはない未熟な作であるが後年の透谷が面影は早くもその鬱悶の表白のかたちの間にうかゞはれる。

その當時の芽生時を感じて詩に志した人に、大西操山があり戸川殘死があり磯貝雲峯があり、矢崎北邱散士があり、中西梅花道人があつた。美妙は「溫雅な雲峰子、端麗の殘花子、一種飄逸の梅花入道」と評した。美妙の「醉沈香」は小說「胡蝶」の發賣禁止を慨して作つたものだといふ。二十三年中「國民の友」に出た諷刺詩である。後年の與謝野鐵幹が同色の作もこのあたりに感化されてゐよう。

雁　過ぎて　殘燈　青く
ねやの戸に　蟲　歌を寄す
うらめしや　情は　あだなり
友がきは　そしりて　隔てず

鳳凰の　春も　夢　なり
白き　月　ゑがほも　にがし

此等詩人の作品は、新聞で、「國民」、「江湖」、雜誌で、「國民の友」、「女學雜誌」、「少年園」、「日本評論」「伊良都女」及び硯友社の「文庫」などに出た、宮崎湖處子の美文「歸省」は新青年の新感情で歸つて見た田園を殉情的に詠嘆した淸麗の散文詩風の逸作で、後に出たセンティメンタルな美文小說の基となつたもので、中に挿んだ詩も溫和な感傷の靜謐な表白で卓れてゐる。

暮れてゆく日は又明けず
今日も昔となるめれど
たのしき時は故鄕の
追懷(おもひで)にぞ殘りける。(下略)

などは後の作風にも影響し、

天(トマス・ムーア氏原作)
われわだつみに浮しづみ
波より波に舟ゆるぐ
心のあかり智慧の灯に
見ゆるはつらき吾旅路
天より外に休みなし(最終聯)

など凡て青年の空想の世界を匿さずにひろげた所に同時代の僞はりなき反響があつた。

(九)

詩壇最初の詩的論爭を惹起した者は、池袋淸風が詩論を先驅として、美妙が二十三年の暮から翌年かけて「國民の友」に連載した「日本韻文論」であつた。石橋忍月、內田魯庵、路功處士等之を反駁し、美妙之に答へ、しばらく論戰をつゞけたが、二十四年十月同誌上で森鷗外此等の所說の大概を說明批評し、美妙論の中心思想を明快に解剖論討し嚴正の總收を與へて終りをつげた。こゝではその內容に觸れて批判する餘裕がないが、美妙の韻律論は詩の形式論に初まつて詩の本質論に深入りし、美文學、雜文學の差別論に轉じ詩に於ける思想哲學の問題に進んだ。當時にして此處迄進めえたのは美妙の徒らなる新らし好きの才子にすぎないのではなかつた事を示すものである。たゞ、我邦古來の人丸芭蕉も哲理を闡くと能はず、哲學に關することあまりに薄く、厭世の病なきものも猶纖弱の思想をのみ表白したと稱して詩に於ける思想の根本義に謬想を置いたが、鷗外が、叮嚀に駁論して抒情詩の本性を說き、觀世敍情の詩が能く世界の理想、人間の理想をあらはし、唯あらはるるや世界の理想、人

間の理想としてあらはれず、人情の理想としてあらはれ、人情の世界、人間の理想に感じたる果實としてあらはれると云つて「理路に墮する事の」不可を說き、考思に亘らんとすることの不可を說いたのは適切であつた。そして最後に、「情の動くや、その主觀の大小によりて、或は興に觸れ境に感じて、逍遙子がいはゆる一身の哀念を訴ふるに止まり或は生滅因果の理りを觀じて思を萬有の外に馳せおのづから一種の高遠なる厭世主義に入るに至らむ。大主觀の産みたる句には十七言の短かきがうちにも、天晴一幅の小天地圖ありて、寥廓として際なき大天地の影は、此圖中にほの見ゆべし。詩眼ある人の目も枯れず見續けていよ／＼久うして愈其妙を覺ゆるは小天地の圖に對して、大天地の影を望めばなり。餘情とはこれをこそ謂へ。」と結んで抒情詩の形態學の本質に及んでゐるのは當時にとつて特に適切の所論であり評家としての鷗外のあたまを示したものであつた。

明治二十四年には、北村透谷が「蓬萊曲」を著はし、中村敬宇死し、逍遙の「早稻田文學」が出、二十五年には、「女學雜誌」に雲峰（彼は後渡米して客死した。）の物語詩「知盛」「日本評論」に殘花の「朝の歌」いで、硯友社の「文の庫」現れ、半月再び壇に上り、北邙散士口語體譯詩を發表し操山盛んに活躍した。二十四年に注目すべき二詩集がある。一は「新體梅花詩集」であり、一は「青年唱歌集」であつた。

（十）

梅花道人中西幹男の「新體梅花詩集」は森鷗外、森田思軒、德富蘇峰、幸田露伴の序跋をそへて、年の三月に發行された四六判小冊子である。梅花は、飄逸の詩奇骨ある逸人を以て稱されたが、出版後程なく狂氣して死んでしまつた。

梅花が「九十九媼」の一節を示すと、

息きれぬ　歩むに腰のほね痛し
杖もがな　ア、杖もがな
竹にもあれ　木にもあれ
手頃の棒のほしきことよ
こゝらの里に小供は居ぬか
　　居らぬと見える
居らば遊ぶに良き場所なるに
遊ばゞ小供のつねとして
棒ちぎり履わらじ
とりちらしあるは必定
ア、棒もがな杖ほしや

こい種性格者の恒として、感情の直寫に急なる餘り、その詩の他人に對する感銘の姿が、わが本性の詩心と相違して映することなきや否やなどの點に全く考慮を置かないため、しばしば天空開濶の放膽さが單純奇狂な滑稽詩に類するにとどまるやうな結果は、この梅花の詩にも多く見えてゐる。が、彼の性格、彼の詩は純一のオリヂナルのものであつた。その點に於て美妙は遂くこの人に及ばない。この過渡期に注目すべき唯一人は梅花であつた。

美妙の「新調韻文青年唱歌集」は二篇よりなり、序に戲文めいた短文が置いてあつて、各大祭日の祝頌歌はじめ五十四篇と、「伊良都女」に掲げたものからの拔萃と覺しき投書家の作が四十一篇收めてある。

美妙はこの集であらゆる調子を試驗してゐる。

いつの日に死ぬるとも
とく心澄ましてな
澄ましてん　とく心
月きよく　風白し。
(「病後の吟」最終行)

の如き五五調。五七五調の「夢」。「楽しかれとて」一の七五調は第一行だけ破調である、

萬象のゆめ、いま覺めて
大地やうやく　ぬば玉の
闇のころもを脱ぎ去りぬ
薄むらさきのよこ雲に
誰が織りまぜの唐にしき
こがねの色の目眩さよ
(下略)

美妙は口語體へも手をかけたが、文語調の形式に口語を盛つたので、民謠風の詩ならばよい場合もあるが、多くは何方つかずの未完成になつてしまつた。すなはち、

山櫻原のあけぼのは
いつ　より　春が　うつくしく
花　の　かげ　に　は　夢ごゝち
夢ごゝち　に　も　花のかげ
峯の　そこ　こゝ　めの限り
こゝろにかゝる　あと　ばかり
こゝの谷間も　そのきしも
ひじりの　すみか　紅の雲。
(春の曙第三)

その他「つぼすみれ」も雅俗語を交ぜの作であつて民謡風の味になつてゐる。

譯詩には、キヤンブルやマケイの作があるが多くは意譯しすぎて原作の趣はない。

月　冴えて　星　暗し
耳　しひて　さとく　聞く
永き　日に　飽く　人ぞ
短かしと　世を　思ふ

（「世はその儘」一節）

などは彼の韻文論の主旨に添はんとした作らしいが美妙のものには深刻の省察も觀想もない。言葉を美しくあやつつてそこから感情を打出してゆく。そこに一種の詩趣が自らかもされる。「青年唱歌集」も隨分よく讀まれて、相當に次期への感化を有する書ではあるが作そのものとして永く殘るものは殆どない。

新體詩は明治十五年に初まり二十五年までに一期を過ごし、雜誌「文學界」の發刊と共に第二期に入らんとする。

（十一）

第一期の末葉を飾つた詩人梅花道人、美妙齋兩人以外に、二十二三年より二十六七年かけて詩壇に活動し又漸くその處女作を公けにした詩家は、「文學界」同人以外に、「騎馬旅行」の軍歌を出して（二十六年）全國年少のこぞり歌ふところとなつた萩の家落合直文、「女學雜誌」の磯貝雲峰、淺田谷花、深田白衣、緒方流水及び岩野泡鳴、「國民の友」宮崎湖處子、湯淺半月、北邨散士矢崎嵯峨の屋、「少年文庫」に河井醉茗、横瀨寶湖（夜雨）、「日本新聞」や「二六」に與謝野鐵幹、「落穗草紙」に蒲原有明（二十七年末）「青年文」の太田玉茗、一柳芳風（二十八年）批評家石橋忍月、哲學者大西操山、以下がある。正岡子規が「日本」、「日本人」に新體詩を試み、松岡國男あらはれ桑田春風出で野白米次郎遠く米國より其詩をよせ、薄田泣菫、兒玉花外、平木白星、吉野臥城、繁野天來、三木天遊及び「帝國文學」の同人が出たのはこれより二三年の後第三期にかゝる頃である。

此頃より詩壇は、自ら流派によつて幾つかに分裂し、各特色を競つて詩的主張を積極的に試みるに到つた。これは明かに新詩壇といふ有機體が成立せんとする徴證であり、泰西詩潮の感化が漸くゆきわたつて來る前知である。强ひて分類すれば、擬古派 Pseudo-Classic School といひ、浪曼派 Romantic school といふものの次第に對立せんとする形勢を示し來つた前提として、便宜上の名稱たる大學派といひ文學界派といひ國民の友派といひ早稻田派といふものが次第に集團的意義を形造らん

とする昧爽である。

山田美妙は第二期に入つてよりは小說にうつつて餘り多くの作は見せずに終つてしまつたが、その影響は深くも當年の青年の間にゆきわたりその示唆によつて當時の詩壇に志し、あるひは創作上の感化を受けた詩人が少くなかつた。醉茗の如きは「青年唱歌集」に茅海散士の名で「花散里の弱法師」、「鐘の音」の二篇を寄書してゐる。

美妙、梅花は透谷を生み「文學界」にまで波動を及ぼし、大和田建樹は國學者の創作心を刺戟して擬古派擡頭の機緣の一となつたことは疑ひない。落合は本質上擬古派の先人と見做すべきではあるが、鷗外一派との交友關係から示唆されて詩潮の改新的急務を痛感して、和歌革新の第一聲を發聲する人となるのであるが、新詩の上の先聲はない。

右過渡期の作家の中より主なる人々を論評すると、磯貝雲峰は主として「女學雜誌」（二十一年十月創刊）に作詩をかゝげ、またバイロンの譯詩もある。五七調敍事詩「知盛」はその代表作である。何等後進の目をそばだゝしむる劃期的意義なき詩人であるが此間の詩家の中正の主なる一人と稱される。

太田玉茗も早くから詩を發表してゐたが、今尚古い人に記憶せられてゐる逸作は「宇之が舟」の一篇で、

宇之が舟

見わたす限り秋の野は
千ぐさの花となりにけり
其野のすゑに一すじの
清きながれぞながれたる。

清くながるゝ其川に、
蓮の葉ぶねをうかべつゝ
まつりし靈を里人の
おくる夕べとなりにけり

（下略）

を破題とする一篇は靜かなバラッド風の小詩であり、感情も純日本風で新感情も激情もないけれど、氣どらない、落付いた可憐な作ぶりが一部の青年の好尚を惹いた。

一體に、此時代の通性として、新味を雜ふ新人の新作は（たとへば美妙の如き）衒氣にみちて人格と詩の上にあらはれた感情とが本質的に一致してゐないため色々の非難をうけたのは當然受けるべき非難であるが、その非難の中には、頑迷な感情の上の保守主義から一概に新らしいものを斥ける傾向もあつた。美妙は實に此兩者に祟られたのである。又、それと反對に、何

等の新派はなくも氣取らず、衒はず、落付いて人間性と詩感とをぴつたりと一致させて行つた詩人の作は値以上にもてはやされる傾きもあつた。玉茗はその一人であり松岡國男もその一人たるを失はない。尤も國男には玉茗以上の澄み切つた感情の冴えがあつたけれど。以上二種に入らざる者は梅花の如く日本風に皮肉を云ひ昔風に卑下しつゝ嘲罵してそれが自ら滑稽とも見られる樣になる。泡鳴もその影響をうけた一人である事は爭はれぬ。たゞ泡鳴は梅花以上に積極的であつたから意外に時代と共に押進んで自己をぐん〳〵與へられたる天分の範圍で擴大してゆけたのである。

　大西操山は推理の性能に著しく卓れただけそれが邪魔となつてその作は何れも說明的に流れて描寫の趣きはなく、感情の閃きも少い。「少女と胡蝶」は二十六年四月九日の作で翌月の「國民の友」に載つて佳作の名をとつたものであるが割合に缺點の少い、そして、割合に感情が理智に阻害されずに流れ出た作である。

　道（二十六年「國民の友」）

月ならば指して云はんを
花ならば取りても見んを
月ならぬ月の光と
花ならぬ花のにほいと
さしていひとりて見るべき
　ものにはあらじ

波やめば音と消ゆれど
風ふけば木の葉と散れど
散りゆかぬものこそ見ゆれ
きゑゆかぬ音ぞきこゆる
　波に木の葉に

路の邊の草葉の露に
まどかにも宿れるものを
尋ねつゝ究めもゆかば
飛ぶ鳥の翼はなくも
空かける雲に乗らずも
天地のひろき心の
　知れざらめやも

題詠めいた說明に墮しすぎる缺點は亡しがたい。かと云つてゲダンケン・リリックの本態まではいふまでもなく進んでは

をらぬ。詩才の少いわり合にこゝまでも書けたのは詩そのものに對する彼の愉悦と詩そのものに關する彼の知識との庇陰に外ならない。

その知識が書き殘した若干の詩論がある。二十三年の十二月に雜誌「日本評論」にかゝげられた「詩歌論一斑」及び、二十五年七――十二月「青年文學」所載「詩歌論」は好評あつた論文で、詩の使命、詩の形態學、日本語の詩的有用等をよく通俗的に說明した論文で、かの美妙齋が「韻文論」爭と並んで詩の意義を詩人や普通人によく飲み込ませることに成効した文章であつた。その外、詩論としては、「國詩の形式に就て」、「劇詩論」、「詩人ホイッティアーの信仰」等があり概ね精到の論義を自信を以て說述した確論であるが、「國詩の形式に就て」に於て元良勇次郎、芳賀矢一、米山保三郎、伊藤武一郎等の所論を辯駁して根本律呂を說いた如き當代での佳論であらう。

石橋忍月は二十三年の憲法發布に際し、獨逸詩をならつて

何をか日本の祖國と謂ふ？
薩摩の國か、山城か？
健兒の生るゝ地を指すか？
技術に長ずる地を指すか？
ヲー否な否な否な！
吾等の祖國は猶廣し

で初まる祖國歌を作つたが、作はもとより拙かつたけれど當時の國民主義を粗笨乍ら歌つてゐる。國民主義そのものがこの種の發聲を要求した程度のものであつたのである。

湯淺半月の「天地初發」(二十六年「國民の友」新年附錄)は同月末に出た「文學界」創刊號の彙報「新年現象」に「天地初發」の譯者はヘブリウー語に詳しき人にて、舊約文學の研究家なりとは、雅歌論などにて誰も疑はぬなるべけれど、詩人としてヘブライの偉音を大和琴にあはせんほどのジエニウインの大才たりとは少しき疑はしき事なるべし。」とあるが、その同じ月の「文學界」に古藤庵（藤村）が

バイロンをあはれみて
戸川楳月に寄す

秋風に人の墮落を嘲れど
名にしをふ風雅の迷ひ、ゆめうつゝ
あるときは戀にうかれてあざ笑ひ
あるときは劍を抱いて泣沈み
一年三百六十五日
高き枕のひまさへ見せじ。
バイロンや、いかに狂ひのたけくとも

花にはゆるせ春のあけぼの。
あはれともいふべきものをなげゝとて
なげけとて天は君をや作りけん
見せばやな君が旅寝のいきどほり
花を花とも思はざる世に。

といふ一篇の透谷、禿木、夕軒、撫象子、天知等に與へた諸篇を掲げてゐるが、これらはなほ著しく幼稚で且つ措辭が詩感を不自然に朧ろにして樗牛をして朦朧派と呼ばしめた缺點が澤山にある作でこれを「天地初發」に比すれば遙かに劣つた出來榮えである。

「天地初發」はヘブリウ語より「創世紀」を譯出したものといはれる。(岩野泡鳴「新體詩史」)が、事實は、たゞ結構布置原材を「創世紀」に仰いだだけのことで作月の詩想は悉く全篇にゆきわたりみちてゐる。その破題、

一

靜かなるものにもあるかな、
永遠の黒暗いとふかき
水の面。
水襲ふ黒暗ふきはらふ
靈風のうちにあやしき
聲すなり。

「人の子」よとよばれてひとり
おどろけばかさねてよびぬ、
「人の子」よ。

よぶは誰ぞ、神の使か、
羽衣の黄金の袖の
音もせず

よぶは誰ぞ、神の子等か、
雲鳥の紅錦の裾の
影もなし

見あぐれば黒暗ふく風に
聲ありて三たびよびけり
「人の子」よ。

(下略)

初め數聯に見る形式と內面との深沈な一致は、當年の通弊にするたゞ肆ひまゝに故なく外形律に轉々するのでなくて、實に自然のかたちを形して動かない所は、これを藤村晩翠以後の人々に比しても劣るものではない。が、どこか飄逸な牛月は、自然の詩才を有し乍ら又一面に著しくそれを愛撫して育てる様な氣持ちを缺いてゐて、徒らに心の赴くままに任せすぎたため、心性丈の一張一弛に從ひ出來榮にも甚しい徑庭が生じた。うまいものはずつとうまく、拙いものは極めて拙ないのである。そのため彼の名は實際の詩品以下に見られてゐて今尚彼の名を呼ぶものが少ない。

いつの頃の作か不明であるが「大極殿」といふ一篇の初頭に、

冷泉橋をただひとり
わたる疏水の風さむみ

などあるは晩翠のよく使用した語法であり

「天地初發」の

高峰の岩に鷲さけび
殘る日影に小雨ふり

云々のうたいぶりも藤村が好んだ平明にして優雅な套語と一味相通じるものがないではない。彼の作は集めて「牛月集」

（三十五年八月文淵堂）となつてゐる。その詩集の廣告欄に「古英雄」といふ一篇は、「外山井上諸氏の「新體詩抄」に先つ數年の創作にかゝり」とあるが、この「古英雄」とは「十二の石塚」のことで、勿論「新體詩抄」より後に出たものであるが、若し創作したのが事實明治十五年以前であるとしたならば、「十二の石塚」は「新體詩抄」以前の作であるわけであるのだが、「十二の石塚」は長歌今様の形に西方古傳を盛つたといふだけで、よしんばその技巧にすぐれた所はあつても「新體詩抄」のやうな意識的革新創造の企になつたものでないし傳來の長歌を宗とした跡が著しいから、その史的位置は「新體詩抄」と同架されるべきでない。「百猿舞」の如きは泡鳴が「淺薄的な滑稽」だともいつたが、これも彼の性質をよく現はした、鋭い皮肉にならない、輕い冷かし半分の滑稽で淺薄な滑稽は酷評であるが、當時盛んに詩文の上に行はれた、自分を卑しくした冷かし、氣嫌をとりながらのサーカズムである。牛月はこの程度の嘲世に自足し、自己批評と自己創造の心度が足らなかつたからこのまま彼の詩才は永久に亡びてしまつた。ひとり牛月のみではない、明治時代無數の詩作者も亦中には著しい天稟を見せた人がないではなかつたが、環境、時代の感化と自己分析の精神とに注意ぶかい省慮を置かなかつたため、蕪雜にして粗笨、妥協的にして

傲淪的な當代の非藝術界的雰氣に卷き込まれていつの間にか何處ともなく消失してしまつた人ばかりである。たま〳〵殘された「老大家」も昔の夢を再性する以外に何等の新程は示してゐない。尙「天地初發」と時を同じうして刊行物に出た無名の「若竹集」は湯淺紫苑の作詩とともに留意された。

岩野泡鳴の「十字架の影」は二十六年に雜誌「世光」に出たが、彼の粗野なしかし眞面目な、情僞を分別してしかも飄逸で滑稽な性格は夙くもこの詩の頃に歷然とあらはれてゐる。「われ一渡び懷疑の俘となりてより未だその束縛を脫したりといふ能はず」云々といふ生眞面目なはし書をつけて

狐疑より狐疑を生まざれば
失望落膽甚き敢へず。
いはほに立ちて僞善者の
そら飛ぶ鷲に向くを見よ

（下略）

など歌つたがまだ詩作の契機を知らぬ駄作であつた。又、その翌年、「評論」や「女學雜誌」に「樹だま集」といふ二十餘篇の詩が連載されたが、その當時、「女學雜誌」に「石切り」といふ諷刺詩を書いて、石切りが世が厭になり、坊主となり、醫者ともなり、また大きな岩となつたが、自分の臀部をこちり〳〵と切りとるものがあるのに氣が付いて、もとの石切りにかへるといふ筋で、醫者になつたところでは

世界の人に下劑飮ませ
腹の下り切つた時
米屋を兼ねて見たならば
さぞ儲かることであろ。

風になると、

宇宙の森羅萬象　天籟地籟
萬竅に怒號す、風はしも
あまつ大神のひりかける
おならなるかも、とこしへに
かげなく香なく、恥ぢなく
はゞかりなしと自由自在。

（下略）

など云つて、作者の後の說明では「當時の獨創なき哲學者、表面的宗敎、並に紳士淑女——云ひ換へれば、シルクハツト、フロクコート、束髮、長振袖のお化け——を暗に罵倒した」ものであるといふことだが、この「淺薄的な滑稽」は彼の生來の滑稽で、滑稽と眞面目とは彼に於ては楯の兩面であつたのである故、この一觀點を見のがすと彼がとんでもなく偉く見えた

り、とんでもなく世間師に見へたりするが、實に尋常平凡の詩人にすぎなかつたのである。この詩のため、掲載雜誌は華族女學校から購讀をことはられ、基教徒は不敬だといひ、教育者は野蠻冷酷無禮だと反對し、一部の人々から泡鳴は遠ざけられるにいたつたと、如何にも壯烈な快心事の樣に自分で書いてゐるが、そんなことではなく「お行儀」の八釜しい當時の紳士淑女に用語が露骨で叱られただけのことで、諷刺詩の効果が社會に直接したといふ程の事ではない。泡鳴は尙同じ誌上に「魂迷月中刄」といふ劇詩をもかいて、口語をも使用してゐる。

　はじめ無くば、わが身も
　またをはりが無いのに、
　思想以てうまれ來たり
　思想以てこのわづらい

と云つた調子の連續で彼が死ぬ迄脱し切れなかつた押しつける樣に說明して描いたと思つてゐる惡癖は早くもこゝにあらはれてゐる劣作である、これを「早稻田文學」の金子筑水が攻擊したに對し、「靑山評論」の記者であつた河上淸が「酷烈慘憺の悲劇」だなど稱したのは評家の出鱈目である。

北邨散士嵯峨の屋は「文の庫」や「國民の友」に詩作を公けにしてゐた、北翻譯や他の散文と同じく特色のない熱情のない平凡な物であつたが、詩の中にどうかして口語を生かしたいと苦辛したゞ努力は、泡鳴や梅花や美妙やとひとしく失敗してしまつたが、口語詩史の發達の上から見ても相當に認めねばならない。

同志社の宗教家湯谷紫苑が二十六年の「女學雜誌」新年附錄に翻譯劇詩「ヰルヘルム、テル」を公けにしたり、高田半峰が讀賣にスコットを紹介したり、その前年英國詩人エドヰン、アーノルド Sir Edwin Arnold (1832-1904) が來遊したのでその名作と當時の英詩壇にいはれた「亞細亞の光」The Light of Asia(1879) を部分譯して「國民の友」に出したものなどもあり、二十七年三月には鹽井雨江の譯詩スコットの「湖上の美人」あらはれ、評論としては、民友社の「十二文豪」が企てられ、ワルズオルス(宮崎湖處子著二十六年十月)ゲーテ(高木伊作著同年十一月)エマルソン(北村透谷著二十七年四月)「文壇に於ける平等主義の代表者ウオルト・ホイットマンの詩について」(二十五年十月「哲學雜誌」夏目漱石)等が出たが、漱石以外は多くは紹介、又は、紹介の紹介にとどまり、原作に親しんで獨自の見識を吐露する人はまだなかつた。ひとり鷗外は、詩作に近くなつてゐたがその强靭銳利な批評文にあらゆる方面の問題をも完全に咀嚼した洞察ある識見を示めし低級な文壇の標

準をぐん／＼と引き上げて行つた有樣は遠く群小に擢でて一入眼醒ましかつた。關根正直。饗庭篁村等が時の東京專門學校に和文朗讀法科を設んとしたので、「讀賣」紙上で東京專門學校文學科一學生と名乘る贊成論者と目就社員咄々生といふ不贊成論者との間に開かれた朗讀法問題が八釜しくなつたについて鷗外は、坪内逍遙の說を批評した「朗讀法につきての爭」、「逍遙子の朗讀說を國民の友に公けにし、さきに述べた韻文論の解決者となり、池袋清風と平仄を論じ、雲峰の詩體論を訂正した。不知庵が譯集「烏留好語」にボウ、エッヂウオース、ブレット・ハート及びアンデルゼンが收められたことも記憶しなければならぬ。

譯詩は、新詩そのものが譯詩に嚆まり、ＳＳＳの譯詩の事業がその勃興動因となつたほどであるから、もとより、詩に趣る者の關心を牽かないわけはなかつたのであるが、いまだ一冊の譯詩集としてまとまつたものの出る機會がなかつた。その時その先鞭をつけた者は、歐詩に心醉する美妙でも外國文學に明るい鷗外でもない、擬古派先行者の一人として國文學者の創作を試みつつあつた大和田建樹であつたのは一奇である。

大和田建樹の「歐米名家詩集」三卷は國民文庫第一篇第二篇第三篇として二十七年一月より三月迄に博文館から出版された。飜譯の事は、小說が政治的興味から出發して十年代に榮えた以外、二十年代に入つてはジユール・ベルヌの冒險物、ゾランスの探偵小說の流行となつて一時批評家島村抱月をして探偵物の藝術價値を檢討させるほどに流行（その頂點は二十五年の頃であつた）したが、その外のものではチエンバーの百科辭書が文部省から刊行された頃から學術的方面の移飜が盛んに行はれたが譯詩の單行本はこの三卷が初めてである。尤も「英詩和譯一名ユニオン第四讀本詩譯」といふ二百六十頁の寸珍書がマスター・オブ・アーツ工藤精一校閲越山重玻譯で同じ書肆から出たことはある。「名家詩集」は自叙に「余が此度歐米名家の傑作を飜譯して世に公けにするは、或は香を失ひし菫に類するなきかの譏を免かるべからずといへども、よかれあしかれ一國の中に先づ之を栽培して試みんとするのみ。云々」とある通り、譯しただけでも譯さぬよりはよからうといふ凡そ譯詩につきものの謙遜な言葉があつて、上卷にはシエリーの「告天子」を初めに、ホウヰツト、ロングフエロー、ポープ、ヘリツク、コーンウオール、ホルムス、モーア、バーンス、キヤムベル、ローウエル、テニソン、ブレーク、フード、コレリツヂ、ペイン、アルドリツチ、バイロン、キングスレー、テーロー、サウシー、サツクヴオル、ヘイネ、ゲーテ、クーパー、ウヰーサリー、アーヴヰング、スコ

ウト、ドーペル、シッバー、カルヴァーリー、ウルフ、ジョンソン、グレー等四十篇の多數が收錄され、その中で、グレーの「野寺の庭」は名たたるエレヂーの事、コレリッヂは名作小詩「戀」を、キングスレーは「三人の漁夫」を、ロングフェローは「村の鍛冶」をとつてあり。ペインの「スヰート、ホーム」初め亞流詩人の群まで入つてある處より見れば、米國邊りの通俗詞華集の類をとつてそのまま譯したのかと思はれる。大和田建樹樹譯とあるが、自ら譯出したものか詩に拙な語學者の業に手を入れたものか、生平の大和田の詩語とはいささか變つてゐる。

告天子　其一　　シエリー

天つ空より雲井より
　おのづからなる調べもて
滿ちしこゝろを歌ふなる
　汝が身をいざや祝はまし
たのしき魂よ待てしばし
　汝は鳥にて鳥ならず　（下略）

といふ樣な原詩の風趣には關はず、しかしたつしやに七五調に押込めてある。

戀　　コレリッヂ

喜怒愛樂は人の身を
　心のままに動かせど
　　戀の使はほかならず
戀の焰はおのが手に
　養はれてぞ燃え出づる　（下略）

樂しき我屋　其一　　ペイン

黃金（こがね）の臺（うてな）玉の床
　よし其内に住むとても
　　賤が伏屋に異ならず
天の授けし樂しみは
　ひとり我屋に降り來て
　　清き光をはなつなり
我屋々々たのしき我屋
　我屋にまさる家ぞなき　（下略）

中卷には、沙翁、キャムベル、ユーゴ、サウシー、コンウォール、ブラウニング夫人、ロングフェロー、モンロー、ブライアント、モーア、ロージャース、ウォーヅウォース、バイロン、ク

ーパー、テーロー、ヒーマンス夫人、キングスレー、ギツフォルト嬢、シェリー、ビュルゲル、マッケー、フード、スミス、スコット等の三十二篇を收め、沙翁は「人生七期」、ヒーマンス夫人は「カサビアンナ」、シェリーは、「雲」、モーアは「夏の殘花」、スコットは「湖上美人」、最後のは抄譯である。

夏の殘花　　モーア

其一

春におくれてたゞひとり
咲ける薔薇(さうび)のあはれさよ
親しき友は散りはてゝ
誰と昔をかたるべき
枝をかはして助けあふ
莟も見えず花もなし　(下略)

雲　　シェリー

其一

われは海より川瀬より
雨のしづくを運び來て
しぼめる花を救ふなり
われは日影を遮りて
森の木の葉の打ち休む
晝寢の夢をまもるなり
ゆられて母のふところに
休む莟を呼び醒ます
露をもわれは貯りたり
霰と雨を振りまきて
野を白くしつ青くしつ
雷聞く毎にうち笑ふ。　(下略)

下卷は、バイロン、ディッケンス、ラブレース、ブラウニング、同夫人、コレリッヂ、ラム、モントゴメリー、ホイッチーア、バーンス、ヒーマンス夫人、ゴールドスミス、スティヴンソン、ロングフェロー、サウシー、キングスレー、ウォーヅウォース、マーロー、ラレー、ファーガソン、バンヤン、グールド、パーシヴァル、シルレル、ウーランド、クーパー、ロージャース、バイロン、スペンサー等の三十二篇を收錄し、內、ゴールドスミスは「荒村」を、ウォーヅウォースは「郭公」をバーンスは「夢」をとつてある。

郭公　　ウォーヅウォース

其一

やよ幸福なる新客よ

あなうれし
　われは汝をぞ今ききし
鳥と呼ばんかさては又
　さまよふ聲と呼ぶべきか　（下略）

羊飼の戀　　マーロー

其一
來ませ吾妹子我かたに
　いで戀へとなりおはせ
されば此世の樂しみを
　共につくさん朝夕に
　　野にて森にて岡邊にて。　（下略）

此等の例で知るごとく、如何なる詩も悉く一様の唱歌調に引き直したため皆同一詩への同趣同調の詩の如くにおもはれる。コールリツヂの「戀」を七五に移すは尙佳であるが、シエリーは容易に七五には收まらない。が、七五のみで押してゐるのではない。ロージャースの「舟子」に

　なごりをし故鄕は
　　煙のうちに影きえ

　　塔さへ見えずになりにけり

などは詩そのものとして變化に富むものであり、沙翁の作を

おもしろや
　浮世の舞臺蹈みわたる
　　役者々々の人のかほ
七幕ごとに出で入りて
　かはる役目は何々ぞ

など面白い陰影ある用語である。多くは單調直板な拙劣きはまる譯し方であるにより到底全冊子に目を通すに耐へたいが、各詩には作者の小傳を附した上とにかく原作の意味の大體をよくこなして尙世人の目に新らしい十八九世紀英米詩の最も通俗なる物の俤を傳へた大和田の勞は誠に多としなければならぬ。私は少年の折り、町の文學好き靑年がしば〳〵此詩集を携えて奇聲を發して誦するのを聽いて不思議な詩もある物だと訝かつた記憶があるが、思ふにこの擬古派國學者が手すさみは全國津々浦々に擴がつて「全く日本化せる歐米詩」の相當な功果を擧げえたことであらう。

ひとり此詩集にとどまらず、擬古派の人が不思議にも先鞭をつけた個人の詩の譯業の單行本は、二十七年三月開新堂發行するところの西江釣士鹽井正男譯述英國詩人スコット氏著の「今

様長歌湖上の美人」である。初めにスコット傳があり本文は七五調を二つに切つて一頁に四段に印刷してある。すなはち

第一章

その一

モナンの小川　風さへて　光りいざよふ　夕月夜
かげの流るる　谷水を　のみてあきたる　さをしかの
底のかなたの　森の蔭　しげるはしばみ　その下に
妻をこひつゝ　ねぶるなる　夢路の末や　いかならむ
あからひく日の　朝日かげ　ボイルの峰の　山の端に
かゞやき初めし　ほどもなく　さけび〳〵て　狩犬の
山路をのぼる　聲すなり。　峯のあらしの　末遠く
駒のひづめの　おとすごく　吹く笛の音も　きこゆなり

詩句は原詩の大體によつたのみで、ニュアンスもシェードも余く顧みない、たゞ、詩材をスコットと蘇國に借りて譯者が自ら叙事詩を歌つたものといふてよい程度の日本化が行はれ、たとへば

昨日は今日の　昔にて　思ひ返せば　筒井筒
井筒にたけを　かけたりし　われらを膝に　取上て
かち〳〵山や　鬼が島　又はその身が　海山に

云々のごとき譯し方であるから、「歐米名家詩集」以上に日本的な國文であるが、讀んで行くといつの間にか中世の蘇國の昔が馬琴の草紙の文明二十年頃のやうにもおもはれて、凡ての譯詩譯文が然るごとくに、立派な二國併合が紙上に實現されてスコットの如く草艸紙作者の如く鹽井雨江の如き作者の操る絲が不自然には思はれなくなる。さればこそ、これは一種の讀みものとして三十七年間十年間に十二版を重ねてゐるのである。

此等二者の如き譯業は、それ故、固より原作に照して譯し方を云々すべき種類のものではなく、一種の創作としての詩語の使用詩感の流出の程度等を考察するより外はない、取材として雇つた異邦と不思議な合併が行はれて一種の世界を造り上げられゝばそれでよいとしなければならぬ。この書も前の書と同じく今に於て讀むと退屈で危く忍耐の緒を切らすが、當年の讀者には、行れた時文との慣習的近接感の所因から、易々と親密に接觸しえたのである。前者が行はれずして、後者が廣く世に行はれたのは、「湖上の美人」の小説的興味が、單純な抒情詩の風趣のかすかな匂ひ以上に、當時の低級な讀者を牽引したものにす

きない。

二十年頃より二十六七年に及ぶ間に詩文壇にもてはやされた詩人は、可行生が二十二年一月の「國民の友」に譯したシルレルといひ、「梅雷餘薫」のスコツトといひ、「斷蓬奇緣」のエルクマン、シャトリヤンといひ、「狐の裁判」のゲーテといひ、「鷲瓈嚼囘島記」のスヰフトといひ、「該撒奇談」の沙翁といひ、單なる興味として多くは德川末期の馬琴種彥の傳奇趣味の對象を新らしい西歐に求めたにすぎぬもので、これは自然の推移であるのだが、譯詩の興味の對象も亦、八九世紀にまたがる浪曼時代の詩人の作が當然選ばれたのである。

ふりかへつて思ふと、此等杜撰なる初期移殖事業の結果より受ける先入感のため、十九世紀初期バーンズ、ウォーヅウォース等の詩歌はその後甚しく平俗の間に（或は學匠の間にさへ）価値を亡されて批判されるに至つたことは否みがたい遺憾なる事實である。

（十二）

英佛獨各國の國民性主義が、梅櫻桃李一時に咲き亂れた明治十年代は、時代が急調の割合に倘安らかな心持ちでもすごせないことはなかつたのであるが、鹿鳴館の狂歐化時代がすぎて反動的國粹主義が、當時以後の歷代政府の定方針と定まつて來た獨乙風（むしろプロイセン風）の國家主義とぴつたり結合して、風俗に於て歐化主義を排し、社會政策として一般自由主義を斥け、一旦擲つた日本的なるものを再びとり上げて謳歌する心持ちも、普遍的日本主義とまで延長してこゝに民族の理想を國家萬能の標語に示したのは二十七八年役前後からの現象であるが、歐化主義に對する嚴峻な反動は、事實、早くも鹿鳴館狂舞の夜の明日から生れたものである。歐化主義が浮薄なりしと共に此國粹的反動も亦偏狹に失して居た、何方かへ片寄らねばならぬ國民である。國粹家の異邦宗教に對する反感は教育と宗教とを衝突せしめ、內村鑑三の御眞影事件、熊本英學校教員奥村某の「眼中國家なき」演舌一件は徒らに基督教と國家思想とを反目せしめ、其間少數佛徒の國家至上主義への流眄さへあつて西洋的なるものの一般的否定をさへ稱へしめたけれども、帝國主義、資本主義に附隨する科學の應用に基く科學教育、科學思想の進歩は、その人々をして反目しつゝも意を迎へんとする如き二重の態度をとらしめたので國民の感情教育の基礎は、西洋近代思想文藝の徐々なる浸潤により、帝國主義國粹思想と表面的妥協又は無關心の立場にあつてます〳〵十九世紀的なるロマンティシズムの傾向にまで導かれて行つた。

欧洲十九世紀の前半期を蔽ふロマテイシズムは、この頃より、氣流の如くかすかに然し乍ら遍ねくひた〳〵と流れ込んで來た。意識せる自我の權威に瞭然とめざめた人間感情の抒情詩的解放である。更に巧みなウオッツ・ダントンの用語例によればこれは「驚異の復活」the Renaissance of Wonder である。この言葉はあらゆる意識生活の全世界を支配する二つの大インパルスを想定して、一は受容のインパルスと稱し、あるがままの外的世界のあらゆる現象を拒否せずこれを許容してをくインパルスであり、一は、その現象等に糺問、驚異の眼を以て對するといふ理論から出た語であるが、近代ロマンテイシズムはこの言葉によつてその特性を説明されうるといふので、此インパルスの所有者を古代に例を引いて説明すれば、ホラテイウスが前者の詩人にしてギルドリウスは後者の代表であり、英文學で云へば、後者のインパルスはミルトンと共に終つて、更に近代と共に復活した。それが驚異の復活に外ならないといふのである。

本邦に於ては、平安朝期とか徳川中期とかいふやうな特色の顯著の時代以外これらのインパルスの隆替を立證する確實な時代の特色が少いが、それでも、維新後、かき亂され粗雜化されてゐた感情が靜まつて二十年代中期頃より再び一陽來復の姿を見た。新詩のいちじるしい進展につれて長く假睡の痴夢に耽つてゐた短歌道、俳壇の目ざましい革新がひとしく期を一にして實行されたことこれを證する。時花唄の盲目的然し乍ら自然な變遷のあとこれを證する。時花り唄は、西南戰後の、凡そ戰後に必ず見る粗暴な趣味の流行と、洗練された徳川の趣味が悉く毀たれて薩長土田舍武士の非藝術的な趣味が天下の大勢として時代の潛勢力を形造つた秋であつたとの理由に基き、淫褻目にするにたへない開け放しの流行節が、世の漸く目下に趨かんとするにつれて著しくもてはやされのたが、十八九年頃の、やつつける節」に見る自由といふ語の低級化を示す政治興味の街頭歌となり（言葉の概念の低級化は民族の下劣の證左である。自然主義といひ、星と菫といひ、改造といひ體驗といふ悉く珠玉を泥土に委した半開人種の思想に對する不敬虔、趣味に對する反獨立性を談るものではない。）やがて欣舞欣舞節の浮薄な膚淺な政治上の諷歌が一轉して二十七八年の戰爭節に連續してゐるのであるが、當時の時代雰圍氣が生ぜしめた新作唄のみでは流石に滿足が出來なかつたか、その間絶えず古謠の復活と地方民謠の選ばれたる拔擢が行はれたのも注意すべき現象であらう。

散文壇に於ては絶えて久しい元祿文學の復興あり、浪漫低徊精神の頽廢の花となつたものである。一度天下青衿を牽引する

力のあつた基督教も、やがて教會内に早くも生じた因襲の惡空氣に國家に對する卑屈な妥協とより生じるいきさつのため青年は一旦教會の門をたゝいて再び宗門外の自由信者として門外に去つてしまつた。この人生の春のあけぼのの鐘聲を點じたものはいふまでもなく當年の若き詩文人であつたが、集團として局限して見れば、それは何よりも先づ雜誌「文學界」の一團であつたと考へるのは正當でないのであらうか。

（十三）

短歌、俳句の革新が行はれ、元祿文學の復活が行はれ、翻譯文學の興味の普遍化が行はれた私のいはゆる第二期は、手取り早く粗末に受け入れた（これが縮圖文明の島國的急造家福澤諭吉の方針であつたらしく、しかもそれは意圖として成効的に成就されたのであるが）ルネツサンス已來の過程を一またぎにまたぎとび、一氣に呑み込んでしまつてさて顧みて自國文明のあとの再在にかゝる時代であつた。國是の大概が國家主義によつて結定されんとするときであつた。日本主義の擡頭前期であつた。歐羅巴文學運動の運動としての意義が人文史の背景に孑立させて正しく解釋されんとする時代であつた。久米邦武の史論神道は「祭天の古俗」なりが神道家の吟味にかけられた時期であつた。卓れた日本古美術品が、藝術批判の上からでなく、單に御國びいきの心緒に出發して骨董的に拾ひ上げられんとする時代であつた。モールスやミルンに啓發されて先史考古學、土俗學、あるひは又日本傳說學の興味が漸く芽生しようとするフオルク・ローアの原史時代であつた。躬行者神島遼の空想が次第に實現されて當然來るべき「教育と宗教との衝突」の暗礁にまで乘りかゝつたときであつた。

當時、憲法調査委員がもたらし來つたプロイセンの國家主義は、その學文藝術の本質的威力を基として、國家的自覺を獲得せんとあせる日本國民に一道の救拔の光を與へたものである。資本主義に尻押しをされたジンゴイズムの諸外國が、時あれば事あれば半獨立國の憂目に合せずにはをかないと覘つてゐるこの累卵期に、彼等と等しい立場、彼等と等しい性質に迄まひ上らうとあせつた末に、獨逸文明の國家主義に倣つて國家の基礎を堅めようと競つたのは、國家に基礎をおく一切の思想人政治家らの自然に入り込む順道である。そこに少しも無理はない。佛蘭西派の自由民權說といい、基督教の本義といひ、究竟すれば所詮いつかは此の日本人の此の絕對觀と衝突せずにはゐられないものが今までで易々と入つて來たのが寧ろ奇事である。一時は束髮に洋裝となつた婦女の時勢粧が再び丸髷に黑紋

付となつた風俗の變遷にもその間の消息はあらはれてゐる。

議會のふたを開いて見て落膽した國民は、自由民權運動の頃の幻夢が尙眼底にあつたからであるが、明治十年初めてルツソーが紹介された頃、又は、西園寺公望が「東洋自由新聞」を企てた頃の民權的幻夢がそのまま十年後になつて、假令んば實現したにせよ、國民の不滿はなほ同じことであつたに相違ない。

普通の意味でいふ歐化主義は、伊藤博文等の歐化政策に將來された思想傾向をさすのであるがこれは單なる一勢力をなした一小動因であつて、歐化主義は明治元年からの長い連續である。この歐化主義に潮して浸入した基督教は、國民性との間に必然の化合を生じるに至らざる前に早くも此の大暗礁に衝突したのである。

普通選擧といひ土地國有といふ如き陳腐な合言葉はいしくも遠く三十年前の此時代に呼ばれてゐる、三宅雪嶺が片山潛やガルストと共に開いた社會主義の研究會は二十三年末に出來た。上野岩太郎と大道和一が民友社も自由黨もごつぢやにして同じく社會主義の研究團體を設けたのは「教育勅語」が下つた翌年である。が、これらは今迄の浮薄な御祭り騷ぎをとにかく研究まで引上げたにすぎない。國家といふ概念をはなれて、當時の民衆に、社會といふ思想の存在は解き難き謎語である。このとき唱道した基教徒の世界主義的思想が國家を存持する教育の方針に邪魔となつて引つかゝつたのは無理でない。その時の基教徒そのものがかなり浮華な態度であつた上に宗教を植ゑ込む國土の地味を見てかゝらなかつた。內は新舊神學の塔鬪ぐあり外は反動國粹主義の異邦人に對する反感あり、こゝに初めて今迄の坦道つきはてて此一大山關にかゝつたのである。

基教が行き惱んでゐる如く、いゝかげんに將來した英國式實證哲學も、フランス流自由思想もこゝに立ち止らねばならなくなつた。抽象的權利思想の單純さに哲學的根據がなく、ミル、ベンタム風の功利說の俗解に複雜な思想背景の諸問題が悉くはときかねたのである。

獨逸國家主義と共に入つた獨乙哲學は、當然當時榮えてゐた舊理想主義哲學であつた、ハルトマンでありヘーゲルであつた。が、その輸入も、通達者が單なる哲學の教授に過ぎずして、哲學を思惟しうる人ではなかつたから、個人の哲學として體驗もされなければ、從つてそれが普遍妥當性を帶びて一般化されるだけの力量もない單純幼稚な上辷りのしたものであつた。

坪內逍遙の點じたリアリズムの炬火は、幼稚なる小說境に單なる詳叙主義として孵化された。この精神は自然主義が入るま

では正當に理解されなかつたので、單に幼稚な原始的寫實主義が元祿文學特に西鶴の省筆的寫實法をやとつて來て漸く今迄の低級な傳奇小說主義の對症療法としたのである。しかし、元祿文學の復活にも、リヤリズムの提唱にもそこには必然出づべき深い原因があつた。

新詩壇の第二期は實にこの時代に初まるのである。眇たる一同人雜誌「文學界」は、思ふに當時のいはゆる「識者」にとつて、白面青衫の些かな兒戲としか見えなかつたらう。が、歷史は一切を平等の沙地に置いて結果からして判斷するものだ。「文學界」の青年らは、學殖に於て當時創成された博士等に劣り、見聞に於て早くも世界を巡廻して步く貿易業者にも及ばなかつたが、この二十代を越えたばかりの青年らの胸には祖國二千年の歷史の起伏があり、維新後幾多の變亂の記憶があり、而して、當代の思想、當代の感情の一番鮮らしい芽生があり、一切の時代の諸問題の縮縮があつた。この歷史にあたゝめられ、この空氣に孵化されて、この孵卵期にのみ初めて出づべき何ものかを抱いて生れ出た彼等の小胸には祖國二千載の傳說が波打つてゐるとひとしく、海の彼方の清新體（ドレトエ・スティル・ヌウオボ）の諸藝術の感情がうごめいてゐた。粗野なる混迷から、幼稚なる騷鳴から、新たに蘇生したこの古い島國の人文を救ひ上げて、泰西諸國の藝術圈に於ける收穫に全くひとしい何ものかを生み出さなければならないと思惟せしめられたのである。

凡そ此感は單に「文學界」とのみいはず、當時の眞面目に問題を取り扱ひうる青年の何人にもあつたものである。國家意識の藝術圈に於ける純粹に近い發動である。俊敏の若き學匠逍遙鷗外に、それがあつた如くに、大學才子漱石、抱月、梁川、樗牛、獨步等にもあつたのである。共感情に厚薄はあるが、擬古派にも「文庫」派にも民友社一派にも亦あつたのである。而して「文學界」は、たまたま、一番若き知識欲つよく潑溂の清氣を失はぬ異邦興味多き青年の一群れであつたがため特にその集合的活動を史的に注目され易い立場にあるのであり、又その先立者北村透谷の慘死によつてそこに一入ロマンティックな背景を添えてゐるのである。

（十四）

「文學界」は、二十六年一月三十一日に創刊號を出した。同人は北村透谷、島崎藤村、戶川秋骨、馬場孤蝶、星野天地兄弟、戶川殘花、やゝ遲れて上田敏、寄書家に松岡國男、樋口一葉、大野洒竹、寄書したことのあるものに田山花袋、伊良子清白、田岡嶺雲、太田玉茗、大西操山、武島羽衣、高安月郊らが

あり、四六倍判五十頁の小冊子で最初は、「文學雜誌」「文學界」と標題を置いてあつた。

その第一號には、「悲曲琵琶法師」（古藤庵）、「吉田兼好」（禿木）、「阿佛尼」（天知子）、「文章の道」（巖本善治）「富嶽の詩神を想ふ」（北村透谷）、「漫詩」（無聲）附錄に「女歌仙家集」（大和田建樹）、「兼好法師家集」、「阿佛乳母の文」等あり外に彙報としての「新年現象」、「新年雜誌」、又、「群書一斑」といふ研究欄もあつた。「悲曲琵琶法師」は島崎藤村の作で、六齣の「高戀の悲戀處女の亡靈となりて卑俗肉情の痴男に煩悶し、偉大の尤物琵琶の悲曲と成りて陋俗大家の肉塊を冷罵す」云々と書き添えてある言文一致の對話を詩風に印刷した詩劇である。ポエティック、ドラマを企てたものであるが、僅かに聲の數に賴んでアクセントの妙を有たない日本語の特に口語體で一行一聯の詩的獨立性を立てる事は地體無理故これも單なる劇曲の韻文的發聲の程度に終つてしまつた。禿木の兼好は、「世をすつる人はまことに捨つるかは、すてぬ人こそすつるなりけれ」と云つた圓位に青年の苦惱を寄せて評傳したもの、禿木が一生の流風は早くこゝにうかゞはれる。天知が阿佛尼も「アヽ彼れが悲痛の歷史は要するに「戀夫の神影」一あるのみ而して能く道の爲に犧牲の勇を捧げしめしなり」と云つて「濃情悲慘なる文學」十六夜日記の筆者を論ずることに托してしばらく時世の惱みを訴へたもの「富嶽の詩神を思ふ」（透谷子）は一流の雄勁悲壯の散文詩に傳說の山岳を想像してバイロンを思ひ、ホーマーを考へ人麿赤人西行芭蕉の歩いた道を感じて、祖國の先入が尙「この詩神と逍遙するが爲に、富嶽の周邊を往返して形なく像なき記念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず人間なほ味あり」と結んでゐるが後年の詩才は窺はれるも決して佳作ではない。古藤庵（藤村）が「漫詩」數篇も尙未來にその秀拔を托した稚い習作にすぎない。「文學界」は三十一年一月五十八號を終刊號として消滅したが、その尤も活動したのは、北村透谷が死んだ二十七年五月十五日の前後より二十八九年かけてのことであつた。

この當時、二十八年の「帝國文學」四月號に上田敏の「希臘思潮を論ず」が出てヘレニズムの概略を感想的に記したものは、「文學界」同人の嘆賞をえた計りでなく此種の青年が等しく愛讀した文章であつて、「文學界」にも、獨逸流でも英國風でもない「センシュアスなる」佛蘭西風の記文で物した此一篇を讀み、西歐文明一切の淵源を基督教以外に認めぬ輩はルネッサンスの勃興を見て何と考へるかと云つてゐる。藤村は二十八年五號で「あゝウエルテル、汝は新しき世界を歌へる天才として千

古の詩人にはぐくまれたれど、猶獨逸の男性の粹の粹なることを失はざるにあらずや、然らば直ちにこれ日本の男性なりともいふべき特性特色の、かのヘルマン、マイステルと異れるところはいつれぞ。この胸中日本の粹純なる思想を宿せりと言ひ得べき男性は吾人これをいかなる處に學ぶべきや。あゝシャーロッテ、汝は青春年少の詩人の心に映じたれど、深くも「ライン」河畔にさくべき花の色を宿せるに非ずや。夕顔か、小春か、梅川か、重の井か、お夏か、直ちにこれ日本の女性なりと云ふべき特色の、ビーナス、ビートライス、マーガレットと異れるところはいづれぞ。山吹のさきて流るゝ吉野川の水を汲み、嵐山の春の花をゝちながめて、こゝの男性と生死憂愁を共にすべき女性は、吾人これをいかなるところに學ぶべきや。」と訊ね、一轉して、「今日こゝにあり、吾人は今日と共に歩めり、吾人不幸にして自ら誇るべきものなし、たゞ誇るべきものは今日のみ。これありて萬象味ひあり、これありて始めて吾人は過去の化石たることを免かるるを得んか。今日果して夢か、果して非か、吾人は厭世樂天の眞味を解するものにあらず、されど生きたる厭世家は死せる樂天家に勝れりと思ふなり。」と文は辿々しくて云ふ心も幼稚を免れぬが、當時山路愛山等が透谷の厭世主義に無思慮な攻撃を加へた余憤をこゝでもらして、願ふところは「萬想すでに流れて明治の聖壇に入る。」のだ。「歐洲南部の想味と北部の文學とを合せ觀るさへあるに、之に支那文學の美、吾國の趣味の粹を集め、合してこれを一鼎の中に置き、天才の火を以て之を熔かさしめば、まさにこれ一世の大觀にして快心の事業萬古あるべからざるの美なり。あらゆる粹の粹をぬきあつめて、よろづの美を一堂のうちに集めよとは、萬想相交るの今日新らしく心地よき自然の傾向」であると論じ、「なにものを見ても茶にする程の洒落なる心を持てるものは、ダンテの情を守る、ゲーテの情を放つ、二者甚だ調和し難きものの如くに考ふれど、」「香菊と幽蘭とを合せて更にうるはしく新しき想花を開かしめ難しとも思は」ざる故、「ゲーテ、バイロン、シェレー、ハイネ等の詩人は言ふも更なり、十九世紀の新思想に呼吸するものは皆一種不健全なる時潮に浴せざるものなしといへり。これ又吾日本想を琢いて新しき美玉となすべき荒砥の妙なるもの」ではないかと論じてゐる。後切りにいはれた東西思想統一論の一種である。

「文學界」の眞面目は、硯友社とも民友社とも違つて、美にあくがれ、理想を唱へる青年の熱情を基として、わが熱望の對象をダンテに求めゲーテに寄せルネサンスに探り希臘に漁つて、その對象の厳密な一致は同人の間に一貫する處が必ずしもなか

つたけれども、なにとはなく憧れ心地のあるものを何處とない異邦上代に於て來めたい欲望によつて悉く結ばれてゐる。その物としもない、欲求は硯友社文學にも民友社文學にもない、單に英國的でもフランス的でもイタリヤ的でもない、あらゆる國々とあらゆる時代とを縱斷して流れる人生に於ける青春の希望に出發してゐる。それは透谷の詩にも、藤村の詩にも、殘花の詩にも、禿木の美文にも、梅月(秋骨)の論にも、孤蝶の文にも、柳村の研究にも天知の感想にも、ひとしくあらはれてゐる志向である。

透谷は愛山と論戰を開いて、民友社派が、文學は事業である。「第一爲す所あるが爲なり。第二世を益するが故なり。第三人世に相渉るが故なり。」と云つて山陽論を初め、又、事業たるをえざる文學は「第一空を撃つ劍の如きもの。第二空の空なるもの。第三華辭妙文の人生に相渉らざるもの。」として「文章は事業なるが故に崇ぶべし」と結んだに對して、人生に相渉らさる文學が何處にあるか愛山生が文章即事業と宣べるのは結構だが、その云ひ方によると都會の家屋の如く相接近したものの如くに思はれさるをえないからそれがよくない。と稱し、聖淨にして犯すべからざる文學の威嚴は「事業といふ俗界の神に近づけられたるを以て損すべければなり」と云つて當時一派の考へた通りの文學神學論に踏込んでゐる。愛山の文學は、一口に云ふ實用文學であり、透谷の文學はその當時のいはゆる理想文學である。人生に渉るといふ言葉の意味を愛山は極く卑近に實用的に考へすぎ、透谷は京山の寫實主義のやうな意味で用ゐ、用語概念に於て二者は互ひに相違し、而も二者ともに誤謬に陷つて居るが、愛山が此筆法で終始してつひに文學が判らなかつたに反し、透谷は愛山の用語に若氣の一圖から誤解を重ねたけれどもその思惟する所は首尾一貫してよく彼の獨立せる主張となつてゐる。透谷は實用主義を痛罵して、吉野山の櫻を引つこぬいてサツマイモを植ゑることは、福澤先生を同志社の總理とすると同じく不可であるといひ、明月によもすがら池を廻る踏青翁は此を見貫く心あつてからだと稱し欣然と自足して臥に縛られしを知らぬ淺薄な樂天家を嗤つて、彼らは「狹小なる家屋の中に物質論者と共に坐を同じくして泰平を歌はんとす。歌へ汝が泰平の歌を」とののしつてゐる。此れは二十六年二月の稿であるが越えて四月には「明治文學管見の一、快樂と實用」を論じ、つづいて管見の二、三、四として「精神の自由」、「變遷の時代」、「政治上の變遷」を述べて再び愛山に對して、その論刄を擬してゐる。

愛山はじめ蘇峰らは詩の判らない實際家であるから二者の論

鉾は互ひに空中で並行してゐるのである。愛山は透谷の空想を罵つた。當時にとつて、愛山の實想は相當に尊いものであつた。が、透谷の空想も亦同樣に相當に貴いものであつた。而して、愛山の實想はその時その場を整理する實力を持つてゐたが、未來にわたつて默悟する力はなかつたけれど、透谷の空想、厭世觀、華文は後に自然主義文學の酵母ともなり、ロマンティシズムの基石ともなり現代文學の精神すらも豫示してゐる。空想に焼かれてそして實想に悶死したのは透谷である。

こんな力を持つて生れた透谷の詩はどうであつたか。彼はあり餘る詩感を整理する閑もなくてぢかに紙の上にたゝきつけた。彼の藝術は拙劣な未成品である。詩そのものとしては用語も蕪雜であり、詩想も稚醉であり、將來の詩壇に對して直接の寄與をする程のエポック、メーカではない。二十六年九月號に「眠れる蝶」を書いてゐる。佳作の一である。

けさ立ちそめし秋風に
「自然」のいろはかわりけり。
高梢(たかえ)に蟬の聲細く、
茂草(しげみ)に蟲の歌悲し。
林には、
鴫(しぎ)のこゑさへうらがれて、
野面には
千草の花もうれひあり。
あはれ、あはれ、蝶一羽
破れし花に眠れるよ。

詩感の卒直な流出が、一味の悲調をふくんで衒氣もなく自然に、屈曲する處なく各必然に完了して七五の間に短調を挿んだのが變化を生じよく成功の域にまで達してゐる。第二節は

早やも來ぬ、早やも來ぬ秋、
萬物(ものみな)秋となりにけれ。
蟻はおどろきて穴索め
蛇はうなづきて洞に入る。
田つくりは、
あしたの星に稻を刈り、
山樵(やまがつ)は、
月に嘯むきて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ、
破れし花に眠るはいかに。

この第一句と第九句とは變化の態が些し亂れてそのためや、全體の形が崩れてゐるが、詩感の性質は第一聯をよく受けついでゐる。第三聯は、

破れし花も宿假れば、
運命のそなへし床なるを。
春のはじめに迷ひ出で、
秋の今日まで醉ひ醉ひて、
あしたには、
千よろづの花の蜜に厭き
ゆふべには、
夢なき夢の數を經ぬ。
只だ此ままに「寂」として、
花もろともに滅えばやな。

この寂しさは本然の詩語の叫びである。此詩の聲調は著しく藤村に感化を與へた。終聯の結句は凡そこの種の抒情詩の本義を悟つてゐるひとの言葉である。

その外では「ゆきたをれ」、「ほたる」、「蝶のゆくへ」、「雙蝶のわかれ」があるが右の詩には及ばない。「みゝずのうた」のごときは最もかれの詩の弱點を示したものであり、「彈琴」は凡庸である「髑髏舞」は陣容の構想ではあるがさく、感情が具像化されて新らしい美を創造してゐる。之亦佳作の一である。

うたゝねのかりのふしどにうまひして
としつき經ぬる暗の中、
枕邊に立ちける石の重さをも
物の數とも思はじな。
この墓中の安らかさ。
月なきもまた花なきも何かあらん、
たもとに落つるしづくを拂はねば、
この身も溶くるしづくなり。
朽つる身ぞこのまゝにこそあるべけれ。
ちなみきれたる浮世の塵。
めづらしや今宵は松の琴きこゆ、
遠の水音も面白し。
鵜の鳴くはいぶかしや。
深々と更けわたりたる眞夜中に
何にもあれわが故郷の光景を、
胸はどいかにと心うごく。

（下略）

第一句のやゝ息の長い起句が誠によい。全體は大して新味もない情調で謠はれてゐるが、うごいてゆく感情の推移の法に大した無理がないのである。「今小町とうたはれ」た身の果が「ほられたる穴の淺きは幸なれや」と墓を出てゆく下りや「髏頭の山を成しける夢の跡」などは作者自らが眞面目に作れば作る程無心な讀者にはかへつてやゝ滑稽感を與へ其興をそぐこと夥しい。かういふ缺點は靜かな藤村にはいさゝかもない。透谷の爆破する感情が前後をも顧みずに突出するための結果である。

透谷の特色を談るものに、尙、詩劇がある。「楚囚の詩」は二十二年四月の作であるが、自らその自叙に「我國語の所謂歌でも詩でありませぬ。」と云つてゐる如く、新體詩の形を借りて詩劇を試つたものである。

嘗つて誤つて法を破り
　政治の罪人として捕はれたり、
余と生死を誓ひし壯士等
　數多あるうちに余は其首領なり、
　中に、余の最愛の
　まだ蕾の花なる少女も、
　國の爲とて諸共に
　この花婿も花嫁も。

右のやうな書き初して十六聯の相當に長い詩であるが全然詩句には意を用ゐず、たゞ自分の構想の叙述にあせつただけのもの故、大體、詩と稱する言語の有機性をも缺くものであるが、年少肩を怒らして政治の上にわが理想を實現するべく空想してゐた當年の驕兒透谷の風丰はかへつてよく此種の作にうかゞはれる。

「蓬萊曲」も詩劇である。透谷は十六の時富士山に登つてその崇高に感じ世に鬼神といふものはあるものだと考へた事があつたと自分で云つてゐる。二十四年五月二日に脫稿し、月の中に印刷が終へてゐる。この作もかれの缺點ばかりを集めたやうな劣作で殆ど論ずるに足らぬものであるが、透谷の一生を顧み、また、當時の文學を背景として本作に及ぶと初めて一種の意義を生じ來る。透谷は「於母影」中のバイロンのマンフレッドをしばしば見たであらう。

　マンフレッドの一節

ともし火に油をばいまひとたびそへてむ
されど我いぬるまでたもたむとも思はず

といふ調子をかりて、マンフレッドの詩想の厭生觀に共鳴してこの作を作つたのであらうが、それは詩形をなさず、結構をなさず、支離滅裂のものを無理に綴合せたにすぎぬ。たゞ透谷の萬腔の激烈な人生苦はばら／＼のかたちの間に途切れ／＼に稚い然し乍ら熱烈な吐息をついてゐる。「伽羅枕」のもてはやされ、「春日局」が賞され、「三日月」が世好に投じ川上が「板垣退助」を演じて新らしがつた二十四年代に早くこの苦しみを歌つたものは透谷以外にはなかつた。狂詩人梅花は古い停滯した空氣の中で苦しみを控え目に歌つて死んで行つたが、自殺詩人透谷は、新らしい潑溂たる雰圍氣を自ら作つてわが惱みを聲一杯に謳しつゞけて死んでしまつた。

雲の絶間もあれよかし
わが燈火なる可き星も現はれよ、
　この身さながら浮萍の
西に東に漂ふひまのあけくれに、
なぐさめなりし此の靈山、
　いかなれば今宵しも、靄に著きて、
見えぬ、悲しきかな／＼。
　戀しき御姿の見えぬはいかに、
わが心、千々に碎くるこの夕暮

（下略）

概ねこれらの粗笨な機構、感情の自殺は主觀詩人が抒情の才を揃めて演劇の方面に手を延ばしたがための失敗で、二十七年十月早稻田文學誌上「透谷集」の評者みずのやは「バイロン、シェリーだに失敗せし所」と云つて「故人が名を汚すものにあらざるべし」と辯護してゐるが失敗は厥とした事實の失敗である。蔽ふことは出來ない。同評者は又抒情詩につき「想勝ちて形及ばざる」ものと巧みな簡勁の一評語を與へ、「予は透谷子と交遊せざりしを多憾とせず、何となれば彼は活ける如く此の集に於て親しく予に談話すればなり」とその文と人との一致を示唆し、「彼れは明治の文壇に於ける理想詩人の好代表者也」と斷じてゐるのは穩正にして同情ある批評であつた。尙同評家が彼は「最も強く感ぜしところのみを云へり。」狂熱、厭世詩人、兩性の戀愛、處女、富嶽の詩神、文學と他界、「その評論に活氣ある所以」はそこにあると云つたのも透谷の評論家としての面目を道破した言葉である。

右劇詩の破題は逍がに意を留めたあともあつてこのまゝでゆけば立派な佳作になつたのだが複雜な叙事と感情とを簡單な詩語詩形に盛るのが困難故次第に形も聲も亂れて氣の毒な失敗

に終焉を告げてゐる。透谷は「於母影」を讀んだ外に、梅花や美妙の讀者であつたあとが見える。この二人を通じて透谷にあらはれたロマンティシズムは、大和田や落合から大學詩人のむれに及ぶ擬古派の一群に對立しないまでも少くとも兩立併在し而もよりはつきりと未來に尾を引いて消滅した明かな彗星の光であつた。

（十五）

透谷在世當時、藝文至上主義を高唱した雜誌「國民の友」は、二十九年末には俄かに文藝獨立論を唱へてゐると、當時の「文學界」時文記者が笑つてゐるが、過渡期の常としてこんな矛盾は「國民の友」ばかりではない、外の何處にもあつたのである。個人に於ても亦さうである。

當代文學の權威であつた硯友社一派がなほ梅靄、鷗文の戲作者氣質をうけ繼いで篤實に思惟した人生藝術の上の事柄でさへ、筆の上では特更に茶化して書くと云つた調子のやり方は、若い新詩人の間には行はれなかつた。が、藝術至上主義の立場から元祿文學復活の波動は此一派をも著しく動かしたので、それは年長國學の素養ふかき殘花が中心であつたであらう、透谷は、粹を論じ、「歌念佛」を論じ、殘花の弔花桂川を評して情死を說いてゐる。他の同人も亦之に類する論評を試み上田敏の德川趣味の如きはその一生を通じて彼の思想に一抹の色彩を添えてゐる。が、「文學界」の興味の對象は、總じて外國文學にあり、ダンテ、ゲーテ、にあり、ヘレニズム、ラファエル前派にあつた。

平川禿木は詩魂ある若き學徒であつた。その小品、「神曲餘韵」は白絹のやうに麗はしい散文であり、「草堂書影」はペイターが佛ありと上田敏が評した好文章で、詩こそ書かなかつたが彼の小篇は「グレー氏の風雅の歌」といひ、「薄命記」といひ、「南歐詩影」「伊太利初代の抒情詩」といひ恐く詩より出でゝ詩よりも美しい詩心ある散文であつた。「文藝復興期の事を想ふ」に、ルネッサンスの概觀をなした小品をかいて「我國の現時また甚だ面白き位置にありとは人の云ふ處なり、東洋の學を究むるはもとより西洋の學も容易に學ぶ事を得べきとは人々の口にする處、（中略）乞ふ意氣をして軒昂たらしめてこゝにも一つの文學復興の時あらしめよ」と結んで、此黎明期の好望を稱へてゐる。詩人ランドアの「想像對話」を譯した「ベアトリチェ」は幽婉な美文章で作者の詩趣をよく傳へてゐる。「君戀ふるこゝろを深くもうたれ、われは身も震ふばかりなりしを、そを見玉ふ君は心なき世の女と笑いぞめきぬ。かくても君なるか、いとも優

しきピチェの君と、われは常に呼びまゐらせしを。」云々「神曲餘韻」は「このあらむ命は葉のうすきがごとし。思ふところ多く、果敢き逢瀬は短夜のいたづらにあけゆく恨みをもまたず、空とぶ鳥のなく音にも催されて悲しきは、彼のリミニのフランチェスカが身の上なるを」で初まつた本邦ダンテ文學の秀什。スカラー、ポエットの天分を飽くまでも受けて生れてついに詩作のなかつた詩人は後に卓れた鑑賞家として一代に重んぜられる禿木であつた。

嶋崎藤村は、さきに述べた如く第一號に「漫詩」數篇を出してゐるが尙特色あるものではなく、やはりマンフレッド風の「悲曲琵琶法師」、エルテルに私淑した「朱門のうれひ」又は「悲曲茶のけぶり」等に詩劇の試作を發表して尙些かもなすところなく、「なりひさご」「二本榎」「野末ものがたり」の散文に哀婉淸洒の筆致を練つて「ミケランジェロ」、「香川景樹の日記」の攻學に轉じ二十九年九月「草影蟲語」に小曲數篇を收めたが翌月「一葉舟」といふ總標目に「秋のうた」と「哀歌」をかゝげて初めてその大才のかゞやきを示した。

秋は來ぬ
　秋は來ぬ
一葉は花は露ありて
風のきて彈く琴の音に
靑き葡萄は紫の
自然の酒とかはりけり
（下略）

この新釀の新詩酒の鮮かな香りをきけ。

中野逍遙をいたむ哀歌は

かなしいかなや流れ行く
水になき名をしるすとて
今はた殘る歌反古(うたほご)の
ながき愁ひをいかにせむ
（下略）

「思君十首」の秀才詩人を弔つた此一詩は、「露華多似涙」の淸怨にもゆづらさる名作であつた。「二つの聲」の端麗、「望鄉」の哀愁もすてがたき趣であるが、「こひぐさ」九章の連篇第五に、「四つの袖」と題してお夏淸十郎をうたつた一篇は、新詩あつて初めて見られる官能の鮮麗な愉樂がふるえる樣な新らしい描寫に表れ「初戀」の感傷、「いきわかれ」の淸愁はともに新らしい詩情を創造してゐる。こゝに初めて天禀のはけ口をえた彼は矢繼早に「秋の夢」（四七號）、「うすごほり」を出した。後者には「おえふ」があらはれた。

處女(おとめ)ぞ經ぬるおほかたの

われは夢路を越えにけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば
岸のほとりの小草を藉いて微笑みて泣くおえふの若姿、
みそらをかける猛鷲の
人の處女の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨の渴き雲に饑え
天翅るべき術をのみ
願ふ心のなかれとて黒髪長くつくられたうまれながらの盲目のおきぬ。
亂れてものに狂ひよる
心の笛の音に吹かん
と呼ぶ潮さみしい荒磯の花かげに人となつたおさよ、
心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎なり
思ひ亂れて嗚呼戀の
千筋の髪の波に流るる
とこひしきままに家を出て千鳥鳴く夕まぐれ流の岸にさ迷ひ出るおくめ、

それ秋の日の夕まぐれ
そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
救ひ玉ひし若き聖は智惠の石と云はれるが、惜しい色だから放すまいと私語つ孤兒のおつた。
おとこのこひの
たはふれは
たびにすてゆく
なさけのみ
となげく男々しいおきく、

此時彼は放浪して仙臺に入り一年の歳月をそこで送つたが主として名影町の客棧にあつて書きためたのがこれらの詩篇で後「若菜集」に收められた。尙次々に公けにされた詩に「春の歌」があり「天馬」があり「瑞巖寺に遊ぶ」もあり、

想ひも薄く身も暗く
殘れる秋の花を見て
行へもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

と抒べた「草枕」があり、

わが老鶯を吹くさまは一葉を振るに似たりけり

と歌つた「鶯の歌」がある。總じて二十九年三十年にまたがる藤村の收穫は著しいものがあつた。彼の詩才は孤獨のおもひにあほられ、純情のあはれに火となつて、新日本がうたはんと欲してうたひかねてゐた新感情——放たれたる官能と自由の歡喜と薄紙ににじみ出るやうな殉情とこれらが悉く新らしい果實の芳醇を放つて藝術の形に盛りあげられた。そこには何人も否みえぬ確實な個性の眞摯な叫びがある「日本」の感情が、新らしい對境にするをかれてさま〳〵に變化を生じたその色々の背景を前にして自由の踏舞を試みたその鮮かな跫音がある。その感傷は自ら口を押へて泣く音を忍ぶ哀音ではあつたがそれは誰はばからず野面の中で天地とともに泣きかつ哀しむ自然の悲嘆であつた「文學界」はついにこの新らしい抒情詩人を生んだ誇りを持つて近代詩史の第二期に君臨するに到つたのである。

また、戸川秋骨は敦樸の好學の散文家で、「帝國文學」「文學界」に執筆し「オヴィッドと自然界」、「プロヴァンスの戀歌」、「イスラエル文學の詩趣」に精緻な古典の鑑賞を試り、詩作は少しもなかつたが、その淡々たる性情の自然の靜叙の間に見られる詩趣は彼が隨筆家として一番惠まれた才能の所有者であることを夙くも豫示してゐる。「塵窓餘談」に今の世今の我邦に改革するものはない、多くは自滅するもののみだ。たゞ一の確實な思想があるそれは國體だ。此觀念は濫用されて發達進歩の妨をした事も少くない。此觀念を破るものは賣國奴の名を受けねばならぬ。其人はあるだらうか。ないだらう。當人はどうすればよいのか、理想の世界に赴くか力行の世界に歸るかと云つてゐる。あいまいな表現だがその間に此當時の青年秋骨の語を通じて我等はこの時代と接觸しうる。秋骨は學究としても作家としても詩人としても特異の業蹟を殘さずにしまつたが外國文學の究攻は當時の一異彩であつた。彼の隨筆的表現は十五年以上の今日の以後に初めて眞の結實を獲るものではなからうか。

馬場孤蝶は、後に懇切なる國文學の紹介者となり記憶力のよい人生の通人となつたが、此頃は盛んに詩作もし批評もかき「想海漫渉」の類、雜筆もかいた。詩は卓れた個性のない凡庸なただ優しい感情が素直に現はれた作品であつた。その精神は快活で温情あり、他の同人とちがひ、小説「春」に所謂「端歌の一つも歌ふ」ことの出來るくだけた世間的の性情であつたたけ、畸嶠の特色は些しもなかつた。

鐘の音さへ沈めるに
來るとしもなく潮ちかき
苔むす石に濺ぎにし

あつき涙を知るや君

（「みちしば」一節）

孤蝶が詩は尋常青春の人の普通の感懐が流麗に表はれてゐるにとどまるが三十年代初期中期に及ぶ詩的活動時代には與へられた天分の最大限でこの「優美」が美しい詩的寫象の誘因となつた。彼の作については尙詳しく第三期に述べる。

柳村上田敏は、「夏山遊」といふ希臘神話に關する印象を最初として、二十七年以降終刊號に、「美術の玩賞」、「ダンテ、アリギエリ」、「サフォーの歌集」「ベツレヘムの星」、「ロセッチの詩歌」等にその該博な學殖を示し、他の雜誌「帝國文學」、「江湖文學」、「天地人」「文界」「活文壇」に寄稿して鷗外につぐ外國文學の研究者の名をえたが、「典雅沈靜の美術」に希臘風を提道し、「細心精緻の學風」に當時の粗笨な研究を警め、「幽趣微韵」の妙を說き、「清新の思想聲調」の趣を傳へ、「ヲルタア・ペイタア」を紹介し（二十八年五月）「ボオル　ヹルレエタ」を論じ（二十九年三月）「スヰンバアンの新著」を述べ、ルモニエ、メエテルリンク、ヹルハーレン、ローデンバッハの伸をつたへて「白耳義文學」の最初の紹介者となり、近英紀季諸詩人の根據ある玩賞を談つてラファエル前派等に干する知識の供給者ともなつた。たとへば、ライオネル・ジョンスンの如きは、その詩が本國に名を知られざるに先立つて早くも彼の「愛蘭調」の優秀を說いてゐる。「塑像の解說」、「ルビンスタインの聖樂劇」に姉妹藝術の興味を喚起したのも彼である。「忍が岡演奏會」の一文に音樂の印象批評を試みたのは本邦に於けるその一人であつたらう。柳村は「文學界」終刊號に「まちむすめ」の作詩一篇をかゝげた。

まちむすめ　　　　みをつくし

かなしき契となりてけり
さめてうれたき夢のあと
きはみて落るいてふ葉の
あしたの霜にうづむごと
あゝわが戀はきゆべしや

（下略）

に初まる十七聯の七五詩調であるが、決して詩才の卓越を證するものではないことは終りに赴くに從ひ調子外れになつて且說明的になり詩感の抑壓を無理に才能に任せて押し進めた觀があるのでも知れる。

・星野天知と戸川殘花とはやゝ他の人と趣を異にして此運動の傾向にかけ離れた本質の人であるが、天知は雜誌の一切を所理

して古文學の感想に特色のある詩趣の豊かな散文をかいた「利休居士」「狂僧志道軒」「骨董に有限を論ず」「翁のざれ言」の諸篇があり、基教徒の信仰と德川文學の浪漫趣味とを合せ有して史論に美文に小說に雜筆に當時の時代そのものの如き矛盾を矛盾とせず撞着を撞着としない一家の風格を示したが、此點に於て彼と殘花とはある共通點によつて結ばれてゐる。たゞ天知は詩を本領としなかつたが感情の柔軟は殘花にすぐれ、殘花にかへつてその客觀詩人の特色の發輝の間に適度の主觀の流出を巧みに行つて世の好尚を率いた。天知の文は詩のある散文詩、當時の美文であつたが、この美しい感情の流露は「文學界」中の異色であつた。又、業平論に「吾は在五の君を遊蕩軟弱の一貴公子のみと輕んずる程の愚かにあらねど、これを赤誠愛國の一忠臣なりと定型に盛る程のさもしき心にもあらず」と云つて早く自由批評の精神を示し「バイロンがメレーシヤヲスを見たる時の心を以て朝臣は二條の后」を觀たと云つて戀我一境の業平が浪曼主義を嘆美してゐる。此時代と「文學界」とを顧る時決して天知の名を斥けることは出來ない。

戸川殘花は、當時の詩人として嶄然頭角をぬきんでゝゐた一人で、「日本評論」や「女學雜誌」など身が牧師であつた故其教關係の雜誌に執筆し、又、「國民の友」、「文學界」をも舞臺としてゐたが、「朝の歌」の如き殊に愛誦を受けた作である。これは二十五年の「日本評論」を飾つた。

　朝てふ君は紫の
　裾濃の鎧きくだして
　まだ消え殘る白星の
　五枚胄の緒をばしめ
　見るもまばゆき前立は
　黃金の色の朝づく日、
　くれないにほふ天つそら
　春の霞の幌かけて
　疾き太刀風に海原の
　八重立つ雲を切り掃ひ、
　むら〳〵ぱつと小鳥の
　ねぐら離れし閧の聲
　勇みに勇む白月毛
　隙行く駒はいそぶりに
　白泡かみていなゝけり。

「文學界」に出た作では、「弔歌桂川」の長篇に。

　霧立ち籠めし水の面に
　二つの光照すなり。

火に後れしほたる火か
はた亡き魂かあはれ〳〵

とか、

そも愛と云ひ戀といふ
深き意(こゝろ)を世の人は
さら〳〵汲まず氷より
霜より冷えしその心

とうたつて透谷をして巣林子以後圖らずも情死は友人を法界の人に得たりけりと云はしめ、

昨日も今日も五月雨
ふりくらしたる頃なれど

といふ尋常の描寫にも

あやなき闇に凄まじや
閻羅と見ゆる夏木立

といふ柔軟の二句にも、

こゝは處も桂川

の尋常な、しかも餘韻ある起句にも、

造化の筆はいまもなほ
悲惨の景色うつしいで
我はた冥府の人なりき

の末句も悉く處を得時を得て千鈞の重があると云ふ意味の透谷の言葉は知友のなさけとしてのみ輕々に見過すべきでない。

三つ四つおちし村雨は
つゝみたる誰が涙かな

の如き凡庸の詩句の間に國語の圓熟の妙味の間に殘花の[illegible]はよく動いてゐる。

玉鉾の道は小暗し
たどりゆく縄手はほそし

の變調も平凡に在つて平凡でない。殘花の詩才は疑ふべからざるものが多かつたが、この時代を限りに退壇してしまつたのは、彼がつひに舊時代の最後の人としての一番卓れた藝術的飛躍を最も妥當に試みた人であつたことを談るものである。

「文學界」は、尚、別に二十九年五月二十七日に「うらわか草」といふ雜誌を出した。「文學界」の「春夏の附錄のかはりに」とあるから四季刊位にでも出すつもりであつたらうか。第二號は年の十月に出る筈となつてゐたが出たかどうかは不明である。一號には、禿木の「地獄の卷の一節」、松岡國男の「花かげ」藤村の「西花餘香」秋骨の「伊太利盛時の文學」禿木のベアトリチ●

など外に一葉、花袋、花圃の名もある。「評論」は女學雜誌社の發行で透谷が主筆となり同人しば〱執筆し、「三籟」は警醒社の發賣で、松村介石戸川殘花執筆し共に二十六年中の創刊であるが「文學界」の一派の雜誌と見てよい關係にあつた。

最後に注目しておくべきは、二十七八年の戰役中にも「文學界」は些かも興奮のあとを詩文の上に示さざるのみか、創刊號に透谷は「俗物の尤も喜ぶ處は憂國家の稱號なり、而して自稱憂國家の作す處多くは自惚なり。彼等は僻見多し、彼等は頑曲多し、彼等は復讐心を以て事をなす。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虛想を以て唯一の理想となす。彼等の慷慨彼等の憂國多くは彼等の自ら期せざる渦流に卷き去られて終ることあるものぞ」(圈點在原文) と云つて、國家思想勃興して早くも小才子の小利口な小利己主義を國家主義に粧ふて實は私利を計るもの多きを慨してゐるし、二十七年十二月號の時文に風潭（禿木）は熱心に戰爭文學の愚を痛罵し、「戰や誠に國家の大事」結構だが身を文界に置きて「詩的觀念の發輝、民衆趣味の高致」に懸念するものが、戰爭劇、戰爭畫、戰爭小說で持ち切つてゐるのはどうした事か。「此際、戰爭文學をいふものの如き、そも〱愚の至れるものなりとす。」戰爭文學とは羈絆子のいはゆる與の足らざる詩の粃と、目的あやしき詩人の流產に外なら」ない。「文士の戰にその筆を抂ぐるは民衆のこれに狂して產業を捨つると同じ。この際須らく高踏的思想を要す。それ正義、仁愛、國家、自由、これら壯偉の觀念は固より文學に欠くべからざるものなりと雖も、又今日の如き快心の國民的發動は、必ずその影響を文學に及ぼすべきものなりと雖も、心機妙發、靈地の波瀾、凡そこれ等內部生命の見るべからざる風濤、別に幽玄至妙の觀念と相冥合するにあらざるよりは、如何に快心なる國民的發動と雖も、如何に壯偉なる國家的觀念と雖も、決して詩的永遠の生命を有するものにあらざるなり。且つや戰後の氣風や必ずしも謙直なるものに非ず、嚴正なるものにあらず」(中略) 文壇の振はないのは、「もと戰の有無と民衆の狂激とに關せず。所謂明治文學なるものは、漸く將に一段落を告げて未だ更に一新題趣を開くの氣運に達せざるなり。」と云つてゐる。共論據は少々薄弱であるが要するに至上主義の立場から戰爭文學の本質的な約束の上に成立してゐない單なる卑俗な流行にすぎぬことを斥けた者であり、この態度を土屋光知君へ今年四月發行新小說英國號「雜誌文學界と平田禿木」がナポレオン戰役のゲーテを想はしめると云つてゐるのはやゝ大袈裟ではあるが、二十七年の當時この文章をかいて此自信を唯美運動の上に把持しえた禿木は時流に卓れた青年の一人であつた。尙、二十

八年二月號にも杵文堂主人といふ寄稿者が「現今の歌は多く軍歌を作すれど戰爭なんどには必ずしも純精の神は宿からぬものを、唄ふは忠と義との端のみ、それも聽ては例の千篇一律ぞかし。」と云つてゐる。理は稚いが現はれた情は記錄してをいてよからう。

「文學界」の運動は、多く効果を詩と論（斷片のもののみではあつたが）の上にあげ、最初は透谷の人生苦が理想の對境としての、人生の逃遁地としての文藝を藝術至上主義の方角迄導いたのが、二十九年以後は全く純粹の浪漫主義による藝術研究、又は、ラフアエル前派の主張の惝怳等の特色を有する新らしい唯美運動に變つた。いふ迄もなく全體としての傾向であつて個々としては各異つた欲求に生きてゐたのである。二十九年は一八九六年で、いはゆる九〇年代の「黄冊子」、「堂母」、「サボイ」「麗観」の諸雜誌が出た前後でありラファエル前派の植えた種が九〇年文學として英國に爛漫の美花を咲かせた頃である。誠によく似た詩文の麗章が時を移さず移植されたのは、日本王朝の昔や、元祿の昔に榮えた、驚異に出發する浪漫文學の、やゝ組織的な、集團的な運動ではないであらうか。此時よりして世界文學に本質的一紫を得て對等の發展に忙ぐに到り、藝術人生觀の眞面目は、硯友社文學の沒落と共に勃興した自然主義文學の精神に一脈の淨血を灑ぎ尙來るべき新浪漫文學にも豫示の手を延ばしてゐるものであつて、「文學界」はその傾向の一部面にすぎず他に多くの個人的卓越の才はあつたが集團として此の結果を收めえたこの一小同人雜誌は「帝國文學」や「早稻田文學」と別種の意味で文學史に永く記錄されるものではなからうか。

（十六）

二十七八年戰役前後簇出した詩歌の中で、前項語つた者以外に注目すべきは幾何もないが、こゝに詩の形式としての最後の閃を見せた漢詩の詩人中野逍遙に一言云ひ及ぼさねばならぬ。

中野逍遙は伊豫國宇和島の生れ字は威卿、重太郎と稱したが文科大學漢文學科を出て間もなく病んで神田のある病院で急死した。享年僅か二十七歲であつた。二十八年十一月不破信一郎の發行で、友人、宮本正貫、小柳柳々子（司氣太）の編纂で「逍遙遺稿」正篇外篇二冊が公刊せられた。恐らく當時のあらゆる詩歌壇を通じての卓れた情熱ある詩才に長けた青年であつたらう。何れも青春の夢見る如き惝怳と抑へ難き狂熱と直摯な觀照とを傳説的詩形の窮屈な約束の中に押し包んで而も裂け出でんばかりの激情をよく表現してゐる處は、詩形の如何を問はず、眞に才能ある人が來れば如何なる鎔鑪に於ても驚くべき成果を

あげらる例證となつたものだ。詩は七言五言絶句律詩多い中に、藤村が「哀歌」のモットーに置いたのが卓れてゐる。

思君十首　逍遙

思君我心傷　思君我容瘁
中夜坐松陰　露華多似涙
思君我心悄　思君我腸裂
昨夜涕涙流　今朝盡成血
示君錦字詩　寄君鴻文冊
忽覺筆端香　窓外梅花白
爲君調綺羅　爲君築金屋
中有鴛鴦圖　長安夢百祿
贈君名香篋　應記韓壽思
休將秋扇掩　明月照眉痕
贈君双臂環　寶玉價千金
一鐶不乖約　一題勿變心
訪君過臺下　清宵琴響搖
竹門不敢入　恐亂月前調
千里囀金鶯　春風吹綠野
忽發頭屋桃　似君三兩朶
嬌影三分月　芳花一朶梅
渾把花月秀　作君玉膚堆

ひととき漢詩壇に時花つた韓偓が香奩詩の艶體、鄭谷の柔飛卿が穠麗等の感化もあつたらうが、又、尙傳統の臭味を脫離し切らずに終つたけれど、この小篇のみを看ても彼の詩情の卓越は爭はれない。秋怨十絕の一に「秀才香骨幾人かあはれむ。秋は長安に入つて夢愴然たり。琴臺舊譜壚前の柳、風流銷盡す二千年」、これ亦大學才子の隨一人であつたかれを弔ふ輓歌である。

當時漢詩壇に覇を稱した森槐南は、戰役起るや任を受け大纛に陪して廣島にあつた。その一派星社の諸才人は、慘死詩人讀天情仙學齋、「太陽」に氣を、吐き國分青厓、本多種竹の徒は

「日本」により、岩溪裳川、落合東郭各その詩想の秀抜を發揮したが、時代の必至の要求は到底この舊詩形でみたされることは出來ない。詩才あり詩眼ある少數者は、因て、いよ〳〵己が埒内に跼蹐して獨善に甘んじるにいたり、藝文の大道にそふことが出來ず、舊思想、舊趣味に自足せる政治家實業家輩の玩具となるに至つて、永阪石埭が一半兒社といひ、江木冷灰が擅欒會といひ、北條鷗所、大江敬香、桂湖村の各砦によつて呼號するものはあつてもその文學としての力は既に業に全く過去のものとなりつゝあつたは故をえない。

大勢はかくの如くであつても、漢詩そのものが全く詩情を入るる能はさる廢屋に歸したのではない。日本民族がこの國語をこの文字にたよつて表現を繼續する限り、漢詩の詩的存在性は確實に存在する。短歌俳句はいふ迄もなく口語による新詩の自由性を以てすらも表現しえない文字の上の藝術的便宜すらある。が、現代感情の錯雜なるや、これを到底この舊詩形のみにたより、又はそれに自足しうるものではない。これに自足するものは詩作の契機を大部分遊戲意識に置く平俗人、一般學徒等が、草創時代の新詩の未完成性や短歌俳句の藝術としての特性をきらつてこの詩類に籠居して强ひて滿足したがるのである。夏目漱石が當年の象徴詩に侮視の眼を投げて漢詩の作成に自足したのもそれである。それはそれでよく、これはこれでよい。

國家意識の熾烈が急轉直下に導いた日清戰役の結果として、「新體詩抄」以來民衆の間にうたはれてゐた軍歌が、にはかに勃興して兒童走卒が街頭の合唱となつたことは夥しい。この位軍歌が時花つたことは前になく後にない。それよりさき、音樂の進歩につれ幼年唱歌の類が「小學唱歌集」のあとを次いで、又「新體詩抄」や「孝女白菊の歌」やに勢を添へられて發達し來り、美妙が詩集に名づくるに「新調韵文青年唱歌集」を以てしたのも、ソングのたぐゐの創作に志あつたことを示すものであり、大和田建樹は殆どこの專門家となつて、「尋常小學帝國唱歌」に、「始業」、「親の恩」、「はぜつり」、「ドドドドン」、「時計」、「神風」の新題目を提供し、同じく「高等小學唱歌」に、「自然の音樂」、「閣龍（コロンブス）」、「工女の歌」の新興味をそそぎ、佐々木信綱が「繪入幼年唱歌」に大和田が「文部省御撰定祝祭日唱歌註釋」に少年の喝采をうけたのを先驅として、戰役前後には、納所辨次郎の「日本軍歌」、鈴木米太郎、納所辨次郎合著「明治軍歌」、佐々木信綱が「支那征伐の歌」等に、「皇統」、「喇叭のひびき」、「將てや懲せや」、「火砲の雷」、「招魂社」等の題目から赤十字の慈善まで謳歌した。晉吐朗々たるその演説をきくやうな氣のする外山正一の軍歌はことに平易で殺伐で勇敢で

あつた。

旭にかゞやく日の丸の旗
ひらめくみ國の軍艦どもよ

の類であり、「往け往け日本男子」の類である。菊間義清の「喇叭の響」は早稻田文學二十七年九月號を飾つたもので歌の語句といひふしと云ひ軍歌の雄であつた。

渡るにやすき安城の
名はいたづらの物なれや

で初まるそれである。與謝野鐵幹は「軍中月」や「喇叭卒」を歌つた。

進め進め
君の恩國の恩　報ゆる時は來りけり
進め進め

の歌である。安城の歌で男兒に喜ばれた作者菊間は「婦人從軍歌」をかいて甲斐々々しい少女の誇をそそつた。

火筒のひびきとほざかる
あとには虫もこえたてず

の歌でこれ亦佳作の一であつた。田園詩人湖處子は出て「生別」を歌ひ、竹屋雅子、大塚楠緒子、嘉悅孝子の巾幗者流、福羽美靜落合直文亦之に和した。抑も、軍歌は、藝術價に關せずただに平易と宛轉と印象的な語句とに富む作のみが兒童の喜ぶ所となるので、而も之と等しい特色に富む作譜と一致しなければ卓れた軍歌としての存在は不可能であつた。この種の作曲者には多梅雅がゐた。大和田は既に二十二年中「いさり火」を出してゐるが、その前にも唱歌としては、十九年に「靑年唱歌」を、二十年に「詩人の春」を出し、「いさり火」と同時に、奥好義と同選で「明治唱歌」を續出して六篇に達してゐる。文部省は「祝日祭典唱歌」を諸大家に依囑して盛んに刊行し、音樂者旗野士郎は早稻田文學に「喇叭卒」をかゝげ（二七年）又「無韻詩歌論」を唱へて新體詩と唱歌と兩方面に改革を計らんとしたがその影響は少かつた。

その外「四百餘洲をこぞる十萬餘騎の敵」の蒙古來歌や「大捷軍歌」として續出した「勇敢なる水兵」、「雪夜の斥候」等がある。

軍歌の流行が、新體詩の低級な一般化に役立つことは少くなかつたが、詩家の水準を下げ、詩品を粗惡にしたことも事實である。凡て外的影響は順當な果を齎さない。」

（十七）

假りに分類して浪曼派、擬古派といふも、此期に於ける浪曼

派に擬古的心境に近い詩語の使用があり、擬古派に浪曼的惝怳に出發する想像力の躍動あつて、明かな特性を所持してゐるものではなく、況して自らその主張を標置したのではないから此分類も亦必ずしも妥當のものではないのだが、少くとも二者の思想感情の傾向の基本要素を指さした命名である。

當時實際に用ゐられた名稱は便宜上、國民の友派、文學界一派、帝國文學派、文庫派、早稻田文學派など呼ばれたが大別すれば右の二大類別以外には、一流一派と稱へがたい幼稚な小傾向の隆起が所々に散在してゐたものにすぎず、其本質も多くは二者の間に介在彷徨する種類のものであつた。勃興し來つた國民主義の大勢の見地から見れば擬古派が國粹的であつたに對し、浪曼派は反國粹的と云はんよりは精神的歐化主義とも略稱しうべき異邦情調と古代思慕との浪曼的要求に基く調和主義であつた。國家主義に對する反抗の言明は些かもなかつたが、社會生活意識の文學上味解から自然に獲得した世界主義的傾向の心内に於ける萌芽が策勵する小國家的利己主義への嫌忌が既に業にあつた。少くともこの傾向は擬古派の人々にはない所のものであつた。これは、教養の種類の關係から、浪曼派が自然に感得したに反し、擬古派はかへつて盲目的尙古主義に陷つてゐて此感能を惠まれなかつたのによるが、破壞と建設との自覺の極端に動いてゐる浪曼主義そのものに通性とする本然性の然らしむる所、傳統的狀態に愛着を感じる擬古主義そのものの本來具有する特性の呼んだ結果である。

この樣な二大別と群小異別とから次第に有機性を帶びて組成されて來た詩壇も、その作品の一一は愚か、その各派の內容をこまかに査べてゆくときは、未だ稚幼の時代にあるをまぬがれず、特にその特質と覺しきものを把握して說明論定するの煩瑣にたえない。「文學界」の如き比較的特性鮮かなものを論題として分析して見ても報いられるものは多くの幼稚と少い本ものとである。「國民の友」の如きは雜誌が保守的歐化主義を標榜してゐたに係らず、こゝに集る詩人は、悉く雜多な寄合世帶であつたから團體的意識は尙少かつたがその外のものも多くはこれと同一の立場にあり同一の特性を所有してゐた。

「文庫」は、二十年創刊の「少年園」が二十二年に「少年文庫」となり二十八年八月に「文庫」となつて、名目からも文壇に擡頭したが、事實は、その以前より詩作に寄稿に募集に詩壇に寄與した所は少くなかつた。「少年文庫」は高瀨文淵、山縣僉湖の編輯で、最初は少年對手の雜誌であつたが後「文庫」と改題してから俄かに詩壇の一勢力となつて、爾來多くの俊秀を世に出した。當時雜致された投書家中の秀才は、堺から河井醉茗を、

信濃から瀧澤秋曉を、越後から五十嵐白蓮を拔擢し後その盟主となつた者が醉茗であつた。横瀬夜雨、葉末露子、伊良子淸白、久保田山百合（當時塚原伏龍と號した今の島木赤彦）千葉江東はこゝより巣立つて詩歌評壇に出た。小島烏水、山崎紫紅もこゝにゐた。が、當時は尙その特色は集團的に獨自の特徴を有せず、見識に於て知能に於て創作に於て他に卓れた所がなかつたから「文學界」のやうな文學史的重要を持つてはゐないけれど、多く美妙や湖處子や透谷や梅花やの影響を等分にうけて靑年の藝術的熱望に基く普通の感慨をうたひ、あらゆる感情の各態を攝取してこれを精進の資としようとした。よつて、その結果は遙かに三十年代中期にいたつて初めて鮮かな結果を示すにいたつた。太田玉茗も初めこの「少年文庫」にゐたもので、初めて詩作の揭げられたのは二十七年醉茗と前後してから後のことである。

文庫派の作例の一二をあげると三十年十一月文盛堂發行石橋哲次郎編アンソロジー「靑葉集」に載つた醉茗の詩がある。

うしろ影

せめてかどでの一言を
　告げ給ふとも誰かよに
咎めやするといつ迄も
　君は怨まむさりながら。
言はで心のいとまごひ
　人目の關にはゞかりて
夫と知らさで行く我に
　つらさを後に覺れかし。

（下略）

醉茗は溫情の人、眞摯の性で、その詩もよくその悃款の衷情を吐露する事に成効しついに一方の代表者となつたが、この頃の作は未だ未完成の個性なき稚態を免れなかつた。彼の詩は「文庫」そのものと共に三十年代初中期に於て鮮かな飛躍を示した。

塚原伏龍は「早稻田文學」二十八年八月號所載

爺

夕顏棚の下すゞみ
ひさごの酒の二合半
ことしも年は豐けしと
鬚をなでつゝ高笑
門田の稻の夕風に

赤らむ面ふかせつゝ
肌えすゞしく酌む酒に
やどるや暫し三日の月

(下略)

のごとき凡庸陳套の感情以外何ものもない作物を公けにしてゐたが「文庫」に一貫する日本的な温和な詩風の詩人であつた。彼が後短歌に入つて「切火」の卓れた歌人になつたことはこの時代のどれを見ても豫感は出來ない。

「文庫」に載つた詩には、「神も佛も」(寶湖)、「廢社晩秋」(伊良子暉造)、「桂の雫」(葉末露子)等があり、伊良子、横瀨共に三十年代に入つてから獨自の詩境を拓いた人々である。卓れた詩才は一人もゐなかつたが眞摯な修養時代を經てやがて酬いられたものが「文庫の詩」といはれるものであつた。

(十八)

こゝにパロディーの一例がある。二十七年十一月中「讀賣」に「拙者」と署名した者の「新體詩見本」が出たことがある。例を外山、福羽、上田(萬年)鐵幹、佐々木(信綱)、及び鳥居忱に採り、痛烈な諷刺の逸才が恣まにせられた。その作者は問はずしてしるき正直正太夫齋藤賢綠雨醒客であつた。

外山調

火鉢の上に鐵瓶が
落ちてゐるとて無斷にて
他人の物を持行くは
取も直さず泥坊で
泥坊元來不正なり
雲を霞と逃ぐるとも
早く縄綯ひ追駈けて
縛せや縛せ犯罪人。

福羽調

我日本(わがひのもと)の內とても
年をとれるは婆さんぞ
若き婆さんなきのみか
不思議に婆さん女なる
是れぞ卽ち所謂(いはゆる)の
然りと雖も日の本の
女は遂に婆さんぞ

佐々木調

小桶をこめて立まよふ
閼湯のあたり雲起り

踏はだかれる町内の
頭の背に龍躍る
臀連なる柘榴口
手拭頬にあてがいて
そは中々に傳の君
きこえ侍らず言の葉の
理無しとにはあらねども
そも逢初めしと唄ひつゝ
羽目板敲き聲高く
やようめたまへ番頭よ

鐵幹調

鐘は上野か淺草か
　白きを見れば夜ぞ更くる
「姑蘇城外寒山寺」
　數ふる指も擬つ起きつ
首縊らんか鳰の海
　ぶら下らぬぞうらみなる
身をば投げんか鷲の峰
　もぐり込まぬぞ恨なる
小楊子むづと手に執て
　喉笛美事に掻切れば
ちよいと痛めど血は出ず
　死するも命別儀なし
天地玄黃千字文
　無理心中は止むべきぞ

「懸賞募集軍歌調の一つ二つ御覧に入るべし無論撰者は鳥居忱先生なり」とあつて

（其二）

殘忍苛酷の債權者
支拂命令差向けつ
供託金を上納し
强制執行申請す
解除願はゞ速かに
元利揃へて完濟し
告知書を得て債務者は
ほつと一息安堵せよ

緑雨の才能は、多く譏笑諷刺の上に發揮されたが、膚淺な德川趣味に拘泥して進歩的事象に嘲笑を放ちつゝ而も己が本來の趣味性に殉じる熱を缺いて新時代の流眄もして居たから、叙べ

る所はたゞ眼前の狹小卑賤な文壇的意識に左右されて嘲笑のための嘲笑に終つてしまつたが、嘲笑そのものの銳利は當代一人として並ぶものがなかつた。この「見本」のごときはその機才の偶然な現はれにすぎない。若し尙幾分の詩に對する關心があつたならば、眞正のパロディーはいふ迄もなくバーレスクでもトラヴェスティでも自在にその苛辣な筆端から迸出し明治詩史に珍らしいカテゴリーを造つたであらう。この見本に於ては原詩家の特徵缺陷をよく握つてこれを皮肉な類同形式にあてはめた所に興味がある。（擬似詩は、後、桂月が「この花」の批評の中に冗談半分に挿入したることもある。）

（十九）

早稻田文學は、二十四年以降その穩健な態度を一貫し時流に超然たるを標目として懇切な彙報に特色を出し和漢洋文學の調和を標榜して主に研究考證の方面に全力をそゝぎその結果は「列傳體小說史」はじめ若干の果を結んだが「文學界」が僅少の材料を捕へても自己の思想として發表したに反し之はそのまゝに材料を材料として提供する地道な方法をとつた故、「文學界」のはではなかつたが實際の貢獻では着實の收穫をあげてゐた。たとへばダウデンを飜して「メレディスの詩想」を論じ（二十六年）、「十九世紀」誌上に、シル、ウォルスフォードを翻して「傳奇（ローマンチック）派の名家ロセッチが詩想」を論じ（同年）たごとき、飜譯ではあるが、その紹介の時期を見れば「文學界」も上田敏も未だよくせざりし早期にいち早く試みた紹介である。凡そこれらの地道な貢獻はひとり英詩史といはず、ゲーテに就き、ホーマーにつき、カント、ショーペンハウエルにつき重ねてゐた功程で、ホイットマンの如きも二十七年中新文豪の題下に、トルストイ、イブセンと共に紹介してゐる事を今は知る人も多くはない。曉霞處士の馬琴傳初め「列傳體」の德川文士傳も今から見れば材料の上、批判の上に難點はあるが、藤岡東圃初めこれを水準として論據を高めんとしたもので學界に先驅の功は爭はれない。

かく著しい成果をえてゐるに係はらず、ひとり新詩の創作の方面は鋼齋、東膠、諷大情仙、歌は粲、豐穎、蘧臣、句は湖伯堂、（後に子規一派）のみで新詩がかいくれ見えなかつたのは何故だらう。普通に早稻田派と稱された繁野天來、三木天遊が出たのは、前者は二十八年三月、後者は四月頃からで、後、金子幽花、塚原白龍の詩も見えたが此間の詩人としては前の二人以外にはなかつた。此二人の收穫は、三十年五月東華堂より「松蟲鈴蟲」の袖珍一卷となつて公刊され、天來が廿一曲、天遊の二十曲を收めてゐる。

天遊が詩は、「俯仰泣吟」、「小宰相」、「廢耻」など代表作であつた。泣吟の一節

泣きて赤子と生れしを、
浮世は泣くべき浮世なり。
笑うて稚子は生ひたちぬ、
笑うて神の膝に行け。

たゞ人の身は旅の世に
薔薇の道や辿るらん、
花のながめにほゝ笑めど
殘るは涙、血の痕。

神を追ひゆく旅の身に、
いで雨もふれ、風もふけ、
むかしの人の蹤とめて
泣きつ笑ひつ唯走れ。

花ちる里のうす月の
消ゆると見しは夢にして、
かくもあるべき世の中か、
けふ十六夜の小夜時雨。

そこには熾烈な激情の跡はない。靜謐な涙のかげが忍從的に、殉情的に、思ひぶかげに、薄墨で書いた七五調の格調の上に蠢めくのが天遊の詩だ。この主觀詩人の性情は、「國民の友」にも「文學界」にも見ることの出來ない獨特の個性に立脚する秀詩の幼芽であつたが、何故か、この巻以外かれは程なく消滅してしまつた。またそこには深刻の苦悶の跡もない。好乎の抒情詩人の天分の豫示をなしたのみで終つたのが天遊である。若き彼の詩には尙因襲的な表情、用語、思念が澤山あつたがその稚い發聲の間に聽かれる純情のひゞき、「傷感のかなしみ、切々たる清怨の衷情、軟かな物もひの姿の優秀は爭はれぬ。

天來が詩は、天遊の溫柔と異つて、はるかに雄勁であり、粗莽であり、活達であり、粗淡であり時に豪宕であり儁邁であつた。その情はつよく、青年の狂氣をさへふくんでゐたがその人となりは悶と理智に勝つてゐたやうだ。

闇夜默坐

默念の　闇の夜に、
　雨もよし、風もよし、
風來れば　闇淺く、
　雨細し　窓の竹、

風去れば　闇深く、
　雨遠し　庭の花。

斯の如き詩例にその詩の長所短所がよくうかゞはれる。「笛の音」は當時稀に見る長篇抒情的叙事詩であつたが、彼の本來の面目はもと短かい氣息の間にある。「雨聲鳥語集」は「新著月刊」創刊號（三十年）にかゝげて、白河鯉洋に惡罵を蒙つた不夜芳城の鄭聲竹枝であるが、これはもと彼の本舞臺ではなかつた。こゝにもその放肆の奔情は表はれてゐるが。詩集に出た短詩、たとへば

　今日の月
東海の漁夫　幾百萬
　起きよ、起きよ、
心あるも、心なきも、
來れ、手をうつて
　聲を揃へて
　歌はゞや
大洋に富士ゆたくくと
　　今日の月。

の如き性急に突差に吐出す詩情は時に極端に拙劣でも、時に朗誦しうべき獨特の詩風をもなしえたが、ついにこの狹小律語の中にゐたゝまらなくなつて究學の志を抱いて永久に壇を下つて去つてしまつた。

天遊と天來とを外にして早稻田派は一人の詩人をも產まなかつた。博引旁證の業に秀才の熱情を集め小說戲曲の創作に興味をひかれて詩といひ歌といふ境致には何の波紋をも殘さなかつた。天遊、天來も各の自力を發揮して單に「早稻田文學」の立場をたよつたのみで、早稻田派といふものの存在意義を詩作壇の上に認めしむるべき何の特色もそこにはなかつた。

當時新詩の評作を揭げた雜誌は非常に多く「八紘」、「評論」、「日本評論」、「青年文」、「眞理」、「學の友」、「同志社文學」、「心海」、「東京文學」、「世光」があり、グリーキ派の「裏錦」は早くも譯文學の紹介につとめ、地方には「中京文學」あつてローマン詩派を論じた者もあつた。「女學雜誌」、「三籟」の活動はいふ迄もない。二十八年十二月十三日の「國民」は評して曰く、「日本人」は維新前の浪人の如し、「國民の友」は洋行歸りの秀才の如し、「早稻田文學」は老學究の講釋の如し、「帝國文學」は學生の卒業論文の如し、「太陽」は縣會の速記錄の如しーと。手前味噌もあるが穿つた點もないではない。（泡鳴はその後二十九年五月の「早稻田文學」に「経釋迦の渡し」（三百五十行）をかゝげたが一般の反響は何見られなかつた。）

(二十)

「帝國文學」は二十八年一月の創刊に係る。その年の文献には、前述上田敏の諸說以外、「我邦將來の詩形と外山博士の新體詩」(林斧太)、「日本詩歌の精神と歐洲詩歌のとの比較考」(フロトレンツ)外山、上田(萬年)をはじめ、大町桂月、杉烏山、武島羽衣、鹽井雨江らの詩がある。

詩壇に於ける此雜誌の位地は、擬古派の本山として確められた。しかも、事實は、その內容が明かに二分してゐたのである。學校關係から、先進井上巽軒、外山丶山が指導の役にあつたため井上の「比沼山の歌」が七五の正調を墨守するこの派の代表作であつたに對し、外山は進んで散文詩の樹立を考へて、「旅順の英雄可兒大尉」(二號)、「輸卒」(六號)、「忘るるな此日を」(七號)等の作例を示し、それらは「新體詩歌集」となつて中村秋香、上田萬年、坂正臣らと合著として二十八年九月圖書會社から發兌せしめた。この詩集中に、丶山が作は「書題」(二十三年)、「佐久間玄蕃」(二十四年)、「迷へる母」(二十五年)の舊作から最近作迄を收錄してある。序に曰く、(前略)「昨年より今年に掛けて新體詩及び其の一族なる軍歌の作者は頓に其數を增加したり。日清戰爭のために大いに需要起りし故なり。殊に軍歌に於て然りとす。抑も本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は十四年前に予の作りし「拔刀隊」の歌にして、又本邦に於ける第二の軍歌は其の後久からずして是も予の作りし「來れや來れ」の歌なりしなり。(中略)今日世に行はるる新體詩には主として二様あるが如し。一は「峯の嵐か松風か」の流、若くは俊基朝臣東下りの類にして一は新體詩抄に習へるものなり。(中略)數年前より又一種の新體詩を試作することを勉めたり。本書に載する所は即ち斯の如きものなり、而して是非新體詩に關して特に辯じをくべき事あり、體形の新奇なるがために詩にも非らず歌にも非らずと爲す者世に尠からざるが如し、如何樣普通の考を以て見れば、或は然らん、然れども是れ少しも予の意に介する所に非らず、予は只々予の目的を達せんと欲する者なり、予が斯の如き新體を用ふるは他の故あるにあらず、予の思想予の感情を感情的に語らん爲めの方便と爲すものなり。七五若くは五七の調に抵抗力少く平穩に輕々と舌の動く爲に便利なるも、種々變化ある思想及び情緒は到底斯る一定窮屈なる體形を以て常に適當に云ひ表はしうべきに非ず。却て種々變化ある體形を使用するこそ適當なるべけれ。(中略)予の新體詩に彼此批評を加へんとする者は予の如何に之を口演するかを先づ豫め知るを要す。(下略)

我は喇叭手なり

劍を振るの士官。銃を發つの士卒。是れぞ勇ましき軍人なり。

堅門を破る者。鐵壁を攀づる者。誰か其の勇を稱せざらん。

或は單騎敵陣に近寄りて。親しく偵察の任務を盡し。味方に大勝を得しむる者あり。

或は暗夜に乘じて敵艦に近寄り。水雷を發して之を轟沈せしむる者あり。

壯絶快絶と天下皆唱ふ。

爰に。軍人にして其の佩劍を振るに非ず。彈を放つに非らざる者あり。之を喇叭手とす。

陣中に戰場に。朝(アシタ)にも夕(ユフベ)にも。進擊に退却に。唯々に喇叭を吹く而已なり。是れぞ即ち喇叭手なり。（繫り結び、テニヲハ等は、舊來の法則に拘泥せず、以下、これに準へ。）

（下略）

郭公

勇ましや郭公
小さなる身體(からだ)にて
限りなき大ほ空を
獨り自由に翔り行く

（下略）

「忘るるな此日を」は前者に類し、「迷へる母」「忘れがたみ」は後者と類す。「我海軍」は「朝日に輝く日の丸の旗」の軍歌である。中郡、阪等は外山氏の模倣にすぎず、上田は雅語をすてる見地から俗謠崩しの七五調を作つてゐる。當時一部の者に歌はれた彼の作（「文學界」所載）に、

學者　　上田萬年

せつかくたのしい此世の中を
かたい理屈でむがむにきざむ
野暮ぢや先生ちよとふりむいて
こちらの花をも見やしやんせ

上田は尚二十五年の頃海外にあつて大西操山風の七五調小曲を作り、二十七年十月の「早稻田文學」に掲げ、後、此集に收めた。

以上の內、ゝ山の作には二つの創見がある。彼は貧しい詩才乍ら先覺の意識から大膽に自己を表明し自任せる使命をも果さうと思ひ、新體詩の改造として七五正調は勿論一切の格調を亡した散文律詩の創成を計つたのである。而して其作例は辛じて詩となりうるやも覺束ない拙詩であつた（例の一）。も一つは更に呼吸をある約束の下に切つた短聲の詩調であり此方は稍よかつた（例の二）。

が、當時の詩壇は尙文語詩で七五七五八七各調を試みる習作時代であつたから殆ど顧るひまもなく此企てを一蹴し去つた。しかも例の一は意企に於ては立派な散文詩の創立であり、例の二は拙作乍ら自由詩の形式に準じてゐるものである。

「文學界」(三四號)は「口演せられて後始めて美を發揮し得るところの詩は如何にしてか其眞價を定め其不窮に」傳はる事が出來るか。散文と區別はないと斷じ「國民之友」は此が詩ならカーライル以下の散文家悉く詩人也と冷笑し「國光」「國學院雜誌」又その重視するに足らぬ所以を陳べしに對し「帝國文學」の林斧太(高山樗牛)は、七五五七の古型は今日の感情を盛るに足らぬ。詩の本質觀に二あり。內容主義と內容形式併持說と。後者は非である、形式は內容の自然又必然の發表でありこれスタイルであると云つた。「八紘」の水本青羅は斧太が「理想の詩の定義を現在の詩の上に律し」たので、五七七五又散文でも發表出來ぬ詩想はありうるのだから新諸調の形式をとるは束縛でなく啓發であると主意に於て同意し、「早稻田文學」の島村抱月は、外形が內容の自然の、又必然の發表にすぎないとの故を以て、律格を斥くるの論は成立しない「詩人が律格の末に苦慮する所以のものは少くとも律格を以て論者のいはゆる『內容の發表に對する必然なる方便』と認議」したからである、律格には律格の自然性必然性がある、人心の發達と共に詩形は變遷すべしといふは、變遷すべき形式を知つて變遷すべからざる形式を知らないものだ、內容は內容自らの形式を有し、形式は形式自らの內容を有すと云ふ究論は、詩形論の上では意味をなさぬ、そもそも、詩といふ概念には科學に對する場合と、散文詩に對する場合と二樣あるから混淆してはいけないと警めて三月にわたつて細論し樗牛の說の不備を完膚なく粉碎してゐるが、二十九年一月の「帝國文學」雜報子も抱月の說に讚して「立論謹嚴に考證精緻に大に吾人の意を得たるものおほし」と稱讚してゐる、樗牛文は例によつて結論を忙いで論の過程の非理、根柢の軟弱を忘れた稚論であつたけれど、彼又延ひてはゝ山の所論には、史的に注目すべき建設的意想あることも認めねばならぬ。爾後、散文詩はゝ山の精神に準じて而も別個の發達をなし、自由詩は十五年以上の後に初めて正しい出產を告げた。

ゝ山の企がこゝに進みここに停まつたに對し巽軒は「帝國文學」及「太陽」の二十九年一月より「比沼山の歌」を連載してその最後の叫びをあげた。材を「丹後風土記」の羽衣傳說に採り天人の交渉の間に道德的理想と思惟するものをうたはんと試みたもので、未完成の作であるが當時批評の中心となつたことはいふまでもない。「靑年文」は評して曰く、作者の名を署せず

ほどこの雑誌でも沒書の代物であると。

第一篇第一章
丹後の比沼の山頂に
眞井と云へる泉あり。
苔むす岩のあひだより、
沸々出でゝ玉を吹き、
吹散らしては雪を成し、
又流れては深碧に、
繞り廻りて潭となり、
夏をよそなる水の色。」一（中略）
狂ふ天女に激しつゝ、
水は縱横ほとばしり
花の顏、雪の肌、
先ひ出せる其様は、
何に譬へん、嗚呼牡丹か、
雨を帶びたる海棠か、
露を凝らせる芙蓉か、
濕ふ櫻か、將た紅梅か。」四（下略）

この例證で判明する如く用語の陳套、感情の枯燥、想像の貧弱は、まことに「青年文」の投書家にも劣つた愚作である。いかに漢語俗語を交へても民族的理想に着眼しても詩感ならぬ思惟は作詩の契機とはならぬ、新様の何ものも生まぬ。擬古派の命脈はその亞流、桂月、羽衣、雨江の三人によつて保たれた。「明治文學史」の著者が井上の運動も亦外山と共に擬古派に對する反動としたのは妥當でない。井上は新様の詩歌を口にし乍らつひに一歩も出る事は出來なかつた者で、此詩にも奏効せんとする意企は認められるが文學史の大勢から見ると彼亦居然たる擬古派の先人の位相にいつしか位してゐたからである。此派に對し、後、三十九年「日々」の春風道人は折衷派の名を與へ七五七を墨守するものと定義したがこれは完き見方でない。醉茗は大學派と稱したが擬古的傾向は他にも澤山あつたのだから此命名も本質的名辭でない。さて、雨江は擬古派中で最も自然な可憐な情趣に富む詩の作者であつた。さきに「湖上の美人」を出し、「深山の美人」、「磯の笛竹」、「たゆたふ駒」、「故郷の花」、「秋の蝶」等を書いたが

あらいそいはの　松かげに
今宵も笛の　きこゆなり
めかりしほやく　からきよの
心やりかや　海士の子が。

月にもやみにも　へだてなく、
　夜毎たづねて　松かげに、
ふくや笛竹　音もきけば
　さすが忍ぶの　ふしもある。（下略）

の「磯の笛竹」

花はあとなき　岡のべに
いつまで春を　夢むらむ
蝶は歸らず　垣がくれ
　なほ紫の　ゆかしくも
　待ちて笑みしか　すみれ草（一節）

の「秋の蝶」何れも古語の巧みなしかし陳腐な驅使と貧しき想像とによる擬古詩であるが、傳來の雅語の使用に、他人に卓れた秀拔の詩感を托して一家の詩風を作つたが時代の歡迎はその値以上であつた。當時は（その後暫らくは）言語の表面の「優美」が傳統的感情に共鳴したのと日本的感情の溫和な流麗な發露が普通一般人の無條件的好尙を率いたからである。桂月は雅語ながら豪宕勁拔の氣魄ある詩文をかいた。「野末の伏屋」、「秋蟬」、「琵琶瀧」、「睡陽城」「涙の味」等の中で、

山をうしはく　あら神の
旅路の露に弱りけん
おらぶが如く　おもほえて
峰よりおろす　夜嵐の
　木の葉ふきまく　おとすごし（下略）

の「琵琶瀧」がよくその特色を示したが戀の詩哀憐の歌になると他愛もなく失敗してゐる。「青葉集」に寄せた「睡陽城」は對話による叙事詩であるがよいものではない。桂月は單純な思想を卒直な表現に托した所に特色があるので一流の美文が初めは古典體の柔麗から終に板直（プロゼイツク）な平俗文に赴いた事は自然であつた。羽衣は早くから「文學界」にも作を寄せ三人の中で一番詩に志ある詩人であつたが、雨江よりも、更に非力な情感と稚い思想とを王朝の麗句に粧つたもの「ぬれ燕」、「魂まつり」、「戰死卒」、「時」等の作があり、「小夜砧」は樗牛の極賞した叙事詩風の逸作であり、樗牛は、「獨逸の詩人ビュルゲルの「レノレ」と謂へる詩より所謂換骨脫體せるものと見しは僻目か。」と云つて二者對照し「語の精緻且優美」はよいが「單調和平に流れ易く概して氣力に乏し」いのは止むをえないとしてゐる。（序にいふが樗牛がビュルゲルとスコットの英譯と羽衣とを對照した一段を見ると彼の詩の鑑賞の粗笨で概念的で出鱈目であつたことがよく判る。）

身は朝影とほそりつゝ
やつれはてたる手をのべて
泣きふす妻をかき撫でぬ。（一節）

あるひは

積もる落葉のさやげるは
深き山路に入るならん
白雲路をうづむるは
み山の奥になるならん

等の表現法で柔軟な佳麗な使用語がうつくしい幻想の誘因となつて、雨江の「深山の美人」などと共にこの派の特色を示したものである。しかも彼の思想が當時より陳套な範疇を一歩も出でず後つひにこの詩を唯一の佳作として消失したことは、三十二年七月大學館發行アンソロヂー石橋愛太郎編「花天月地」所載「髑髏舞」をとつて同題の透谷が作と比べて見ればその正しい歸結であつたことを知り兩派の對照をも見ることが出來よう。此三人の合集は二十九年十二月博文館發行「美文韻文花紅葉」として初めて現はれ、つゞいて、桂月は「黄菊白菊」を三十一年十二月に、雨江は「暗香疎影」を三十四年六月に、羽衣は「霓裳微吟」を三十六年五月に同所より出して三人の業は終つてゐるが、彼らの詩的魅惑は三十年代初期迄つづいたのである。「花紅葉」は一時青年愛誦の的となつた一小時期の代表作品である。その色香の美しさが存したことは事實であるがその榮えの花紅葉の一時であつたことも、言葉のあやではない亦事實だ。「行きずりの旅人を微笑ましめる」美であつたからである。が、これは啻に此三人のみでない、明治大正詩史の九分通りがこれである。擬古派の作集は外に大和田の「雪月花」（三十年九月）、「深山櫻」（三十二年十一月）があり、作法は中村秋香「新體い歌自在」（三十一年十一月）、大和田の「新體詩學」（三十二年九月）があり、歌壇の竹柏園の佐々木信綱は軍歌と共に新體詩にも筆を染め作は當時のアンソロジーに必ず散見してゐる。「土曜日の夜」、「舞子の濱」、「かの松かげ」など多作したが

はなれ小島に家もがな。
おもふ吾妹とたゞ二人

云々の八行小曲「はなれ小島」が唯一の佳作であらう。しかもその技巧の一點については操山の昔よりは見ちがへる程に巧みになつたがその低調と冷たさとは依然として貫流してゐる。此派の通性だ。此社ではひとり大塚楠緒子が「山の底」に抗夫を歌ひ、

飾れる黄金めもあやに
榮華をきそふ閑居には

工夫がうごく穴の世は
　幻像にだに見えざらん。　（一節）

と「富の奴隷となりはてた」身の上を死の絶望を以つて歌つてゐる。その外にも、「昔の日」、「蔓葛橋」など稚き表現中にも鋭い巾幗者流の鋭才をほのめかしてゐる。「ねぶり」に

人を殺さむはかりごと
　むねに秘めたる悪人も
慈善の業にかけはしり
　つかれはてたる善人も
魂をやすめて眠りけり
　同じ息してねむりけり
眠りぞものを靜めたる
　眠りぞものを隠したる

と歌つたこの少女詩人は女詩人の第一人としての稟才を仄かに示してゐたが惜しいことに詩の上にその後の才を現はさずに終つた。

尚つけ加へてをくのは井上、上田（萬年）らが發起して三十年二月二十八日帝國大學内學士會事務室で「新體詩談話會」を開き、外山、矢田部、坂、中村、與謝野等相會した。又、三十二年中には上野三宜亭に新體詩人會が開かれ、鐵幹、信綱、天來、湖處子、子規、羽衣、桂月、雨江以下十數名來會した。詩の雑誌には廿九年八月發刊「大和琴」卅年刊「心の緒琴」がある。新體詩人會の發行したアンソロジー「この花」は三月同文館より發行された。

詩壇にアンソロジーの刊行された初めは、「新體詩抄」、「青年唱歌集」「新體詩歌集」の類を除いては、二十九年中新聲社刊行の「青年新體詩集」であらう。之は「青年文」「文庫」「新聲」の投稿家の作詩を集めた。三十年の「青葉集」は當時詩壇の俊秀を網羅し、三十一年一月文學同志會發行「山高水長」（大月隆編）も亦前著とほゞ同じ人々を集めてゐる。

「この花」には直文、鐵幹、信綱、子規、鳥山、羽衣、雨江等を收めてある。この會は詩の雑誌「心の緒琴」をも發行した。が、「花紅葉」、「この花」の時代はすでにすぎ、「抒情詩」「鈴虫松虫」の時代となり又更に推移して藤村時代を現出するに到つた急轉時代の常として、玉石同架の混亂錯雜裡に第二期の幕を閉ぢるにいたつた。尚二十九年「月草」を出して詩文の正調の移植を大成した鷗外は、三十年「かげ草」を公けにして年來の評論を一束して後しばらくの沈默時代に入つた。「十二文豪」は二

十八年「ユーゴー」傳（人見一太郎）を出し、三十年内村鑑三の譯詩集「愛吟」も世に出、米國にあるヨネ・ノグチはその最初の英詩集 "Seen and Unseen" を北米で刊行した。

さきに「文學界」その他に相次いで秀什を公けにした嶋崎藤村は三十年八月「若菜集」（春陽堂刊）一卷を著はし新詩壇に一期を劃した。さきに評した作以外「深林の逍遙」（「帝國文學」三十年三月號）を初め、「秋風の歌」、「傘のうち」、「母を葬るの歌」「秋の歌」等全篇五十一篇を收めた。秋風の歌を以て全篇の白眉とする。

……………………

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩（たゞよは）す秋風に
飄り行く木の葉かな

……………………

あゝうらさびし天地（あめつち）の
壺の中なる秋の日や
落葉と共に飄へる
風の行衛を誰か知る

此等愛詩家の暗誦する處となつた名句は、もとより全篇に極稀なものではあつたが、七五五七を音調として徒らに破調の詩に奔るもの多い時期に成形律の中で此自由な詩的踏舞をなしえた彼の詩感は一生の高調に到達してゐたであらう。（彼の全體に就ては第三期に述べねばならぬ。）

評論には井上の「新體詩論」、建部遯吾の「韻文進化論」、子規が「新體詩押韻論」等一として顧みるに足る逸篇なくたゞ「早稻田文學」が「新體詩の根本的二疑」の眞摯な設問と、「帝國文學」の外詩評論のあるものとに注意するに足りるものであつた。ヘルンがアジューア・サイコロジーの一篇は同誌を飾つた名篇であつた。

（二十一）

「國民之友」派は、湖處子初め思想稚けなく技巧に拙くして些かも進化の跡がなかつたが、純情の素樸、可憐の風趣は野の花のやうに行く人の歩みをとゞめた。彼等に比べると早稻田の天遊天來は情操の鋭感に於て勝つたが、押し並べて此等の人々は「文學界」と「帝國文學」との中間を行き、感情の水々しさに於て前者に近く、日本的靜和に於て後者にぞくした。田園詩人の本質はこれをウォーヅウォースに求むるにしても陶淵明に求めるにしても所詮かれらの最も愛慕する所であつたらしい。

昔の餘勢を以て美妙は再び雜誌「大和琴」第六調に長篇「魔界天女」（三十三年所載）を連載したが、これに對し「帝國文學」記者は「情思の幽切なる音調の悲哀なる眞に精錬の好辭ならずや」といひ「今日の讀書社會は美妙齋を實際の價値以下に見なしをるものの如し」とも云つた。その作振りは

花を見捨てゝ歸るとも
雌雄の　心は　いつも春
それにも　如かぬ　わが身かな
うき世の春はなましいに
物思はするたねにして。
……………
無常の風にわななける
若葉のかげも　瘦せほそり
忌みのころもか　白銀の
光りのうちに　凍るなり
西の遠山　死出の山
誰がため描く纖眉ぞ。

一種の情調を引起す底力は依稀として昔に變らない。が、群才蜂起した今、各語句の結果の上を感ぜずして意味の透徹をさきにする筆辭が拔けない以上その末來は好望とは思はれなかつた。美妙の欠點は一言すれば慣用の語句の使用の滑走に安逸の制作を求めて、一ライン一語の個性と獨立性とを餘りに等閑に附したことにある。たゞ彼の僻はつきものであるが恒にたたふる感傷の泉にはいつまでも硯友社の通人小說家と趣異つたうるほひと新鮮とがあつた。その特色も亦つひによく現はさずに終つたのは人としての彼の性僻に基くものである。時代の繼子としての不運さにもよるものである。

「國民の友」派を代表する「抒情詩」は、その實、紅葉會の宮崎、田山、松岡三子と民友派との合併である。三十年四月民友社から出版された細長袖珍二五六頁の小冊子である。宮崎湖處子、田山花袋、松岡國男、矢崎嵯峨の屋、國木田獨步、太田玉茗の六人を集め各人各小序を書いてゐる。獨步の作は生一本な幼稚な單純な感情を卒直に無雜作に快活に粗淡に表はしてゐる。この特色は其一生を通じてかれの藝術から離れない。餘りの稚醇に微笑して讀みかけてゐて、卒然とその自然な頓悟を抒べる時、必至にその詩情に魅せられ了る。それが獨步の詩だ。

「獨步吟」の卷の中、

山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ
嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすてし
あくがれて虚榮の途にのぼりしより
十年の月日塵のうちに過ぎぬ
ふりさけ見れば自由の里は
すでに雲山千里の外にある心地す　（下略）

「山林に自由存す」の一節であるが生硬の句陳套の造語に些の懸念もをかず一氣に簡單に歌ひ了つて細部の破綻にも志を止めない彼の詩はつねに拙劣な造句にみちみちてゐる。しかもその拙い句計りの間で時として獨自の卓れた詩をも作ることがあるのが彼である。その時それらの拙句らはひとしなみにその獨自の力ある個性に燦然とばかりにかゞやくのである。それが獨歩の詩だ。

松岡國男は情纖く柔かにしかも狂氣に逸せず靜謐な理智の圓坐に端坐して流麗な少年の感情を稚醇の律語に盛る。「野邊のゆきき」の頁の中、

君がかど邊をさまよふは
ちまたの塵を吹きたつる
嵐のみとやおぼすらむ、
其あらしよりいやあれに
この塵よりも亂れたる
戀のかばねを暁の
やみは深くもつゝめるを、

「暁やみ」の一節であるがその感慨の特徴は

君が園生の花うばら
ちりて亂れていつとなく
みやこの塵にまじるなり（都の塵第一聯）

といつた所にあつた。稚さは獨歩に近いが控目に表現するので泡鳴のごときはその消極風の美を賞して「抒情的」第一人と稱した。

一夜

空てりわたる月かげは
小窓に見えて隠れけり、
とてもかなはぬ願ゆえ
我は泣くなり夜もすがら

此の眞情の美しさは眞實の純情の美であつた。よしんば後年の努力が詩の上に行はれたとしても彼は到底大規模の詩人でない。しかし萬人に愛せられる詩人である。

田山花袋の「わが影」のセンティメンタリズムは、矢張り卒直で純樸だが技巧は國男よりも遙かに拙なくて胸中の千波萬波

を叙べたてるだけで彼はそれがどんな結果として讀者に反響するかを自ら知らない人であつた。「あら波」がこれを證する。たとへば、孤寂を孤寂と云ひ切つて孤寂が表はせると考へてゐたが如くである。「影」が之を證する。しかし、彼の感傷は彼の藝術の生命である。その素樸な美は自然物の如くに人を共鳴させる。けれども彼の作詩には遂にそれが出ずその美は後年に至つて散文にかへつて出た。

「花ふぶき」の卷の太田玉茗がことはさきに述べた。玉茗の詩美は、「朧月夜」に戀人に對して心靜かに戀情を抒べる可憐な野性の美に富む、靜かなしかし何となくもの足りない溫情の叙述にあるが、あらはされた詩形美がいかにもかすかで力がないのでつひに個性ある詩情の樹立は出來ずに終つた。「歸らぬ父」は、英湖畔詩人の幼年詩に感化を享けたと覺しい少女の天眞を謳つた佳作ではあるが、詩の心に於てウォーヅウォースとは天淵の差がある。英詩人の幼年思慕はその靈魂先在說に基くのである。彼がハイネ譯は卓れた詩であつた。

「いつ眞で草」の嵯峨の屋も、玉茗や湖處子と共に古顏の一人であつたが、激情もなく想像力も貧しい上に眞の技巧に會得しえなかつたから、彼の個性が變つた味のあるものであつたに係らず、ついにその個性を赤裸々に詩の上に現はされずに終つた。惜しい一人であつた。

「水の音づれ」の湖處子は、「歸省」に出た詩の書かれた頃こそ若い感情が艶と丸味を持つて淑やかに語られた眞實さによつて多くの人を魅惑する力があつたが、「國民の友」に多作するに至つた彼、即ち、この集に見える彼は既にその獨特の悠たる寂味のある天然の調子をもつた表現も舊套に泥み、詩感はしば〳〵昔の型をくりかへして再說するだけで新らしき境致を拓いてゆく底力は全くなかつた。

とはいふものの、これを此集の儕輩の詩人に比べれば尙殘るその哀婉の情は殘んの薔薇のやうな香をとどめて此集の値を高めてゐる。

しら雲を千重にへだてゝ、
黑かみのながき月日を、
靈の緒もたえばたえよと、
一すぢにおもひしこゝろ、
（君と吾。一節）

といふ古句を使つてよく自らを歌ふその感情、「おそよ」によせた信仰、「華」の單純な象徵美、これ等は彼の純粹な詩人肌が自ら生んだたま物であつた。彼の詩を花袋の作である「雨の夜」の

この春雨にさそはれて

琴をやひきてゐたまへる
文づくゑにしもむかひゐて
歌をやおもひてゐたまへる

といふ想像（これは後年の小説の中に當年の回想として出て來る情景であらう。）的情景や

路にて君にあふときは
天津日かげを見るごとく
たうとき人にあふごとく
あふぎ見るべき心地せず

といふ稚い然し正直な白と比べると遙かに一家の詩風の所有者たるを失はぬ人であつたことが判然するし、又、玉茗の「墳墓」に於ける想像の拙劣な表現に較べて彼の自然な想像の描寫の巧みが判然する。然し、玉茗が「宇之が舟」の巧まざる巧みに比べると彼の詩には一片の雲翳のやうな理說の重さがある。この點彼は玉茗に及ばない。嵯峨の屋が

散りてゆく花一片の命にも
造化の力こもりぬと
思へば愛のまさるらむ
（「かたみ」一節）

は飄逸な情性がよくその理趣に陷る弊を救ふてゐるものであるが、「荒野の曙」に見る無反省な漫作は彼の飄逸に裏付けられた欠點の發表で湖處子には少しもこの種の欠點はない。國男は情にすぐれ、獨歩は氣に於て勝ち、嵯峨の屋に奇あり、湖處子は信の一點を保ち、玉茗は溫かに、花袋は自ら傷んで各特色を打出してゐるが、詩人として天分を後年發揮しえた人は獨歩以外一人もなく、その獨歩も詩壇のエポック・メーカとなる程ではなかつた。花袋、獨歩が小說に獨得の詩情のうるほひあり、國男が考證文に津々たる詩趣あるは彼等の作詩のかりそめならぬを說明したものだ。

此詩集は「早稻文學」の天來に小兒的（チヤイルデイツシユ）の一喝をくらひ、「帝國文學」記者に、これは詩集ではなくて韻文に對する意見だなどと酷評を蒙つたが、すべてこの詩集の作者が眞率の感情を飾らず匿さず衒はず僞はらず露骨に表白してゐる一事は後年かへつて價高く見られた原因であつた。

獨歩の如きは、三十二年七月大學館發行アンソロジー「花天月地」（石橋愛太郎編）に「はてなき海」を寄せてゐるが、その一篇になるとその簡勁な直語を端的に吐き出してよく異常の美を構成してゐる。獨歩の詩は詩學の第一階段から正直に羞らひもせず登つて行つた詩であつた。その單純と幼稚とを嗤ふものも、その眞率な純情の發露に卒然と胸を打たれぬものはない。

獨歩の作風はさながらに又彼の小說にもあらはれてゐるが、彼の藝術が有する唯一の藝術美はすべてこの點にかゝつてゐる。

然し乍ら、獨歩がこの優秀に到着したに關らず他の人々は詩作を全く棄てゝしまつた。「抒情詩」は第一集であるべき書である。最終書をも出さずに足ならしのままに退いてしまつた人々は永久に未完成の作者としてのみ記憶されなければならない。畢竟、詩集「抒情詩」は擬古派の詩謠ひとり榮えたこの頃に、生硬の咎め、稚拙のそしりは免れないが擬古派には全く見られない新果實の芳醇を放つ詩篇を以て詩壇の一勢力を形したもので、史的重要は少いが藤村が第一集の出るまでの時期に介在しての獨立意義は失はれぬ。此少詩人らが後年の活動記錄に顧みても亦特種興味はある。「國民の友」は此書を名殘りに三十一年八月廢刊してしまつた。

(二十二)

「抒情詩」が出た三十年は、俳句の革新が功を奏さんとし、短歌の革新が緒についた時である。この年を終へて更に時代は第三期に進む。藤村と晩翠との對立の時代である。雜誌「明星」蹶起の前期である。日本の近代詩は第二期を終へてこゝに完くその姿を整へ正にその最初の結實を結ばんとする。

「文學界」の投げた波紋は如何に擴がつて行つたか。その藝術的傳統は、雜誌「明星」がこれを傳へて三十三年以後のロマンティック時代を形造つてゐる。文學上この異邦主義の運動に對立して、祖國主義の萌芽はどうしたか。それは、歌にあらはれ句に出てゐる。擬古派の詩に窺はれる。が、短歌や俳句が、祖國主義の提唱のみから出産したものでないことは、擬古派の場合と同一である。歐化傾向の亡滅が、やがて、國粹主義の勃興を將來したけれども、歐化主義も國粹主義も共に一の大きな流れを分有する二つの支流にすぎない。一貫して遂下するものは、一かの近代主義の政治、宗教、科學、經濟、藝文等の思想の絶え間なき推移變轉である。頽滅を既倒に救つた短歌それ自身は、傳統の詩型の復活といふ意味に於て國粹主義の最も藝術的な發輝であり、この立派な短詩型に新らしい內容を與へた點は、滔々たるローマンティシズムの藝術主義である。俳句とても趣こそ變れ精神に於ては同一の轍を走つた車輪の一であつたことに違ひはない。

舊俳句の俗化は陳套（コンヱンシヨナリズム）に自殺したためであるが、大きな時代の波のうねりを窺へば、ひとり、俗俳の俗句宮廷詩人の造花歌のみでない、あらゆる日本的なるものの痛ましい頽廢であつた。このとき國學の勃興につれ、祖師の昔にかへつて原史

俳道の藝術味を復活したのは、そして、時代思潮の急流に合致させて一新意義をもたらしたのは、談林の奇調を玩弄した紅葉とその一派紫吟社ではなくして、「猿蓑」に古句の神髄を悟り、元祿、天明の系統的研究を試みて夜半亭の秀詩を世に蘇らせた正岡子規その人であつた。傳説的詩型はこの指導者に力をえて再び文壇によみがへり、天明の盛時を今に、再び民衆の詩感の唯一のはけ口として民族性の詩的表現をよく分擔した。

日本派は地上に足をすえた、リヤリズムに立脚して寫生を稱へ古句の自由研究をとなへた。これを短歌の徑路と比べるとよい對象である。短歌が、俳句と同じく古文學復興の氣運に促されて傳統の批判と整理とに根據をかためつゝ新感情の表白に力をつくすやうになつたのは、二十年の頃よりであつた。

佐々木弘綱が「今様論」といひ、萩野由之が「和歌改良論」といひ池袋淸風が歌論、森三溪が「日本の詩」、森田思軒が詩歌較論といひ、すべてこれらは久しい陳套（コンエンシヨナリズム）に墮した國風を泥土の中から拾ひ上げて再び昔にかへる立派な詩型に育て直した先驅をなすもので、佐々木信綱池邊義象落合直文らが文献の攻究と整理とは、子規が古俳諧の新批評と同じく、すべて歴史あり系統あり傳說ある詩型の復活に際する恒として、新らしい眼でそれらの歴史を再査し檢討してその同時代的意義をたづね、次に來るべきものの誕生の準備をなしたのであるが、中に信綱が竹柏園は必ずしも、時代に密接な交渉を保ちつゝ歩む流風ではなかつたに對し、萩之家門下の柴舟、薫園、躬治、鐵幹等はひとしく時代精神の歸趨に敏感で中にも鐵幹は、短歌のみにとどまらず新詩の領土にも入つて「東西南北」を處女作として多くの詩歌集を出し、直文が改新の精神を一きは積極に移して活動したが雜誌「明星」を發刊するに及び俄然、詩歌壇の中心となつて澎湃したる浪漫主義の詩潮の勃興に原動力の觀をなした。明星派の活動は主として三十年後即ち第三期以後に入つて意義を生じたものであるからこゝには述べない。短歌の大道が詩壇の傾向に一致して「三十年代」のロマンティシズムに趨つたに對し、俳句は、それら詩と歌の流風とはなれて子規がかゝぐる法燈の下に集つていはゆる日本派の傾向をます／＼徹底せしめたのは、一に踏青を仰ぐ俳道の精神として人生の靜謐沈潜な觀照を詩技の表現のこゝろの宗法とする點より、又、寫實主義に基礎ををく彼等が、當時やゝもすれば空疎なる感情の放肆な流下にすぎなかつた時代傾向と全く一致しないために、一圖にこの精神を追つて些かも他を顧みなかつたによるが、その日本的なる感情の寫生の土臺に於ける靜謐な流動の中にも、時代の焦燥とあこがれと夢見心地とは、正しく確かに潜在してゐ

る。寫實精神は、小說界に逍遙が大聲叱呼してから、一切り顧みられたけれども尙單なる細敘主義に解して事件の焦點を喪る眞正の寫實的手法を悟らなかつたから自然主義が勃興する迄はつひに正道に入らなかつたが、俳句のみは本來の面目として此方面に力をそゝぐとを決して忘れなかつた。子規は三十一年頃より歌壇の革新にも意をそゝいだが、これは大勢に合せざる點より一代の流風とはならず、遙か後に歌壇の浪曼主義去つて後さらに趣きをかへて歌壇に侵入しつひにその主働者となるにいたつた。又、子規は新體詩の創作にも留意し、二十九年の頃よりしば〳〵試作を公けにしたが、この方面では全然見るに足るもののなく一口に云へば、俳句を引延ばしてそのこゝろを新詩として見た類のもので、しかも枯燥した說明のみあつて感情の律呂ある進行も、いみぢい想像力の展開もない駄作ばかりであつた。例は「四季」といふ季節をうたつた一篇を見れば判明しよう。

白き袋の紐解けば
二布ばかりの裸身に
涼しき風の颯と吹く。
湯あみしはてし妻は今
櫛筒取り出でゝ端坐して
我子に向ひ「極樂と
人の歌ふは我が上ぞ。」

（「四季」。夏。一節）

（二十三）

藤村さきに處女詩集を公けにしてその群小に擢でた秀拔の詩句を世に示し、次いで二十九年に晩翠その作を「帝國文學」に公けにして新詩調の卓越を示してから、世はこゝに初めて新體詩の詩型としての存在を認めた。ついで、明星詩派の運動となり、泣菫あらはれ、有明いでゝ再び二詩才の對立時代となるに及び象徵詩の輸入となつて、泣菫の古典詩は有明が象徵詩と並び稱されたが、この二人の退壇とともに詩壇は再び混沌時代に入り白秋、露風の擡頭によつて辛くも詩壇の存在をしらしめたが、民衆詩の勃興と共に再び未曾有の混糅に陷り非詩の劣才徒らに青蠅の如く湧き出で、おのおの借りものの擬聲を使ふのみのていたらくとなつた。此現代の、上邊許りの賑かな、鈍才稀な淋しさが、未來に何時如何に結末するかは「時」のみが知ることだ。そして、此無知なる憫笑すべき、同時に懸念をよせずには居られない溷濁に陷つた所以は、必然に民族本性が將來した時代思潮の輕佻と急燥とが、良きものと惡しきもの、贊

[illegible]直截の表現をする能力を欠きその暇さへも持たないにもよるが、一には、傳統のないこの草創原史の新詩型が、百年、千年の歷史を有する歌、俳諧の威めしい史美を缺くためあらゆる方面のあふれ者の掃きだめとなり易いのにも由る。譬へば憎むべき煽業者が東西なき勞働者に吸ひ着く新事業の味の甘さを忘れえないで悉皆ちかごろの此の運動にたづさわることを樂しむによく似てゐる。たゞ、新詩壇は小說界とは違つて決して俄分限を輩出させないから射利の性質に差異はあるが、精神界に巢喰ふ唯物家も、物質界に蟠まる「精神家」もいづれは黃白の奴にあらずば、虛名の亡者に外ならないから、阿堵物にさしあたり執心尠い年小無賴の不良漢が世才に任せて游ぎ集るのも自然の勢であらう。文學は時代の反映であると昔から批評家がいふ。

非才の奇緣に捌まり、群小の盲動の間に多少の漸進を重ねて來た日本近代詩壇は、今もなほ昔乍らの蒙昧な紆縈と紛競とをくりかへしてゐるが、「新體詩」生れて已來四十年の歲月をけみしたその間、時處の繫縛に超然たる永久性の捺印ある大藝術品をいくばく殘し得たらう。明治新詩史は、小說と戲曲と及び一般文化所產とともに表面だけの殷賑と活氣と勤勉と生長を贊せつづけて來た甲斐なき所勞のくたびれ果てた回想にすぎない。しかも、日本人は、その本能の希求としての詩的表白のガーゴイルが、傳說的短歌と俳句とのみあれば十分十二分に滿悅自足してゆかれるものであるのか。私はこれだけを否と答へる、いまの眞摯と精進とを缺く詩壇になほ一分の關心をつないで、その正道を踏む、深沈な省慮にゆたかな歷程を衷心から熱望しなければならない所以はこゝに在る。

粟散の島土に種蒔かれた急造文明の補繕に日も足らぬ昨今、私は、純正形而上學の組識に着手しつゝある一哲人のあるを知る。基礎醫學の部分的研覈に成功しつゝある科學者、先史考古學の篤實の研鑽家、街頭の善き步行者、陰德ある逃遁者、狂熱の藝術家らの數少なき存在を知る。これら人生の正統派の世にあるかぎり、私は輕卒に失望することをしたくない。これらの眞率な手によつて嚴密なランビキに掛けられつゝある現代――厚顏の樸直と絕望的驕慢と圖々しい射倖心と私心夥しい愛憐とに渦卷く現代は、いく分でもその民族性の美點を深化するとにより、個人を安んじ、國民を高め、人類を救拔する道程に忙ぎつつあることを信用することによつて、その感情の自由發聲である新詩をいく分でも正しき方角に導いてゐるにちがゐない。この酵母に醞釀される新詩酒が、「人」のごとく、「神」のごとき芳薰ですべてを復活せしむることある日をわれらは涙と信仰を以

て待たねばならぬ。

（完）

附記。聽く所によると、山宮允氏主宰季刊誌「鈴蘭」は今秋十一月を期して、東京朝日新聞社後援の下に、「明治大正詩書展覽會」及び講演會を開催する企ある由であるが、史料のなほ豊かな今の間この催あるは、詩壇はいふ迄もなく、一般、民族の詩的發悟に關心ある人々、その自覺なき人々のためにも誠に有意義の企であると、讃意を表してをきたい。（九月八日稿了）



北陸遊記

村松梢風

親不和

眠が醒めた。枕許の懐中時計を手に取つて見るとまだ六時前だ。昨夜睡りついたのは二時過ぎだつたので、まだ頭が重い。こんなに早く起きても仕方がない――。私は再び枕に頭をつけた。けれども、最早どうしても睡れなかつた。早く起きて、知らない土地を歩いて見度い。其處には面白い物が無限に私を待ち受けてゐるやうな氣がする。お伽噺の旅人になつたやうな當てのない憧がれ――旅に出るといつでも始まる癖である。

到頭起きてしまふ。洗面所へ降りて行つて見ると、戸外は思ひがけなくぱら〳〵と雨が落ちてゐた。梅雨へはいつてから初めての雨である。

「雨が降つては仕方がない」

私は今日親不知を徒歩で行く豫定なので、天候の惡いのを見て失望した。雨降りでは其の難所は越せまいと思つた。併し、店を掃除してゐる宿の番頭に其の事を云ふと、

「なあに、是ればかりの雨なら大丈夫ですよ。彼處は浪さへ立たなけれあ危險は無いのですから――。恁んな日の方が却つてカン〳〵照り付けられる日よりもお歩きになるには樂だかも知れません」と番頭は店先から空を見上げながら答へた。

それで私は矢張り豫定の行動を取ることに決めた。朝飯を濟ますと直ぐに俥を取つて停車場へ向つた。沈欝な落ち付きを有つ糸魚川の町並みは、小雨に包まれて一層佗しげに見えた。

手鞄を市振驛迄托送して、七時四十分の米原行の列車に乘る。朝の故か列車は殊に空いてゐる。驛の賣子が名物の「ゆべし」といふ物を賣りにくる。是れは柚の香のする飴餅のやうな物で、一寸風味が佳い。

汽車は海岸傳ひに走つた。線路が海に近い處は、必ず山も直ぐ側に逼つてゐた。漁村の家が山の根方にばら撒いたやうにある。斷崖の上を列車は走つてゐることもある。砂濱が窓の直ぐ

下に見られることもある。磯ばたには細長い藁屋根の船小屋が並んでゐて、漁船は其の中へ曳き入れてある。

海は遠く灰色にぼかされて水平線は見えない。何處を眺めても一艘の漁船すら浮いてゐない。小雨が細い線を引く。たゞさへ暗欝な日本海が、今日はまた何といふ淋しさだらう。

丁度八時頃親不知驛へ着く。山の中腹に驛の建物だけがたつた一つぽつんと立つてゐる。私の外には乘る客も降りる客も無い。

「此處から市振迄何里ありますか」と改札の若い驛員に訊ねると

「約二里ですな。親不知の御見物ですか」

と云つて、驛員は親切に案内者の家のある所を教へて呉れたりした。相變らず氣倦るさうに雨が降つてゐる、私は雨外套を着、洋傘をさして歩いた。高く海に臨んだ斷崖の上の道路に添ふて粗末な旅人宿が一軒きり掛け離れてあつた。驛から五六丁行くと村がある。三四十戸の家が道の兩側に並んでゐる。海へ向つて奔流する谷川が村を横斷してゐる。案内者の家は其の村の中程にあつた。「親不知遊覽案内無二庵」と書いた看板が出てゐる。私の姿を見ると、檐下で遊んでゐた六ツ位の男の子が暗い土間の方へ先きに驅け込んで、

「父さん、お客さんだよう――」と叫ぶ。

中仕切の格子の奧から「おゝい」と應へる。五十恰好の親父が銅色の首だけ突き出して、

「お客樣ようおいでなされました。只今直ぐにお伴を致します」

親父は帶を締め乍ら奧から出てくる。まん圓つこい體をした子供はよたよた驅け廻つて、

「父さん草鞋、父さん……」とこま鼠のやうにくる／＼と働く。

「どうもお待たせ致しやした」

案内者は古びた麥藁帽を冠り、蓙を着て、私の前に立つて門を出た。小橋を渡り村を出外れると道は海へ突出した山の鼻を廻る。數十丈の眞下に海が見える。其處で案内者は立停つて、彼の職務の最初の皮切りをする。

「お客樣此處から彼方を御覽なされませう、あの海の中に二つ並んでゐる岩を辨慶の投げ岩と申します。昔辨慶が鬼と力比べをした時投げた岩でござります。其の此方にありますのが鬼縁り岩。海が靜かな日には彼處でよく鯛が釣れます。偖お客樣、此の邊四里の間昔は道といふ物が無かつたので皆海岸を歩いて通りましたもの、日本一の難所でございます。昔は此處を歌ガ濱と申しました――」

停車場の建物が遙か彼方に見える。雨は暫く小止みになつてゐる。案内者はそろ／＼歩き乍ら又始める。

「此の國道は御一新後に造られた道でございます。昔此の邊は加賀樣の御領分でございました、加賀樣は百萬石、こんな道ぐらゐは造らうと思へば何でもないのでございますが、わざと道を開かずに險阻にして置いたのだと申します」

案内者は無口な男だと見えて、役目だけの事を云つてしまふとあとは默々として歩いた。淋しい海と、北を向いた陰氣な山の外には見るべき物も無かつた。併し、其の山は先きへ進むに從つて高く險阻な形態を現はして來る。鐵道線路は、隧道の中へ隱れたり、國道と並行したりして進む。線路の直ぐ傍から、一千尺以上の山が、殆んど九十度に近い角度で、板のやうな一つの斷面を見せて切り立つてゐた。山の根に近い處に、花崗石をコンクリートで固めた堅牢な土塀のやうな物が長く〳〵築かれて續いてゐる。それは雪崩れを防ぐ爲めであつた。

「併し恁んな物は今年のやうな大雪に遇つちやあ何の役にも立ちません、何しろ何丈といふ深い雪ですから」

案内者は恁う云つて、今年の冬の戰慄すべき慘害の當時の事を私に話した。其處には線路の北側に小屋があつた。それは雪番小屋で冬の間は絕えず此處で雪の深度を測つてゐるのだと云ふ。脚下數十丈の下に、暗い海と白い海岸線が見える。此處で雪の中に埋もれて死んだ澤山の生靈を私は心の中で弔つた。私は自然の殘虐な振舞ひについて考へた。併し其の殘虐の跡には線路の側でも、山の上でも、草や木が青々としたやさしい芽を伸ばしてゐる――。

私達は途中から線路を橫切つて海岸へ下りた。そして、ザク〳〵踏ん込む砂の上を歩いた。私の靴は砂の中へ甲の高さ迄沒した。案内者は後を振り返つて、

「お客樣、私の歩く處をお歩きなさると少しは樂です」と注意して呉れる。成る程左うすると餘程ちがふ。

私達の行手に當つて一つの大きな山が海中へ突出してゐる。其處で海岸は盡きてゐるやうに見える。

「彼處からが愈々親不知でございます」

と案内者が云つた。彼は其の邊から足を速めて歩き出した。併し私はやゝともすると遲れ勝ちであつた。何故かと云ふと、先刻から私は下腹に痛みを感じてゐたが、それが今し方から急に痛みが強くなつて來たからであつた。

「冷え腹だらう」さう思つて痛んでくると腹を壓へ〳〵歩いた。向うに茶店らしい家が一軒ある。

「此所の茶店は無二庵と申しまして親不知海岸一里の間に唯一軒の茶店でございます。天氣の佳い日は何事もございませんが浪が高くなると年に何回となく海の中へ浚はれて仕舞ひます。

世界に二つと無い景色だと云ふところから無二庵と申します。其の前にありまする清水は夏でも冷たくて手を入れて居られません。昔道中の人が此の清水を飲んで漸う息をつきましたもの親不知の力水といふ名水でございます」

案內者は例に依つて少し節を付けて恁う說明した。併し段々聞いて見ると、此の茶店は彼の女房と娘とが每日出張つて來て開くのだつた。彼の家に掛つてゐた無二庵といふ看板の意味が始めて解つた。

私達は其所へ寄り込んだ。內儀さんや娘もまだ來たばかりだと見えて、茶釜の下で火は燃えてゐたがまだ湯は沸いてゐなかつた。案內者は蓙を着た儘で竈の前へ蹈み込んで、莨入を出して一ぷくやり始めた。

私は憩むと反つて急に強い腹痛を覺えてきた。油汗が額から滲み出してくる。そこで私は何より先きに外套と上衣を脫いで例の力水で額を洗つた。それは背後の山の根から湧き出る清水を筧で引いてあるのだが、案內者が自慢するだけあつて冷たく綺麗な水である。額を洗つた後で其の水で仁丹を飮む。氣分がさつぱりすると痛みも少し樂になる。

其處は此の邊で最も海岸が押し廣まつてゐる。直ぐ側らに海迄突き出してゐる岩石の山の根にそふて、砂濱が奧深く入り込んでゐる。茶店の背後には眼も屆かぬ程の高い山が聳えてゐる。天氣の佳い日には能登の半島と北越の米山邊り迄が一目に見えると云ふ。しかし今日の雨では暗澹とした海の外何も見えない。

茶店の娘は、半紙二つ折りの帳面と硯を私の前に差し出して名前を記して呉れと云ふ。見ると「親不知遊覽紀念芳名錄」としてある。私より前きに來た人の名前や、俳句和歌感想などが澤山書き記されてある。

夏の旅昔の夢を歌が濱

と私も書き付けて遣る。半時間以上憩んでゐたが腹痛は依然として止まらない。併し藥一つ無い此の茶店に何時迄も居ても仕方がないので、又候案內者を伴れて先へ出掛けることにする。

直ぐ眼の前に突き出てゐる大岩石の根方迄行くと案內者は又もや例の調子で始める。

「此處は髯剃りといふ處でございます。浪の荒い時には此の岩の上を這つて向うへ越さなければなりません、攀ぢ登る時顋髯を摺り付けるので髯剃りと申します。此處が入口で是れから先き六丁の間を親不知と申します」

併し今日は幸ひ浪が靜かなので私達は岩の根を廻つて先へ進む。それからはしばらくの間恐ろしい難所ばかりだ。大崩、小崩、大扁、小扁、越手古婆々、淨土崩、先釜などといふ名稱が

附いてゐる。何處も彼處も磯浪が山の根際迄打ち寄せてゐる。恁んな靜かな日でも浪の屆かぬ場所は一間位しかない。少し風が出ると浪は白い齒を剝いて山の裾を嚙むのである。旅人は波間をはかつて岩蔭から岩蔭へ、洞から洞へと驅け付けなければならなかつた。途中で海が荒れてくると後へも前へも行かれなくなる。さういふ時旅人は洞窟の中へ這入つて幾日でも浪の引く迄待たなければならなかつた。淨土崩といふ處は、見上げる程の巨岩が重なり合つて崩れ落ちて全く通路を塞いでしまつてゐるやうに見える。が、側へ行つて見ると、岩と岩との間に漸[illegible]を横にして通るだけの隙間がある。さういふ幾つもの隙間を私は案内者の後について潜り拔けた。

六丁の間には無數の冒險が待ち受けてゐる。過つて此處で命を捨てた者が古來幾千人あるかわからない。夫をうしなひ、或ひは妻をうしなつた旅人が、命から〲洞窟の中へ驅け込む姿を想像して見る。さうして稍心が落ち付いてから其の陰慘とした洞窟の中に自分獨りの姿を見出した時、彼はどんな氣持がしたことだらうと考へて見る。それはあり〲地獄だ。人間に取つて一番不幸な瞬間だ。

昔池大納言定明といふ人の妻が一子を伴つて此處を通つた時其の子をつひに怒濤のために浚はれてしまつた。

親不知子はこの浦の浪枕越路の磯の泡と消え行く

それは子をうしなつた母親が悲しみを詠じた歌である。

私は浪に呑まれる恐れはなかつた代りに病苦に襲はれた。先刻茶店を出た時分から腹の痛みが急に劇しくなつてきた。それ迄は間歇的にキヤ〲と疼めてゐたのが、腸をしぼられるやうに絕え間なしに痛んで、胃の腑を拳固で突き上げられるやうな猛裂な苦痛が加はつて來た。案内者が處々で立ち停つて說明をしてゐるのが焦燥かしくて堪らなくなつた。私は唯一刻も早く次の驛迄行き着き度いと思ふより外に何の念慮もなかつた。

難所を通り越してしまふと以前よりも廣々した砂濱へ出た。その時分から雨が強く降り出してきた。雫が傘の柄を傳つてたら〲流れ落ちる。

市振迄はまだ卅町位あると案内者は云つた。其の卅丁を私はどうして步き了せるだらうかと思つた。案内者は私がそんなに苦しんでゐるとも知らず先きに立つてズン〲步いた。私の足は、一步々々砂の中へ深く喰ひ込んでしまふ。私は止むを得ず傘をつぼめて杖に突き漸うのことで足を前に運んだ。渾身の勇氣をふるひ興して步いた。

「此處で倒れたら己は死んでしまはなければならない――」と私は思つた。

どれ丈の道を歩いたか、どれ丈の時間が經過したのか、私にはわからない。私はたゞ刻一刻と劇しくなり行く腹痛と、呼吸の切逼とを意識するのに止まつてゐた。帽子の上から叩き付ける雨のために全身しとどに濡れてしまつた事さへ知らなかつた。軈て私達は海岸から細路を攀ぢ登つて國道へ出た。それから少し行くと村があつた。

「此處には醫者はないのかね？」私は案內者を呼び掛けて訊いて見た。

「お醫者樣はありません。お客樣どうかなさいましたか」彼は驚いたやうな顏をして云つた。

「腹が痛んで堪らない、醫者が無ければ藥屋でもいい」

「藥屋なら一軒あります。直ぐ其處でございますよ」

新しい家並が一二丁の間續いてゐる。と、其の中の一軒の家の前で案內者は立停つて、

「今日は――」と內へ向つて聲を掛けた。

「今日は――」と家の內から長顏の亭主が應へた。

「お客樣がなあ、藥を欲しいと云はれるだ」

「さうか、どんな藥がええだかな？」

私は全身から雫の垂れる躰を土間の中へ運んだ。見ると其の店は荒物屋で藥らしい物は更に見えない。が、

「腹が痛んで堪らないんだから、痛みの治まるやうな藥があつたら下さい」

「腹の痛みですか。それなら極く良い藥があります。今出して上げますから一寸お待ちなさい」

亭主は恁う云ひ乍ら煙管を捨てゝ起つて、天井に吊してある大きな澁色の紙袋を外して持つて來た。袋には「藥品々」と書いてある。其の中から小さい袋を一個取り出して、

「是れを飮めば、腹の痛みは直ぐに癒りますに」

私は彼の言葉に急に勇氣づいて其の藥を受け取つて見た。「三光丸」といふ藥だ。それから引くり返して裏面の効能書と用法が記してある所を一寸改めて見た。すると「馬には人間の四倍量を用ふべし」といふ文句が眼にはひつた。希望の光がぱツと眼の前から消え失せたやうな氣がした。私は急に情無くなつた。併し、たとへ何でも藥には相違ない、溺れる者は一すじの藥にも縋り付かうとする。人馬の差別を云々する場合でない。私は矢つ張り此の藥でも有難いやうな氣持がしてきた。そこで白湯を一杯貰つて、其の丸藥を、馬の何分の一かだけ飮んだ。

停車場のある處迄はまだ五六丁あつた。私には其の五六丁が何里かの道のやうに遠く思はれた。漸うの事で驛の直ぐ手前の旅人宿の看板の出てゐる家の前迄辿り着いた。私は脊中を突き

のめされたやうにヨロ〳〵と其の家の中へよろけ込んだ。店先には車力などの客が二三人はいつてゐて、年寄の夫婦が此の陽氣に爐へ火をおこして座つてゐる。

「體の具合が惡いんだから、成るべく靜かな處で暫く休まして下さい」私は息も切れ〳〵に云つた。

「はい〳〵、それはお困りでしたらうな。婆さん、×番へ御案内してお上げ」爺さんは婆さんに向つて深切さうに云ひ付けた。

私は水がはひつてしまつた靴を脱いで上へ上つた。婆さんは私を裏二階の小さつぱりした八疊の部屋へ案内した。私は外套を脱ぎ、上衣を脱ぎ、襯衣の襟(カラー)を外して、疊の上へ俯向きに倒れた。

私は多分死ぬだらうと思つた。腹痛は今は何とも名狀の出來ない全身の苦痛に變つてゐる。呼吸は切逼する。動悸は躍る、嘔き氣がする、頭が燃えさうに熱く、眼が眩んでくる。私は數時間の後此處で死ぬことを考へた。宿屋の爺さんと村役場の吏員が一人附いて、私の死骸は山の上の火葬場へ運ばれて行く。其處らには松林があつて、山の下には村と海が見える。雨が止んで夕陽が薄く海を染めてゐる。鐵道線路が微かに光つてゐる。

「此の佛樣も家には女房子があるだらうに、こんな處へ來て死ぬとは餘つ程運の惡い人だ、南無阿彌陀々々々々々々」と宿の爺さんが云ふ。

「人生朝露の如しか。何も因縁事だあ」

年の若い役場の書記は恁う云つた後で北の方の海を眺めて、鼻唄で鴨緑江節を唄ふ………

「お客樣お加減はどうでございますへ？」宿の婆さんが側へ來て心配さうに覗き込んで云つたので、私の空想は中絶する。

「腹が無闇に痛いのです、此の近くに醫者は無いでせうね？」

「近くには無いだが、泊(とまり)迄行けば良いお醫者樣がありますだ。しかしひどくお惡いやうなら電報を打つて來て貰ひますだが」

婆さんはさう云つて呉れたが、二里も三里も離れた土地へ電報を打つたところで何時來て呉れるか心許無い。それよりも私は何とかして一時の汽車で富山迄行き度いと思つた。私は醫者の方は斷つて、燒鹽をこしらへて呉れるやうに婆さんに賴んだ。

婆さんは間もなく燒鹽をハンケチに包んで持つて來て呉れた。

「家に恁んな藥がありますだ。娘が、是れは腹の痛みには良い藥ださうだと云ふだが、宜ろしかつたらお客樣お飲みなさ」

見ると星のコロダインだ。是れは有難い、先刻の馬の藥から見たら格段の差だ。早速コロダインを水に溶かしてガブ〳〵飲み、燒鹽を腹に當ててゐる。

裏二階の方には工夫が大勢泊つてゐて、雨天で仕事に出られ

ないのでガヤ〳〵騒いで笑つたり喋つたりしてゐる。私のゐる部屋と隣室との境には山水を畫いた襖が立てゝある。其の向うでは、外國人らしい聲と日本人の聲とが、妙な片言交りの日本語で時々話しをするのが聞える。海の方へ向いて廊下が附いてゐる。頭を持ち上げて見ると、半丁位向うから直ぐ海である。海と此の家との中間を汽車の線路が通つてゐて、線路の此方の畑には唐土黍だの桑の木だのが植えられてゐる。雨は小降りになつてゐる。

「何といふ淋しい景色だらう――」おそらく昔から此の通り淋しかつたに違ひ無い。そして昔の旅人でも私と同じ様に此の淋しい土地へ來て病苦に惱んだ者が幾人となくあつたことに違ひ無い……。

痛みが少しづつ和いで來た。同時に氣分もよくなつた。私は莨を出して喫つて見た。私は鹽を温め直して貰つたりして、二時間位さうしてゐた。

雨は全く止んで、薄ら陽が空から差してゐた。其の時分にはもう時々輕く腹が疼めるだけだつた。私は氣味惡く濡れてゐる服を再び着て階下へ下りた。親切にして呉れた此家の老人夫婦に厚く禮を述べて出た。停車場は直ぐ側だつた。私は今朝糸魚川から托送してある鞄を受け取つて、一時何分の列車に乗つた。汽車の中で、鞄から襯衣や服の着替へを出して取り替えた。幾つもの驛を通り過ぎた。魚津といふ町を通過する時、私は其處が蜃氣樓の名所であることには思ひ付かなかつたが、其の土地の事が書いてある室生犀星君のある短篇小説を心に浮べながら見た。

富山へ着く卅分位前から、俄然私の病氣はぶり返して來た。以前よりも一層劇しい腹痛が襲つて來た。私は富山で列車を降りると、巡査に病院の名を教はつて其處へ俥を走らせた。それから廿分位經つてから私の俥は城趾の濠端にある病院の玄關へ着いた。私は無斷で診察室へ飛び込んで行つた。醫員達や看護婦は駭いて私を見た。

「腹が痛くて一分も我慢が出來ないのです、直ぐに診て下さい」

痩せ形の丈の高い院長は落ちついた様子で私を診察臺の上に寢かして丁寧に診て呉れた。

「盲腸炎を起したのですな」と院長は云つた。

私は其の病名を聞くと同時にがつかりしてしまつた。それ迄はモルヒネ劑の一ぷくも飲まして貰へば手易く治ることのやうに思つてゐた。

「これからどちらの方へ行かれるところですか？」

私は今度の旅行は飛彈の國が目的地であつた。此の富山から神通川の流域を遡つて飛彈の船津へ行き、それから高山を經て

美濃へ出る計劃である。

「到底そんな事は出來ません、當分の間絶對に安靜を守らなければ不可ない。宿屋では十分の手當が出來ないから、差し當り看護婦を雇つて入院するですな」

私は醫師の命令に服從するより外はなかつた。併し何分腹痛が堪へられないので不取敢注射をして貰つた。注射をしても矢張り痛みは止まらなかつた。

病室の準備が整ふ迄の間私は人の居ない鼻耳咽喉科の治療室の寢臺の上に寢かされてゐた。大浪が押し寄せるやうな劇しい苦痛に私は身をもだへてうめき苦しんだ。少し齢のいつた病院付きの看護婦が側へ來て、

「あんた、旅先きで病氣になられて嘸心細かろ。何んにも遠慮することはないから、用があつたら何んなりと云はれえ」と云つて慰めて具れる。

それから暫く經つてから私は其の看護婦の脊に負ぶはれて病室へ運び込まれた。名狀し難い病苦の中に幾時間か過ぎた。モルヒネ注射がきいて來たのだらう、私の意識は次第に朦朧として、やがてうと〳〵睡つてしまつた。

病後漫錄

私は病院で十五日間暮した。患部の疼みは一日で取り去られたが、其の後の十日間を狹い病室の內から一歩も出る事を許されずに過した。

病室は城の濠に向つてゐた。濠の內側には縣會議事堂だといふ宏壯な建物が立つてゐて、水際には幾株かの柳が高く〳〵伸びて、そして繁つた枝を水面の近く迄垂れてゐる。濠と病院との間を通つてゐる道路を電車が馳つてゐる。人通りも可成りある。それが多少騷々しい代りに、蒲團の上に座つてゐられるやうになつてからは、反つて眼や心の無聊を慰められる事が多かつた。荒み切つた顏をした安來節の女藝人の一座が町廻りに來て其の邊で俥を停めて口上を云つたりした。

私の室と廊下越しに對き合つてゐる病室には、此の春以來入院してゐて今は全く絶望の狀態に陷ちてゐる重病患者が居た。其の患者の猛烈に苦しむ聲が明け暮れ私の耳に附いてゐた。もう二三日しか保たないと私が聞いてからでも、彼は幾日も〳〵病魔の酷たらしい折檻を受け續けて生きてゐた。看護婦達の話しによると、彼は此の土地の者で或る家へ養子に行つたのだが去年の暮に齒科醫の檢定試驗に合格すると間も無く此の病氣に取り付かれたのださうだ。妻子があつて、齢は卅だと云つた。其の細君は四つ位の女の子をつれて看病に來てゐた。直ぐ眼の

前に、彼の人生を斷ち切つてしまふ黑い幕がおりてゐる。それにも係はらず彼は、あらゆる人がさうであるやうに、生の執着と希望を捨てないのだ。稍苦痛が引いてゐる時など、病院附の看護婦をつかまへて、

「――さん、私はまだ死に度くありません」などと云ふ。

「莫迦らしい、それ位の病氣で死んでどうするものかいな。あんた、氣を確かり持つて居られえ」

「此の病氣が治るでせうか？」

「治らいでかいな、わしら永年看護婦してゐるさかい、治つて退院した人澤山見てゐますがな」

すると病人の嬉しさうな笑ひ聲が聞こゑる。

「何云ふてるのや、もう棺桶に謚をしかけてゐるやないか」と私の看護婦が莫迦々々しさうに呟く。

けれども彼とても、看護婦の云つた言葉を其の儘信じてゐるわけではあるまい。あるひは彼自身が誰れよりもよく自己の死を覺つてゐるのだかも知れない。だが、死はあらゆる幻影の消滅である。現在の彼を慰めて吳れるものは、其の事實から緣遠い生の空想だけなのだ。

とにかく私は、人間の死が是れ程までに殘酷なものであることを始めて眼のあたりに見た。朝でも、晝でも、晩でも、夜半でも、彼は苦しみ呻き續けた。鳥の叫びのやうなけたゝましい叫喚、野獸の唸りのやうな物凄い唸り聲、幽靈のすゝり泣きのやうな絕え〴〵の悲鳴――それが病院の隅々迄響いて慄へやうない凄慘な氣を漂はせた。

私は由來神を信じない人間である。が今まのあたり彼の最後の苦しみを見るに及んで、神の恩寵が遍く人類に惠まれてゐることを一層信じ難くなつた。尠くとも人類は、生き乍ら神に面する事は不可能なのだ。

彼の最後が一日〳〵と先へ延びて行くので、人々は倦怠の感に襲はれてゐた。

「あゝ〳〵、愛相が盡きる」細君らしい聲が欠伸交りに恁う聞ゑよがしに云つてゐた。

私はそれを心から責める考は起きなかつた。看護婦達は、其の室を出て他の室へ行くと、重病患者の唸り聲をも消してしまふ陽氣な聲で他愛もなく笑ひこけた。私の耳にも、病人の聲は無意味な喧騷の感を與へるに過ぎなくなつた。

此の氣の毒な若い齒科醫は、私が退院する前日の朝到頭死んでしまつた。

私が退院したのは七月一日だつたが、今年は梅雨が遲れて來

て漸う其の頃になつて雨を見た。其の日も晴れてはゐたが朝から蒸し暑かつた。

　私は加賀の山代溫泉へ行つてしばらく靜養するつもりなので、富山驛から動橋迄の切符を買ひ、十二時何分かの列車へ乘つた。富山藥專の教授I氏夫妻と、同じ學校へ勤めてゐるS君といふ青年とが態々見送りに來て呉れた。私はI氏とは糸魚川の中學校の應接室で、相馬御風氏の紹介で對面したのが最初である。それが因縁になつて、富山へ來て入院以來一方ならず同氏の世話になつた。I氏は芥川龍之介君や久米正雄君等と同期の帝大出身の文學士だが、私の滯在中に話しのあつたのが實現されそれから直きに岡山の高等學校教授に轉任された。S君は此の國の水橋の人で、文藝に嗜みの深い處から矢張り相馬氏と相識つてゐて、私の病氣については相馬氏からの書面もあつて度び／＼見舞ひに來てくれたのである。私は其の人々の深切に對して酬ゐる機會はおそらくあるまいと思つてゐる

　汽車の中も蒸し暑かつた。景色の見るべき物も此の邊には乏しかつた。唯、倶利加羅峠の地形が昔の戰を想像させるのに十分であつたことと、小舞子の手前の手取川の河口の漁村の風景が、其の儘一幅の繪であつたこととの外には、さして興味を惹く物はなかつた。

　動橋で下車すると雨が少し降つてゐる。驛前から山代山中の兩溫泉へ行く電車があるが滿員で乘れさうもないので自動車で行くことにする。自動車は田圃の間の道路を廿分ばかり馳ると山代溫泉へ着く。私は「あらや」といふ宿へ行つた。

　私は直樣溫泉に一浴した。靑く透明な湯が溢れ流れてゐる廣い浴槽へたつた一人で飛び込んで、半月以上溜めた垢を洗ひ落した。さうして座敷へ戻つて、自分で火鉢へ行平を掛けて柔かな粥を煮て食べた。膳の上には八寸餘りの鮎が載つてゐた。

　其の晩は早く床にはいつた。あちらこちらから三味線の音が聞ゑる。隣座敷でも藝者がやつて來て、お客と競爭で小原ぶしを唄ひ始める。昨夜迄のあの陰氣な病院生活を振り返つて見ると、同じ人間の生活の連續にしては餘り大きな違ひがあり過ぎるのに私は駭くやうな氣持がした。騷がしくて睡られなくても私は腹が立たなかつた。人間の慾望の對照が歡樂其のものであることを私は強く考へた。

　其の翌日は朝から荒れ模樣の空で、折り／＼驟雨が訪れ、風がざは／＼とさわいだ。私の居る二階の座敷は裏の山と對き合つてゐた。山には樹木が欝蒼として繁つてゐる。其處へ梯子を掛けたやうに廊下が掛つて、山上の離座敷と通じてゐる。山の

下には泉水がある。山桃の木に似たやうな非常な老齢の一株の樹が、泉水の上全面にさびの附いた枝を擴げてゐる。私は女中が來た時其の樹の名を訊いて見たけれども、彼女も矢張り知らなかつた。それから、其の後で來た時、彼女は主人に訊いて來たと云つて、其の樹が沙羅双樹であることを私に敎へて吳れた。「沙羅双樹――」私は口の中で云つて見た。其の音の響きが、私の心に何となく夢幻的な感じを起させる。

山の上の座敷の客は多分金澤邊りの風流人であらう。夜は大勢の藝者を揚げて長唄などやらせてゐたが、今朝は靜かに鼓を打たせて謡曲をうたつてゐる。

雨の晴れ間を見ては私は町を散歩した。宿の直ぐ前の直經三十間位の廣場の中央に元湯がある。其の廣場の周圍を取り卷いて數十間の溫泉宿が立つてゐる。町は其處から幾つもの枝に別れてゐる。九谷燒の竈元が町中に幾軒もある。陶々軒といふ店へ立寄つて土產物の湯呑など買ふと、番頭は私が少しは陶器が好きらしいのを見て、奥へ案內して參考品の陳列を見せ乍ら深切に說明して吳れる。そも〳〵九谷燒の起原は、慶安年中加賀大聖寺の藩祖前田利治が曾ま封內江沼郡大日山の麓九谷村に良磁石のあることを耳にして、藩臣田村權左衞門、後藤才次郎の二人に命じて其地に窯を築かしめたのに始まる。其の嗣利明の代に至り更に才次郎を肥前有田に遣はして製陶の業を習はしめた。（大河內子爵の研究に依れば彼は更に支那へ渡つてゐる。）數年にして才次郎は藩に歸り再び九谷に窯を築き、畫工久隅守景を聘して陶畫を描かしめた。是れが眞の九谷燒の濫觴で後世に至り古九谷として珍重する物は此の時代の製作である。其の後九谷の陶業は何時となく衰へて來た。文化の始め頃大聖寺の商賈吉田屋傳右衞門といふ者がいたくそれを慨き、畢竟產地が餘り僻陬の地にあるからに相違ないといふので、窯を山代に移して盛んに燒き始めた。後世是れを吉田屋窯と稱へる。九谷燒に赤繪が始つたのは天保年間の事だ。それは畫工飯田八郎右衞門といふ者があつて、赤彩に據つて一種の新案を發明し古代の模樣を描き更に金彩を施したので、粲然として目を射るばかりの物が出來大いに時代の好尙に投じ流行を極めた。所謂八郎畫と稱する物だ。爾來他の地方でも追ひ〳〵窯を築き、此の赤繪を模して總べて九谷燒と稱するやうになつて來たのである。

町を歩くと媚めかしい風俗をした女を澤山見る。お座敷へ行く藝者が驟雨に遇つて、紅い蹴出しから脛も露はに驅けて行く。白粉を濃く付けた溫泉宿の女中が表を見ながら笑ひさざめいてゐる。そこらぢうの二階から、浮かれた三味線の音が雨の

如く降つてくる。山城温泉はどこまでも遊楽の巷である。

午後から激しい風雨が來て夜徹し荒れた。

其の朝私が眼を醒ましたのは五時頃だつた。平常は寢坊の私も病氣をしてから急に早起きになつた。昨夜の風は名殘なく失はれて、靜かな朝霧が大氣の中を流れてゐる。私は例に依つて揚枝を啣へながら風呂へ行く。

八時頃、麗らかな陽が、山の樹の繁みの中から幾つにも割れてキラ〳〵と輝き出した。今朝も山上の客は謡曲をやり出す。冴えた鼓の音が四邊へ緩やかな響きを傳へる。

私は今日は山中温泉を見物に出掛けることにして、九時頃から宿を出た。停車場へ行つて山中行の電車へ乘る。電車はほゞ一杯の客を載せて田や畑の間を馳る。南の方に低い山脈が連つてゐる。電車は其の山の方へ向つて近付いて行く。

山代から電車へ乘つた二人連れの舞妓がある。一人は少し痩せ形で眼が細く吊つてゐる。一人の方は圓ぼちやで眼付きも愛くるしいかはりに、鼻までが圓かつた。どちらも桃割れに髮を結ひ、メリンスの浴衣を着て、紅い帶を締めてゐる。彼女達は最初遠慮深さうに車掌臺の際に立つてゐたが、車掌から危險だと云つて注意されたので中へ這入つて來て小さくなつて腰を掛けた

すると其の前にゐた一人の兵卒が「是れは好い物が來たぞ」といふやうに相恰を崩して揶揄ひ始める。舞妓は知らん顏をして澄ましてゐる。兵卒はそれをいい事にして益無遠慮に遣り出す。

「どうだ、俺が水揚げして遣るべいか、おい!」

側の人がクスクス笑ひ出すと、舞妓は颯と顏を紅くする。兵卒は餓えた獸のやうにニヤ〳〵して口脣めずりをした。

電車はさして高くない山の間を縫つて走つた。山中の町に近付くと、今迄根氣よく舞妓に揶揄つてゐた兵卒は、俄かに上官の前へでも出る時のやうに、釦を掛けたり劍の帶皮を固く締めたり、帽子の埃を拂つて眉が隠れる程に冠り直したりして、莫迦に鹿爪らしい顏をした。

電車を降りて、途々蟋蟀橋を尋ね乍ら私は町を歩いて行つた。温泉場らしい小綺麗な町だ。玆にも九谷焼を賣る店が幾軒もある。冠木門の奥が繁つた植込になつてゐるやうな風雅な構への旅館がある。一體に閑靜で、山代に比べると餘程上品だ。五六丁行くと町が盡きて、山が急に深くなつて來たと思ふ頃、忽ち溪流の音が耳に響いてくる。杉木立の間から、白く奔流する川の水が見え始める。

だら〳〵坂を下りて行くと其處には川添ひに二三軒の料理屋がある。其の前を通り越すと蟋蟀橋へ出る。私は橋の直ぐ下流

に沿つてゐる家へ寄つた

やせ形の綺麗な顔をした女が私を案内した。店から反對に階段を幾つも下の方へ降りて行つて、一番しまひに川床の大きな岩石の上に建てられてある四疊半の席へ通された。女は障子を外して、簾を巻き上げた。

蜿蜒橋は、私の躰から半丁ばかりの距離を置いて、可成り見上げる程の高さに架つてゐた。其の橋は見るからに古雅だつた。遙か上手の山の間から箭のやうに走つて來る川の流れが、橋の眞下の大岩石のために急に狹められて、深碧のとろりとした淵になつて緩やかに流れてくる。それが、やがて又早瀬と變り石を嚙んで遙か下流迄奔流する。對岸にはくろ〳〵とした杉木立がある。其の暗い木立の蔭から瀧が落ちてゐる。

橋の上には見物人の群れが立つてゐる。先刻の二人の舞妓も兵卒も其の中に交つてゐる。時々荷車が通る。

私は浴衣に替へて橋の上へ行つて見た。橋を渡つて暫らく木の下で休んでゐると、向うからあの二人の舞妓が坂道を勢よく驅けて下りて來る。そして橋の手前から杉林の中へ面白さうに笑ひ合つて這入つて行つた。

料理屋の門先きには大きな水船が据えてあつて、それへ筧で山水が引いてある。金網が被せてあるから中を覗いて見ると、鮎が澤山飼つてあつた。

私は川魚の料理と例によつて粥を誂へた。そして枕を借りて仰向きに寐轉び乍ら、宿から持つて來た一葉全集の日記文を讀み耽つた。小亭の後の崖には小瀧が掛つてゐて、瀧壺には山吹に似た黄色い花が咲いてゐた。

「どうもお待たせいたしました」

此家の嫁さんらしい例の美しい女の人が料理と粥を持て來る。

「旦那さん、御病氣をなさいましたんですか」

「旅先で盲腸炎をやつてね、まだ病院から出たばかりなんだ」

「まあ！それは嘸お困りでございましたらう」と眉をひそめる。

私は鮎の鹽燒をむさぼるやうに食べた。一寸位の川魚と牛蒡とがはひつてゐる味噌汁を一口吸ふと非常に美味かつた。

「是れは何といふ物です？」

「ゴリといふ魚でございます。それが此の川の名物ですが、大概の方が旨しいと仰しやいます。此の邊からもつと上手の方で捕れるんでございますの」

それは私の鄕國邊では「かじか」と呼ぶ頭の大な脊に白い縞がある魚によく似てゐた。かじかといふ言葉の音から私は芭蕉が此處へ來て詠んだ「漁火に河鹿や波の下むせび」の句を聯想した

私は、熱い粥を吹き〳〵食べた

生の充實と享樂に資すべき教養と趣味

實生活の藝術化としての「工藝藝術」の振興

工學博士　佐藤功一

藝術の民衆化、實生活の藝術化といふ事は今や全世界に於ける風潮である。これは文藝復興以來、卑近なる實生活といふやうなものよりは一段と高尚な或る特種のものとされて民衆から分離した「藝術」が更に昔しに戻らうとするのである。誠に將來の藝術は總ての日常生活に染入してこれと接密に融和せねばならぬ。此の點に於て總ての藝術の内空間藝術に於ては工藝美術こそ今後の藝術界に於て大に活躍す可きものである。

空間藝術に於て、繪畫彫刻の如き單に美的觀照を目的とする藝術を**純正美術**と名けて第一位の者とし、之に對して實利的用途を伴ふ或は實利的用途を主とする藝術を**工藝美術**と稱して第二位に置く事が一般の習慣であるが、之は純美的立場なる極て限られたる範圍よりせるものであつて、吾人の實生活の立場よりすれば、前者の如き單に對象物を描寫したる藝術は工藝美術に對して描寫美術と名けて寧ろ第二位におく可きものである。

進化論に從へば、人類の有する手の把握的動作は元來或物を獲得して、何等かの關係に於て自己の生を充實せしめんとする慾望の現れである。人類が他の動物との區別的特徴の中で最も顯著なるものは、自然が直接に賦與したものに滿足しない事である。そして自己を充實せしめやうとする慾望を以てそこに種々の製作物が出來た。人類は原始時代に雨雪と猛獸の襲撃を防ぐために家屋、器具、刀槍を作つた。勤勞によつてこの目的が比較的滿足に達せられた所で、次でこれを扮飾せんとする藝術

的慾望が生じた。誠に人類は其の內在的賦質から藝術を創造しない譯に行かなかつた。如何となれば與へられたる力は之を利用しないと萎縮する。力の萎縮は生の充實に對する損失なるが故である。斯くの如くして工藝美術が生じた。極めて古くは、其所には實用器具と工藝美術との區別がなかつた。總ての人が工人であつた譯ではなかつたが工人は皆藝術家であつた。

永い間、文化の進みは遲々として緩漫なものであつた。やがて人間の數も增加し、工業も漸次に分業的の性質を帶び來り、一般工業と藝術との間が次第に分れ行つたにしても、其隔りは昔日に於ては極めて僅少なものであつて、工人の手に依て順次に新らしく發明せられ行く新用途の實用器具は依然として工藝美術であり、また此の或る新器具が發明當初に於て工藝美術としては多少不滿足な點があつたにしても、永き年月の研磨に依て次に不純の部分が取去られ、有秀なる藝術的頭腦を有する人々の手に依つて何時ともなく洗練せられて行て、調和を得たる傳統的形態として次代へ次代へと殘されて行つた。また一方に是等の工藝品は孰れも手工業よりなるものなるが故に其作物の中には自ら製作者の人格が盛られてあつた。人々は恰も水を用ひつゝ其美味と恩惠とに無關心であるが如く、是等の工藝美術に依て生の充實と享樂とを得ながらも殆ど當然の事としてそれを觀過しご居つた。例令別に宗教的關係から今日の所謂繪畫彫刻の存するものはあつたが、兩者の間を工藝美術と純正美術とに別け樣と企てる者もなかつたし、又事實其間に劃然たる區別もなかつた。吾人の古い記憶をたどつても、一般民衆は床の間に飾る可き一つの掛物も一つの置物も有たなかつた。特に目立つた彼等の藝術品を數へたならば、衣類を除いては、神棚及び佛壇に供ふる器物と、爐の上の鈎吊るしの裝飾と、或種の食器と、婦女の髮飾りと男子の腰下け煙入位であつた。彼等の笠や簑や草で編んだ脚胖や藁靴のやうな身につけるものまでも數へたら、總てが工藝美術といつてよい程も是等の形は藝術的なものであり、そしてそれが彼等の生活とぴつたりと合致してあつた。野良から歸つた彼等が裏の淸水で農具と手足とを洗ひ、大戸を入つた側の淡暗い土間の隅の壁に是等の身につけたものをかけ——其所には美しく磨かれた鍬や鎌が整然と掛けられ、其前には米俵が正しく積まれてあつた——、大黑柱の側の大きな粗朶をくべた圍爐裏に寬坐して、鍋から沸々煮える物の音を聞きつゝ、緩かに腰から煙入を取り出して眞鍮の彫刻ある大きな煙管で煙草を燻ゆらしながら、鈎吊の魚の彫刻から眼を神棚や佛壇の方に眺め廻した時に、それは晝の疲れを忘れてどんなに力の充實と享樂を得たことであらうか。

近代の文化の進みは漸次に加速度を加へ來り、殊に最近に至つて其加速度は益々大に、殊に物質文明に於て最も甚だしく、日に日に新しき用途の實用品は起りつゝある。一を美化するいとまもなきに既に第二が生じ更に第三が生ずる。且つ是等の製作品は孰れも機械工業に依て劃一的に多量に製産せらるゝが故に昔日の如き豊かなる心を持てる工人の人格のこれに盛らるゝこともなく、然かも其設計者も亦藝術家ではない。現代は餘りに分業の時代である、工學者は昔日の工人がある如く必ずしも藝術家ではないのである。藝術家でないといふよりも寧ろそれから遠かれる場合が多い。斯の理由からして現代の製作品の多くは工藝美術といふに値せぬ。斯くの如くにして先きの民衆の生活の中心をなした爐は塞がれて鈎吊は跡もなく、煙草は卷煙草と代つて煙管莨入は不用となり、彼等の生を充實せしめ豊富ならしめた是等の工藝美術は各種の藝術的な祭禮や踊と共に村から逃げ去つて、しかも未だこれに代る可き新しい藝術は生れて來ないといふ狀態である。玆に例をひいたのは日本の田舍の農家の生活であるが、この事は時に多少の前後こそあれ、總ての國の總ての地方の總ての職業の人々に一樣にあらはれて居る。民衆の心が日に荒さんで行つたのも無理のない事で、それは生活から良い趣味の教養が取り上げられたからである、よい工藝美術を失つたからである。

之を緩和すべき工藝美術運動の最も早く顯はれたのは十九世紀の後半に英國に於てゞあつた。そして漸次に歐洲地方に傳播した。彼のアール・ヌーボーやセゼッション式と呼ばるゝ所の工藝美術の樣式は是等の運動の道程に於ける小結實の中の顯著なるもので、孰れも二十世紀の初頭歐洲大陸に於て起つたものであつた。是等の運動の引き續いて今日に至り、今や戰爭に依て惡化された風潮を緩和す可く各國の力をそゝげる現時の一大問題となり、藝術の民衆化、實生活の藝術化の聲は益々大となりつゝある。日本に於ける文化運動もまた此の風潮の一の顯はれと見る可く、所謂唯物史觀を範として起つた勞農露西亞の政府すらも、其の文化政策の一として工藝美術の肯久を企圖しつゝある。昇曙夢氏の「勞農露國の文化政策と其施設」(改造九月號)に次のやうな記事がある。

「都市の美觀と共に實生活の美化と云ふ事がまたプロレタリヤ文化の主なる使命と考へられる。曾て敎育人民委員會美術部の工藝美術課では實生活の美化と云ふ事を企圖して廣く全露西亞の美術家に訴へた事がある。其布告文の一節に曰く、「近き將來の藝術は實生活と密接に融和しなければならぬ。藝術は日常生活に入つて行つて、其一切の方面と一切の細目とを、美的に

藝術的に改造しなければならぬ。藝術の光は勞働者の勞働して居る處にも休息して居る所にも遍く侵潤しなければならぬ。工場、會館より勞農民の住宅に至るまで凡て美術家に依つて設計され装飾されなければならぬ」と。

それと同時に工藝美術課は廣く國内の美術家に向つて左記種目の圖案、模型、又は實物の懸賞募集に應ずる事を慫慂して居る云々」と。

我國に於ても最近一般藝術の普久と同時に工藝美術の研究もまた隆盛に向ひつゝある。これに對する專門學校は東京と京都との二ヶ所にあり、各種の研究團體は比較的堅實の發達を見やうとしつゝあり、二三これに對する定期刊行物も出來て居り、また山本鼎氏のやうに特種の努力をなしつゝある人もある、こういふ事實を列擧したら殆ど限りなくあるかも知れぬ。先づ以て意を強うする事が出來るであらう。たゞ懼るゝ所は元來日本人は何物にも装飾をせずに置かぬ特性を持つた國民である爲めに餘程良い指導者がないならば此國民的特質は、其工藝品の役立能力と云ふ事に深く考へを進めるよりも、寧ろ如何に夫に表面装飾を施すべきかと云ふ事に墮する傾向に行くことである。

嘗て私の學生時代に日本建築の講師に某先生と云ふ代々御所の木匠に携つた家に育つた老先生があつた。此先生が美術と云ふ文字を丁度魔術とか手術とか云ふ如く、一種の術と云ふ意義の文字として用ひて居た。譬へば此梁に少し美術を用ひまして云々と云ふやうに。此意味は此梁に少し彫刻を施すとか彩色を施すとか云ふのであつた。夫は先生には極めて眞面目の言葉であつたが、私には頗る皮肉な一種の味ある言葉として頭に殘つて居る。よい工藝美術とは決して貴重なる材料から作られたり復雜したる装飾の有無に存するのではない。人をして快感を起さしめる主要な點は、其形が實利的使用に對する役立能率に過不足なく一致し、其各部が又之に對して恰も動物の體軀に於ける各部の如く機能的に眞の調和を有つことにある。勿論之に加ふるに適當に施されたる装飾が更に觀者の快感を增さしめ、或は之れが多少未だ不完全にして醜なる部分を蔽ふ事は出來るが之れに附け加へられたる所謂某先生の云ふ美術は決して第一義のものではない。

人々は極めて概念的に此の工藝美術なる名稱を、家具及び室内調度・文房具・樂器・書籍・化粧道具・馬具・武器・食器・酒器・煙器・燈具・計量器等の所謂美術的なるものに装身具・玩具・花盛器等を指すものとして居る。これは餘りに小さなものに限り過ぎては居るまいか、建築は大工藝美術であり、これの綜合よりなる都市は更に大なる工藝美術として考へらるべきである。汽車・自

動車は勿論の事、橋梁・石堤・岸壁・更に進んで電線柱の如きも亦工藝美術として指導せらるゝ必要がある。

願くは、一日も早く新文化生活に對する工藝美術が大成せられて行つて、古き工藝美術が取り去られて荒みつゝある人々に豐かな心の教養と良き力の充實とを與ふるやうにしたいものである。（大正十一年九月十八日）

藝術美より享受する慰安

笹川臨風

瑟々たる秋の聲、そも何處より來りて、何處に去らんとするか。蟬時雨漸く收まりて、入道雲の行衛は遠く、尾上に秋の雲流れて、天高く氣は澄みて、銀河冷やかに、月影淸く、大路小路に涼風吹き初めて、柳は夕日に散つて淋しく、野邊に亂れ咲く草花のとり〴〵さま〴〵の風情は、いぢらしくもまた優しい。背戸にすだく促織、蟬、蟋蟀、前栽に聞える馬追、がちやがちや、蚯蚓の鳴く音、いづれか秋の聲に非ざるはなからう。江村の野渡、人稀にして鱸魚肥え、山々谷々の木々草々は色づいて、草紅葉となり、蔦紅葉となり、柿紅葉となり、滿山の錦繡となり、龍田姫の過ぐるところ、齊しく紅ならざるはない。自然は秋に入りて、萬物を美化せずんば已まず、人は凉秋の期に逢ひて、蘇生し嚴肅となるとゝもに、春に於けるが如く、自然の耽美者となり、謳歌者となるのである。

「もろ〳〵の花は地に現はれ、鳥の囀づる時既に至り、班鳩の聲我等の地に聞ゆ、無花果樹はその靑き果を赤らめ、葡萄の樹は花咲きて、その馨はしき香氣を放つ、わが佳耦よ、わが美しき者よ、起きて出で來れ、磐間にをり、斷崖の匿處に居る我が鴿よ、我に汝の面を見させよ、汝の聲を聞かしめよ、汝の聲は愛らしく、汝の面は麗し」（舊約全書雅歌）とあるは、愛するものに對して、自然美嘆賞の聲であつた。「夫れ陰陽陶蒸し、萬象錯布し、玄化言なくして神工獨り運り、草木の榮を敷くこと丹碌の釆を待たず、雲霄飄颺し、鉛粉を待たずして白く、山は空

靑を待たずして翠に、鳳は五色を待たずして粹なり」(歷代名畫記)と云へるは、自然の色彩讃美の言であつた。自然耽美の情は、詩となり文章となりて、思を寄せ、藝術となりて胸中の造化を眼前に吐露することゝなつた。故に詩文丹靑の妙は或は造化の功に會するありと云はれ、或は造化を參けて化育に力ありと稱せらるゝのである。獨り山川草木花鳥風月の自然景象のみでない、宇宙造化の秘鑰は盡く人間の力に依りて開かれることとなつたのである。

テオフイユ、ガウチールは、レオナルド、ダ、ヴインチを評して、「此人は自然を正しく視、曇らぬ眼をもて之を見ることをつとめた」と云つてゐる。正しく視ること、曇らぬ眼もて見るとは、自然を透徹して見たとの意義であらう、猶云ひ換へると、自然を洞察し、其精神を領會したとの謂であらう。宇宙の神秘、世界の秘鑰を開くは藝術家の能事であつた。モナ、リサのほゝゑみは、卽ち其洞察が齎らした收獲に外ならぬのである。大滌子が「山川の大、廣土千里、結雲萬里、羅峰列嶂、一管を以て之を窺へば、卽ち飛仙も恐くは周旋する能はざるなり、一畫を以て之を測れば、卽ち天地の化育を參くべきなり。山川の形勢を測り、地土の廣遠を度り、峯嶂の疎密を審にし、雲煙の蒙昧を識り、千里に正踞し、萬重を邪睨し、總べて天の樞地の衡に歸するなり、天是の權ありて、能く山川の精靈を變じ、地是の衡ありて、能く山川の氣脈を運らし、我是の權ありて、能く山川の形神を貫く」と云へるも、畢竟自然洞察の明と其表現の妙とを道破したものである。

藝術家が自然洞察の明と、其表現の妙とに依りて作られた藝術品は觀者の神をして默會せしめずんば已まないのである。郭熙が「林泉の志、烟霞の侶は夢寐にあれども耳目斷絕す、今妙手を得て鬱然之を出さば、堂筵を下らず、坐ながらにして泉壑を窮め、猿聲鳥啼、依約耳にあり、山光水色、滉樣目を奪ふ、これ豈人意に快に眞に我心を獲るにあらずや」と云へるは、山水畫に對する所說なれども、あらゆる總べての藝術の優れたものは、眼前の境から、遠く超越して、藝術美の領土に誘ふものである。

姑らく文藝復興期の藝術を見よう。あの力强い男性的なミケランジエロのダヴイツドや縛された捕虜やモゼスや、ジユリアノ、ヅ、メヂチーやの諸彫像に對すると、威力に魅せられぬものは無からう。ラフアエロ、サンチの聖母に對し、チ、アノの女性に對するとき、愛の泉の混々として湧くことを禁じ能はぬ。フラ、バルトロメオやコレッジオ・チントレットの藝術を見るものは、そこに人を引きつける靈の働きを否むわけにはゆかぬ。

南都及其附近にある七大寺の遺物を見もてゆけば、推古朝以後、天平時代に於ける幾多の驚くべき敬虔すべき藝術品に逢うて、我が神は凝り形は解け、渾然として冥合するを覺える。そこには我なく、執なく、現世を離れ、利欲を忘れ、修羅闘爭なく、怨嫉瞋恚なく、溫潤春の如く、玲瓏玉の如く、超人的境涯に沒入するのである。大自然の前に立つとき、一切の羈絆を脫して、歸るを忘れる心情は、大藝術に對しても亦同樣である。塵俗の氣が山川の美に依りて淸められると同じく、紛々たる世情は優秀なる藝術に依りて洗ひ去られるのである。

藝術家は宇宙を其胸中に收めて、之を手にて出現させるものであるから、眼前の事、一に生機に非ざるはない。造物の役たるにはあらで、造化の功を參けるものである。此心あり、此修養ありて、神會し手隨ひて、制作の妙は善く觀るものをして沒我の興を享受せしむるのである。藝術の眞の價、本來の光輝は是に依りて發揮せられる。

煩瑣なる人生は、時代とともに其煩瑣を愈々甚しくする。此傾向は近年に至りて益々其度を増すばかりである。物質的文化の向上は、あらゆるものが機械的となり、科學的たらんとしてゐる。煩瑣なる人生は機械的科學的の生活狀態に依りて唯生きんがための人生となりて、頗る荒み行かんとしてゐるのである。此生活狀態を名けて文化生活と云ひ、其生活に至る段階を指して生活改善と云つてゐる。しかし文化生活なるものは物質的文化生活であつて、精神的文化生活、趣味生活は敢て問ふ所でなく、生活改善は生活改便に外ならないのである。

文化生活なるものでは多く二重生活を排斥してゐる。生活改善なるものは、事々物々二重生活を打破せんとしてゐる。しかし二重生活は我が日本人の特有で、又特權である。煩瑣なる人生に於て水草新しきオアシスを作つてゐるものである。二重生活は必ずしも不經濟でない。混み合ふ電車で日夕通勤するに、洋服を便とするは固よりである。事務を執り、業務に就くに洋服の便たることは云ふまでもない。しかし汗水になつて家に歸り就いた時、どてら姿となり、浴衣一枚となつて、胡座をかくほど一日の慰安が他にあらうか。露國の小説を讀んで其深刻を喜ぶ前に露國の民衆が慰安のない沒趣味生活を日に送りつゝある狀態に對して憫然に堪へないのである。三食を簡易食堂に取る人と、晩餐を一家團欒の食卓にしたゝめる人と、心の慰に幾千の差異があるであらうか。文化生活の名は美しいが、趣味のない生活ならば、其生活は猶落莫たる曠野を行くが如きものである。生活改善はよし改便にしろ、其擧は稱揚すべきも、今の所謂生活改善を唱るものは、つとめて其生活から趣味を引離さう

としてゐる。根本の改便を忘れて、多くは瑣々たる無用のことのみ討議し若くは發表してゐる。我等は生活改善の見地から斯る無用なる瑣々たる論議若くは發表の跡を絕たんことを希望する。

日本人は東山時代以後、趣味生活を營んでゐる。東山時代に於ける貴族級の趣味生活が民衆化せられて、其生活は文藝趣味を帶んで來た。其生活はどことなくゆつたりとした餘裕のあるものであつだ。民衆文學もあれば民衆藝術もあり、自然を愛好し、趣味に富んでゐる。いづくの家庭にありても、床の間に、一幅の掛物をかけるを忘れない。ほどに趣味を理解してゐるのである。

過去の日本人は少くとも生活の煩瑣なる間に慰安を享受し得たのである、時代の降下は生活の艱難を來し、餘裕を奪ひ去らうとしてゐる。其特有で特權であるべき二重生活までも驅除しようとしてゐる。此間に在りて、僅に慰安のあるありとすれば、それは自然と文藝とである。

しかし都會生活に在りては、自然に接する機會が少くなつた。煤煙が空を蔽ひ、近郊が市街地と撰ばぬやうになりては、自然は之を遠くに求めねばならぬ。且つ夫れ物質的文化は自然美を破壞してやまないのである。ラスキンが浩嘆した美の破壞は到る處に行はれてゐる。文學は時代の影響を受けて、同じく煩瑣となり神經衰弱となり肉慾的となり、好んで變態性慾を描寫する有樣となつた。劇の如きも、時代離れのした、我等をして現世を忘れしむるやうな超越的のものは喜ばれねやうになつて、深刻なる寧ろ殘忍なる病的のものが歡迎されてゐる。現代藝術も時代の弊を受けてはゐるもの丶、病的分子は割合に少く、猶且つ古藝術品の遺存するあり、古文學の解し難いと事かはりて、これは直に眼で視て、心に會し得ることが出來る。藝術なるかな。今の世に於て我等が現世的羈絆から脫れて暫く理想鄕に逍遙し得るものは、唯ここのみである。

秋は我が邦に於て美術季と云はれてゐる。菊紅葉が自然を彩ると同じく、藝術は人生を花やかにしてゐる。幾多の展覽會は踵を接して、秋日和の爽かな涼しい時に開かれる。沒趣味た現社會に於ける淸涼なる飲料である。乾からびた咽喉を濕すに於ては十分と云はねばならぬ。よし其作品は我等を魅するほどでなくとも、藝術美より受くる歡樂あること を德とせねばならぬ。

けれど藝術を觀るには眼識の高下がある。卑俗は俗人に喜ばれて、高雅なるものは識者に賞される。然も卑俗なるものは多くして高雅なるものは乏しいのである。觀者は古徃今來の傑秀

なる作品に接して先づ其眼を肥やさねばならぬ。優秀なるものに接する機會が多いほど、卑高の別は截然として眼眸裡に映じて來る。今の所謂批評家なるものゝ言に耳假しては可けない。其の多くは正鵠を外れた、藝術を理解しない偏見である。藝術を毒するとも、藝術に利するところは少い。

正しく藝術を理解し、藝術を愛するものは、煩瑣なる人生に於て安息の樂土を見出し得る。炎威烈日の夏を過ぎて涼風袂を吹く秋に遇ひたるが如く、霜雪を凌いで春の光を浴びたるが如く、塵俗の市中を離れて自然の懐に抱かれたるが如く、慰安の樂を享け得るのである。庶幾はくは其慰安の樂をして淸く且純なるものであらしめたい。

今日直接の生の享樂に資すべき
民謠とダンス

田邊尚雄

○

生の享樂の必要なことは今更說くまでもないことである。然し日本に於て從來この問題が餘り眞面目に考へられなかつたと云ふのは、武士の禁慾主義が大なる原因をなしてゐたと思ふ。明治維新の大事業は武士を中心として成された事業であつた。隨つてその制度も亦武士の精神から割出されたものであつたことは當然であつた。殊にそれが急激な事業であつたために、生の享樂などと云ふことは自然等閑にされて居つたことと思ふ。同じやうに鎌倉時代なども矢張り武士中心の制度で、禁欲主義の時代であつた。然し原始時代は兎に角、その他の時代にあつては、相當に考究されて居つた。江戸時代にしても生の充實と享樂と云ふことは大なる問題として考へられてゐた。平

家時代などの、あの混亂した世にあつてさへ、矢張り眞面目に考へられて居つたのである。

兎に角、日本に於てこの問題が打捨てられてゐたのは、武士の禁慾主義から來たことと思ふ。それでその範圍の及ばない所を見るとき、享樂は充分考へられて居つた。例へば農民などの間にあつては、その可否の論などはあるが、盆踊などがあつて、相當に享樂されて居たのである。然るに近頃生の充實と享樂と云ふことが、問題になつて來たと云ふことは、長らく武士の設けた制度の下に服從して居つた都會人が自覺して、眞面目に此問題を考へるやうになつたためだと思ふ。從來の武士の禁欲主義を押通すことから見れば、それは不必要なことであらうが、今日になると既にそれに打ち勝つてゐるのである。

○

そこでどう云ふものが生の享樂に資せられるかと云ふことであるが、そこには勿論色々なことがあらう。然し私は音樂と舞踊がその最も大きなものだと思ふ。何故なら、それは人間の感情を直接に表はすものだからであり、他のもののやうに感情を制限されることが少いからである。美術なども立派な藝術であり、生の享樂に資すべきものとして重大なものであることは勿論であるが、音樂や舞踊のやうにその感激が直接でなく、多少間接的のものであると思ふ。それに音樂や舞踊と云ふものは、どんな未開の狀態に行はれるものでも、文明の狀態に於て行はれるものでも、同一の價値が認められる所にその價値がある。殊に踊りなどは未開人と文明人との間に餘り甚しい差は認められない。尤も江戶時代に藝者などの行つた踊りなどは未開人のそれと比べて可成の差もあるやうに思はれるが、それは文學と結び付いて進步したもので、別種の經路をとつて發達して來たものと思ふ。兎に角誰れでも自分で踊つて樂しいものは未開、文明の間に差がないのである。此點が他の藝術と異るところである。

然し音樂にあつては、未開人の取扱ふそれと、文明人のそれとの間には可成大なる差異のあることを認めない譯には行かない。例へばベートヴェンのシンフォニーのやうなものと、未開國の民謠などとの間には非常に大なる差のあることは確かである。然しそれは人間の理性の差に因るのであつて、近頃のやうに感情の方も大いに考へられるやうになつて來ると自然民謠が大問題となつて來るのである。

此所に音樂と舞踊とにも亦二の別が出來る。一は人間の理性、文明の進步に關聯して發達した高尙な藝術であり、他は人間の感情に直接結び付くと云ふだけで、民謠やダンスのやうなものである。而して近頃物質文明が異常の發達を遂げた結果として、

人間の生活が兎角理性の方にのみ傾いた爲め、感情生活の方面に空虚が出來、人格の中に理性と感情とが釣合はなくなつた結果斯うした問題が又新しく考へられるやうになつたのである。丁度飢えて食を求めるやうなものであつて、現在生の享樂に資すべきものとしては、ベートヴエンなどよりは、直接感情と結び付く民謠やダンスの方が適當してゐると思ふ。即ち前に分けた二つの藝術のうち、後者が相應しいと思ふ。近頃民謠やダンスが盛んになつて來たと云ふのも、この傾向を語るものではあるまいか。享樂に資する目的としては誠によいことと思ふ。

○

ところで、民謠の研究は何う云ふ目的からなされるかと云ふに、第一に藝術的に進歩したものを、古い習慣の殼を脱して新しいものになるには、一度元へ戻つて其所から新しく出發すると云ふ見地からの研究も勿論必要であるが、それよりは感情生活の空虚になつたのを補ふために、例へば理性と感情とを人間生活と云ふ天秤の兩方の皿とするならば、近頃理性の方の皿のみが重くなつて、不均衡になつて居つたものを、感情の方の皿に分銅を積むと云ふやうな所から民謠の研究が盛んになると云ふことは、より必要なことであり、大なる問題であると思ふ。この目的から起るとすれば、民謠の研究は古い教育を以てしては到底完成され得るものではない。近頃盛んになつた童謠の研究なども、大正の端唄的に堕してゐることは、同樣に理由に因るのである。

此所で民謠と端唄との差異を簡單に述べて置きたいと思ふ。

端唄は江戸時代の遊蕩頽廢的な唄であつて、當時の進歩したものの崩れて出來たものであり、直接人間の感情に結び付いて生れたものではない。一方民謠は感情の直接に來たものであつて、そのエキスとも云ふべきものである。然しそれに特有な地方性のあることは、その環境から止むを得ないことであるが、その感情のよく表れたものが即ち民謠であり、國民性を鮮かに表はしたものである。人間の感情が直接音樂なり舞踊なりになれば、自然其所にその國民性の表はれることは當然なことである。然し端唄なども亦日本のものである以上、全然國民性がないとは云はれないが、それは極めて少いものであつて、大體は只當時の頽廢的な傾向の表はれであるに過ぎない。

近頃の民謠を見るにこの國民性を持つたものよりは、寧ろ端唄的なものが多いやうに思はれる。これを生の享樂に資するものとしては、只人間を頽廢させるのみであつて、惜むべきことである。同じやうに支那に於ても小曲と時調と云ふものがあるが、小曲は一種の民謠であり、時調は端唄のやうなものであ

る。今日は小曲が衰へ、時調が盛んになつてゐるが、時調の旺盛を極めた清朝の末期は、最も國運の衰微した時であつた。

兎に角、端唄風のものを研究して、日本の一種の民謠であると思れることは、誠に困つたことである。却つて何等文明的影響を受けない、八重山群島あたりのものに、純なるもののあることは、深く考へなければならない所と思ふ。

○

端唄と民謠との差異をも少し具體的に云へば、技巧の違ひがある。端唄は主に技巧を用ゐて感情を表はすが、民謠にはそれがないのである。尤も技巧の發達は或る程度まで藝術の進歩であるから全然無益なものではないが、それが只技巧にのみ囚はれて感情と平均しないことになれば寧ろ有害なものである。技巧は往々音樂を誤るものである。勿論それが感情の發表に必要な技巧であれば、どれ程あつてもいゝ。

然るに現在その技巧が感情の發表以上に用ゐられてゐると云ふことは悲しむべき傾向である。何時の時代にあつても、必要以上の技巧が用ゐられた時は、人心の墮落して行く時であり、國運の衰微に向ふ時であつた。支那の清朝末期や西班牙などに見ても明かである。又江戸の文化文政時代などの清元の流行などに見ても分る、日清日露當時の緊張した時代にあつては、流石に不必要な技巧などの用ゐられた唄を見ない。それが近頃又技巧にのみ走る傾きのあるのは憂ふべき傾向であると思ふ。

一般音樂舞踊に就いても亦同樣に云ひ得るのである。感情發表以上の技巧が主として用ゐられるやうになれば、人心を頽廢させ一國の悲運を招くやうになる。

故に生の享樂の資として音樂舞踊をおく場合に、どんな音樂舞踊を以てしなければならぬかとなれば、今まで述べ來つた所から、それは當然民謠的音樂舞踊から出るものでなければならぬ。此意味から、勿論今日原始的なものでは滿足出來まいが、兎に角其所から出發したものでなければならぬ、理性と結び付いた大組織の大藝術では、今日の享樂の目的とはなり得ないのである。今日享樂と云ふことを問題とするのは、要するに前述の感情敎育の欠陷を補ひたい所から起つてゐるのであるから、その欠陷を充實すべきものでなければならぬ。ベートヴェンでは滿足出來ないのである。ベートヴェンほどの大天才を捕へて云爲することはよくないが、只この場合の例として見れば、ベートヴェンの時代、即ち十八世紀頃の歐洲は哲學的時代であつて、人間の頭腦も哲學的に、總てを組織の下に作り上げることのみを理想としてゐた時代であつた。藝術に於ても亦その大システムを作ることが第一の目的であつたので、當時の要求に相應し

い、當時の思想から考へて實に立派なベートヴエンのソナタやシンフオニー等の生れたことは當然であつた。けれども今日の時代を見れば、最早哲學の時代ではなく、サイエンスの時代である。綜合的な時代ではなく分析的な時代である。人間の頭腦は只單に組織が出來れば目的が達せられたとは考へず、寧ろ總てを分析的に見て行くことを目的としてゐる。

感情方面として表はれた音樂舞踊は組織が出來ただけでは滿足することが出來ない。歐洲でも最近ロマンチック派が出來て、それが益々盛んになつて行くと云ふことでも明かである。近頃の新しい音樂は人の感情を分析的に表はすと云ふ方面に新傾向を示してゐる。部分的と云つても切れ〴〵の感情を雜然と盛ることではなく、例へば嬉しいとか悲しいとか云ふ感情を一つ一つに取扱つて行くのである。左う云ふ目的要求を考へずに、どんなに新しい作曲をしてもそれは無駄なことである。故に今日ベートヴエンが出たとしても、それは今日の要求ではない。人格の修養としては立派なものに違ひないが、十八世紀の思想を持つた人に對してでなければ効果は薄い。

○

今日生の享樂に資すべきものとしての音樂舞踊は、以上述べ來つた通り、時代の要求を充たすべきものでなければならぬことは明かであるが、只それを時代の要求のまゝに放任すると云ふことは又注意しなければならぬことである。今日の要求が感情の欠陷を補ふことと、これを分析的に表はすこととであることは前述の通りで、その感情は又人間生活の半面を補ふ大切なものであるが、これが要求のまゝに放任されると、自然享樂の目的は變り、下らないものに墮してしまふのである。故にその材料の精選と云ふことが問題となるのであるが、近頃の新しい民謠を見ると、矢張り端唄に過ぎない。今日の新しい教育をうけた人々は、理性は發達してゐるが、純なる感情に乏しいのであるから、それらの人々が手をつければ自然不必要な技巧のみを弄して實際の感情が乏しくなることは已を得ないことである。

もう今日ではベートヴエンでも滿足すること出來ない、と云つて今日の端唄的民謠に行くことは頽廢的になる危險があり、所謂武士氣質な人からは、音樂舞踊は不都合なものであると謗りを受けなければならない。其所で眞面目な材料を研究することが、最も必要なことがある。それには露西亞や獨逸などの古い民謠には可成りいゝものがあると思ふ。又支那の古いものにも相當なものがあり、前述の八重山群島のものや、生蕃のものなどの間にも可成りいゝ材料を發見することが出來る。これらのものを眞面目に研究して行くことが必要である。

近代造園界の趨勢と人生

林學博士　上原敬二

最近學術界の新しい問題として、社會生活の基調として世人が意義ある造園の内容に注目し初めたのは僅かに玆二三年以來の現象である。然もその概念すら未だ十分に徹底して社會に紹介せられて居るとは思はれない。我々が市民の一人として文化的生活に日常を送らうとする場合そこに色々な活きた問題に逢着するが一度それ等の根抵に遡つて考へて見る時、如何に造園の範圍が人生に深い關係を持つて居るかと云ふことが分るのである。

試みに現代の時世に論議せられて居る造園關係の事象を指摘して見るならばその波及する所が廣いと云ふことを略ぼ察せらるゝであらうし、それが更に人世と交渉を有する點を説明するならばこの廣汎なる新興學術の價値を愈々明にすることが出來やうと思ふ。

現代の市民生活の基調は一面より見れば能率の增進にある。この方面が發達すればする程その反面として休養の施設、娛樂の設備が完備して來なければならぬのは當然の趨勢である。公園の利用、天然生活の主唱は正にかゝる要求に備へる對策である。田園都市、都市郊外、住宅問題、郊外地土地問題、都市計劃に基ける公園政策の運用、更に進んでは公園の社會的利用とその施設等幾多社會問題に對しても造園はその一部の對象として論ぜられなければならぬ。或は近く勃興し來りつゝある運動、體育の傾向に對しても之れを助長すべき運動專門の公園、遊園地、野外教育等も忽にすべからざる施設の一つである。これ等の大勢を導いてそれに十分なる恒久性を與へるものは實にこれ等の精神を理解したる者の手になる運動園施設であるは云ふまでもない。次で敎化の方面に着眼するならばそこには著しき近代的傾向の流れが現はれる。自然教育はその一つであつて林間學校、臨海學校、天幕生活、夏季大學等の夥しい開設は年を追うて盛になるが、それ等自然の環境を適當に選ぶことは又それ等の效果を十分ならしむる一策でなければならぬ。次では一

國の風景に對する國是、土地の利用開發に關する政策を通觀してそこには又數々の重要問題が解決を急いで居る。造園上の最高施設として風景政策は最も新しく又最も興味あることに屬する。

以上社會問題、土地政策、教化施設、都市計畫、新興學術等色々な方面からこの内容を今少しく詳細に、人生との交渉を述べて見たいと思ふ。

生活改善と庭園改造。生活の改善を高唱し、二重生活の苦惱から脱離しやうとあらゆる衣食住の形式より、時にはこれ等物質的方面のみならず、進んで精神的方面にも亙つてその改善を叫ばれて來たのは茲數年來の傾向であつて、その爲めに實質は兎に角、その必要と機運とは確に各方面に尠なからざる反響を與へて來たものである。住の生活即ち住宅、庭園、土地の三項はその趨勢に乘じて改造の烽火を揚げて來た。殊に庭園に就ては從來の築山林泉式の日本庭園は新時代の精神にふさはしからぬものとして甚しく改造を強いられた。洋風の庭園、戸外的、開放的なる實用本位の庭が擡頭しかけて來た。結構なる傾向ではあるがその根抵に大切なる眼目を逸して居るやうに一般の人から認められて居る。例へば生活改善同盟會から發表した同會案なる新しい庭園の設計を見る時にそこに加へらるべき筈の日本庭園の趣味的方面が缺けて居りはしまいかと云ふことである。

由來住宅にしても庭園にしても服制にしても長い年月を經て國民性の淘冶と時代の潮流とに支配せられて變遷し來つたものであつて、時代が推移し、社會が進歩したとは云へ直にその要求に應じて一朝一夕に改變せられ得る程單純なものではない。一般の改造運動に就ても同樣であるがその要諦は突飛なる洋風一點張りでは成功するものではない。何れの國を範にとると雖もそれと我國とは第一國民性を異にする。又氣候、風土の差異を考へ、環境、社會制度等の根本に及んでまでも考察を加へねばならぬ。折衷案は古來鵺の如きものと見くびつて到底純洋風の安全なるに如かずと云ふ人があるが夫は進歩のない人の言であつて、少くとも其道の專門を修めたものでなければ古來の我國風と云ふ者と外國の新精神を汲んだ理想とから總ての國民の需要を滿たす程度の設計考案を樹てねばならぬ筈である。前記の案に就て見るも設計者はこの考案を加へたのであらうが觀る者をして謂はしむれば餘りに淺薄なる洋風の模倣であると云ふ。苟も建物の樣式を異にし植物の形態を異にする以上そこに設計の根本は勿論延いては技巧、手法、細部の末に到るまで一貫した精

神が滿ちて居なければならぬ。日本庭園の精髓に通じた人の栄としては物足りない樣に思ふ。今日アメリカに於て日本庭園が如何に分布し、如何に彼等の生活に取り入れられつゝあるかを比較して考へる時何となく皮肉の感に打たれる樣に思ふ。庭園は飽まで實用的のものであるがそこには他の實用性と異り趣味を加へねばならぬ。

近來の庭園解放。都下に於ける富豪成金の輩は自己の所有に係る宏大なる庭園を解放して之を社會の要求するまゝに或は私有公園とし、或は住宅地とする機運が玆四五年以來現はれて來た。說をなすものはその反面に富豪が課税を免れんとする心事であるとか由緒ある華族がこの美名に隱れて世襲財產を手放すのであるとか種々な憶說を立てるものがあるが、その心理の何たるを問はず結果に於ては實に奇特なる企であると思ふ。有効にその土地を利用し得ると否とは當事者の責務であつて解放その物の關係する所ではない。もと庭園は名の如く一私人の所有であつて公衆の來遊に備へたものではないから其解放の結果は豫測し得ざる不便、不都合を醸すのは當然であつてこれも解放その物の罪ではなくしてそれに附帶した事業として設計變更の手段に出でなければならぬ。中たは現に都市の中に廣大なる空地を有して居て自由に附近の市民の出入に任せ公園的恩惠を與へて居る人もないではない。都市計畫の進行と共に自由空地の研究を促しそれ等の土地に對する方策を樹て市民多數の幸福の爲めにかゝる庭園も有効に利用解放されるやうな機運を導きたいものであると思ふ。

田園生活と別莊。都市生活の煩雜を避けて簡素な田園地方に別莊生活を送る者は年と共に增加して來た。徒らに贅澤と看なされたり、外面を飾る樣に看なされた時代は過ぎて今日ではこれ等は生活上の必要から、子女の教養上から當然とるべき途であると思はれるやうになつて來た。それに次では別莊に於ける生活の改善もあるべく別莊その物の改良も起るであらう。次に起る問題は別莊生活を一個人のみの立場からしないで共同的に田園に於ける自然生活を營む樣な場合である。歐米に於けるサンマーハウス、サタデーイブニングハウス、テントシテイー、共同キャンプ等の組織であつて生活の簡便化と形式の單純化の結果として必ず數年內に我國でも中流社會を風靡するであらうと思はれる。自然利用、別莊樣式それに伴ふ庭園の改善等は今日から心がけて研究さるべき問題の一つである。

田園都市の要求。現在の都市の成立は初めより合理的になされたものではなく漸を追つて發達したものである。從つてその內には現代の生活から見ては不便なことも多く改善の策を樹て

ばならぬことが尠くない。然しながら既成の都市に向つて此の如き大改革を加ふることは理想案として何等差支ないけれども之れを實施する場合には幾多の障碍に逢着するのである。ここに於て既成の都市を去り新に組織的に人間生活の要求を充足するやうなあらゆる文化施設を網羅した新都市の出現を望むのは少しく都會生活の向上を望む人にとつては何人にも異論がない所であると思ふ。田園都市要求の一面は正しくこゝに存するのである。勿論その大部分は都市計畫の性質には屬するけれども街も造園的施設に就てはその專門の研究に俟たねばならぬ。又假令新に都市創成の企を起さざるまでも既成の都市に意義ある改革を施し改良の實質を賦與するならばそれに增して完全なる都市となることを疑はぬ。又それよりも規模が小くて局部的なものになると郊外美化とか、郊外都市とか云ふ樣な設備の充實も望ましい。

共同庭園生活。都會生活者の内には今日こそ比較的廣大なる庭園を占有して中には山林と稱する地目に屬するものすらある現狀ではあるが都市の發達に應じ將來は都市の中に於て田園生活や十分なる庭園、栽培は不可能となるかも知れない。否むしろ地價の昂騰、住宅地の拂底、住宅の緩和等大局より着眼する時は市内に於て大面積を包擁し、田園趣味に耽ると云ふことは公共生活の共同性より見ても好しくはない。その結果都市生活者は到底享樂的な田園生活を市 に營むことが出來なくなるのでここに郊外に地をトして共同に庭園生活を送るやうな機運に到らねばなるまいと思ふ。土地を所有すると云ふ意味よりも土に親しみ、水に觸れ、戸外の生活に平常の氣分を一掃する目的から云へばこれに越した妙策はない。五人でも十人でもが一致して土地を手に入れそれに共同ホールを建築し、毎日曜日、休日祭日等には家族連れでこの田園に來り或は蔬菜に、果樹に、花作りに、或は簡單なる小動物の飼育、運動體育の施設を樂しみ終日の勞働を終へて後そこの新鮮なる收穫を食膳に上せ貴重なる勞働の體驗を得て團欒の内に社交心を養ひ自然を味ひ終日の勞苦を忘れる、簡單にして趣味多くこれに勝る有効なる田園生活はあるまいと思ふ。

家庭と學校とに於ける住教育。一般の家庭にも又中等學校殊に女學校に於ても住教育に關する教養は現在の狀態では決して十分と云ふことは出來ない。衣食住の三者は古來缺くことの出來ない必須なる生活要件とされ、物質的生活はこの三者の圓滿なる調和にあるとされて居るがその内で衣、食の兩者はその普及と云ひ趣味と云ひ宣傳と云ひ中々徹底的であるに拘らず住の生活即ち住宅及び庭園は一向普及されて居ない。かゝる偏頗な

發達は現代の生活を徹底的に改良しやうと云ふ主旨の下にあつて見遁すことの出來ない畸形的現象でなければならぬ。宜しくそれ等に關係を有する各方面の士はこの普及と趣味の涵養とに留意して自發的に職業技術家を超越して自ら立案する程度に導かなければならぬと思ふ。現在の女學校に於ては家事教育の中に尠くとも住教育の一項を加へて貰ひたい。

以上は大體に於て個人生活に卽したる方面である。次に公共生活に屬する方面を考察してこの點からも造園が人生と如何なる關係に立つかを論じて見たい思ふ。

公園。第一に公共生活と密接なる關係に立つものは公園である。今日の公園はその施設や植栽の末技に到つては庭園の方法と相通ずる所はあるけれどもその配置、面積、設計等に到つては都市計畫の大綱に據つたものでなければ意義をなさぬ。然るに公園は公衆の爲めの庭園であるとして混同したり、又は公園は私園より發達したるものであると云ふ樣な事實を過重する人もあるが嘗つてはかゝる現象もあつたのだがそれは今日では一つの歷史的のものとなつてしまつた。過去に於ては私園の公開せられたものであつたが今日では全然獨立に私園とは何の聯絡もなく市民生活の上から或は國民生活の上からその設立を企畫せねばならぬものである。園藝や林業の對象として論ずるものでなく全然都市計畫の一分科として論ぜらるべきものである。

由來公園は都市にあつては市民自身の爲めのものでなければならぬ。國家にあつては國民の爲めの施設でなければならぬ。利用する者の爲めに立案せられるのであるとすれば市民たり、國民たるものはこの設計に就ては常に多大の注意を拂ひ以て自己の利用上に資する樣な計畫がある時は進んで自覺心を以て當局を補けて行かねばならぬ。市の當局としても到底市民の十分なる要求までも悉く知ることは出來ない。故に却つて市民に敎へられ導かれて年々完全なる方面へと進歩して行かねばならぬ。都市當局の施設に就ては何事にあれ仇敵の如くに考へて之れを打破し以て快哉を叫ぶが如き非市民的の態度を捨て倶に共に市を鞭打し之れと協和して進まなければならぬ。それ丈けに又市民に於ても十分なる研究心を持つて貰はねばならぬ。私は現在の帝都の公園に就ては多大の要求を持つて居るので機を見て所見を發表したいと思つて居る。

同じく公園と稱する内にも幾つかの種類がある。例へば運動施設を中心とするものに運動園、遊園地あり、國民教化を目的としたものには植物園、動物園、樹木園、野外館、學校園、野外教育施設等がある。夫々の目的に應じて設計按配せねばならぬ。

造園の施設にかけては世界の何れよりも劣つて居ると云はれても辯解の辭はあるまいと思ふ。アメリカの夫れに比べては公園の點だけでも優に二十年は遲れて居る。一體我國には所謂眞意義の公園なるものがない。多くは封建時代の諸侯の邸第の開放されるものか、社寺の境內か、然らずんば有合せの森林地そのまゝである。さうして公園と云へば樹木と砂利敷と便所とベンチの並べてあると云ふことの外何等的確なる意識を頭の中に有して居ないと云ふ有樣であるからその發達に對して何等批評的言論の聞かれないのも無理はないが、少くとも我帝都の公園界には公園系統の確立とプールヅールの組織的設計位はあつてもよさうだと思ふ。公園の發達に就ては普遍的に全市に互つて完全なるを誇りとしてゐるシカゴの設備に比べて帝都の夫れを批評して見やうとは思はない。彼市では小さな一つの廣場にさへ整つた運動器械を設けて市民をここに誘ひ公園道によつて結ばれてゐる大公園の中には我々の夢にも思ひ設けなかつた設備で充實して居る。然るに我々の都市に於ける現狀はどうであらうか。我東京の公園當局には大局に着眼し都市計畫の大綱に順應する丈けの公園系統樹立を企づる技術家又は自由空地の研究者は居ないのであらうか。

我々は歐米の夫れと異る國民性を有し、異る趣味性を解する者である。都市の內に私庭を有することかくの如く多いのは蓋し世界各國の都市に於て比を見ざる所であると思ふ。かくの如き自由空地は特殊の研究に出て獨創の見解を立つるに非ざれば到底根據ある都市計畫の內容として共に追蹤して行くことは出來ない。これ等は即ち基本調査に屬するものであつて統計と利用率とに就て明細なる材料を有せざる市當局は殊に困難なる公園利用上の基本調査の項目を定め着々その方針に從つて今より調査するに非ざれば何時になつても完全なる公園は帝都に現出することは覺束ない。過般世上の問題を惹き起した日比谷公園公會堂の如き、是々非々の論を試み贊非交々起つて輿論を喚起したが一向反響はなかつた。これ等の問題を解決する爲め、市民の疑惑を解く方法としては基本調査さへ完全ならば嚢中の珠をさぐるが如く明に世論に是非を答へ得るのである。政界や私利を以て公園政策を左右するやうな場合には市民たるもの起つてその罪を責めなければならぬのは云ふまでもないが面積や利用率に就ては當局として辯明する必要がある。

公園に亞で公共生活に關聯ある造園界を一覽するならば、墓地であらうと思ふ。墓地は歐米に於ては市當局の手に於て處理せると民間の經營に任せ監督權を市に保有せるものなどあり何れにしても我邦の墓地の比ではない。實に完備した準公園であ

る。それ等の市民人口に對する比率が面積、設計、制度、管理上に現はれて居て我國の如く生きて住宅難に攻められ死して墓地難に陷るが如き醜態を見ることは出來ない。

次には工業地に於ける施設である。所謂工業造園と稱しイギリスに胚胎し、ドイツに入つて著しく發達し今日ではアメリカにてもクリーブランド、デトロイトあたりの工業都市では中々盛んに研究されて居る。

次には保健衛生を主とした方面であつて林間療養所、サナトリア、溫泉浴場、海水浴場、海濱都市、保養地、を初め、病院に就ては神經系統、呼吸器、癩病等特殊な疾患に對する土地設計が大切である。次に療養所の種類としては養老院、養育院、廢兵院、孤兒院、感化院が又この方面の立場から設計されねばならぬ。

以上の外監獄の囚人に對する勞役からその構内を利用して造園的施設を加へ又は我國獨特のものとしては神社、佛閣の境內を如何に取扱ふか、國防上からは國境、要塞、城廓、兵營、飛行場、軍港を如何に設計するか、それ等は何れも造園界の最近問題である。

最後に述べたいのは一國の風景政策である。

出來我國は地形氣候、緯度の關係上風景の表現は他國に類を見ない深刻さを持つ。その內容も極めて複雜であつて少くとも要素としては山岳、森林、湖沼、溪流、海洋を數へ立てねばならぬ。その爲め風景に對して一つの綜合的研究を企てやうとすれば勢ひ地質、動物、植物、森林、海洋、氣象等の學術の力を藉りなければならぬ。さうしてそれ等原因結果に交錯する因果關係を闡明し初めて系統的な研究が達成せられるのである。部分として山岳、湖沼等の研究は如何に進んで居てもそれは所詮局限されたる區分であつて到底風景全班が人生に對する影響を明にすることは出來ない。それ等は風景そのもの丶研究であるが之れが人生に於ては國民性の上に、文化の上に、歷史の上に、產業の上に、如何なる影響を及ぼすかを調査し初めて風景の利用として意味をなすのである。

風景はかくの如く積極的にも意義を有して居る外更に消極的には保存の價値ある風景を國民教化の爲めに保護し又將來破壞の虞ある區域に對しても相當考慮を廻して維持の大策を樹てねばならぬ。風景保護は這般の意味であつて造園上より見たる最高政策である。

次で風景問題中の白眉たるは天然記念物である、目下內務省內に史蹟名勝天然記念物調査會があつてその方面を研究して居る、我邦では史蹟は風景と深い關係を有し名勝に到つては殆と

風景地の中樞である關係上それ等の調査保存の講ぜられるは鄕土藝術保存、鄕土思想の涵養、次代國民の敎化上から忽にすべからざる重要なる問題の一つである。

而してかくの如き貴重なる天然記念物を國家の權力を以て保護の策を樹てその指定を下し所謂國定天然記念物として永久にその方針を更へないことは一面には敎化の効を奏し他面には結果としてここに研究者を迎へる機運を起し自然敎育の上から見て實に喜ばしいことゝ思ふ。かくの如き保存地が景勝地と伴ひ又そこに自然を理解しその廣大なる自然の恩澤を感謝し妙諦を體得して以て自己の內面生活を改造しやうと云ふ樣な心懸けの者の來遊を迎へる樣になるとそこに國立公園の問題が起る。

換言すれば國立公園は唯わけもなく多數の民衆が來遊するやうな意味の民衆公園又は國民公園の謂ではないので主たる目的は天然記念物の保存にあることを考へねばならぬ。國民の來遊は從屬の現象である。尤もアメリカの國立公園に於ても表面の統計なり又は來遊者の有樣を通觀すると宛も國民的遊園地の樣な感がする、然しその裏面には彼國人が天然に對する理解の程度、自然趣味の普及、人口の面積に比する割合が我國より遙に少きこと、都市生活と田園生活との對立、風景地の分布、風景の性質等考慮に入れなければならぬ理由が潛んで居るのである。同國のヤローストーン國立公園の北の入口卽ちモンタナ州のガルディネーと呼ぶ小驛に近く見上げる許りの大きな石積の門が立つて居る。千九百三年、時の大統領ルーズヴェルトの寄附になるもので、初めてこの驛に汽車を降りた來遊者は驛の南に當つてこの壯大なる門が荒漠たる原野の內に屹然と建つて居るのは實に一種の感慨に打たれる。その門を仰ぐと左の如き銘が刻んである。「ヤローストーン國立公園、千八百七十二年三月一日の法律によつて創立」としてその下に

For the benefit and enjoyment
of the people

とかう書いてある。この意味を日本流に解釋する人は或は國民的遊園地と思ふかは知れないが園內の實際を通觀し仔細に天然記念物を調査し公園設立當時の記錄を讀む時は決して國民の來遊が主目的でないことが分るのである。

國立公園の問題は僅かに三四年の間に非常に一般の興味を惹き、名勝地を以て誇りとして居る幾多の地方有志は續々としてそれが國立公園に選定されんことを希望して、代議士を通じ、有力者を通じ、或は請願に或は建言に種々なる手段を盡して實現を翹望して居る。內務省においては一面衛生局が國民の保健敎化の爲めと稱してこの候補地の選定に從ひ他面大臣官房地理課

に於ても前述の史蹟名勝天然記念物調査會に於て名勝地として幾多の地方を踏査して居る。さうして一方は利用開放であるし他方は保存維持である、そこに往々にして矛盾扞格することがなければよいがと思ふこともある。名勝地と國立公園更にそれ等と天然記念物との關係を明にすればする程是等は當然纏つた一局又は一課の支配下にあつて取扱はれなければならないものであると思ふ、その點より云ふ時は國立公園が國民の保健教化に關係を持つ程度よりも之れが天然記念物として保存される方が關係が密接であり意義が深いのである。

次に名勝地を指定し廻遊路線を定めるに當つてここに國道問題が湧いて來る。一國の交通政策の上より路綱を定めると云ふことの外都市その郊外又は近くの名勝地、休養地、保養地、療養地等とは道路を以て結び自動車其他の交通機關を以てその往來を圖らねばならぬ。ここに國道の如何は又一國の風景政策と關係を生ずるやうになるわけである。アメリカが十一箇の國立公園を連結して國立公園聯絡國道期成の事業を起し既成の大小國道と連接せしめて四千八百哩の長程を廻遊することの出來る一貫した聯絡國道を築き民間の國立公園協會自動車協會其他有力なる協會の共同事業とし政府よりは内務省國立公園局の補助を仰ぎ着々完成中である。恐らくこれが完成の曉には更に殘餘の國立公園をこれに連絡せしむるの案を出しその計畫を樹て實施するに到るであらうとは推測するに難くない。

同時にその國道の完成につれて最近世人の注意を惹いて來たことは國道筋の並木即ち地方行道樹又は國道樹とも稱すべきものの植栽である。尤も彼國に於ては記念植樹なるものは近頃一種の流行と思はるゝ位盛にして當時は戰役記念、忠勇記念などと稱して國道添ひの公園等に植栽したものであるけれども、今日ではそれよりも一層意義を深め一種の國土裝景として國道に添ひ植樹帶を設けるの一般運動が起つたのである。尤もキヤリフオルニア州やフロリダ州に於ては早くより之れに着眼し氣候の關係上樹木成長の迅速なるを利用し新に植栽したる所又は伐採を禁止したる所、保存を命じたる所など少くなくその州内南部に近く實に整然たる行道樹を見ることが出來る。ヤシ類、センダン、ユーカリプスの著名なるものを初めプラタヌス、シーダーなど植え列べられた大陸的光景には道行く人をしてその壯大さを感ぜしめずにはおかない。又ニユーメキシコ、アリゾナ邊の砂漠地に於ても同胞が開拓して熱砂の都に於てすら並木許りは完備して立ちよる人に凉を與へる。

以上の諸問題は造園界の趨勢より見たる一斑である。それ等が如何に人生と交渉あり、關係を有するかは大略言及し盡した

つもりのである。かゝる廣汎にして意義深き學術も未だ我國今日の時世にあつては獨立したる一學科として認められて居ないのは學界の爲めに悲しむべき現象であつて我々はその完成の一日も早からんことを希ふと同時にその內容をより多く充實し更に深く廣く人生と交渉あらしめんことの研究を忘れては居ないつもりである。都市計畫が獨立したる一科學と認められると同時に造園學もその實現を近き將來に期したいと思ふ。駸々として進歩しつゝある歐米殊にアメリカの施設は月を追ふて益々完備しつゝある。發達に遲れたる二十年の歲月は益々その距離を遠からしめんとして居る。我々は今や躊躇するの秋ではない。

（十一、九、十五）

宗教的感激と生の充實

石丸梧平

□

この論文を書くに當つて、私は先づ親鸞上人の結婚に就て語りたい。

□

その滿願の日の、不思議なる觀音菩薩の告命を範宴（親鸞）は、たゞ法然上人にのみ話したのであつた。

「何よりも素直に、そのありがたいお慈悲を受けるがよろしい。――よしまたあなたが恐れるやうに、あなた自身の深い業が、たまたま夢想のうちに現はれたのだとしても、それならば更に阿彌陀佛はあなたをお救ひ下さるのです。」

「――」範宴は、上人のお慈悲に滿ちたやさしいお言葉に泣けてしまつた。

「それが觀音菩薩のお告げであるか、あなた自身の惱める業の叫びであるか、そんなことを穿鑿する必要はありません。ほんとうにありがたいと云ふ心持に徹して下さい。そこからあなたの新しい生活が生れる筈です。」上人はまたさう仰せられた。―

そのお言葉こそどれだけ範宴の心を深く省みさせたであらう。たゞ〳〵ありがたい念佛を唱へるより外はなかつた。さうだ、阿彌陀佛のお慈悲は、範宴にこの惱みの生れた日からそれが與へられて居たのだ。(……「受難の親鸞」より)

□

觀音菩薩の告命によつて結婚した親鸞は、その宗教的感激の頂點にあつたと云つても好い。彼れは叡山の禁慾生活、煩惱を絶ち切つて極樂に行くことを理想とする生活に全然絶望して山を下りた——その時は少僧都でもなく聖光院門跡でもない一個のあはれなる凡夫であることを痛感して居たのである。そして遂に吉水禪房に法然上人を訪ふてこゝに淨土門の信仰に入つたのであつた。

死ぬより外に道のなかつた範宴に取つて、その救ひがどんなに喜ばしいことであつたか。そして、その私生活が、どんなに感激に滿ちあふれて居たか!

しかし、かうした物語は、現代人に取つて何の興味もないと、或る評者は云ふかも知れない。現代人に取つては禁慾生活は最初から問題ではなく、結婚はまた當然のことだと。——なるほど叡山の禁慾生活と親鸞の結婚樣式とは、或は不用であらう。だが、現代人は果して「生活」や「結婚」に何の惱みをも持つてゐないだらうか。

田中王堂氏は、私の「人間親鸞」を評されたときから云はれた。「聖道門の教へがあつた爲めに淨土門が生じたのだ。しかし、若し佛教の教へが、たゞそれが佛教であると云ふ事實だけで信の置けないものであつて、それには佛もなく、佛に對する罪もなく、罪の償ひとして地獄もなかつたならば淨土門は全然その存在の理由を失なふことになりはしないか。……私どもは、私どもの要求する新しき生活法を創造せねばならぬ」と、こゝで田中氏が佛とか罪とか地獄とか云ふものを全然キリスト教流に誤解して居られるのは問題とすまい。そして田中氏の最後の言葉は慥かに當然のことである。

しかし田中氏はまた次の樣にも云つて居られる。「——石丸氏がこゝに描き出そうとしてゐる親鸞は、最も現代化された親鸞である。それだけ、親鸞の信仰轉化の經路に關する著者の物語りは、わたくし共現代人に取つて極めて切實な意義を持つてゐる。」と。

私はたゞその一言だけで滿足だ。そして私が「親鸞」を描き、のみならず自分自身を表現しようとした目的は充分それで達したと云ひ得る。それは、一作家として、一人の人間の眞實の道を或る程度まで讀者に同感せしめたと云ふばかりでなく、一人

の人間の生活の經路が、要するに「聖道門から淨土門へ」の類であることを證明するからである。何故なら、田中氏は佛教を否定し、淨土門を否定して、氏自身の哲學を信ずると云はれる。それは即ち範宴が聖道門から淨土門へ「生活を進展」した類でなくて何んであらう。一人の人間の生活は、どこまでも彼自身の持つてゐる個性の上に生きるのである。論理と思辯を唯一の武器としてゐる哲學が、到底個々人の生活をほんとうに理解することは出來ないのはそこだ。――法然上人の唱へたまゝの淨土門の教へは、田中氏の言の如く、現代人に取つて不用のものかも知れぬ。そして田中氏の哲學は、たしかに新時代の人間生活を指導すべき多くの理由を持つてゐる。しかしながら、世間の何人(たれ)もが、田中氏の哲學によつて生活し得るとは、私には思はれない。「生活」と「結婚」とを、たゞ當然のことだとして顧みない批評家があつたら、それは果して人生問題を深く洞察したものだと云はれようか。

□

生活には一切の型はないのだ。昔から幾千億の人間が生きて來た。しかしながら、そこには一つとして襲用すべき型はないのだ。或る部分の共鳴と同感とはあり得る。しかしながら、それは必ずしも自分の生活ではない。

人間は、自分自身が、ほんとうに最初の道をあゆくのだ、そこにこそ眞に、生の充實がある。そしてまた、その險阻な最初の道に非痛なる體驗が生れる。そしてまた新なる歡喜と共に更に々々無限の生命生活が營まれるのである。それをこそ私は『宗教的感激』と云ふ。

最初の道！さうだ、生きた人間の我々の道に、何が起つて來るか、計り知れるものではない。戀愛などはせぬと思つてゐた科學者が、どんな人間らしいことをせぬとも限らない。常識では思ひも寄らぬ私生活が出現するのである。哲學はたゞ常識であるだけだ。

悲痛の體驗から佛の恩寵を見出し、その佛の慈悲を感謝するところに新生活が生れた親鸞上人の宗教は、決して單なる哲學を以て非議することは出來ない。――こゝで親鸞上人の罪惡觀を語れば一層明かになるのだが、與へられた紙面に限りがあるので遺憾ながら略する。他の私の作によつて理解されたい――

□

たゞ私は、僅かばかりの餘白を以て、最も重要なる二三の非難に答へ、そして私の宗教に對する立場を語りたいと思ふ。

□

「宗教だとか、信仰だとか云つて居られる人間はお目出度い。

我々は、そんなに早くこの世のことがあきらめられないのだ。」かういつた或る思想家の言葉を聞いた。

また、

「宗教と云ふやうなものが、どうして現代人の生活を指導することが出來るのだ。」との文章も見た。

そればかりではない、宗教に對する非難、また私の書いたものに對する非難など隨所に見る。――私の書くものは、決して「所謂宗教もの」として書いてゐるのではない。どこまでも唯一つの生る道だ。たゞ一つの道……それを宗教の道と云つても差支へはないが、それにしても彼等には、あまりにもその宗教がわからな過ぎる。田中王堂氏の論文は、氏が宗教的體驗を何一つ持つてゐないと云ふ點に多くの不滿はあつたが、それでも堂々たる學者の態度はある。しかしながら最近では、「解放」誌上に於ける諸家の「親鸞に對する批判」、尙ほ數ケ月前德田秋聲氏が「時事」に書いた斷片など、宗教に對する理解のあまりにも不充分なるを感ずる。

宗教が何故に我々の生活を指導するに足らぬと斷言し得るのだ。宗教とは如何なるものであるかの內容をも明示しないで、或はまた、彼等自身が有する宗教の概念を以て、何故にかゝる斷言を輕卒になし得るのだ。

今の世に、原始人の信仰をそのまゝ、誰れが信ずると云ふのだ。私どもの宗教は、御利益を貰ふ宗教ではない。科學と矛盾するやうな迷信ではない。それからまた、信仰がどうしてあきらめだと云ふのだ。決してそんなものではない。あきらめて止めたことなら、あきらめなくても好い事情が來れば、あきらめない方が好いことになるだらう。とても今度は貰へまいとあきらめて居たものが、そんなにあきらめなくとも貰へると云ふなら、すぐにも手をさし出すであらう。信仰とはそんな御都合主義ではない。もつと最初からの生活原理だ。

貰へるとも貰へないとも未定であるなら、その間は、その人は、定めし不安なことであらう。信仰とはそんな安價な、不安の伴ふものではない。もつと自覺の上に立つてゐる。

私どもの信仰は、少くとも生活を凝視した上に立つてゐる。自己內省のうちに燃え出たものだ。

□

私にも、哲學をむさぼるやうに讀んだ時代があつた、プラトー、カント、フヰヒテ、オイケン、ベルグソン――それ等の人々の哲學には多くの同感があつた。だが、それだけで生きて居るにはあまりに味がない。いや、生きて居られなかつた。私の實生活は忽ちにそれらの哲學から破綻せさるを得なかつた。――

或る哲人、彼れは、彼れの一日の生活を、何時には散歩、何時には饗食、何時には讀書、そして一日として違へたことのない哲人であつたと云ふ。戀もなく、酒もなく、そして、彼れは安全に生きて居た人であつたらしい。私にはそれが出來なかつた。

世の宗教なるものゝうちに、私は何ものかの光りを見ようとした。だが、それは更におろかな企てであることを、すぐにも氣づいた。寺院や教會の既成宗教が、この苦しみの果ての近代人の胸を、どうして打つことが出來るのだ。鐘の響は、僅かに心よい抒情詩を思はせる。だが、それは宗教ではない。何ものかを求めんとして高鳴りするこの胸に、力強い共鳴を與へるには、それはあまりにもかすかに、あはれな詩だ。

□

私はまた、自然主義文藝に浸つて居たこともあつた。――たゞ現實を、あるがまゝに生きるより仕方がない。そして、醜惡なる人間の姿を發見する度に、そこには科學者の喜びに滿ちながら、皮肉に冷笑を浮べつゝ、一層鋭いメスを執つた。

あゝ、けれども、そこにしたゝる血潮は、それはいたましい自己ではなかつたか！やつぱり可愛い自己ではなかつた。

なるほど醜惡そのものが人間の姿でもあらう。だが、そのいたましい姿を眺めては生きて居られなかつた。いづこにも安住の地がなくて、自暴自棄にはなつても見たが、このまゝ棄てゝしまふには、あまりに可愛い自己であつた。

何とかして生きる道はないか。哲學とは、たゞ味のない論理と思辯のみだらうか。宗教とは、たゞ今日の僧侶のみの生活だらうか。

藝術は、醜惡なる人間性の記錄に止るものではあるまい。

何かあらう！

□

私は新らしく生きようとした。

生きてゐる胸からは、限りない或るものが湧き出でる！何ものにも捕はれてはならない。ほんとうの自己を見出さう。

哲學か科學か、宗教か藝術か。――先人の建設した世界は、たゞそれ先人の生活だ。私には一切の殼は不用である。私はただ大空を眺める。大地をしつかりと踏みしめよう！そして歩かう！

自己とは何であるか、それは生きて居る事實である。

その事實、生活とは何であるか。

私は、生活とは欲望の持續する形だと云はう。

ある思想家が生活を語り、人生を論ずる時、彼れは直ちに天

上に理想を掲げて精神の尊嚴を叫ぶ。――精神は死より強い。しかしそれは、人間生活を捨てた空疎な精神であつてはならない。理想とは畢竟何の爲めの理想であるか。――生活！人間の生てゐる事を外にして人間の理想がどこにあるのか。

生活とは、幾多の欲望の持續する形でなくて何であらう。私どもの信仰は、その生活の上に立つてゐる。

生きて居ると云ふことは動いてゐることだ。固定ではない。殼ではない。それだけに人間の生活はぐらついて居る。欲望の力は可なり強く植えつけられて居る。

だが、動いて居る生活、それは可なり危險だ。一足踏みはづせば深い谷底に落ちないとも限らない。ましてや精神力の弱い、肉體力の強い青春人の生活が、冒險の眞只中に生きつゝあることは云ふまでもない。

だが、危險だからとて生活は止められない。恐しいからと云つて欲望を絶ち切ることは出來ない。過去の佛教徒の理想の如く、煩惱を否定して涅槃に入らうとするのではない。――欲望を絶つことは死だ。

さうだ、人間は死にさへすれば萬事は盡きる。死はたゞ一擧手の勞かも知れぬ。

だが、あゝそれは人間には容易なことではない。やつぱり生きて居たいのだ。如何にして生きるか、それが凡ての人間の問題なのだ。

出家と云ふことさへも、それは死ぬ爲めに出家するのではない。ほんとうに自己を生かしたいからの出家なのだ。――この心持が更に徹底する場合には、極樂往生を唯一の自己の道として見出す人があるだらう。しかしそれはやはり死ではない。肉體は滅ぶであらう。しかし、ほんとうの自己がそこに生きるのである。――だが、今こゝでは極樂往生を論ずる紙面を持たない。たゞその暗示に止めて置く。

私の宗教は、どこまでも生活を肯定すると云つた。さうだ、人間の煩惱生活がどんなに悲痛であるかを私は知つて居る。そこに係蹄がある。だが、それは覺悟の上だ。苦しくなつてからあきらめるのではない。どんなに苦しくても、煩惱の人間生活が悲痛であることを、それを生活原理として自覺して居るのだ――あきらめが信仰ではなくて、その苦しいところをどう生きるかと云ふのが私どもの宗教なのだ。

私はその信仰のすべてを「人間親鸞」並に「受難の親鸞」のうちに書いて置いた筈だ。しかしそれは、凡ての人から同感を得る爲めではない。一人の人間にはおのづから異る道があらう。私はたゞ一つの、自分の道を歩かう。さうだ、人間の生活には型は

ない。人間は自分自身がほんとうに最初の道をあるくのだ。

生の享樂と食物の趣味

村松梢風

古人は口腹の慾望を下等なものとして卑めたが、勿論そんな時代は過ぎ去つた、性慾問題さへ公然と論議される。吾人の生活と最も密接な關係を有する食慾並びに食物に關する問題がやかましくなつて來たのは當然の現象だ。佐伯博士なども例の營養料理以來大層賣り出して國中の細君連から崇拜されるやうになつたが、學者が研究室から飛び出して社會に向つて宣傳(プロパガンダ)をやる事は誠に結構な話だ。僕などは科學的智識乏しく食物の營養價値を云爲する資格はないが、併し食物の如何が吾れ〱の肉體的及び精神的生活に影響を及ぼすことの多い點は十分に認めてゐる。一寸一例を云つて見ると、僕は當年の夏は別項紀行文に書いた通り旅行先で腸の病氣をした。元來胃腸が弱いので歸京後も醫藥を絕やさなかつたが、醫師の言に依ると努めて菜食をしろといふことなので此の夏中は殆んど野菜ばかり食つてゐた。茄子、南瓜、冬瓜と云つた物ばかりでまるでガチャ〱みたいに暮らした、お蔭で一遍も腸カタルをやらずに濟んだ。牛肉や魚肉から離れて見ると最初はひどく物足りぬ感といふより寧ろ情無い位だつたが、命惜しさに辛抱してゐるうちに慣れて來て昔の江戶兒が三日魚を食せされば骨と肉とが離れると云つたのも嘘だといふことが分つたばかりか、野菜に對する味覺が以前よりも發達して來て、此の分なら生涯菜食一方で押し通す事も困難ではなさゝうに思はれて來た。のみならず食物に對する觀念が淡泊になつた。食は腹を滿せば足りるやうな氣持になつた。すると不思議なことには其の食物に起因する恬淡な心持が他の一切の思想にまで影響したやうだ。大袈裟に云ふと人生觀が枯淡になつた。金持になりたいとか名聲を博したいとか或ひは美人の寵を得たいとかいふ所謂煩惱や俗念が薄らいだ。東

洋の隱遁的風格が自から備はつてしまつた。嘘をつけと云ふ人があるかも知れんがいや本統の事だ。是は餘程おかしな話で、通常人間は冬より夏の方が俗念旺盛の時期であるのに僕は反對に盛夏に入つて益仙骨を帶びて來たのだから是れぞ疑ひも無く日頃菜食の賜物であると信じて、茄子や南瓜に感謝して一層愛用を怠らぬ事に努めた。御承知の如く當年野菜の大當りとある。馬ほど食べた處で値段は高が知れてゐる。貧乏人のくせに口ばかり奢つてゐた男が急にガチャ〳〵の眞似を始めたので細君の喜び方はない。實に善良な夫となつたことを彼女は更に野菜に向つて感謝したことであらう。こんな風で一と夏を通つた。處が、九月に入つてからのこと、或日止むを得ぬ交際ひでカフエーへ行つて洋食を食べた。すると血の滴るビフテキなどが出たが、食べて見るとどうも其のうまさと云つたらないのだ。到底芋や大根の比に非ず、味はひや營養が見る〳〵全身に浸み渡るやうな氣持がして兎に角愉快で溜まらない。早速其の日から變節改論し一と夏中の肉不足を取り返すべく妻君管理の米代を掴み出しては、毎日の如く西洋料理店へ行つて鱈腹詰め込んで來る。恁んな時には日本料理の刺身や酢の物位では腹の虫が承知しない。何でもこて〳〵した脂つこい物でなければたんのうが出來ない。處で、只是れ丈の話では面白くもないが、菜食主義の僕といふ仙人が肉食を始めて以來俄然として人生觀が一變してしまつた。詰り昔に返つて益其の度を强めた觀がある。肉體的の精力充實は勿論意氣潑剌俗念旺盛の極に達した。すつかり墮落して夷狄になつてしまつた。是は最近の僕の體驗の告白である。食物と人生との關係を説明するものだと思ふ。人生を享樂しようとする人は大いに肉食をしなければ駄目だ。が又、菜食主義を實行し更に一歩を進めて蕎麥粉位で濟ませるか、遂には霞を食ふに至らば仙人たるのも易々たることだ。

或學者が玄米飯を奬勵する言葉の中に「成る程玄米飯は白米飯より食べてはまづい、併しそれは仕方がない、食物を享樂的に攝る時代は最早過ぎ去つた」と云つてるのを見て呆れた事がある。犬猫鷄でさへうまい物は知つてまずい物は食はふとしない。動物一切に通有の本能だ。本能の滿足を增大してこそ至當だのに本能を抑壓して何が文化だと云ひ度くなる。生理上から云つても、うまいと思ふ意識をもつて食ふのとまずいと思ふ意識をもつて食ふのとでは消化率が違ふさうだ。更に又、玄米と白米との消化率を化學的に比較研究した學者の最近の報告に依ると、玄米の消化率は白米のそれに較べて一割强劣る。それで白米飯と同一の營養量を攝る爲には玄米飯は三割、麥飯だと一

割一分丈多く食べなければいけないさうだ。其の代り排泄物は玄米飯の方が澤山出る。人間を肥料製造の機械であると看ない限りは白米飯の方が能率が多いのである。米の表皮の中に含まれてゐるビタミンとやらいふ物は脚氣を起させなくする精分だから、是は別に米糠から吸收して食すればよいといふ說である。玄米飯は何處迄も文化の逆轉である。

先年本誌へ連載された谷崎潤一郎氏の小說「鮫人」の中に出て來る或人物は、極度の胃擴張の爲めにふだん猛烈な食慾をもつてゐる、彼は胃袋が張り切れる程物を食ふ。その實感を「腹一杯食物を詰め込んだ位確實な所有感を味ふことはない」といつたやうな言葉で作者は說明してゐた。とにかく其の男は無闇に澤山物を食ふが、それでは上等の料理程よいのかと云ふとそれが反對で、下等な西洋料理などの脂の匂ひのプン／＼する惡くしつこい奴でなければ滿足されないといふ氣持が實に面白く書いてあつた。あの小說の中では此の人物が最も巧みに描かれてゐた。かういふのは無論病的で謂はゞ變態食慾とでも云ふのだらうが、腹一杯食ふといふ事は食物享樂の上の一要件に相違ない。單に味覺だけのことなら一と口食へば足りるわけだ。處が、食物享樂の實感は、其の旨い料理なり飯なりが、長い長い食道をそろ／＼と降りて行つて、最後に胃袋の底からギツチリと詰まつていく處に何とも云へない滿足があるのだ。腹八分目では駄目だ。腹十二分に食はないゝには本統に享樂した感は味はへない。人生滿腹時位愉快な事はない。滿腹で思ひ出したが、僕の郷里でとろろを食ひ過ぎて一命を落した男があつた。何でも或處でとろろの御馳走になつて動けない程詰め込んだが歸り道で胃袋が破れて死んでしまつた。其の時一緒に歩いて來た男の話しに依るとパチンといふ音が聞えたと云ふが、どうも是れは當てにならない。大食漢は世間に隨分多い。野田卯太郎氏なども、鰻丼五ツ六ツは平げるさうだ。甘黨の大食家では日本一の菓子通鶯亭金升氏がある。鹽瀨の汁粉とぜんざいで普通が七杯、飯の直ぐ後が四杯、それが毎日でも續くさうだから偉い。文化文政時代には人間が莫迦呑氣だから折り／＼大喰會といふものが兩國の旗亭などで催された我れと思はん大食家が江戶中はおろか近郷近在から胃袋の口を開けて集まつて來て各自が一番得意とする食物を食つて見せあふので優勝者には反物や小間物の景品を出した。どんなのがあるかと云ふと、鰻の蒲燒五十串平げたのや、ゆで玉子を卅續けて食つたのや、其の他大饅頭六十、飯を六十八杯、蕎麥が六十三杯、饅頭五十羊羹七棹餅卅茶九杯などといふ豪傑が雲の如く控へてゐる。ごく古い處では

百人一首の歌人中納言朝忠朝臣が稀代の大食家だつたことは、僕が曾て本誌の隨筆中に書いてある。

思はず大食の辨みたいになつてしまつたが是れは享樂的方面からのみ看た場合で、趣味眼をもつて批評する段になると餘り大喰ひは殺風景で見つともない。極く美味い料理を少量に食べる處に趣味はある。西洋料理よりも日本料理、其の中でも茶事會席の料理が一番高尙で趣味的だ。席の飾り付、料理の配合、器の吟味、さては座談の洗練巧緻を盡す處に至つて完璧である。江戸料理の祖は八百善で文化文政の享樂思想發達の世相を表はしてゐる樣々の逸話があるが、幕末の通人某が八百善へ行き鯛のうしほの器の蓋を取つて見たばかりで食べないので料理人が氣にして座敷へ行つて其の譯を訊ねると客の曰く、うしほといふ物は海濱の氣を味はせる爲の料理だから蓋を取つた時に磯の香がしなくてはいけない、それが爲めに海草をつかふのだが、此のうしほには其の肝心の海草が無い、是れではうしほにならないではないかと云つたといふ話があるが、聞いても尤もな次第と合點かれる。眞の食通たるには舌の働きだけでは駄目である。他の鋭敏な官能を必要とする。鰻はしつぽが旨く鰈は鰭の肉に味があると云つたやうな類は食通の資格を作る一部分である、がそれさへ解らぬ人間が多いのは慨かはしい次第だ。鰻のしつぽで思ひ出したが梅暦の丹次郎が深川で偶然いひなづけのお蝶に邂逅して鰻屋へ上つて話しをする處があるが、其の時丹次郎は中串を三人前誂へて其の中のしつぽのはふだけをわけてお蝶に食べさせる。まことに丹次郎の心掛けなどは隙き間のないものだ。僕などはお蝶の分までこつちへしつぽを取り兼ねない。そんな心掛では色男になれない。

或る運動家の味ふ生の享樂と充實

飛田穗洲

彼れは、運動家に生れた幸福を沁々感じさせられてゐる一人(ひとり)である。物質的にも地位的にも勿論何にものもない彼れは、世

間から度外視された貧しい生活を續けてゐるけれども、彼れの心は常に平靜を保ち、溫い血は絕えず其の脈管に躍動してゐる。彼れの周圍は若い青年であり、可憐な少年である。そこには偏屈な倫理道德もなければ、生活の呪もない、明け開かれたる天地に、陽の惠土の香を吸ふて、生を享樂する美しい小鳥の群とも見え、眞裸體な生一本が彼等の全部を支配してゐるかのやうに思はれる。

人々はそれを見て何にが面白いのか、どこに意義があるのかと責めもし、嘲けり罵るだらうが、彼等自身の愉快さは一寸局外者には傳へ難い。

碧空の下、花咲く堤の流れ、汗が鹽と吹いた身體に三斗の冷水を浴びた氣持を、面白さが解り、意義を讀まうとする人達は知つてゐるだらうか、あの文字にも言葉にも現はされぬ爽快の極致、運動後の彼れは必ず生の樂この中にありと叫ぶ。汗、それも不純な氣持から開放された汗が、彼の全身の毛穴から湧き出で、夕陽がグラウンドのベースを斜に射る時、疲れ切つた小雀の群が、古井の水に集まつて、無念無想に誘つた尊き汗を拭ひ去る。そこには深く深く生の幸福が味はれねばならぬ。かく云はゞ多くの人々には解せない謎であらうが、今は謎として置くよりほかはない。氣の毒ではあるが力の及ばない事である、純な汗を流し得ぬ人々が、冷水を浴びれば徒らに惡感に襲はれるのみである、今の生活に喘ぎつゝある人々は不仕合に生れて來た、それを救ふには餘りに遲過ぎる、しかし人々の子孫はきつと汗と冷水との尊さ樂しさを知るであらうと信じられる。

彼はその汗と冷水の快とに引きづられて三十幾年を所謂意義もなく過して來たのである、軍人たらむとした初志も、教育家たらむとした希望も結局は汗と冷水との快味に蹂躙られて仕舞つた。けれども彼はそれを露ほども後悔してゐない。悔ないばかりではない、將官になる運命を持つたり、博士になる不幸がつきまとつてゐたら、俺の一生はどんなに慘たらしいものであつたらうかなど〻不思議な囈をすら聞くのである。

汗と冷水との快味が彼れの社會的慾望を奪つたのも見落す事は出來ないが、それよりも大きな事實は春秋幾年花や月は愚か、戀すらも忘れてゐた迂濶である。異性に憧憬れる年配の十九や二十の彼の前にも、既に元祿姿や夜會結びの類はあつた筈であるのに、觸れて見やうともしなかつた彼れの無風流は、後年選手生活を終つて酒間を往來した時すら呼び起し難い迄に惡くこびりついてゐた。これは彼の生涯に對して唯一の汚點であるかも知れない、戀を語り得なかつた青春時代は一生の歴史に艶のある頁を失つたものとも云へる。しかし彼れはそれ程重大な過去

の失敗をも更らに悔いようとしない。俺は戀を知らぬけれども熱情から驅逐された木强漢ではない、求むれば戀位は立派に遂行し得る能力を備へてゐた、けれども汗と冷水との索引力は、美事その體驗から俺を引放して仕舞つたと云つてゐる、彼れに附纏つた汗と冷水との快味は、異性を思ふ前に、ボールを想はせた、ラケットを愛させた、オールを慕はせた、その思慕の情が大きくなればなる程、擴がれば擴がるほど、異性の香は漸次に遠ざかつて、遂にその華やかな靑春時代は、艶のないグラウンドやコートやレースコースに囚はれて了まつたのである、今にして之れを想へば、惜春の恨なきにあらずではあるが、生の享樂の上には何等の障害も與へて居らぬ、汗と冷水の快味はその不戀の不足を補つて尙剩りがある、靑春の戀の殘骸が今日まで甘く生を樂しませて吳れたらうとは信じられぬ彼れは、其の思出が曾つて十數年前に打ち飛ばしたホームラン一個の愉快を繫ぎ得たらうとはどうしても思はれぬ、しかも汗と冷水の快味は今なほ彼れを捨て去らうとしない、戀の勝利を味ふ事の出來なかつた無粹な彼れは飽までも汗と冷水の勝利に耽溺しようとする、戀の壽命を量り得ぬ彼れも、汗と冷水の因果關係並に若返り法に就いては自信ある博士論文を草し得ると信じてゐるらしい。

彼れは彼れの命名した辨天町萩の御殿——稍色消してはあるが說明を加へ置く。其の辨天町御殿は十年前家賃金六圓八拾錢也の契約の下に新家庭を形成し、今に十年一日の如く其家に住つてゐる、長男も次男もこゝの六疊の間で產聲をあげた、今は金貳拾壹圓也に値上げされたが、家賃を滯つた事は一回もない——を金殿とし玉樓と心得てゐる、彼れの妻君と愛兒二人はこの汗と冷水の快味に生きた主人公を守つて、またとない背の君であり、彼れの恩師であるA先生と小學校の受持敎師の次に偉い人として崇めてゐる。最もそれには所謂相對性原理とも云ふべきものか、動し難い生きた證據が提供されて冷水先生を自然と尊敬せしめねば已まない。

彼れと軒を並べて久しく住む二人の紳士がある、彼等の內の一人は官吏の古手であるが、此の人巧みに泳ぎたらむには相當の地位を贏ち得べき材料を有して居り、學才も豐富である、他の一人は道を貨殖一點に突き進んだため身分相應の成功を收めてゐる。共に中產階級にあつては押しも押されもせぬ人々であるが二人共揃つて、執拗なる女辨を有してゐるのが不思議としか思へない。彼等の一人は三人、他は五人の子福者であるが、其の兩家合せて八人の子女はいづれも母胎を異にしてゐる、妾腹の子がある、先妻の子がある、甚だしきは女中を母として生れた子がある、それらの不幸福な子供達が一家の內に混居してゐ

る、感心な事にはそれ等の母を異にした子等は頗る睦まじく、少しも不愉快気に見えないけれども、二人の中老は未だに不義の快樂から醒めようとはしない。五十餘歳の禿頭の老人は、若くして美しき愛妾のために日となく夜となく現を拔かし、彼女のためなら五十餘歳の老骨惜しからぬ底の熱度を示せば、他の一人も幾人かの妾を代へ、益々盛んな發展振りに驚かされる。二人の妻君これまたその防妾策に家庭を顧るの遑がない、或は妾を漁る主人の跡を追ふて寧日なく、或る時は板橋の緣切り榎の樹皮を乞ふて主人に献ずる葉茶の中に混入するなど其の多忙さ加減實に同情に値する。此の間兒は登學の期に遅るゝも國家の爲め、家居を顧みるの餘閑なしと豪語する官吏の古手の享樂も一風變つたものと云はねばならない。

これに引換ふれば彼れ冷水子の野鈍救ふべからざるや寧ろ噴飯に堪へない、汗と冷水に浸る以外は終日室内に蟄居してヘボ原稿の作成に餘念ない、夜間閑を得れば愛兒にすがられて少年本を讀み、不別嬪なる妻君の前に世間噺を聞く、その柔順にして無氣力なる到底二紳士の異母數兒を擁し、猶且つ活動を休止せざる偉大さに比すべくもないが、彼れの妻君は不幸にしてこれを無上の幸福と歡び、彼れの愛兒は、自家用人車やフロックコートに身を包んで乘り出す二人の紳士よりも、常に家庭にあつてヘボ原稿を書きつゝある親父の冷水先生を世界中で一番偉いものとしてゐるらしい。

彼れは時にこんな事を言つて見た事がある。一つ金儲をしてやらうかなあ、ヘボ原稿賣りもつく〴〵厭になつたから。よして下さい、あなたにお金持ちなんかになられたらそれこそ大變、五十の戀、六十の戀、現にあるぢやありませんか、私共は貧乏してゐるところに樂しみがあるんです、あなたの原稿が賣れなくなつたら、私が職業婦人になつて思ひ切りノックの打てるやうにしてあげます。

戀を知らぬ彼れは妻君の一喝に忽ち沈默して了まう、生意氣な事を吐かすなとは思ふけれども何時迄もノックを打たせて吳れると云ふ心意氣が氣に入り、若しかすると俺のやうなものでも金が出來れば美人の膝を枕にすると云ふ詩の心になるかも知れぬと恐怖が湧く。

主人公は汗と冷水の快味に浸り、妻君は貧しい生活に人生を享樂すれば、あとの悴二人は何にを享樂しようとするのか。

彼れは學生時代其の父のために學資を斷れて二年有餘苦學した、彼れの父はさる田舍で可なりの物持ちであつたらしい、三人や四人の學資に事缺かぬ人であつた。彼れはその次男に生れた、父は彼れを東京に遊學させる事を欲しなかつた、彼れは田

舍に居る事を欲しなかつた、二人の中には間隙が生じた、彼れは遂に振切つて東上した、父は彼れを愛する事他の子女に倍つてゐたゞけ、彼れのこの上京は昔氣質の父の怒りに觸れる事が甚だしかつた、學資は送らぬ行けるものなら行つて見ろと宣告した、父の心ではかう云へば彼れを引止め得ると思つたらしい。しかし彼れは飽までも頑强に東京に止まつた、別れて三年彼れは極めて愚劣な形式的な講座に飽きて、一年の後ちには卒業する豫定であるが、馬鹿々々しいから退學する旨を父の許に書き送つた、この弊履を捨てたような手紙は父を非常に驚かした、田舍の人がよく考へる、あと一年になつて惜しいものだ、父もそれに囚はれたらしい。父は最初彼れを引留めて遊學を斷念させようとしたのであるが。父に背いて去つた子が三年に近ゝ苦學を續けた事を誇らかにも思つたらしい、日ならずして殘り一年間の學資を仕送るから卒業して呉れるようにと言ひ送つて來た。

彼れはこの乏しい學生々活の間にも決して汗と冷水の快味を捨てなかつた。若しもその時彼れが父の云ふがまゝに田舍に歸へつてゐたら、彼れは物質的に可成安全なものであつたかも知れない、しかし永久に二と冷水との快味に運動の享樂から見放された事は疑を容れない、それればかりではない、彼れは現在の程度迄に人生を樂觀し得なかつたに相違ない、生の意義を曲解し、物質的方面にのみ趨つて、其の上求むべからざる惡快樂の奴隷となり終つたかも知れない。

彼れは現にさうであるが、將來も無名無資の老書生としてその生涯の頁を閉づるに違ひない、失禮な言分ではあるが、恐らく彼れもまたそれを欲してゐる事であらう。けれども彼れの奉ずる運動宗は、正道による人生の享樂を充分味はせるに相違ない、彼れは人事のすべてを此の運動宗に依つて解決せんとしてゐる、そして既往に於て運動宗をふりかざし踏み來つた道に決して誤りはなかつたと信じてゐる。

あゝ彼れの周圍に集まつてゐる青年や少年の群、それらを汗と冷水の快味に誘ふてバプテスト以上の人生觀に生きさせうとする努力も、彼れの運動享樂の一分子ではあらうが、要するに幸福を幸福として感受しようとした後の享樂よりも、彼れが何にとはなく引きづられて行つたところに眞の享樂はあつたのではあるまいかと思はれる。けれども汗と冷水の快味は求めて行く人々の前途にも必ず投げつけられねばならない。（大正十一、九、十七、）

「更新力」を民衆生活に與ふる演劇

本間久雄

○

こゝにそれを學究的に述べてゐる暇はないが、演劇はその起源から見ても、その歴史から見ても、少くも、これまでは、その時代々々の一般民衆の生の充實と享樂とに資すべき趣味と教養とに役立つて來た。だからその時代々々の演劇を見ると、その時代の人々が、何を求め、何を憧れたか、言葉を換へて云へばその時代の趣味なり、好尙なり、教化の程度なりの如何なるものであつたかゞ、よく窺はれる。少くもこれまでの演劇は、これまでのわが民衆生活又は民衆文化そのものゝ反映として、民衆とは切つても切れぬ關係にあつたことは疑ひを容れない。

しかし、不幸にして今日のわが國の演劇は、一般民衆の生の充實と享樂とに資すべき趣味と教養とに役立つには餘りに無力なものとなつてゐる。といふのは、民衆と演劇との關係が、餘りに沒交渉であるからである。

今日の民衆と今日の演劇とは、どういふ意味で沒交渉であるか。

このことは、一々こゝに例證する繁に堪へない。しかし多少なりと民衆對演劇の關係を考へた人には容易に肯けるところであらう。もしそれを否定する人があるなら試みに今日の各劇場の出し物を檢査して見るがよい。早い話しが今月九月の重なる劇場がどんな脚本を出し物としてゐるかを見るがよい。尤もそこには中村吉藏氏作の『地震』（市村座）とかジョルヂ・カルデロンの『石の家』の改作『雪の夕』（帝國劇場）などいふ藝術的に價値あるばかりでなく、新しい味ひのあるものもないではないが、『地震』を出してゐる同じ市村座が『清水の次郎長』といふ講談本めいた極端な大甘物の俠客物を同時に出したり、『雪の夕』を出してゐる同じ帝劇が『太平記忠臣講釋』といふ極端な時代錯誤の武士道劇を出してゐる。更に新時代の俳優として定評

のある左團次一派の明治座の出し物の中で、第一の呼び物としてゐるのは鶴屋南北の殘忍劇『謎帶一寸德兵衞』である。

これらの古い芝居は(『淸水の次郎長』だけは問題外の愚劇であるが)、或ひは舞臺技巧の上から、或ひは文化史的觀察の上から、その他さまぐの點から相當の面白味のあること無論である。しかし今日の一般民衆の生の充實と享樂に資すべき趣味と教養といふ立場から見るときには、これらの古い芝居は全然一種の時代錯誤であることは爭はれない。『忠臣講釋』の重太郎がいかに主君の仇を報ずるためであるからと云つて、父母を欺き貞淑な妻を罵り、更に足手纏ひだからと云ふ理由で現在自分の血を分けた幼兒を刺し殺すといふに至つては、かのよく雁次郎や吉右門などの得意の出し物としてゐる『伊賀越』の政右衞門の自分の幼兒の虐殺と同じく過去のわが誤られた武士道道德の生んだ最大惡德一つである。過去の或る時代の觀客はかういふ芝居を見て、或ひは感泣に噎んだかも知れない。しかし今日の觀客、殊に一般民衆は、かういふ芝居を見せられることによつて、武士道道德が、人間性に加へた暴逆を憤ること以外、趣味的に何物をも齎し得ないことはこゝに敢て贅するまでもないことである。

南北の『謎帶一寸德兵衞』は幕末のある世相を描いたものとして、文化史的に見るときには、又は當時に於ける歌舞伎劇の舞臺技巧といふ點から見るときには、その有名な『四谷怪談』と同じく少なからず興味のあるものである。單にこの點から云へば近頃での最も注目すべきものゝ一つであるに相違ない。しかし主人公大嶋團七は『四谷怪談』の伊右衞門などゝ同じく、「惡」の權化ともいふべき殘忍無道な男であつて、この殘忍無道の男を中心とした劇全體の雰圍氣は、到底新時代の健全な民衆の趣味向上と教養とに役立つものではないのである。

しかも、これらはほんの一例に過ぎない。現在の劇壇は、例外は無論あるが、大體において、かゝる時代錯誤の芝居に充ちてゐる。これらの芝居は、いふ迄もなくその時代の民衆には喜ばれたものであつたにちがひないが、今日の民衆は、これらの芝居によつて彼等の趣味を滿足させるには、餘りに進歩してゐる。言葉を換へて云へば、嘗つては民衆と演劇とが不可離の關係にあつたのであるが、今日ではその兩者の間に非常な距離が生じて來たのである。更に言葉を換へて云へば、嘗つては手を取り合つてゐた間柄であつたのが、今日では民衆が演劇を遙かの後ろに見捨てゝ進んでゐるのである。

○

世間には說をなすものがあつて、觀覽料の高い今日の芝居は

到底民衆のものではない。民衆の趣味を高め、民衆教化のために役立てるためには、觀覽料をもつと安くして、一般民衆や一般勞働階級の人が容易に見得るやうにしなければならないといふ人がある。しかし現下の問題は觀覽料のことではない。どんなに安い觀覽料で見せようが、――或ひはたゞで見せようが、今日の芝居そのものゝ質が變らない限り、それは一般民衆の趣味の向上にも教化のためにも斷じて役立つものではない。言葉を換へて云へば、今日の芝居が、今日の民衆と歩調を合せるまでに進むか、又は更に一歩を進めて、今日の民衆の代辯者、先驅者となるやうにならない限り、民衆の趣味や教化とは斷じて沒交渉である。

民衆劇場を主張して、近代の演劇に一大革命を齎らしたフランスのロマン・ロオラン氏は、その著『民衆劇場』の中で民衆劇の二派について「一つは、今日あるがまゝの劇を何劇でもかまはず、平民に與へようとする一派であり、他の一派は、新しい勢力である平民から、藝術の新らしい劇の樣式を造り出させようとする一派である、一つは劇を信じ、他は平民に望みを置く。その間には何等の共通點もない。一は過去のための闘士であり、他は將來のための闘士である」と云つてゐるが、この言葉は、今のわが劇壇にも丁度當て嵌まるものである。觀劇料を安くしたり、その他何等かの方法で、現在の劇そのまゝを、民衆に見せることによつて民衆教化のためにしようとする人はロマン・ロオランの所謂「過去のための闘士」に過ぎない。それは決して民衆の趣味向上や民衆教化のために役立ち得るものでないのである。

○

ロマン・ロオランは、民衆のための演劇について次のやうに主張してゐる。

「現代の人々が眞に欲求し、且つ必要とするところのものは、所謂古典劇ではない。といふのは現代はもはや十八世紀の喜劇の材料になつたやうな矛盾や葛藤や又は古典劇中の喜劇に描かれたやうな喜劇的事件とは餘りに緣遠くなつてゐるからである。併然又、さうかといつて、現代の中流階級のさまぐの因習と惡徳とを赤裸々に描いたやうなものも、民衆劇場で上場することは尚更好ましからぬことである。現代の人々が眞に必要とするところのものは、偉大なる目的を喚起し、意志を强固にし、生活に對する見解を廣め、人々の情緒を純化し、又深化するやうな戲曲的藝術である。

氏は更に言葉をつゞけて、「民衆劇場は現代の頽廢しつゝある社會を防ぐ一個の武器でなければならぬ。否更に一歩を進めて

云へば來るべき時代の叫び聲でなければならぬ。新しい時代は新しい藝術を要求する。たゞ〳〵時代と共にそれ自らを新しくするやうな藝術のみが民衆に取つて價値ある藝術である。過去に於ける傑作のあるもの、普遍的な人間的興味を持つてゐる過去の傑作のあるものか、さうでなければ、吾々の複雜な、混亂したこの時代の解釋者たる作物のみが、民衆劇場で上演さるべき藝術でなければならぬ。要するに民衆的戯曲は民衆の心に更新的な力を與へるものでなければならぬ。否、一歩を進めて云へば、人々は更により高き目的を狙つてゐるやうな偉大なる精神の潑剌たる不可抗的なさま〳〵の例證や、かゞやかしい獻身的精神や不屈不撓の意志の力などを提供する戯曲を持たなければならない。」

ロマン・ロオラン氏は、更に言葉をつゞけて、「乍併、以上のやうにいふのは決して藝術が道德を說敎しなければならないといふ意味ではない。否、藝術が道德を說敎しやうとするやうになればそれは既に藝術ではないのである。乍併藝術は力と健かさと喜びとに充溢したものでなければならぬ。何も題材を現代の生活とか民衆とかに限る必要はない。題材は現代の生活から得て來ると過去の生活から得て來ると、或は又自國の歴史から得て來ると、外國の歴史から得て來ると、或は又現實から得て來ると、傳統から得て來るとを問はない、重要事はたゞ、それらの題材の一切の觀念、理想、一切の錯誤、偏見等を、常に現に生活しつゝある吾々に關するものとして表現するといふことである。而して一切の藝術は吾々の人生をして、より偉大に、より強固に、より道德的に、より美しいものとするものでなければならない。藝術をして一切の壓制一切の卑俗一切の惡意を憎惡する一念を民衆に喚起せしめよ。そしてそれと同時に各個人をして、更によりよき理解に於て融和せしめ、各個人相互をして更により深厚な同胞感を抱かしめるものたらしめよ。」と云つてゐる。

ロオラン氏の以上の言葉は、眞に至言である。氏の云ふやうな芝居こそ吾々民衆の眞に心から要望するものでなければならない。さういふ芝居こそ、吾々民衆の趣味を向上させ、吾々の人生に對する見解を廣め、吾々の情緒を純化し、深化し、同時に生きようとする吾々の意志を強めさせるものである。一言にして云へば所謂「更新力」(recreation)を民衆生活に與へるのである。同時にかくしてこそ演劇は、吾々の生活に取つて決して單なる娯樂ではなく、必須缺くべからざる生活の糧となるのである。

○

最近坪内逍遙博士によつて唱へられたページェント(公共劇)

は、民衆教化の立場から見て、單に注目すべき劇壇の問題であるばかりでなく、又一種の社會問題としても最も注目さるべきものである。私はこゝに博士の主張を紹介する暇を持たないが博士の主張については博士のわが『ページエント劇』を是非讀まれることをおすゝめする。そして次第に社會政策家や劇壇の人々が博士の主張に注目し、共鳴して來たのは喜ぶべきことである。東京でも淺草や芝公園やで、市の社會局の主催で、先頃ページエントが催されたことは讀者の記憶に新たなことであらうが、更に來十月には京都の智恩院門前で、左團次一派の俳優二百餘人で松居松葉氏作のページエント『織田信長』が演ぜられるといふことである。その成績はとにかく、演劇と民衆との關係が次第に密接なものになりかけてゐるこの傾向は全く喜ぶべきことである。新しい民衆のための演劇は恐らくかういふ傾向の中から次第に培はれてゆくのであらう。

最高音樂の民衆化

法學博士　渡邊鐵藏

人生の目的とか、人間生存の理由とか云ふ難かしい問題はどんな偉い哲學者でも、何人もが首肯するやうな解決を與へる事は出來ない。我々が食つて、飲んで、寢て、起きる丈けでは他の動物と同じ生活でそこに人間らしい處はない。併し人間は物質的慾望にも、他の動物と違つて、無限に種々の變つたものを求め、日々の生活に要する道具、被服、家具、住居等にも限りない慾望を有つて居るのであるから、之等の生産と消費に極度の努力をせねばならぬ。近世産業は此人間の慾望に戟刺せられて起つたものである。併し此他に人間は他の動物と異つて大變美しい物が好きだ。美しい自然や、美しい人間や、萬人の好む所である。又愛するとか可愛がるとか、即ち愛情と云ふ事も人間に於て最も強く現れる現象である。猶人間には知ると云ふ事に對する慾望が熾烈である。宇宙の起源、人間の起源、星辰の正體、天變地異の眞相、何故そんな現象が起つたり、事物が存

在するのであるかと云ふ事を直ぐに疑つたり、好奇心を起す、此智識慾は人間の專賣であらう。

そこで産業、藝術、愛、科學、とか種々の複雜な要求が人間の間に起つて來る。人間らしい生活をしやうと思へば、總て之等の點に關して充實した滿足すべき生活をせねばならぬ。人間として生れた事が幸福であるか否かは別問題として、人間として生れたからは、人生の目的の何處にあるかを知り得ない限りは、在り來りの人間の複雜な滿足に向つて進まねばなるまい。所が藝術と云ひ、愛と云ひ、智識と云つても、矢張り之に關する滿足を人間が生きるためには、學校や文房具や、繪の具や、カンパスや、樂器や、藥品や、機械や、寺院や、劇場が要る事になる、之等は皆我々の經濟的活動に依つて生産せられるのである。そこで我々の經濟活動は衣食住に必要なものから、その生産運搬に必要なものを製造する計りでなしに、藝術も科學も種々の道具の生産を要求する。總ゆる人間の慾望は一面に於いて之れらの各種の物の生産となつて現れ、分業の世の中では職業と云へば經濟的の生産が最も主要になつて、此の生産に從事して居る人達は、自分は藝術とか科學の道具を作つて居るが、生活の內容にはさう云ふ方面の內容が這入つて來ない場合が多い。ピアノを製造する人間は朝工場へ行つて金を叩いたり、木を切つたりするが音樂を聽く餘裕を有たぬ。繪の具を造る人間は工場の中で屢々有毒な材料まで取扱つて營々として働らいて居るが、大美術に接する暇もない。況んや着物を作つたり、石炭を堀つたり、田を耕す人は藝術や智識の慾望を滿足する機會が少い。此科學の發達した世の中、種々の藝術の發達して居る世の中で、朝から晩まで只々生産に從事して汗を流して居る丈けでは實に甲斐もない。況んやどれ程働いても食ふ事さへ出來ぬと云ふのでは所謂人間生活、殊に文明生活と云ふものも反つて呪ふべきである。食ひかねる人間は目下の處それ程多くはあるまい。併し人間らしい生活の出來ないものは數限りもない。

所謂産業、職業を自己の仕事の全部と心得て切々と働らいて居る人は夫れで滿足をして居る者もあらう。併し多くの者は之れを以て日々の生活の全部とする事には堪え難いので人間らしい望みを起す。蘭を畫いたり、謡を唸つたり、詩を作つたり、旅行したりする。世間では之れを趣味と稱して居るが、趣味のない人間を譏る必要はなからうが、趣味ある人間が之れを滿足せしめる機會を與へられなかつたり、又日々の索漠たる生活に悶えて何等かの趣味を得んとする者があつた時に、之れに道を與へ、組織を與ふることがなかつたならば樂く暮らせる人間も無趣味、殺風景な生活の苦惱ばかりを歎く事にもならう。宗教

は既に生活に破れたる人間を救ふ力があり、又或人の生活に一道の光明を與へる力があらう。併し藝術も亦不斷に人間の生活に慰安を與へ、人生を充實せしむる力がある。信仰があつて藝術に心の觸れない人もあらう。藝術に歡喜して宗教を冷視する者もあらう。又名畫を見、大音樂を聽いて神に感謝をする人もあらう。人樣々ではあるが藝術の人生に與へる力、平常に生活の伴侶となる力は、私は宗教よりはもつと廣いものであり、もつと意義あるものゝやうに思ふ。

普通藝術と稱せられるものは文藝、美術、音樂であるが、之等のものゝ藝術的價値如何、又之れが特長、優劣を比較する如き事は容易に出來る事ではないが、各々其特長を以て人間の心の中にあるもの、自然の示す所を現して我々の人格に極りない人間の力を彫りつけて居るのである。私は嘗て本誌大正十一年新年號に「音樂私論」と云ふ題で音樂に關する愚見の一端を表した事があるが、音樂の藝術的價値、人格に及す影響とか云ふ難かしい事は玆で論じる考へはないが、此藝術の他の者と異る點は美術の如く形をとらへ、形に現して人に訴へるのではなく、又文藝の如く、それはお互に使ふ言葉を以て多くの人の味ふ情緒を上手に書くと云ふ風なものであるが、卽ち讀んだり、見たりすれば多くは我々の心の中にあるもの、又味ひ得るものを正確に技巧的に現して居るものが多いのであるが、併し音樂は、殊に偉大なる音樂は人間の創造ではあるが天才的のもので一般の人間の胸の中にはない。繪や詩は大傑作と云ふものほど萬人に入り易く、了解され易い。之れに反して音樂は大傑作程異常な超人間的の努力や表現があるので直ちに之を了解する事は困難である。殊に音樂は永續的には樂譜に現れるのであるから、之れを讀み得る力のない者は落着いて其價値を見出す事は出來ぬ。一回、二回の演奏を聽いたのみでは偉大なる音樂になればなる程通常の人には了解し難い。之れが他の藝術と異る所である。簡單なる旋律や、輕快な調子は直ちに喜ばれるが、複雜な歌曲や組織は迅速に消えて行く。音響を耳に入れる丈けで直ちに之れを理解する事は難かしい。玆に最大の小說家、詩人の作物は最も多數の人に依つて讀まれ、大畫伯の描いた繪は、最も多數の人が見んとするに反して、音樂に於ては簡單な進行曲や、舞踏曲や、地方的俚謠が萬人に喜ばれるに反して、大シンフオニー樂の如きが廣く一般に理解せられて居ない所以があるであらう。ロンドンでチヨコレート、ソルヂヤー式の喜歌劇（オペレッタ）が三年も五年も同一劇場で上演せらるゝに反して、高尙なオペレツト、シンフオニー、オーケストラは纔かに中流以上に歡迎されるに止まる狀態を見ても分る。然しながらどんな種類の藝術

でも偉大なものは孰れも之れに接する人格に好い影響を與ふるものであつて、多數の人をして之れ等の藝術に接せしむる機會を與へる事は生活の幸福、趣味の滿足の點から見て好い事であるばかりでなく、社會教化の點から云つても必要な事である。私は嘗て或雜誌に「代表的美術品國有論」と云ふものを書いた事があるが、之れは國民をして常に大藝術に接する機會を得せしめんとする主旨に外ならないのであるが、音樂に就いても私は切に其必要を感じる。併し音樂に就いては最高音樂の民衆化と云ふ言葉にして之れを云ひ現したい。

日本音樂と西洋音樂の優劣に就いては既に私は屢々之れを論じた事があるが、殊に最高音樂と云へば西洋音樂中の優秀なものを指すのである。ヨーロッパ大陸の天才的の大作曲家の作つた音樂と云ふものは、之れを味へば味ふほど、宗教を信ずる者が段々に經文や說教の有難味を感ずると同じやうに多大の歡喜の念を起すものである。之れ等は度々我々の耳に入らなければ十分に其有難味が分らぬのであるから、或場合には此のよきものを廣めて樂を相伴にするためには日蓮の如く辻說法までもせねばなるまい。併し大智識が教を說く場合には固より方便を交へる事も必要である。そこで多數の人々に音樂の眞の藝術的價値を味はしむるためには大音樂と共に又輕い小音樂を交へる必要もあらう。

西洋では國家が美術、文藝、音樂の奬勵に非常な力を盡して居るものがあり、又音樂に就いては都市が中心となつて奬勵普及に努めて居るものが多い。殊に音樂の精華とも云ふべき管絃樂(オーケストラ)の組織に就いては、市が最も力を盡し、ボストン、フィラデルフィヤ、シカゴ、ベルリン、ライプチヒ、其他或は市が直接にオーケストラを有つて居るのがあり、又之れを援助して居るものもある。ロンドンのアルバートホテルやクインズホテルの日曜コンサートの如きは僅かに數十錢の價で最高の音樂が聽けるやうになつて居る。ニツキツシユ氏や、ウツド氏や、ストコウスキー氏の指揮する世界一流のオーケストラや、一流の唱手、バイオリニストの音樂が殆ど每週僅かに朝飯代程の金を拂へば聽かれることになつて居る。市の援助なくしてはさうたやすくは出來ない事である。

東京市其他我國の大都市に於ても近來音樂の勃興は著るしく、殊に靑年の之れに對する要求は凄まじい程である。然しながら未だ何處にも音樂堂もなければ大奏樂團も成立して居ない。東京市には二年の中には數箇所奏樂に適する會堂が出來る筈であるが、絕えずこゝで奏樂すべき大奏樂團の組織が未だない。若し市の事業として、若しくは援助によつて大管絃樂團が

組織されるならば數年の後には東京市民は歐米大都市の市民と同じやうに、朝飯代で最高の音樂に接する事が出來るやうたならう。併し東京市會では緊急止むべからざる事業、例へば橋が墜ちたとか、學校が倒れたとか云ふ風な切迫つまつた費用以外殊に市民の慰安と云ふ風な用途に關しては豫算を組む丈けの空氣には進んで居ないかも知れないが、併し共同の力、市民の負担の僅少な一部分を以て、多數の市民の大きな慰安となる事であれば、數千圓、若くは一二萬圓の金ならば其支出の理由を了解される事も或はたやすいかも知れぬと思ふから、市の事業としてオーケストラ團を組織する事は甚だ意義のある事業ではあるまいか。元來音樂學校は音樂を教授、研究する場所であつて、完成されたオーケストラ團を以て絶えず市民に接觸する事は不可能な事であり、又必しも其本務でない。此故に我國に於ける最良のメンバーを以て管絃樂團を組織し、最高の音樂並びに一般に最も喜ばれる音樂を市民に與へる事は市の事業として最も適當の事であらう。又市以外には之を成就し得べきものはないであらう。なほ別に吹奏樂團を組織して平素市民に接近せしめる事も必要である。市民に最高の又最も廣く歡迎される慰安を與へるのに、長く陸海軍の力を借りると云ふ事は甚だしき變態ではあるまいか。軍隊自身には勿論大に音樂を必要とする理由はある。併し市民は間接に軍隊に豫算を與へて其音樂を聽くよりは、自ら豫算を作つて市民の樂團を組織すればよいではないか。然しながら財政の窮乏して居る我都市の事であるから、獨力で大オーケストラを支持する事は困難であらう。元來藝術は、洋の東西を問はず、多く貴族、上流の援助によつて發達したものであるが、此貴族的の藝術を民衆化せんとするのが現代の問題であるが、此藝術の發達を刺戟した人達は又其普及のためにも一臂の力を貸してはどうか。私の考では西洋によくある例の如く、貴族其他上流の人達が團體を作つて一定の金額、例へば五十圓乃至三十圓とかを毎年醵出して、若くはそれ以上で一つの團體を作れば、一つのオーケストラ團と吹奏樂團を維持する事は出來やう。既に斯かる團體を組織する以上は求め得る最良の人を集中する必要があるから、此種の援助團體がなくては、市のみの獨力では財政上困難かも知れぬ。これを上流の人に接せしむる機會を提供し得る事は實によい仕事であり、又自ら心に嬉しく感ずる事ではなからうか。

勞せずして樂める書畫骨董の愛玩

也軒老人

書畫や骨董といふものは實に性質より論ずれば何等の實用も持たぬ無益のものである。之れがなくても事かけず、やめれば無益の錢財を浪費することもなくなる故、經濟の上よりいふも好まざる方がよい。畢竟無用の長物に過ぎぬものである。然しながら物を樂しむといふ事は人類に對して不必用のことであるかといふと、これは甚必用のことで、或事物を好むといふ其間人生の不如意の事も境遇の不運の事も須臾なりとも忘れて、此の間は自己の意識を勞苦せしむるの難を除き得ることになる故に、人類は何か一種の樂を定めて之を自己の福地として生涯を終るを最も必用とするのである。然れども其等の物も種々ありて或は武術鬪球の類もよきなれども、若き間のことにて體力運動の益はありても最も樂地に必用なる老年には之を爲すこと難きが常である。碁將棊の如きは身體は樂にて老年に適する事なれども輸贏に心を勞すること過度なるを免かれず。或は博奕に類する弊もありて面白からずと思ふ。或は音樂なども善けれども獨奏では興薄し、何分聽者なければ興薄く兒孫の前にて出ぬ聲を振しぼるなどは可笑とも見られなん。唯弊害の少しもなきは紙墨を費やして書畫を作り或は詩歌俳諧などに心を慰さむはよけれども、少しく修行して苦心少なく自在ならぬも一ト通りに纏まるまでの習得なければ慰にはならず。此の如く數へ來れば無害にして樂しみあり、自ら骨を折ることもなく樂しむは人の作りし書畫を見、骨董を把玩するより善きはなかるべし。人類は習慣が性をなすものなれば、武術の人は自ら鬪爭に勇に、碁將棊の人は勝負にかしこく、音樂も俗樂の人は所謂藝人社會に近くなり、書畫俳諧詩歌の人は書家畫工詩人俳諧師に近くなり、書畫骨董の人は書畫屋骨董屋に近くなる。何れも弊なきに非れども、其弊を知りて愼しめば更に害なし。若し書畫骨董を好まむには唯其物の風致を樂しむを要す。委しく理論に度るを要せず。理論に及ばんとせば一隻眼を具せざればならず。之に骨を折れば分らぬ間は樂みにはならぬなり。風致といへるは、

常に玩弄すれば各其人の見識に從ひ其程次第に得らるゝことなり。餘力あれば作者の傳記など尋ぬるも却てよかるべしと思ふなり。何か書畫骨董の玩弄に付て言へとあるにより、筆紙を以て一場の贅言を示す。

正しく生きることを教へる文學

千葉龜雄

一

文學が何であるかではない。文學が人生に與へる價値いかんが、私の與へられた課題である。私は先づ事實の上に、文學が世界昨今の出版界に於いて、どんな形勢を占めて居るかを知る必要がある。

これは昨一九二一年の世界各國出版界の概况である。先づアメリカであるが、こゝでは一年の總出版部數が八、三二九で、第一位を六八三の小説が占め、少年物、宗教、歷史が之につぐ。イギリスが一〇、〇二六で、こゝもやはり小説九六〇を第一位とし、宗教、社會學、少年物が次位である。ドイツは英米に比してずつと多い。これは一九二〇年の調べであるが、出版總數三二、三四五で、一九一九年の二六、一九四よりも六千部も多い。そして文學、神學、教育、商業の順序である。デンマルクでは二〇年から二一年に及ぶ總數が三、七五七で、一番多いのがやはり文學物の一、〇〇八である。歷史と地理の八三八がそれにつゞく。オランダの一九二〇年の出版は三、九七四で、小說がやはり首位である。スペインが一九二〇年に一、五七七で、半數を文學ものが占めて居る。チエック・スロワキヤは三、五七二の中で、詩、戲曲、散文を合せた文學物が一、二八〇の多數を占める。其他オオストリイが二六八八で、醫學の本が最高位を占め、次が法律、經濟、科學等で、文藝の作品は極めて少いと云ふ。イタリイが六、二三〇で、社會科學が第一位である。日本と共に、世界の書籍出版數で首位を占めるスヱエデンは、

一九一九年の出版三二、六一三で、中に一二、八一五の法律が第一位、經濟、教育、工藝、文藝、科學、美術の順序で之れにつぐと見られる。ポルチユガルは一、七一〇で、首位を兒童物が占め、フランスが五、九一二であるが、分類がわからない。

こんな風で、各國によつて多少の差異はあるが、慨して文學が、どこの國でも大體にその首位を占めて居る。文學が人類の生活にいかに必要であり、殊に近代國民にとつて、いかに取離すことの出來ない生活の資料であるかがわかる。

二

さらば文學が人生に交渉する價値は何であるか。それはその文藝の傾向により、また時代により、社會の相によつて、それぞれ多少の違ひがあるであらう。けれどもその本質は、大體に普遍的であり、また時代を超絶して存在するとも云へる。即ちそれは感情の解放であり、理知の啓發である。そして私は議論を簡單にする爲めに、文學の傾向を概括して、理想に即したものと、現實に即するものの大體二つに分ける。もとより諸他の文藝の傾向は、細かく分ければいくつにもなるが、つき詰めればどうにか此二つの何れかに屬しないものがない。

我等の敎へられた思想は、科學が眞を求め、道德が善を求め、藝術が美を求めるものだと云ふ。思ふに誤まりがこゝから出立する。つまり科學が眞を求め、道德が善を求めるはよい、けれども藝術は、單に宇宙の美のみを求めるに止まらず、更にすゝんで人生の眞善美の三體を、完全に統一して、それに君臨するところに、その本質と權威があるのではあるまいか。完成された眞善美の魂は宇宙である。直ちにこの宇宙の魂に參してこそ、人類は始めてまことの幸福の理想郷に達し得られるであらう。藝術家はつねにその洪大な人類の愛に燃える。かるが故にこの世界人類の悩みを救ふ爲に、その理想郷を探り求めて飽くことを知らない。その憧がれと希求が大きければ大きいほどその悩みはますます大きく、その悩みが大きければ大きいほど、その藝術はますます深化し、それを讀む人類に與へる價値がますます大きくなるのではあるまいか。

かくして世界の好い藝術は、みな作家の深い悩みから生れないものがない。しかも人類が讀んで魂を清淨され、生きる歡喜を感ずるものはみな斯の如き作物である。現實の人生はあまりに苦しみに滿ちて居る。つまらぬ實在に神經をいら立たせねばならない。が、すぐれた藝術家は、決してそれによつて打ちのめされない。彼はその偉大な想像力を驅つて、斯くある苦艱の人生の上に、さらに斯くあるべき人生の雄大な假象を描き出す

であらう。或ひはまた素晴らしい詩美の眼によつて、五彩燦爛たる美と感覺の享樂世界を寫し出すであらう。前者は概して理想主義もしくは浪漫主義とよばれ、後者は「藝術の爲の藝術」とでも云はるべきものである。前者を讀んだ讀者が與へられるものは、或は現實に見るやうな醜くい人生にも、猶ほかうした美しい理想郷を看出し得る芽のある事を發見して、強い人生に對する愛を感ずることであらう。或はまた弱小な自分等が爲さうとして到底成し得ないものを、その作物中の超人が、すべてを完成し得た事に喜びを感じ、又た其の焦燥をいやされ、そして限りのない崇高な感情の放射と滿足をそこに感ずることであらう。また後者によつて與へられるものは、それは現世に求められない美と感覺の新らしい世界の展開である。讀者はそこに限りない心靈の革新を感じ、また今まで知らない新人生の啓に眼を見ひらくであらう。そして今まで磨かれなかつた感情は更に美はしく纖細にされ、限りのない人生の再生を感ずるであらう。

三

そして此二つの傾向が共通して人生に與へるものは、苦しい現實の心理からのしばしの遊離であり、刹那の忘我の法悅である。文學が人生の享樂であり、慰藉であるといふのもかう云ふ點から生れる。或はまたかうした傾向をもつて、人生からの卑怯な回避であると批評家が云ふ。しかし藝術の特性は、人生の內容をより豐富にする事にある。藝術家はその惱みを複雜にする事によつてますます藝術の色彩を加へる。また人生は回避しても到底滿足に回避しきれるものでないので、所謂回避者達がかくして現實と回避の渦卷に惱む惱みの深化は、決して勇敢な非回避者の惱みに劣るものではない。ロチやハアンの藝術を考へたならば、批難者はたやすくその批難を撤回するであらう。要はその藝術家が、どれほど人生を強く愛し、深く現實を考へたかにある。

讀者はまたかゝる作物によつて、本當の正しく生きる途を敎へられるであらう。何故ならある社會の理知が卑ければひくい程、その社會は虛僞と、妥協と、不正で一杯になる。たゞ尖銳で掩はれない藝術家の意識があつて、始めて正しい人生の生き方と、絕對的な、第一義の人生道德の第一線が示されるであらう。だから理想主義や浪漫的な作物は、それが世間道德と妥協し、自己創造の熱意が鈍くなる程度に從つて、その墮落の程度が測られるのである。又たかうした作物からは、讀者は限りのない人類愛の福音を吹き込まれるであらう。また人生は淋しい

もの、人間は孤獨であるべきものと考へて居たものは、これによつて人生がいかに愛の光に滿ちて、生き甲斐のあるものであるかを教へられるであらう。自由、平等、協同の强い努力を考へずに、人生が生きて行けぬ事を痛感するであらう。

次に現實主義に卽した作物から教へられるものは、暴露された現實人生の斷面である。「目的とするところは樂ませる爲でもなく、また感情の昂奮を與へる爲でもない、人をして反省せしめ、以て事件の底にかくれた深い意味を解せざるを得ないやうにする爲である」とモウパツスサンが云つた。それである。そこでは人生を掩ふすべての假面を褫ぎとつて、赤裸かな肉體がむき出しにされる。それはどうしやうとも囘避のしやうがないものだ。讀者がもしそれを醜惡だと思ふならば、そうした人生を修正する權利は一に社會人たる讀者の手にある。何にしても人生をよくすることは、嚴肅な眞實の、科學的凝視から出立せねばならぬ事をそれによつて教へられる。

四

讀者はまたそうした無數の作物を讀むことによつて、いかに人間の心理と個性が複雑に織り込まれて居り、自然の悲劇喜劇を作り出すかを見て、無限な人生相の變化に興味を感ずるであらう。また個々の作家によつて違ふ多樣な人生相の眺め方に、その人生觀の貯蓄を窮まりなく豐富にすると共に、その高い觀照、深い洞察によつて、自己の知識に强い刺戟を受けるであらう。

次に現代を知らうとするには、文學を除いてそれを完全にすることが出來ない。何故なら現代思想の前哨線を、最も早く感受するものは、何と云つても藝術家だからである。またその國民性の感情を、最もコンクリイトに表現し得るものも藝術家である。しかもその思想や感情がむき出しに現はされずに、具象的に、立體的に表現されるところに藝術の有がたみがあり、時代の底に潛む人間性の微妙な消息が酌み取られる。それが讀者に與へる印象の深刻さは、新聞や書籍の到底思ひ及ばざるものがある。かくして現代文學は、現代國民の上にますます深い交涉を持つて行く。

讀者が文學に親しんで行く心理の徑路はいろいろ複雑して居る。けれども娯樂として、もしくは慰藉として讀まれる場合が一番多いであらう。娯樂と慰藉の讀み物は、一つは感情の解放であり、一つは忘我の法悦である。そしてかうした讀み物は、その讀者の知識によつて、種類がちがう。必らずしもトルストイが定義したやうな、人生と人道に奉仕するもの、或は個人と

人類の幸福と進歩に對して、人生に缺き得ないもののみが擇ばれるとは限らない。寧ろその反對の場合が多いであらう。何處の國でも、一番賣れ行きのよい文學が、一番よい文學でないことは知れわたつた事實だ。つまりそれは可なり低い文化の程度にあるところの、その民衆の最大多數に迎合したやうな作物だからこそ賣れる理窟になる。しかしそうした作物は、讀者の妥協的な感情を甘やかし、また一寸興奮さするだけだ。正しい眞と美と善の人生に生きる事を教へる爲には、邪魔になるとも決してためになるものではない。元來藝術家が藝術によつて自己を表現するのは、古い自己を破壞して新らしい自己を創新することである。讀者が一つの藝術を讀む場合にも、またそれ位の期待と自覺は持ち合してもよいのではないか。

五

それについて思ひ出す一つの逸話がある。幕末の東北の或る藩で、或るさむらひが御用召しになつた。その翌日に、學者と聞こえた家老の許を尋ねて、拙者はどこそこの役人になるようにとのいひつけである。何か民を治めるよい心得になる教訓はムらぬかと尋ねたら、家老はすぐ庫へ入つて四五十部の冊子を持つて來た。これをよく讀めば自然と政治の奧の手はわかると言つた。歸つて讀んで見たらそれは皆な小說であつた。世間を知るには小說を讀むが一番だと云ふ考へであつたのである。これは強ち自己の革新と云ふ譯でもないが、何にしても文學は單に人生の內容を豐富にする許りでない。更にその思想を高くし、感情を淸くし、人類への愛を深める。それには出來るだけすぐれた文學を選び讀むのが肝要である。

トルストイの傳記者エルマア・モオドが、殊に感心した一つの挿話がある。それはトルストイが晚年になつて、自分の名著「復活」を大變わるくさし出した。あれは早い頃の作風で書いたものだ、だから惡い作だ。何故なら好い藝術は、普遍的なものでなければならない。然るに自分の初期の作物、殊に「復活」は、時代と場所などをくだ〲しく書いた「排他的藝術」なので、「普遍藝術」として誰でもに讀まれ得る條件の、單純と厭擇とを缺いて居る。明らかに省かるべきものが澤山書かれて居る。こんな小說は、自分で何等衣食住を生産しない爲に、ひまで困る階級に讀まるべき小說であると云ふのであつた。そこでモオドが「藝術とは何ぞや」の序文で云ふ、「復活」はすぐれた大作である。それは各國民によつて熱心に讀まれた。又た彼れが藝術の一條件とする人類靈魂の共感にも重大な役目を働らいた。殊に彼の執心した宗教的感情の浸潤が大きかつたに係はら

す、なほ人生に與へる價値について其樣式を思ひ惱んで居ると、かうした作物を讀むことによつてこそ、人類の靈の救濟に與へられることが始めて多い。

六

ナポレオンでも、前獨帝でも、ウキルソンでも皆な小說を愛讀した。クレマンソウヤトロツキイは自身立派な作家であり英國皇太子が御旅行中も、また平生よく小說を好まれるのは有名な話だ。その他實業家でも政治家でもよく小說を讀む、日本の政治家ほど文學を馬鹿にする國はない。だからその政治に理想がない。その人格に人間味が乏しい。人生哲學が缺けて居る。また多くの藝術家それ自身が、すぐれた作物に感化を享けた例も、彼等の傳記を讀む場合によく出くわす。現代のやうな民衆を社會の基調とする場合に、人生を直視するを知らずに何の政治であらう、何の外交であらう。

七

現代の我國官私教育界の校長級が、また揃つて文學を好まない手合である。これについて想ひ出すのは、イエル大學の英文學教授レオン・ヘルプスが、始めて小說講座を大學に置いた時の述懷である。それは大學などに小說講座を置くのは怪しからぬと方々から五箇條の抗議が出た。第一は小說研究がアカデミックでない――つまり尊嚴を傷ける。二は學生があまり小說に讀み耽り、他の文學も小說化される。三は最近の現代小說は價打がない。もし小說が教へられねばならぬなら、全くクラシックとして承認されるべきものに限れ、四は今日の多くの小說は反道德である。それは青年の精神を啓發するよりも寧ろ腐敗さする。第五小說といふものはあまりふわふわしてあまりに面白い。その課せられた課目が心的の訓練を全たく缺いて居ると云々。日本の父兄もよくかう云ふ非難を出すやうであるが、現代の文學を知らずに現代を知らうとする事の出來ぬは前にも說いた。殊に現代は昔と違つて、文學はもう他の生活面と遊離した冥想ではない。むしろ時代の空氣と現實の一切を網羅してそれを昇華したものである。もし青年子女が文學によつてその人生を誤まることを心配するならば、それは文學そのものが惡いのでない。それを完全に享け入れる基調となるところの、思想と哲學の教養を教育の方面で缺いて居るためで無ければならない。勿論前に云つたやうな、どこの國にもあるところの靈を救濟する文學と、靈を墮落さする文學が無數に入りまじつて、その撰擇を面倒にして居るやうな、實在の條件はその儘に保留する

のであるか。

科學萬能主義者の觀たる藝術的教養の價値

工學博士　佐野利器

京都の西に古來天下の名苑と稱せらるゝものがある。豐臣秀吉の命に依て小堀遠州が造つたものと云ひ傳へられて居る、初めから遠州が手掛けたといふのではないらしいが、其の大部分は遠州の完成したものには間違ないといふことである。私は昔て此名苑に遊ぶの榮を得たが、さて、是に依り得た私の感想は實は餘り香ばしいものではなかつた。名苑といふものの正體にも失望したし、小堀遠州を奥床しい人と思つて居たことの誤をも知つた。同時に又之を天下の名苑なりと賞讃し來つた人々の心持にも疑問が生じた、泉水、築山の形、樹木、燈籠、石組などの配置、さては苑路のうねりやう、一として工夫の凝らされて居ないものはない、と同時に又一としてのんびりした氣分のものがない、惡く云へばこせ〱とこせついて、只箱庭樣式陳列場宜しくの觀がある。更らに苑内の茶室に至つては、小細工の甚しきもので、書院、棚、袋戸、金具などの配りから、形から、一としてひねくれざるものがない、恐ろしく變つて居るから人が珍らしがるのかも知らぬが、いらざる變化は騷がしく、厭味なものとすれば、是位騷がしく厭味なものも亦少からう。

要するに所謂名苑より得たる余の感想はかうである。遠州といふ人は、いやに神經質な、こせついた、小細工の好きな、一口に云へば、ヒステリー性の小人物ではなかつたらうか、又此の所謂名苑は幾多の賞觀者にのんびりした心持よさを味はゝしむる代りに、せか〱した、せゝこましい氣持を與へなかつたらうか。又、も一つは、後世の造庭術にヒステリー的感化を及ぼしたものではなかつたか。

名苑や、遠州はさて置いて、一體私の心には、藝術といふものに對する根本的な疑問が伏在して居る、名苑觀も、遠州觀

も、或は此の疑問から湧いて出るのであるかも知れぬ。試に率直に疑問の點を述べて敢て其の道の人の教示に預り度いものである。

音樂教育といふものの目的は、毒にならない樂みを教え込むといふことにもあらうが、主として是に依て人格（人間味といふ方がよいかも知れぬ）の向上に資するといふことにあるらしい、是が音樂教育の主張であらう。かるが故にこそ、小學校や中等學校で生徒の唱歌に點數をも付けるのであると思ふ。が、果して音樂の教養に依て人格の向上を期することが出來るものであらうか。疑問の一端は是である。音樂教育は全然感情の教育である。――理性を伴つたもの即物語を節付けした類のものは寧ろ低級とされて居るとのことから云へば、上級の音樂には厘毫の理性も伴はぬものと解して宜しからうか、――此の結果として人は漸々に神經質になりはせぬか、理性を減じて感情的になりはせぬか、即ち總じてヒステリー性の小人物に近づくことがないか、人格の向上といふことには却て反對の方向に人を導くやうのことがないのであらうか。

私は此の疑問を、獨、音樂に對してのみ持つて居るのではない、凡ての藝術に對して同樣である。尤も藝術の種類に依つては、或る程度迄は感情を離れて全く理性的に、實用的の技術として之を習得するの必要なるものもあるとは思つて居る。例へば圖畫の如きは、注意力の養成及描寫の技術として、生活上必要なる教育たる點に於ては、數學に似たやうなものであると思つて居るの類である。然し是等生活上必要の範圍を離れて、全く藝術的の立場に於ける繪畫の教養といふことに對しては、又音樂の教養に對すると同樣の疑問が生ぜざるを得ぬ。文藝に對しても演藝に對しても亦同じである。

藝術教育の主張たる、人格向上といふことには如何なる根柢、理由があるか知らぬが、兎も角今日の實際は之を證明して居るものであらうか、藝術の教養を最も多く有する筈の藝術家といふ人の中には、完成せる人格者として尊敬すべき人は勿論少くはないと思ふが、多數の性格が果して主張通りの實況を示して居るものと見るべきであらうか。自分は、知る限りの人について、靜に其の性格を思ひ浮べて見ると、（勿論圓滿な人格の持主もあるが）ヒステリー性の人は實に多い、中にはアブノルムと云はるゝ人も少くない。果して是が一般の事實であるとすれば或は主張が實際には裏切られて居るものと考へなければなるまい。「ヒステリー性の人の多いといふことは藝術家たることには無關係だ。苟も一派をなす程の人は皆天才だ。ヒステリー性たるは天才たるが故で、決して藝術家たるが故でないこと

説いて聞かせてくれる人もある。一應御尤な説ではあるが、然し、それにしても、藝術の教養は人をヒステリー性小人格から救ふものではないといふこと丈けは確であると認めて差支なからう。藝術家同情者から、やゝもすると「藝術家のことだから少々の社會道德紊亂やアブノルムは許されなければならぬ」などの説を聞くこともある。此場合はどうやら「藝術と人格とは無關係だ」と説かれて居るやうな氣もする。要するに余輩の疑問の一は藝術の教養に依て人格（人間味）の向上を期し得べきや否やにある。

藝術教育の目的の他の一半らしく考へらるゝ點にも亦私は疑問を持つて居る、即藝術の教養に依て、毒にならない、所謂高尙な、樂みがそんなに增すものであらうかといふことが即それである。嘗て或宴席で余興の踊が演ぜられた。私の右隣の人は、誠に面白いと云つて頗る感興の様子であつた。私の左隣の人は其道の通人であつたが、つぶやいて曰く、とても見て居られん、あんな拙いものを見ると切角の食事もまづくなる、とかうであつた。私は、さて〳〵不幸な通人よ、と思つた。不幸なるものよ汝の名は通人なりの感が深かつた、通人は藝術の教養があるのであらう。其故に尋常一様の藝に胸を惡くしたのであらう。果してそうならば教養位無駄なものはないとも云へる。藝術教養のないものには、盆踊も面白い、浪花節にも涙が出る、看板繪も惡くないし、講談本にも腕が鳴る、見るもの聞くもの樂みでないものはない狀況かと思ふが、さて教養のある人となると、「あれでもない、是でもない」で結局興味の範圍といふものを頗る縮少して居るものではなからうか。教養に依て何物に會しても其の美點を捕へ之れを味ふの雅量を得るに非ずして、何物に會しても其の醜點が目に付いて却て厭な氣持のときが多いやうなことになつて居るのが實況ではないのか知らぬ。

或時一青年が私に向つて、自分の藝術耽溺を辯護して云ふのには「我等は終日、世の荒浪と戰つて心身共に勞れて居る、時に樂堂に陣取つて妙音に浴することあればこそや、此の世の勞苦も忘れ、陶然として神境にも入り得る。斯くてこそ我に生の意義があるのだ」、私は言下に生意氣云ふなと酬ひた、「此世の勞苦を忘れむ爲めの痲醉劑なら濁醪の方が安い、よし妙音が濁醪であつてもなくても、味ひ度ければ味ふもよいが、効能書をぬきにして日比谷公園あたりであツさりと味ひなさい、元來眞に終日、世の荒浪にもまれて、眞に勞苦を忘るゝことの必要な不幸な人々には、今日到底樂堂に陣取つて妙音に浴し得る餘裕などが與へられてゐない。樂堂に陣取つて妙音に浴し得るやうな境遇の者は、實は世の荒浪などに當つて居ないのが今日の實際

ではないか、眞に浴する必要のある人々と無關係に存在して居るやうな妙音は娑婆塞げの厄介ものとも云へるが如何」と返事したことがあつた。私はみだりに藝術を詛ふものではない。只今日の實際として、それの教養が果して人生を幸福ならしめて居るか、徒に樂屋落ちに流るゝの風を生じて却て苦勞の種を蒔くやうなことがないかを疑ひ、專門的にしつこいことの盛ならむよりは寧ろ民衆的にあつさりした程度に於て世の中が普く妙音化さるゝことの方が遙に望ましく思ふのである。帝劇に特別高尚な妙音が湛へられても、電車のキー／＼ガン／＼が依然としてなる。上野の帝展に天下の特別高尚な繪畫が集まつても山下には賣藥の廣告塔が聳えてゐる。哲學小說がだん／＼六ケ敷くとなれど講談本が、いつかな現代化もされない。もう少し藝術といふものに實際的の立場があつたらとつく／＼思ふ。（終）

哲學と人生

杉森孝次郎

非常の程度に於ける常識が哲學だ。現象としての常識でなく、原則としての常識が哲學だ。こゝで常識といつたのは、一社會の各人または多數人に共通の判斷、思考、知識等を意味したわけではない。こゝでいつた常識は各人と共に存する一事實であつて、必らずしも多人を條件としない。

各人の生存は一であると同時に多だ。常識に於いては、その一も、その多も、共に多少不完全だが、それにしても各人は、その一の保存及び擴充と、その多の所有及び增加とを多少常に努める。この努力の內容が、わたくしがこゝで常識と呼んだ當體だ。常識は、各人の生活に於ける統導原則として、第一に實行的に、第二に意識的に、かれに採用されてゐる或る廣義の心的實在だ。信仰中の信仰、または人生觀中の人生觀は、各人についていふ限り、上述の意味に於いての、かれの常識だと正當にいへるのだ。

常識は、しかしながら、それが常識の名を適當に値ひするものである限りに於いては、粗雜だ。純化されてゐない。この多少常に粗雜である常識を、純化する一努力が哲學だ。哲學は、經驗の矛盾を去り、それの統一を發見し、且つ發明する智的努力だ。經驗は多だ。無矛盾は一だ。經驗をすくなくすることによつて無矛盾を見んとする努力は、根柢に於いて、すなはち、人及びかれの關係實在の本質に不忠實であるといふ意味に於いて、それ自身一矛盾だ。哲學は、かくして、發生的には常識を母とするが、歸着的には常識を敎育する。智的側面から常識を完成する。哲學は、常識に敎ふるに、經驗的內容の飽かずいよいよ多なるべきをもつてし、同時に、統一的形式の飽かずいよいよ純にして强かるべきをもつてする。

常識が、全的に反省したかたちが、哲學の發生の瞬間前の光景だ。驚異が哲學の原因だといふ古人の判斷は、いまなほ光る。常識自身がそれだけの光りだが、無論熱の自覺及び認識としての光りだか、哲學に於いて、哲學をまつて、その光りが、一層完全に自他全界に通徹する。

常識は、全的だが粗雜だ。科學は、精確だが一部的だ。科學は、經驗を、くはしくは各一人の經驗を、それの或る部分に限つて、その範圍內に於いては無矛盾にする。すなはち統一する努力を拂ふ。しかし、經驗全體を直接に知的統一の努力の對象とするものは哲學であつて科學ではない。かくして、哲學なき科學は、あそこに一とつ、こゝに一とつ、闇を隔てて狹く身のまはりを照らす幾多の螢のやうだ。全景を一照する白日の光りは哲學の特權だ。或ひは、科學は、秋の夜の雲なきそらに個々に光る星のむれにもたとへられる。科學に於いては、個光としての强さが勝つ。哲學に於いては、全光としての强さが勝つ。その關係からいふと、科學が、かれらとして最も强い光りを放つ深夜の群星なら、哲學は、たとひそれが正午の烈日でないまでも、なほかつ黃昏または拂曉の薄明の與なる太陽だ。

常識及び科學と緣遠いほど哲學らしい哲學だとても原則的に考へ信じてゐるとしか想へないやうな「哲學者」及び「哲學信者」がその邊にうようよしてゐるほど夥多だが、かれらにもまして哲學の門外漢たることは困難だ。かれらは、經驗と現象と實在とは、社會のむかふに於いて最も完全であり、社會に於いてやや不完全であり、現實の自己に於いて最も不完全だといふ謬見と迷信との手によつても、同時に確實に、それは實に絕望的なほど確實に、捕虜とされてゐる人人だ。哲學界にだけは、現代に於いて、革命以下の方法はどうしても無用だと考へられる。哲學界の革命だから、無論その手段が暴力ではない。

わたくしは、それらの言葉の或る明確な意味に於いて、現代人は、かれらの有信仰からかれらの無信仰へ急ぐ必要を持つてゐると思ふが、同時に、現代人は、かれらの有哲學からかれらの無哲學へ急ぐ必要を持つてゐると考へる。しかし、正しい意味の哲學は、棄てようとして棄てられるものでもなく、持つまいとして持たずにすむものでもない。正しい意味の哲學は、各人と共に必存する。問題は、その正しい意味の哲學が、どの位不完全であるか、その不完全を救ふ方法はなにかといふにある。正しい意味の哲學とは、最初に述べた通り、それの原則にしたがつて徹底された常識だ。いひかへるならば、それらの關係にしたがつて擴充された諸科學だ。



想華

海の遭難

水野廣德

新高の顚覆

藪さへ枯れると云ふ三伏の土用を過ぎて、赤蜻蛉が水溜りに尻を冷やす頃となると、毎年一二回は必ず日本を見舞ふ客がある。其の通過する處、南は臺灣より北は千島に至る迄、幾多の船を覆へし、人を殺し、木を拔き、家を倒し、堤を破り、橋を流し、農夫炎天三月の辛苦をして一切空に歸せしむることも屢ある。誠に難有からざる來客である。好ましからざる來客である。

軍艦新高が沈んだ、否な海岸の淺洲に轉がつた。三百餘名の乘員は偶然に救助せられたる僅に十六名の外、悉く黎霧寒す勘察加の西岸オゼルナヤ沖の藻屑となつた。是も此の來客に供へられたる饗膳の一皿である。艦は排水量約三千五百噸、艦齡十八歲の小なる老艦である。沈むも、碎くるも、海軍縮小の今日物質的に於て左程惜しむに足らない。唯惜しむべきは乘員三百の命である。痛ましさは彼等の遺族の心中である。若き妻、幼き兒、老ゐたる親の哀愁悲歎は同情

の至りである。

日本が如何に人口の過多に苦しむとも、生れた人間の命は貴重である。縦令裏面に於ては監獄部屋とかの嬲殺を默認するも、表面に於ては生れぬ前の兒の墮胎さへ罰する。人間の命が貴重なればこそ一昨年ニコライエスクに於ける同胞七百の虐殺に對して國論鼎沸、遂に血の價として樺太北半の假占領をさへ實行したのであらう。尼港の敵は殘忍なるパルチザンであつた。新高の敵は狂獰なる暴風である。尼港の死者が國家政策の犠牲であるならば、新高の死者も亦國家政策の犠牲である。艦保安の任に在る艦長の責任問題は別とし、尼港の死者も、新高の死者も、等しく國家の犠牲者たる點に於て寸分の相違は無い。尼港の死者も自ら志願して雪深き西比利亞の野に殺されに行つたのではない。新高の死者も自ら希望して潮冷たき勘察加の海に死にゝ行つたのではない。何れも國家の命令に依つて派遣されたものである。

人間相手の尼港の凶變に對してすら、當局者は之を不可抗力と稱へ恬として耻づるの色なく、「諸君の死をして斷じて徒爾ならしめず」的の祭文に空涙を流しつゝ、罪を他に歸して樺太占領の口實とした。新高の犠牲は相手が暴風である、勘察加占領の口實なきを遺憾とせるものもあるであらう。夫にしても同じ犠牲たる尼港の死者に對しては、朝野官民の同情火の如く强烈なりしに反し、新高の死者に對しては冷然として恰かも秦人の肥瘠を見る越人の如き觀がある。曲つて解すれば尼港の犠牲者は樺太占領の口實を作らしめたるが故に、御祭り騷ぎ的に同情し、新高の犠牲者は勘察加占領の口實を與へざるが爲めに冷觀輕視するものかとも思はれる。人情の現金亦極まれりと云ふべしである。啻に同情なきのみならず、中には猥りに揣摩臆測を逞しふして動もすれば死屍に鞭つの聲さへ聞へる。之では死者も浮ばれぬであらう。畢竟死運が惡いのじや。「八月廿六日を忘るゝな」とでも紙に書いて、ビール瓶に入れて流せば好かつたのに。

新高遭難の狀況は未だ詳細が判らない。否な艦長以下幹部悉く職に殉じたることゝて、波が物言ふ世になるまでは、

恐らく永久の秘密として潮冷たきオゼルナヤの海底に葬むられるのであらう。甲板部員の中生き殘りたるは、海員としての知識經驗尙ほ乏しき若き二等水兵唯一人である。其他の生殘者は何れも三晝夜の間機關室內に暗夜の行を行ひたる後、奇蹟的に救出せられたる機關部員ばかりである。甲板の出來事は一切知らぬであらう。海軍當局者が遭難詳報を世間に發表することの出來ぬのも誠に已むを得ぬ次第であると思ふ。然るに世間では双錨泊をしたのが悪るいとか、艦副長の屍體が艦內から出たのは艦長の職務懈怠だとか稱へ、甚だしきは政治問題にまで結び付けんとする疑さへある。艦長の執りたる是等の應急處置の適否は、時の狀況と、場所の如何とに依つて判決せらるべきもので、詳報不明の此際具體的に非難することも出來ねば辯護する譯にも行かない。唯推想に依つて批評し得るばかりである。

海軍當局の發表したる簡單なる遭難公報を讀み、多少なりと海上生活を經驗したる者の直覺的に感ずる點は、「艦首を沖に向け橫倒となり、左舷ビルヂキール直上船腹の一部を現はして沈沒した」と云ふ文句である（ビルヂキールとは艦の動搖を減ずる爲め兩舷艦腹の下方外側に於て艦腹に垂直に取り付けたる前後に長き鐵鈑の突起片である）。三百噸や五百噸の水雷艇や驅逐艦が、暴風の爲め海岸に打ち上げられて擱坐することは、我が海軍に於ても從來幾多の例がある。斯かる場合に於ても船が橫倒れになることは寧ろ稀と云ふべきである。恥かしい話じやが、自分も一度水雷艇を砂の上に轉がした不名譽なる經驗を持つて居る。併しながら小なりと雖ども三千五百噸の軍艦が風波の爲めに淺瀨に打ち上げられ、而かも念入りに橫倒しになるなどは、日本海軍に於て恐らく前代未聞の珍事であると同時に、時の風浪が如何に强烈高大なりしを想像するに難くない。公報に依ると、

「新高は『オゼルナヤ』沖碇泊中、廿五日夜半から東南風が次第に募つて暴風雨の徵が著しくなつたので、双錨泊を爲し續いて至急點火を命じたが、廿六日午前四時頃から風向南西に急變し、風雨大に到つて咫尺を辨ぜず、山の樣な怒濤

は一波毎に艦體を呑んで見る〳〵上甲板は一面の海となり、瀧の様な海水は艦内を奔流して罐室の焚火も意の如くでない。折柄午前五時半頃衝撃を感ずると同時に艦體は右舷に傾き、同六時遂に顚覆した。

とある。暴風の徴を知つて双錨泊を爲したのは必ずしも不當の處置ではない。至急點火を命じたのは適當の處置である。唯「續いて」の時間の間隔が問題である。之も已に暴風の徴を知つて双錨泊を爲す以上、殆んと同時に至急點火を命じたと見ることが好意ある解釋であらう。此の時新高が滊罐を消火して居たか、埋火して居たかは、多少問題の種子であるが、之も實際問題としては、對敵行動中と異り、やかましく云ふ程の事ではない。扨て艦の愈危急に瀕したのは風向の急變したる廿六日午前四時からの出來事である。碇泊中の軍艦がヤラれるのは、多く此の風向急變の爲めである。元來颶風(サイクローン)は旋渦を爲して自轉しつゝ低氣壓線を進行すること、恰かも地球が自轉しつゝ太陽の軌道を廻はるのに似て居る。太陽に自轉と公轉とあるが爲めに、太陽の方位は一年を通じて變ずる如く、颶風も亦自旋と進行とあるが爲めに、颶風圏内の或る一地點に於ける風向は規則正しく絶へず變化して居る。故に風に對して何等の障碍物なき廣濶なる大洋に在つては、颶風の力と其の方向とは常に有りの儘に感ぜられる。之に反し山嶽岬角等の起伏出入せる陸岸に於ては、風の力と風の方向とは此等の障碍物に依つて、或は弱められ、或は遮られ、碇泊艦船に在つては實際の風力と風向とが判らない。殊に半遮蔽の港灣に於て此の現象が著しい。經驗の乏しき海員は此の間に瞞されて油斷し、遂に失敗を來すことが多い。然るに風向が次第に轉じて陸地障碍物の遮蔽界を脱すると、忽ち其の實在の猛力を發揮するが爲め、恰かも風向急變し、風力激增したかの如く感ぜられる。俄かに驚き狽てゝも時既に遲く、施こすべき術がない。自分が水雷艇を轉がしたのも此の手を食つたのである。而して風向の轉位は颶風の中心に近ければ近き程急變し、風力も亦強烈を極める。但し颶風の眞中心は無風である。

オゼルナヤの地理を知らぬ自分には斷言は出來ぬが、「風向南東より南西に急變し」とあるより推せば、新高の場合も或は斯んなことでは無かつたかと朧氣ながら推察せられる。オゼルナヤ泊地に於ては東南風は陸より海に向つて吹く風である。從うて風は山脈等に遮ぎられて著しく其の力を減ずるが爲め、新高の受ける風は實力よりも遥かに弱かつたであらう。加之縱令風力增加して走錨するも、艦は沖合に流さるゝが爲め危險はない。然るに風向南西に急變したるが爲め、今度は沖合より實力其の儘の强風を受くるに至つた。若し走錨すれば艦は海岸に打ち上げられる危險がある。新高艦長は此の時斷乎たる決心を取らねばならぬのである。「風雨大に到りて咫尺を辨ぜず、山の樣な怒濤は一波毎に艦體を呑んで見る／＼上甲板は一面の海となり」とあるは、單文であるが眞相を穿つた文字で、經驗ある身には略ぼ其の狀況も察せられて、暗中に狂風怒濤と奮闘せる乘員の勞苦が思ひやられる。もう斯うなつては、双錨を投げ込んだとて、錨鎖を如何に延ばしたとて、迚ても持ち抵へることはむつかしい。艦は打ち寄する猛波荒波に掀飜せられ、錨は一波毎に引けて艦はジリ／＼海岸に押し流される。此際執るべき策は走錨を防ぐ爲め、汽機を適度に運轉して錨鎖の張力を輕減することである。夜半に至急點火を爲したる新高は此時既に蒸汽發生して機關の運轉が出來たであらう。併しながら咫尺も辨せぬ暴風雨の裡に此の作業を完全に行ふことは、三千噸の輕き軍艦に在つては恐らく不可能事に近き難事である。是に於てか殘る唯一の手段は大勇斷を以て錨鎖を斷ち切り外海に脫出するのである。素より時と場合に從ひ、同じ暴風雨に遭ひながら外海に在りしが爲めに覆沒を免れ、港內に在りしが爲めに破壞したることもあれば、外海に在りしが爲めに沈沒し、港內に在りしが爲めに無事なるを得ることもある。之を以て新高艦長が此の勇斷に出でざりしの故を以て、直に無條件に責める譯には行かぬが、諸種の狀況より察するに新高の場合に在つては、外海に脫出することが最も安全にして適當なる策であると思ふ。殊に新高の錨地が開濶なる海面でありたりとすれば、暗夜と雖ども、暴風雨と雖

ども、脱出は左程の困難事ではないであらう。錨を揚げることが出來ねば、艦の速力に依つて錨鎖をブチ切つて捨てゝも宜いのじや。併し双錨を拋棄すると云ふことは、軍艦としては非常の事であり、艦長としては重大なる責任である。普通の人の躊躇する處じや。是に於てか大なる斷を要するのである。何故艦長が此の英斷に出でなかつたかは死人に口なく、問ふ由もない。想ふに艦長は恐らく此の擧を試みたであらう、しかも遂に成功しなかつた。

そこで疑問とすべきは新高の汽罐である。公報に依れば、「瀧の樣な海水は艦内に奔流して罐室の焚火も意の如くでない」とある。之を眞とすれば外海に逃れたくも、焚火不能の爲め機關の運轉が出來なかつたことゝなる。瀧の樣な海水が艦内に奔流するは、斯かる場合に於て常に見る現象である。但「罐室の焚火も意の如くでない」に至つては研究を要する文字である。難船の場合を叙する文學的形容詞としては「煙突より海水が奔入して汽罐の火が消へた」などゝ書かることもあるであらう。又船體煙突共に低き驅逐艦や水雷艇などが、高速力を以て荒波に逆航する場合には、稀に斯かる事實を見ることもあるであらう。併しながら如何に暴風荒波とは云へ、碇泊中なる三千餘噸の軍艦の高き煙突から潮水が奔入して汽罐の焚火を困難ならしむる如きは、殆んど前例の無きことゝ思ふ。尤も公報には煙突より海水が入つたとは書いてないが、煙突より入らぬとすれば何處から入つたのであらう。船體に損傷なくして焚火が困難となる如き軍艦の汽罐室は心細き至りである。「焚火困難」の文字は新高の顚覆と大なる關係を有するものである。何故なれば焚火が困難でなければ新高は或は錨鎖を斷つて外海に脱出し、安全を保ち得たかも圖られぬからである。併し煙突より海水の奔入したることが事實とすれば、未聞の大波で斯かる大波に對しては縱令海に脱出するも恐らく覆沒を免れ得ぬであらう。

營利を唯一の目的として過度に酷使する脆弱なる古船や、或は過量に貨物を搭載して釣合を失したる慾張船は別とし、

苟くも現代軍艦と名の付く三千噸以上の船は適良に建造せられある限り、風波の爲めに洋上に於て覆沈する憂は絕無と云ふも差支はあるまい。日本軍艦にして是まで沈沒破壞したるもの其の數多しと雖ども、之が因由は悉く坐礁衝突若くは爆發の爲めである。唯一の例外として三十餘年前軍艦「畝火」が佛國より回航の途次、香港以東に於て其の行衛を失したのがあるばかりである。之とても種々の事情より推究すれば臺灣附近に於て坐礁沈沒したる形跡がある。家屋は人間の安息所であるが、地震や暴風の場合には、屋內に在りたるが爲め却つて危害に遭ふことがある。港は艦船の避泊所であるが、海嘯や荒天の際には、港內に在りたるが爲め却つて災厄を受くることがある。地震や暴風の場合に於て家を飛び出すことは、道理に於て耻づべきことでもなく、非難すべきことでもなきに拘はらず、過早に飛び出せば狼て者、卑怯者として笑はれる。之と等しく暴風の場合に於ても亦過早に港を逃げ出せば、動もすれば意氣地無き艦長として部下の信賴を減ずることがある。斯くの如きは人の上長として殊に階級を尙び威嚴を重んずる軍人としては最も苦痛とする處である。「油斷大敵、常に萬全の策を取るべし」とは正しき道理ではあるが、人間にパニチーの存する限り、そう理屈通りに簡單には片付かない。此のパニチーの無くなつた人が卽ち斯道の達人なるものであるが、人が此の域に達する爲めには幾多の修養と經驗とを積まねばならぬ。初めて不馴の港に入港する。何處へ錨を入れようか。單に艦の安全を計る爲めならば、成るべく沖の方を可とする。併し陸地との交通を考ふれば、成るべく岸に近き方を便利とする。彼處にしようか、此處にしようか、錨一つ抛り込むにも、艦長は人知れぬ苦心を拂ふのである。況して荒天に際して港內に留まるべきか、沖合に逃げ出すべきか、此の間の心理は經驗ある者以外に容易に窺知することは出來ない。

濠洲の東方、南太平洋の眞ん中にサモアと稱する一群島がある。十四の小島より成り全面積僅に一千方哩に過ぎない。十九世紀に於て激烈を極めたる列强の殖民地爭奪は世界の隅より隅に及び、顯微鏡的島嶼と雖も遺すところは無か

つた。蕞爾たるサモア群島も亦英米獨三國の爭奪地となり、各國ともに示威運動の爲め軍艦を同島に派遣し、形勢頗る急を呈した。時は明治二十二年、互に敵愾心に燃ゆる三國の軍艦はサモア島の主都アピア港に碇泊し、各戰備を嚴にして形勢の發展を待つて居た。或日暴風俄かに起つてアピア港内は忽ち激浪狂奔し、碇泊艦船は山なす怒濤に襲はれて運命正に危急に瀕した。此時英國軍艦のみは決然錨鎖を切斷し、逆卷く怒濤を衝ひて港外に逃れ出た。逃げ後れたる米獨其の他の艦船は激浪の爲め或は海岸に打ち上げられて粉碎し、或は錨鎖を斷たれて衝突破壞し、乘員は殆んど全滅した。外海に逃れたる英艦が天候回復を待つて再び歸港したる時は、アピア港内唯一面に艦材の破片を以て滿され、昨日までも互に祖國の仇と反目敵視したる米獨軍艦は、あはれ乘員諸共海底に葬むられて姿も影も見へない。英艦員たるもの、熊谷ならずとも無情を感じたであらう。若し英艦にして港内に逡巡せば米獨軍艦と同一の運命に陥つたことは殆んど疑ふの餘地がない。同胞數百の尊とき命を國家慾の犧牲の爲めに南洋の孤島に捨てしめたる此の悲慘なる災變は、關係諸國民の敵愾心を緩和し、協調的精神を以て平和裡にサモア問題を解決することが出來た。之をしも風が取り持つ緣とでも云ふのであらう。等しく國家政策の犧牲者なるも、アピアの犧牲者は國際平和の誘導となり、尼港の犧牲者は國際紛議の種子を蒔いた。知らず、新高の犧牲者は如何なる意義を有するであらうか。

右の場合に於ても、港内に留りたる米獨の軍艦が破壞したればこそ、英艦長は勇斷果決の名艦長として、又乘員數百の救生主として絕大の榮譽を擔ひ得たるも、若し米獨軍艦にして安全なりしならんには、英艦長は不必要なる苦痛を嘗めさしめたるものとして、少くも部下の恨みと誹りとを免れなかつたであらう。此の毀譽を意とせず、斷然出港を決行したる處に英艦長の大と勇とがあるのである。要するに人間が少しなりと毀譽褒貶に捕はれ居る間、即ちバニチーを有する限り、急に臨み、變に際して大事を決することは難かしい。「命も金も名も要らぬ人こそ、眞に恐るべし」と云つた

南洲翁の言は千古の金言である。

新高の沈沒に就きて最も奇異に感ぜられるは、平に沈沒せずして横に倒れたことである。從來風浪の爲めに錨が引けて擱岩坐洲したる軍艦は尠くない。而かも新高の如く赤腹を現はして横に轉がつたことは、日本に於ては恐らく初めてと記憶する。左れば軍艦が淺洲に轉がつたと聞けば甚だ奇拔で、艦長以下乘員は何を凡爺して居たかとの疑が起る。併し之も仔細に硏究して見ると、左程不思議とするにも足らぬ樣に思はれる。顚覆せる新高の左舷艦腹が水面上に幾呎高く露出せるやは公報に詳かでないが、「艦腹の一部」とあるより察すれば餘まり高くは出て居らぬらしい。假りに多く見積つて十呎とするも、新高の最大艦幅は四十四呎である故、現在顚覆せる場所の水深は三十四呎卽ち約六尋である。然るに新高の最大吃水は十六呎である故、水深六尋の場所は平波に於ては新高の爲めに安全にして適良なる錨地である。普通の地理書には良港良灣の說明詞として必ず「水深く」と書いてある。專門的見地より云へば、水の淺きは港灣の價値を無にすること勿論であるが、餘り水が深か過ぎても亦良好なる港灣と云ふことは出來ない。現代の船舶は如何なる大艦巨舶と雖ども吃水三十五呎を超ゆるものは殆んど無い。故に錨地の水深は艦船の大小に從ひ、五六尋より十尋位までを以て最も適當とする。已に二十尋以上となれば寧ろ碇泊に困難である。左れば良好なる港灣の條件としては「水深し」と云ふよりも「水深適度」と云ふ方が正しき表はし方である。例へば品川の如き淺水は素より良港としての資格は無いが、鹿兒島の如き深い港も亦良港とは稱し得ぬのである。

公報に依れば、新高は「艦首を沖に向け」とあるより察すれば、錨鎖は切れて居らぬことが判かる。若し錨鎖が切斷したりとすれば、吃水の淺き艦首は陸岸に向ふべき筈である。是等の事情より推定すれば、新高は走錨して淺瀬に打ち上げられたのでなく、略ぼ最初からの碇泊位置に於て横轉したのであると信ぜられる。新高の吃水は十六呎で、其の碇

泊位置の水深は前述の如く約三十四呎であるとすれば、艦底と海底との間には十八呎の間隔がある。故に大體に於て艦首を十八呎持ち上ぐれば、艦尾は十八呎降下して海底に接觸する勘定である。即ち力學的のむつかしき計算を離れて常識的計算に依り、波頂から波底まで三十六呎（艦底と海底との間隔十八呎の二倍）の高さの波に搖らるれば、新高の艦底は海底を叩くことゝなる。併し實際に於ては、艦の重量、波の壓力、波の長さ等の關係に依り、三十六呎の波が必ずしも三十六呎艦を持ち上げるとは云へない。極めて大體の目安である。

凡そ波浪なるものは「淺き瀬にこそ仇浪は立つ」との歌の如く、深き處よりも淺き處の方が高きことは、少しく海上に經驗ある人の實見せる處であらう。新高の場合に於て果して幾何呎の波が襲來したかは判らぬが、結果より推察すれば非常に高き波が押し寄せ來たことを想像せられる。公報に云へる「山の樣な」大波に搖られ〳〵て、新高の右舷艦底が先づ海底の岩礁に觸れて破孔を生ずるか、或は海底の砂を叩いて鐵鈑の縫目を裂くか、何れにしても右舷艦底に損傷を生じ、海水は其處より艦內に侵入して遂に右舷に傾き倒れたものと思はれる。元來三千噸以上の船は大概な大波に搖らるゝも、五十度以上傾斜することは殆んど無い。而かも合理的に建造せられ、適良に載貨せられたる艦は、六十度位の傾斜には耐へ得るものである。故に若し新高の艦底に異狀無しとすれば、顚覆の原因は造船上の缺陷か又は載貨の不良に歸さねばならぬ。併し此の場合、艦底の損傷と見ることが穩當にして自然なる判斷であるであらう。斯く判斷すれば艦長の屍體が艦內に於て發見せられたることも亦意義を生ずる、卽ち海水の侵入を防ぐ爲め損所の應急處置を指揮する爲めか、左もなければ萬策盡きて最後の處決を爲さんが爲め艦內に降りたる際、偶艦體顚倒して溺死したものと推想せられる。あの場合艦長の遺骸が艦內より現はれたることに對し、海上の事情に暗き人々が一種の誤解を抱くは尤もなことである。併し單に是のみを以て艦長の心事を迄も疑ふのは酷である。

あまり深からざる海面に於て、艦船が一艦の艦底に破孔を生じたる場合には、横倒れとなつて沈むが常である。日露戰爭の劈頭仁川港内に於て自沈したる露艦ワリヤークも横に倒れた。德山灣に於て爆沈したる戰艦河内も横に倒れた。是れ皆海が淺い爲めである。故に新高が横に倒れたと云ふことのみを以て直に艦長の怠慢を責むるは、聊か理由が薄弱である。新高にして今少し深い處に沈むか、或は岩礁に乘り上げて粉碎したならば、赤腹を露出して横倒れの醜態を現はすこともなく、世人の疑惑も斯程迄に深くなかつたであらう。過去に於て沈沒したる日本軍艦は尠くない。而かも今回の如く世間の物議を釀したものはない。新高の沈沒が特に世人の視聽を刺戟したる所以は、主として其の横に轉げたが爲めである。併し淺所に横に轉げたが爲めに僅少ながらも十五名の人間が機關室から救出せられたのである。大不幸中のせめてもの小幸福である。

要するに新高沈沒の原因は、第一に、風向急變の爲め脱出の機會を失ひたるか、或は焚火困難の爲め機關の運轉出來ざりしか、何れにしても外海に脱出し得ざりしことである。第二に、非常に波が高かりし爲め適當の錨地に在りながら、艦底が海底に觸れて損傷したることである。理想を以て論ずれば、新高艦長は不注意若くは懈怠の責を免れぬであらう。併しながら人間有限の能力を以てしては、最善の處置を施し、最大の努力を盡したる不可抗力或は其に近き天災と云ふも差支ないであらうと思ふ。尼港の慘禍さへも不可抗力として責任を問はぬ日本國民は、新高艦長に對しても當然不可抗力として之を許すの雅量を有するであらう。

僕の經驗

日本海の一戰に露國波羅的艦隊を撃滅し、最早や海上には目ぼしき敵もなく、戰場の制海權は全く我が海軍の掌中に

歸した。開戰以來一年有餘に亘る嚴密なる海上の警戒は幾分緩められ、海軍々人の勤務は大分樂になつた。頃は明治三十八年八月の初旬である。自分は水雷艇隼の艇長として僚艇一隻と共に舞鶴から鎭海灣に回航しつゝあつた。舞鶴軍港を出て丹後の經ケ崎を過ぐれば、渺茫たる日本海は水天一碧遠く北に開けて居る。夏の空は紺碧に晴れて海は疊の如く平に艇は涼風を迎へて快よく蒼波を滑べる。大艦に於ける如き窮屈もなく、商船に於ける如き放縱もなく、一艇一族和氣靄々、小艇に乘つて靜かな海を駛る程氣持の好いものは尠ない。平凡にして變化に乏しき山陰の山を左舷に望みつゝ西航して、夕刻伯耆の境港に入港した。裾を美保の灣水に浸しつゝ嶄然として半空に聳へ立つ五千七百尺の大山が、夕陽を浴びて東の空に近く大入道の如く峙つて居る。後醍醐天皇と名和長年との歴史的舞臺である。境は港灣に乏しき山陰沿岸の主要港で、北には惠比壽樣が鯛を釣つた美保の關がある。南には當節流行安來節の本場たる安來の町がある。

翌朝境港を發して鎭海直航の途に就いた。美保が關の朝景色に昔の夢を思ひ出しつゝ岬をかはれば、隱岐列島は青螺の如く遙かに北方に浮んで居る。後鳥羽院十九年の行宮「我こそは新島守りよおきの海の荒き波風心して吹け」の御歌も偲ばれる。昨日よりは天氣が落ちた。艇首に碎ける飛沫がバラ〳〵と時々面を打つ。雲行が面白くない。朝鮮語かとも思はるゝ出雲の十六島(ウップルイ)鼻を過ぐる頃より、風漸く強く、波漸く高く、海には白波躍つて艇の動搖が烈しくなつた。西の空は暗黑の雲に覆はれて天候異變の兆を呈して居る。風は刻々に力を增し、波は刻々に大を加へ、艇首は波を掬ひ初めた。迚も鎭海迄の夜航は覺束ない。無理をしてまでも一日一夜を急ぐ程の航海ではなし、今夜は石見の濱田港に避泊することゝし、夕刻同港に入港した。濱田は西方廣く外海に暴露し、加ふるに水は遠淺、底は砂で、決して良好なる錨地ではない。

入港して見ると、港は矢張り港である。外海に於ては艇を飜弄する荒波も、此處では唯淺き漣が島の岩根を輕く嚙ん

で居る。避難したのが恥かしい樣な心地さへする。前續の先任艇が海岸近くに投錨した。自分の艇は夫より稍離れて沖合に碇泊した。先任艇から「氣罐埋火、明朝〇時出港、入湯上陸を許す」との信號があつた。艇の片付が終り、夕食が濟むと、半數の下士卒は欣び勇んで上陸した。海上勤務者に取りては陸地を踏み疊の上に据はる程嬉しいものはない。殊に日夜窮屈なる軍紀の監視下に在る兵員の如きは、上陸を樂しむこと實に食事以上である。上陸を許すと云へば如何なる勞働も歡んで爲る。上陸を禁ずと云へば大の男も泣きそうな顏をする。初めて入港したる濱川の町見物も仕たかつたが懐工合が惡いので、自分も艇付將校も上陸はしなかつた。暫らくすると、陸岸近く碇泊して居た先任艇が錨地を沖合に移した。自分は唯錨場が惡い爲めであらうとのみ思つて深く意に留めなかつた。後で聞くと、此時先任艇は陸上から暴風雨の警報を受取つた爲め錨場を換へたのであつた。然るにどう云ふ譯か、不幸にして此の警報は自分の艇には傳へられなかつた。或は自分の艇の當番水兵が、自分に報告することを忘れたのかも知れぬ。太陽が西に沒して雲が異樣に燒けて居る。風がソヨ／＼と甲板を吹いて八月の夕は凉しかつた。

日はいつしか全く暮れた。士官室で、少尉と二人で雜談をして居ると、當直の水兵が定時の報告に來た。バロメーターが大分降る樣である。甲板に出て見ると、空は黑雲に蔽はれて隻星の光だになく、海は墨の樣に暗い。町の燈火がまばらに赤く鈍く暗の夜を彩つて居る。風は稍や力を增して檣の索が輕く鳴つて居る。沖の方から來る緩いうねりが輕く船を搖がして居る。何となく頭を押へ付けらるる樣な不安な天候である。自分は開戰以來水雷艇長として、晝夜を擇ばず、風雨を問はず、水雷艇は乘つて／＼乘り廻はしたるが爲め、艇の操縦に就きては充分の經驗と自信とを有して居つた。併し氣象と天候とに對する知識經驗は極めて貧弱であつた。二百十日にはまだ二十日以上も間があるので、今頃颶風が來ようなぞとは更に思はなかつた。

併し萬一の變に應ずる爲め、汽罐には至急點火の準備を命じ、當直水兵には三十分毎に氣象の報告を命じた。時々甲板に出て〻天候を窺つたが、バロメーターは尙ほ次第に降下して止まない。風と波とは漸次强烈となり、雨さへ降り始めた。正子頃念の爲め汽罐に點火し、双錨泊と爲した。此時迄もまだ荒天と稱する程の天候ではなかつた。艇付少尉と交代して、自分は着服の儘ベツトに横つたが晝の疲でグツスリ寢込んで仕まつた。烈しき艇の動搖と、錨鎖のシャクル音とに不圖目を覺まし、驚いて甲板に飛び出して見ると、こは如何に、風は西に變じて夜目にも著しき雪を頂く大波が、廣い港口から凄まじき勢を以て港内に打ち込んで居る。海は黑暗々として篠衝く猛雨は殺の如き波の飛沫と共に横なぐりに降り注いで面を向けることも出來ない。艇は猛烈に輾轉して艇首の錨をしやくる響が風浪怒號の裡に氣味惡く鼓膜を劈ぐる。慥かに颶風の來襲じや、而かも猛烈なる颶風であることが判かつた。時は夜中の二時半頃である。二時に少尉が甲板に出て見た時には、まだ格別の異變は無かつたと云ふ。僅に三十分間に於ける急變である。今迄港を圍む山に遮られた風が、次第に方向を轉じて今や無遮蔽の西に轉じたのである。錨地は僅に四尋の水深である。底は錨掻きの惡き砂である。此の狂猛なる風と波とに對しては、錨のみでは到底安全を保ち得ない。直に總員を呼び起した。

風は刻々力を增し、波は見る〱高くなる。僅に百五十噸の小艇は激浪に翻弄せられて、前後に衝つ立ち、左右に倒れ、狂亂の態である。錨が引けるか、錨鎖が切れるか。後には岩角峙つ島がある。若し之に打ち當てらるれば艇は粉碎し、人は全滅を免れない。危機急迫、今は一刻の猶豫も出來ない。猶豫が出來なければ何うすれば宜い?。學校の運用術で習つた「機關を運轉して錨鎖の張力を減ずる」などは大艦にのみ適用せらる〻處置じや。一度波にハタかれる毎に五六十度も艇首を振り廻はす小さき水雷艇に於ては、そんな大艦的定石は打てない。港の一側には此の風に對して比較的安全なる錨地が無いではない。併し其處には岩が多くて、晝間の入港と雖も相當の注意を要する。咫尺を辨ぜぬ此の

闇の夜に、轉覆せんばかりの此の荒海に、況して海圖は風雨の爲め甲板で見ることが出來ない。コンパスは動揺の爲め殆んど用を爲さない。どうして其處に避難することが出來よう。最後の手段は唯沖合に逃げ出づるの一法あるのみじや。港の奥に居てさへ此の荒波に、外海に出づるは自ら求めて死地に投ずるに等しい。併し第二の處置は第二の考慮に待つべしじや。今は寸時も早く此の危險なる錨地から脱出せねばならぬ。夫にしては先づ第一に、入れた二つの錨を處置する必要がある。此場合、錨を上げるなどは迚も思ひも寄らない。錨鎖を解脱して放棄する外はない。だが錨を二つとも無くすることは、今後の行動に差支へる。せめて一つなりと上げたいものじや。出來るか、出來ぬかやつて見ようと直に揚錨に着手した。

雨は愈烈しく眞に咫尺を辨ぜない。波は猛激なる勢を以て艇を一呑にする。風は益吹き募つて人をも吹き飛ばさんばかりである。動揺の爲め器物に倚らずしては甲板に立つことも出來ない。風浪の叫びに壓せられて、號令は二間先の風上には達しない。加ふるに兵員の半數は上陸不在の爲め人手が足らない。夫でも、勇敢なる水兵が素つ裸になつて艇首の甲板に躍り出た。打ち寄する大きな波が忽ち人諸共艇首を呑んだ。「殺した？」と思つたが、幸に揚錨機にシガミ付いて生きて居た。強ひて錨を上げようとすれば、人を殺す虞がある。揚錨を斷念して、今度は錨鎖の解脱を試みたが、之も危險で行はれない。斯かる間にも波は益々荒くなり錨は早や引け初めた樣じや。錨を引き摺りながら機關を運轉した。艇尾の押し上げらるゝ毎にスクリューの空轉する響の凄しさ、艇體粉碎し、四肢離脱するばかりである。

波に逆つて進む爲め抵抗は益烈しく、艇は立板の如く衝つ立ち上がるかと思へば、忽ち逆立して艇首を深く波の中に突き込む。波の猛打を受けて艇首は左右に振れ廻り、舵は殆んど用を爲さない。四面暗黒、僅に二百米突を距てゝ碇泊せる先任艇の燈火さへ見へない。コンパスはグラ付いて信ずるに足らず、唯風向に依つて港口と思はるゝ方向に進ん

だ。忽ち前方に當つて豪雨にかすむ先任艇の燈光を朧に發見した。距離は餘り遠くない。向ふの艇から何か呼んで居るのが聞へる。此儘進めば衝突は免れない。衝突すれば兩艇共に全滅じや。俄に汽機を停めて暗にすかし見ると、先任艇も亦怒濤に揺られながら、錨を中心として振子の如く大角度を以て左右に振れ動き、我が艇の前路を塞いで居る。一方には錨を引張り、一方には激浪に壓される。艇の操縦は自由でない。大なる危險を冒さずして此の間を乘り拔ける確信が無い。進退正に谷まつた。

汽機を停めて思案せる間にも逆卷く怒濤は絶間なく、小さき艇をば呑んでは吐き出し、吐き出しては又呑み、司令塔の上に在りながら身體は屢波の中に沒する。殊に横波を受けて傾く時の如きは、水雷艇生活に狎れたる身にも、今度こそはと觀念することもある。斯くて一度引き起されたる錨は再び土に嚙み込む暇もなく、艇は一波毎に錨を引き摺りながら、ヅル／＼と陸岸の方に押し流され始めた。死中に活を求むる大冐險の沖合脱出も、僚艇を傷ふ虞あるが爲め實行不可能となつた。錨はズンズン引ける。艇尾の島が次第／＼に近寄つて來る。暗澹たる暗の海に、島の周圍のみが岩に碎くる激浪に白く凄く色取られて居る。風と錨とは潺々として雷鳴を發して居る。島に近づく總ての物を唯一撃に打ち碎かん勢である。恐ろしきこと正に地獄の釜の沸くかと思はれる。艇尾から「艇長島がだん／＼近くなります」と報告する。寒中に萬斛の冷水を浴びせられた樣な心地がする。自分は覺悟を極めた。最早や艇の安全は期し難たい。せめて乘員の命だけでも助けねばならぬ。之が爲めには萬難を排して島との衝突を避けることが第一の手段である折しも天か、命か、舵索が切斷した。波浪の爲め異物が索と甲板との間に挿まつたのであらう。

風は今其の絶頂に達した。汽機の助けも甲斐なく、錨は益引ける。見上ぐるばかりの大きな波が、艇首を高く押し上げたかと思ふと、船體がビリ丶と振ふて機關の運轉がパツタリ止まつた。艇尾のスクリユが砂を掻いて翅が曲つたので

ある。今は舵も取れず、機械も回らず、萬策愈盡きて仕舞つた。唯運命を天に任かすばかりである。

最早や執るべき策もなく、盡すべき途もなく、司令塔にしがみ付きて唯一心に艇尾の島を見詰めて居る。波は瀧の如く頭から降り懸り呼吸も塞がるばかりである。島の周圍に物凄く沸き返へる激湍が刻一刻近づく如く見へる。乘員の多くは司令塔の下に集つて言葉を發する者もない。偶雨は稍や小降りとなり、暗の海にボンヤリと聳ゆる惡魔の如き島影が一しほ凄い。まゝよ砕かば砕け、船も、人も。今は何の悲哀も憂苦も感じない。機關部員を上甲板に呼び上げた。前には半舷上陸を許したことを悔ゐたが、今では寧ろ犠牲の少なきを悦んだ。

此の絶望無援の裡に在つて唯一の心頼みは錨である。錨鎖さへ切れなければ、島に振かるゝ波浪の作用により、島との衝突だけは免れ得るであらう。前には切らんと欲して切れなかつた厄介な錨鎖が今では命の綱となつた。艇の動揺にシヤクられて、カチン／＼と響く錨鎖の音を聞くたびに、切れはせぬかと、錐で腦天を刺される様な思がする。幸に錨鎖は切れなかつた。艇はカナリ近き距離に於て島をかはつた。人命に對する第一難關は辛ふじて過ぎた。海は次第に淺くなり一波毎に艇底がドシン／＼と海底に舂づく。艇首には錨を引つ張り、艇尾は海底に支へられて、艇は全く横波を受くるに至つた。猛り狂ふ淺洲の仇波を眞横に受けて搖れるわ／＼、ガブるわ／＼、柱に縋つて立つて居る體が横倒しになる。今度こそは轉覆するか、今度こそはヒツクリ返へか、と決心の臍を固めて待つて居る。此の時若し艇底に損所を生ずれば、艇は今度の新高と同じ境遇に陷るのである。

一難去つて又一難、辛ふじて島の危險を免れたと思ふ間もなく、今度は艇首に方つて港の突堤が現はれた。逆卷く怒濤に呑まれつ、吐かれつ、物凄き白波の中に、黑き石堤が長く海中に突出して居る。此の儘押し流さるれば艇首は突堤の外端に直角に衝擊する。二三の水兵が甲板を襲ふ狂濤を物ともせず、長き木竿を携へて艇首に出た。此の强猛なる波の

力に對して二人三人が突つ張つたとて蟷螂の斧に等しい。凡ては天命じや。手も足も捥ぎ取られたる蟹の如き水雷艇、活かすも、殺すも、唯波の意に任かす外仕方がない。錨鎖はいつしか切れたらしい。艇の流され方が早くなつた。一波打ち寄するたびに、艇首と突堤とは綱もて引き寄せる如く互に接近する。衝突するか、交はるか息を殺し、體を捥つて見詰めて居る。天佑か、神助か、艇首は殆んどスレ／＼に突堤を交つた。

第二の難關も幸に無事に過ぎた。併し風と波とは少しも衰へない。殊に海の淺くなるに從ひ、艇底と海底との衝擊は猛烈しく、其の度毎に身體が甲板から彈ぢき上げられる。幸に艇底の堅牢と海底の細砂との爲め、艇底にはまだ破孔を生じない。斯くて激浪に押し流されながら轉覆もせず、沈沒もせず、偶然か僥倖か、岩礁を避けて海岸の沙濱に乘り上げた。怒濤は擱坐したる艇の甲板を乘り越へ、激浪は岸壁に碎けて雪の飛沫は檣の高さに散つて居る。いつしか東の空が白み初めた。水雷艇遭難の報が曉の町に傳へられるや、艇の上陸員は宙を飛んで歸つて來た。見物の彌次や、救助の特志家やが波の飛沫を冐して海岸に群つて居る。波は尙ほ荒く陸との交通はまだ出來ない。併し最早や轉覆の虞も、沈沒の憂もなくなつた。やがて風も波も次第／＼に衰へた。夏の太陽が昨夜の荒しを知らぬ氣に、强き光を搖らめく波に投げて居る。海が常態に復すると、驚くべし我が水雷艇は白き砂原の上に艇底の一部を破中に埋めて据つて居た。土地の老人の話に依ると、三十年來の暴風雨と云ふことであつた。陸上に引き揚げられた漁舟も大分破壞されて居た。日本海では何十艘かの船が難破した。自分の艇も若し强いて沖合に出たならば、其の運命は判らなかつた。成敗は全く天運じや。自分の過失の爲めに國家の艇を破損したる罪を慚づると共に、天佑に依り人命を全ふし得たることをせめてもの心やりとして幾日かの「謹愼」を屑く受けた。要するに自分の失敗は無知と油斷との爲めである。

新高遭難の報を聞き、十七年前に於ける自己の經驗に省み艦長以下乘員に對して深甚の同情を禁じ得ない。毎年一度

里を見舞ふて一人の美女を奪ひたる簸の川上の八頭の蛇は、三千年の昔素盞嗚命に依つて退治せられた。毎年日本を訪ねて有ゆる慘害を逞しふする此の暴風を退治するものは無いであらうか。

（新高遭難の詳報はまだ判らない。唯簡單なる公報と自分の經驗とを辿つて書いたのである。他日詳報の發表せらるゝ時或は自分の推想が誤つて居るかも知れない。豫め讀者の諒を乞ふて置く。）

詞華

秋衣の歌

佐藤春夫

去年立秋ののち旬餘の或る日、机に凭りて「情史」を繙き偶々巻二十四を開きしになかに洞庭劉氏といふ一項あり、「洞庭劉氏　其夫葉正甫　久客都門　因寄衣而侑以詩曰　情同牛女隔天河　又喜秋來得一過　歲歲寄郎身上服　絲絲出妾手中梭　剪聲自覺如腸斷　線脚那能抵淚多　長短只依先去様　不知肥瘦近如何。」われは三誦して秋夜の寂居に感はことのほか深かり。

織姫(おりひめ)と身をなして
おもふ人いと遠し、
歎きつつ織るものは
なつかしき人に着られよ。
幾とせぞ　天の川

逢ふことぞ待たるるよ、
秋ごとに君に行き
君にそふ衣ねたまし。

絹裂けば音にぞ聞く
わが胸の千々の切なさ、
縫ひゆけばなみだ落ち
縫ひきしむ針ぞ憂たてき。

行丈は昨のままぞも
わが心昨のままぞも、
憂れたくも痩せ給へりや
憂れたくも肥え給へりや。

もとより即興の戯れにして原詩の哀切に對して恥づ。そののちまた月餘、或るゆふべ身に秋冷をおぼえて自ら秋衣をさぐるに事によりてわが思ひ淒然たるものあり。その夜筆をとりて秋衣の歌をつづれども徒らに意はありて詩は遂に成らず。これを匣底に投じ去りぬ。今年また秋衣の候となる。われは假そめながら病に伏して他家に身を寄せたり。秋宵只

一人の爲めに長く孤愁に時に甚だ堪ふべからず。つれづれのあまり舊稿を思ひ出でて再び見んことを願へども協はず。蓋し轉々たるわが流寓のうちに失はれたるなり。乃ちところにこれをたづねつゝ漫吟し得て些か意を遣りぬ。詞の稚拙は既に恥ぢざるなり。

灯かげとどかぬ小暗(おぐら)さに
さすらひ人の行李より
ひとり索(さぐ)ればわびしさよ
秋風(あきかぜ)に著る秋ごろも、

劉氏を妻に持たぬ身の
わがとり出づる古(ふる)ごろも
ころもをとればそぞろにも
おもかげに立つ憂(う)き人よ、

わりなきことを言ひいでて
恨むよしなき憂き人よ
汝(な)がいとし子の秋ごろも
裁(た)つ手をしばしやめよかし、

絹を二つに裂かんとき
こほろぎの音をしばし聽け
そのかそけさを胸に知れ
つれなき人とならじかし。

人目を怖ぢて　汝はそも
あわただしくも運ぶ手に
そのほころびをつくろひし
ころもは曾て無かりしか、

今日をかぎりの別れの日
吐息とともに汝が置きて
くつがへりたる味噌汁に
しとどなる膝なかりしか、

劉氏は人の妻なれば

ひとりとり出しわがころも
濯ぐべき人もとめねば
糸目もふるし古ごろも、

秋の灯かげにすわるとき
新らしく着る古ごろも
膝なる汚點はわりなしや
いみじき人を怨めとぞ。

時論

法學博士　千虎俚人

（本誌締切の間際に至り、僕不時の急用に遮られて執筆の遑なきに至つた。全く時論を缺くも毎號の體裁を傷ふの嫌ありとて、編輯主幹の切に談じ込まるゝに依り、同心の學友千虎俚人に囑して次の一篇を得た。暫く匿名の儘とするも、彼亦論壇學界の一奇才。こゝに敢て氏を紹介すると共に僕の疎懶の罪を謝する。……吉野生）

東歐最近の擾亂に於ける正邪對立關係の紛更

○

東歐に於ける最近の擾亂が古い且長い歴史の中に其の遠因を有することは言ふまでもない。此點に於て今次の擾亂は、歐洲近世史におなじみの所謂バルカン問題の延長乃至再發と觀てもいゝ。併し之を外にして其近因たるべき要素を探すなら次の諸點を數へることが出來る。(一)土耳其が獨逸に加擔して戰敗國のうき目を見たこと、(二)其結果講和會議に於て其領土が大に削られたこと、(三)土耳其の領土が過當に削られた他の反面に於て、聯合國の味方として起つた希臘國等がまた過分に領土を擴張したこと、(四)斯くして民族的紛糾の素因は此次の戰亂に於て十分に調整せられず、講和會議の決定が後多少修正せられたに拘らず、近東の雲行が依然險惡であつたこと、(五)而して他方西歐列强の平和的關係は今なほ安定せず爲に著しく東歐に對する威望を減ぜしこと、等則ち是れ。斯くして東歐の天地は、中歐の監督を離れ、彼等諸民族の爲すが儘に放任せられねばならぬことになつたのである。

併し何と云つても問題の中心點は、講和會議に於ける領土分配の決定に對する不滿に在ると謂はなければならぬ。一體東歐の天地が多年歐洲擾亂の禍根であつたのは何の爲か。一つには基督教國たる歐大陸の一角へ異教徒が入り込んだといふに在

る。併し土耳其民族が數百年の長きに互つてあゝまで根を張つた以上、今更無下に之を斥くるのが寧ろ無理だ。人種宗教の如何に拘らず各民族をして其の處を得しむべしと云ふのが當世通用の原則だとすれば、土耳其人だつてさう譯もなく遂ひ斥けることは出來ない。そこで問題は移つてから云ふことになる。土耳其人が他の基督教民族の多數住んで居る處までを支配するのは不可いと。此事は土耳其人の行政的無能の事實と伴つて可なり強く説かれたのであつた。之には土耳其は一言もないのだ。昨今段々頭をもたげて來たつた民族自決主義の精神は、實は東に於ては隨分古くから説かれて居つたのである。

斯くして民族自決主義の精神より國際的正義の實現を冀ふ者は、概して云ふに、東歐問題に於ては土耳其に反對の立場に味方せねばならなかつた。戰爭以前歐洲諸國の多數人の良心が巴爾幹諸民族に多大の同情を有つたのは、強ち彼等が基督教を奉ずるからといふばかりではない。

○

併し戰爭後になると此の關係は一變した。土耳其は戰敗者たるの故を以て其領土を不當に削られた。希臘以下の諸邦は、戰勝に貢獻した報酬として、土耳其民族の蟠居する若干の土地の支配權を得た。於是東歐に於ける民族關係は、今や正に主客顚倒したのである。先きには人を支配したもの今は人から支配さるゝ身となる。憤懣の情一層强かるべく想はるゝが、之等は深く顧慮しなくともいゝ。國際的正義の實現に腐心する立場から民族主義の精神を尊重する者は、先に土耳其を非としたと同じ動機から、今や希臘以下の諸國を非とせねばならなくなる。相撲の番附が勝負の數に依て時々其位地を換へる樣に、東歐擾亂に對する我々の立場は、戰爭の前後を劃して全く其地位を換へねばならぬことになつたのである。

猶ほ東歐今日の形勢に對する我々の立場を定めしむるも一つの要因として斯んなのがある。曰く、戰勝者の權利として他民族の支配を許容する從來の思想は正當なりやといふ是れ。從來の慣例に依れば、戰勝には必ず領土の割取と償金の獲得とが伴つた。昔は之れ以上更に莫大の分捕物のあつたことは言ふまでもない。償金のことは今は觸れぬ。領土の割取は即ち當然に異民族の支配權を伴ふ。是れ戰勝の當然の權利にして、民族主義も何もあつたものではなかつた。從來は此點をあまり疑はなかつた。否、今日でもボンヤリ希臘などにあれ丈の報酬をやつたのは當然でないかといふ風に無意識のうちにこの古い慣行を受容して居るものもある。而して戰爭に依て大に覺醒せられた近代精神は、こんな不合理を何時までも許容しては置かないとす

る、戰爭に關する思想そのものゝ一變と共に、戰勝の權利などゝ云ふものは寧ろ之を馬鹿にするといふ樣な風になりかはり、夫よりも民族自決主義の根本精神を眞つ正直に徹底的に實現せしめんと熱求するに至るのである。是れ土耳其の立場が意外に歐洲民衆の道德的後援を有する所以。少くとも土耳其の主張は一概に之を斥く可らざる底のものと諦められて居る所以であらう。

○

然るに更に一步を進めて東歐問題の紛糾に我々が實際に干入したとしたら如何なると云ふに、問題はさう簡單には片つけ得ない。戰前に於ては原則的にバルカン諸民族に加擔した我々は、戰後に於ては一轉して原則的に土耳其側に味方する氣分になつた。此事には間違はない。併し我々の彼に味方し此に加擔するのは原則的に於ての話であつて、實際の問題に對する現實の態度を云々するのではない。米の飯よりも麥の飯が原則的にいゝと云つたからとて、腹の工合では米の飯を食ひたいと云ふ事もある。實際の問題になると、また色々復雜な要素が加つて、我々の態度をきめる上に甚だ困難を感ぜしめるのである。

早い話が、原則的に土耳其の立場に加擔するといふことは、土耳其の主張の全部を是認することとは全く別の事柄だ。何となれば、土耳其の今次の擾亂に於て主張する所は、適確に吾人の所謂民族主義の指示する畛域を守るものではないからである。加之姑く彼の要求を容れて、基督教諸民族の一部を再び彼の配下に置いたとする。彼はどんなに之を治めるや知れたものではない。さうするとウッカリ土耳其の主張を裏書することが出來ないといふことにもなるのである。

斯んな風に考へて來ると、我々は今次の擾亂に於て何れを正しとして其の後援を爲すべきやに迷はざるを得ない。動くとも、觀點の異るに連れて正邪の對立關係は決して一定不變なるを得ないものであることが分る。

○

僕が東歐問題をかりて斯んな理窟を捏ねるのは、我が日本に於ても、識者階級の勞働問題などに臨むに方り此種の紛更があるだらうと思ふので、原則的に勞働問題に好意を有するもの必しも現實の勞働運動の同情者でない場合のあり得る所以を暗示したい爲である。昨今中央公論の全體の調子、殊に時論欄に於ては、時々勞働運動などに手嚴しい鋒鋩を向ける樣だが、そは想ふにその理想主義の立場から、勞働運動の名に於て行はるる善惡一切の行動をその儘受け容るゝに堪へないからであらう。其實原則的に勞働問題に多大の熱情を有することは我々の最は

ざる所である。而して我輩はこゝに原則的に同情ある者をして時々面をそむけしむる事あるは、往々運動者自身の失態に胚胎するものあるを警告して置きたいと思ふ。

若し夫れ東歐問題の結局の解決に至ては、我々は左ほど前途の光明を疑はない。昨今の擾亂は畢竟中心の安定を求めて振子の左右動するが如きものであつて、擾亂そのものはまた時として不測の大變を招致せずとも限らないから、其甚しきに及ばざるに適當に之を處理するを必要とはするが、東歐問題そのものは、遠からず土耳其に若干の地歩を許容して一段落を告ぐるであらうと信ずる。

併し問題は固より之を以て解決し了つたのではない。更に將來に結局の解決は殘されるのであるが、之等の點はまた別の機會に於て詳論する事があらう。





童子

室生犀星

一

母親に脚氣があるので母乳はいつさい飲まさぬことにした。脂肪の多い妻は生ぬるい白い乳をしぼつては、張つてくると肩が凝つてならないと言つて、陶物にしぼり込んでは棄ててゐた。すこしくらゐなら飲ませてもよいと云ふ樋口さんの説ではあつたが、私はそれに反對し、妻もそれに同意した。脚氣症の母乳はよく赤兒の脳を犯すことや、その取り返しのつかない將來のことを思ふと、絶對にやつてはならないことだつた。「あなた方がそんなお考へなら勿論やらない方がいいんです。あとあとのことを考へると良くないから。」醫者の樋口さんも毎時ものやうに強情な私を知つてゐるため賛成したのである。

「こんなに張つてゐるのを飲まされないなんて……すこしくらゐなら關はないんぢやないでせうか。」
母親は、寛い胸から乳房を掴み出し、柔らかいぽとぽと音を立てて陶物に滴れる乳を見ながら、口惜しさうに云つた。
私はあくまでもそれを叱りつけ、看護婦會で周施をしてくれる筈の乳母の來るのを待つた。口入屋が千葉のもので、その千葉から口入屋のおやぢと乳母とその母親とが、今日明日のうちに上京してくるといふことだつたが、返電さへも來ないので、抵牾かしかつた。
「素性の知れないものの乳を遣るのは、どんなものでせう。それに病氣なぞあつたりすると、牛乳で育てるより却つて惡くならないでせうか。」
「よく醫者にからだを診て貰つたらいい。醫者がよいと言へばいい。」
さう話してゐるうちにも、朝と晝と、そして晩には、女中の夏と、世話をしてやつてゐる平林とが交る交る貰ひ乳をしに、動坂まで行かなければならなかつた。そのたんびに平林に、乳を呉れる女の人のことを、私は氣に病んでは尋ねた。
「子供が三人も四人もごろごろしてゐて二間きりの家です。けれども乳はたくさん出るらしいんです。」
「こちらから行くと厭な顔をしないか。」
「厭な顔なぞしません。」
「三度に一度くらゐでも、晩方なぞ忙しいときに……。」
私の氣もちを知つてゐる平林は、「そんな事は無い」と言つた。そして

「家ぢゆうのものが行くごとに赤ちやんは今日はかげんがよいかとか、わるかつたら鬪はず乳を棄ててとりに來てくれとか言つてくれるんです。乳は時間を見計つて新鮮らしいのをお上げすると言つてゐるんです。」さう言つたので、私はまだ會はないが善い人達だと思ひ、心から感謝した。

「さうか、こんどは何か持たせてあげないと惡い――。」

夏も口をそへ「ああいふ親切な人だちはない。」と言つた。瓶のなかの溫かい乳を、母親はいつも一度掌にあてたり、湯がないかと明るみに透したりして、嬉しがつた。それの消毒をしながら

「家人が多いんですから何を呈げたらいいでせうね。」

さう言ひ、お祝ひの品物の、さしあたり要らないものをあれも上げるこれも呈げると言つた。そしては自分の乳をしぼり、陶物にたまつた濃い白い液體を覗きこんだ。

「こんなに乳が出るのに、これが飮まされないなんて――。」

さういふと、そつと夏に、「こつそりと飮ましてやりたい。」と言つた。

「そのコツソリで萬事ブチコワシになることがあるぞ。」

私は氣むづかしく叱りつけた。しまひに乳を棄てるところがなくなり、庭の萩の植つた陰地を掘つて棄てた。

或晩、玄關に客があつたので、家のものが忙しく、私が何氣なく出た。が、まだ一度も來たことのない女であつた。

「あの……動坂から參つたんでございますが。」

「あ、動坂からですか。」

すぐ貰ひ乳をさせて呉れる人だと思つた。手巾に包んだ瓶をさげ、妹らしいのが格子の外で、からだをちぢめてゐた。

「いつもお世話さまで……オイ、動坂から入らしつたよ。」
さう奥へ聲をかけると、妻も叉もみんな出て來た。
「お手すきがございませんでせうと、こちらへ序手がありましたものですから。」
手巾を開き、乳の瓶を取り出した。藍色の浴衣地の、袖がよれ、スリ切れた履物が目立つた。
「まあ、ご親切に、どうかおあがりなすつてくださいな。」
こんどは格子戸に隱れるやうにしてゐる妹の人にも、「お這入りなすつて――。」と、初めて會つた妻は、くれぐれも乳のことを頼んだ。太い腕をしてゐるので、その健康なことは疑ふまでもなかつた。私は安心をした。
「毎日お乳をさし上げてゐましても、もしも腐つたりなぞしたりしては、大變だと思ひましてね。」
「いえ、すつかりゴムの乳首にも慣れましたものですから――二度づつおいそがしいのに頂いたりなぞして――。」
妻はさういふと、赤兒のねてゐる部屋へあんないをしながら、
「ともかく一度見てやつて下さい。こんなに肥つて。」
「まあよくお肥りになつて……。」さう四十近い女の人は言ひ、「どんなお子さまでせうと毎日お噂をしてゐたんでございますよ。それにどうしませう、こんなにお可愛くて――妹が今日こそ行つて見ませうときかないんでございますよ。」
と、妹の羞しがるのを目でふりかへつた。「そんな事をわたし言ひはしなかつたわ。」と、ぞんざいに言つて妹なる人は赤ぐろい顔をそめた。
「これでわたしも何んだか安心いたしました。氣にかかるものでございましてね。」
小さい唇を締めるやうに言つて、膝氣さうな顔をした女は、立つて玄關へ行つた。その人が歸つてしまつてから、みん

なは話し合つた。

「氣になつて氣になつて爲樣がなかつたんですよ。きつと。」

さういふ夏に、「おれにしても氣になる。」と私は言つた。

――一日に三度づつ勸坂へ行くのには、あまりに人手がなかつた。もうすこし近いとよいのだがと皆が言ひ合つた。それにしても乳母の方の埒が開かないので、むやみに急がすと、明日はきつと拉れて出かけるといふ返電があつた。

その日、乳母は、六十ばかりの母親と、口入屋の爺さんと連れ立つて來たが、私は口入屋の爺さんの顏をみると、すぐ目を伏せてしまつた。厭な奴だと、直覺的に上向いた鼻と日燒けのしたあぶらぎつた顏をみたときに左う思つた。

「月給は三十圓くらゐにしていただきましてな。それを半年分さき拂ひに、そして私の手間賃は十五圓いただきます。」

さう切口上をいふと、乳母の母親に對ひ、よく聞き解けるやうに、

「これだけ言へばわしの役目は濟んだのだから、あとはお母さんがよく娘さんに話をしなさい。」

爺さんは、こんどは老母のわきに座り、硬くなつてゐる健康さうな娘に、「かう話が決つたら氣にいらない事があつたりしても、我儘を言つて歸つたりなぞしてはいけない――切角御緣があつて來たのぢやから。」さう言ふと母親が、小さい膝を娘の方に向けた。

「一年くらゐの間だから、よく辛抱をしての、ときどきわしは逢ひに來るし、つむぎ屋さんに萬事おまかせしてあるから――。」

眼の圓い二十一二くらゐの娘なる女は、その間ぢゆう俯向いて、一言もいはずに默つてゐた。膝がしらへ乘せた指さきで、膝の肌を衝ツついてゐさうで、しぶとい人間のやうな氣がした。

「肝心のお乳を醫者に診てもらはないと困りますね。お願ひするにしてもそれが氣にかかりますから。」

先方の獨り定めになりさうで、私は爺さんの顏をみながら云つた。

「乳のことは千葉の醫者でも診てもらつてきたんですが、大丈夫ださうです。最もお宅でも最一度試驗していただけばなほ結構です。」

爺の言葉に續いて、母親も言つた。「この子は近年病氣一つしたことはなし、この通り頑固なからだをして居りますから、心配はございません。」

娘の方を見て、この話が乳のことでコワれないかと、いくらか不安さうに言つた。

「では試驗管にでもしぼつていただいて、すぐ樋口さんに見てもらひませう。――ちよいとこちらへ入らしつて。」

妻は、乳母を勝手へつれて行き、そこで管に入れた乳を平林が醫者へ持つて行つた。

「早稻田の方にも一軒廻らなければなりませんから、事の決まり次第に失禮いたします。」

爺さんは契約書と、周旋料とを私から受取り、大きな財布にしまひ込んだ。何しろこのごろは乳母になる女がないから、仕事に骨が折れると云つた。

「二三日べつに不良いものも食べなかつたから、乳のわるい筈はない。」

母親は、使ひの歸へるまで、そんなことを言ひ續けた。乳母は、膝を固まらせ、窮屈さうにしてゐるので、肩で息をついて居苦しさうにしてゐた。堅氣な奉公をしたことのない女のやうに、ときどき私や妻の方を偷みる瞳が素早かつた。

平林が歸つて來た。「乳はべつに不良いところがないさうです。」と言ひ、別に醫者からの證明書のやうなものを持つて

來た。妻も私も喜んだ。

「よく使つたからだですから、よい乳が出る筈です。」

爺さんは、身支度をすると、「ぢやお母さんは明日にでもお伺ひして、金の方のことを決めなさるとよい。わしは急ぐしするから。」と附け加へ、一緒にかへるといふ母親と、玄關へ出た。

「なるべく汁氣の多いものをいただいて、そして自分の家だと思つてゐないと、乳といふものは不意に止まることがあるものだから。」

乳が止まることのあるものだと聞くと、乳母は、胸へ手を當て、眼を圓るくした。「ともかく明日わたしが又來るから、そのとき模樣を見てあげよう。」

爺さんと老母とが歸つたあとで、妻は、すぐ乳を赤兒にやつて呉れと云つた。貰ひ乳ばかりしてゐた赤兒は、ゴムの吸管とは、全然かんじの違つた柔らかい、いくらか手頼りのない乳母のちち首を口にふくんだ。私は惡い臘甲色をした乳母の胸肌を、いい氣もちで見られなかつた。

「おいチいでせう。ほら、たんと出るでせう。」

妻はその指さきで、乳母の乳房を上からこころもち壓すやうにして、よけい流れ出るやうにした。乳母は、上から赤兒の、うす毛の生えた頭を覗きながらゐた。夏も平林も、さうして私の心にも赤兒が乳母の乳首に馴染んでくれればよいと思つた。

が、赤兒は、すぐ乳首を離した。そして泣いた。すぐ又乳首をさしつけると、ちよいと銜んでまた離して泣いた。

「おかしい、出ないかな。しぼつてごらん指さきで。」

こんどは乏しい乳がちびりと出たきりだつた。いくらやつても同じ事であつた。乳母は、顏を眞赤に染めた。しばらくしてから――

「も一度やつてください。」

さう妻が言ひかけ、赤兒の口を乳首にさしつけても、もう吸ひつきさうもなかつた。「空乳首をやつて見るとよい。」私がさういふと妻はすぐ空乳首を與つた。赤兒は、吻つとしたやうにそれを舐り、くろぐろとした瞳を瞬まらせ泣き歇んだ。

「どうして出ないんでせう。」

乳母は、心を焦つてしぼるほど、乳は、ちびりとしか出なかつた。「毎日來てゐるほど出た乳なんでございますが。」と、乳房をぐりぐりしぼつた。そうしてゐる乳母の額に汗さへ滲んで見えた。「しばらく休んでからにした方がいい。」私は見兼ねて左う言ひ、心で嘆息した。胸肌のうすい皮づきが、くらみを持つてゐるのまで、氣になり絶望的な氣もちにした。

女中部屋で一ト憩みさせてから、灯の點いた下で、また赤兒に乳房をくはへさせたが、二度ばかりで泣き出してしまつた。しらべると一滴づつしか出なかつた。――もう乳を貰ひにやる時間だつたから、出ない乳首をさしつけてをくわけに行かないので、念のためにと最一度やつて見たがやはり駄目だつた。私はいら立つた。乳母は、又眞赤になり鼻がしらに汗をかいた。

妻は乳母と私とをみながら「どうして出ないんでせう。」と云ひ、さうして「すぐ平林さんに動坂へ貰ひに行つてもらひませう。」と手巾に瓶をつつんでゐる。夏は夕方で急しいからと、平林に行つてもらふことにした。平林は、すぐ出て行つ

た。

「困つたな。乳首になじまないからいけないんだ。」

私は妻に、わざと乳の出ないことを言はないで、左う言つた。乳母は、あぶら汗をかいてゐた。

「あなたの子どもはどうしたんですの。」

ふと妻が左う尋ねると、乳母は、汗とあぶらで光る顔を擡げた。

「死んでしまつたのです。生れるとすぐに。」

「まあ。」

妻は、目を圓くしたが、私はべつに何んとも思はなかつた。子供といふものは死にやすい、もろい花のやうに思つてゐたからである。

「そして千葉にゐたの。」

「いいえ。」

「どこに。」

乳母は、言ひにくさうに默つてしまつた。わたしは尋ねるなと目で知らせた。乳母は、やはり身體中をコワ張らせ。そのため息窒りしさうに見えた。

平林がかへつて來た。

「いつもより時間が遲かつたから、こちらで持つてあがらうかと今言つてゐたところです、と、言つて手巾にくるんでありました。」

乳は生ぬるかつた。それを消毒して飲ませると、赤兒はハアハア言つて甘美さうに飲んだ。かういふ風にのませてあるから、よほど出る乳でないと向きませんと、妻が誰にいふとなく言つた。乳母は、伏目に凝と赤兒の顏を見てゐた。頭がぼうとしてゐるらしく据はりの悪いところがあつたので、疲れてゐる、と、思つた。

晩も遅くなつてから、夏がきふに書齋へやつてきて、乳母が着物やその他の用事で淺草の宿までやつて呉れと言つて、さつき持つて來た風呂敷を持ち、勝手口で今にも出掛けようとしてゐると言ひ「何んでも吉原に奉公してゐたことがあるさうで、お宅は氣づまりなんでせう。」とも云つた。

「今夜行つてもらふと、明日の朝お乳を飲ませないぢやないか。こまつたことを言ふ人だね。」

妻は不平を言ひ出した。

「今晩出してやると、あの女は歸つて來ないかも知れないよ。」

先刻、居苦しさうにしてゐた乳母が、何かを口實にして窮屈なこの家を出たいと考へてゐるらしく私には思はれた。

「さうね。でも來たばかりだのに……けれども分らないわね。」

妻も危ながつた。

「用事があつたら明日晝間にしろと言つて呉れ。今夜はだめだから。」

夏は、その通りを言ひ、すぐ乳母を寢ませることにした。あとで、

「旦那さまの仰いましたとほりを言ひますと、しくしく泣いてゐましたの。」

妻にさう女中は告つて、堅氣な家はきうくつなんでせうとも云つた。

翌朝、ひと晩やすんだから、乳母の乳は出るだらうと心愉しみにしてゐたが、やはりちびりとしか出なかつた。しま

ひに赤兒の方で變に柔らかい乳首を厭がつた。平林は、すぐ出掛ける用意をして玄關で待つた。

「家へくる前にほんとに出たんですか。」

妻は牴牾かしがつて尋ねると、乳母は、やはりいつも茶碗にしぼつては棄ててゐたと言つた。わたしは全で出ない乳房のやうに凋んだ乳首を、厭なきもちで見た

平林は、瓶をもつて出て行つた。――それを乳母は見送ると、同じい仕草をその乳首の上に加へたが、やはり出なかつた。

お晝にも、白い液體は出さうにもなく、さしつけたばかりでも赤兒は厭がつた。――乳母は、夏を通じて、昨夜の約束通りちよいと淺草まで遣つて呉れと、しきりにせがんで利かなかつた。

「そんなに言ふなら行つて來いと云へ。どうせ歸つてこないだらうから、乳が出ないから仕方がないぢやないか。」

「それもさうね。ぢや遣りませう。」

妻は、では、なるべく早くかへつてくるやうに言つて、乳母をやることにした。あとで私は、夏にたづねた。

「包みを持つて行つたか。」

「ええ、みんな、ただ歯みがきだけ置いて行きました。」

晩になつても歸つてこないことは目に見えてゐても、晩くまで勝手の戸締りをしないで置いたが、やはり歸つて來なかつた。乳母も窮屈で困つたらうが、一ト安心をした私だちは、また途を絕れて困つた。

「やはり當分は貰ひ乳をするんだな。どうも爲方がない。」

「外にないでせうか。」

「あれだけ捜してやつと見つけて、これだ、ちよつと急にはなからう。」

ふたりが話してゐると、夏は、こんなことを言ひ出した。

「勝手口で乳母さんが出しなに、齒磨はあんたに上げると言つてゐましたから、もうかへらないんでせう。」

莫迦正直な夏は、私だちの氣も知らずにぽかんとそんなことを言つたが、私はあつちへ行けと顎を杓つた。……赤兒は、やすらかな花のやうな、さういふことが言へるなら、それにも増して美しいくろぐろした一線を惹いた眼をつぶり睡つてゐた。その息づかひは平和にわたしの耳をなごめた。

……わたしだちは四年前の冬、結婚した。その晩は珍らしい大雪の翌日で、夜中に、雨戸一枚を繰り手洗鉢にかがんだが、銅の手杓も凍てあがつてゐた。何となく青い層のある明け方の空氣を雪と雪とが射し合ひ、その明りはむしろ痛みある寒さを感じさせた。私はそこでしばらく佇ちながら、すやすや眠つてゐるらしい女に、私がさうやつて佇つてゐることを知らすまいと、氷つた閾（しきゐ）の上に音もなく雨戸を閉めた。

式を濟すと、田端と神明町さかひの、或る百姓家の離れに住み、私は毎日抒情風な詩ばかり書いてゐたが、蛾の餌ほどの父が殘して行つた金なぞは、何時の間にかなくなつてゐた。貧しい地味な暮しをつゞけてゐるうちにも、すこしづつ自費の詩集なぞが賣れて行つた。まとめて父からの金で、私は十年ほどかかつて書いた詩を書物にし、本郷の本屋へたのんで賣つてもらつてゐた。

そのころもう父親になつてゐる恩樹といふ友だちが、やつてくるごとに、三つばかりの女の子を抱いてゐた。私には恩樹がその子どもを得意さうに抱いたり、あやしたり、おしつこをさせたりしてゐるのを見るごとに、いつもばかばか

しい氣がした。連れてこないときは　決つて子供へのみやげの、パンとかお弄品とかの包みをかかへてゐた。それがあまり定りすぎたものを見るやうではあつたが、恩樹は、自分で赤ん坊にお湯までつかはせるほど、好きだつた。
「君のところでは、どうして子供ができないんだ。妻君はからだもわるくないし。」
恩樹は、濁らない美しい目をして、よく私にさう言つた。
「どうしてかな。しかし今子供なぞできたりすると困るんだ。何の用意もないし、貧乏だし……。」
私はつとめてその話を避けるやうにした。眼を逸らせるやうにしたのである。
「子供は實に可愛くていいよ。」
恩樹は、まるで天にでも捧げるやうに高々と子供を抱いては、遠い中野の奥までかへつて行つた。町へ出ようとすると一しよに連れてツてくれと聞かないんだ。つイ可哀さうになつてね……恩樹は、嘘をついたことのないやうな顔を、その子供の頬に觸れさせて言つた。
家主の婆さんは、女が犬を可哀がるのを厭がつて
「犬なぞお置きになるから、子に、遠いんですよ。むかしからさういふんですよ。」
さう言つては、くるごとに嫌ひな犬をしつしつと門のそばで、半ばコワがりながら叱つてゐた。
國の方からも手紙がくるごとに、子供はまだか、まだできぬかと書いてあつた。そのたんびに不愉快をかんじた。あちこちの結婚したての友だちがみな子供を持つのを見ると、なほ子供のできることが厭な氣がした。それはかりではなく、自分達さへ苦しい暮しをしてゐるのに、それが生れたら大變だといふ氣もしてゐた。貧しさの骨身を削つてきた下宿時代のことを考へると、それが生れてこないことばかり考へられた。

夫婦きりで閑暇のありすぎる退屈さが、をりをり譯のわからぬ不快をともなつた。女は張り合ひのない顔をし、よその赤坊をお湯につれて行つたり、犬や猫を飼つたりして寂しがつた。

「どうして子供がないんでせうね。」

「どうしてだか。」

むつつりと私はその話がでると默り込んだ。そしてそのたんびに

「子供なぞあつたら困るだらうなア。なくてさへ困るんだから。」

さういふとプイと立つて、座を外した。その事に觸れてはならぬと思つてか、女は、その話をしなくなり、人がくなと、どうしてできないんでせうね、と、さう云ふばかりだつた。

三年過ぎても、女にはそのけはひさへなかつた。友だちはよくその話で、わたしを皮肉らうとした。恩樹は、もう次ぎの子どもを抱き、さきの女の子には、夏はすずしい白のレースの洋服をきせて歩かせてゐた。

「子供ができると、からだがさつぱりするさうですよ。ことにあなたは頭がいたむなんてよく言ひますからね。」

恩樹は、女の前で斯う言つては、悒々してゐるのは、生むものを生まないせいだよ、さう當らず觸らず私に言つてゐた。そんなときでも、よい育ちをした恩樹の眼は靜かに澄んでゐたのである。

「できないものをどうにも爲様がない。」

私のいふことは、それだけだつた。が、心にはすこしづつ子供がほしかつた。時々考へ込むと、よく十年前にゐたことのある下宿屋の若夫婦が、二人きりになつて寢てゐたが、いつまでも子供ができなかつた。夫婦がごろりと二人きりで寢てゐるのは、緣もないうそ寂しいものだと、やつと思ふやうになつた。さういへば自分等もいつも定つて起きるに

も寢るにも二人きりだつた。花も綾もない。そして手賴りなくしまひには子供のないことが、夫婦きりであることに曾つてない羞恥さへかんじさせた。

が、愈々子供ができるとなると、自分といふものを知つてゐるだけに、何んだか不具ものなぞできはしないかと、妙に不安になり、いつそ今まで通りに生れない方がよいとも思へた。——しかし、それよりも手賴りになる直接自分らの魂にも肉にも關係のある生きものが見たかつた。

それゆゑ私は或晩、ふと女に曾つて言ひ出したこともない子供のことを言ひ出した。

「お前さへ生む氣なら、子供はいつだつて出來さうな氣がする。」

「どうして？」

女は今までにも出來なかつたものが、急にできるものでないと言ひ出した。私は女に、私の秘かにしてゐたことを、まじめに話し出した。

「そんな事をいつしてゐました。いつころから。」

「國で式をあげたときから。」

自分でも意想外に冷かな顏をし、なぜか氣むづかしさが加はつたが、いつの間にか私は顏を紅くそめた。

「そんなこと、噓でせう。」

しばらくすると、女は央ば眞顏になり、きみわるさうに微笑ひをふくんで、わたしの目を覗き込んだ。

「全く眞統のことなんだ。噓だと思つてゐてもよい。そのうちにできるやうになるから。」

「ほんとう？」

女は腹の上へ手をあててみたが、きふに立つて次の間へ行つて泣き出した。そんな恐ろしいことをひとりで遣つてゐる人とは思はなんだと云ひ、朝まで泣き歇まなんだ。わたしは困難なときに子供なぞできなかつたこと、そして子供が心からほしいと思つたときに、生れてくるものだと信じてゐたから、女の泣き歇むのを待つだけだつた。
が、ふしぎに女は元氣になつたやうなところが、それからあとに現はれた。
「まだか知ら。」
女は木の實でも埋めたのを覗き込むやうに、自分のからだに深い注意を仕出した。そして折々こんなことを言つた。
「あなたは惡いことをしてゐたと、さう思ひませんか。」
「思はない。」
さう私はハツキリ答へたが、不自然ではあると心で附け加へた。
「わたしはそれを大變わるいことだと思ひます。」
女は、むきになり左う言つたが、默つてそれには答へなかつた。
腹に子がきてから、女は樂しさうに小さい襯衣やおむつを縫ひはじめた。それを幾枚も疊んでは、一枚でも殖えるのを喜んだ。胎教だと言つたり、なるべく美しい子を生むのだと、西洋の名畫なぞを枕もとに置いては見入つてゐた。この女にこれまで見ることのできない微妙さが、小刻みにわたしの目に映つた。
「こんなんなら、もつと早くできてくれればよいのに、わるいお父さんだ。」
女はこんなことを、ときには言ひ出したが、わたしは氣むづかしい顏をし、なるべくそれには觸れぬことにした。女は、毎日指を折つてはかぞへた。そして或晩わたしが、或る事を明してから、その子が腹にきたことを知ると、若く

なつてふいに考へ込んだりした。

二

翌朝になつても乳母はこないばかりか、千葉の方へ問合せても返辭すらなかつた。爲方なく毎日貰ひ乳をしたが、産婆からの紹介ですぐ下田端に乳があるといふことで、人手はなし動坂は遠いから、ひと先づ下田端の方へ貰ひにゆくことにした。

「動坂は善い人だちだが人手がないから、よく禮を言つてお斷りしよう。」

動坂へ禮に行かせ、田端の下臺へ毎日三度づつ行くことにしたが、平林も夏もそのたんびに、下駄や着物の裾まはりを泥だらけにした。梅雨に入つた元田圃であつた下臺は、泥濘で歩けない道路であつた。一度なぞ夏は泥の中をころげ、胸のところまで汚してかへつて來た。

「道路が悪いなんてまるで歩けないんですもの。」

あまりたびたび左ういふので、私はそれだけなら我慢をして吳れとも言つた。が、勝手口でその事を繰りかへされると、しやくに障つた。

「イヤなら止めてくれ。」

とも云つた。

平林は、泥まみになつても、默つて井戸端で洗足して、そのことを口へ出さなかつたが、垣根につかまつたりして歩くのか、指股に泥をよく食附けてゐた。

「どんな家かね。」

「會社員みたいな家です。」

私はさきで厭なかほをせぬか、と、氣になり平林にたづねた。

「ちやんと時間になると、瓶に乳をしぼつて玄關へ出してあるのです。いただきますと言つて持つてくるんですが、奥さんは寐そべつて添乳してめつたに出ていらつしやりません。」

「いつでもかい。」

「いつでも、出してあるんです。」

平林は、へんに不平のある顏をし、それを言ひ出してはならぬといふやうな表情をしてゐた。さきでも面倒くさがつてゐるな、とすぐかんづいた。

「動坂の家とどちらが感じがいい？」

「そりや動坂の方です。」

「いつしぼつたのかよく聞いて來るんだらうね。」

「え、おくさんはそのたびに、今しぼつたばかりですと言つてゐます。」

その日、赤兒は綠便をしたので、乳のせいだと思つた。その殘餘をすかしてみると、どろどろなものが瓶の底に溜り、動かすと蝶の粉のやうなものが浮いてゐた。

「こんな乳だから……お腹をコワしたんです。」

女は、「よく氣をつけて與れればよいのに。」と、奥さんを怨んだ。「きつと朝しぼつてをいたのをくれたんでせう。」と

も言つた。
　それからずつと赤兒は、腹をコワし、じめじめした梅雨は部屋のなかまで濕り込み、夏と平林とは、下田端からかへると、井戸端で足を洗はねばならなかつた。その高聲がよく私をいらいらさせた。
「夕方はおれが取りに行く、たかが道路がぬかつてゐるまでぢやないか。」
　私はかつとし、夕方、瓶をさげ、八幡さまの垂れた綠の重い枝の下をぬけ、藍染川の上手の、二年ばかり前まで桑の葉の流れてゐた下田端へでたが、泥濘つた水溜りに敷き込んだ炭俵の上を踏むと、づぶりと足の甲へまで泥水が浸つた。それを拔かうとするため、ちからが餘りひよろついて、危ぶなく倒れやうとした。ハネ泥で裾まはりが濡れ氣もちが惡かつた。
「土間の濕けた格子内の、三尺式臺の上に、瓶が出て居り、白いものが這入つてゐた。あけられた障子うちに、すぐ床をしき、奥さんらしい人がねそべり、よく働いたらしい脊のぬけた瞼がこちらへ向いて見えた。見當をつけ此處の家だなと思つた。
「ごめんなさい。」
「はあ。」
「お乳をいただきに參りました。」
「そこに出してありますから……。」
　奥さんは、さう寢そべりながら言つたが、瞼の位置はうごかなかつた。わたしは瓶を手巾につつみ、
「いつもお忙しいところを濟みません。これはいつころのお乳でせうか。」

「今とつただけですよ。」

奥さんはやはり起き上りさうもなかつたので、わたしは鶏卵の包みをそつと置き、「粗末なものでございますが、どうぞおおさめなすつて下さい。」さう言ひ、格子の外へ出た。道路はさき來たより最つと惡く、雨あしも小汚なく亂れ、四五軒つづいた長屋の入口の格子の裾がみな濡れはじめた。

わたしはなるべく、飛び飛びに歩いては、水たまりへ足を辷らせぬやうに用心した。が、爪掛けをつッ込み、ぬるい水を足さきに浴びた。——それでも乳を大切にかかへてゐる自分の姿が、みすぼらしく寂しい氣がした。八幡坂を上りかけると、塀の内がわに、卯の花が暗い雨に浮きながら腐れてゐた。

「大變な路だ。まるで歩けない。」

井戸端で足を洗ひ洗ひ言ふと、夏は、くすくす微笑つてゐた。が、女はさつそく飲まさなければならないので、消毒の炭火をおこしてゐたが、乳の瓶を明りに透し、ちよいと眉をしがめた。

「これは腐つてゐる……」

「そんなことはない。しぼつて直ぐだと言つてゐたよ。」

「いゝえ、これをご覧なさい、ほら、滓がたまつてどろどろしてゐるでせう。これを飲ませたらすぐ又不良くなりますよ。」

「困つたなア、あんなに苦勞をしてとつて來たのに。」

そのとき障子のうちに寢そべつてゐた奥さんと、座敷中を取り散らしてあつたのを私は思ひ出し、不愉快になつた。

「動坂はどうだらう?」

「でも此方にきめたのに、今さら行けた義理ではありません。」
「義理なぞ言つて居られない時だから關はないぢやないか。」
「向ふでは暑うよその子に與つてゐるんださうですよ。」
「ぢや牛乳にするか。」
「さうするより爲様がありませんわ。」
樋口さんに話しにやると、つないぎにはそれでもよいが、ぜひ乳母をさがしたらよいと言つて來た。
「こんどは乳母を國の方へ言つてやつて見よう。ひよつとすると質のよいのが居るかも知れない。」
「え、それがよござんすね。」
私はさつそく國へ手紙をかいた。すぐ搜して呉れるやうに頼んだ。――晩、或る友人が來て、山羊の乳といふものは、大へんよいさうだと話した。色が白くなるし營養も多いとのことだつた。さつそく樋口さんに話しすると、牛乳よりよいかも知れないと言つてくれたので、田端のガードのそばにある山羊舍へ平林が毎日とりに行くことになつた。幸に赤兒は、やぎ乳を好いた。みんなは吻と一ト安睹をした。生れてからずツと腹をコワしてゐた赤兒は、やつとすこしばかり腹の方がなほりかかつた。
下田端の方へは、禮をもたせ斷はりにやつた。そのときも胥氣のない足の裏を私はさびしく思ひ出した。――國から乳母は一人もないと返事をしてきた。搜してゐたのか居なかつたのか、腹立たしかつた。
秋、寫眞を二枚撮つた。夏がおもちやを持つて踊つて見せると、にツと微笑つたところを寫した。國の母親と妻のさとへ一枚づつ送つた。國の母親はそれを毎日抱いて寢てゐると書いてよこした。愛憎のはげしい母親が、さういふ優し

い心になつてくれたのを喜んだ。――すこし咳をすると、すぐ樋口さんを呼んだ。
「赤兒よりかあんたがたが、神經質になるからいかん。」
肥つた先生は、さういふとわたしと妻とに、或る程度まで打つちやつてをくやうにと言つた。わたしは外からかへると、すぐ赤兒の顔を、その柔らかい頬を抓んでみなければ、書齋へはいらなかつた。その抓み方が痛さうだと、女はよく抗議を言つた。
「可哀さうに、そんな手荒いことなぞをして。」
「ほら、かうしてやると微笑つてゐるぢやないか。ツマリかういふ愛撫の方法もあるといふことを知らないか。」
實際、赤兒は、くすぐられたやうで、いつもよく微笑つた。電燈を置くために作らせた紫壇の臺が、書齋の机のわきに晩になると置いてあつた。その上を叩くことを赤兒はすいた。とんとんといふ工合に――書きものをしてゐるときに室へはいられると私は眉をしがめ、それによつて妻は默つて赤兒を抱いたまま、臺を叩かないで出てゆかなければならなかつた。さういふときあとで氣附いて、わざわざ叩かせに呼びに行つたりした。さうすることによつて私自身の氣を柔げることができたからである。
寒いのに赤兒は、正月を迎えた。みんな雜煮をたべ、
「よい正月だ。」と言つた。そのたびに自分がかうして正月を自分の子どもと一しよにすることを、珍らしいものに感じた。荒壁の凍てた寒い街裏の部屋にゐた私は、よくその寂へを振りかへつてはぞつとした。――大寒も過んだ或日、夏がくらい咳を一つした。夕方も勝手の方でつづけさまにしてゐた。
「あれは風邪をひいてゐるから、子どもを抱かせてはいけない。」

妻にその注意をしてゐるとき、夏は、赤兒を抱いてゐたから、わたしはすぐ赤兒を捥ぎ取るやうに抱いた。そして妻にわたした。その晩、赤兒は咳をした。二つ三つ續けてゐるうち、わたしは眞青になつた。

「しまつた。うつつたぞ。」

「どうも左うらしいんですね。こまつた事をした。」

熱を計つてみると八度五分あつた。それに不思議なことには、咳をするたびにぜいぜい苦しさうに息を切らすことだつた。今夜はおそいから、明朝早く樋口さんを呼ぶことにし、水枕をしかせた。

朝になつても熱が下りず、樋口さんは、風邪だと言ひ、それほど心配することはないと言つた。私だちは氷で冷した。――が三日經ち四日經つても、まだ熱が下りずに、咳がつづいた。ぜいぜいいふのは喘息があり、咳が、切れないから苦しいのだと言つた。

それから二日經つた。樋口さんは頭をひねつた。

「本郷の寫野さんに診てもらつて下さい。どうも氣になりますから。」

樋口さんは「わしは他のお醫者と立ち會ふことは平氣です。わしばかりでは診られないところもあるから、却つて立ち會つてもらつた方があなた方がご安心でせうから。」と、わけもなく左ういふと、一向そんなことに關はらない顏をした。

「ではさういふことに願ひたいものです。」

無理もないことだと思ひ、すぐ寫野さんへ電話をかけ、看護婦にも來てもらふことにした。その晩から赤兒は、目に見えて苦しさうに、ぜいぜいやつた。「こんなことで死なせるものか。」といふ腹が引締つて私にあつた。

それに乳だけは順調に、さういふ苦しいなかでも飲んだので、その方で切りぬけられると思へた。けれども熱がしつこく降りなかつた。上る一方だつた。

寫野さんがくると、すぐ厚みにきせた着物をゆるめ、辛しの濕布を背中にした。が、十分もしたが反應がなかつた。わたしは、掌の上にある時計を見詰めた。三分經つた。からしを剝いでみると、赤い反應が皮膚の上に出て來た。

「これが出ないと、ちよいと困るんだ。」

寫野さんはかういふと、障子に布を覆ふこと、吸入は二タどころにやることなどを注意した。樋口さんは、七本目の注射を用意して立つてゐた。

「酸素饑餓といふ狀態ですな。」

寫野さんは、これだけ言ふと、無駄をいはずに、座を立たうとした。この人は技術で病氣に向ふ人だと思つた。樋口さんは情熱で病氣に對ふ人と思つた。

「大丈夫でせうか。ああも惡いとは氣がつかなかつたのです。」

私は新しく驚いて、寫野さんの少し氣取つたやうな、しかし自信の强い廣い額を見あげた。

「からしの反應が遲かつたからちよいと心配はしました。しかし手當に殘つてゐたものがありますから……。」

さういふと、すぐ歸つてしまつた。どこか重々しく一流の氣宇をもつてゐた。わたしは寫野さんに見てもらつたことを喜んだ。そして信じた。

吸入器を一つは伊織のおばさんが持ち、他の一つは車やの鈴木が水をさし、妻と看護婦が交る交る酸素吸入の口を向けた。炭火を起したりつぐために夏は忙しかつた。夜中に、も一人看護婦が來た。吸入の霧のなかで、赤兒はぜいぜい

苦しさうに空氣が足りなささうに喘いだ。わたしは病室と書齋とを行つたり來たりしながら、玄關の下駄を一ト隅によせたりするやうな、へんな眞似をした。

赤兒は、わたしも妻も茶目であるにかかはらず、黒いつやつやした瞳をしてゐた。それがなほつやつやしくセルロイドのやうに光つて、熱で、悲しさうに動いてみえた。

「しつかりしろ。死ぬには早いぞ。」

わたしはさういふと、赤兒の名をよんだ。あたりは吸入の霧で、ほとほと雫が天井から下ちてゐるやうな氣がした。糊のしめつた看護婦の白衣がしつとりしてゐた。妻の髪にも吸入の露があつた。みな勇ましさうに働いた。

「今夜のうちに熱を下げなければなりません。」

妻は、半分氣狂ひのやうになり、吸入が窒つたとか、炭が足りないとか言つた。實際今夜しくじつたら取り返しがつかないと、私も頭に熱がさして來た。

「三十八度に下つた、下つた。」

妻は、夜明方になり、さう叫びながら私の寐てゐるところへ來て言つた。わたしは飛び起き、赤兒の顔をさしのぞくと、やはり苦しさうにハアハア言つてゐる。

「この容子ですと朝までに、もつと下るでせう。」

看護婦が見當をつけ、私と妻とに安心をさせやうとした。が、酸素の鐵管のからばかりがたまり、もう次ぎの分がなかつた。

「困つた。宮川病院を起したらどうだ。」

すぐ近くに、去年私が入院したそれがあるので、夏が馳け出して行つた。
「起きなかつたら、石で門を叩け。」
さういふうちにも、酸素は全くきれ、きふに室內がその水を潜らせる音が絶えてしまつたので、ひつそりした、その寂そりした感じは、激しい不安を私に與へた。
「何をしてゐるんだらう。」
私は氣が氣でなかつた。「ちよいと行つて來る。」左ういふと、すぐ通りへ出、病院へ走つた。病院の白い門の前に、夜明けがたの白つぽい門がみえ、夏がぼんかり黒ずんで立つた。
「オイ。起きたか。」
近づくと私はさう叫んだ。
「ええ、いま開けてゐらつしやるところです。」
間もなく、ぎいと門の開く音がした。私は夏をそつち退けにし、酸素を貸してくれるやうに頼んだ。
「事務のものも居ないものですから。」
下働きが睡さうにさう云つて、すぐ出してくれさうもなかつた。
「酸素のあるところを知つてゐますか。君は。」
「ええ、そりや存じて居ります。」
「ぢや僕が持つて行く、さうして明日院長に話すから渡してくれたまへ。今はぐずぐず言つて居られないから。」
「困りますわ。そんなこと。」

「責任は僕が負ふ。早くして下さい。死にかかつてゐる病人があるんだ。」

私は、下働きが藥局へ這入ると、そこへも匆々しく這入りこんで、一本だけ手に抱へた。時計が寂しくなつてゐる。

「明日來て話するから。」

さういふと私はすぐ家へかへつた。門の前に看護婦が出て私のかへるのを待つた。みんなは景氣のよい音をきくと、ほつと一ト息ついた。

「なかなか起きて吳れないんですもの。」

夏は、ぶつぶつ言つてゐた。

夜が明けると、赤兒がすやすやと睡つてゐた。樋口さんが朝飯前にやつて來た。

「すこし熱は降つたやうだ。」

水銀を振りながら「赤兒はすぐ惡くなるんだから安心がならない。」と言つた。

「いつか僕らがあまり神經質過ぎるつて言つたぢやありませんか。」

「そんなことを言ひましたか、いや、それで赤兒の場合は結構ですよ。けれども何んでもないときに騷がれると困る。」

さういふと、おひるころに又來るからと言ひ、「此莉はぜひ分けて貰ひたいですな。」と夏に言つて出て行つた。

「氣さくないい人ですね。一日に三度も來て下さるんですよ。」

妻は、看護婦にさう話した。樋口さんとは私が田端へきて八年にもなる知合ひであつた。

翌日、爲野さんがやつて來ると、樋口さんに、藥の方のことを言ひ、

「もう取り止めたやうですね。」

さう靜かに言つた。危險期を越えてゐるとも言つた。が、まだまだ安心はできない、どういふ風にかわるかも知れないとも云つた。私は寫野さんを信じた。

「下手なことをやると、書かれるからな。」

さう樋口さんを振りかへつた。この前、やはり書きものをしてゐる人の子供を見、書かれたと言つた。

「醫者にだつてどうにもならない場合があるものですよ。」

私はそれに同感した。あんなに善くしてくれたのに、書くなぞとは私は思ひもよらなかつた。

醫者は、毎日、寫野さんと樋口さんとが立ち會つて呉れ、一週間目になつた。

「もう大丈夫だ。何しろ乳を飮むから都合がよい。」

寫野さんは、初めてハツキリと言つてくれ、私だちは安心した。看護婦も一人だけにした。氣がつくと、夏も妻もみんな一週間のまにすつかり憔悴れてしまつた。それでも妻は氣ばかり立つてゐた。

「一時どうなるかと思ひましたよ。やれやれ。」

妻は、やつと帶を解いてねむつた。その間ぢゆう私はひとりでゆつくり睡つてゐた。自分だけが安眠するのに氣がひけたが、おれは仕事はあるし、一ト晩でもねむらないと、すぐからだを遣られるからといふ口實をつくつた。「あなたは眠らないとあとあとに支へるから。」と、妻もさう言つて氣づかないでゐたが、あまり自分勝手でエゴイストで、きまりの惡い思ひを心に感じてゐた。

樋口さんは、やはり一日に三度づつ來てくれた。生れるとすぐ赤兒を見てゐた醫者は、よくこんなことを言つた。

「これまでに苦心してきたんだから、もしものことがあつてはあなた方に顏向けがなりませんからね。」

正直一圖で善良な樋口さんは、或る朝、晴れた座敷へこぼれる日ざしに、もうセルの服を着込んで茶をすすりながら、はればれした表情をした。

「こんどはいろいろどうも……。」

さう私はあいさつをした。

「たいがい寫野さんとも意見は同じかつたんですよ。あの方はなかなか目利きですからね。」

樋口さんは、さういふと立つて歸つて行つた。私は樋口さんのむしろ無邪氣なところを微笑んで味ふことができ、赤兒はすこしづつ笑ふやうになつた。

三

誕生月が過ぎても、まだ歯がでなかつたばかりでなく、這ふこともしなかつた。やつと抱き上げると、足に手を當てゝやると立てたのが、このごろになつて足を曲げ、觸ると痛さうに泣いた。

「この子はいつたいどうしたんでせうね。足が立たなくなつたの。見て下さい。」

さう言へば。足をくの字に曲げ、さわると泣いた。「ともかく寫野さんへ行つて見てもらふとよいな。」

「え、さうしませう。」

寫野から俥でかへると、妻は、青い顔をしてゐた。

「楽山堂病院の整形科へ紹介をかいてもらひましたの、寫野さんでも專門ちがひで分りかねるさうです。」

「楽山堂病院つて遠いんぢやないか。電車ぢやだめだし。」

「倖にします。」

「さう、ぢや行つてくるとよい。」

妻は、すぐ下町へでかけた。まだ、なほつたばかりなのに、あんなに連れてあるいてよいか知らと思へたが、あのままにして置けば足の方の病氣が固まつても困るといふ考へが私にあつた。歸へると、

「此子は神經が立つてゐて足の筋が一本引き釣つてゐるんださうです。マッサーヂするより外に治療の仕方がないつて、さうして頂いて參りました。まあ、隨分泣きましてね。」

「さうだらう、がこんな赤兒の足なんか揉んで、あとで何かにさわりはしないかな。門の前まで聞えるやうに泣いたりなぞしては、心臟にさわりはしないか。」

「それは大丈夫だと言つてゐました。病氣で泣くんぢやないつて——そして此歷に神經の立つてゐる子は珍らしいつて言ひましたよ。」

「さうか。」

私はしかし此梁山堂行きは、なんだか氣がすすまなかつた。が、もう療治にかかつてゐるのだから、それを歇めるわけに行かなかつたが、隔日に倖が門の前へ梶をおろし、赤兒を抱いた女の姿をみると、悒としい氣がした。わけても赤兒の泣きさけぶときは、可哀想な氣もした、

「けふは休んだらどうだ。風もすこし寒いし泣くから……。」

さう言つても、隔日だから一日遲れると、それだけ治療が遲れると言つて聞かなかつた。いつたいに赤兒に注射するときでも、女はそれを平氣な顏で眺め、かうすれば療るものだと信じてゐるらしかつた。が、私は注射のときは此間の大

患のときも、なるべく病室にゐないで書齋に座つて、その赤兒の泣聲がきふに苦痛のために止められ、戀て泣き出すときまで、あぶら汗が滲みながれたほど、赤兒の身になつて見て、ツラかつた。

「あんまり泣くものですから、よその病室からみんな集つてきて覗きにくるほどですよ。ほんとにこんな大きい聲を出す子はありません。」

病院からかへつた女は、いくらか足が樂になつたらしいと言つて、赤兒の足をみせた。わづかしかない肉附を揉むなんて、やはり私は信じかねた。

「いまに後悔することがあつても、おれは知らない。あそこへ連れてゆくのはどうも厭な氣がする。」

「だつて仕樣がありません。」

「全く仕樣がないことだ。」

私は默り込んでしまひ、室を立つた。赤兒はすこしづつ肉がついたやうにも見え、瘠せたやうにも見えた。食事をするとき、ああと言ひ、何かをつかまふとした。赤兒がそばへきてゐると、食事がウマかつた。自分のやうなものにもこんな子が生れたのだといふ、あたり前な考へが珍らしく、きめ細かい人間の内側のちからを感じた。

綠が深くなると、向ひの畫家のKさんの家でも、おとなりの早瀨さんでも、氣候が不順だからと、鎌倉と房州とへ子供をつれ轉地をした。どちらにも弱い子があつたが、それよりもずつと家の赤兒はよはかつた。さういふ隣近所のことを聞いただけでも、東京に居殘つてゐると病氣になりさうで心寂しかつた。

或晩、地震が來た。恐ろしい音が屋内をもんどり打つた。ちやうど茶をのんでゐたのだが、私は機械的に庭へ飛び出した。そこに石燈籠があつたので、寶笠が落ちはしないかと灰白い石を見詰めてゐた。

「あ、恐かつた。」

さういふ妻は、ちやんと赤兒を抱き、赤兒は、くろぐろした瞳をくらやみのなかにツヤ消しをした其光をふくみ浮してゐた。私はそのとき赤兒よりも自分がさきに飛び出したことに、自分自身を不愉快に感じた。

「思はず知らず抱いて出たんですよ。何も考へる間もないんですもの。」

妻は、しづまつた空に樹の尖端がまだ震へてゐるのを見ながらさう言つて、私が一人で飛び出したことを、べつに何とも言はなかつた。私は赤兒の瞳を見た。そしてやはり私自身をイヤな感じをもつて考へた。

「いやな氣もちだ。」

「どうして？」

「お前よりさきにあいつを抱いて出なかつたことが、イヤな氣もちだといふのだ。お前はなぜおれに抱いて下さいツて頼まなんだ。」

「そんな間なんてあるものですか。母親のそれが役目なんです。」

「それではお前だけの子か。」

私は負けたのを知りながら、どうも子供は生長するまで、母親のものらしく思へた。父親はそれを監視してゐるだけのものか、さうも考へられた。」

「自分がコワイからさきにあなたは飛び出した。」

「あ、飛び出した。」

「わたしはあとからコワかつたんですの。子どもを抱いて出たあとでね。」

「うむ。」

私は默つてしまつた。やはり凝り固まつた自分ばかりを考へてゐる私自身に、不愉快をかさねた。

樹の蒼みが深くなると、發育の遲れた赤兒を抱いた夏や妻が、よく庭へでてゐるとき、不思議に赤兒は、空の方をよく見詰めてゐた。そばへ寄つて透してみると、空ではない、樹でもない、何か木の葉が枝端れにひらひら舞ふてゐる一枚を、珍らしさうに眺めてゐるのだつた。

「お前をよく知つてゐるらしいが、どうもおれといふものを確かに知つてゐないらしい。つまりおれが父親だといふことを、さういふ意味をはなれてもお前とくらべると、赤兒は全で他人のやうな顏をしてみてゐるやうに思はれる。」

「さうでせうかしら、しかし能く知つてゐるらしいんですよ、ほら、お父さんですよ、分つて？」

女は、さう言つて赤兒をさしつけても、私より夏の方へ行かうとした。女は、なるべく私に馴染ませやうとしても、駄目だつた。しかし何處かに私を見る目と、よその人を見る目とに相違があつた。柔らかい馴れた視線があつた。

國から母親が來、二週間ばかりすると歸つた。その日、はじめて電車に乘せ、晩方上野まで行つたが、赤兒は電車の音や騷々しい人込みに怖れた。田端の靜かな家のまはりだけしか知らなかつた赤兒は、眼を閉め、ぴくぴくさせ、しまひに泣き出して了つた。刺戟が劇し過ぎるやうに思はれた。熱でも出ると大變だと思ひ、自働車ですぐ歸つた。

あくる日、樋口さんは、ちよいと風邪を胃いたのだと言ひ、その手當をしたが、「どうも弱い子ですね。上野まで出て、コレだから大變だ。」と云つた。赤兒といふものは、一週間病氣をすれば、一週間だけ發育が遲れるといふことを、話に出た。さういへば、うちの赤兒は、ふつうの赤兒よりか半年遲れてゐた。齒も出なかつたし、這ふことも、抱いて

も足が立たなかつた。が、私はその黒い瞳と、私に似もつかない美しい整ふた顔をしてゐるのが得意だつた。

田舎にゐる杉原といふ詩人も、もう父親になつてゐたが、やつて來ると、すぐ赤兒の綺麗をほめた。

「うちの子は色が黒くて、てんで話にならない、これは傑作だ。」

杉原が、さういふと私は、赤兒が私似であるか、それとも女に似てゐるかと尋ねて見た。

「奥さんに似てゐる。」と言つた。

「しかし半分くらゐ似てゐないか。」

「さういへば少し似てゐる。」

とも言つた。

實際赤兒の顔ほど、ふしぎに兩親の顔をうつし出してゐるものはなかつた。その表情の動きのなかにも、微かながら父母の何ものかが漂ふてゐるのだつた。さういふ判りきつたことを執念く私は私の心に對ひ、恐ろしいほど凝視するやうな氣もちだつた。

「こんど又できるんだ。こまつた。鬼灯の根でも飲まさうかと思ふんだ。」

「よせ、そんなことは！」

「でもおれは子どもといふものは、さう可愛くないんだ。少しも愛情がうつらないんだ。」

「どうしてだらう？。」

私には杉原のさういふ氣もちが分らなかつた。そのくせ彼れは子どものお弄品を街から包みにして持つて。いつも田舎へかへつた。

「第一技術がわるい——。」

美しいものに溺れる杉原は、さういふ單純なことにも、自分のすききらひを言ひ張つた。それにしても可愛くないなぞとは、どうしても思はれなかつた。

「抱いたりなんかするだらう。」

「それは抱いてもやるさ、しかしどうも君くらゐに愛情がおこらない。君はマルで夢中だ、悪黨のくせによく可愛がつてゐるから感心だ。」

杉原は斯ういふと、それが私だけの前でつくろつて言つてゐるのではないやうに思はれた。かれは優しい美しいものには、それと同じい柔らかい氣もちになることができたが、さうでないものには、かれらしい病的な悒としい氣分になるらしかつた。

が、赤兒は、一日づつ咳をしつづけた。それに喘息の氣もありさうであつたが、いつもの事で、氣にかけやうもなく、毎日、醫者は一度づつ來てくれた。玄關に靴音がし、そうしてすぐ樋口さんの白い夏服をみると、赤兒は、すぐ直覺的に泣き出した。

「どうも困るなア、さう嫌はれてしまつては！」

樋口さんはしまひに裏木戸からこつそり庭へ廻り、さうして

「どうですか、寝てゐますか。」と、こ聲でいひ光る夏服をみせまいとした。さういふ注意深いところも、何んだか私にはたいへん好ましかつた。

「目をさましてなさい」と、さうしてやつた。

「咳は……」

「ときどき出ます。それにぜいぜいやるんです。」

「咳がきれないんでせう。咳のきれる藥を上げませう。おや失禮。」

樋口さんは、さういふと又裏木戸からかへて行つた。――が、赤兒は、それから二日たつと、青いダルい顔をし、しきりに咳をしはじめた。

その朝、女は私の部屋へきて言つた。

「おとなりの早瀬の奥さんがね。どうも坊ちやんは百日咳らしいと言つて、いまのうちに注射をしておもらひなさい、さうでないと大事になるから……それに早瀬の御主人もやはり左うらしいつて、見るに見かねて、さし出がましいけれどもツて言つてゐらつしやいましたよ。さういへば、どうも左うらしうござんすね。」

早瀬さんとは、垣どなりで、よく聞くとやはり同じい鄕里の人だつた。それにもう三人も子供をそだてた經驗から、その注意は私の胸にぎくりと來た。

「どうも左うらしい。いいことを敎へてもらつた。」

私は感謝し、すぐ醫者に注射をしてもらつたが、「いまから百日咳になりかからうとしてゐるのだ。」と樋口も du野も言つてくれた。何となく大きい困難を前に拂つてしまつたやうで嬉しかつた。

が、どういふものか咳が發作的に來た。一日に一度づつくらゐに――しかしさういふことに馴れてゐるので、氣にしながらも、ただ服藥だけさせた　樋口さんも大したことではないと言つてゐた。しかし顔の色はだんだんに惡くなり、手足がよく冷え、すこしでも抱いてゐないと火のつくやうに泣き立つた。

或る朝、夏は赤兒を抱いたまゝ、これも顏色を變へながら言つた。

「いま大へん咳をなすつた、そしてからだをブルブル震はせなさるんですもの、びつくりしてしまひまして――。」

「ブルブル震はせた?。」

妻はすぐ抱きとつたが、しかし別にかはりはなかつた。あやして見ると微笑ひ、うゝと言つた。

「しかし顏色がわるいな。どうも氣になる青さだ。」

私は赤兒をさしのぞき、いくらか力なささうにしてゐる瞳の色を見た。何となく寂しい氣がした。赤兒のわるい顏色と、勢のない眼のいろは、いつも私にイヤな寂しい氣をおこさせた。それがいつもよりずつと變な氣にならせた。

「足をみろ。」

「冷えてゐます。けれどもほら微笑つてゐませう。」

「床にねかしてをいたらどう。」

「下に置くと泣き出すのです。泣くと咳が出てぜいぜい遣るんです。」

「困つたな。どうすればいいんだか。」

やはり抱いてゐるより外に仕方がなかつた。氣のせいか、脣の色まで、いつもより紅いところがなかつた。醫者は喘息の發作だと言ひ、實際それ以外に何等の微候とてはなかつたのである。

あやすと微笑ひ、山羊乳もいつもほど飲んだが、むやみに頭を振り、物憂さうにしてゐた。

或朝、妻は赤兒を抱き、書齋へはいつて來た。いつものことなので、机の上から、わるい顏をしてゐるのと、元氣のなささうなのを見た。

「豹。どうした。いいかげんに默つてくれないと、みんなが困るぜ。」
私は左う言ひ、立つて赤兒をあやさうとしたが、妻は、ふとこんなことを言つた。
「さんざん病氣をしたあげくに、この子は死ぬんぢやないでせうか。」
「さうお前は思ふか。」
「ええ、どうもそんな氣がしてなりませんの。」
私は默つてゐたが、「いまトラれてたまるか。」と少し腹立つやうな聲で言つた。コレまで育てて來て、死なせるなんてことが有り得ようかとも思つた。死んでも引き戻してやるとも言つたが、空疎なことを言つたので心寂しかつた。
「そんな考へをもたない方がよいよ、かうして、ほら、この通りにぴんぴんしてゐるんだから、なア、豹。」
私は、手をとつてみたとき、あまり冷たくなつてゐるのに、驚いた。足も、きのふよりも酷かつた。
「どうもおかしい、こんなに手足が冷えてゐる。」
「さうね、醫者を呼びにやりませうか。」
「すぐに呼ぶとよい、いや、おれが電話をかけに行つてくる。」
私はすぐ宮川病院へ、電話をかけに出かけた。電話をめつたにかけない私は、あはてて番號を間違はせ、うまく言ひ當てたときに、交換手が出るときふに番號が吃つて言へなかつた。さういふことを幾度も繰り返してゐるうち、ますます電話をかけ違へてしまつた。
「…………。」
默つてゐるうち、向ふではどんどん切つてしまつた。これでは遅れるばかりだと、すぐ家へかへり使を樋口さんへ出

した。午前一杯醫者はこなかつた。その間に二度發作があり、赤兒は、ああ……といふ咳のあと息をひいては苦しんで、濟むとハアハアと言つた。

「これはいけない。これは大ぶ變つてきたぞ。」

背中に私はぞくぞくした寒さを感じ、又使を出した。が出ちがつて來なかつた。手も足も冷たくなつた。しかしれいの黑い瞳はやはり靜かにちからない顔のなかで、くろぐろと光つてゐた。

「豹、豹。」

妻はうろうろした聲で呼んだ。

「早く醫者がきてくれるといいんだが……。」

そこへ樋口さんがきたが、大分長く考へてゐたが、

「心臓がわるくなつてゐる……こりや大變だ。」

さういふと、さつそく注射をし、「こんなになつてゐるとは知らなんだ。とにかく葛野さんに見せておく方がいいですね。」と言つた。

「わたしもさう思つてゐたんです。」

手賴りにならない氣がして、私は樋口さんをぼんやり眺めた。急にきたと云へば急だつたし、ゆつくり來たといへば、ずつとさきから此傾きがあつたのだ。が、私はいつもの發作だから大したことはあるまいと思つてゐた。

葛野さんの電話が通じないので、使を出したのが四時ころで、外出してゐて急の間にあはないらしかつた。私たちは苛々した。樋口さんも手のつけやうもないらしく、一ト先づ歸つて、電話で打合せをしてから、一しよに來ると云つ

た。

夕方、客があり話してゐると、妻は、私を呼んだ。その聲はいつもより逆つてゐるので、飛んで行つた。そのとき赤兒は、第三回目の劇しい咳と引息で驚のやうに泣いた。ガアガアアアと息をあえいだ。

「どんなに苦しいか知れない。」

私はひとり言をいひ、そして手のつけようもなかつた。

「醫者が來ない。困つた。」

私たちは、腹のなかまであぶらを流す思ひをつづけた。晩の八時になつた。何といふ變りやうであらう、赤兒は、もう床にはいつたまま、いつもさうする子でないのに、おとなしくぐつたりしてゐた。私はからだぢゆうの毛あなに、ぞくぞくする懸命な異體のわからない躊躇をかんじた。

「夏、表へ出て見ろ、俥が來ないか。」

夏はそとへ出たが、すぐ引きかへし、

「お見えになりません。」と、これも息を切らした。とにかくおれは落着いてゐなければいけない、さう心を引き締めた。

「大丈夫でせうか。」

「さあ。」

私はそれきり何も言はなかつた。

「潜りがあいた。醫者だ。」

さういふと、私はすぐ書斎へ行き、机のわきに落ちつき、どす黒い姿を凝り固まらせ、あはてたところを見せまいと、煙草に火をつけた。

高野さんへは、病状を話した。そして急にきたものらしいと附け加へ

「どうも手足が冷え、へんだと思つてゐたんですが。」と言つた。

高野さんは、私の説明をこの人がよくするやうに、考へ考へ、さうして大概の見當が頭でつきさうな時分に、ぢや一つ見ませうと立ち上つた。

高野さんは、すぐ看護婦に「今夜は卅分ごとに注射しなければいけない。」と言つたときに、樋口さんはそれを用意して一本打つたが、又一本打つた。そして高野さんは赤兒の頭の枕の下へ手を入れ、その頭を四寸ばかり高めた。

「辛しの濕布だ。それから湯たんぽで手と足を溫めるんだ。」

踏み込んでさういふと、辛しの濕布がきたが、布だつたので

「紙にするんだ。」と言つた。

赤兒はハアハア言ひ、くるしがつた。濕布をした。十分經つた。脈が腕の下までしか來ないで、手首は寂としてぴくともうごかなかつた。「手足が冷える冷えると思つてゐたが、やはりいけなかつたんだ。」と私は顫へながら思つた

「これは危ない！」

高野さんは、へいぜいとは違つた聲でさう樋口さんに言つた。赤兒の目が釣り出した。そして息がきこえなかつた。さういふうに音といふものがなかつた。

「お父さん、今ですよ。」と妻が言つた。

寫野さんが人工呼吸をやつた。汗とあぶらが赤兒の肌身と寫野さんの手のひらにねちやついた。私は生れてはじめて人工呼吸を見たので、それでなくとも、ああすれば助かる助かると思つた。

「樋口君、かはつてくれたまへ。」

さう寫野さんが言つたときには、妻は泣き出した。寫野さんは赤兒の瞼をめくり、電燈をよせて見た。あんなに電燈の光をよせたらまぶしいだらうと私はふと思ふた。それと同時にこの子のくろぐろした瞳は見おさめであつた。部屋の隅で、夏が泣き出した。聲を擧げしばらく妻も泣きやまなかつた。

「お父さん、最ういちど抱いてやつてください。」

ぼんやりしてゐる私に、目を閉ぢた子を妻はわたさうとした。

「あ、抱いてやるとも。」

さう言つた私は、抱き取ると、頭がぐなぐなになつて、重かつた。もつと靜かに抱けばよいと思つてゐるうち、全く死んだなと思つた。それまで私は何といふ呆やりした、うつつけた氣持ちでゐたことであらう。――こんどは、床の上にそつと置いた。

「どうかあちらへ。」

私は書齋へ二人の醫者をあんないした。樋口さんは泣いた目をしてゐた。あれほど長い間診てゐてくれたのだからと、さういふことも嬉しかつた。

「どうも惜しいことをしました。」

寫野さんは、鞄を手にとりながら言つた。

「たびたびお世話になりました。」

妻もそこへ出て挨拶をした。玄關へ醫者を送ると、靜かに俥に乘るけはひがした。何も尋ねるな、左う考へた。

「わたしもう御用事がございませんから。」

看護婦もかへつた。醫者がきて四十分して赤兒が死んだのだ。

赤兒の顏の上に淸い布が掛けられた。それを見い見い、やはり死んだかと、信じかねた。

「今死なうとする赤兒に灌腸するのはよくないぢやないか。あのとき呼吸が上の方へグッと詰つたやうな氣がした。私はあきらめ兼ねてさう妻に言つた。

「いゝえ、ああして助かることがあるのです。わるいことはなかつたのです。」

妻は、醫者のしたことの、最も正しいことであることを言つた。私は默り込んだ。が、死兒をみると、どうも諦めかねた。怨むまいと思ふが怨むぞと、さう誰に向つてか絕えずつぶやいてゐる、あさましい私自身をどうすることもできなかつた。

四

初めての經驗で何からしてよいか分らなかつたが、隣の早瀨さんや根岸のおばさんなぞが來てくれ、車やさんと、植木とが使あるきとお葬ひの手配りをしてくれた。

棺に入れるとき、私達ちはもう一度抱いてやつたが、やや硬張つたそのからだを持ち、閉ぢられた眼をみてゐると、まだすやすやと睡つてゐるやうに思はれた。が、ふしぎなことには、その死顏がやや暗色をおびてゐるせいか、一つば

かり急な時間のあひだに歳をとつてゐるやうに、マセて見えた。死兒といふものは、こんなに歳とつて見せるものかとも思はれた。

「靴下もいれてやりませう、それから帽子も、おもちやも。」

まだ一度も穿いたことのない毛糸の靴下をはかせ、入れられるだけのお葬品を入れた。笛も太皷も入れた。

どれを見ても女達は泣いた。私はすこし變な氣がしてくると、卷煙草を口に啣へた。歯の間がすくと息がぬけるので、涙ぐむやうなことがなかつた。――墓地は、田端の大龍寺にした。子規の墓があり靜かだつたし、近くてをりをり行けるやうな氣がしたからである

「あそこならおれも埋められてもよい。」さう言ひ、妻にイヤがられた。――晴れた翌朝私だけ家にのこり、友人も澤山行つて葬ひが濟んだ晩、國から妻の姉が來た。

火葬には、私、妻、早瀬のおくさん、妻の姉、夏なぞが行つた。三河島の河ぶちの暗い溝水に沿ひ、俥が走つた。猫入らずの製造所の板塀にそれの廣告文字のかかれてゐるのが、目を惹いた。

骨はかなりな量があつた。銀杏の實のやうな膝がしらや、パイプのやうな細い足の骨などが、竹箸のさきに觸れた。眼を泣き腫らせた妻は、箸のさきに小さい固いものを引つかけながら

「歯が出ない出ないと言つてゐたのに、ほら、こんなに揃つてゐる。」

さう言ひ、それを拾ひはじめた。

「はぐきの中に埋つてゐた歯は燒いても碎れないんです。」

隠亡は、自分でも馴れた手付で、それの幾つかを拾つた。「歯がないないつて言つてゐたのに。」女はそればかり言ひ、

はぐきを破つて出るちからがなかつたのだと、口惜しさうに繰りかへした。小さい素燒の壺に入れ、みんなは又俥に乘つた。

道路の曲り角に、床屋の白服をきた若者が、黒いものを棒のさきで衝ツつきながら、折柄正面からきた駄馬の轍に轢かさうとした。輪はごつとりと小石を乘り上げ、それを辷らうとしたときに、若者は小さい黒いものをひよいと棒切れで追つた。が、黒い小さい生きものは、そのはずみに二三寸ばかり先きへ走つたあとへ、輪がひと廻りし、私の俥が通つたのである。鼠はうまく生きのがれ、何となく私はやすらかな心地がした。

「イヤな事をする。」

しばらく白い乾いた道路に震えてゐる影が目を去らずにゐて、不愉快だつた。

私だちは毎日ぼんやりして、女は女で何をするにも元氣のない顏をしてゐた。子守唄が一年ばかりつづいたあとで、その日から絕えてしまつたので、これも家をひつそりさせるに充分だつた。同じことを繰り返し、あきらめかねてゐた。

或朝、私は門の前へ出ると、そこに早瀨さんの三人の子供があそんでゐた。「ちよいと入らつしやい、抱いてあげるから。」さう四つの女の子にいふと、はづかしさうに垣根にからだを擦りよせ躊躇つたが、思ひ切つたやうに走つて來た。

「なかなか重いな。つぎはあなただ。」

その上の子も、妹のやうにしなを作つたが、さうされるのが嬉しいのか、これも走つてきて抱かれた。

「こんどは兄さんの方だ。」

一番兄は七つだつた。重かつた。と、きふにそんな事をしてゐるまに、私はむやみに悲しくなつて來て、潜り門から

家へ飛び込んだ。何といふ寂しい氣もちだか。――そしてしばらくその氣もちが離れなかつた妻は妻で、「よその子さへみれば「あゝしてみんな達者なのに自宅の子だけどうしてあんなに弱かつたのでせう。」と、口說いた。

「おれはよその子をみても、あれは餘所の子でおれの子ぢやないと思ふと、何んでもなくなるのだ。」

さう私は言つたが、やはりそればかりでない氣もした。そして童話など書くことを賴まれると、よその子の書ぶものなぞ書いてゐられるかとも、あさましく腹立たしかつた。二人とも、ひまさへあれば溜息をついた。

「何も面白くない。」

女は女でさう言ひ、朝早く大龍寺へ參りにでかけた。「何が面白いことがあるものか。」私は不氣嫌に每日ぼんやり暮した。――或る知人に七人の子供があつたのに、長女をこの春亡くした。すると或る人が、「君は七人もあるんだから一人くらゐ亡くしても關はないだらう。」と言つた。するとその知人は「七人もあるからなほその一人を缺かしたくないのだ。」と言つたさうだ。私はそれの心もちが分つた。

坂の上にゐる或る彫刻をやる知り合ひが、ぼんやりうつけ者のやうに夕方あるいてゐる私にから言つた。

「またコサへるさ。」

私はあたまがぐらぐらし、やつと口がきけたくらゐだつた。

「あのとほりの顏がまたと生れてくるとでも君は思つてゐるのか。」

さういふと此男の子どもも、何かのついでに死んでくれればよいとまで、その瞬間にかつとした。さうなればこんな不用意な口をきくまいと思はれたからである。「またおあとがあるだらうから……」さういふ風に言はれると私はさびし

く默つた。しかしあの通りの顏は世界ぢゆうに一人もないぞといふ氣がした。

妻が寺參りにでかけると、簞笥の曳出しのそばへ私はしばしば行かうとしては、ふいに立ち停まりあたりを見廻した。やはり靜かな庭樹のかげが、障子に映り誰もゐる筈はなかつた。が、その白みある明るい光では、よく赤兒がしてゐた木枕のぴちやぴちやする音が、私の耳にきこえた。

「おれはいつたい何しにここへやつて來たのだつたか。」

私はひとりで呟やくと、曳出しの鍵に手をかけようとした。鍵は別の曳出しから取り出し、ひと廻りさせ、がつちりと開けたのである。そして私は手早くいろいろな品物や書類の累なつてゐる中から、手ざわりの角の荒い寫眞をつまみ出し、それを懷中にしまひ曳出しをしめた。さういふ感情には絕對にそれを人目にふれさせまいとする注意深さと、自分がさうすることによつて妙な感情になるまいとする努力とが打ち合つた。も一つは、そんなことをする詰らなさがたとへ人目にふれずにゐても自分の心になにか羞かしさうな妙にものに衒ふやうなうす拵さとが、かさなり合ふのだつた。そして私はどかりとあぐらを組み、それを開いては眺めた。靜かで快よい氣もちがした。よく泣いたとき煩さいと言ひ叱つてみたりしたことが、人並みにあんなに言ふんぢやなかつたともツイ思ひ出された。誰でもみんなが持つ稚ない感情がどやどやと足音をさせ、しばらく私をとりかこんでくるのが、何より嬉しかつた。

私は間もなく寫眞をしまひ込み、鍵をかけ室を出た。さういふ、つまらない事をしたあとで、きふに蜂に刺されたやうに悲しくなつて了つた。そこらの疊をがりがり引搔き、どこか遠いところを呼んだら、何かが戻つて來さうな氣がした。あゝ耐らないといふ氣がした。あのときどうにかならなかつたものかと、とも思ひ、もつとさきに醫者がきてくればよかつたのに、さうしてそれを氣ずかずに居たのは何といふ馬鹿だつたらうと、わたしは文字通り疊をがりがりや

つた。怨むまいと思ふが怨むぞと。頭があつくなり、かつとして氣でも狂ひさうになつた。
「この容子だとおれ自身あぶないぞ。」
さういふ氣もした。
お寺から妻がかへつて來ると、座つてから言つた。
「白いお骨の壺が三つならんでゐたので、尋ねると去年の秋から順繰りに三人の子供が死んだ家があるんださうです。二人目からそのおくさんがすこしづつ氣がへんになり、三人目が死んだときは、全く氣がフレてしまつて、とうたう此間田端の腦病院に入つたんですつて。何といふ話でせう。」
私は默つてきいてゐたが、そんなに死れては氣が違ふのも當り前のやうに思はれ、ならないのが不自然なやうに思はれた。すくなくとも左ういふ女はずうずうしいとも考へられた。
「最もな話だ。おれにしても少しはへんになる。」
妻は、しばらくしてから、又ぼんやり部屋へはいつて來、何もいはずにうろうろしてゐた。そして
「子守唄もうたへないし……。」
ぽつんとそんなことをいふ。
「何をつまらないことをいふんだ。……寫眞はちやんと封をしてをいたよ。見るとおたがひにいけないから。」
「え、見ませんとも、見たらそれこそ大へんです。」
實際、女はまだ一度も見ないらしかつた。私がそれを好んで見、女はなるべく見ないやうにしてゐるお互ひの氣もちが、どういふ風にそれをべつべつに考へ違つてゐるのかと、をりをり私は考へた。が、どこまで孰らが眞實であるかが分

り兼ねるやうな氣がした。——ぼんやり食事をしてゐると、何かを考へ出し、それをお互ひに悟られまいとするやうなことが多く、箸をもつたまま眼で庭をさぐり合ふことがあつた。さういふとき不思議にわづかの間に遠い笛の音色をそらんじ、それの消えてゆく尾について哀愁が起つた。さまざまな音色の笛がいつも赤兒の枕もとにおいてあつたから、それが何處からか起つてくるやうな氣がした。

ちいちやい童子はいつも一人で歩き、持ちきれぬほど色彩のはげしい笛や太鼓や兎や犬を抱へ、菅で編んだ笠をかたり、足にはおぼえのある毛糸の靴下をはいてゐた。靴下はだいぶ擦り切れてゐるのを見ると、よほど歩いたものらしく思はれた。くろぐろした瞳はやはり力なかつたが、その働きは四年も五年も一時に歳をとつてゐるやうな、濃い悲しさうな色をたたへてゐたのである。

「お前は左うして歩きつづめてゐるが、いつたいどこへ出かけて行くんだね。どんなところにあてがあるんだ。」

私は童子に近より、そのあたまに手を置いたが、童子は私の目をながい間ながめ、さうして始めて和やかに微笑つて私の手にその手を結びつけ幾度か逡巡らひいくらか羞かしさうに口のうちで「お父さん」とさう呼びかけた。

「あてがないけれど、やはり此處ではぢつとしてゐたより歩いた方がいいの。何がなし一日かうして歩いては少しづつ行くんだけれど、さつぱり分らない。」

「お前とおれのゐるところは、よほど遠いやうな氣がするね。おとうさんにはよくお前の顏がわかるが、そのやうにお前にもよくおれの顏がわかるかね。ほんとにお前は其處にゐるんだけれどね。」

童子は、まだ新らしい背笠をちよいと傾け、そして小さい美しい荷物を石塊の上にそつと置いた。

「ええ、わたしにもよく分りますが、しかしおとうさんの向ひに誰かゐるのか、よくここからは見えないのです。」

「あれはお前のおかあさんさ。よくないね、もう忘れてしまつては?」

「いえ、ここからはよく見えない、聲だけはするけれど。」

童子は、しばらくすると又あるき出して、荷物をかついで、寂しい足音を立てて行くのである。

「もう少し話したらどうだね。お前のやうにそんなにせかせかして行かなくともよいではないか。」

「あなただちは左うしてご飯をたべて居らつしやればいいのです、ですけれど此處ではさういふ暢氣なことをしてゐられないのです。」

「なぜだ。」

「なぜでもあなた方とわたくしとはもう別なものですから。」

童子は、すたすた歩き出し、あとをも振りかへらうとしなかつた。私は目をすえ、見送つてゐるうち、庭のあたりでこのごろ飼つた河鹿がしめやかに啼いた。

「啼きましたね。」

「ア、啼いた。」

私はふと思ひかへしたやうに、女が箸を下にをかうとするときに言つた。

「あの子が死ぬ前の日に、(さんざんこの子は病氣してからわるくなるんぢやないか。)と言つたね。なぜああいふことを言つたのだ。あれは言ひあてたやうなものだ。」

「でもあのときは怎うもあんな氣がしてならなかつたのです。言つちやわるかつたか知ら。」

「惡るかつた。へんにあの言葉があたまに殘つてゐていけない。」

二人はまた默つてしまつた。食事はすんだが話をするでもなし、しないでもなしと云ふやうな時間がみごもるやうに重くるしくなつて來てゐた。……私はそれがほとんど隨所で全くフイにいつでも歩いてゐる童子の、定まらない足もとを見ることができた。机のわきでも電車に乘つてゐるときも、さうして外からかへつてきたときに出てくる女の肩の上にも、晩はわたしのすぐそばにも睡つてゐるやうに思はれた。

それが何事にもそのやうであるやうに、私はこころでいつもきれぎれな話をせずにゐられなかつた。も一つは日を經るにしたがつて童子は四歲にも五歲にもなり、唇もとが締まつて耳にも紅みがよけいにさして來たのである。さういふ歲をとつてゆく童子の顏は、やはり不良い蒼い色はしてゐたが、したしさうによく綻して微笑つたときそのままな姿でゐたのである。わけても鳥籠の下に、いつも妻や夏に抱かれては覗いてゐるだやうに、私は机のわきから立つて、よくその赤い朱塗りの鳥籠をのぞいた。そこに小鳥のために入れられた水壺が、わづかばかり冷たさうな色をたたへ、そらのうすい色をうつしてゐた。それを私と同じいやうに童子の顏がさしのぞき、すばやい小鳥の羽搔きをながめてゐた。

「あれからお父さんはいつもかういふ工合にすはり、さていつも元氣のないかほで何から何まで厭になつてしまつたのさ、しかし段々考へるとお前はさきに死んでしまつて或ひはひよつとするとよかつたかも知れない……。」

そりやおとうさんのやうに長く生きてゐるうちには、さまざまな面白いこともあるが、それさへあの笛の音いろのやうに――(おまへは笛がよく鳴るかはりにすぐ消えやんでしまふことはよく知つてゐるだらうね)――すぐあともなくなり、次から次へとつまらないことばかりが、さういふことを書いてある大きな書物があるとすれば、それと同じいことばかりを繰りかへしてゐるやうなものだ。だからお前があのやうに花につつまれて死んでしまつたことが、お前のきらひなことに會はずにしまつたやうな仕合せをも感じられるかも知れない。

「それともお前はやはりお父さんのやうにいろいろなことを罵たりされたりすることがよかつたかも知れない。イヤなことでも知らないでゐるより知つてゐた方がよいかもしれない。そこまでゆくとどう言つていいか分らないくらいだよ、お父さんはできるだけのことをしたが、おまへのからだが弱かつた。しかしあのときもつと早くおまへをどうにかすれば……」

さうすれば、お前はさういふ姿で、そんなにまで悲しさうな顔をしなくともよかつたかも知れない、どこにゐるかさつぱり判らないやうなお前にしなくともよかつかも知れない、私がわかるつたかもしれない、しかしどうにもならないことだ。おとうさんも一度は生みつけたものを怨んだときがある。そのやうにお前もそれを考へてゐるかもしれない。

私はしばらくすると私自身の腹の中に窃と聞耳を立てるやうに、何かをさぐりながら聞かうとした。

「おれはまた下らないことを喋り出した。おれはへんに悒々し出してしまつてしまひにへんになるかも知れない。」

私は小鳥の額を見上げた。ツイツイと止り木を移つてゐる間に、うすうすその顔が目についた。

「オイ、あそこに、ああいふふうにも一人だれかが覗きこんでゐる奴がある。ツイツイとうごいてゐる奴のそばに、も一人、たしかに覗いてゐるものがある。」

女はうしろ向きに、次の竹窓を隔てて疊の上に、何かに讀みふけつてゐるらしく見えた。

「鳥籠にですか、鳥籠はけふはどこへ出てゐるのでせう。

「座敷の軒だ。」

「誰もゐない、ほんとに見えはしませんの。」

「ほら、その、鳥かげだ、すうつと映つてくる。」

女は、佇つたまま、眼を凝らしてゐたが、すぐに脆く泪ぐんだ。そしてなほ飽かずに鳥籠を見つめてゐたが、「此處の家はもう厭ですから越してしまひませうか。」と心からさう言つた。

「何處へ行つたつて面白くもおかしくもない世の中だ。つづめていへばイヤなことばかりだ。」

私はさういふと、ぐつたりと跪座を組み、さういふとき吐息をすると、それなりからだのちからが抜けてしまふやうな氣がするやうに、だらりとしてしまつた。がつかりして俯向いてゐたが、何も彼も詰らない、くさくさした氣になつて仕方がなかつた。起きるのも寝るもの、さうして、かうして座つてゐるのさへ厭だつた「おれはおれ自身をどうしていいのかさへ分らない。何て忿屈で不愉快なダラけた氣もちだらう。」と思へた。

「おれはちよいと醫者のところへ行つて見ようと思ふんだ。まだ尋ねたいこともあり、だいいち、あれがどんな原因で死んだかといふことをも聞いてみたいやうな氣がするから。」

私は考へ考へゐるうち、ふとずつと先きから、執拗く心にねばりついてゐることを、そつと落ちついて、女に、さう大事でないやうに云つた。

「だつて今さらそんなことを言つたつて、どうにもならないことだし……だしぬけにそんなことを言つて行くものぢやありませんわ。」

「どうにもならないことだが……だが、あのときそれを聞くことを忘れた。大事なことだ。」

どういふことが原因で、そして私どもも爲るべきことをどれだけ手ぬかりしたか、ああいふ風にしてゐたらあんな事にならなかつたとか、さういふ取り返しのつかない又た氣のつかないことを、今になつてそれを知らうとすることは、何となく死兒へ挨拶をしたやうな氣もするし、私だちの心もちをも和らげることができさうに思へた。

「うつちやつて置けば、それなりで忘れてしまふ。忘れてしまへばなほ取り返しがつかない。」

さうも考へたが、わざわざ私が醫者のところまで行き、肩の凝るやうな氣もちでそれを尋ねることを考へ出すと、やはり鬱陶しい氣がした。

「やはり行かないでゐる方がよいかな。さういふことは尋ねるものでないかも知れない。向ふにしたつて尋ねて行つたらどんなにばかばかしく考へるかも知れない。しかしまだ何となく私だちと醫者とにつながつてゐるものがある……。」

それは向ふにないかも知れない、しかし正直に私にわだかまつてゐるものが、凝らずゆるまずに殘つてゐるのはどうすることもできない。

「却つて微笑はれるくらいですよ、あの子はああいふ弱い子だつたのですから、いまさら何と言つたつて――」

「何と言つたつて爲様がない、ないがしつこくおれは何もかも瞭然と頭にイリかねるのだ。」

さう言ひかけ、私はばかばかしく死を疑ふ、どんな人間の頭になつてゐるのに、ふと氣がついた。「おれはおれ自身で諦らめきれないで、逃げ道ばかりを搜してゐるのだ。醫者にしろ誰にしろ何を知つてゐるものか。おれさへ何かに觸ればそれにくツつかうとしてゐるのに、おれはなんだか少し卑怯になつてゐる。」私はさう思ふと、すこし肩がかるくなるやうな氣がした。

「初めつからかうなつてゐるのかも知れない。さうしてだんだん日が經つと私もしまひにはけろりとしてしまふのだ。人間らしく忘れてしまふかも知れない。」

さう思ふと心が輕くなつたが、消炭のやうにうすい不愉快さが、かげのやうに映つて來た。が不思議にそのかげはあさのある肌のやうに消えやうとしなかつた。

――をはり――



馬鹿の清吉

正宗白鳥

（一）

兄の口から屡々「馬鹿」と叱付けられ、世間の人の陰口に「間抜け」「三分足らず」と、綽名のやうに呼ばれてゐる清吉も、自分では一ぱし利口者のつもりで、をり／＼は、世間の奴等こそ、三分足らず五分足らずの馬鹿者揃ひだと、腹の中でひそかに晒つてゐたのであつたが、この頃はおれも馬鹿だなあと、人知れず歎息するやうになつた。

「どうしてくれべい？」

彼れは、炭の俵や石炭の叺を肩にかついで、買主へ届けに行く間でさへ、屡々考へた。しかし、どう考へてもいゝ知慧は出なかつた。

「おらはこの上齷齪して儲錢けしようとは思つてゐねえ。兄貴や元造のやうに剛慾の皮を突張つて、紙幣を溜込まうとは思つてゐねえ。おらは腹一杯喰つて、たまに五勺

か一合の酒を飲んで、眠たいだけ眠られゝば、それでいゝやうなものだ。今日の食扶持に不自由しねえのに、五體を痛めて働かされるのはいやなことだ。……だけど、おらにも大望が一つあるだ。どうかして石村さんの女中のおふみどんと一緒に暮して見ていと、おらは寢ても醒めてもこの頃は思續けて居る。おらもこれだけは諦められねえ。なあに諦めるには及ばねえ、自分でそれを望むのなら、知慧づくでゞも力づくでゞも、望みを遂げたらいゝぢやないか。……肥つちよで首が短くつて碌な容色でもないくせに、自分ほどの別嬪さんはあるまいといふ様子をして、出入の商人に口を利くのも横柄だと、皆んながくさしてるが、あの女もおらには柔しい。おらが世間話をすると、面白がつて、何時までもお相手をして悦しがつてるだ。それで、肥つちよでも首が短くつても、おら、おふみさんが好きで〳〵溜んなくなつてゐだから、爲様があるめえ。頭の髮の毛一本でも、おふみどんの身體についてたものなら、おらはおろそかにやしねえつもりだ。この近所ぢや、依田さんの奥様が美しいと、お安や何かゞ云つてゐるが、世間の皆んなの目にやさう見えるんか知らないが、おらはおふみさんほどおらの氣に入つた女を、生れてからまだ見たことはねえ。……おらがさう思つてゐることを、お安の奴、この頃はたしかに勘付いてやがる。こいつ何よりも困りものだ。……さて、どうしべい。おら、おふみさんの事を考へて樂んだ揚句に、安の目付を見ると、生きる瀬のねえやうに情けなくなつちまふだ。あれがピンシヤン生きてゐておらの側にへばりついてゐちや、おらは手も足も出せねえ。おらは鳥黐についた蠅見たいなものだな。……安はおらの腹の中をよく見透しやがる。兄貴に比べておらが馬鹿でねえことを、安だけはよく知つてゐるんだが、知つてるのが却つていけねえ。何事もあいつに容をつかつて秘密にしとく譯にや行かねえとすりや、おふみさんをおらの者にするのには、先づお安を何とか片付けとかさなるめえが、手際よくうまくやるにはおらの知慧では及びもつかねえ。難題をつけて喧嘩を吹掛けたつて、おら達夫婦ちうものは、おん出ろ、出ねえでかと、手取り早く事が濟まねえか

ら駄目だ。……三年前に、おら、ちよつとした出來心の悪戯した時にも、お安めひとりで騒ぎやがつたが、海へ飛込みもしなければ、汽車に轢かれに行きもしなかつた。……」

清吉が、石榴の枝が竹垣の外に喰出てゐるある別莊の裏通りの小徑に蹲んで、炭いぢりしたゝめに黒く汚れてゐる顔を、涼しい風に吹かれながら、此間中から始終考へてゐたことを繰返してゐるところへ、別莊番の老人が、箒を手にしたまゝ、庭木戸を開けて顔を出して、

「清さんかい。そこで何をしてゐなさる？　雨が上つたら急に暑くなつたぢやないか」と云つて、胡散くさい目を向けた。

清吉はふと自分の胸に浮んで來た恐ろしい企てを、他人に氣取られるのを恐れたやうに、キヨト／＼した目で老人を見上げて、

「おら、今山の手の御別莊へ品物を屆けて來たのだよ。今日の仕事はこれでおしまひだから、此處で一休みしてるだ。山の手へ二三度行つて來ると身體が弱つて、おら直ぐ眠くなつてなんねえ。」

「おや、此方へ入つて寢て行きなさい。明日の晩に、お上がゐらつしやると云ふ報知があつたから、昨日から大掃除をやらかして、おれは背つ節が挫けるやうに疲れたゞ。あらましおれの役目は濟ましたから、これから一服やつて、風呂へ入りに行かうと思つてゐたところさ。

「此處の人はもう來るのかね。今年はえらく早いぢやないか」

清吉は入るともなく庭へ入つて、綺麗に掃除された芝生の青々とした廣い庭を眺めながら、緣側に腰を掛けた。大きな黒い蝶が芝生の上を飛んでゐた。老人は手を洗つて、煙草入を持つて來て、清吉に並んで坐つたが、ふと思出し笑ひ

を浮べた。二人は暫くの間口を利かないで、煙草を吸ひながら、自分々々の思ひに耽つてゐた。烈しい日が灰色の雲に蔽はれたり、楓の葉が風もないのに二三片落ちたりした。

「淸さん、あの女がまた伊勢原へ歸つて來たちうだよ。お前知つてるだらうな」と、暫くして老人が云つた。

「知らねえ。」淸吉はあの女なぞと思つて、叩付けるやうに云つた。

「東京へ行つてもいゝ事がなかつたのか、十日ほど前に歸つて來たさうだ。山へ炭を仕入れに行く時に、次手に樣子を見て來なされ。あの女はお前のことを忘れてやすまいよ。」

「先方はどうだらうとも、おら、あの女にやもう關合ひはねえだ。」

「でも、あの女は隨分容色がいゝぢやないか。それに淸さんにやゾッコン惚れてるといふことだからの。お前も邪慳にや出來まい。それとも、主婦さんが怖くなつたのかい。」

「何とでも云ふがいゝや」淸吉は薄笑ひをした。

「淸さんは男つ振りがいゝから、いろんな女に思ひつかれてゐるんだよ。おれの知つてるだけでも、この近所でお前におつ惚れてる女は三人や五人ぢやねえ。……これは秘密の話だが、此家の奧樣も、炭屋の弟の方はこの邊の生れにしては珍らしい目鼻立の立派ないゝ男だと云つてゐなすつたよ。他所の奧樣がさう云つたのなら何でもないが、此家のは目く付なんだからね」

「年齢はいくつだか知らんが、綺麗な女だね。元は藝者だつたさうだな」

「藝者も藝者も、たゞの藝者ぢやない。此家の旦那に大金を出させて素人になつて、御大家の奧樣になり切つてからも、ぺた矢鱈に情人を拵えるんだつてよ。旦那が二本棒だから、今まで追出されないでゐるんだが、傍の者は齒痒くつてた

ちんと云つてゐる。……だけど清さん。おれが思ふのに、身持が悪いの、道に外れたのと世間の口が煩く云つたつても、あのくらゐな綺麗な女に思はれて、三日でも五日でも可愛がられゝば、男として本望ぢやないかの。あのくらゐな綺麗な女の口から、立派ないゝ男だと云はれたゞけでも、悪い氣持はしまい。世の中の面白い瀬戸を詰らなく通越した老人のおれでさへ、さう思ふのだが、お前はさうは思はないかい。女ばかりぢやない、男だつても、清さんのやうに容色よしに生れたのは幸福なんだよ。面白いことが手招きして待つてるのに、知らん顔して、眞黒になつて働いてるうちに、お前もおれのやうな皺くちやになつちまふぜ」

「おら、皺くちやになるまで齷齪働く氣はねえや」

清吉はこの老人の言葉を快く聽いた。そして、自分の容貌についても自惚れたくなるとゝもに、かういふ立派な鼻や口が炭の粉で汚れてゐるのを氣にしだした。

「此家の奥様は別嬪さんにやちげへねえが、おら、あんな女は好かねえ」

「ホウ。清さんは此家の奥様に惚れられても悦しくないといふのかい。伊勢原の女も今はいやになつたといふのだし。ぢや、清さんの氣に入つたいゝ女は主婦さんの外にやないんだね。それは何よりだ。それほど結構なことはありやしない。それでこそ世の中は立つて行くんだ」

老人は勿體振つて獨合點をしてゐたが、清吉はさも侮辱を受けたやうに氣色ばんで、

「嚊あが何だな。あんな奴〳〵」と、憎さげに云つた。

「ハヽヽ。さうケナすものぢやないよ。清さんの主婦さんは實際働き者だ。あんな主婦を持つてれば、どんなに家の爲めになるか知れたものぢやない。子供はないし、夫婦で黒くなつて稼ぐんだもの。身代の伸るのはあたりまへだ。」

「自分で働くのは勝手だが、おらまで追立てるやうにして働かせるのは迷惑だ。おら、戸外へ出ると、家へけへるのはいやでなんねえ」

「みんなお前を思へばこそだよ。この近所の女を見ねえな。今日の生活も樂でないくせに、白粉塗りこくることに夢中になつて、身裄も知らないで、別莊の人の眞似をしたがつたり、琴のお稽古や生花のお稽古をしてお上品を氣取つたりしてるのに、お前とこの主婦さんばかりは心掛けがちがふ。內輪は豐かであるのに、上べの綺麗事に浮身を窶すつていふ風は微塵もないぢやないかな。若い時に働けるだけ働いて、歳を取つて樂をしようつていふ腹なんだらうが、そこは感心だ。若いうちはなか〳〵あゝは行かないものだよ」

老人は煙管を仕舞つて緣側を離れたが、淸吉はまだ家へ歸る氣にはなれなかつたので、

「今日はいゝ天手だ。おらにこの御別莊のなかを見せて吳んねえか。上へ上つて、お座敷をよく見ちやいけねえか」と云ふと、

「お前のこつた。勝手に上つて見なさい。折角掃除したばかりだから、足あとをつけたり、そこらへ手を觸つて汚したりしなければいゝだよ」

「おら、まだ何處の御別莊もしみ〴〵拜見したことがないんだでな」

淸吉は裏へ廻つて、井戶端で顏を洗ひ足を拭つて、臺所から上つた。大切な家財調度は藏の中に收められてゐるので、彼れの目を驚かすやうな物は出てゐなかつたが、座敷の中に立ちつ坐りつしてあたりを見ると、自分が一段上の人間になつたやうな氣がした。こんな所で晝寢したらいゝ氣持だらうと思はれた。よく拭込んである廊下を素足で踏む氣持もよかつた。彼れは二階へ上つて、松原越しに海を眺めたり、山の手の靑葉の中の別莊を見渡したりしたが、見馴れてゐる

土地でも、他郷の景色を見てゐるやうに珍らしかつた。

彼れは襖を開けて、廊下を隔てた北向きの、外の座敷とは別になつてゐる部屋を覗いた。そこには大きな道具が据えられてあつたので、蔽ひの片端をそつと持上げて見たが、それはピアノといふものに違ひないことが彼れにも分つた。去年の夏に冬に、二階でポン〳〵ピン〳〵とどこが面白いのだか分らないやうな音をさせてゐるのを、おれもたび〳〵聞いてゐたのだが、その音の出所はこれだつたのだなと、彼れははじめて見る西洋の樂器を不思議なものと思つて、その黒い滑かな蓋に手を觸れた。すると、彈き手の姿がふと目の前に浮んだ。

彼れは、樂器の側にあつた廻轉椅子に腰を卸して、身體を動かせば自然にグル〳〵と椅子の廻るのに興を覺えながら、彈き手である美しい奥様が、この椅子に腰を掛けて、ピン〳〵ポン〳〵と音をさせてゐたことを思浮べてゐた。ゾク〳〵と身體の震えるやうないゝ氣持がした。「同んなじ女でありながら、一人々々手觸りが違ふだから、不思議なもんだよ。おら、兄貴の家を出て、お安と家を持つまでは、女といふものは、十人が十人、百人が百人、みんなおんなじもので、女は女に變りはねえと思つてゐたゞが、ところが、それがさうでねえと氣がつきだした。お安はお安、伊勢原のおよしはおよし。此家の奥様は奥様と、みんな辛い甘いの差別があるだ。それが分り出してから、おらお安で滿足しちやゐられなくなつた。兄貴は商賣の慾にばかり目が晦んでるから、女の事分らねえのだ。」

清吉がさうしていゝ氣になつてゐるところへ、留守番の老人がやつて來て、

「淸さん何してるだよ。いつまでも下りて來ないから、何してるかと心配してゐた」と、咎めるやうに云つた。

「おら、金持になりていと思つたことはなかつたが、今このお座敷でかうしてると、何とも云へないいゝ氣持がするよ。金持にもなりていものだな」

「おれなぞ始終さう思つてゐるが、生れかはりでもしなければ及びもつかないことだでな。……今度またこの世へ人間に生れて來るやうなまはり合せになつたら、大金持の主婦さんの腹の中へ飛込まうと思つてるだよ」

「そんなまどろこしいことを考へて、當てにならんことを待つてるよりや、今から金持になる思案をしたらいゝぢやないか。知慧を出したら金持にだつてなれんこたあるめえ」

「清さんにそんないゝ知慧があるのなら貸して貰はうかい。おれは百萬長者にならなくてもいゝが、飲みたいだけ飲めて、食ひたいものを何でも食へて、他人の家の掃除なぞしないで濟せるやうになりさへすりや、それで本望なのだ」老人は擲振ふつもりで云つてゐたのが、ふと眞顔で本心を口に出した。

「ケチ臭いことを云つてらあ」と、清吉は鼻の先きでせゝら笑つて、「おらは今まで金持になりていと思つたことねえから、フントに金こしらえる分別したことはねえだけれど、本氣で考へたら、金こしらえる分別つけるくらゐ雜作あるめえとおら思つてるだ」

老人は、いや金儲けほど六ケ敷ものはないと歎息してゐたが、ふと氣がついたやうに、清吉が我物顔で氣取つて椅子に腰を据えてゐるのを見て忌々しく感じて、

「さあ、そこをどいたり／＼。おれはもう雨戸を締めなきやならないから」と、追立てるやうな手眞似をした。

「さう云はんで、もつと此處にゐさせて呉んねえな。戸締りならおらが手傳つて上げよう。……おら、かうしてるのが馬鹿にいゝ氣持だ。……どうせ主人がゐないんだ。おめへもピク／＼することねえやな。こんないゝ座敷を使はないで空けとくのは勿體ないことだ」

清吉が容易に動かないので、老人は怒りだして、手を掴んで引張りださうとしたが、そのはずみに椅子が引くり返つ

て、清吉の身體はドシンと襖に打突かつて、そこへ大きな穴を開けた。

　老人は眞青になつて襖の穴を見詰めた。

「おら、惡いことをした。勘忍してくんなよ」清吉はしをれて、襖の破れ目を指先でふさがうとしてゐたが、はじめは口も利けなかつた老人も、やがて續け樣に惡口の限りを盡くして罵るとともに、清吉の脊を足で蹴つた。

「勘忍してくんなよ。旦那が來たらおらが自分で譯云つて謝るだから」と、清吉は手向ひはしないで詫びた。

「こんなことされて溜るものか。お前を二階へまで上げたことが旦那に分つて見ろ。おれがどうなるか、いくら馬鹿でも氣がつきさうなものだ」

「さうか。おめへが旦那に酷い目に合はされると云つても、たかが此處の別莊番をやめさされるくらゐなこつちやねえか。それがそんなに恐いのか」

　清吉は俄かに氣を取り直して、平氣な顏付して微笑を浮べて云つた。老人は一層憤りを増して、口をもがもがさせながら、凄い目付で相手を睨み据えた。が、清吉には最早怖くも何ともなかつた。

「鼠が噛んだとでも云つときねえ。おら、けへるよ」と云つて、部屋を出て、悠々と階子段を下りたが、自分の過失を後悔するよりも、面白い事したといふ氣持に次第になつた。そして外へ出る前に、も一度階下の部屋々々を見廻して、此處の主人はどこに寢て、どこで飯を食ふか、連れて來る家族はどこに居るのかと考へたり、洗面所便所などをも覗いて見たりした。

　やがて庭の木戸口から外へ出て、石榴の木の下へ來ると、先つき獨りで考へてゐたことが再び生々と胸に湧いた。そして、お安のゐる自分の家へ歸るのが堪へがたく厭はしくなつた。

二

「清公、おめへは小山さんの御別荘でひどいことしたさうぢやないか。先つき彼處の爺さんに會つたら大變怒つてたぜ。馬鹿な眞似もいゝ加減にしとけよ。爺さんの機嫌を惡くすると、おれの店の物に難癖つけられて、いゝお得意を一軒無くされるぢやないか。仕方がないから、おれは爺さんに頭を下げてあやまつたのだが、これからおめへも氣をつけろよ」

と、その翌日、清吉は兄の隆一に戒められたが、清吉は、兄などが、別荘の留守番風情に媚びるのが、不斷から氣に入らなかつたので、

「爺さんが先きへ手出しをしたから、おらが轉んで襖へ傷がついたのだ。おらが惡いんぢやねえ。あんな別荘の一軒二軒出入が止まつたつて、ちつとも差支えねえぢやないか。得意を殖すために、留守番の御機嫌を取るなんぞおら大きらひだ。」

「おめへはそれでよからうが、おれの商賣の邪魔をされちやたまらない」

「身内といふものはおたげへに邪魔のし合つこだ」

清吉は自分のしたいことも、兄だの女房だのゝために妨げられてゐると思ひながら、さう呟いた。

この翌日、彼れは山の手のある家へ品物を屆けた次手に、一昨日見た小山の別荘の側へ寄つて、内の樣子を見てゐたが、二階の雨戸は晴々しく開いてゐて、男女の聲もどの部屋からか聞えて來た。老人は何と云つて襖の破れた言譯をしたのだらうと、それが知りたくもあるし、自分の男つ振りを褒めたといふ奧樣に見られもしたかつたので、表へ廻つて門を入つて、留守居小屋を覗いたが、老人はゐなくつて、東京から來た女中が二人、臺所の外で荷物の繩を解いてゐた。

その一人は見覺えのある女中であつた。
「爺やさんはゐませんのですか」と訊くと、
「えゝ、ちよつとお使に。……もう歸つて來るでせうよ」
「さうですか」清吉は老人の歸りを待つつもりで、小屋の前に蹲んだ。二人の女中に話しかけたいと思ひながら、相應しい話題が見つからないので、默つて二人の樣子を見てばかりゐたが、
「あなた、そんなに見てばかりゐないで手傳つて頂戴ね。女ばかりでこんな重い物の始末をするのは無理なのだから」
と、一人の女中が馴々しく云つた。
「お手傳ひしてよけりや、いくらでもお手傳ひしませう」
清吉はさう云つて女中だちの側へ寄つて荷物に手を掛けた。どういふ贅澤な物を持つて來てゐるのか見られるのを樂みにしてゐたが、釘付の蓋を取除けやうとしてゐるところへ、留守番の老人が歸つて來た。
「昨日は濟まなかつた」と、清吉が振返つて、會釋すると、老人は澁い顏して、
「今途中で主婦さんに會つたら、お前を搜してゐたよ。急な用事が出來たのだらう。早く歸んなさい」と云つて、荷物の始末は自分が引受けた氣で、清吉の手から釘拔きを取つた。
「急な用事のある譯はねえ」と、清吉は其處を動きたくなかつたが、老人が急立てるので、不承々々に立つたが、潜戸を出る時に振返ると、二人の女中が何か話しながら此方を見て笑つてゐるのに氣づいた。
「急な用事ある譯ねえだ」と、彼れは老人の言葉を疑つた。別莊で雜用のお手傳ひをしてゐようとも、知合ひの家で世間話をしてゐようとも、あるひは自分ひとりで涼しい木蔭に寢そべつてゐようとも、家へ歸つてお安と顏を突合せてゐ

るよりはましだと思つてゐたのであつたが、急用といふのが心掛りになつたので、兎も角家へ急いだ。
「何處をホツキ廻つてるんだね。この頃は出るたんびに暇がかゝるでないかね」と、お安は裏口から水桶を搪つて入りながら、淸吉の顏を見つけると云つた。
「それがどうしたと云ふんだよ」淸吉は不平らしく云つて、「急な用事があるのか」と、上り框にだるそうな腰を卸した。
「井戸端で小山さんとこのお爺に會つたら、お前の事を、わしの前で惡く〳〵云つてゐたよ。いけ好かない爺さんだ。お前もこの後はあの人なぞに口を利かんやうにしなさい。あんな老耄れ爺にまでなぶり物にされに行かなくつてもいゝでないか。伊勢原のおよしがこの土地へ夏場を稼ぎに來るといふ噂があつたと、わしを焚付けようと思つて、爺い餘計なことを云つてやがつた。お前があの女に未練があるものかないものか、他人に餘計なおせつかいされなくつたつて、わしの目で見てりやよく分つてるぢやないかね。」
お安は杪杓から直かに冷たい水を呑んで、手の甲で口元を拭つた。そして、端折つた裾を下ろして、上り框に淸吉と並んで腰を掛けて、「わしさう思ふだよ。兄さんにも親類にも餘計な差圖をされないで、小さくつても自分だけで店を出したら、働くにも張合ひがあるとわし思ふだよ。お前もいつまでも一人立ちの出來ない人間のやうに、兄さんに思はれてゐちや損だよ。ボンヤリして、慾のないやうな顏して、方々ホツキ廻つてるから、兄さんにも馬鹿にされるんぢやないかね」
「急用と云ふのはそんなことなのか」
淸吉は氣乘りのしない口を利いて欠伸をした。時々お安から、亭主思ひらしいこんな話を聞かされるたびに、砂利で

も嘲はされるやうな不快を感じて、むしろ兄などに怒鳴りつけられた方が氣持がいゝくらゐに彼れは思つてゐたのであつた。

「おめへもさう動いてばかりゐないで、晝寢でもしろよ。おらも今日は眠くつてならねえ。金のかゝらないいゝ樂みをしやうと思へば眠るに限るだ。どんな面白い夢でも木戸錢入らずで見られるんだでな」

清吉はさう云つて、仰向けに寢ころんだ。薄シヤツ一枚で、健やかな胸は靜かに波打つてゐた。夫が出歩いてゐる間は、此間から萠してゐるボンヤリした疑ひに惱まされ勝ちであつたお安も、自分の側に夫がゐさへすれば、何となく安心されたので、口先きでは夫の懶怠を罵りながらも、腹の底ではそれをさほどに苦にしてゐるのではなかつた。

午餐後隨分身體を動かして、家の用事はあらまし片附けたのであつたが、永い日の暮れるのにはまだ餘程間があつた。お安は針箱を出して行儀よく坐つて見たが、夫の寢息に誘はれて、自分も俄かに睡氣が差して來たので、手枕して横になつた。

二人の顏や手足には蠅がいゝ氣になつてたかつてゐたが、蠅の外には侵入者が何もなかつたので、二人の眠りは夕暮れ時までも續いた。

「おら、世の中にこんなスバラシイ景色があるとは思はなかつた。見ろい、あのでつけい岩を。天を突拔きさうに立つてるぢやねえか。あしこまで登つて見ていな」

「だつて、此處まで來るのも、わしには大抵ぢやなかつた。あんな高い所まで行くうちには、わしはぶつ倒れつちまふわな」

「ぢや、おらが手を執つて連れてつてやらう。脊負つてやつてもいゝよ」

清吉が蹲んでお安の方へ脊を向けると、お安は廿へるやうな態度をして負さらうとしたが、そのトタンに彼女は足を辷らせて、崖から轉び落ちた。果てしなく下へ〳〵と落ちて行く女の身體をぢつと見据えながら清吉は、聲も立てず、手足も動かさないでゐたが、何時まで立つても、女の身體が淵の中へも谷底へも落切らないのがもどかしくなつた。見てゐると、下へ轉んでゐる女の身體は、何時までも彼れの目に映つてゐた。

ふと、崖の崩れる音に驚くとゝもに目を醒まして、あたりを見廻すと、あたりは何時の間にか薄ら暗くなつてゐて、頭の上に落ちて來さうに雷の音が烈しく鳴つてゐた。「變な夢を見た。馬鹿に景色のいゝ嶮しい山だつたが、あんな山が世の中にあるんだか。近いうちに大山さんへ一緒にお詣りしたいと、お安が云つてゐたが、今二人で登つてた山は大山とは違つてるだよ」と呟いて、緣側へ乘出して、美しい稻光を見て小氣味のいい雷鳴に耳を留めてゐた。「何處かの大木か、誰かの頭の上に、あのガラ〳〵と鳴つてる奴が落つこつて來ると面白いな」と、彼れはそれを待設けてゐたが、ふとしたら自分の頭の上にその雷が落ちて來ないだらうかとは、彼れは思つても見なかつた。

「お安が崖から辷つたのも、おらが突落したんぢやねえ。……若しかお安が雷に打たれるにしろ、おらの所爲ぢやねえや。……お安がこの家の中でポツクリ死んだつても、誰れもおらのせいにするものはあるめえな」

清吉は意外な天候の變化を、まだ夢の續きであるやうな氣持で見てゐた。バラ〳〵と先觸れの音がすると間もなく、瀧のやうな驟雨がやつて來た。椽側へも飛沫が烈しく濺ぐので、彼れは闇の中へ後退りしたが、お安も外の騷ぎに、やうやく熟睡から目醒めてゐた。しかし不思議にも、雷雨に氣づいても平生のやうに慌ても驚きもしなかつた。

「もう何時頃だかな。變な夢を見い〳〵よく眠つちやつた」と、目をこすりながら、外の雨を見やつた。

「變な夢と云つて、どんな變な夢を見たゞよ?」と、清吉は薄暗りの中で女の顏を顧みた。

「それがね。お前に話すのもいやなことなのだよ。わし默つてゐよう。夢を氣にするのは本當に馬鹿なことなのだね」

お安は譯ありげにさう云ひながら、だるい身體に力を入れて立上つて雨戸を締めた。淸吉は自分の夢から推して、お安の夢を氣遣つてゐた。電燈はまだ點かないので、戸を締めた家の中は暗かつた。

「淸さんお前は何か考へ事してるだね。……お前の考へことつたら、外のこつちやあるまい。外の事は何一つとして身を入れて考へる人ぢやねえだから」

ふと言葉を尖らせてさう云つたお安の目は、猫の目のやうに闇にも光つてゐるやうに、淸吉には思はれた。

「おめへこそ夜になると、詰らない言草を考へだして、おらにからみついていけねえよ。まだ眠りが足りないんだらう。もつと寢てろよ。晩餐の菜はおらが、火を燃して煮てやらう。膳立てして箸を持ちやいゝやうにしてやるからそれまで安心してゆつくり眠つてゐろよ。いくら雨が降つたつて家の流れる心配はねえだ」

「もつと眠つて、あの夢の續きを見ろと云ふのかい。あんな夢見なきやならないのなら、わしは二晩でも三晩でも縱る氣はねえだよ。……おめへは假面をかぶつて兄さんはじめ世間の人を騙してゐてもいゝけど、わしをまで騙さうとしたつて、それやいけねえだよ。罪なことだよ。わしもまた、生命にかけても騙さりやしねえだ」

「おら、誰れも騙した覺えはねえ。商賣物にでも懸引したことねえだからな。一圓で賣る品ははじめから一圓と云つてるだ」

「お前は商賣に掛けちや馬鹿正直だから、餘分に儲かるものまでも儲けないで、兄さんにも始終小言を云はれてるんぢやないかね。お金にお構ひなしの別莊へ賣付ける時なんか、取れるだけ取らなきや損だつてことを、お前は分らないの

かい」お安は自分が云はうとしてゐた肝心の事から、思はず話を外らしたが、夢の名殘りは、闇暗や暴雨の音に誘はれて、目の前に浮動したので、話は直ぐに元へ戻つた。

「お前が人一倍慾の皮を張つて、商賣物でボレルだけボツても滿足しないで、人の家へ入つて默つて人の物を取つて來たつても、わしはお前を咎めやしないよ。だけど、お前はわしを連出して、怖い目に會はせようと企んでゐるのだらう。隱したつて駄目だよ。お前の好きな女の前でわしを嬲り物にして、その女の御氣嫌取らうと思つてゐるのだらう。わしはまだ死に切らないうちに目が醒めたからよかつたけれど、死んでしまつたなら、わしが丹誠して拵らえた物はみんなその女にやるつもりなのだらう」

「何云ふだ。おらはお前を山へも川へも連れてこうたあ思つたこともねえ。おめへが大山さんへお詣りしたいと云つてたんぢやねえか」清吉は自分の夢を思出して胸苦しい思ひをした。

「わし、道了様でも大山さんでも、御信心なぞしてやしないよ。大山へも信心で行かうと思つたんぢやない。以前お前をたぶらかしてわしに苦勞させた女のゐた伊勢原といふ土地はどんな土地だか、通りがけに一目見て唾でも引掛けてやりたいと思つたからなんだよ。だけど、今はもう伊勢原など見なくつてもいゝのさ。一錢の得にもならないのに、費用を使つて高い山の上のお宮なんぞへお詣りする氣はちつともないのだ。それでもお前はわしを連出して、ひどい山坂を越えさせようとしてるんだらう。……お前がわしを死なせてまで御機嫌を取らうと思つてる女の名前を此處で白狀しなさい。何處の誰れだか、さあ、ハツキリ云つて御覽な。今日の今こそ、お前が云ふまいとしても、云はさないで置きやしないんだから」

「ハヽヽヽ。何處の誰れだか、おれも知んねえから云ひやうもねえや」清吉は、お安の顏が、假面を脫いで、この女の本性

を現はしたやうに惡相を帶びたのに駭きながら、笑に紛らせた。

「およしに掛り合つてた時にも、お前はそんな顔して空呆けとつたでねえか。あの時わしはおよしの顔を見ないうちからちやんと知つとつたが、今度だつても、女の顏わしは知つてるだよ。目の玉の大きな豚のやうに肥つた若い女だらう。あんないやらしい女が何處がいゝだ。お前もいゝ女手に入れやうと、始終考へてゐるのなら、東京の藝者でも買つて見るがいゝ。碌でもない女の尻ばかり追つてる男の身體は蛞蝓か芋蟲のやうに汚くなるのに氣がつかねえだか。お前が汚れりやわしまで汚くなるぢやないかね」

「おらの身體がそんなに汚なけりや、おらの側へ寄付かなきやいゝぢやないか。おら蛞蝓でも芋蟲でも構はないよ」

清吉は、「目の玉の大きな豚のやうに肥つた女」とお安が云つたのは、おふみさんのことぢやないかと思ふと、どうしてお安がそれを嗅付いたのかと不思議に思はれるとゝもに、自分のすることなすこと、腹の底でそつと思つてゐることでも、夢の中のことまでも見のがすまいとしてゐるお安の心根が怖かつた。

「蛞蝓のやうな男が嫌いなら、サッサト何處へなと出て行けよ」

「追出せるものなら追出すがいゝや。わしが拵へたもの蚊帳の釣手一つだつてこのまゝにしときやしない。豚のやうな女の汚れた手で觸られるのは業腹だから、みんな火をつけて燃してしまつて出て行くから、よく見てゐな」

「豚だ〳〵と、人のこと云つて、てめへは何だい……」山猫のやうな面してと、淸吉は云はうとしたが、女の顏を見ると、言葉が喉へ詰つて出なかつた。

「あの女を豚と云はれて腹が立つのか。わしを嬲り物にして、お前と二人で好きな眞似をして世を送らうと企んでやがるあの女は獸物だ。豚でなければ猫だ犬だ女猿だ」

「惡對もいゝ加減にしろよ。……おら、腹が減つたから湯漬でも喰はうかい」

淸吉は直ぐに外へ飛出したかつたけれど、空腹と大雨とに怯んだ。そして、自分で食事の用意をするために、臺所へ立ちかけると、それと同時に電氣が點いた。暗闇から俄かに變つた明るい光に淸吉は元氣づいたが、お安もやうやく夢から醒めたやうであつた。そして、無言で夫と一緒に飯仕度に取掛つてゐたが、惡對をついたあとで、默つて見てゐると、夫の男つ振りは不斷にもまして美しかつた。わし一人の者に極つてゐるこの男を、外の女に觸らせてなるものかと意氣込んだが、さうと思つて見てゐるうちに、夫の廣い額の何處かに、可愛らしい脣のあたりに、太つたツル〳〵した腕の何處かに、薄いシヤツから透いて見える逞ましい胸のあたりに、外の女の脣の跟か指の跟かがついてゐるやうに思はれた。

淸吉は七輪の火を煽いでゐた。お安は漬物を切つてゐた。烈しい驟雨の音は戸外のすべての音を沒して、團扇の音と庖丁の音とのみがしてゐたが、夫の心の中では、庖丁の刄先きが、氣になつてゐた。女房の心の中では、七輪の火の粉が氣になつてゐた。

「小山さんとこの爺い、急用だちうて、おらを騙しやがつた。いやな爺いだ。……あの別莊の旦那は、去年もさうだつたが、今年も女ばかり連れて來てるやうだ」

淸吉は何時までも默つてゐるのは氣詰りだつたので、獨言のやうにこんなことを云つたが、お安はそれを自分の機嫌を取つてゐるのだと見做して、わざと拗ねて受應へをしなかつた。「二人は仲がよ過ぎるから時々喧嘩するのだ。打遣つときやいゝ」と、淸吉の兄嫁が冷かすやうに云つたことが、一つの慰めとして思出された。

(三)

「清さん、驛へ荷が着いたと知らせて來たから、直ぐに取りに行つて呉んなよ」

驟雨が霽れかゝつたころ、兄嫁が入口へ顏を出して聲を掛けた。

「よし來た」と、清吉は機嫌のいゝ返事をして、箸を擱いた。

「明日の朝早くぢやいけないのかい」と、お安は横から口を出したが、兄嫁は成べく今夜のうちに運んで貰ひたいと云つて歸つた。

「爲樣がないね。お前がいやだつて云へばいゝのに。無性なくせに、今夜に限つてなぜいやな事をオイソレと受合つたのだい」

「だつて斷る譯には行かないぢやないか」

「だから、一人立ちになつて自分の店を持つた方がいゝんだよ。お前は今夜は、用事を頼まれたのをいゝ機會に、外へ遊びに出たくなつたんだらう」

「おらが仕事に行くのに文句を云ふのなら、おらの代りにおめく行くといゝや」

清吉が微笑を含んで云ふと、お安は、

「わし、あとから行くだよ。夜道を一人ぢや危いから、わし助けて上げようよ。重い荷物をお前一人に運んで來させるつてことがあるものぢやない。兄さんが勝手なんだな」と云つて、提灯を出して火を點けた。

清吉は女房の餘計なおせつかいを好まなかつたが、默つて提灯を持つて、荷車を土間から牽出した。兄の店先へ寄つ

つて、背付を取つて、ノソ〳〵と停車場へ向つた。道はぬかるんでゐても、雨後の冷しい風は氣持がよかつた。まだ避暑客はそんなに來てはゐないで、別莊の戸は大抵鎖されてゐたが、小山の別莊の燈火は線路に添つた道からもよく見られた。ピアノの音がそこから聞えて來るやうにも思はれた。清吉はその家の部屋々々の樣子や物置場や出入口をもハツキリ思浮べることが出來たので、「あしこの大將、碌な面もしてゐないくせに、うめへことやつてるな。おらの顏や身體は、あの大將よりや滿足に立派に生れついてるのに、薄汚ねえ狂人見たいな女に附纏はれて糞面白くもねえ思ひしてるのは馬鹿なこんだ。あの大將は御先祖から財産をウンと讓つて貰つたから、綺麗な家を建てゝ贅澤な生活をしてるんだらう。おらは親爺から鼻糞ほどの財産しか貰つてゐねえから、贅澤は出來ねえ。それはよく分つてる。おらはまた大きな家に住んで多勢の女中を使つたり、いゝ衣服着て、うめえ西洋の酒飲んだりしたいとも思つてやしない。おら、今のやうな古ぼけた小ちやい家にゐて、不味いもの喰つてるのを、そんなに情ねえこんだとは思つてやしない。……だけれど、おら、お安のやうな奴といつまでも同じ屋根の下に寢起きして、一つ鍋のものを喰ふのはいやでならねえ。人間ちうものは一度嫁を取つたら、髮の毛が白くなるまでも、お墓の中へ入るまでも、一緒に暮らすのが、人間の道だといふその人間の道がおらには得心出來ねえ。おらだつても、畜生の眞似はしたかあねえ。人間の道ちうものがあるのなら、おら一人その道を外れたかないけんど、おらにはどうもその理窟が分らねえ。おら、よエライ金儲けして大きな家建てたいとも思はない、いい衣服着たくもない、うめえ酒飲まんでもいゝ。だけど、いやな女を追出して好きな女と一緒に暮らすのがなぜ惡いだか、その理窟おらには分らねえ。それもよ、お安の外におらを好いてる女がねえのなら、諦めもしようが、さうでねえからおらも迷ふだ。好いて好かれてる女があるのに、一緒になれねえで、我慢してゐなきやならない譯が分らない。あの別莊の旦那は、自分の好きな女を連れて大威張りに遊んでやがつても、人間の道に外れたやうな

面をしてゐねえぢやないか」と、別莊の方を顧み〳〵歩いてゐるうちに、たしかにピアノに違ひない音が聞えて來た。

「あの二階の椅子に腰掛けて、あの別嬪のピアノを聽いてるのは惡かねえな、おら、おふみさんの側で肱枕で寢て、三味線でも聞いてゐていが、人間の道に背いたことだと誰れが云やあがる」

清吉は、停車場の横へ車を置いて、叺に入つてゐるコークスを積んだ。石炭や木炭を多量に荷馬車へ積込む時とはちがつて、今夜のは特別注文の風呂の燃料が僅か着いたのに過ぎなかつたので、一人でも手輕に運ばれるのであつた。

側にゐた驛夫や運送屋の人夫と戯談口を利いてゐるところへ、お安は草鞋脚袢で足をかためて、裾を端折つて、一かどの荒働きをするやうな樣子してやつて來た。

「ヨウ主婦さんがお手傳ひか」と、人夫が冷かしたが、お安は相手にしないで、夫を急立てた。

「おら一人で大丈夫だつたら」

清吉は力を入れて車を牽きだしたが、お安も力を入れて後を押した。さして重くもない物を二人で運んでゐるのを、清吉は馬鹿々々しく思ひながら、「おめへ先きへ歸れよ。おら店へ寄つて始末しなきやならんのだから」と云つて、途中でたび〳〵お安から離れようとしたが、お安は聞入れなかつた。彼女は夫婦が睦じさうに一つの荷物を牽いてゐるのを、知人に、家の中や道の傍から見られるのを快く思つてゐた。

歸り途にも、清吉は小山家の別莊の方を顧みて、前よりも冴えて聞こえて來るピアノの音に耳を傾けたが、車の後から此方へ目を注いでゐるお安の事を思ふと、悠然として、樂の音に聽惚れてゐられなかつた。

「御苦勞々々々」と、兄の隆一は荷車が着くと云つて、「まあ一服吸つて行け」と、親しみを顏に出して云つた。

清吉は草鞋を解いたまゝ店先へ仰向けになつて、お安と兄嫁とが片隅で囁いてゐるのを氣にしながら、今夜遊びに行

つて、ちよつとおふみさんの顏だけでも見て來ようと企てゝゐた。

おふみさんは「御隱居樣」と呼ばれてゐる、人相はよくないが、言葉使ひの穩かな、氣性のさばけてゐる五十あまりの病身の老婆に隨いて、去年の暮から、海際の小さな貸別莊に來てゐるので、時々は淋しくつて爲樣がないと云つてゐた。御隱居樣は退屈な時によく琴を彈いてゐるが、今夜のやうな驟雨あとの涼しい晩には、琴でも彈いてゐるかも知れない。此間も琴の音を感心したやうな顏をして聞いてゐると、老婆は悅しがつて、おふみさんに吩咐けて、緣側に座蒲團を出させて、おれに休んで行けと云つて、琴の講釋をしたりした。今夜も若しも琴を彈いてゐたなら、感心したやうな顏して聞かせて貰はふか。

淸吉は「安はゆつくり話して居れ」と、何喰はぬ顏で柔しい聲して云つて、うしろを氣にしながらそつと表へ出た。そして薄暗いところを足を早めて石村の別莊の方へ向つた。

が、其處には琴の音どころか、表の戶が鎖されてゐて、人の聲一つしてゐなかつた。知らぬ間に東京へ歸つたのか知らんと、淸吉は失望しながら裏の方へ廻つて見た。電氣はついてゐなかつたが、雨戶は開いてゐて、人間らしい影が一つ、緣側近いところに橫たはつてゐるのがボンヤリと見られた。まさか御隱居樣ではあるまい。おふみさんが一人で留守居でもしてゐるのではなからうかと、淸吉は自分の都合のいゝやうに考へて、垣根を攀ぢて首を出して、薄闇を通して內を覗いてゐたが、家の中の影はふと外の方へ目をつけて、

「誰れだ、そこへ來て何をしてるだ」と荒つぽい聲を掛けるとゝもに起上つて、庭へ下りて木戶口へ寄つた。

淸吉は、咎められたゞけなら何とも感じないのであつたが、その影が御隱居樣でもおふみさんでもなかつたのに驚いて、一さんに驅けだした。

「あの聲は誰れだつたか」と考へたが思當らなかつた。自分の家の前まで歸つたところへ、お安の兄の家から歸つて來たのにぶつゝかつたので、ふと我れに返つて、何故ともなくガツカリした。そして、家へ入つても物も云はないで横になつた。

「お前は氣がつかんのかい。姉さんはまた身持になつてるよ」と、お安は云つたが、清吉は返事をしなかつた。

「二人も三人も子供が出來たら、兄さんはなほ更慾が出來て、お前なぞに店の儲けを頒ける氣になりやしないよ。子供がないと氣樂だ、羨ましいなんて、姉さんは口先きではうまいことを云つて、此方へは呉れる筈のものも呉れまいと思つてるんだよ。兄弟喧嘩でもおつぱじめにや、死んだお父さんが極めとつたものだけも、見とりなさい、決して頒けて呉りやしないから。それに、彼家ぢや、奥の座敷をこの夏は海水客に貸すことにすると云つとつた。どうせ夏場だけで百圓は取らうと思つてゐるのだらうが、忌々しいぢやないかね。家でも表の方だけ仕切つて、お客に貸すことにしたらどうだらう。少し手を入れて小綺麗にしたなら、五十圓やそこいらの室代は取れないことはあるまい」

お安は兄嫁との話によつて慾心を刺戟されて、夫の心に對する疑惑をも一時忘れたやうになつたが、

「兄貴は兄貴で勝手にさせとけよ。何百圓室代を呉れたつて、おらは自分の家を他人に貸す氣にやなれねえ」と、清吉は取合はなかつた。

「ぢや、わしにまかしとくかい。お前は知らん顔しとれば、わしが一人で室貸しの出來るやうに運びをつけよう。お前のやうな慾のない人に相談してゐちや損ばかりしてゐなきやならないから、わしにまかしなさいよ」

「勝手にするがいゝ」清吉は煩さがつてさう云つたが、「金が慾しいのなら、室代なんぞをあてにしなくつても、いくらでもいゝ分別があらあ、」

「いゝ分別があるのなら云つて見なされ」

お安は夫の戲談口を待設けて微笑したが、淸吉は今は戲談にも眞面目にも、女房と金儲け話をする氣になつてはゐなかつた。……で、「いゝ分別は當分おらひとりの胸にしまつて置くだ」と云つて、空寢入りをしてゐたが、どいつもこいつも金を欲しがつてゐるのを思ふと、自分も何かやつて大金を儲けてみんなを吃驚させたくなつた。どこかの地を堀つたら小判が五つも十もの俵に入り切れぬほど出て來さうに思はれたり、人の知らないどこかの谷へ入つたら、金の塊りがごろ〱轉がつてゐさうに思はれたりした。ふと小山の別莊の內も目先にちらついた。そこの階下も二階も隅々まで分つてゐるので、主人か主婦の部屋へ忍込んだら、いくつもの紙幣の束が取れば取られさうに思はれた。「おら、金なんぞそんなに欲しかあねえだが、おらを馬鹿にしてる奴等に見せて吃驚させるために、何處からかしこたま取つて來たいな」

夫婦はやがて枕を並べて早寢の床に就いたが、お安は室貸しの工夫を凝らしてゐるし、淸吉は金銀の塊りや紙幣の束を闇のあちらこちらに浮べては見詰めてゐた。夢の中でもやはりさうであつた。

（四）

この頃は町の內が物騷だ、別莊荒らしが來てゐるといふ噂が、人々の耳に傳はつた。淸吉は、「別莊荒らし」といつてどんな面をしてゐる奴か一度見てやりたいと思つて、お安などに向つてもさう云つてゐたが、彼れは盜賊を憎んでゐるのではなかつた。小山の別莊のやうな彼方此方にある別莊へ忍込んで、價値の高い品物や金錢を奪つて來るのは、面白い仕業のやうに思はれてゐた。

「石村さんの御別莊の前を、先日の睡變な奴がウロ〱してゐたんだつてね」と、ある日お安が云ふと、淸吉は自分の

事ちやないかと氣に掛つたので、
「先日の晩と云つて何時の晩だ」と、身を入れて訊返した。
「二三日前だらう。役場の江川さんが留守番を頼まれて宵から寢てるところへ、垣根がメリ〳〵壞れる音がしたから、裸足で庭へ飛下りて、泥棒を摑まへようとしたら、そいつが刄物を出したんだつて。刄物に恐れて逃したのだけど、泥棒の顏は江川さんはよく覺えてるさうだよ」
「嘘を云つてやがる。……江川の弟が留守番に行つとつたのか」と、清吉はふと口走つたが、お安は何とも感じないで、
「石村さんでは女ばかりだから、それから怖がつて、江川さんに毎晩泊つて貰ふことにしてゐるんだつて」
「女ばかりのところへ、若い男が泊りに行くなんてよくねえことだ」
「何を云ふだよ。お前の知つたこつちやないだらうに」
お安はこの時の夫の氣持を察しないで云つたが、清吉は石村の近所に住んでゐる江川の弟がいつの間にかあの家と懇意になつて泊りになぞ行くほどになつてゐるのを知ると、油斷が出來なくなつた氣がしだした。頭の髮を分けて袴なんぞ穿いてお役人ぶつた高慢ちきな口を利いてゐる平太郎なぞに、おれの思ひを掛けてゐるおふみさんを取られたりしちや已れも生きてゐる樂みはねえ。あの晩緣側で怒鳴つた奴が江川の小倅つ子であつたのなら、あの時逃ねえで、横つ面を一つ二つ毆つてやりやよかつた。江川の兄弟にでも大野の大將にでも、おらあ口先の理窟ぢやかなはねえけれど、腕の力ぢや負けねえつもりだ。
清吉はひとりでいきり立つたが、間もなく萎れかへつた。おふみさんの情夫になるのに、自分が平太郎にはかなはないやうな氣がしたのである。

その晩通りがゝりに、石村別莊の勝手口へ顔を出すと、おふみさんは意氣な浴衣に襷掛けで、肥つた白い腕を惜氣もなくまくり出して、小聲で何かの唄を唄ひながら食器を洗つてゐた。その綺麗な聲を聞いて、肥つた白い腕の動くのを見てゐると、淸吉には、この狹い臺所がこの世の極樂であるやうに思はれた。そつと顔を出して息を殺して暫く見上げてゐたが、

「炭屋さんだつたの？私吃驚しちやつた。あなたが默つてそんな所に立つてるからいけないのよ」と、おふみさんは叱るやうに云つたが、直ぐに懐つこい顔して、「この頃はあなたの御商賣も忙しくなつたの？暫く話しに來なかつたのね。御隱居樣と今日あなたのお噂してゐたのよ」

「おらの事を惡く云つてゐたんぢやねえのかな」

「淸さんも案外氣を廻すのね。誰れがあんたのことを惡く云ふものかね」

「それで安心した」

その樣子があんまり眞面目なので、おふみさんは聲を出して笑つて、「あちへ廻つて遊んでいらつしやい。私、もう二三日したらお暇を頂いて東京へ歸つちまふかも知れないのだから」

「歸つちまふ？」淸吉は目を丸くした。「歸つたら、もう大磯へは來なさらんのですかい」

「まあ、さうよ。私この土地にはつく〲飽いたのですもの」

おふみさんは話相手も遊び場所もない田舍生活をケナしながら、食器を片付けて、それから顔を洗つて襷をはずして、淸吉を座敷の緣側の方へ誘つた。御隱居樣はひとりで湯屋へ行つてゐるといふことだつたので、淸吉は久振りでおふみさんと差向ひで話の出來るのは喜んだが、これが一生の別れになるのかも知れないと思ふと、涙の出るほど悲しかつた。

「あなたは何だかふさいでるわね。どうかしたの？」と、柔しく訊ねられると、清吉はホロ〳〵と涙を落した。

「おら、一度よくあなたの心を訊かう〳〵と思つてゐたのだが、……」と、ちよつと言淀んだが、「あなたが東京へ行きなさるのなら、おらも一緒に連れて行つて呉んなさらないか。おらは大磯にゐなきやならねえ譯ねえだから、何時どこへでも出掛けて行くだよ」

「何を云ふんですね、清さん」

おふみは呆氣に取られて、相手の顏を見詰めたが、ふと氣がつくと危かしくなつたので、後退りした。

「この前あなたに會つた時にあなたがおらに云つたことは噓ぢや御座んすまいな。おらあの言葉は忘れねえでさ」

「私何を云つたか知ら？」

「清さんのやうな人と一緒に暮したなら面白いだらうと、あなたは云つてゐなすつた」

「さう云つたのがどうしたの？」

「おら、あなたと一緒に暮したいと思つてゐますだよ。人が何と云つたつて、おら構はねえだ。あなたがおらを嫌ひさへしなけりや、今日でも明日でも、おら大磯の土地を突走つてもいゝと覺悟をしてるだ。生活の金なんぞ心配することねえだからな。あなたが氣樂に好きなことして暮らすくらゐな金は、おらの腕で出來なかねえつてことを、あなたもよく承知して呉んなさい」

清吉の哀れつぽい聲を、おふみは不斷のやうに笑つて聞いてはゐられなかつた。揶揄ひ口など一言も利けなかつた。

「私がお暇を頂いて東京へ歸るといふのもまだ確かなことぢやないのよ。御隱居樣もあなたを好いてゐらつしやるのだから、これからも時々遊びにゐらつしやいな」

「おら、年を取つたお婆さんの話を聞いたつて、ちつとも面白かねえ。今夜は是が非でもあなたの心を訊きていだよ。あなたが約束を反古にしねえで、外の若書生なんぞに目もくれねえで、おらと一緒に家を持つ氣になつたと云ひさへすれりや、おら、御隱居様なんぞどうでもいゝだ。婦あなんぞどうでもいゝだ」

「……あんないゝ主婦さんがどこが氣に入らないの？」

「あの婦あのためにや、おら長い間難澁してるだ。同じやうな身體した女といふ者でありながら、嗅あとあなたとはどうしてかうもちがふものかと、おら不思議でならねえだ。」

「清さんは相變らず面白いことを云ふのね」

「おら、寢ても醒めても嗅あの顔見て一しよに年を取るのが、情なくつてなんねえ。戯談に云ふんぢやねえ」

不斷と違つて清吉の顔に間の拔けたところが見えなくなつたので、おふみはいよ〳〵氣味が惡くなつて、御隱居様が早く歸つて來ればいゝ、江川さんでも來て呉れゝばいゝと思つてゐたが、清吉の方では、御隱居様をでも誰れをでも、今は目の中に置いてゐなかつた。おふみさんの色よい返事を待つてゐるばかりで、その返事の邪魔をする奴は片つぱしから捻り潰してやるとふと意氣込んだ。そしてどんな奴でも捻り潰せる力が自分の身に備はつてゐるやうにさへ思はれだした。腹の中のさういふ氣持は自から彼れの顔にも現はれたので、おふみはギヨツとした。が、逃げるのも怖かつたので、わざと笑顔をつくつて、いゝ加減にあしらつてゐると、清吉は何もかも打開けたくなつて、先日の晩垣根越しに覗いたことをも喋舌つた。江川の言觸らしてゐるといふ虚構事の言譯をして江川を憎さげに罵つた。

「江川さんはそんなことを云つてやしませんよ」と、おふみはふと打消して、「先日變な男が家のまはりをウロ〳〵してゐたのは本當だけど、それはあなたのことぢやないのよ。朝鮮人らしいつて江川さんは云つてゐたのです。此方へは朝

鮮人の工夫がこの頃入込んでるんだつてね」

おふみは自分に迫つて來る相手の氣味の惡い話を避けるために、朝鮮人の飴賣りや線路工夫が空巢ねらひをしたり、若い女に惡戲をしたりするので油斷がならないといふ世間の噂や、自分が一人でゐる時に朝鮮の行商人に押賣りに來られて困つた事實などを話すと、淸吉はおとなしく聞いてはゐたが、彼れの一心はこの女をわが物にされない牴牾しさに惱まされてゐた。

「おらのやうな男は嫌ひなら嫌ひだとハツキリ云つてくんなさい。おらにも考へがあるだから」

「困るね、急にそんな難題を持掛けちや。私氣が小さいんだから、脅かさないやうにして頂戴な。私や御隱居樣は淸さんのこと決して惡く云つてやしないのよ。今に御隱居樣がお歸りになつたら、琴でも聽かせてお貰ひなさいな。私何かおいしい物買つて來てお茶でも入れるわよ」

おふみはおいしいお菓子でも買つて來るといふ口實をつくつて座を立つた。淸吉に手荒く引留められはしないかと恐れたが、何ともなかつたので、勝手口から大急ぎで外へ出て、近所の江川の家へ寄つた。

淸吉は緣側に腰を掛けたまゝ待つてゐた。自分の方から言出しさへすれば、おふみさんは二つ返事で喜んで此方へ飛びついて來るものと待受けてゐた當てが外れたので、「おら騙されてゐたのか」と疑つたが、さうは思ひたくなかつた。

伊勢原のおよしといゝ仲になつたは雜作はなかつたのだし、お安がおらの所へ來たのも面倒な手數はかゝらなかつたのに、おふみさんに限つて人じらしをするのは譯が分らない。おらの口の利き方が惡かつたのかな。どれも女にや違ひないが、おふみさんは東京者だから、およしやお安とは腹の中まで違ふのか知れない。

「おらはお前さんが好きだ。お前さんはおらを好いてる。男と女とのいゝ仲はそれで極るのぢやないのか。おら、女に

付文したことはないし、餘計な掛合ひしたことねえだから、東京者の男や女が色戀沙汰につかふあぢな文句を知らねえ。……江川の平公はおらとは比べものにならねえまづい面してやがるけれど、あいつ、東京へちつとばかり學問しに行つてゐたから、おふみさんのやうな女の氣に入る文句を知つてゐやがるに違ひない。そのうめえ文句であの女をたらし込んだものだで、あの女、心變りして、おらとの約束を忘れた振りしてるのかも知れない」

山へでも濟へでも、人つ子ひとりゐない所へおふみさんを連出して、あの女が心の中でおらの事をどう思つてゐるか得心の行くまで訊いて見たいと、淸吉はいろ〳〵に頭腦を惱ました揚句に、さうした企てをいゝ事として企てたが、その企てはお安を山へ誘出した夢を見たのと同じ氣持から自然に起つたのであつた。人間だの家だのと、小うるさい者があるから、おらの思ひが徹らないのだ。

彼れはいつとなしに緣側に寢そべつて目をつぶつて、此間お安と一しよに登つてゐたやうな嶮しい山を、おふみさんと一しよに登つてゐる有樣を、何とも云へぬ興味をもつて一心不亂に眺めてゐた。表の戶が開いて人の足音のするのを、却つて夢のやうに聞いてゐたが、「誰れです、そこにゐるのは」と、聲を掛けられたのに驚いて、身を起して見ると、そこに立つてゐるのは、御隱居樣であつた。女中のおふみとは反對に、瘦せつぽちのギズ〳〵した、目の窪んで小さな、品のない弱々しい老女なのだが、その顏を見上げた淸吉は、何故ともなく威光に打たれて、極りの惡さうな顏して恭しく挨拶した。

「誰れかと思つたら」と、御隱居樣は頓狂な淸吉の顏を見ると、安心したやうに云つて、「遊びに來なすつたのかい」

「御近所へまゐりましたから、ちよつとお邪魔に上りました。先日來お宅樣の御近所にも惡い奴がウロ〳〵してゐましたさうで御座いますが、お宅樣には變つた事は御座いませんのでせうな」

「何ですか。この邊はこの頃物騷だつてことですから。私の家では江川さんに二三日泊つて貰つたんですよ」
「今晩も江川さんの子息さんが泊りにいらつしやるんで御座いますかな」
「いゝえ、さう毎晩續けて來て頂いちやお氣の毒だから、昨夕からお斷りしてゐるんです。私は何だけど、ふみはあれで見掛けによらない臆病者なのでね。泥棒の噂でも聞くと怖がつて爲樣がないんですよ」
「泥棒つてそんなに怖いもので御座いませうか。私はまだ泥棒といふ者一度も見たことがありません」
「淸さんは相變らず面白いこと云ひなさる。私だつて泥棒を見たことはありませんさ。だけど、泥棒なんぞする人は、不斷でも顏付がちがつてゐるんだつてね」
「左樣ですかな。どんな顏してゐますのでせう。御隱居樣にはお分りにならねえんで御座いますか」
「さうね。……私にそんな目利は出來やしないけれど、强盜だの人殺しだのしさうな人の顏は、あたり前の人の顏とはどこか知ら違つてゐますよ」
「御隱居樣にはそんなことがフントにお分りになるんで御座いますか」
淸吉は小さな濁んだ老女の目を薄氣味惡く思ひながら、そつと見上げた。老女は退屈凌ぎに愚かな相手を弄ぶつもりで、
「それは年の効で、私にもちつとは分りますよ。淸さんなぞは顏のどこを見ても穩かな相をしてゐなさるのが、お腹の中に惡い考へのない何よりの證據なんでせうね。この家でも、江川さんなぞに泊つて頂くよりや、淸さんのやうな人に泊つて貰つた方が氣が置けなくつて安心だつて、ふみとも話してゐたんですよ」
「私は泊りに來てもよう御座います」

「さうして貰ふと、私の方では大變都合がいゝんですけれど、あなたの主婦さんが承知しないでせうよ。主婦さんが御亭主思ひで、夫婦仲が大變いゝんだつて、ふみが羨ましさうに云つてゐたつけが、それは、あなたのやうな人を御亭主に持つたなら、どんな女だつても御亭主を大事にするでせうさ」

「此方様でいゝと仰有りや、今晩からでも明日の晩からでも、私は泊りにまゐります。御隱居様は親切に云つて下さるから、私は此方様の御役に立つことなら何でもいたしますよ」清吉は不斷に變らない老女の捌けた言葉を、今夜は格別有難く感じた。そして、馴々しく、「私は御隱居様に折入つてお願申したいことがあるので御座いますが」と、極りの惡さうな顏して云つた。

「私に出來ることなら何でも聞いて上げますよ」

「それがちよつと申上げにくいんでね」

「そんなに六ケ敷ことなんですかい。云ふだけ云つて御覧なさいな。私に出來ないことならお斷りするだけだし、人に知らせて惡いことなら決して私の口から云やあしませんよ」

老女はこの男の望みは何であらうかと、好奇心をもつて訊ねて、清吉を懐かせるやうに目顏を和らげて、縁側の方へにじり寄つて、耳を近づけた。

清吉は相手の親切に惹かれて、自分の思つてゐることをみんな打開けて、力を借らうとしかけたが、ふと心を取直した。いや〳〵この婆様に云ふべきことぢやない。おらとおふみさんとの仲は、おらとおふみさんと二人の間のことで外の人間の知つたこつちやねえ。外の者の世話になつちや、二人がいゝ仲になつたつても、後になつて物事が面白くねえ。婆様が親切に云つて呉れても、おら婆様の世話にやならねえぞと思ひ返して、喉まで出かゝつてゐるものを飲込んだ。

「あなたの望みは何であらうな」と、老女が小さな目に微笑を浮べて頻りに答へを促すと、清吉は決心がゆるんで、浮つかりまた思ひを口へ出さうとしたが、そこへ、先つきそつと歸つて來て臺所の暗い所から此方を覗見してゐたおふみが、自分に關係した馬鹿げた事を清吉の口から御隱居樣の耳に入れるのをいやがつて、出拔けに座敷の明るい所へ姿を現はしたので、清吉は打明けようとしたことを再び中止した。

「清さん、御隱居樣にお願ひしてお琴を聽かせてお貰ひなさいな。先つきさう云つてゐたぢやないの」と、おふみさんは傍から云つた。

「琴が聽きたいんだつて。何か變つた望みがあるのかと思つてゐたら、そんな事だつたのですかい。私もお湯から歸つたら、久振りでさらつて見ようと思つてゐたんですよ。お急ぎでなければ聽いていらつしやい」

老女はおふみに吩咐けて、床の間から自分の前へ琴を運ばせて、氣輕に、さも自分で樂んでゐるやうに彈きだした。

清吉は緣側に坐つて手を膝に置いて、謹んで聽いてゐたが、おふみさんが次の室へ退いて顏を見せなくなつたので、心はそつちの方へばかり行つて、琴の音を樂んでなぞゐられなかつた。歸るには歸られず、何となく威光のある御隱居樣の手前、膝を崩すことも出來なかつたので、泣きたいほどの苦しみを覺えて來たが、琴の音に誘はれたのか、垣根の外に立寄る者のあるのに氣づいた「オヤ炭屋の清さんがゐるよ」と囁いてゐる聲も耳に入つた。垣根の外にはクス〳〵笑つてゐる者もあつたが、やがて、誰れかゞ聲を立てて笑つた。清吉が氣にして振向くと、笑聲が一層高くなつた。

そこへ江川が庭から入つて來たが、琴の音を亂さないために、誰れにともなく輕く挨拶しただけで默つて緣側に腰を掛けた。清吉の胸には不快な感じが込上つた。

老女は聽者の多いのを喜んで、ます〳〵身を入れて彈きつゞけた。チリン、ツルン、トテヽン、ツルンと、響く絃の

音は冴えてはゐないし、唄聲もさして美くはなかつたが、おふみが言觸らした噂によつて、東京で何處へ出て彈いてもひけを取らない名人上手であるやうに近所の人には思はれてゐた。さう思はれてゐるといふ誇りもあるし、今夜はことに湯上りのいゝ氣持で老女は調子づいてゐたので「道のさかえと祝しけり〳〵」と、一曲を彈き終ると、ホッと息を吐いて緣側の方を見た。淸吉はお禮のつもりで頭を垂れた。

「おふみ、お茶でもお入れなさいな」と云つて、老女も座を立つて、團扇を持つて緣側へ出たが、淸吉には脊を向けて江川に話しかけた。この夏は不景氣のためか、貸別莊や貸室の契約がまだいくらも出來てゐないことや、昨日の溺死人の身元の分つたことや、二三日うちに井戸浚ひがあることなど、世間話がはずんだが、おふみが茶器を運んで來た時、

「お前、あの事を江川さんに書いて頂いたらいゝぢやないかね。手紙は早く出しといた方がいゝよ。お前の思つてることを詳しくお話しゝて、御面倒でも江川さんに書いてお貰ひなさいな」と、老女がふと思出したやうに云ふと、

「先つきちよつとお願ひしときました」と、おふみは答へた。

「今此處で書いてもいゝですが、も一度よくお話を聞いてからにしませう。間違つちやいけないから」と、江川が云ふと、

「間違つちやいけない。お前の思ひが先方へよく通じなきやいけないよ」と云つて、老女は、硯や紙を次の室へ持つて行つて、よく譯を話して書いて貰ふやうに勸めた。

「ぢや、御面倒せうけど、早速お願ひしませうか知ら」と、おふみは稍含羞んだ顏して云つて、座敷の片隅から卷紙や硯を持出して、自分の部屋の方へ行つた。江川は緣側から上つて、おふみの行く方へ隨いて行つた。

「お茶でも飲んでいらつしやい。……此方へ來る次手があつたら、またお寄んなさい」

老女はさう云つて、清吉の側を離れて、座敷の中へ入つて、身體を横たへて、自分で肩を叩きながら、何やら獨言を云つた。清吉はお茶には口をつけないで、暫くぢつとしてゐたが、おふみさんの微かな話聲は絶えず耳について、彼れの頭の中にいろ〳〵な事を考へさせた。

老女は、清吉が何時までも同じ所に坐つてゐるのを顧みて眉を顰めたが、人間が痴鈍なためと見做して、別に怪みはしないで、「主婦さんが心配してゐるだらうから、早く家へ歸んなすつたらいゝでせう」と柔しく云つた。

「ハイ……」と、清吉は我れに返つて、痺れの切れた足を撫で〳〵庭へ下りたが、女中部屋の方へ心殘りがして、直ぐに出て行けなかつた。それで、勝手口の方へ廻つて、薄暗い所から顏を突出して、女中部屋の様子を覘見した。江川が筆を採つてゐる側に、おふみさんがしだらなく坐つてゐるのがよく見られた。二人の顏と顏とがすれ〳〵になつてゐるやうに思はれた。

「何書いてるだな」と、清吉はその手紙の文句を知りたくつて溜らなくなつた。自分に物が書けて、おふみさんのためにさういふ手紙が書きたくてならなかつた。江川が得意で筆を採つてゐるのが羨ましかつた。何が悅しいのか、おふみさんがニコ〳〵してゐるのが、たまらなく可愛らしかつた。

通りがゝりの人に怪まれたので、清吉は慌てゝ首を引込めて、當てもなくスタ〳〵と歩いたが、今夜このまゝ家へ歸つたら、一生おふみさんに會はれないやうな氣がしだした。それに、江川とあの女と顏を突合はせてゐる有様が目に浮ぶと、尚更いら〳〵した。

「おら、いやだ。……おふみさんがおらを好いてゐねえにして、おら、おふみさんを諦めることた出來ねえだ。口で約束

しなかつたと云つても、あの女の心とおらの心とでちやんと約束をしてあるだ」

おらは口は無調法だけれど、世間の知慧者のやうな知慧もないかも知れないけれど、構ふことはない、おらにはおらの知慧があるだ。淸吉は赤いポストの向うの空別莊の蔭に蹲んでゐた。そして、止切れ〱に砂利道を通つてゐる人影に目を注いでゐたが、今夜は、どの人間を見ても、男でも女でも、みんな薄汚いヤクザな獸物のやうに、彼れの心に映つた。

いゝ都合で、人通りの止絕えたところへ、おふみさんがチョコ〱走りでポストへ寄つて來るのが見えた。江川の書いた手紙がポストの口へ入れられた。それと同時に、淸吉は女の前へ自分の姿を現はした。

「あなたを此處で待つてゐたゞよ」と、彼れは云つて、吃驚した相手の顏をニヤ〱笑ひながら親しさうに見下して、

「あなたが東京へでも歸んなさりや、一生會へないかも知れねえから、おら、あなたに記念にいゝ物を上げたいと思つてゐるんですがね、受取つてくんなさらんか」

「そりや頂いてもいゝけれど、どんな物なの？」

「此處に持つちやゐねえ。あなたが受取つてくんなさりや、明日の晩にでも、秘密で持つて來ますだよ。御隱居樣にも知られねえ所で渡したいんだが、明日の晩おらが垣根の外へ持つて來た時にこつそり取りに來てくんなさらんか」

「だつて、御隱居樣は神經が强いから、あなたが庭を覗いたりすると、直ぐに氣がおつきになるんだよ」おふみは淸吉から强いて物を貰ひたくはなかつたのでさう云つたが、この愚かな男が何を記念にくれるつもりなのだらうかと、多少の好奇心が起らないではなかつた。それに、こんな男を怒らせてはならないと思はれたので、

「ぢや、あなたが相圖をするといゝわ。咳拂ひをするとか、石を投げるとか。さうすれば私出て行くわよ。だけど、御

隱居樣に變に思はれちやいけないから、遠方へは行かれないの。垣根の外ですよ」

「ぢや、おら咳拂ひでもするだ……こんな風に」と、清吉は、氣取つて二つ三つ咳拂ひをした。

おふみは思はず笑つた。宵に出拔けに清吉の穩かならぬ胸の思ひを聞かされたので、ふとおぞけ立つたのであつたが、よく見ると瓢輕な毒氣のない男にはちがひないのであつた。男に戀慕はれた經驗の乏しい彼女は、愚かな田舍者にでも、大切にされるのはあながちいやだとばかりは感ぜられなかつた。で、戀人同士が明日の逢瀨を待設けるのに似たやうな氣持を感じながら、清吉に別れてノロノロと家へ歸つた。

清吉も明日の夜を待設けながら、トボトボと家の方へ向つたが、おふみさんのやうな女を喜ばせる物を確に持つて行ける當てがあるのではなかつた。衣類は云ふまでもなく、大きい小さいさまざまな品物も、紙切一枚木片一つでも、お安が保管してゐるので、お安に秘密で持出すことは出來なかつた。金は何文――伊勢原のおよしとのイキサツがあつてからは一厘――清吉の自由にはならなくなつてゐるので、女の氣に入りさうな品物を買つて送ることも出來なかつた。兄や兄嫁に賴んで金を借りるのはいやだつたし、秘密で借りたつて、あとでお安に知れるのは極つてゐるので、知れたあとが煩さかつた。

「おら、今日は金が慾しくてなんねえ。おらの一生に一番氣に入つた女のおふみさんにやるのだから、あの女の吃驚するやうな物をやりたい」

彼れは先つきポストの側でおふみさんと約束した時分には、明日の晩垣根の外へあの女が出て來たなら、いきなり手拭か何かで猿轡でもくはせて、おらの力にまかせて、あの身體の重さうな女を引抱へて、裏の濱邊へ連れて行つて、女の心の中を得心の行くきで訊糺さうとたくんでゐたのであつた。

「おら、力つくでゞもおふみさんの腹の中を充分に聞かなきや承知出來ねえけんど、あの女がどう思つてゐようとも、おらがあの女にゾッコン惚れてるのはちげへねえだから、おらの思ひを知らせるために、あの女の吃驚するやうないゝ品物をやることにしたい」

さう思つてゐるうちに、彼れは案内を知つてゐる小山の別莊の内を思浮べた。あの内へ踏込みさへすれば、金時計でも金の指環でも、女の頭や身體の裝飾になる者でも、何でもあちらこちらにころがつてゐて、慾しいものが望みのまゝに手に入りさうな氣がした。

「おら、金も銀も慾しかねえだが、あの女の慾しがるものをやりたいのだ」

(五)

それは眞夜中時分であつた。清吉はお安の熟睡を見すまして家を忍出て、山手の小山別莊の裏通の小徑に立つた。石榴の枝が竹垣の外へ喰出てゐた。彼れは先日足休めをした所から屋敷の中を見ながら、暫く躊躇してゐたが、人の聲一つしない夜の靜かさを、彼れは生れてはじめてのやうに淒く感じた。そして、垣根を越へようとして、攀上りかけながら、こんな何でもない境が嶮しい崖でゞもあるやうに廉心が怯んだ。

「おらの好きな女を喜ばせるためだ。何したつて構ふことねえだ」

彼れはさう考へるとゝもに、雜作なく庭へ入つた。庭木戸の懸金を外して置いて、芝生の上を踏んで雨戸の側へ近寄つた。燈火の點いてゐる部屋はあつたが、疑ひもなく家の者は眠つてゐるので、ヒツソリしてゐた。彼れは彼方へまはり此方へまはり、雨戸に觸つて見たが、彼自身の家の雨戸とはちがつて、頑丈に鎖されてゐて、あたりまへの手業では取

外せさうではなかつた。

彼れは床の下へも潜繰込んで暗い所を當てもなく匍廻つたりしたが、平生稼業をしてゐる時よりも、却つて熱心になられた。埃にまみれ汗にまみれ頭や肩や手足を打たれても、そのくらゐなことでは心はめげなかつた。便所の掃除口からも頭を突込んだ。が、何處からも内へ入れる望みはかなはないと、やうやく極りがついたので、折角たくらんだ大事業の失敗を悲しみながら、再び芝生を踏みにじつて、木戸口から外へ出た。

「あゝいふ家へよく入れることだ。どんな手段で入るのか、おいらの知慧ぢや及びもつかねえ」と、清吉は、綺麗な座敷で柔かい夜具に寢てゐるその家の人々の安心した眠様を思ひやつて、女持の金時計や金の指環の在所をも、目の前に見てゐるやうな氣で、歩いてゐたが、さうして幾つも續いてゐる別莊の側を通つてゐるうちに、ふと、彼れは自分が毎年夏場には出入りしてゐる村上家の別莊の前に立留つた•そこの家族はまだ避暑に來てゐないのであつたが、其處にも、自分の手に入れたいいゝ物が座敷の中に散らはつてゐさうに思はれた。

今度は清吉も身輕に垣を飛越へた。同じやうに雨戸に觸つたり、床の下や便所の口へ首を突込んだりしてゐたが、留守番小屋に接してゐる臺所の戸を試しに引いて見ると、雜作なく開いた。彼れは意外な幸運に會つたやうに喜んで、手さぐりで暗闇の中へ入つた。辛うじて索當てた電氣のネヂを捻ると、近に來る家族を待つてゐる部屋々々は、小山の別莊に劣らぬやうに綺麗であつた。——間數の少い安普請であつたが、清吉の目には、自分の家よりは美しい別莊は、どれも同じやうに綺麗に見えるのであつた。——彼れは汚れた足で疊を踏んで、あちらこちらを見廻つて、押入を開け戸棚を開け、隅々まで搜したが、豫想とちがつて、差當つて自分に必要な物は一つも見當らなかつた。世帶道具だの夜具だの、机だの書物だの掛物だの、さういふものは、いくら價値のあるものであつても、彼れは手を觸れようともしなか

つた。あの女を喜ばせるやうな物の何處にもないのに失望した。
「おらの欲しい物はどこにもころがつてゐやしない」と、淸吉はかういふ筈ぢやなかつたがと、物盜りの困難を、生れてはじめて身にしみ〴〵と覺えた。そして、最早脇目を振らないで自分の家へ急いだが、裏の戸口は彼れが出掛けた時のまゝに開いてゐて、幸ひにお安は鼾を立てて眠つてゐた。
淸吉は汚れた顏や手足を洗つて、疲れた身體を硬い蒲團の上に横たへたが、朝までいやな夢ばかり見ていゝ氣持に眠ることが出來なかつた。朝起きても顏を洗ふのも大儀さうに、膝を抱へて、夏の日のキラ〳〵光つてゐる戸口を見てゐると、「なにをボンヤリしてるんだね。顏色も靑いよ。身體の加減が惡いのかい」と、お安は氣遣はしさうに訊ねた。
「どこも惡かあねえよ」
淸吉は口輕く云つて、身仕度をして兄の店へ出掛けた。
昨夕村上の別莊へ泥棒の入つたことや小山の別莊へも入りかけたことが、早くも兄夫婦の耳に入つてゐた。淸吉は空呆けて噂を聞いてゐた。得意先へ行つても、道で知人に會つても、その話を聞かされた。巡査に出會ふと、ふと胸騷ぎがして思はず頭を垂れたが、誰れにも疑はれてゐないことが分ると、安心したばかりでなく、一種の誇りをさへ感じるやうになりだした。「警察がいくら調べたつて、その男はおらだつてことは分りやしめえ」と、ひとり笑を浮べたりした。
「いつまでも泥棒が捕まらなくつて困るぢやないかね。朝鮮人らしいといふことだけれど、泥棒に入つても物を盜つて行かないんだつてよ。變でねえかの」お安は晩餐の時に不思議さうにさう云つて、夫の顏を見たが、淸吉はその時ふとお安の目付に脅かされた。巡査でも兄でも、町のすべての知人の目は怖くはなくなつてゐたが、お安だけは油斷がならない氣がした。こいつ、伊勢原のおよしの事でもおふみさんの事でも、おらが內所で思つてる女の事は、正物を見ねえ

でもちやんと知つてると、おらの鬪合つてることは、一切知り拔いてるやうに不斷云つてゐるが、こいつだけは、昨夕鼾を搔いて眠てゐても、ちやんとおらのしたことを知つてゐあがるかも知れねえ。

「泥棒が何人入込んでゐようとも、おれだちは安心なものだ。泥棒に持つてかれさうなものはねえだからの」と、淸吉は事もなげに云つて、「お前は昨夕はよく眠とつたゞらう。夜中に目を醒ましもしねえで」

「それがどうしたゞよ」お安は變に思つて訊返した。

「どうもしねえだ」淸吉はドギマギして、「お前が此間のやうな怖い夢を見りやしなかつたかと思つたから訊いたのだ」

「……お前は昨夕夜中に外へ出りやしなかつたらうね」

「外へ出ものるかよ。おら、よく眠とつた。なぜそんなことを訊くだよ。お前は時々勝手な夢見たいなことを云つて、おらに言ひがゝりをつけるからいけねえ」

「だつても、お前は今朝青い顏してボンヤリしとつたぢやないか。心配がなくつてよく眠た人の顏はあんなぢやないだらうと、わしは今思つてるだよ」

「ハヽヽ」と、淸吉はだし拔けに笑つた。そして、心配のなさゝうな穩かな顏をお安に見せようと努めた。が、自分の顏をしよつちゆう穴の開くほど見詰めてゐる人間がそばにゐることが、淸吉には煩くつて溜らなかつた。今日は煩い上に次第に怖くなつた。警察がいくら調べたつても、あれをおらの所爲だとは分りやしまいが、お安の奴は今にも嗅ぎ出すかも知れないと、自分の家にゐるのも居つらくなつた。

食後は團扇で蚊を拂ひながら、垣根越しに隣家の老人と高い聲で世間話をしたり、上框に腰を掛けて、猫をからかつたりしてゐたが、時間を見計らつて、だらけた帶を締直して、團扇を持つたまゝフラ〳〵と外へ出た。臺所から振返つ

たお安の目の光つてゐるのには氣がつかなかつた。

（六）

空は曇つて蒸暑かつた。石村の家の裏の小徑まで來た淸吉は、あたりに人通の絕えたのを見極めてから、力を入れて二三度咳拂ひをした。一心を籠めて待つてゐると、自分には天をも驅けれるやうなえらい力が身體一杯に湧いて來たやうな氣がした。庭には靜かな足音がした。スツと木戸が開いた。そして、おふみさんに逢ひない顏が木戸口から二三歩此方へ寄つて來たが、すると、溢團扇の外には女へやるべき何物をも持つてゐないのに氣づいた淸吉は、

「此處には持つてゐねえよ。晝間婢のゐねえ間に持出して、直ぐそこの砂山の中へ埋めといたから、これからおらと一しよに取りに行つておくんなさい」と囁いた。いやと云つて逃げるかも知れないが、さうしたらかうだと心構えをしてゐたが、おふみは案外氣輕に、

「砂山へ埋めてるんだつて？直ぐそこなら行つてもいゝわ」と云つて、淸吉のあとに隨いて歩んだ。自分を慕つてゐる男が馬鹿の一心から自分に贈らうとしてゐる物は何だらうと、これまでに男から贈り物などされたゝめしのないおふみは、この男に對する不安な感じはケロリと忘れたやうになつて、板塀と土塀との間の暗い小徑を辿つて砂丘の方へ急いだ。その間に、しば〳〵隱し物の名を訊ねたが、淸吉は默つてゐた。

砂丘へ上ると、一群の漁火が大海の一方に見られた。風は強くはなかつたが、打寄せる土用波は激しかつた。「此處へ坐んなされ」と、淸吉は小祠の側に蹲んだ。

「何處に埋めてあるの？早く出してお見せよ。人が來たらいけないぢやないの？」おふみはふと疑ひを起して薄氣味が

惡くなりだした。

「誰れも來りやしねえよ。おら、あなたには隱さないで昨夕からの事を話すだから、よく聞いてくんなさい」

清吉は本當にすべてを打明けようとして、おふみを側へ蹲ませたが、キョロ〳〵とあたりを見廻してゐたおふみは、ふと近寄つて來る人影を見つけて、むしろ心頼みにしながら「誰れか來たよ」と小聲で知らせて立上つた。

敎へられて顧みた清吉は、化物に襲はれたやうに吃驚した。此方を見詰めてゐるらしい女の影はお安の姿に似てゐるやうに思はれた。

二人の目についたと知つた影は咄嗟に驅寄つて、おふみの腕を捉へて引据えるやうにしながら、二人の顏を睨みつけた。その目その口その顏が人間の相をしてゐないので、おふみは爭ふ言葉も口から出なくつて、一倒に振切つて逃げようとしたが、力が及ばなかつた。清吉は慌てゝ留めかけたが、お安の手を離れたらおふみが逃げて歸りさうなのが氣遣はれた。

「此間からお前の樣子が變だと思つてゐたら、こいつに誑かされとつたのだな。わしが何處かで見た顏かこいつだつたのだ。他所から來た女に巫山戯た眞似をされて承知出來るか。畜生、どうするか見て居れ」

「私はあなたに恨まれる譯はありませんよ」

おふみが言譯をしかけると、お安は一層いきり立つて「二人でこんな所へ來やがつて、譯がねえと、どの口で云へるだに」摑みかゝるのを撥除けるはずみに、互ひに足を辷らして、女二人は砂山からころがり落ちた。一人の罵る聲と一人の助けを求める聲とが、高い波の音にも消されないで、微かに清吉の耳に傳はつた。

が、清吉はそこへ驅け下らうともしないで、二つの黒い影がもつれあつて轉んでゐるのを、暫く氣味の惡い夢を見て

ゐるやうな氣で見てゐた。

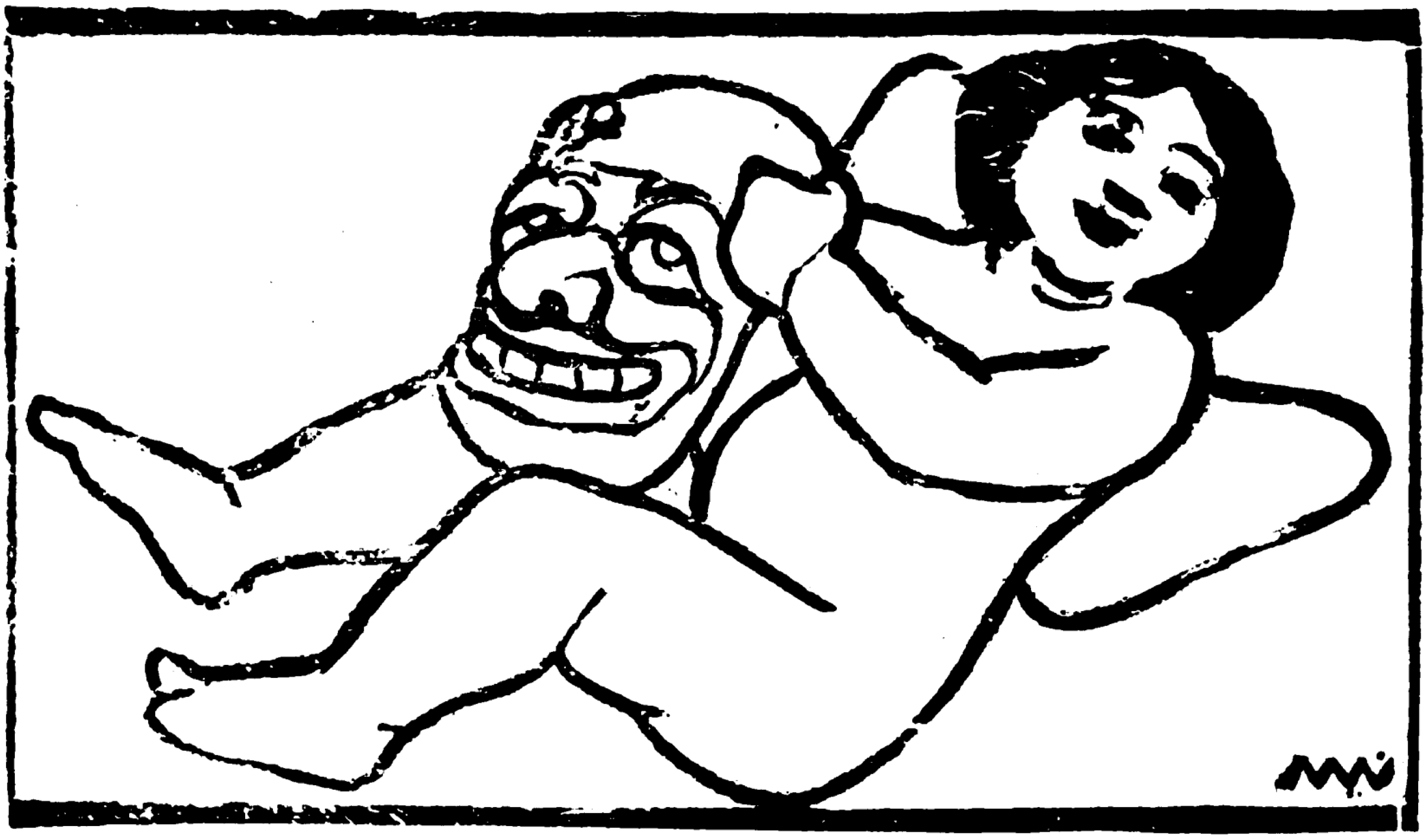
白い齒を立てゝ打寄せる土用波が、二つの影を浚つて沖へ持つて行つてくれゝばいゝと、彼れは波頭を見詰めた。……波が遠慮してやつて來なければ、おれが、二人を引抱へて波の中へ飛込むぞ。……「これに懲りておらに會ひたくねえ女を助けたかねえ。これからお安がおらにどんな煩い口を利くか、どんな狂人見たいなざまをするか。おら思つても我慢出來ねえだ」

清吉はふと勢ひづいて、濱の方へ飛んで下りた。

「清さん、言譯して下さい。私はなんにも知らないんだから。罪はないんだから」と、おふみさんは泣聲を立てた。

「お前さんは知らないと云つても、おら、お前さんに惚れてるだよ。この婦を追放だしてもお前さんと仲よく暮らしたかつた。……だけど、それや駄目なこんだと、おら今氣がついたゞ。……おら、お前さんやみんなが思つてゐるやうな馬鹿ぢやねえ」

生きる瀬のねえのに、やすく\/生きてゐやあがる世間の奴等こそ、大馬鹿だと、これは自分一人の腹で思極めながら、お安には彼れの手の平で猿轡を喰はせて、一言の恨み言も云はせなかつた。そして、滿身の力を籠めて、咄嗟に女二人を抱へて、逆捲く波濤に向つて、突進んだ。



直輔の夢（中編）

里見弴

二つ違ひのすぐの兄は、よく覺えてゐると云ふのだが、直輔には、母の記憶はまるで殘つてゐなかつた。覺えてから十三四まで、引續きづッと育てられたのが、兄に附いてゐた瘦ッぽちの「ちいちやい婆や」に對して「大きい婆や」と呼ばれてゐた、二十貫以上もかゝる大女だつた。前身は、橫濱で名うての大親分の女房だつたとか云ふのだが、成程と肯けるやうな氣性者で、その代り、それこそいろはのいの字も分らないと云ふ方だつた。この五十女は、總てに一風變つたやり方をもつてゐた。例へば、まるで、婆やが子供を可愛がるなんて、これ以上恥しいことはない、と思つてでもゐるやうに、づけ／＼と亂暴に扱ふ、——勿論それは、裏だなの山の神が、自分たちの子供を扱ふ仕方と變つたものではなく、別に稀らしがるほどのことでもないのだが、保姆教育で、そのほかの扱ひ方を知らなかつたと云ふよりも、知つては

ゐるが、子供は、こんな風にして育てるのが一番いゝのだ、と信じて、故にさうしてゐる、と云つた具合のところがあつた。いつかどこかで、絶壁から子供を蹴落す獅子の話でも聞いて、それ以來、人には云はないが、自分だけはその信念に凝りかたまつてゐる、とでも云つた風な、自信に充ちた調子で、モリモリ手荒に扱ふのだつた。あれでは、あんまり直ちやんが可哀想だ、などゝ注告するものもあつたくらゐだが、父親も、その自信に充ちた容子には、自然と信頼できたものとみえて、一さい任せきりにしてゐた。直輔にとつても、それは決して、はたで考へるやうな辛いものではなかつた。嚴しくする時ほど、すぐその裏では、愛情が燃えさかつてゐるのを、なんとなく感じてゐた。震えあがるほど利きはするのだが、然し、辛いとか、いやとか云ふ氣持ではなかつた。

夕方、臺所の忙しい頃分、雷がなりだしたので、五つか六つの直輔が、兄たちとの遊びをやめて、「大きい婆や」のそばへ駈けつけて行くと、竈の前にどかりと坐りこんだまゝ振り向きもしない。うしろから首ツ玉にぶら下つてゆすぶりながら、しきりと鼻聲を出したり、裸つた懐の、片手では持上らないほど重い乳房へ頭をこすりつけて行つたりしてゐるところへ、すぐの兄と「ちいちやい婆や」とが來て、

「あら／＼、大きな赤ちやん」

と云ふやうなことで、仕舞には、乳頭へ芥子を塗つてやらう、などゝ、冗談半分小皿にそれをかいて來た。それまで、いくらかぢりついて行かうが、そばで囃し立てやうが、知らん顔をしてゐた「大きい婆や」が、いきなり「ちいちやい婆や」の手から小皿を引ツたくつて、こんなものではまだるつこい！ と云ふやうな意味を、戸塚在の訛をまる出しに呟いたと思ふと、それは流しの下へ叩きつけ、返す手で、膝の上の直輔の頭を、うんとむかふへはね飛したのが、土竈の角へゴツーンといつた。――そんな時でも然し、直輔は、ちつとも婆やを恨めしくは思はなかつた。見舞に呆れ

て立ちつくしてゐる「ちいちやい婆や」やすぐの兄に對して、「それ見ろ！」と云ふやうな氣がして、わん〳〵泣きながらも、ひそかに胸をすかしてゐた。

夜は、寢息で高くなつたり低くなつたりする大きな腹の上に、足を載せてねた。愛撫もしなかつたが、二人きりの時は、有繋に調子がづツと穏になつた。どうかすると、なんでもいゝから、人に勝れたものにならなければいけない、と云ふ意味の話をした。それには、自分のことは必ず自分で片をつけろ、決して人にたよるな、世間と云ふものは、倒れた人間は踏み越えて行くやうなひどいところだ、――そんな風に受けとれる考へ方だつた。

庭に大きな古池があるやうな、だゞツ廣い屋敷に住んでゐた頃、薩藩人らしい父親の好みで、或る暗い晩に、膽試と云ふことをさせられた。古池にかけた土橋を渡つて、木立の奥の、庭の隅にある、小さな稻荷かなにかの祠まで、印を一品もつて行く、次の者はそれを持つて歸る、と云ふ仕方だつた。二番目の兄にもすぐ上の兄にも行けなかつたのを、直輔はやり終せたと云つて、その時くらい「大きい婆や」が感激したことはなかつた。

「よし〳〵。えらかつた〳〵」

と云ひ續けながら、武者修業の勇者を輕々と抱きあげて、さつさと寢部屋の方へつれて行つて了つた。

酒には溺れても、人の好意が、中々すなほに受け入れられない直輔の性分には、慥にかう云ふ幼時の躾も影響してゐた。滅茶苦茶に惚れたとか、たまらないほど好きだとか、さう云ふ經驗が自分にないだけに、ひとの好意もうけとり憎いものだつた。疑ふ、と云ふよりは、自分がそれに慣しない、――自分に出來ないことを、ひとからばかり受けるのは、あんまり虫がよすぎる。と云ふ氣持だつた。

思ひがけなく、四年ぶりで病床に見舞つたお愛からは、いつになく直輔も、すなほに受けとれる好意が流れて來るや

うに思はれたのだ。それが、淡い、靜かなものに感じられただけに、うけとり易くもあつたのだ。

四日目には、もう一度尋ねて行きたい氣持がしきりに募つて來て、南緣から硝子戸の棧をうつして、部屋のなかまで射し込んだ日向を、頭を擁えて、子供のする「芋虫ごーろごろ」のやうに轉げ廻つたりした。もう敗荷圖も手にはつかなかつた。兎に角、女將さんのところへ出かけてみようか、さう思つて階下まではおりて行つたが、なんとなく氣がくぢけて了つて、茶の間をまご／＼して、長火鉢に膝頭を凭せた中腰のまゝ、夢中で煙管を二三服はたくと、コン／＼咳込みながら、また二階にあがつて來た。少しおそくなつちやつたな、疊の上の膝を見て、さう思ふと、先刻から愚圖々々してゐたことが、急に悔ゐられ、自分に腹が立つて、薄ら寒くなつて行くのと一緒に、どうにもならない不機嫌に陷つて了つた。

飯に呼ばれて、階下におりてみると、暗い電燈が、食器類を白く光らせて、陰氣に默つてゐた。なんだか、病院の夜と云つた氣がした。

「オイ、婆や／＼」

直輔は、肝癪聲でさう呼びながら、眉根をよせて、球を覗きこんだ。十燭の炭素球に取り變つてゐた。「どうしたんだい、こゝの電氣は……」

「毀れました」

と臺所の方から、お汁の椀を盆に載せて、うは目づかひに電燈の方を見あげがなら、小柄な、顏ばかり大きい老婆が、そろ／＼とはいつて來た。

「どうかしたのか」

「いゝえ、どうもしやアしません。昨夜までなんともなかつたのに、今夜は、日の暮からまるツきりつかないんです……」
「それでどうしたんだい」
「仕様がありませんから、御湯殿のをとつて来てはめ換へたんです」
「捨てたか」
「いゝえ、こゝに置いてありますけれど、私の目で見たつて、線が切れてるんですもの、もういけやしません」
「どれ、お見せ」
茶簞笥の上から取つて渡されたのを、灯にすかしてみると、一本切れたタングスの線が、キラ〳〵と震えてゐた。
「全體から云ふ新式の球は、明るい代りには弱ござんすよ。矢つ張り以前からの普通のやつに限りますね」
「はたきを、ガン〳〵乱暴にかけたりするからさ。……これぢア、暗くて仕様がありやしない。毀れたら毀れたと云つてくれりや、買つて来て貰ふんだつたのに……」
さう不機嫌に呟きながら食卓の前に坐つて、箸をとらうとしたが、ふと、夕刊に重ねて、葉書が一枚あるのが目についた。宛名を書いた、ペンの、見覚えのない女文字らしいのを見るなり、オヤ、お愛ぢアないかな、と思つたが、取りあげてみると、果して「長谷大佛前　小林あい」としてあるのに、豫想してゐながらもはツとして、裏をかへすと、飛びつくやうに讀みくだした。
「昨日はむさくるしきところへ御出下され有難う存じます　思　がけなく久々にて御目にかゝれてこんな嬉しいことは御座いません　また結構なる御品頂戴致し厚く御禮申上げます　これにおこりなく御通りがゝりの節は何卒御立寄下さ

いまし　右取敢ず御禮まで　末筆ながら御身御大切に　十二月廿八日夜」

微にもの足りない氣がした。すぐ初めからもう一度讀み返して見た、今度はなんとなく微笑まれて來た。あゝ云ふ社會の普通の女らしく、文字は拙く、文章もたど／＼しかつたが、直輔には、そこがまたよかつた。實感などは、夙の昔に磨れ切つて了つたやうな、使ひ古しの文句のなかに、なんとなく、いかにも彼の女らしい實感が、生々と感じられて來た。さう思つて讀む特別の味はひを、一句々々胸のうちにころがしながら、三度直輔は讀み返した。その時、待ちくたびれた老婢が、

「おつけいたしませう」

「ン」

うはの空で、茶碗を盆の上に載せてやりながら、表をかへして、目で一字づゝなぞるやうにした。りゑに訊いたとみえて、所書きでも名前でも正確だつた。最後には、消印までも見た。日附の翌日の午後一時に、鎌倉局で捺したものだつた。

「へ」

先刻から、飯をよそつた茶碗を差し出してゐるのに、一枚の葉書をいつまでもひねくり廻して氣がつかずにゐるので、老婢のこの「へ」には、いかにもくさ／＼して了つた。と云ふやうな語氣が洩れた。直輔は、ヂロりと見返して、無言で茶碗をうけとつて、手荒く食卓の上に置いた、

「この葉書は一體いつ來たい？　午後の便だつたのか」

「へえ……」

「今朝のうちに來てゐたのを忘れてたんぢやないか」

「さうかも知れませんけど、私の氣のついたのは、つい今しがたでした」

「どこに入れてあつたんだ」

「女中部屋の窓から擲り込んでございました」

「それに今時分まで氣がつかずにゐたんだね？　その間、一度も自分の部屋にははいらなかつたのかね？」

何か云ひかけて、老婢は默つて了つたが、暫して、あゝあ、うるさい〳〵、と云つた氣持の溜息をついた。まづさうに鯵の煮たのをつツ突いてゐた直輔は、それを聞くと振り向いて、

「俺には、手紙をうけとるのが、随分樂みなんだ。その氣持がお前に解るんなら、もうちつと氣をつけてくれよ。それから、あさ來てたのを忘れたのなら忘れたでいゝんだから、正直にさう返事をしてくれよ。電燈だつて……」

「電氣の球なんぞ、私どうも致しやアしません」

「お前がどうしたとも云つてやしないがね、たゞ、早く毀れたと云つてくれりやア、飯前に俺が散歩がてら買つてくるんだつたんだ。湯殿のゝで間に合せたり、そんな餘計な氣を利かせてくれない方がよかつたんだ」

「へえ、どうもすみませんでした」

「さうすぐ怒らなくつたつていゝぢやないか」

「怒つてやしません」

ちよつとの間、お愛の葉書で取り直せた機嫌が、またすつかりこぢれて了つて、直輔は、味もなく二ぜんの飯をカツこむと、いつもは茶の間で讀む夕刊をひつ掴んで、さつさと二階に引き上げて了つた。桐の丸桐に炭をつぎたしてか

ら、巻いたのだと餘計のんで仕様がないので、燐寸だけにきめてゐる煙草を、たて續けに五六服ふかすうちに、けれども、老婢のことなど忘られてしまつた。尤も、お天氣者で、明日とも云はず今夜のうちにも、何かきつかけがあつてちよつと氣が變りさへすれば、ケロリとして、まめ〳〵しく世話をやきだす老婢なのだし、それにもとより、いつまでもこだはつてゐるほどの問題でもなかつた。

さてから落ちついてから、考へてみるまでもなく、ほとんど本能的に、お愛に手紙を書かうと云ふ氣はなかつた。もとの沖津の女將さんを尋ねて、偶然話が出たので、急に思ひたつて見舞つた、それに對しての葉書の禮、この二つは、重みが、實によく吊り合つてゐた。どこにも不自然がなかつた。然し今度その禮状に對して直輔から書くとすれば、葉書にたつた一行の文句でもが、ちよつと重たくなつて來る。一段落のあとの、新しいもち上りになつて、前の吊り合ひまでも崩すやうな、無理な感じが逭がれない。さう云ふことは、直輔には、本能的に出來なかつた。懐からお愛の葉書をりだして、補綴工の來信函にほうり込まうとした時に、ちよつと、もう一度讀んで見ようかな、と云ふ氣持が心を掠めたが、誰もゐないところながら、氣恥しくなつて、そのまゝ手から放した。靜まり返つた冬の夜に、コトンと冴えた音をたてゝ、それが函の底に落ちた。直輔はもう一服すひつけて、ぷうツと向に、眞ツ直に煙を吐いた。

その晩、二度目で、お愛の夢をみた。前の鶯綻の時のは、たゞ何かお愛に關する夢だつたな、とそれだけが思ひ出されるやうな、はつきりしないものだつたが、その晩は、目を覺した瞬間に、ハツと思つたくらゐ鮮かにみ、そしてそのまますぐ眠つて了はずに、初めから仕舞まで、すつかり思ひ出して考へ出ししたので、印象がすつかり深められてゐた。一種情調のある、面白い夢だつた。翌る朝おきてからも、また心のなかに繰り返してみた。誰かに話して聞かせたくてならなかつた。……そんな時、彼には、すぐ思ひ出される友達があつた。眞田と云つて、謂はゞ、夢をみる

ことの天才だつた。中學三年の時かに、機械體操の金棒から落ちて、どこかへひどく頭を打ちつけて、一時は白痴になつて了ふだらうと云はれたのが、いゝ按配に回復して、今なら、大抵あたまの要る仕事でもやつてやれないことはなささうなのを、うちが裕福なので、いつもぶら〳〵遊んではゐたが、その大怪我以來、ほとんど毎晩のやうに、奇想天外的だつたり、いかにも寫實的だつたり、いろ〳〵複雜な、面白い夢を、而もまざ〳〵とみるやうになつて了つた。そのことにまた、ちよつとはたからでは想像もつかないほど興味をもつてゐて、夜が來て眠るのを何よりの樂みにし、自分で氣に入つた夢はちやんと書きとめて置いたりした。小學校時分からの仲よしだつたので、怪我で、中學を中途でよして了つてからも、直輔は往き來してゐたが、時折その夢日記のなかゝら、最近の傑作を聞かせて貰つた。一體を云へば、ひとのみた夢の話くらゐ面白くないものはない。夢らしくぼやけて、取りとめがなければ云ふまでもないし、さうかと云つて、あんまり筋が通つてゐては、覺めてから補つたり拵へたりした跡が歴然として、どつちにしても興ざめなものだが、それが眞田のは、第一には、どうしたつて夢とより思へなく話す、どん〳〵に眞實味の勝つた筋の夢でも、成程そんな夢はありさうだなア、と思へるやうに話す。つまりそれは、勝手に補つたり直したりしてないから、十分に夢の實感が出て來るわけないだが、よほどまざ〳〵とみなければ、容易にそれが出來るものではない。その、たゞみたとほりを話すと云ふ、出來そうでむづかしいところを、眞田は、なんの苦もなく通り越してゐた。第二には、勿論、夢そのものがよほど凝つてゐた。もし "Dream-teller" と云ふ藝人があり得るものとすれば、彼は慥に一流の名人だつた。逗子に移つてから、直輔は、一度もこの友達に遇はなかつた。

ふと思ひつくと、パンと紅茶の朝めしもそこ〳〵に、書齋の机に向つて、眞田にあてゝ長い手紙を書きだした。無沙汰の詫、其後の身邊などについては、ほんの三四行で片づけて、早速昨夜(ゆうべ)の夢の話にかゝつた。以前よく往き來してゐた

時分には、どうかすると直輔の方からも、最近にみた變つた夢の話をし、それをまた眞川は熱心に聞いてくれたものだが、さういふ關係だつたから、久々の手紙が、すぐつまらない夢物語にはいるなども、さう可訝しなものではなかつたのだ。謂はゞ生徒、習作を、先生のもとに送るやうな意味でもあるのだから、出來るだけ念を入れて、またありのまゝに書かうとしたが、たゞお愛の名を出す氣には、どうもなれなかつた。で、夢ではよくある、誰とも知れない、それでよく知つてゐる人、として、假にAと云ふ女にして書くやうに斷書を添へた。

「自分はAのことで……」

と、直輔は書き出した。「自分はAのことで、何か差し迫つた用件をもつて、誰かを訪問するところだつた。まるで和蘭の風景畫そのまゝの、處々に水たまりのある低い平たい野原を行く。つれが一人ある。二十四五の商人態の男だが、現實では覺えのない、夢のなかだけで知つてる男なのだ。それが同行してくれなければ、その用件と云ふのが片づかないことになつてゐるのだが、そのくせ自分は、あんまり好意はもつてゐない。日光の直射のない靜かな空氣のなかを、肩を並べて、何も話さずにさつさと歩いて行く。——これが第一のシイン。

自分たちが尋ねたのは、柔道の道場かなんぞのやうに、廣い〳〵長方形の、たつた一間きりの建ものだつた。むかうのはづれに窓があるきりで、可なり暗い。入口から、長方形の長い方の一邊を行くのだ。遠くに小さく見えてゐる人々の方へ、だん〳〵に近づいて行くのだ。行きついて見ると、右の隅には長火鉢があつて、そのへんはちよつと茶の間然としてゐる。長火鉢の前、主人公の席には、訥子が胡座をかいてゐて、そのむかふには、訥子の家族が四五人もゐた。(と云つて、宗之助や長十郎がゐたわけではない。みんな見知らない男女だつた。)そこが家族的なのに引かへて、左の隅から折れ曲つて、二十人ばかり居並んでゐる連中は、羽織袴で座布團の上にキチンとかしこまつてゐる。自分たち

は、その家族的な一團と、宴會の客ちみた一列の人々との間に行つて、うしろに倚りかゝつたり、立膝をしたり、わりに氣樂な姿勢をとつて待つてゐた。待つてゐると云ふのは、訥子が今に何か或ることをして了ふと、自分たちの用件を聞くことになつてゐるのだ。姿勢は氣樂さうにしてゐるが、自分の氣持は緊張しきつてゐた。それを誰からも見透されまいとしてゐた。はたのものも、自分たちがはいつて來たことについて、故意に、無關心を裝つてゐる、それがこちらにはよく解つてゐた。自分は少し苛々して來た。まるで側にAがゐるかのやうに、(その實はゐないのだが、)「何しろ、訥子がえばつてゐられる土地だからなア」と、鎌倉と云ふ土地を輕蔑した意味で、はたにも聞えよがしに話しかけた。知らん顔はしてゐたが、慥にそれが利いて、訥子があの長大な體を起し、家人に着物を出せと云ひつけた。その着更がすむと、いよ／＼自分たちとの應對が始まるんだな、と思つて、堅くなりながら、つれの方を見ると、そんなにするな、矢つ張り氣樂な姿勢をとつたまゝにしてゐた方がいゝ、と云ふ意味を、目で知らせた。それで、身方ではあるが、この男にも、本當の自分の心持は解つてゐないんだ、今そんなまねをする必要はちつともないんだのに、と思ふ。自分の本當の心持、と云ふのは、Aが非常に好きではあるが、何も夫婦にならうの、體の關係をつけようのと云ふわけではない、つまりもつと精神的なのだ、と云ふやうな意味だつた。訥子が云ひつけた着物は、はつきり覺えてゐたつもりだが、今朝になつてみるとどうしても思ひ出せない。なんでも、裃とかなんとか云ふやうな、トンチンカンなものだつた。家人たちは、承知して、その仕度にと、さつき自分たちが横ぎつて來たやうに、細長い部屋を、笑ひさゞめきながら、ゾロ／＼むかふへ行く。そのうしろ姿が、だん／＼小さくなつて、仕舞に米粒ほどになつた。——これだけが第二のシイン。

自分はうちにゐた。うちと云つても、この逗子のうちではない。十五六の頃住んでゐた赤坂氷川町のうちによく似た

間どりだつた。中庭がある。それを隔て向の座敷には、自分の氣持などは、さつちよこ立をしても想像だにすることが出來ないやうな、俗も俗も、骨の髓まで世間人的な或る中年の男がゐる。（夢ではさう云ふ人間だと云ふことをよく知つてゐるのだが、現實には、誰と云つて、それにアイデンティファイする者はゐない。）ほかにも二三人、そいつの同類らしい男が、みんな洋服のくせに、云ひ合せたやうに煙管でスパリ／＼煙草をのんでゐる。自分の氣持は、すつかり弱々しくなりきつて、世の中があぢきなくなつてたまらない。心細い、淋しい、いやアな氣持だ。Aはもううちにつれて來てあるのだ。そのことが、世間的に云へば、非常によくない、無理なことだつたとは、自分も承認してゐるのだ。臺所の方で食器を洗ふ音がする。花曇りの日曜の、午後二時か三時で、うちぢう留守、さう云ふ一體の感じで、ムウッと鬱陶しく、ヘンに靜だ。その上、向座敷では、世にも淺間しい氣持のやつらが、洋服のくせに煙管で煙草をのんでゐるのだ、——自分は、もうちよつとで泣きだしさうになつてゐる。さうだ！　と不意に自分は思ひついた、この間にあれを探し出して取り返してやらう！　その「あれ」と云ふものは、何かの證據とかなんとか云ふ意味で、今の自分とAとには、是非なくてはならない大切な品なのだ。で、机の上をひつ掻き廻した。さうしながらヒョイと向座敷を見ると、自分のゐる方の座敷の縁側に、——つい一二間の近さのところに、うちの老婢が、こつち向きにしやがんで、膝の上に頬杖をついて、ニヤリと笑つてゐた。（今うちにゐる老婢のことなのだが、顏は本物とはまるで違つてゐた。青白い、陰險な、どうしても惡婆と云ふ相だつた。）自分はゾッとして、てれかくしに、指さきに觸れたものをひッ掴んで、攻勢防禦の氣持から、ツカ／＼と側へよつて行つた。老婢は、道ばたでよく勞働者がやつてゐるやうな、賤しいしやがみ方で、相變らずニヤリ／＼自分の心の底まで見透してゐるやうな笑ひ方をしながら、上目づかひにこつちを見あげてゐる。自分は手の下しやうがないので、いま出鱈目に掴んで來たものを、縁先の明るみでよく見るためにこつちへ近づいて來たや

うなふりをして、それを目の前にもつて來てみた。それは待合のくばりもの、手拭で、上包に石版刷で、のしや待合の名がすつてあつた。その屋號は忘れたが、なんでも築地の或家が吾々のあたまに喚び起すやうな背景をもつたうちだつた。それを見詰めながら、曾て覺醒の生涯で覺えのないほどの強度で、老婢を憎みに憎んだ。――こゝらで第三のシインがぼやける。

こりやとてもいけない、(事件は益々悪くなるばかりだ、と云ふ意味。)さう思つて、いよ〳〵Aに逢ひに行く決心をして、山の手線のやうな電車に乘るために道を急ぐ。第一のシインに出て來た商人態の男が、又あとからついて來てゐる。可なり急な崖(がけ)を、喘ぎ〳〵大急ぎで登つたが、その上の、茂つた木立のなかにある停車場を、電車はもう出て了つたあとだつた。仕方がない、○○へ行かう、とつれの男が云ふ。それは次の停車場の名で、外國語の發音だつた。自分はその方法ではとても駄目だと思ひながらも、姑くつれの言葉に從つてゐる、と云つたやうな不滿な氣持だつたが、薄暗く、ひえ〳〵とした木立の下を、どん〳〵山の頂きの方へあがつて行つた。――この第四のシインでは、自分の氣持は、相變らず緊張してはゐたが、前からみれば、だいぶん餘裕がついて來てゐた。

もう疲れて來たし、第五のシインは、ゴチヤ〳〵してゐて大分むづかしい。うまく書けるかどうか分らないが、まあやつてみやう。

アンフィシヤタアのやうな、廣い〳〵見物場だ。が、椅子も何もない赤土の傾斜で、その大きな天然の摺鉢を、何千萬とも知れない人間の頭が充してゐる。嵐の前のやうな陰慘とした黒雲が、――よくゴヤの繪にあるやうな凄い雲が、向の空を覆ふてゐるが、自分のゐる手間の方だけには、まだ日があたつてゐる。赤ッちやけたやうな日の色だ。大きく見れば摺鉢型だが、傾斜に不規則なデコボコがある、即平地もある。さう云ふ平地の一つに自分もゐるのだが、田舍の

祭禮か場末の緣日と云つた感じで、いろ／＼安つぽい食ひ物屋、――飴とか密柑水とか駄菓子とか、そんなものを賣りさうな露店が、埃にまみれて並んでゐる。見物に飽きた人々、――どれもこれも勞働者とか田舍漢とか云つた風の男女だつたが、――はその間を、ダルな氣持で、體をグタリ／＼させ、だみ聲をあげながら歩いてゐる。自分は、淺間しくさう云ふ光景を眺めやりながら、もうこゝへ來て了つては駄目だ、と思ふ。こゝへ來て了ふ、の意味は、はつきりしないが、その主格がAであることだけは慥だ。葉の厚い柑橘類の、六七尺の木が、傘を開いたやうに枝をひろげて、一本だけ立つてゐた。その日蔭には、一層目白押に人がかたまつてゐた。見ると、いつの間にか、例の商人態の男が、その群のなかに席を占めて、細い首筋をこちらに見せてゐる。あゝ、たうとうあいつも本性を出して了つたな、と思つて、もう誘ひもしずに、その平地から、擂鉢の底の方へ、人々の膝を跨いだり、肩を手で押しのけたりしながらおりて行く。こつちばかりに日があたつて、向はすつかり陰り、陰慘と暗いなかに、何千萬と云ふ頭が重り重つてゐる。もうすつかり勞れ切つて、緊張も熱情も消えかけて行く自分を、哀に思つた。その自ら哀む氣持にすら力がなく、涙さへ出ず、今はたゞ惰性的に、Aのゐる擂鉢の底の方へおりて行つた。

まだ第六に、料理屋かなにかの、ツル／＼に磨きたてた廣い廊下のシインがあつたが、はつきりしないし、もううんざりして了つたからやめる。云ふまでもなく、この夢の特徴は、徹頭徹尾Aに關係してゐながら、たうとう仕舞まで、具象的にはAが出て來ないことだ。一貫してかげの人物でゐることだ。その點がちよつと變つてゐるし、シイン／＼としても、中々面白く印象深いと思ふから、（それはみた當人だけの話かも知れないが、）久振りで君に話して聞かせたくなつたのだ。君一流の批評でも洩してくれゝば幸だ。」

かう書き終つて、もう讀み返してみる元氣もなく、封をして了つた。

いつかそとは風立つて來てゐた。硝子戸が、ガタ〳〵ン、コト〳〵ンと、正確に風の間を刻んで鳴つてゐた。松籟も高くなつた。それで、陽の光ばかりいやに强かつた。――なんとなくそこに一種の氣持があり、そしてそれが夢のなかの氣持のやうに思はれだした。

直輔は老婢を呼んで、さつきあげたばかりの寢床をとらせ、それが敷ける間、自分で、緣側に淺黄木綿の日よけ幕を引いた。

「御氣分でもお惡いんですか」

その老婢の言葉が妙に冷淡に聞えた。

「いや別に……」

羽織だけぬいでごろりと横になつたが、地の薄い日よけの目を透して、淺黄にも染まない白い光が、チカ〳〵飛び込んで來るので、もう階下におりかけてゐた老婢を呼び戻して、すつかり障子をしめさせた。大きく目をあいたまゝ、殆ど無念無想で、十分ほどあほ向けにねてゐた。それから目をつぶつた。いつのまにか、氣がつくとお愛のことを考へてゐた。起きて行つて、机の上に積み重ねてある雜誌類をひつくり返してみたが、讀みたい氣のするものがなかつた。その時、なんだか頭がカツカするやうに思へたので、額に掌をあてゝみた。さう熱くもなかつたが、もう一度老婢を呼んで、檢溫器をもつて來させた。

「お熱がございますか」

「なんだか、そんなやうな氣がするんだ」

今ひツ散らかした机の上を片づけたりして、いつまでもそこらをまご〳〵して廻る老婢がうるさかつたが、默つて我

慢してゐた。暫して檢温器をとりだすと、待ちかねたと云はんばかりに、
「どのくらゐでございました」
それを知らうために、ことさらまご〱してゐたんだな、と思ふと、よく看護婦などに感じられるやうな、へんに差出がましい親切が、のしかゝられるやうで可厭だつた。それでも目盛をみて、
「ない。六度八分だ」
「さよですか。それア結構でした」
と、いそ〱と階下へおりて行つた。あとで直輔は、一たん箱に入れた檢温器をもう一度とりだして、かけ直してみた。矢つ張り平熱より二三分たかいだけだつた。

その晩よなかゝら降りだして、二日と云ふもの、寒い、鬱陶しい日が續いた。直輔の厭人的な不機嫌は、極度まで行くと、すつかり弱々しく、たよりない氣持へ墮ちて了つた。二日目などは、朝から床を出ずに一日ねてゐたが、「ばアや！〱」とのべつに呼びたてゝ、ほんの枕もとのものをとるやうな用事までさせた。老婢も機嫌よく、ほとんど終日そばに附ききつてゐた。夜になつてから、暫く話が杜切れてゐたあとで、不意に直輔が、
「もと、淋しいな」
と、悲しい聲を出して呟いた。
「……へ……」

老婢が面喰つてゐると、ニコ〳〵ひとりで笑ひだして、

「さう云ふのがあるんだよ。有名な『金色夜叉』を拵へた紅葉山人つて人の小説にね、大事に〳〵して可愛がつてゐた細君に死なれた、優しい氣の弱い男がね、すつかり力を落して了つて、勤にも出ずに、老婢と二人きりで、ぼんやり暮してゐるところが書いてあるんだがね、時々から、たまらなくなつて來ると、もと、……その老婢がおもとさんつて云ふ名なんだよ、もと、淋しいな、つてね、たつた一言さう云ふんだが、そこが實によく書けてゐたつけ。その、もと、淋しいな、つて聲が聞えて來るやうでね。隨分昔に讀んだつきりの本なんだけれど、今ふいにそれを思ひ出したのさ、思ひ出すと、ちよつと云つてみたくなつたのさ」

「あらさうですか、私びつくりして了ひましたわ。……へえ、さうですかね、でも、今時そんな殿方つてあるもんでせうかね」

「それアあるだらうともさ。今時どころか、いつの代が來たつてあるだらうさ」

「さうでせうか」

「ぢア婆やは、だん〳〵なくなつて了ふつて云ふ意見なんだね」

「それア私どもなんぞに、なんにも分りやしませんけど　だん〳〵にから世の中が世智辛くなつて來れば、自然と男女の仲なんてものは……」

「やア〳〵、婆や中々大した議論家だね。でもなんぢやないか、男が女に、女が男にさば〳〵として了つたら、世の中に、なんにも結構なことがなくなつちまやアしないかい」

「さうでもございんすまい」

「婆やみたいになつちまへばさうかも知れないけど、俺なんぞまださうぢあないぜ」

「あんな、御冗談ばかり……」

翌日は、綺麗に晴れ亘つた。一雨ごとに來ると云ふ暖さで、今年になつて始めての春めいた、穏かな日になつた。朝の便で、眞田からの返事が來て、どうしたものか、近頃自分は一向面白いのをみないのに、君は大した傑作をみて羨望に堪へない、久振りで逢ひたいから、そのうち御見舞に行く、君も上京したら寄つてくれ、などゝ云つてよこしてあつた。直輔は、すつかり元氣づいて、急に思ひたつて東京へ出て行つた。

芝佐久間町の、仲の兄のうちに一晩厄介になつて、たらふく好きな支那料理を御馳走になつたり、向兩國に某家の賣立を見に行つたりして、翌日の夕方、いつもほど勞れもしずに、直輔はうちへ歸へて來た。

「誰もお人はなかつたらうね」

留守に來てゐた手紙を讀んで了つてから、念のために訊いてみた。

「ア、さう〳〵、昨日お出ましになつて暫してから、お年よりの御婦人がお見えになりまして、東京へお出かけになつたと申しますと、ぢアまた伺ひますからつて……」

「お年よりの婦人？　名前は訊かなかつたのかい」

「えゝと、鎌倉の、なんとか仰有いましたが……」

「藤波さんぢやないかい」

「えゝえ、ア、さうでした。慥に蘇波さんと仰有いました。あハ、から、體の大きい方で……」

「ぢアさうだよ。……おや〳〵、そいつア氣の毒なことをしたなア。……一人だつたらうね」

「えゝ、お一人でした。お留守中だけれど、お庭を拜見させて頂から、なんて、こちらをづうツと一廻りなすつて、私がお茶でも差あげやうと思つて仕度してゐると、結構なお住居ですこと。お歸りになりましたらどうぞ宜敷、いづれ近いうちにまたお伺ひ致しますから、なんて、お愛想よく聲をおかけなすつてね、まアお茶でも一つ、つて申あげたんですけれど、そのまゝお歸りになつて了ひました」

「さうかい、折角來てくれたのに、そいつア殘念だつたな。ま、然し仕様がない」

その晩、留守をした詫を葉書で出して置いたが、翌日になると、鎌倉へ出かけたくてならなかつた。りゑを尋ねれば、きつとまた大佛前に出かけることになる、——その氣持が自分の裡に露骨に動いてゐるだけに、けれども、直輔は、一日だけ辛抱することにして、もう凡そ散りつくさうとしてゐる庭の隅の、紅白の梅を寫生したりして日を暮した。

翌朝目をさますと、冬期にはめづらしいほどに、海が荒れだしたとみえて、普段はまるでわからない波の音が、松籟とまがひながらも、ごう〳〵と聞えて來た。名物の西風が吹きだしたのだ。——またこれで二三日は續くんだ、こんなことなら昨日出かけて置けばよかつた、と、くさ〳〵して、起き出るはりもぬけて了つた。それでも、その日は、午ごろ、ヒヨツクリ眞田が尋ねて來たので、一度の食事をともにし、夜も十時近い汽車まで引きとめて、喋りくたびれるほど喋つた。そんなことで、氣が紛れてゐた。

西に山を控えてゐるので、直輔の借りてゐるうちには、それほどひどくはあてなかつたが、毎日々々吹きつゞいた。硝子戸が鳴つて、氣持が苛立ち易くなつてゐた。或る晩、食事をすませて一服やつてゐるところへ、老婢がしほ〳〵と

して出て來ると、疊の上に手をついたきり顏もあげずに、突然、暇をくれと云ひ出した。だん〳〵聞いてみると、その朝、戸棚を片づけてゐるうちに、直輔が愛藏してゐる、宋だらうと云はれる白磁の大皿を、つい手からすべらして、鐵瓶の上に落し、三つの大きなかけらにして了つたのだ、と云ふことがわかつた。向意氣ばかり强くて、存外氣の小さい江戸ッ兒性質の老婢は、それこそ壽命を縮める思ひで、一日思案にくれてゐたが、金で償へるものではなし、なんとお詫のしようもないから、憎ければ打つてくださるとも蹴つてくださるとも、お氣のすむやうになすつた上でお暇をください、――そんなことを、ボタリ〳〵涙を滯しながら呟いた。

一言も口を利かずに、直輔は考へこんでゐた。それはいつか、老婢のことでもなく、大皿のことでもなくなつてゐた。それらとはなんの關係もないお愛についてだつた。――桐谷を愛してゐるのなら別だが、さもなかつたら、(――と云ふのは、多分さうではないらしく思へたのだが、)さもなかつたら、俺と一緒に住んで貰はう。結婚と云ふ形式は、とつてもとらなくつてもいゝ、兎に角一生涯一緒に住んで貰はふ。決して、不治の病氣を憐んでする犧牲的な氣持からではない。若しさうなつたら、俺はきつと幸福だ。お愛だつて……、若し俺に少しでも好意をもつてゐてくれるなら、(――と云ふのは、可なりに好意をもつてゐてくれるものと信じられたのだが、)若しさうなら、今よりはづッと幸福にしてやることも出來る。それはもう、十が十まで間違ひなく、俺たちは幸福になれる。……大丈夫だ、あの人だけを病氣のなかに取り殘して、俺だけピンヤンして健康の方へ出て行くなんてことはありはしない、(――と云ふのは、萬が一さう云ふ時が來たら、或は自分たちの上に不幸が來るかも知れないが、と云ふ心持だつた。)あの人だつて俺だつて、どうせ永い命ではないんだ……。

亢奮しきつて、直輔は、そんな風なことを考へ續けながら、口の方は殆うはの空で、

「毀れて了つたものは仕様がない。お前をぶつたところでどうなるものでもないし、なほさら暇なんぞとられたら、早速あとが困るばかりだ。ねえ、さうだらう。俺はもうなんとも思つてやしないよ。それア惜しくないこともないし、あの皿を、いやがるのに無理にねだり取つた大きい兄さんに對しても、ちよつとすまないやうな氣もするけれど、そんなことはなんでもないさ。たかゞ品ものだ、生ものとはわけが違ふさ。もうほんとになんとも思つてやしないから安心おし」

そんな風に、老婢には云つてやつた。そして、「すみません」「申譯ありません」を、機關銃のやうに發射されながら、矢ツ張りお愛のことを考へつゞけてゐた。

風が凪いで、穏かな日が來てみると、もうすつかり春めいた眺だつた。湘南の温暖に、門前の櫻並木は赤らみかけ、芝生の間からは、雑草がニヨキ／＼と頭を突きあげてゐた。石榴は鶸茶に、柳は緑青に、夙くも、柔かい小さな芽をふいて來た。第一に空の色がすつかり違つて了つた……。

早速直輔は、鎌倉へ出かけた。あまりのうらゝかさに、一里には近い道を、四つの隧道をぬけて、ぶらり／＼歩いて行つた。また例の狆が跳んで出て來て、ワン／＼吠えたてたが、この前のやうに、すぐりゑの姿は現れなかつた。それでも、人が來たことはもううちのなかに知れてゐると思つたので、案内は乞はずに、しやがんで手を出し、口笛を吹いて、そばに狆を呼びよせたりして、誰か出て來るのを待つてゐた。暫すると、臺所の方へ廻る小道に、身幅の狭い袷に三尺、半纒着の、なにか居職人らしい若い男が出て來て、直輔と目を見合せると、すぐまた引込んで了つたが、それか

らまた二三分すると、東京からつれて來てゐる、りゑが自慢の、子からのいゝお花が、玄關に顏を出した。まツ赤になつてゐた。思はず直輔の頰へも血がのぼつて來た。

「あのう、何は、……留守ですか」

「今朝ほど早く、東京にお出ましになりました」

「あゝさう、ぢアまた……」

顏は見覺えてゐるらしかつたので、名前も云はずに、急いで直輔はおもてに出た。微笑が禁められなかつた。一目見たゞけだが、男が利口さうなキリヽとした顏だちで、それで大人しさうだつたことも、氣持がよかつた。刀自が口を利いて、夫婦にしてやるといゝんだ、そんなことも考へながら、停車場へ引き返して來た。初めから、一人では行く氣もなかつたが、そのあとだけに、大佛前へ廻るなどは、思ひもよらないことになつて了つた。――自分をあの若者の位置に置いてみると、恥しくなるほど見すぼらしかつた。このうらゝかな、早春の日和に對しても、あの男なら適はしいが、病みやつれた四十に近い自分では……。けれども直輔は、その心持で、みぢめな自嘲や悲哀に突き落されはしなかつた。却つて、いつそユモラスな感じで、好もしいくらゐだつた。コーセツトでやつと上半身を保たせ、腰に穴をあけて、そこから脊髓にたまつて來る膿をぬいてゐるやうな「お花」まではまだよかつた。そこへ突然門からはいつて來る、直輔の代りの桐谷へ考へ及ぶと、有繋にもうユモアの域ではなかつた。茶番ではすまなくなつて、壯士芝居の悲劇に墮ちて了ふやうな可厭な氣持だつたが。――つい一昨日の晩には、二人が一緒に住むことを、この上もなく幸福に思ひ、そのことについてお愛ととり交す會話などをいろ〲想像したりして、亢奮しきつて、一時二時までも眠つかれなかつた直輔が、待合室のベンチの上で、自分たち自身を、茶番のやうに考へてゐた……。

「ほんとうによくなりましたわ。あたしも重々覺えがあるが、病人つてものは、ひとからよくなつたとか、見違へるやうに元氣づいたとか云はれても、なんだか氣休めを云はれてるやうで、中々本氣にとれないもんだが、實際この前とは、大した變りですよ。これア、病人仲間が云ふんだから大丈夫です」

四月にはいつてからの、二度目の訪問に、直輔は、床の上にちやんと坐つてゐるお愛を見出したのだ。

「さうでせうか」

と、兩手で頬を撫てみながら、にこ〳〵と笑つて、「さう仰有るオーさんだつて、まるで違つてお了ひなすつたわ。ねえ、女將さん」

「えゝえ、もうこちらなんぞ病人たア云はせませんよ。今もね、あたしんとこで一杯あがつていらしつたのよ」

「さうでせう、どうもちつと血色がよすぎると思つた……」

「初のうちは、それでもなんのかんの云つてなすつたんだけれど、なアにあなた、あがり始めたら、ねえ女將さん、もう一本ぐらゐはいゝだらう、なんて、まるで先のとほり、呆れちまつたわ」

「いやだつてものを、無理に……」

「なにが無理！　……あゝ暑い〳〵。失禮して、羽織をとらして頂かう」

りゑは、枕もとの縁側の方に出て行つて、そこで細い小紋の羽織をぬぎながら、おもての方を眺めて、

「まア、綺麗だこと！　あなた一寸いらしつてごらんなさい、大佛樣の櫻がそれア美事よ」

「へえ、そつちの見當になるかね」

「えゝ、こつちの見當なんですから。早く來てごらんなさいつてば」

「女將さん、ひどくいゝ心持さうね」

「あゝ、久振りでね、お相伴に少し頂いたら、すつかり廻つちやつたの。それに、俥でゆられて來たもんだから」

云ひながら緣側にベツたりと坐つて、羽織を袖だゝみにして、「ほんとに情ないわねえ、あれンばかりのお酒に醉ふやうになつちまつたんだから」

「なんて、生意氣いつてらア。せんから飮めやしないくせに」

「それだつて、こんなことつてなかつたわ。……あゝ苦しい。おしやを一杯いたゞいて來よう」

と立かけるのを、お愛が、抑えるやうな手つきをして、

「あゝ、今さう申しますよ。今日は大丈夫、ちやんと女中が居りますから」

「ねえ、女將さん」

と、またしても直輔は、つい云ひ馴れた名で呼びかけて、ちツとお愛の容子を見詰めながら、「ほんとうに、血色だつてなんだつて、すつかりもう昔のとほりだね。昔よりよくなつたくらゐだね」

「……」

ちろりと大きな目玉を向けて、「あなた、ほんとにお愛ちやんのことつて云ふと、一生懸命なのね……」

「なんだい」

直輔は赤くなつて睨み返した。そこへ女中が、コップに水をもつて來たので、ちよつと言葉のつながりが切れた。

「さアどうぞ、たんとめしやがつてください」

お愛が、女中の手から取りついで、椽側の方へ差だしながら、「ねえ、オーさん、へんね、今の女將さんの云ひ方は、少しへんだつたわね」

けれども、直輔はたゞ微笑つてゐたし、女將も伏目に、盆の上からコップをうけとつて、默つてすぐ口へもつて行つたが、女中が、部屋を出て了ふと、

「あなた、あたし話しますわ、話したくてたまらなくなつちやつた」

急に、不思議なほど若々しい元氣と、嬌羞とで、目のなかをうるませながら、すぐお愛の方へ何か云ひかけた。

「なんだ、女將さん、君は……」

と、本氣になつて遮る直輔の言葉は耳にもかけずに、

「ね、お愛ちやん」

と、思ひ入つた調子で「お前さん、勘違ひをしちアいやだよ。越智さんはね、この前こゝにいらしつたあとで、眞面目に、お前さんと一緒にならう、つて思ひなすつたんだとさ。お前さんさへ承知なら、結婚したい、と思ひなすつたんだとさ」

低く首を垂れ、掌を上に、兩手を膝の上に重ねて、お愛は、ぢツと堅くなつて了つた。

「さう云つちやア惡いけれど」

と、りゑは、だん〳〵涙聲になりかけて、

「今のやうな體でゐなさるお前さんを、義理でも情でもなく、心からさう思つてくださるつてのは……、あたしやほん

とに有難たいと思つてね、……それア、今のお前さんの事情として、そんなことが出來ないのは、知れきつた話だよ、私が聞いたつて。すぐお止めするばかりだし、第一もう越智さんが、出來ないことゝ思つて諦めてゐつらしやるんだから、ほんと云へば、なんにもお前さんの耳へは入れずに置いた方がよかつたのかも知れないんだけれど、あたしなんだかね、急にかう、話したくつてたまらなくなつちまつてね、我慢ができないんだもの……。越智さん、あなたにはなんとも申譯ありません、堅く誰にも話してくれるな、つて仰有つたのを……」

「ほんとに困つた人だよ。悪いと承知でするんだつて、自分で斷つてるんだから手がつけられない」

「だけどね、お愛ちやん、お前さんほんとに、あだやおろかに思つちやアすみませんよ。ね、さうだらう」

無言でお愛が頷くのを見極めて、うん、それでよし。と云ふ風に自分でも一つ頷くと、りゑは、急にたまつて來た涙を、膝の上にポトリ／＼と落した。

「おい、よさうよ、つまらない。ちよいとした出來心を、ついうつかり喋つちまつたばかりに、ひどい目にあふもんだ」

直輔としては、決してそれが「ちよいとした出來心」だとは思つてゐなかつたが、こんな風に感激されてみると、恥しさから、反省が極端に飛んで、口さきばかりでなく、己の輕跳がしみ／＼と悔ゐられた。が、その悔ゐる心とは、丁度裏腹の、いかにもおツちよこちよいぢみた口の利きやうをした。一時も早く、この殉情的なシインをとぢたかつたのだ。

「すみません、年甲斐もなく、ほんとにとんでもないことを云ひ出しちまつて……、越智さん、ごめんなさい」

手巾(はんけち)で目を拭きながら、りゑはにツこりして「さアもう、お愛ちやんも、聞かない昔と思つて頂戴」

お愛は、もう一度頷いて、袂を顔にもつて行つた。

「いやだなア、ひとを、伊井蓉峰みたいなことにしちまつて。俺も一つ、眉毛をつるしあげて、目をぱちくりさせて泣

からかしら」

「へゝゝ」

りゑは、やゝ職業的に笑ひながら、立つてキチンと坐りなほすと、「大きな、色の黒い、……まるで高田實みたいな伊井さんね」

「冗談いつちアいけないぜ。大くつても、色が黒くつても、役どこは争はれないや。兎に角泣かすからね」

そんな出鱈目を云ひ合つてゐるうちに、お愛は、枕もとから手巾をとつて、上半身だけ横に向けることが出來ないので、布團の上に兩手をついて、ぢり〳〵とむかふ向になつてから、靜にはなをかんだ。それからまたそうツと向き返ると、まるで素人娘のやうに、口のなかで、モジヤ〳〵と何か云つて、直輔の前に頭をさげた。

「困るなア、どうも。もうそれアそれで、すつかりすんじまつたことにしようぢアありませんか」

「えゝ」

やつと顏をあげて、「さうしてなんか、面白いお話でもしませうよ」

「かう云ふ時には、萬壽さんがゐるといゝんですね」

「なアにあいつ、どう致しまして、手前はもうさう云ふお話のお席は大禁物でござんして、なんて逃げだすだらう」

「あゝさうね、今のよく似てたわ」

お愛が快濶らしく笑つて、「あの人は相變らずでせうね」

「東京にゐた時分には、感心に時々見舞つてくれましたがね、逗子に來てから、あたしはまるツきり逢はないけれど、昔の遊び仲間に聞くと、相變らず見當違ひを見ながらなんか云つてるさうですよ」

「オーさんと女將さんとあの人とあたしと、四人(よつたり)で向島に行つたことがありましたわね」

「さう〳〵、萬壽さんが醉つちまつてね、あゝ、これアトロ〳〵だ、あゝ、これアトロ〳〵だ、つて、手をばたん〳〵

やつてると思つたら、いつの間にかグウ〳〵ねちまつてさ……」

「歸りにあなたを、三十間堀のなんとか云ふうちに送りとゞけて歸つて來たんだが、どうもひどくおさまりかねる役だつたね」

「あ、さう〳〵、大村家よ。六時の約束を、八時頃になつて行つたのね」

「なんだつてまた、そんな約束をうけてる日に、向島なんぞへ出かけたりしたんでしたかね」

「うゝん、それアね、みんなで午飯に何を食はふつて云つてるうちに、蜆汁の話かなんか出て、そいぢアこれから、いつそ入金まで食べに行かう、てんで、これがあんまり利口でない連中だから、すぐ出かけちやつたわけなんだよ。小しんちやんなんぞ、態々うちから着物をとりよせてさ、あすこのお風呂に入れて貰つて……」

「さうそ、お愛ちやんが、萬壽さんに帶をしめてくれつてのを、とても駄目です、もう素敵にトロ〳〵です、なんて云ひながら、廊下ぢう逃げて廻つてたぢアありませんか」

こんな話になつて來ると、果しがなかつた。前の事件などはけろりと忘れたやうに、さも面白さうに、いつまでも昔話に耽つてゐた。そして、電氣がつくと、二人は、お愛のうちを出て、電車にも乘らずにぶら〳〵歩いて歸つた。蒼茫と靄のおりたいゝ夕方だつた。

めき〳〵と回復して來た健康が、直輔を促したてた。一冬ぢうかゝつて結局一枚ものにならなかつた敗荷圖のお手本は、五六寸の莖を、しよぼ〳〵と水の面に殘して、眞ツ黑く立腐れてゐた。そのそばから、見えるか見えないほどの小さな卷葉が、ちよツぴり顏を出し、まるでそれを祝ふやうに、小虫がピン〳〵跳ねて、おもちやの波紋を描いた。木にも草にも、土にさへも、どん〳〵と生氣が返つて來た。

押入の隅にたゝき込んであつた油繪の道具を引きづり出して來たり、足りないものを東京に買ひに出たりして、三四年ぶりで、直輔は腕に覺えの仕事にかゝつた。萬物は驚くばかり美しかつた。猛然と湧き起つて來た仕事慾に、ほとん

ど餘事を思ふ暇もなかつた。さうして、五月、六月、七月と過ぎた。

　その間に、たつた一度、それもほんの二三分、お愛と話したことがあつた。雨で仕事が出來ず、おまけに二三日は降りつゞきさうな空あひとみて、東京に出て一泊すると、翌朝は、思ひがけない快晴になつたので、慌てまた引返して來た汽車が、鎌倉驛にとまつた時に、丁度、女中につき添はれて、お愛が、步廊（プラットフォム）にあがつて來た。窓から呼びかけて、

「あゝ、あなたもう步けるんですか」

「えゝ、おかげさんでやつと……。今お歸りですか。大層お早いんですね」

「えゝ、朝歸り」

　と笑つて、「あなたは、これから病院ですか。でも、ほんとに、どん／＼いゝ方で結構ですね。……あれからね、少し仕事を始めたもんですから、すつかり御無沙汰になつちまつて……」

「どう致しまして。……せんだつて女將さんがお伺ひしましたつてね」

「えゝ、來てくれました」

「越智さんに叱られて來たつて……」

「叱られたつて？　なんだつたらう」

「その後大佛前へ行つたかつて、お聞きになるから、ついごた／＼してゐてあれツきりです、つて云ふと、そんな薄情なやつがあるもんか、君なんぞ近いんだから毎ンちでも行くかいゝんだ、つて、大へんに叱られて來た、なんて、そんなこと云つてましたわ」

「さうだつたかな、そんなことを云つたかな」

「その筆法でゆくと、あなたも薄情でない方ぢアないわけですね」

ことさらに、一本まゐつた、と云ふ顔つきをして、

「相濟みません、近いうちに伺ひます」

その時、呼子がなつたが、それには構はずに

「あたしのお召車はこの方よ」

と赤い切符をだしてみせた。

「へえ、どうして？」

「腰かけの具合が、淺くつて、大へん掛けいゝんです。さう云ふのだと……」

と、そろ〳〵動き出した窓のそとに、ついて歩きながら、車體の腹を指して、「上にあがつて坐つてみても、どうも低かぐらついて仕様がありませんの。ですから、いつでもこれ」

「あゝ、さう。……ぢアさよなら。氣をつけて行つてらつしやい」

「有難う。御機嫌よろしう。どうぞまたちつと……」

「えゝ、近いうちにお邪魔に出ます」

これには目禮で答へて、片手を女中に把らせてゐる愛子の姿は、見るまに小さくなつて行つた。

一二三日して、り惠を誘ひによつたが、折あしくまた東京に行つた留守だつたので、そのまゝ歸つて來たきり、つい〳〵半月ばかりも經つて了つた。すると、伊香保の繪葉書で、先日は失禮した、昨日こつちに來たが、都合によると夏ぢうこゝに滯在することになるかも知れない、と云つてよこした。おや〳〵、ぢアもう、當分お愛も尋ねられないな、——さう思つて直輔は、諦めて了つた。諦める、と云ふ言葉では少し強すぎるほどで、そんなに苦にはならなかつたが、それにしても、矢ツ張り淋しい氣はした。且那と一緒かなんかで、日に二三度も溫泉につかつたりしてゐるだらうと思

……（號完結）

公論大賣捌所

同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區春木町	盛春堂
大阪市	北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市	七條停車場前	共盛社
同	四條西洞院	前田大誠社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

●定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵稅共		

●但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒ます

一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年九月三十日印刷納本
大正十一年十月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

東京市本鄉區本鄉三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話 長小石川一四四
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十一年九月三十日印刷納本

中央公論 十月號

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.